み、傍ら小團次の希望を實現して越後の縮賣を主人公としたもの。

【梗概】〔序幕〕祭禮の仲町で縮賣の新助が長脇差赤間源左衞門に言ひ掛りをつけられ難澁してゐるのを、藝者新藁のおみよが仲に入つて助ける。おみよは香爐詮議で浪人してゐる穗積新三郎と言ひ交し、腕に新の字を彫つてゐる。赤間は村正を賣つておみよを身請けしようとするが拒絶されるので、然らば腕の新の字は何者だと詰め寄る。新三郎の朋輩で赤間の一味に加はつてゐる山鹿毛平馬は、それが新三郎の新ならば、香爐詮議の大切な身で遊女に狂ふ不所存者だ、繩打つて殿の面前に引立てるといふ。そこへ新助が出てその新の字は自分への心中立てだと云つて恩返しにおみよを救ふが、赤間のために額を割られる。難儀を引受けて貰つた禮を云ふ新三郎を新助は羨しげに見送る。〔二幕〕平馬は豫て想ひを寄せる藍屋の娘おつるに路で逢つたのを幸ひ、無理に連れて行かうとする。それを鳶の者が助けた爲め、赤間と鳶の者との間に大喧嘩が始まる。小天狗正作は新三郎と許嫁の妹おきしを連れて祭禮見物に來るが、花水橋の人出で妹と間違つておつるを助け、平馬の落した紙入を自分のだと思つて拾ふ。そして正作の紙入は、家重代の村正を詮議してゐる濱田宗之助の若黨傳七に拾はれる。一方新助は偶然橋の下を船で通つて、上から落ちたおみよを救ひ、想ひのたけをおみよに訴へる。感いたおみよは、新三郎が香爐を手に入れて本地へ歸參したら新助の意に從ふから、それ迄は共々香爐を捜し、待つて呉れといふ。〔三幕〕宗之助と傳七は拾つた紙入にあつた書狀から正作を訪れ、刀掛の村正を見て正作が盜んだものと間違へ、雜言を浴びせる。そこへ道具屋が代金を取りに來て、赤間が盜んだことが分明するが、正作の宏量から二人は村正を貰つて歸る。正作は平馬の紙入から得た香爐の質手形に金を添へ、離緣のその時、新助との仲を兎や角云はれたおみよは、豫て頼みの五十兩を持つて來た新助を恥しめ、その金を突返し、船中でした約束は嘘と聞かされ、新助は涙を呑んで歸る。その後で發見した新三郎の手紙によつて總てが分かるので、おみよは直ぐ肌身離さぬ親の形見の不動尊を添へて、新助の處へ手紙を持たせて遣る。併しその時は、既に新助が、ふと道具屋から買取つた村正で人を殺害し、家を飛び出してゐた。赤間の子分に洲崎土手まで運ばれたおみよは、新助のために殺される。そこへ新助の供の者が手紙を持つて駈けつけ、不動尊からおみよは新助の實の妹と分かり、新助はその場で自害する。

八幡祭小望月賑（初演繪本番附）

【解說】書き卸された時には、この前段に「切られ與三」が置かれ、それと組合せになつてゐたので、作中に赤間源左衞門等の人物が取入れられてゐる。作者の三題噺的頓才的趣向の顯著な發揚を示したもので、左右兩隣りの二座（中村・守田）に立つてゐる幟を、深川八幡祭禮の幟と見立てた趣向が悦ばれて未曾有の大當りとなつた。又深川藝者と越後の縮賣との特殊な戀の悲劇を取扱ひ、この作者の作の中で、深刻な世話狂言とされてゐる。〔河竹〕

【參考】河竹默阿彌 ○續々歌舞伎年代記

八面樓主人（はちめんろうしゅじん）〔宮崎湖處子〕を見よ。

八文字屋其笑（はちもんじやきせう）浮世草子作者・出版者【本名】安藤八左衞門【生歿】寛延三年（一七五〇）八月十九日歿。享年未詳。【閲歷】「自笑樂日記」（別項）の跋文に、「其笑は子なり、瑞笑は孫なり」とあり、自笑の子であることを知られる。その生涯に就いては甚だ詳細を缺くが、元文五年の「忠盛祇園櫻」に於て、初めて父自笑と連名でその名を出してゐる。以來寶曆七年の「花色紙襲詞」に至るまで、父自笑と後には子瑞笑と連名で浮世草子を出版してゐる。併し其笑は、寛延三年八月十九日に歿してゐるから、それ以後の製作に、なほその署名のあるのは如何に解釋すべきか。遺稿か代作か、疑問とすべきである。【作品】「自笑樂日記」の序に、自笑は其笑を世に紹介して、「此後其笑が書ける草紙、としごろ僕と共に筆をめぐらしぬれば、常盤の松の色變らず、弘く讀傳へたまひなんことを願ふと書おさめぬ」と記してゐる。これに依つて自笑・其笑連名のものは、其笑の製作であることがわかる。連名に成る主な作品は次の如くである。

忠盛祇園櫻（元文五年）　龍都俠系圖（同年）
逆澤瀉鎧鑒（寛保元年）　善光倭丹前（同年）
宇治川憩對盃（同年）　苅萱二面鑑（寛保二年）
藤戸海憩對盃（同年）　名玉女鵆鶴（同年）
女非人綴錦（寛保二年）　源雪音羽嵐（寛保三年）
風流返魂香（同年）　鎌倉諸藝袖日記（寛保三年）雷神不動櫻（同年）
弓張月曙櫻（延享元年）　契情太平記（同年）
大系圖蝦夷噺（同年）　阿漕浦三巴（延享二年）
今昔出世扇（延享二年）　勸進能舞臺櫻（同三年）
曾根崎情鵲（同年）　自笑樂日記（延享四年）
菜花金夢合（寶曆五年）

なほその他瑞笑と連名のものが多數あるが、それは瑞笑の項に擧げる。これ等の製作が「自笑樂日記」に記す如く、眞實其笑の製作であるかどうかは大なる問題である。研究者のうちには、「女非人綴錦」や「鎌倉諸藝袖日記」（各別項）の如きは、多田南嶺の代作と云ふものもあるが、確證ある譯ではない。これ等の作品の特色と謂ふべきは「今昔出世扇」（別項）の如き町人物の例外は措いて、他はすべて續案小說である。これは其積に於て發展せる形式である。即ち「自笑・其笑連名物は、なほこの風を繼ぬ

たものと見るべきである。即ち「忠盛祇園櫻」「宇治川憩對盃」の如きは、「平家物語」「源平盛衰記」の或る部分を續案せるものである。「女非人綴錦」は豐竹座の「敵討櫻襷錦」（元文元年）（別項）を、「曾根崎情鵲」は竹本座の「曾根崎心中」（別項）を續案せるものである。また「雷神不動櫻」は、江戸上りの二代市川海老藏の歌舞伎狂言「明神不動北山櫻」を續案したものである。これは寛保二年一月より七月まで、大阪佐渡長五郎座で演じられたもので、當時評判の高かつた狂言であつた爲め、翌年早速草紙化したものである。

【史的地位】其笑は八文字屋主人となつて、相變らず歌舞伎戯關係書、浮世草子の出版をなした。父自笑及び子瑞笑と連名でその名を浮世絵の「京摺錦作者考」、演劇歌圖の「南水漫遊」續編等に、僅かな關歷に關する記載があるのみ。馬琴の「羇旅漫錄」に、「今の八左衞門は大阪心齋橋筋安堂寺町に住て、かすかなるくらしにみゆ。予かの家にたづねて行て、自笑が傳記等をたづぬるに、別にいひ傳へたることなしといふ云々」と記されてゐる。自笑は京都麩屋町通誓願寺下る所に住した書肆の主人である。慶安・萬治の交の淨瑠璃正本に、その名を署するものがあるので、その頃既に八文字屋なる書肆の存在せる事が知られる。貞享二年版の「京羽二重」に、淨瑠璃本屋として山本九兵衞・鶴屋喜右衞門等と共に、その名が記されてゐる。但しこの頃の八文字屋八左衞門は自笑の先代であつたと考へられる。自笑は家運ならず、正德三年頃より兩者不和を生じて互に相爭ひ、八文字屋・江島屋出版の役者評判記に據つて相持して讓らなかつたが、享保三年に和解し、其積は再び八文字屋の作者となつた。これより其積は元文元年に歿するまで三十餘年間、自笑と連署にて數多の浮世草子を出した。而して自笑は其積より長命し、その子其笑と連署で、其積の歿後も浮世草子を出したが、延享四年の「自笑樂日記」（別項）を最後として、その名は作界から消えてゐる。而してその跋文に、「其笑は子なり、瑞笑は孫なり、向後の作意彼等に任せぬれば常盤の松の色變らず綠の竹の久しき惠みを仰ぐといふ詞を以て毫を納め侍りぬ」と記して、その子其笑、その孫瑞笑を世に紹介してゐる。世に所

たものと見るべきである。即ち「忠盛祇園櫻」「宇治川海鰕對盃」の如きは、「平家物語」「源平盛衰記」の或る部分を飜案せるものである。「女非人綴錦」は豐竹座の「敵討鴈樓錦」（元文元年）（別項）を、「曾根崎情鵲」は竹本座の「曾根崎心中」（別項）を飜案せるものである。また「雷神不動櫻」は、江戸上りの二代市川海老藏の歌舞伎狂言「明神不動北山櫻」を飜案したものである。これは寛保二年一月より七月まで、大阪佐渡長五郎座で演じられたもので、當時評判の高かつた狂言であつた爲め、翌年早速草紙化したものである。

【史的地位】其笑は八文字屋主人となつて、相變らず歌舞伎關係書、浮世草子の出版をなした。父自笑及び子瑞笑と連名でその名を浮世草子に出したことは、元文より寶暦に至る十數年間であるが、その製作は既に自笑・其磧の時代に現はされた特色を、その儘繼承したもので、彼は一の職業として浮世草子を製作し或は出版した。草紙の序中に屢々記す如く、それが世人の慰み草となれば、その目的は達せられると考へたのである。そこにこの期の町人文學の意圖と特色を窺ふべきである。

【參考】近代小說史 藤岡作太郎 〔吉田〕

八文字屋自笑 はちもんじやじせう

浮世草子作者・出版者 【本名】安藤氏。通稱八左衞門。【號】自笑。草紙の署名には多く八文字自笑と記してある。八文字屋は屋號。【生歿】歿年に關して延享一年說（南水漫遊續編）と延享四年說（傳奇作書）とがあるが、延享二年（一七四五）十一月十一日を正しとする。出生は寬文初年頃か。「自笑樂日記」の序に「九十歲に近き齡」とあるが、恐らくは八十七八歲と考へられる。【墓所】京都二條寺町本覺寺 【閱歷】木村默斎の「京摺歌作者考」、濱松歌國の「南水漫遊」續編等に、僅かな閱歷に關する記載があるのみ。馬琴の「羇旅漫錄」に、「今の八左衞門は大阪心齋橋筋安堂寺町に住て、かすかなるくらしにみゆ。予かの家にたづね行て、自笑が傳記等をたづぬるに、別にいひ傳へたることなしといふ云々」と記されてゐる。自笑は京都麩屋町通誓願寺下る所に住した書肆の主人である。慶安・萬治の交の淨瑠璃正本に、その名を署するものがあるので、その頃既に八文字屋なる書肆の存在せる事が知られる。貞享二年版の「京羽二重」に、淨瑠璃本屋として山本九兵衞・鶴屋喜右衞門等と共に、その名が記されてゐる。但しこの頃の八文字屋八左衞門は自笑の先代であつたと考へられる。自笑は家運の漸く隆んなる後を受けて立つたが、性質餘程機敏であつたと見え、當時歌舞伎盛行の風尙を察し、歌舞伎狂言本の刊行を試みた。從來淨瑠璃正本のみを出してゐたのが、こゝに先づ最初の發展をなした。而してこれに引續いて役者評判記をも出すに至つた。以前より遊廓細見・野郎評判の書はあつたが、未だ不備のものであつたのを、八文字屋に於て進展せしめたのである。元祿十二年三月出版の「役者口三味線」が最初のものであつて、これより以後長く年々定期に役者評判記を出版する例を開いた。而してこの頃江島屋其磧（別項）を實際の作者として迎へることが出來て更に浮世草子出版の方面に向つた。浮世草子の最初のものは、元祿十四年八月の「傾城色三味線」である。次いで「風流曲三味線」「寬濶平家物語」「傾城傳授紙子」「傾城禁短氣」（各別項）が自笑の署名の下に出版された。かくして自笑の名聲漸く高くなるに及んで作者其磧は心中平らかならず、正德三年頃より兩者不和を生じて互に相爭ひ、八文字屋・江島屋出版の役者評判記に據つて相持して讓らなかつたが、享保三年に和解し、其磧は再び八文字屋の作者となつた。これより其磧は元文元年に歿するまで三十餘年間、自笑と連署にて數多の浮世草子を出した。而して自笑は其磧より長命し、その子其笑と連署で、其磧の歿後も浮世草子を最後として、その名は作界から消えてゐる。而してその跋文に、「其笑は子なり、瑞笑は孫なり、向後の作意彼等に任せぬれば常盤の松の色變らず綠の竹の久しき惠みを仰ぐといふ詞を以て毫を納め侍りぬ」と記して、その子其笑、その孫瑞笑を世に紹介してゐる。世に所謂「八文字屋本」とは、主として自笑時代の八文字屋出版の浮世草子を指して謂ふ。

【作品】八文字屋本に於て、自笑の名が常に署してあるが、實際の作者は其磧及び他の作者であつたと謂はれてゐる。正德・享保間に於ける八文字屋・江島屋不和の際に、其磧が發表した抗議文を見ればその間の消息が知られる。自笑署名のものを大體に別けると、自笑單獨署名のものと自笑・其磧連署のものと、自笑・其笑連署のものとになる。無名又は自笑單獨署名のものは、其磧との不和以前の「傾城色三味線」「風流曲三味線」「野白內證鑑」「寬濶平家物語」「傾城傳授紙子」「傾城禁短氣」（各別項）等と、それ以後の其磧と關係ない作とである。

百姓盛衰記（正德三年） 今川一睡記（同年）
西海太平記（同年） 風流訛平家（正德五年）
義經風流鑑（正德五年） 分里艷行脚（享保元年）
傾城野群談（享保二年）

これ等のものが、其磧と不和中、八文字屋より出版されたものであつて、自笑自身の製作であるか、或は他に作者があるのか不明である。自笑・其磧連署のものは、享保三年兩者和解後のもので、其磧の製作にかゝるものが多いと考へられ、自笑在名の本としては最も多數である。自笑・其笑連署のものは其磧歿後、自笑がその子其笑と連署の下に出版したものである。そのうち主なるものを擧ぐれば、

忠盛祇園櫻（元文五年） 善光倭丹前（寬保元年）
宇治川海鰕對盃（寬保元年） 女非人綴錦（寬保二年）
藤戶海鰕不動櫻（寬保三年） 阿漕浦三巴（延享二年）
雷神不動櫻（寬保三年） 曾根崎情鵲（延享三年）
今昔出世扇（延享二年） 自笑樂日記（延享四年）

これ等は自笑の作か其笑の作か、またその他の作者の作か不明であるが、何れにしても自笑在名である以上は、善惡共に世は彼がその責任の大部分を負ふものとしたのであらう。

【人物】彼の事業その他より判斷するに、從來淨瑠璃本屋として知られてゐたものが、當時歌舞伎の全盛に着眼して、よく整美したその方面の出版物を出したのは、全く彼が一世の風尙を洞察する機略を有してゐたのに依る。又其磧を迎へて浮世草子の出版を試みたのも見事に成功した。併しながら中頃の抗爭は少からず自笑に打擊を與へたらしい。兩者不和の原因は名聲と利益に關するやうである。それは正德四年正月の「役者目利講」に於て、其磧が、八文字屋との從來の關係より說き起して、今日有名となれば實際の作者を蔑ろにする自笑の態度は卑劣なりとて、詳細痛烈に非難を放つてゐるので分る。自笑はこれに對して同年二月の「役者色景圖」以下に於て暫く對抗はしたが、互に不利益なることを悟り、和解の上、其磧をして復歸せしめたところに、

名利に敏き彼の性格が窺はれる。【史的地位】彼が出版せるものは前述の如く淨瑠璃正本・歌舞伎狂言本・役者評判記・浮世草子の各方面に亙つてゐる。就中、元祿・享保頃の歌舞伎狂言本・役者評判記は、殆ど彼が一手で出版したもので、歌舞伎關係書が後々に至るまで八文字屋より出版された基礎は、實に彼が築いたものと謂はなければならない。浮世草子の側に於ては、實際の作者は其績、或は南嶺等であつたにせよ、常に自笑の名を署し、所謂「八文字屋本」の名を殘した程に、西鶴に始まつた浮世草子なる小說の一形式を繼承せしめて、更にこれを展開せしめた事には彼の功績が少くない。江戸文學に於ける馬琴・京傳・種彥・三馬等も、八文字屋の浮世草子の影響を受けること大なるものがあり、明治以後、饗庭篁村の小說及び坪内逍遙の初期の小說の如きにも亦、八文字屋本の影響が見られる。(江島屋其磧參照)【附記】八文字屋本の署名に、李秀・自笑とあるが、李秀は瑞笑、自笑は四代目の素玉改め自笑である。

【參考】近代小說史藤岡作太郎○江戸時代戲曲小說通志双木園主人○列傳體小說史 水谷不倒○近世日本小說史 鈴木敏也○八文字屋物研究 水谷不倒(日本文學講座)○其績自笑傑作集解說(帝國文庫)○珍本全集解說(帝國文庫)○浮世草子集解說(日本名著全集) 〔吉田〕

八文字屋瑞笑 (はちもんじやずゐしやう) 浮世草子作者・出版者【本名】安藤氏。通稱八左衞門。【號】瑞笑の號は、延享四年自笑歿後直ちに八文字屋本作者として見えてゐる。寶曆四年に李秀と改め、更に寶曆十年に白露と改め、また秋月下とも。【生歿】明和三年(一七六六)十二月十九日歿す。享年未詳。【閱歷】瑞笑は自笑の孫、其笑の子である。父祖の後を享け、引續いて演劇關係書及び浮世草子を出版して一生を過した。寶曆八年以後は弟の二代目自笑(素玉)と連名で草紙を出してゐる。外に彼が編した俳書「誹論」(別項)が傳へられてゐる。これは寬政十年季冬、瑞笑の三十三回忌追善のため、彼が明和元年八月に編んで置いた遺稿を八文字屋より出版したものである。又本書に彼の辭世の句「病む雁の夜寒に下りておぼつかな」を傳へてゐる。【作品】瑞笑の名の草紙に現はれたのは、延享四年即ち「自笑樂日記」の出た以後である。即ち父其笑と連名を以てしてから以後、明和に至る十數年である。

物部守屋錦幕(延享四年)○彩色歌相撲(同年)○盛久側柏葉(寬延元年)○昔女化粧櫻(同年)○顯政瑾軍談(同年)○小野篁戀釣船(寬延二年)○義貞艷軍法(同年)○花楓劍本地(同年)○敎訓私儘育(同年)○道成寺岐柳(寶曆元年)○百合稚錦島(寶曆二年)○壇浦女見臺(同三年)○世間長者容氣(同四年)○御伽太平記(同六年)○花色紙聽詞(同七年)○陽炎日高川(同八年)○契情蓬萊山(同九年)○今昔九重櫻(同十年)○歌行脚饅碯(同十一年)柿本人麿誕生記(同十二年)○風流庭訓往來(同十三年)

要するにその作品は其績以來の飜案小說で、「彩色歌相撲」「義貞艷軍法」は古文學の飜案、「昔女化粧櫻」「花楓劍本地」は淨瑠璃の飜案である。併し「世間長者容氣」の如き例外もないではない。なほ「花楓劍本地」「道成寺岐柳」等を文章の調子の異なるが故に、多田南嶺(南嶺參照)の代作せるものではないかと謂ふ研究者もあるが、確たる根據はない。【史的地位】瑞笑は自笑より三代目の八文字屋主となつて演劇關係書及び草紙の出版をなしたが、自笑以來の家例に依つたものであつた。瑞笑在世の間は出版も續けたが、明和四年に至つて草紙の版權を大阪心齋橋順慶町の書肆升屋大藏に讓り渡したので、こゝに八文字屋より出版の草紙の影は失はれた。後、一しきり八文字屋風の「かたぎもの」が盛行したが、それは其笑・瑞笑の後繼ではなくして、其績の流を酌むものであつた。八文字屋の最後の署名者として瑞笑の名は記憶さるべきである。

【參考】近代小說史 藤岡作太郎 〔吉田〕

八文字屋本 (はちもんじやほん) 浮世草子【異稱】八文字屋物【名義】狹義には、京都麩屋町八文字屋といふ書肆の發行に係る浮世草子。廣義には、それと共に、同時代同種の他書肆出板のものをも含めていふ。【範圍】正德初年以降、浮世草子の沒落までに出た浮世草子の多數を含む。【作者】江島屋其磧・八文字屋自笑・同其笑・同瑞笑・同二代目自笑・多田南嶺(各別項)等。【特徵】八文字屋の出版にかゝる八文字屋本の書物としての特徵は、枕形のものと美濃判形のものとを主とし、插繪は西川祐信を初めとして名工を選み、精巧優美であり、板下も亦優美な品位ある筆致を選み、彫刻・製本にも意を用ひたと傳ふる通り、今これを他書肆の出版に比すると、その優秀なることは容易に認められる。八文字屋本の名聲の獨り高かつたのは、一にはこの外形の優秀にも由つたであらう。【沿革】八文字屋本浮世草子は、元祿十五年の「傾城色三味線」(別項)に始まる。それより引續いて、「風流曲三味線」(別項)「傾城二挺三味線」「傾城繼三味線」など、所謂八文字屋の八三味線の好色本類を出したが、更に正德から

「百姓盛衰記」「今川一睡記」などの如き、材を當時の事件や、古傳說等に取つた傳奇的なものをも出し、又は「世間息子氣質」「寬濶役者片氣」(各別項)などの所謂氣質物(別項)をも出すやうになり、又稀には「手代袖算盤」「商人(あきうど)家職訓」(別項)などの所謂町人物をも加ふるやうになつた。享保に入つては、次第に傳奇的な作品を主として淨瑠璃歌舞伎と固い提携をなすやうになつた。例へば正德五年十一月より、十七ケ月に亙つて淨瑠璃「國姓爺合戰」(別項)が大喝采裡に興行されると、翌々享保二年に其績の「國姓爺明朝太平記」が出で、同十年五月に、淨瑠璃「出世握虎稚物語」(別項)がかゝると、同十一年に自笑・其績の「出世握虎昔物語」が出で、享保十年九月に「大内裏大友眞鳥」(別項)の淨瑠璃があつて、同十二年に同題の八文字屋本が、自笑・其績に依つて出されてゐるが如きは、その最も露骨なものである。西鶴から西鶴歿後の西澤一風・錦文流(各別項)等の時代は、浮世草子は大阪を中心地としてゐたが、八文字屋本時代に至つて京都を中心地とするやうになつた。即ち西鶴・一風等の時代から八文字屋の時代に至る間に、浮世草子の中心地が、大阪から京都に移動した。作者も西鶴・一風等の時代の主なる人々は、大阪に住んだ人であるが、八文字屋本の作者は皆京都在住の人達である。出板も亦多く大阪の書肆から京都のそれに移つてゐる。當時大阪と京都の間の交通は大に便利になつてゐたので、文化の兩都間に交通したことはいふまでもなく、「元祿太平記」に依れば、兩都の書肆が互にその出板の書を交換して賣つたといへば、浮世草子が兩地の書肆に共同で出板され、又作者が京都にも出るやうになつたのは自然で

【參考】列傳體小說史水谷不倒○八文字屋本の研究水谷不倒(日本文學講座江戸時代) 〔藤村〕

撥音 (はつおん) 「音聲」を見よ。

撥音 (はつおん) 國語學【名稱】「はねかな」「ん」(ン)(ン)(ン)

もあるが、元來大阪は新興の町人の都であり、京都は古來の貴族的文化の中心地であつたので、純町人文學の中心地としては大阪が好適地であつた。西鶴に創められた新形式新手法を維持し、又展開させるには大阪を長く中心地とするのがよかつたが、中心地が京都に移動すると、作者達は西鶴を摸倣しながらも、自ら京都に殘つた古風を入れ、又西鶴以來の寫實の反動も見えて、傳奇的作風に、西鶴が創めた新形式新手法の古風への妥協が行はるゝに至つた。

【參考】列傳體小說史水谷不倒〇八文字屋本の研究水谷不倒(日本文學講座江戸時代)〔藤村〕

發音(はつおん)「音聲」を見よ。

撥音(はつおん)　國語學【名稱】「はねかな」「ん」とも、又鼻聲とも。【解說】國語に用ひられる音の一種で「ん」「ン」を以てあらはす音。現代の標準語では、その實際の發音は、(一)語尾にある場合はŋ又はN(ŋよりもつと後の方で、軟口蓋のずつと後の方と舌の後の方とを合せて發する鼻音)。アン(鞍)ホン(本)バン(晩)サン(三)等。(二)p b m(パ行バ行マ行)の前ではm。サンバ(産婆)アンマ(按摩)サンポ(散歩)。(三)t d n(タ行ダ行ザ行ナ行)の前ではn。テント(天幕)アンド(安堵)カンナ(鉋)。(四)k ŋ(カ行ガ行)の前ではŋ。テンキ(天氣)。ナンギ(難儀)。(五)a o u w(アオウ及びワ行)の前では大體Ũ(やゝオに近いウ音の鼻音化したもの)。カンオン(漢音)テンウン(天運)ケンアク(險惡)。(六)i e j ĵ(シ・ヤ・ユ・ヨ及びシャ行)の前では大體ĩ(やゝエに近いイ音の鼻音化したもの)。カンイ(簡易)シンエン(神苑)ハンシ(半紙)。(七)s(サ行)の前ではɯ̃(唇をすぼめないウの音の鼻音化したもの)。シンセツ(親切)タンス(箪笥)。(八)r(ラ行)の前では大體n に近い音。ハンラン(叛亂)。「ん」「ン」は語の最初には用ひられない。それ故、「うま」(馬)「うめ」(梅)の最初の音節はmであつても、これを撥音とは呼ばない。故に撥音は、鼻音又は鼻母音が語頭以外にあつて、一音節を形づくるものといふべきである。

【沿革】撥音は、漢語その他の外來語にはあるが、純粹の日本語では、音便又は擬聲語(チンチンドンドンなど)の外にはあらはれない。それゆゑ、本來日本語には無かつたものと考へられる。但し古く鼻母音のやうなものがあつたかとの疑ひもあるが、あつたとしても、今日のやうに一音節をなしたものではなかつたであらうと思はれる。然るに支那語にはm n ng(ŋ)で終る音節があり、これが漢字音として日本に輸入された。極めて古い時代のことは不明であるが、推古朝以後支那と直接に交通した時代には、漢字音にはこの發音が用ひられ、大體平安朝までも正しい字音としてはなほ殘つてゐたやうであつて、mには「ム」の假名を、nには「ン」の假名をあてて、mとnとを區別し、ngはウ・イの假名をあてて、本來のウ・イと文字の上には區別がなかつたが、なほムと又口のやうな特別の文字を以てこれを區別したものもあつた。然るに平安朝末期からmはnと混同し、ngは本來のウ・イと同音となつて、鎌倉時代以後は大體これ等の區別がなくなつたもののやうである。一方純粹の國語に於ても、平安朝に入つてから、音便によつてミムニヌビ等の音節が撥音に變じ、以後國語にも多く撥音が用ひらるゝに至つた。これ等の撥音は、初めは語中にあるものは文字に書かないことが多く、語尾のものは、「う」であらはすこともあつたが、中世以後、次第に「ン」「ん」を以て書きあらはすやうになり、遂に今日に及んでゐる。

【參考】「ン」に就いて　服部四郎(音聲の研究第三輯所載)〇國語の撥音に就て平田鬼丸(同、第四輯所載)〇「ン」音辯石黒魯平(同上)〇國語撥音の歷史的觀察　小倉進平(國學院雜誌一四ノ八―一一)〇字音尾ng n mの沿革　日下部重太郎(音聲の研究第三輯所載)〇日本音聲學佐久間鼎(一六二頁以下)〇片假名ワとンとの字源說附言　吉澤義則(日本文學論纂)〇國語音聲學　神保格(七二頁及び一一四頁)〇字音假字用格本居宣長〇男信東條義門〇漢呉音圖太田方〇音韻假字用例　白井寛蔭〔橋本〕

發音學(はつおんがく)「音聲學」を見よ。

發音器官(はつおんきかん)「音聲器官」を見よ。

發音符號(はつおんふごう)「音聲符號」を見よ。

發音變化(はつおんへんくわ)「音聲變化」を見よ。

初懷紙(はつがいし)　連句一册【名稱】「丙寅初懷紙」「鶴の歩み」「鶴百韻」「春の曉集」など云はれてゐる。【名義】初懷紙の名は、歲首に初めて懷紙に記した連句といふ義であらう。丙寅は貞享三年の干支である。「鶴の歩み」「鶴百韻」は、其角の「日の春をさすがに鶴の歩み哉」の發句から出た名である。春の曉集は、この發句の意を曉と解しての稱かも知れぬが、用語上當を得ないものであらう。【成立】貞享三年正月【刊行】享保二十年に、平野鶴歩によつて「鶴のあゆみ」として刊行され、寶曆十一年に鶴齡堂主人によつて「丙寅初懷紙」として刊行された。【諸本】蝶夢の「芭蕉翁俳諧集」、曉臺の「俳諧幽蘭集」、護車の「俳諧七部拾遺」、甘井の「金蘭集」、奇淵の「芭蕉袖草紙」、湖中の「俳諧一葉集」、默池の「俳諧袖珍鈔」、その他明治以來の芭蕉發句其角關係の集などに收められてゐる。なほ該百韻の前半五十韻に芭蕉の加へた註といふものが闕更の「花の故事」に收められ、後、闕更は「落葉考」(別項)に再び收めて訂正してゐる。【解說】前述の其角の發句で始まる其角・文鱗・枳風・コ齋・芳重・杉風・仙化・李下・舉白・朱絃・蚊足・千里・芭蕉(二ノ裏十三句目より楊水入り、三ノ表七句目より不卜入り、名殘ノ表五句目より峽水入る)等の百韻一卷である。但し該百韻は傳寫で傳はつたのであるから、寫誤も多いらしく、例へば表五句目の芳重は、「落葉考」の初懷紙註では芳里とあつて、この初懷紙註は前述の如く「花の故事」に於ける寫誤を訂正したものである。【史的地位】許六は、蕉風の撰集十一部を擧げた中に該百韻を加へ、何丸は北枝の傳を承け、七部集から「續猿蓑」を除いて該百韻を以て代へてゐる。五明は芭蕉の變風を眞・行・草の三に分ち、貞享年間の調を眞の形として、該百韻や「冬の日」(別項)「熱田三歌仙」等を以てこれを代表させてゐる。該百韻の調は「冬の日」に近く、「冬の日」の險奇晦澁を除いたもので、なかなか巧みに出來てゐる。千里の「敵よせ來るむら松の聲」に附けた芭蕉の「有明の梨打烏帽子着たりけり」や、千里の「殿守の眠たがりつる朝ぼらけ」に附けた芭蕉の「兀(はげ)たる眉をかくすきぬ〴〵」等の附句は、蕉門に頗る讃仰され來つてゐるものである。【影響】該百韻の調は、燕村一派の人々から尊重された。燕村は今遠國の蕉門と云ひはやされてゐる徒は、やゝ芭蕉の皮肉を察して、その粉骨を知らないものである。例へば、前記の「敵よせ來るむら松の聲」「有明の梨打烏帽子着たりけり」の意を味ふ徒は稀れであると云つてゐる。以て該百韻

解說(帝國文庫)〇珍本全集解說(帝國文庫)〇浮世草子集解說(日本名著全集)〔吉田〕

八文字屋瑞笑(はちもんじやずゐせう)　浮世草子作者・出版者【本名】安藤氏。通稱八左衞門。【號】瑞笑の號は、延享四年自笑歿後直ちに八文字屋本作者として見えてゐる。寶曆四年に李秀と改め、更に寶曆十年に白露と改め、また秋月下とも。【生歿】明和三年(一七六〇)十二月十九日歿す。享年未詳。【閱歷】瑞笑は自

「彩色歌相撲」「義貞艷軍法」は古文學の飜案、「昔女化粧櫻」「花楓劍本地」は淨瑠璃の飜案である。併し「世間長者容氣」の如き例外もないではない。なほ「花楓劍本地」「道成寺岐柳」等を文章の調子の異なるが故に、多田南嶺(南嶺參照)の代作せるものではないかと謂ふ研究者もあるが、確たる根據はない。【史的地位】瑞笑は自笑より三代目の八文字屋主となつて演劇關係書及び草紙の出版をなしたが、自笑以

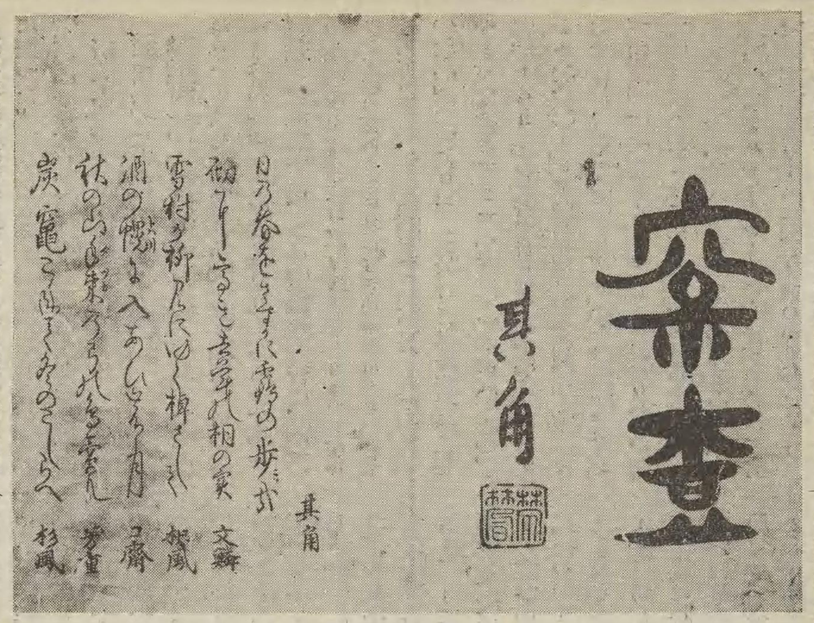
とは容易に認められる。八文字屋本の名聲の獨り高かつたのは、一にはこの外形の優秀にも由つたであらう。

【沿革】八文字屋本浮世草子は、元祿十五年の「傾城色三味線」(別項)に始まる。それより引續いて、「風流曲三味線」(別項)「傾城二挺三味線」「傾城繼三味線」など、所謂八文字屋の八三味線の好色本類を出したが、更に正德から

んだ人であるが、八文字屋本の作者は皆京都在住の人達である。出板も亦多く大阪の書肆から京都のそれに移つてゐる。當時大阪と京都の間の交通は大に便利になつてゐたので、文化の兩都間に交通したことはいふまでもなく、「元祿太平記」に依れば、兩都の書肆が互にその出板の書を交換して賣つたといへば、浮世草子が兩地の書肆に共同で出板され、又作者が京都にも出るやうになつたのも自然で

の彼等一派に及ぼした感化の多かつた事を知り得るであらう。

【參考】三册子　服部土芳　○俳諧花の故事　高桑闌



更　○俳諧落葉考　同上　○淺川早引集　川路宜麥　○芭蕉翁附合集評注　佐野石兮　○七部集大鏡　茂呂何丸　○七部婆心錄　原田曲齋　○芭蕉の連句樋口功　【萩原】

八犬傳　「南總里見八犬傳」を見よ。

八犬傳　演劇　「花魁菩八總」を見よ。

初戀　小說　【作者】矢崎嵯峨の屋。【刊行】明治二十二年一月、「都の花」所載。明治大正文學全集所收。【梗概】幕末頃、下總の一城下に生れた主人公が、十四歲の頃の初戀の想ひ出を老後に回想してゐる。槍の稽古から歸つた自分は、江戸の叔父が娘を連れて客に來たといふ話を聞いた。氣も心も神のやうに美しい娘、姉のやうに愛してくれるお雪といふ十八歲の娘に、少年らしいほのかな戀心を感ずる。そのうちに娘の緣談が熟して、いよ〳〵明日は江戸へ立つといふ前夜、悲しみに泣きぬれてゐる自分を娘に怪しまれた。けれども今何を言はう。利根の夕霧が一面に立ちこめて、美しい人を乘せて船は岸を離れる。娘は嫁入つた翌年にお產で死んだ。再會の言葉は空しくなつて、折つてくれた紙鶴や香箱ばかりが記念に遺つてゐる。【批評】單調なテイマであるが、少年らしい純情と情熱を前景とし、理想の處女とも呼ぶべき處女のしなやかさと、美しい故郷の自然を浮彫にしてそれを幼時の回想にぼかした情趣が、當年の傑作と見られたに無理がなく、また詩人作家の半面をしみ〴〵と見せてゐる。【千葉】

八股文　「漢文」を見よ。

八笑人　「花曆八笑人」を見よ。

八水隨筆　隨筆　一卷　【著者】不詳。傳に、享保・元文中幕府で大御番の職に在つた人と云ふ。【諸本】温知叢書・日本隨筆大成所收。【解說】柳營出勤中に見聞した諸侯・諸役人の逸事を初めとして、馬術・砲術・劍術・學問・藝術師匠の噂、猿樂囃子方名手の談、茶道の談等凡そ五十二條を收めてゐる。最後に大岡忠相・荻生徂徠と問答の一條がある。序跋なく、柳亭種彥の識語がある。【和田】

初姿　小說　【作者】小杉天外　【刊行】明治三十三年四月、春陽堂。代表的名作選集、新潮社所收。【梗概】始めて春木座の慈善演藝會に出た清元の小しゆん、本名お俊は、最初から人氣の中心となつた。彼女は時めいた書家桐澤素雲夫妻（素雲の妻は二十年前、柳橋で鳴らした名妓）に養はれて育つたが、實の親は某海軍將官で、その先妻との間の子といふ祕密を、彼女は長く知らずにゐた。十九歲の時、桐澤一家の生活を助けるため、平生覺えた清元の藝人となつて高座へ出たが、美貌と藝のさえが忽ち評判の的となつた。特別の贔屓客に高利貸の斧岡と、青年紳士の瀧山とがゐたが、老人の斧岡はわけても打込んでゐた。併しお俊には、一つ年下の美少年龍太郎といふ愛人があるので、固く操を守り、金持の斧岡が、夫人に迎へようと頻りにいふのを斷り、瀧山にも靡かうとしない。一方、龍太郎の養母お鶴（龍太郎の叔母）の主人筋に當る眞宮家に、玉枝といふ總領娘がある。夫に別れてから贅澤な暮しをしてゐたが、二十七八の年增ざかりで、多情な彼女が龍太郎に目を着け、この上なく愛した。お俊は少からず心を痛める。或る日瀧山がお俊を我が物にしようと、料亭「しほばら」へ呼ぶ。お俊はそこで偶然、玉枝に連れられて來た龍太郎に逢ひ、二人で知人のお直の許へ逃げ込み、夜が更けたのでそこに泊めて貰つたが、その事を知つた瀧山の友人で新聞記者の笠田が、惡辣な手段でお俊を脅かし、一夜、お俊の節操を汚した。お俊は悔いたが藝人の悲しさ、どうすることも出來ぬ。その上お俊が反對するにも拘らず、龍太郎が出家しようとするのを聞いてゐる所へ、お直から實の兩親の身の上を明かされ、現在の養父母の多年の恩誼を思ふに連れて、家のために斧岡老人の妻となるべく決意した。その嫁入の日、龍太郎は大泉寺で得度式を擧げた。【批評】ゾラ風の寫實主義を唱へた天外の最初の傑作だといはれるだけ、春木座の場内を精細に寫したところなど、如何にもゾラ張りだといへる。清元の藝人として華やかな生活に入つたお俊の裏面生活の悲しみもよく描かれてゐる。が、全體から觀て描寫が枝葉に亙り、外面的に偏したところに物足らなさがある。ただお俊のやうな女主人公は、大抵幸福な美しい運命に置かれる筈の、當時の小說の通念を痛快に打破し、彼女の痛ましい人生を思ひきつて露骨に、無慈悲に暴露したので、さういふ場景の描寫が、寫實主義の是非論を一層高調さした。その意味で記憶される作物である。【千葉】

發生心理學的美學　【獨】Genetische-psychologische Aesthetik.　【解說】人間の原始に於ける狀態や、人間的活動の由來及び生成の經緯に關することを明かにする立場を發生學的と稱し、原始人類の精神の發達、或は兒童の心理の發達を說明するものを發生心理學と云ひ、これ等の特殊心理學の方法を以て、美意識の生成を明かにするとか、或は具體的に藝術的表現の心理學的法則を求めんとする立場の美學を總稱する。グローセの如く、無償の起源（遊戲と藝術の發生的美學・民族心理學的美學・各別項しがある。また社會學的美學に於ける發生的研究もこれに屬する。【渡邊】

初蟬集　俳諧集　二册　【撰者】風國　【名義】惟然の序に、「蟬は變化の韻を改めて噪ぐのでもなく、又古の調を守つて鳴くのでもなく、三伏の暑天に感じ、命を惜まずして鳴く聲に、人の詠情を催すのである」とあり、俳諧の心境を喩へて題號としたのであらう。【刊行】元祿九年九月九日　【解說】上卷には春の發句百十三句、歌仙一卷、夏の發句百四十二句、歌仙一卷を收め、下卷には秋の發句百三十四句、歌仙三卷、冬の發句七十四句、歌仙一卷及び俳諧歌十二首、追加發句十八句を收めた。やがて權大納言は內大臣大將に進む。或る宵、御迎の車との聲に喜び見れば、火の車に恐しい者どもが附添ひ、門から入つて來て「早く乘れ」と責めるので、泣き伏すと見て起されると、眞實の迎への車であつたが、諦めてやがて東山の聖の許で剃髮する。その後小倉山に庵を結んで悟道に達したが、後、ある人から大將やその思ひ人達が各々淺ましい死にざまを聞き、今更神の有難さが思はれた。【構想】春日大明神の利益を說きながら、現世的の利生でなく、得道を說いたところに室町時代小說の特長を示してゐる。【小木】

八仙　「崑崙八仙」を見よ。

八田知紀　歌人　【幼名】彥太郎　明することを通して藝術の本質をも明かにしようとする立場の如きものは、發生心理學的見方に常に接觸し、一般に人類學的美學、人種學的美學の研究に伴ひ、或はその基礎となるものである。【參考】Haddon : *Evolution of Art*, 1895. ‖ Wallascheck : *Aes. d. Tonkunst*. 1886. ‖ Grosse : *Anfänge d. Kunst*. 1895.　【村田】

發生的美學　美學　【獨】Genetische Aesthetik　【解說】美や藝術の發生的方面を對象とする美學の總稱。美なり藝術なりを一の事實として觀察するやうになるに從つて、それが事實である限り、又かゝる

明することを通して藝術の本質をも明かにしようとする立場の如きものは、發生心理學的見方に常に接觸し、一般に人類學的美學、人種學的美學の研究に伴ひ、或はその基礎となるものである。

【參考】Haddon : *Evolution of Art, 1895.* ‖ Wallaschek : *Aes. d. Tonkunst. 1886.* ‖ Grosse : *Anfänge d. Kunst. 1895.*

發生的美學（はつせいてきびがく）　美學　〔獨〕Genetische Aesthetik【解說】美や藝術の發生的方面を對象とする美學の總稱。美なり藝術なりを一の事實として觀察するやうになるに從つて、それが事實である限り、又かゝる事實が如何にして發生して來たかといふ發生的研究の問題が生じて來る。こゝに美的事實又は藝術の發生的研究が生じ、それは同時に又美的事實、藝術の起原（別項）の發達の問題となる。而もかゝる研究は組織的研究が美意識の主觀的内省や實驗を主とするに反し、それによつて生産された藝術作品の客觀的觀察をその實際方法とするので、組織的研究が内省によると實驗によるとを問はず、一般に主觀主義的美學（Subjektivistische Aesthetik）といはれるに對して、客觀主義的美學（Objektivistische Aesthetik）と呼ばれる。又同じく客觀的美學（Objektive Aesthetik）として先驗哲學的美學とも呼ばれるが、發生的研究を客觀主義的と稱する所以は、事實上の客觀物を對象とする點にあるので、先驗哲學的美學が客觀的と稱せらるゝのは、妥當上の客觀性を對象とする意味であつて、兩者の意は全く異なる。この發生的方面から美的事實を究むる經驗科學的美學としては、生物學的美學・人類學的美學・民族心理學的美學・名別項）がある。また社會學的美學に於ける發生的研究もこれに屬する。〔渡邊〕

初蟬集（はつせみしふ）　俳諧集　二冊【撰者】風國【名義】惟然の序に、「蟬は變化の韻を改めて噪ぐのでもなく、又古の調を守つて鳴くのでもなく、三伏の暑天に感じ、命を惜まずして鳴く聲に、人の詠情を催すのである」とあり、俳諧の心境を喩へて題號としたのであらう。【刊行】元祿九年九月九日【解說】上卷には春の發句百十三句、歌仙一卷、夏の發句百四十二句、歌仙一卷を收め、下卷には秋の發句百三十四句、歌仙三卷、冬の發句七十四句、歌仙一卷及び俳諧歌十二首、追加發句十八句を收めてある。作者は芭蕉初め蕉門の人であるが、中に平時政の發句も入つてゐる。俳諧歌には芭蕉・其角・去來等の詠の外、貞德の詠も入つてゐる。鳥落人（惟然）の序、風國の跋がある。惟然の序に、芭蕉の「俳諧に古人なし」と云うた言や、今行はれる風體は、淺き砂川を見るやうであると云つた說が敷衍されてゐるのは、注意すべきである。本集は句に誤記があつたり、作者を誤つたりした杜撰が少くなかつたので、風國が翌年出した「菊の香」（別項）中に訂正してゐる。去來・風國系統の撰集として「菊の香」と合せ見るべきものである。〔萩原〕

初瀨物語（はつせものがたり）　一卷【作者】不明【成立】室町中期か。【諸本】續群書類從五〇八に所收。

【梗概】奈良の春日の里に、何がしのとくごうといふ分限者があつて、美しい娘一人を月日の光にもさやかにあてじと劬はりかしづかせてゐた。都から方々緣談があつたが、思ひあがつたとくごうは、思ふやうな緣がなければ、故鄉の塵ともなれと娘に言ひ聞かしてゐた。春秋二度春日に詣らせてゐたが、ある時左大臣の子權大納言からとて申込があつた。それで京都四條に家を造つてこれにまづ渡し進める事にした。仲だちの女が言ふには、他に申寄られた人への手前忍びやかに行ひ給へといふので同意したが、さて翌朝行つて見ると天下に名高き噂とは打つて變つた淺ましい男であつた。この男は權大納言の乳母の甥で大夫といふ痴者である。仲だちの女は年來の妻だつたが、かく人々を欺き多くのかづけ物をとつて田舍へ逃げて了つた。とくごうは施す術もなく故鄉へ歸つたが、程なく病みついて死んだ。四條では大夫が酒に醉ひて亂暴をし、娘も殆ど身の置き所もない位であつたが、やつと喪を幸ひに奈良へ下つた。そして春日の神に念ずると、「行末を猶たのまん憂きものと世のことはりを見するばかりぞ」と御告があつた。かくて再び京へ歸る事を嫌つて人々と共に初瀨に隱れる。大夫は惡者を語らつて財產を掠め取らうと奈良へやつて來たが、留守居の法師に言ひ負かされて逃げ歸る。さてとくごうの妹が前齋院に仕へてゐるので、同じく宮仕へする事にして初瀨を出る。然るにこの宮と權大納言は從弟の關係になつてゐるので、權大納言が屢々參られるうち、この娘に通はれる事になる。戀に迷つた女は事毎に思ひの種となり、心の惱みは盡きなかつた。ある時、又「たき物のくゆる煙はのちの世に身をこがすべきほのほとぞしれ」と夢の御告があつたが、戀に眼眩んで意にもかけなかつた。一年九月十五日鹿兒島に生れ、明治六年九月二日東京に歿す。享年七十五。【墓所】東京市芝區伊皿子大圓寺【閱歷】薩摩藩士善助の長子で、早く和歌を好み、上京の志切であつたが、文政八年八月、三十歲にして京都藩邸藏役を命ぜられて京都に上る。翌文政九年夏香川景樹を岡崎の東塢亭に訪ひ、その後も屢々教を受けたが、故あつてその門人とならなかつた。が、天保元年八月遂に入門し、熊谷直好（直好參照）と並稱された。安政六年正月十五日廣敷番頭となり、慶應元年九月五日廣敷御用人に轉じ、近衞家裏方（夏姬、後に光臺院）に仕へた。明治五年四月、八等出仕に補せられ、歌道御用掛を命ぜられ、同年十月十三日、七等出仕に敍せられた。門人に羽鳥春隆・原田豐秋・

八田知紀筆蹟

田代清秋・村山松根・澁谷國安・若松則文・田中國風・黒田清綱・高崎正風・福崎季連・山口利雄等がある。

【著書】しのぶ草（別項）○都鳥集○小門の汐○桃岡雜記○桃岡答問書○桃岡疑問辨○桃岡家訓○白雲日記○藤川紀行○吉野紀行○調の直路（別項）○謌の說（別項）○古今正義總論補註論○筆のさが評○歌よむ心ばへ○式島の道の考（歌の妙用は調にありといふ事のあかしぶみ）○三十六番歌合○千代の古道○高千穗の山苞○坊津紀行○宇治めぐり○高尾紀行○本教要略○大理論略○皇洋問答集○天考眞蹟行○祓草○幽鄕眞語○經義大意○泰伯論○菅家遺誡要文解○夢語○浮雲○上京日記○霧島紀行○贈勝安房守書等。

【人物・學風】知紀は、美衣美食を好まず、淡泊で、仙人などと人から言はれてゐた。酒・茶を嗜み、醉へば琴を彈じ、「萬葉」の古歌をうたひ、好んで畫もかいた。また歌論に長じ、景樹の「調の說」を基礎として更に發展せしめたが、理智的である知紀は、景樹の調に於ける知的意味を重んじて音樂性を十分理解しなかつた點がある。そのために調の音樂性を重んじた同門の直好（別項）と相反する見解をとるに至つたのである。この點は彼の歌風にも現はれて、その作品は思想に富み概念に流れる傾向があつた。併し景樹門下のすぐれた一人として、和歌史・歌學史の上に注目すべき位置を占めてゐる。次に作例を擧げる。

いつしかと待たれし月は山松のあらしの上になりにけるかな

池水の鷺きこゝろやたのむらむざれくる島の限りなきかな

【參考】日本歌學史（佐佐木信綱）○大日本歌學史（松平定信）（相原・佳田）

初便（はつだより）　俳諧集　一册　【撰者】大村知方撰、坂本朱拙後見。【名義】朱拙の序に、「折からの蓬萊によくも此心操をになひ出されけり」とあるによつて、芭蕉の「蓬萊にきかばや伊勢の初便」の句に因つたものである事が知られる。【刊行】元祿十五年　【諸本】蕉門珍書百種に所收。【解說】「枕の草子」の題に倣つて、鳥は・月は・木は・草は・風は・蟲は・草の花は等の「枕の草子」にもある題と、花は・雪は・木の實は・雨は・けだものはなどの頗る似せた題及び嘉辰靈宵は・神佛のわざは・衣服は・一字の題は・農事は・四序の寒暑は・聳（こびき）ものは・四時の終はなどの應用的な題とを設け、各題凡てに「枕の草子」の文に似せた叙事の短文を附し（一字の題はのみにはない）、各題にそれに叶ふ俳句を類聚したものである。作者は、鬼貫以外は、芭蕉を初めとして凡て蕉門の人で、そのうち撰者・後見者の關係上、九州の人が少くない。俳句數は二百六十六句ある。なほ卷末に、各篇四六韵と題する連句三篇、卽ち朱拙一黨、京連中と標記ある吾仲一黨、豐後連中と標記ある里仙一黨の連句が附せられてゐる。元祿十五年人日の朱拙の序、同正月の惟然の跋がある。【價値】「枕の草子」の題のみを廣く取つた集には、早く「誹諧瓜作」（別項）や「きさらぎ」があるが、「きさらぎ」は流派を異にし、「瓜作」は蕉門ながら作者の範圍人數が至つて狹少であるのに、本集はこれ等に倣つたものではあらうが、作者の範圍人數が遙かに廣く多くなつて居り、從つて見るに足るやうな句も少くない。それにこれ等先行集の摸倣に了ることを避けて應用的な題を案じた點も、本集の特色とすべきであらう。

【附說】「俳諧七部拾遺」に收むる「初便」は、朱拙撰の「けふの昔」（別項）を抄略改竄してかゝる名を附したもので、作爲の書といふべく、本集とは全然別個のものである。（志田）

發展（はつてん）　「放浪」を見よ。

服部誠一（はつとりせいいち）　雜文家　【號】撫松居士　【生歿】明治四十一年八月十五日、東京牛込納戸町の僑居に歿す。享年六十三（或は六十八）。【閱歷】代々舊二本松の儒官。廢藩置縣後東京に移り、專ら文筆をもつて鳴る。明治七年「東京新繁昌記」の著作を振り出しに、九年、九春社を創立して、自らその社長兼主筆として「東京新誌」を發行したが、十六年二月第三百三十四號で發行禁止となり、次いで「吾妻新誌」を續刊して、約一ケ年それを主宰したが、偶々資本家丸谷氏との間に葛藤を生じ、爾來同誌と關係を絶ち、別に「京華春報」を發行したが、十號內外で廢刊するに至つた。その他十四年三月より十五年六月まで「春野草誌」を九春社より發行。この間社長若しくは主筆として民權擴張の政論新聞四五種を發行したが、何れも政府攻擊のため發行を禁止された。明治九年六月、四通社より「廣益問答新聞」を隔日發行第三百七十六號（十二年九月）で禁止に遭うた。次いで「中外廣問新報」（毎月十回）も第九十五號（十三年十月）で禁止され、更に「江湖新報」（第百九十九號、十五年八月まで）を發行。別に十三年十二月「東洋事情」を出したが、二十二號で十五年五月に休刊。同年十月、「內外政黨事情」を出して、第三十八號（十六年二月）で廢刊した。その後は四五の雜著戲作を公にしただけで、餘り活動しなかつたらしく、同二十九年三月、宮城縣仙臺第一中學校の漢文敎師に聘せられ、居ること十二年、東京に休養中急病にて歿した。【著作】東京新繁昌記六册（明治七年―九年）○東京新繁昌記後編二册（十四年）○第二世夢想兵衞胡蝶物語二册（十七年）○東京柳巷新史二册（十八年）○京濱街誌一册（同年）○二十三年國會未來記二册（十九年）○文明花園春告鳥二册（同年）○稚兒櫻一册（二十年）。以上の外に、明治十七八年頃「春窓綺話」（別項）「第二十世紀」等、二三の飜譯物も見えてゐるが、これ等は單に署名人たるに過ぎないといふ。なほ前記著作中、彼の文名を高からしめたものは「東京新繁昌記」で、この「新繁昌記」あつて服部氏ありともいふべきであらう。當時「東京新繁昌記」出づるや、續いて類本が多く出た。

【人物】彼の號を撫松と言つたのは、「孤松を撫して盤桓す」といふ陶淵明の歸去來辭中から出たものらしいが、この號が能く彼の人と爲りに適してゐた。人と交際するを好まず、終生親友は勿論、交友すらもなかつたらしい。寡言自重、毫も風流才子の風はなかつた。この人にしてどうして「新繁昌記」「東京新誌」の如き艷筆を以て、花柳界や下層社會の事情を寫し得たかと疑はれる位であつた。併しそれは單に天分の才筆を以てしたばかりでなく、少壯時代の經驗がこれを助けたらしい。仙臺中學の敎師時代に、敎を受けた門下生の一人吉野作造博士の言に依れば、一言の不平を言はず、愉快に職務に從事して、冗談口一つきかなかつたので、「東京新繁昌記」の著者として想像に浮んだ撫松居士と、服部先生とは別人の感があつたさうである。

【參考】東京新繁昌記（棄芳閣本）○新舊時代（一ノ八・九）（石川鷹畝）

服部躬治（はつとりみはる）　歌人　【生歿】明治八年三月二十八日生れ、大正十四年三月六日

東京にて病歿す。享年五十一　【閱歷】福島縣岩瀨郡須賀川町の人。初め國學院に學び、次いで淺香社に入つて落合直文に師事した。明治三十一年夏、久保猪之吉・尾上柴舟・齋藤雄助・大伴來目雄・菊池駒次等と相結んで雷會を組織し、その詠草は主として讀賣新聞に載せた。直文の推薦によつて跡見女學校に敎鞭を執り、作歌を敎へたことがある。後、向島の請地に住み、晩年は「萬葉集」の評釋、國語辭典の編纂に從つてゐたが、關東大震災に遇つて、その草稿は家と共に滅びた。雷會の後、雜誌「文庫」の歌壇の選者であつた事があり、不定期雜誌「あまびこ」を創めたこともあつたが、歌作は次第に少く、後、一時雜誌「新潮」等に歌を發表したが、その後は專ら文壇の逸話を書いて收入を得てゐた。【解說】「醒睡笑」「鹿の卷筆」（各別項）等より採つた材料も尠くない。卷三「法師古井戶の戀」は「醒睡笑」卷三「戀のみち」、卷二「地獄極樂の悟氣」は同書卷六「悟氣」の項にある話を採つたのである。卷一「龜は命の寶」は同じく同書卷二「私可多吧」（別項）卷三より採つた。卷一「天竺浪人の宿」は「鹿の卷筆」卷二「火の見櫓の見立」の飜案である。卷一「九分十分目の欲」は「露がはなし」（別項）卷一「小僧が利口で却つてめいわくといふ事」、卷一「節用集の謠」は同書卷二「蚤の三番叟」は同書卷二「風呂入り」、卷二「蚤の三番叟」は同書卷二「蚤の式三ばん」、卷三「紙帳もそれ〴〵の入物」は同書卷一「筆まめなる書付の事」、卷三「山鳥に耳あり」は「醒睡笑」卷六及び「露がはなし」（別項）卷一「と通げた」の如き說明句が多い。【影響】「醒睡笑」に次ぐ大部の笑話本であるから、內容も豐富で、かなり後世に影響してゐる。卷一「甜てみる空炊の香」は「獨樂新語」（天明八年）に「十種香」と題して飜案してある。卷二「神代の頭巾」は「鹿の子餅」（別項）に「藥罐」と題して採つてある。卷一「時の榮花」は「評判の俵」（天明八年）に「茶碗」と題して飜案してある。その他現存の落語となつて殘つてゐるものは、落語「網取魚」で、山國生れの下男が、旦那の網漁の土產として魚を買取り、目ざしを持ち歸る話の中に、本書卷一「比翼のさし鯖」が採り入れられてゐる。落語「星野屋」で欺された女にやつた金が欲しくなり、贋金と稱して取り返し、後で本物だと言ふと、女

收。【解說】「醒睡笑」「鹿の卷筆」（各別項）等より採つた材料も尠くない。卷三「法師古井戶の戀」は「醒睡笑」卷三「戀のみち」、卷二「地獄極樂の悟氣」は同書卷六「悟氣」の項にある話を採つたのである。卷一「龜は命の寶」は同じく同書卷二「私可多吧」（別項）卷三より採つた。卷一「天竺浪人の宿」は「鹿の卷筆」卷二「火の見櫓の見立」の飜案である。卷一「九分十分目の欲」は「露がはなし」（別項）卷一「小僧が利口で却つてめいわくといふ事」、卷一「節用集の謠」は同書卷二「蚤の三番叟」は同書卷二「風呂入り」、卷二「蚤の式三ばん」、卷三「紙帳もそれ〴〵の入物」は同書卷一「筆まめなる書付の事」、卷三「山鳥に耳あり」は「醒睡笑」卷六及び「露がはなし」（別項）卷一「と通げた」の如き說明句が多い。【影響】「醒睡笑」に次ぐ大部の笑話本であるから、內容も豐富で、かなり後世に影響してゐる。卷一「甜てみる空炊の香」は「獨樂新語」（天明八年）に「十種香」と題して飜案してある。卷二「神代の頭巾」は「鹿の子餅」（別項）に「藥罐」と題して採つてある。卷一「時の榮花」は「評判の俵」（天明八年）に「茶碗」と題して飜案してある。その他現存の落語となつて殘つてゐるものは、落語「網取魚」で、山國生れの下男が、旦那の網漁の土產として魚を買取り、目ざしを持ち歸る話の中に、本書卷一「比翼のさし鯖」が採り入れられてゐる。落語「星野屋」で欺された女にやつた金が欲しくなり、贋金と稱して取り返し、後で本物だと言ふと、女

る五丁物であるが、內容から見ても九丁以前があつたのであらう。稀書複製會第三期複製本がある。

【梗概】（一）「れいしやゆく所」と記し、門松・注連繩の門を、紺麥の禮者が下男を先に立てて歩み、子供を連れた婦人が背景の如くに畫かれてゐる。（2）「若水」と記し、裸體の若者達が大盥の水を手桶で汲み出し、着衣のまゝの他の男に浴せかけてゐる。（3）「やくはらひども」、「まめまく所」と記し、道を厄拂が行き、屋內では豆を撒いてゐる。（4）「正月七日七草」と記し、屋內では七草を囃し、表には大黑舞と鳥追とが來、七草賣が道を通つてゐる。（5）「さいの神の所」と記し、人々がさいの神の門近く踏んでゐる、一人の少年が大

東京にて病歿す。享年五十一。【閲歴】福島縣岩瀬郡須賀川町の人。初め國學院に學び、次いで淺香社に入つて落合直文に師事した。明治三十一年夏、久保猪之吉・尾上柴舟・齋藤雄助・大伴來目雄・菊池駒次等と相結んで雷會を組織し、その詠草は主として讀賣新聞に載せた。直文の推薦によつて跡見女學校に教鞭を執り、作歌を教へたことがある。後、向島の請地に住み、晩年は「萬葉集」の評釋、國語辭典の編纂に從つてゐたが、關東大震災に遇つて、その草稿は家と共に滅びた。雷會の後、雜誌「文庫」の歌壇の選者であつた事があり、不定期雜誌「あまびこ」を創めたこともあつたが、歌作は次第に少く、後、一時雜誌「新潮」等に歌を發表して復活の兆があつたが、その以後は殆ど作を示さなかつた。「戀愛詩評釋」、歌集「迦具土」(別項)、「春夏秋冬名歌選」等の著がある。

【人物・作風】眼光は透徹して居り、豐かな想をもつてゐた。理智に勝つたところもあつて議論が多かつた。交友は比較的少く、久保猪之吉・尾上柴舟・内海月杖等とは親しかつた。晩年には自ら世と絶つて研究に從事したが、發表しない中に歿した。躬治の作風を知るには「迦具土」一巻がある。その最も目立つて歌壇に働いてゐた時期は、雷會及び「文庫」選者の當時であるが、歌壇に及ぼした影響は比較的少い。(迦具土參照)　【尾上】

初音草噺大鑑　はつねぐさはなしおおかがみ　噺本　七冊　【作者】寓言子とある。【名稱】序に隆辨僧正の歌「開くたびにめづらしければ郭公いつも初音の心地こそすれ」(實は興福寺の別當永圓(權僧正の歌)に依り名づけたとある。【刊行】元祿十一年【諸本】落語全集(續帝國文庫)所收。【解說】「醒睡笑」「鹿の巻筆」(各別項)等より採つた材料も尠くない。巻三「法師古井戸の戀」は「醒睡笑」巻三「戀のみち」、巻二「地獄極樂の悟氣」は同書巻六「悟氣」の項にある話を採つたのである。巻一「龜は命の寶」は同じく同書巻二「鴛(うつけ)」から採り、巻一「後家は小町が俤」は「私可多咄」(別項)巻三より採つた。巻一「天竺浪人の宿」は「鹿の巻筆」巻二「火の見櫓の見立」の飜案である。巻一「九分十分目の欲」は「露がはなし」(別項)巻一「小僧が利口で却つてめいわくといふ事」、巻一「節用集の謠」は同書巻二「風呂入り」、巻二「蚤の三番叟」は同書巻二「蚤の式三ばん」、巻三「紙帳もそれ〴〵の入物」は同書巻一「筆まめなる書付の事」、巻三「山鳩に耳あり」は「醒睡笑」巻六及び「露がはなし」巻三「人より鳥がこはい」、巻四「請て流す輕口」は「露がはなし」巻一「人をけてはまりの早き事」から、皆夫々脫化或は飜案したものである。又巻二「生寫しの思ひ」は「輕口ばなし」(別項)巻二「人形を見て泣く事」を採つたのである。巻二「殘りおほい妻の別」は「枝珊瑚珠」(別項)の「酒屋の八藏」を採つた。巻一「極樂の豐年」は元祿六年から七年にかけて江戸・京・大阪に、善光寺如來の開帳のあつたのを材とし、巻一「後家は小町が俤」は俗諺「丙午の女は夫を喰ふ」に據つた。每編每に「兎角うき世は阿房でも、金が利發にするならひ」「胎の内に十月まではようゐたと世間から不審をたつる、物事にせはしき人あり」「家に鼠あり國に盜人ありとは古人の格言、兎角油斷のならぬうき世なり」と云つたやうな句が最初に附けてあるのは、浮世草子の影響を受けたのである。所謂上方咄の特徵を現はして、何となく弛緩した所があり、最後の下げに「といふた」と逃げたこの如き說明句が多い。【影響】「醒睡笑」に次ぐ大部の笑話本であるから、内容も豐富で、かなり後世に影響してゐる。巻一「甜てみる空炊の香」は「獨樂新語」(天明八年)に「十種香」と題して飜案してある。巻二「神代の頭巾」は「鹿の子餠」(別項)に「藥纏」と題して採つてある。巻一「時の菜花」は「評判の俵」(天明八年)に「茶碗」と題して飜案してある。その他現存の落語となつて殘つてゐるものは、落語「網取魚」で、山國生れの下男が、旦那の網漁の土産として魚を貰取り、目ざしを持ち歸る話の中に、本書巻一「比翼のさし鯖」が採り入れられてゐる。落語「星野屋」で欺された女にやつた金が欲しくなり、贋金と稱して取り返し、後で本物だと言ふと、女の老婆がさうだらうと思つて三枚くすねて置いたと云ふ話は、本書巻一「戀の重荷にあまる智慧」を脫化したのである。落語「二番煎じ」は本書巻三「吸筒の前藥」の筋をそのまゝ襲用したのであつて、ただ禪寺で藥と稱して酒を飲むのを、自身番で茶と稱して酒を飲む事に作り變へただけである。巻四「世は金が利發」中の、拔作が娘の魚目に火除の札を貼れと云ふ話は、現存の「與太の新築祝ひ」に、牛の尻に火難除けの札を貼れと注意する話に轉化してゐるのである。　【山崎】

初音僧正　はつねのそうじやう　「永緣」を見よ。

初春のいわひ　はつはるのいはひ　草雙紙　赤本　一册　五丁六圖　【畫工】菱川師宣畫風　【形態】丹表紙、縱五寸、横三寸五分。【名稱】「はつはる、しうぎぞろへ」と二行に角書がある。【刊行】巻末の繪の大福帳に、延寶六年正月吉日の文字が見えるので、刊年と推定される。【諸本】原本は第九丁から始まり、第十三丁で終る五丁物であるが、内容から見ても九丁以前があつたのであらう。稀書複製會第三期複製本がある。

【梗概】(1)「れいしやゆく所」と記し、門松・注連繩の門を、裃姿の禮者が下男を先に立てて歩み、子供を連れた婦人が背景の如くに畫かれてゐる。(2)「若水」と記し、裸體の若者達が大盥の水を手桶で汲み出し、着衣のまゝの他の男に浴せかけてゐる。(3)「やくはらひども」、「まめまく所」と記し、道を厄拂が行き、屋内では豆を撒いてゐる。(4)「正月七日七草」と記し、屋内では七草を囃し、表には大黒舞と鳥追とが來、七草賣が道を通つてゐる。(5)「さいの神の所」と記し、人々がさいの神の門近く進んでゐ、一人の少年が大黒の像を三寶に載せて持つて行く。(6)屋内で人々が帳面の表紙を書いてゐる。

【解說】黒本・青本・黄表紙・合巻(各別項)、その他の類書の繪の上に文章を書き込む方法は、早く赤本が採用した形態からの展開である。「初春のいわひ」を純然たる赤本と稱することは出來ず、胎生期の赤本の一形態と見るべきである。準玩具として婦人子供に與へたもので、極めて滅び易い性質をもつこの書が、今日までも傳はつてゐることは、稀有の事實であつて、形態方面の研究上貴重な資料である。大人の鑑賞する繪本が、江戸文化の發展に伴つて婦女年少者に與へられるやうに、經濟と讀者の事情とに考慮を拂つて、かゝる形態を案出したものであらう。各畫面に子供が多く畫かれ、その全く見えないのは第二圖だけである。畫面に記入した僅少の文字(それは啓蒙的の立場から畫面に命名するのである)が、悉く矩形に線で圍まれて畫面と區別する事は、當時

尼の巫術は殊に有效に行はれたに相違ないからである。前代の證明法の我々と異なつてゐたことは、他の多くの傳說主體を見てもわかるが、昔の人たちは眼で見、手で觸れるといふことを非常に重んじ、これに由つて耳で聽いたことを確かめようとする常の傾きを持つてゐた爲めに、たとへば草子に插畫を要し、語り事にあればその眞僞を正す前に、先づ一應は現實として話を受取ることが出來たのである。人間の八百歲は有り得べからざることであるが、現に杖を刺したといふ木が實にあるのだから丸つきり空な話ではあるまい、といふ類の考へ方は今でもまだ少しづつ殘つてゐる。その上に八百比丘尼の長命を證明する手段はもう二つあつた。その一つは庄の浦の仙女の話にも引繼がれてあるが、比丘尼は源義經が辨慶等の家臣をつれて、北國の方へ落ち行くところを見たと謂つてゐる。この點は奥州の常陸坊海嘗などもおなじであり、中國地方でも年ふる狐狸などは、多くは屋島壇の浦の合戰を見て知つてゐると謂つて、詳しく當時の狀を說き、又はその光景を幻に見せたといふ話がある。多くの物知りが宗教上の威力を傳へ、說敎が力を由來記に注ぎ、從つて歷史といふ學問の社會の尊信を受くるに至つたのも、一つの原因はこゝに在つたのである。

第二の證明方法は、何故にこの比丘尼一人が、八百歲も活きてなほ若々しかつたかといふ理由を、十分具體的に說明することであつた。若狹や土佐では人魚の肉、會津では九穴の貝、越後には又大蛇の肉といふ話もある。兎に角に見馴れぬ食物を異人から貰つて、なまなかつたら死ぬ筈の命を全うしたといふ話は、諸國に數多くあつて、これを全體ふるまつたものの中には、或は數百年前の曾遊を說いたのではなからうか。土地の住民が偶にそれと、人を驚かすやうな說明をする方法があつたとすれば、段々と稍不取扱の祕術を知つてゐたやうだが、ここの場合には

が、ただ一人無心の少女のみがこれを食つてしまつた。それ故に老いて益々艶かに、あらゆる家族に死に別れて、自分だけがかう永く生きてゐるのだといふ話、これが今日でも八百比丘尼の傳説のあるところには、必ず附きまとうて語られてゐるのを見ると、たとへこの旅行をした比丘尼は一人でなくとも、とにかく同じ系統の技術を傳へたものが、久しい間國々を巡歴してゐたことだけは疑はれぬのである。傳説の採集と比較が單にその根柢をなすところの前代信仰を知るばかりでなく、同時にこれを管理し傳播した人々の、精神生活の經過を明かにするためにも、非常に大切な事業であることは、一つの八百比丘尼の例だけでもこれを承認することが出來る。文學の背景は廣く奥深く、末は原始人の最も素朴なる心情にも及んでゐる。その生命の連續を象徴するものが、或はこの人魚を食うた女の傳説であつたとも考へられぬことはないのである。

（柳田（國））

八百八町瓢箪斧（はつぴやくやちやうひさごのかんざし）脚本　五幕十一場　額見世狂言【作者】増山金八【興行】寛政十一年十一月一日、江戸森田座初演。

【役割】小田春永・真柴久吉・武田勝頼の霊（市川八百藏）、千本姫（佐野川萬菊）、小野のお通後に妙喜尼・石山觀世音化身（松本米三）、小田春忠・毋折江（津打門三郎）、傾城深山木後に阿能の局（市川おの江）、武智左馬之助・光秀妻皐月（岩井喜代太郎）、佐藤虎之助正清・武智光秀・森蘭丸・足利政左衛門（市川男女藏）等。

【諸本】太閤記狂言集（日本戯曲全集）所收。

【題材】太閤記を世界にした額見世狂言。當時江戸に瓢形の笄が流行したからの思ひつきであるといふ。

【梗概】（序幕）（津島祭）小田春忠、傾城深山木・同花の香を呼んで遊興。源の正平が荒刹王と名乗り甲賀山に屯してゐるので、春永が味方に赴かねばならぬ破目になり、その決着を深山木・花の香が、山口九郎次郎の行司で花戰をする。花守右近の裁きで紛失の名劍を取り得るため、一時荒刹王へ味方する事になる。竹割入道が深山木へ戀慕。鬼小島彌太郎が荒事で悪人を挫ぐ。（野間内海）荒刹王と田熊玄蕃の頼みで、悪相模が彌勒堂の襖に描いた虎を祈ると、虎は抜け出して玄蕃を喰ひ殺す。（二幕）（甲賀山三韓宮）荒刹王は春忠を虜にし、奥方千本姫を口説き、松永久秀・四王天又兵衛等に、右近等の首を刎ねさせようとする時、佐藤虎之助正清、吉例の暫で出て一同を助け、名劍を取返す。入道は虎を放つが、虎之助は名劍の威徳で取挫ぐ。（三幕）（安土塀外）深山木今は阿能局、悪相模を捕へんとする。（御殿）小田春永・養女お通の君・森蘭丸・武智左馬之助四人の所作。蘭丸、不興を受けし光秀の詫び。お通と左馬之助の戀。（奥殿）筒井筒振分髪のうなゐ子男女二人の振。男は武田勝頼の霊、女は石山觀世音の化身で、共に春永を怨み、仇をなさんとするが、左馬之助のために妨げられる。（常磐津節淨瑠璃「祇園守護花頭巾」）。（四幕）（本能寺）春永は捕へし悪相模を鬼小島彌太郎に糺明さす。日計上人の執成しで、光秀は春永に對面、所業を諫言する。春永は一族波多野因幡之助の切腹を命ずる。切腹の時「時は今」の詠句現はれ、光秀の大軍押寄せる。妻皐月は光秀を諫めて自殺。光秀實は松永久秀の倅。亂闘。櫻井小新吾、二條城落城を報ずる。（奥殿）春永は日計上人と名殘の茶を喫し、因幡之助今は谷田宅兵衛の手にかゝつて果てる。（大詰）（山崎宗鑑閑居）足利政左衛門の家。政左衛門の妹が松永の愛女となり、春永の奥方千本となつたので、千本は妙喜尼と姿を變へたお通と共に、毋折江に匿まはれてゐる。松永久秀も忍んでゐたが、謀叛人の光秀が松永の子と知つて一同愁嘆。實柴久吉は、三法師の母ながら敵方とあつて千本姫の首を取りに來る。柴田勝繁も關白の命を奉じて同じく首を取りに來る。お通は思ふ左馬之助が本能寺に死去したと聞いて尼になつたが、遠眼鏡で山崎合戰の様子を見て、生存してゐるのを發見。（山崎合戰）左馬之助は實柴方と奮戰、十次郎を助ける。（元の閑居）左馬之助この家へ辿りつく。お通介抱。久秀はお通へ戀慕。政左衛門は取持ちを約す。左馬之助は御正印紛失の科で切腹。政左衛門はお通を討つて千本姫の身替りにする。勝繁は身替りと知らず持つて歸る。千本姫は三法師を抱いて現はれる。久吉・政左衛門は、互に武士の身を嘆じ合ふ。久秀は三法師を狙撃せんとして折江に妨げられる。光秀追討の軍を差立てる所で終り。

【脚色】荒唐無稽な江戸額見世狂言中にあつて、全く首尾一貫し、相當に傳説も尊重する中に、額見世の古例は缺かさず、合理的な脚色は寧ろ珍しい。暫が正清だけに虎を使つた點、うなゐ子の振事、本能寺の夜討、大詰の愁嘆など、いづれも特色があつて面白い。（渥美）

潑墨（はつぼく）繪畫【解説】墨畫に於ける描法の一。一般には率意的な略筆にこれを用ひる。即ち潑はそゝぐの意味で、墨汁を筆に含ませ、これを絹素の上に注いで、その淋漓たる墨痕に雲烟の氣や表現の活趣を發揮する描法である。「歴代名畫記」や「唐朝名畫錄」等によると、潑墨は唐代から行はれ、殊に唐の畫家王墨はこの法に秀で、手足に墨汁をつけて磊落自在に揮灑したといふ。近世に至り清の沈宗騫は、その著「芥舟學畫篇」に於て、潑墨を破墨（別項）に對立せしめ、潑墨は濃墨の後に淡墨を施して一氣相通の勢を發揮する北畫の描法、破墨は淡墨の後に濃墨を加へて柔軟滋潤の趣を見せる南畫の描法と定義し、これが日本にも一般に通用さるゝに至つたが、これでは聊か兩者の概念を對立的に強ふるに過ぎた憾みがある。（破墨參照）

（田中（一））

初元結（はつもとゆひ）俳諧詞寄　七册　附錄一册【著者】池田是誰（これたれ）【成立】萬治元年秋【刊行】寛文二年二月吉祥日【名義】初心者の案内の意である。初元結の文字は初髷とも書いてある。【由來】序によると、著者が親友の一人二人に、道に入るよすがともなるべき事を書き集めよと度々勸められて、他見を憚りつゝ編集したものとあるが、乘柳子の跋によると同人のために編んだといふ。同人及び異令信が世に廣める事になつたもので、萬治二年荻の葉亂る秋風月朔に記した自序と、乘柳子の跋及び令信の漢文の跋とを附けてある。

【解説】古來の名家の俳諧集並に近來の自他の點取の卷々に出てゐる附合の詞を、いろは順に輯錄したものである。即ち前句に出た或る詞にすがつて句を附けようとする場合の便宜のために、それ〴〵の詞に對應すべき數々の詞を輯錄したのである。例へば、「糸」に附けるべき詞として「櫻」「柳」「蓮」「すゝき」「針」「蜘蛛」を、「糸ひく」に附けるべき詞として「あやつり」「いかのぼり」「琴」「さみせん」「佛の御手」「大工」「牛のよだれ」「三輪」「納豆」を擧げ

初物語（はつものがたり）

滑稽本　一册　【作者】式亭三馬　【名義】角書に「浪花土産」とある。即ち三代中村歌右衛門（芝翫）が文化五年に初めて江戸下りをしたことに因んだ意であらう。　【刊行】文化五年　【題材】文化五年に三代中村歌右衛門が江戸中村座に出演するといふことは、當時の評判記等によつて憧れてゐた芝翫の利下りといふ點で多く期待され、非常な盛況であつた。それより纔いて五箇年間江戸に足を留めるに至つた。本書はその人氣の眞最中、四月狂言の「お俊傳兵衛堀川の段」を題材の中心にして、所謂際物的に執筆したものである。【解說】旅役者の赤山下手藏は、元々芝居好から役者の群に入り、大芝居の本舞臺をも踏んだものであるが、失敗に失敗を重ねて遂に師匠の許より追出され、據所なく故郷に歸る途中、下野國那須野ヶ原の茶屋で、此處の持丸長者堀川傳兵衛の娘お俊が、歌右衛門の芝居見物に行かうといふのを聞いて江戸へ上る。一方三馬は、駿河屋半兵衛から此の際物的な作を依頼された時、食指大に動いて、一晝夜の急案も彼には快い仕事の一つであつたらう。序文にこの氣持が躍動してゐる。併し露骨に追從的な讃辭もいへず、又人氣稼業の人であるから、彼獨特の鋭利な皮肉もいへず、結局平凡な滑稽本になつてしまつてゐる。（小笠）

競伊勢物語（くらべいせものがたり）

脚本　七幕　【作者】奈河龜輔　【名稱】角書に「大和に筒井井堰、河内に生駒山」とあつて、井筒姫・生駒姫が筆美を盡ふ義を名題に入れたものであらう。同時に出版された淨瑠璃には「惟喬惟仁御位諍に直接仰ぐところ」と訓ませてゐるが、これを脚本に「はなくらべ」と訓ませてゐるで、これを脚本に「ずがたくらべ」「くらべごし」等と訓む場合もある。【興行】安永四年四月、大阪中の芝居嵐松治郎座上演。

（役割）業平・道路・村雨姫・豆四郎（三枡德次郎）、非筒姫・關の戸・信夫（尾上多助）、孔雀三郎（藤川八藏）、紀名虎・紀有常（中村歌右衛門）、和田作・小よし（三枡大五郎）、中納言行平（中村十藏）、荒川宿禰（藤川柳藏）、斑鳩藤太・どらの鏡八（三枡他人）、惟喬親王（阪東岩五郎）、二條后（嵐松治郎）等。四段目「道行ひなの宮古路」、太夫宮古路一仲・ツヤ同座駒太夫、三絃岸村藤輔）

【諸本】書卸臺帳は燒失。同名題の讀本淨瑠璃が大體場面を同一にすると思はれる。併し「增補競伊勢物語」即ち業平の傳說によつたものであるが、近松の「井筒業平河内通」（別項）からヒントを得たと思はれる點が多い。

【梗概】（繪入根本による）序幕（内裏）堀河の大臣昭宣は妹高子が惟仁親王の愛を蒙る關係もあり、先帝文德の御遺勅により、閏月の御誕生なる兄惟喬親王をおいて、弟君惟仁親王の即位あるべき由を申上げる。八咫鏡が紀名虎の宅と共に不明となり、御劍が行平の手に渡つてゐるので、惟喬親王の命をうけた宗岡方の侍が生駒姫を護衛して來たが、業平の家來業平丸のために誤られて、姫君は虎口と逃れる。（小野山住居）大納言宗岡は、兄君惟喬親王を立てんとして五に讓らぬ。折から堀河館の遺勅と宗岡館の神璽とが、何者かに奪取された注進に人々色を失ふ。母公染殿后から使者として業平が下り、古例に依つて角力によつて皇位を定めることとなる。宗岡の執權荒川宿禰と昭宣の執權斑鳩藤太が、力士として選ばれた。（二幕）（加茂詣居前）紀有常の息女井筒姫は、社參に事よせて業平と密に出會つたが、又高安の生駒姫も業平を慕つて來た。業平は井筒姫の眼を忍んで、生駒姫と寢殿の中に契る間に、惟喬親王の命をうけた宗岡方の侍が生駒姫を護ひに出せて來たが、業平の家來業平丸のために誤られて、姫君は虎口と逃れる。（小野山住居）

（船番辻）　話物勢伊競　全部五冊　【題材】名題の如く「伊勢物語」即ち業平の傳說によつたものであるが、近松の「井筒業平河内通」（別項）からヒントを得た正三の「惟喬惟仁御位諍に直接仰ぐところが多い。

【梗概】（繪入根本による）序幕（内裏）堀河の大臣昭宣は妹高子が惟仁親王の愛を蒙る關係もあり、先帝文德の御遺勅により、閏月の御誕生なる兄惟喬親王をおいて、弟君惟仁親王の即位あるべき由を申上げる。八咫鏡が紀名虎の宅と共に不明となり、御劍が行平の手に渡つてゐるので、惟喬親王の命をうけた宗岡方の侍が生駒姫を護衛して來たが、業平の家來業平丸のために誤られて、姫君は虎口と逃れる。（小野山住居）

（加茂詣居前）紀有常の息女井筒姫は、社參に事よせて業平と密に出會つたが、又高安の生駒姫も業平を慕つて來た。業平は井筒姫の眼を忍んで、生駒姫と寢殿の中に契る間に、惟喬親王の命をうけた宗岡方の侍が生駒姫を護ひに出せて來たが、業平の家來業平丸のために誤られて、姫君は虎口と逃れる。（小野山住居）大納言宗岡は、兄君惟喬親王を立てんとして五に讓らぬ。折から堀河館の遺勅と宗岡館の神璽とが、何者かに奪取された注進に人々色を失ふ。母公染殿后から使者として業平が下り、古例に依つて角力によつて皇位を定めることとなる。宗岡の執權荒川宿禰と昭宣の執權斑鳩藤太が、力士として選ばれた。（二幕）

（役割）業平・道路・村雨姫・豆四郎（三枡德次郎）、非筒姫・關の戸・信夫（尾上多助）、孔雀三郎（藤川八藏）、紀名虎・紀有常（中村歌右衛門）、和田作・小よし（三枡大五郎）、中納言行平（中村十藏）、荒川宿禰（藤川柳藏）、斑鳩藤太・どらの鏡八（三枡他人）、惟喬親王（阪東岩五郎）、二條后（嵐松治郎）等。四段目「道行ひなの宮古路」、太夫宮古路一仲・ツヤ同座駒太夫、三絃岸村藤輔）

【諸本】書卸臺帳は燒失。同名題の讀本淨瑠璃が大體場面を同一にすると思はれる。併し「增補競伊勢物語」即ち業平の傳說によつたものであるが、近松の「井筒業平河内通」（別項）からヒントを得たと思はれる點が多い。

【梗概】（繪入根本による）序幕（内裏）堀河の大臣昭宣は妹高子が惟仁親王の愛を蒙る關係もあり、先帝文德の御遺勅により、閏月の御誕生なる兄惟喬親王をおいて、弟君惟仁親王の即位あるべき由を申上げる。八咫鏡が紀名虎の宅と共に不明となり、御劍が行平の手に渡つてゐるので、惟喬親王の命をうけた宗岡方の侍が生駒姫を護衛して來たが、業平の家來業平丸のために誤られて、姫君は虎口と逃れる。（小野山住居）大納言宗岡は、兄君惟喬親王を立てんとして五に讓らぬ。折から堀河館の遺勅と宗岡館の神璽とが、何者かに奪取された注進に人々色を失ふ。母公染殿后から使者として業平が下り、古例に依つて角力によつて皇位を定めることとなる。宗岡の執權荒川宿禰と昭宣の執權斑鳩藤太が、力士として選ばれた。（二幕）

（加茂詣居前）紀有常の息女井筒姫は、社參に事よせて業平と密に出會つたが、又高安の生駒姫も業平を慕つて來た。業平は井筒姫の眼を忍んで、生駒姫と寢殿の中に契る間に、惟喬親王の命をうけた宗岡方の侍が生駒姫を護ひに出せて來たが、業平の家來業平丸のために誤られて、姫君は虎口と逃れる。（小野山住居）

（船番辻）　話物勢伊競　全部五冊　【題材】名題の如く「伊勢物語」即ち業平の傳說によつたものであるが、近松の「井筒業平河内通」（別項）からヒントを得たと思はれる點が多い。

【梗概】（繪入根本による）序幕（内裏）堀河の大臣昭宣は妹高子が惟仁親王の愛を蒙る關係もあり、先帝文德の御遺勅により、閏月の御誕生なる兄惟喬親王をおいて、弟君惟仁親王の即位あるべき由を申上げる。八咫鏡が紀名虎の宅と共に不明となり、御劍が行平の手に渡つてゐるので、惟喬親王の命をうけた宗岡方の侍が生駒姫を護衛して來たが、業平の家來業平丸のために誤られて、姫君は虎口と逃れる。（小野山住居）大納言宗岡は、兄君惟喬親王を立てんとして五に讓らぬ。折から堀河館の遺勅と宗岡館の神璽とが、何者かに奪取された注進に人々色を失ふ。母公染殿后から使者として業平が下り、古例に依つて角力によつて皇位を定めることとなる。宗岡の執權荒川宿禰と昭宣の執權斑鳩藤太が、力士として選ばれた。（二幕）

（加茂詣居前）紀有常の息女井筒姫は、社參に事よせて業平と密に出會つたが、又高安の生駒姫も業平を慕つて來た。業平は井筒姫の眼を忍んで、生駒姫と寢殿の中に契る間に、惟喬親王の命をうけた宗岡方の侍が生駒姫を護ひに出せて來たが、業平の家來業平丸のために誤られて、姫君は虎口と逃れる。（小野山住居）

（船番辻）　話物勢伊競　全部五冊　【題材】名題の如く「伊勢物語」即ち業平の傳說によつたものであるが、近松の「井筒業平河内通」（別項）からヒントを得たと思はれる點が多い。

【梗概】（繪入根本による）序幕（内裏）堀河の大臣昭宣は妹高子が惟仁親王の愛を蒙る關係もあり、先帝文德の御遺勅により、閏月の御誕生なる兄惟喬親王をおいて、弟君惟仁親王の即位あるべき由を申上げる。八咫鏡が紀名虎の宅と共に不明となり、御劍が行平の手に渡つてゐるので、惟喬親王の命をうけた宗岡方の侍が生駒姫を護衛して來たが、業平の家來業平丸のために誤られて、姫君は虎口と逃れる。（小野山住居）大納言宗岡は、兄君惟喬親王を立てんとして五に讓らぬ。折から堀河館の遺勅と宗岡館の神璽とが、何者かに奪取された注進に人々色を失ふ。母公染殿后から使者として業平が下り、古例に依つて角力によつて皇位を定めることとなる。宗岡の執權荒川宿禰と昭宣の執權斑鳩藤太が、力士として選ばれた。（二幕）

（加茂詣居前）紀有常の息女井筒姫は、社參に事よせて業平と密に出會つたが、又高安の生駒姫も業平を慕つて來た。業平は井筒姫の眼を忍んで、生駒姫と寢殿の中に契る間に、惟喬親王の命をうけた宗岡方の侍が生駒姫を護ひに出せて來たが、業平の家來業平丸のために誤られて、姫君は虎口と逃れる。（小野山住居）

（船番辻）

境）眞雅僧正は孔雀明王招魂の祕法を凝らして七日滿願の日に迫つた。僧正は宗岡の眼前に持ち出された名虎の石の唐櫃を割り、骸骨を取り出して祈ると、人魂下ると見る間に、忽ち名虎の骸は、眼を開き肉附いて立ち上つた。名虎は宗岡の命をきいて惟喬親王に味方せんと誓ふ。僧正は宗岡等を謀る事によつて、我が宿望の成就と悦ぶ。〔三幕〕（禁裡角力節會）天安三年三月三日、御位定めの角力が催される。宿禰と藤太とが土俵に上つたが、勝敗定まらず、互に勝を譲ると見えた。惟喬親王は怒つて自ら土俵に立つた。と、一度悶絶したが、やがて立ち上つた親王には、名虎の靈がついてゐた。その威力に人々が怖れてゐると、惟仁方から仕丁孔雀三郎が現はれた。（染殿）藤太名代として女房闘の戸、宿禰名代として女房通路が參内する。角力場の模様が次々に報ぜられる。終に孔雀三郎が勝つた。乃ち惟仁親王が入御され、染殿后からは高子を皇后とし、二條の后と申すべしと命が下つたが、親王は父帝の御遺書を見る迄は兄親王に憚り、卽位し給はぬ由が傳はる。藤太は女房が宿禰の妹たる縁で、勝を譲らんとしたとの疑ひをうけて、昭宣の前に切腹する所を止められ、許されて紛失の御遺書を探せと命ぜられる。宗岡は祝儀に參内した。宗岡も、女房の縁にひかれたと見た宿禰を不忠者として成敗せんとしたが、止めて神璽探索を命じた。藤太と宿禰は出會つた。今まで互に内通と見せ、寶物紛失の主人の罪を負ふ策に出たものであつた。兩人は刺合ひ、最期に迫つて寶の在り處を知らせ合つた。御遺書は宗岡の命で河内の住人高安左衞門が、神璽は昭宣が所持と知れる。時に鉦太鼓が響き渡る。惟喬親王反逆の知らせが來る。宗岡と昭宣は斬り合ふ。闘の戸と通路は突合つて倒れた。（同門前）孔雀三郎が寄手を抑へて聞くと、惟仁親王等を討取るために、まづ孔雀三郎を誘ひ出す策であつた。（築地）三郎は二條の后を落す間に、昭宣は宗岡に討たれた。三郎は宗岡を斬り倒し、神璽の寶を手に入れて落ちる途に、現はれたのは名虎の姿であつた。名虎は三郎のために實父なりと敎へ、角力の負も親の情けと告げ、日本國を覆へすべき大望を繼げと示す。そこで三郎は名も伴の良雄と改め、逆賊たるべき覺悟を決めた。その勇む姿の後に現はれた仕丁和田作が劍を拔くと、名虎の姿は忽ち微塵になる。〔四幕〕（高安左衞門下館）有卦祭。生駒姫はこゝにゐて、二條の后を腰元紅井として隱まふので、守護のためとて業平が每夜忍ぶ。惟喬親王から姫の入内を強要してくるが、姫が嫌がるので、阿呆の田舍娘お浪を招き入れて、他國に育つた腹變りの姉と呼んで、身代りに立てようとした。お浪を連れて來たお花は實は御遺書詮議に入り込んだ惟仁君である。左衞門が醫者東元に命じて調合させた毒酒の德利を、お浪は騒ぎ廻つた機に空けてしまつて水を入れた。そのために左衞門は生駒姫との祝言によせて業平を毒殺しようとしたが果さなかつた。更に業平を慕へるお浪をたきつけて、生駒姫といつて二條の后を殺させた。生駒姫附の奴常平が怒つて左衞門を刺した時、左衞門は我が惟仁君へ味方の底意を告げ、生駒姫を呼び出して業平と添ひ遂げよと遺言し、額に隱した御遺書を見せる。業平も神璽の箱を見せると、忽ち左衞門は惡人の本性を顯し、神璽を手に入れる手段と明かし、腹心の常平も祝儀をのべる。高安の養子たる左衞門は生駒姫を女房にすると言ひ放つ。業平は常平が逐つて行く。左衞門は悦び、神璽の箱を開くと、中は御遺書を奪つた時の忍びの狀であつた。驚くその胸板に矢が中つて姿を現はしたのはお浪で、實は融の大臣の愛妾伊勢の侍從が親の仇を討つたのであつた。障子が開かれると、お花の惟仁君を初め、二條の后も見えた。お浪が謀の裏をかいて東元を討つたので、常平も昭宣の弟と判つた。惟仁君は河原の院に入御される。〔五幕〕（禁裡）帝位につく惟喬親王は、惟仁親王の召捕と神器の探索に心がけてゐる。名虎の弟紀有常が參内したので、惟喬親王は、我が心をかけた娘井筒が、業平に通じて行方の知れぬのを難ずる。有常は姫を我が娘として育てたが、實は先帝の姫君ゆゑ、畜生道に陷るべしと警告したが、惟喬親王は肯んぜず、承知せねば首を渡せと命ずる。（葭簀茶屋）在郷娘信夫と連れ立つた聟の豆四郎は、代官が玉水の淵に神器があるために、亭主に見張りを命じて行つたのを立ち聞いて、惟仁君のために禁を犯して探さうと決意する。それを見とがめた亭主を銅鑼の錵八が絞め殺し、豆四郎に氣を許させる。（玉水の淵）信夫が豆四郎に代つて忍び寄る時、水中から現はれた錵八の持つ神鏡に觸つてこれを奪ひ爭ふ。〔六幕〕（春日の里、小よし住家）豆四郎のあとから歸つた信夫は、神鏡を豆四郎に手渡し、我が身の危險も覺悟した。こゝへ惟喬親王の命で有常が下つた。彼は昔兄から勘當をうけた頃、この地に隱れて百姓太郎助と名乘つてゐたのだつたが、その時、小よし夫婦に託した娘信夫の成長を見て、井筒姫の身代りにと心に決めた。信夫の跡をつけて入り込んだ錵八は、殺生禁斷を犯した贅卷の罪科を以て信夫に迫り、神鏡を奪ひにかかつた時、豆四郎が御鏡を奪つて一時逃れに井戸に投げ込んだ。有常は罪科の養母にも及ぶべきを話して、寧ろ姫の身代りに立つて忠を致せと敎へる。豆四郎も、父が阿保親王に恩を報ぜずに終つた身ゆゑ、喜んで業平に代らうとした。二人の首は有常の刄で落ちる。業平はその血の穢れに、井戸から湧き上つた神鏡を取上げる。錵八が有常に謀られて贅卷の刑にあふこととなる。〔七幕〕（行平下館）行平御臺ねざめ御前が、生駒姫を惟喬親王の手討から救つて、猶豫を願つて匿まつてゐたが、惟喬親王から縣廣連が勅使と稱して下り、親王に從はぬ姫の首と共に、寶劍か行平の首かを渡せと强要した。この館は男禁制である故、女の衲襖を被つて忍び込んだ桂金吾は、發見されたので、もと行平に仕へた身で、惟喬方の危險に備へ、御劍を守護する由を打明けた。ねざめ御前は色にこと寄せ、これを知つて劍を受取らうとした時、奪はうとしたのが廣連であつた。すると仕丁の和田作が染殿后の勅使渡會勝成と名乘り、贋の劍と知つて改めて廣連に渡して歸した後に、眞の寶劍の在處を御前に尋ねると、奴の友平が姿を現はし、和田作・金吾は兄弟で廣連一味と見破り、御前に諫める。和田作は更に廣連を斬り倒して兄弟の大望を告げる。御前は友平をめでて惟仁君の在處は奥庭の櫻樹の下と知らす。（奥庭）和田作を名虎の舊臣淵邊春人と見た友平は、我が本名孔雀三郎と名乘つて神璽の箱を見せる時、和田作はこれを奪つて穴に飛び入つた。遠攻の音。三郎は怒つて堂の扉を開けると、名虎の骸が立てられてゐた。驚く後から金吾と見せた在原の行平と、和田作と見せ

皮肉もいへず、結局平凡な滑稽本になつてしまつてゐる。〔小柴〕

初雪（はつゆき）「鳥獸物の譜曲」を見よ。

競伊勢物語（はでくらべいせものがたり）脚本　七幕

時代物　【作者】奈河龜輔　【名稱】角書に「大和に筒井里、河内に生駒山」とあつて、井筒姫・生駒姫が華美を競ふ義を名題に入れたものであらう。よつて同時に出版された淨瑠璃には

が多い。

【梗概】（繪入根本による）〔序幕〕（内裏）堀河の大臣昭宣は妹高子が惟仁親王の愛を蒙る關係もあり、先帝文德の御遺勅により、閏月の御誕生なる兄惟喬親王をおいて、弟君惟仁親王の卽位あるべき由を申上げる。八咫鏡が紀名虎の死と共に不明となり、御劍が行平の手で奪はれてゐるので、殘る神璽を預かる伴の

（加茂鳥居前）紀有常の息女井筒姫は、社參に事よせて業平と密に出會つたが、又高安の生駒姫も業平を慕つて來た。業平は井筒姫の眼を忍んで、生駒姫と駕籠の中に契る間に、惟喬親王の命をうけた宗岡方の侍が生駒姫を擄ひに寄せて來たが、業平の家來峯丸のために謀られて、姫達は虎口を逃れる。〔小野山修驗

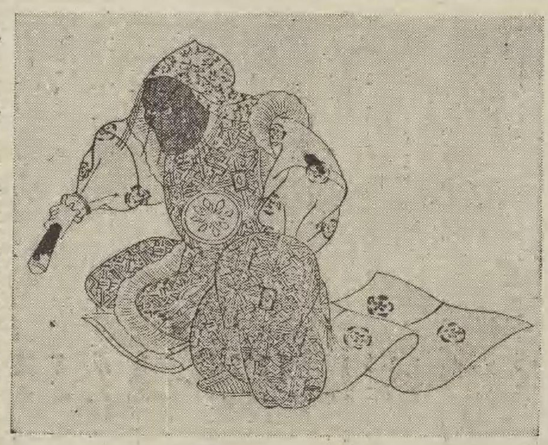
た小野の篁が出て、惟仁君の仁心により名虎の成佛を聞かせたので、孔雀三郎も發心して大和に籠り、柿の木紀僧正と名乘る。惟仁君はめでたく御即位になる。

【構想】題材は既に並木正三に「惟喬惟仁御位諍」として脚色されてゐるが、これを時代物の戯曲として完成したのが本作である。時代物的の筋の紛糾に興を求めた結果、複雑を極めた構想を示したのであるが、時代の世界内にありながら、多様な人物を點出した爲めに、場面の照應を得て、巧妙な作劇に成功したと思ふ。兩親王の御位爭に事件を說いたのであるが、かの仁德天皇の傳などによつてか、弟君惟仁親王が兄君に對して謙讓の意を示されるために、寧ろ惟喬親王の專恣と周圍の抗爭が脚色の展開となつて現はれた觀がある。又その抗爭は表面の主題であつて、やがて孔雀三郎の反逆事件に轉ずる。このために今まで惟仁方の忠臣だつた彼を俄然一轉させる手段をとつた。而も表面の主題が持續するので、事件は多端に亙るのである。策謀の上に策謀が架せられて、七幕目の如きは、最後に至るまで人物の活動の主眼が那邊にあるやを判別し難いほどである。このために脚色は奔放に走り、作者自らその幻想に醉ふかに感ぜられる。七幕目の桂金吾が屋敷の女から門外に突出された擧句、女裝して忍び込む如き、或はねざめ御前が彼の本心をひくためにしなだれる如き、金吾實は在原の行平たるを知り、全く呆然たらざるを得ぬ。惡が善と見える上に、實は更に上層の惡である等、二重三重と積んだ點は、龜輔の作品の最も特色あるものと思はれる。而も金吾の如きに見ても、時代的硬骨に終らず、又行平なるが故の脆弱にも流れず、底深さと圓滑さを兼ねた興味ある人物が描かれてゐる。加茂鳥居前の如き濡れ場と小野山の凄みとの對照などの例に見るも、氣分の配合もよく成功したと思ふ。信夫の條には、「日本第一和布苅神事」とか、孔雀三郎の條には、「桑名屋德藏入舟物語」（別項）とか、部分的に正三の作の影響も折々指摘せられるが、一體に和事味を加へた點に、龜輔作の意義は認められる。【影響】龜輔名作の一と呼ばれただけに、上方には非常な當り作で、幕末まで絶えず上演されてゐた。但し餘り大作であるため、多くは場數が半減されたりした。また孔雀三郎と惟喬親王とは獨立して後世に種々の作中に活きた。初演と同時に四月五日、讀本淨瑠璃「競伊勢物語」五段二册が刊行されたが（巻末作者連名は、辰岡萬作・吉井勢平・奈河眞藏・奈河丈助）、八月十二日には、京都都萬太夫座で興行されてゐる（太夫は豐竹島太夫・竹本春太夫）。院本「增補競伊勢物語」（八月十二日刊）は、この興行に關係があるかとも想はれる。現に文樂座に傳はるものは「增補」である。

【參考】近世戯曲研究守隨憲治〇歌舞伎圖說守隨・秋葉〇近世邦樂年表（義太夫節之部）〔守隨〕

艷容女舞衣（はですがたをんなまいぎぬ）「笠屋三勝廿五年忌」を見よ。

拔頭（ばとう）　雅樂舞曲　【名義】印度語 Pedu の馬の舞よりこの名は來たか。【異稱】「撥頭」「髮頭」「鉢頭」【性質】林邑樂。古樂、中曲。乞食調の曲であるが、今は太食調に屬する。拍子十五。舞があり一人で舞ふ。舞者は胡服を着け、大なる假面に長い髮あるものをかぶり、手に桴を持つて格鬪せる態をなして舞ふ。答舞には必ず「還城樂」を用ひる。【沿革】天平八年に林邑國の僧佛哲が我が國に傳へたところの林邑八樂の一。「舊唐書」及び「文獻通考」には、「撥頭出二西域一、胡人爲二猛獸一所レ噬、其子求レ獸殺レ之、爲二此舞一以象也」とある。この說が最も多く行はれてゐる。「樂府雜錄」には「鉢頭、昔有レ人、父爲二虎所一レ傷、遂上レ山尋二其父屍一、山有二八折一、故曲八疊、戲者被髮素衣、面作レ啼」とあり、「大日本史」はこれを引いてゐる。蓋し拔頭・撥頭・鉢頭、いづれも印度語の音譯であつて、支那も亦これを西域を通じて印度から傳はつたものであることは疑ひないが、そこでこれを印度語に就いて求めるに、大槻如電翁はバルト、即ち格鬪の義から出たと言つてゐるが確證はない。高楠順次郎博士は、吠陀（ベーダ）神話に名高い Pedu の王は、天から殺蛇の名馬 Paidu を授かり、奮鬪して惡蛇を斃したことを表はしたところの印度舞曲であらうと說いてゐた。即ち拔頭はその名馬の奮戰の狀で、頭にある長髮は馬の鬣（たてがみ）を表はし、作啼は馬の嘶きを表はし、靑龍八折は驍馬の飛躍を表はしたものである。かく見ればこれと必ず番舞になつてゐるところの還城樂が、同じく胡服を着て蛇を退治し、これを持つて舞ふ意味が明瞭となり、即ちこれ Pedu の王が、その馬の倒したる蛇を得て喜ぶ狀を表はしたものであることが知られる。支那に於てこれを父を殺した猛獸を退治するなどと稱するのは、西域の傳說を誤り傳へたものであるに相違ない。〔田邊〕



拔頭

花筏巖流島（はないかだがんりうじま）「敵討巖流島」を見よ。

花茨胡蝶廼彩色（はないばらこてふのいろどり）　脚本　五幕十一場　散切物　【作者】勝能進・諺藏父子合作。主として諺藏が執筆したと推測される。【別名題】今姐妃浪花開書　【初演】明治十八年一月大阪角の芝居。中の芝居が年末に出火したので、應急策として角の芝居へ移轉して興行したものか。【役割】未詳。但し出勤俳優は、鴈治郎・三五郎・巖笑・芝鶴・若松・八百三郎・猿之助・吉三郎・璃寺・梅太郎・みんし等である。【諸本】勝諺藏作演劇脚本集第一册所收。【題材】此花新聞（一說に大阪朝日新聞）の連載小說。

【梗概】〔序幕〕支那人泰祥福は酒宴の最中、妾のお辰と鳥羽屋の手代安二郎に、祕藏の名鏡を見せる。泰祥福の手代でお辰の亭主同樣の三浦芳兵衞を邪魔物あつかひにして、暇を出させてしまつたお辰は、福と共に寢室に入る。更紗の緞帳のある寢臺。お辰は綽名の「妲妃」となり、名鏡を掠め取つて逃げようとするが、下女お金に見咎められたので殺して了ふ。そして情人佛蘭西領事館の馬丁鷲の金太の手を借りて自分とお金との衣服を交換し、傍に安二郎の紙入を落して置く。その時不圖目覺めた福をも殺害する。手代支那人チヤリイはパアパアと驚愕してゐる。〔二幕〕驚愕する夜の日參してお辰に渡す）、お辰の誤過も輕くなるであらうと自訴を勸めて歸る。お辰は芳兵衞と良助に百圓を午後十時までに遊蓮橋際で手渡しすると言ふ。薄情を怨む金太とは再び情交を溫め、二人で芳兵衞・良助を遊蓮橋で殺す。そして一先づ和歌山邊へ遁走すると決めて兩人はそれ〴〵別れる。高橋と三人三樣のだんまり模樣。〔四幕〕判人權兵衞はお秋にお蝶の事を談じてゐる。漁師八藏が川中より助けて來たお蝶は、女房お秋に取つて舊主の娘だつたので、深切に介抱してゐるからである。お蝶故に親久兵衞は、身代金の代償として六ケ月戀役に行つてゐる。併し請判の權兵衞はチヤリイにお蝶を世話すれば穩便に濟ますと言ふ。否と言へば交番所へと脅嚇する。この時認めて逃げて了ふ。お蝶は和歌の短册の事、日本橋雪夜の災難等を物語り、安二郎は常磐錦の守袋に六波羅寺の觀音像が入れてあり、それが兄金太郎と再會の時の證據との話をする。お辰と金太が現はれて懺悔し、兄弟姉妹と分明、一同は深い因緣因果の寄合ひと悲歎する。八藏夫婦が兩人を落さうとする時、駈け付けた高橋安兵衞と鷲の金太との最初であつて最後の親子の對面がある。又お辰は名鏡を高橋に渡してチヤリイに屆けるやうに依頼し、父久兵衞の戀役の苦患を救ふため自訴する覺悟を示す。

【解說】能進父子の特色である新聞連載小說を脚色した散切物である。本脚本では、神戸市・支那人商館・揚弓店等の場面に、南京屋敷に誘ひ入れ、櫻の枝を與へ、結局寢込んでしまふ。住持が歸つて來て見るとこの有樣に、新發意を起して橫着者めと折檻するを、新發意は許させられい許させられいと逃げ込む。【解說】「禪鳳雜談」第二にも、「西行櫻の後、をしほの後、花折といふ狂言をする」と見えて居り、筋は尋常ながら古さうな狂言である。但し大藏流で玄惠の作といふ傳說は如何なものであらう。花見を扱つた狂言には、外に「花盜人（ぬすびと）」がある。この方は花好きな者が或る寺の花園に闖入し、祕藏の櫻を見て歌ひ興じてゐる所を新發意や住持に發見されたが、風流の心に免じて許され、皆共々に酒宴をする事となり、肴舞に、あはれ一枝を花の袖に手折りてと言ひながら花を折つて追ひ入りに

本橋。易者高橋と上總屋久兵衞とが世帶話。高橋には二人の倅があつて、兄金太郎は妻離別の際に附けてやり音信不通、弟安二郎は鳥羽屋に奉公してゐる。久兵衞には二人の娘、姉お辰は家出をなし、妹お蝶は楠公神社内の楊弓店に奉公してゐる。互に降り積る雪と苦難の世の中を嘆息する。判人見透しの權兵衞が、速惡のお熊から上玉の娘分を買取る約束で、此處で待つ間を好奇の易占ひ。久兵衞も娘お辰が家出した時、書き殘して行つた自筆の短册を見せる。その墨色で高橋は惡くなれば底知れぬ程の女になると判斷する。町小使兵庫政はお蝶が店を出奔したので、親娘謀計の事と思つて久兵衞を警察へ連行する。往來

本橋。易者高橋と上畑屋久兵衛とが世帯話。高橋には二人の伜があつて、兄金太郎は妻離別の際に附けてやり音信不通、弟安二郎は鳥羽屋に奉公してゐる。久兵衛には二人の娘、姉お辰は家出をなし、妹お蝶は楠公神社内の楊弓店に奉公してゐる。互に降り積る雪と苦難の世の中を嘆息する。判人見透しの權兵衛が、速惡のお熊から上玉の娘分を買取る約束で、此處で待つ間を好奇の易占ひ。久兵衛も娘お辰が家出した時、書き殘して行つた自筆の短册を見せる。その墨色で高橋は惡くなれば底知れぬ程の女になると判斷する。町小使兵庫政はお蝶が店を出奔したので、親娘謀計の事と思つて久兵衛を警察へ連行する。往來跡絶えた雪の中をお辰は行末の事を考へながら來る。其處へお熊に伴はれて人力車に乘つたお蝶は、戀人安二郎が獄舍に苦しむ寃罪を助けるための金子調達に苦心してゐる。それに附け込んでお熊が駈落を教唆し、權兵衛へ賣渡す積りなのである。がお蝶の判人が權兵衛と聞き、狼狽して他の周旋人を探しに行く。様子を立ち聞くお辰は、お蝶、妹と知らずに絞殺して川へ投げ込み、人力車の母衣の中へ入つてお蝶になつて了ふ。この時名鏡を落したが心付かぬ。權兵衛はこれが約束の女と思つて連れ歸る。易者が名鏡を拾ふ。〔三幕〕金滿家山城屋清藏を旦那にしてゐる藝者小蝶がお辰である。三浦芳兵衛と鷲の金太が、商館事件を種にゆすりに來るが、飽く迄もしらを切る。廻し男の良助も元芳兵衛と朋輩なので口を添へる。其處へ易者高橋が内談ありとて人を遠ざけ、二男の安二郎が嫌疑を受けて下獄してゐるが、當時の姿お辰が出現すれば、安二郎も助かり、名鏡も出た事ゆゑ（高橋が持參してお辰に渡す）、お辰の罪過も輕くなるであらうと自訴を勸めて歸る。お辰は芳兵衛と良助に百圓を午後十時までに遊連橋際で手渡しすると言ふ。薄情を怨む金太とは再び情交を溫め、二人で芳兵衛・良助を遊連橋で殺す。そして一先づ和歌山邊へ遁走すると決めて兩人はそれ〴〵別れる。高橋と三人三様のだんまり模様。〔四幕〕判人權兵衛はお秋にお蝶の事を談じてゐる。漁師八藏が川中より助けて來たお蝶は、女房お秋に取つて舊主の娘だつたので、深切に介抱してゐるからである。お蝶故に親久兵衛は、身代金の代償として六ケ月懲役に行つてゐる。併し請判の權兵衛はチヤリイにお蝶を世話すれば穩便に濟ますと言ふ。否と言へば交番所へと脅嚇する。この時無實と判明して出獄した安二郎が、權兵衛の行跡を告訴すると逆捩を食はす。お辰は茶屋で午睡して夢を見る——卽ち懲役場女檻の洗濯場の光景。新入りのお辰が仕事慣れず監獄の傳告者を勤める笠木お長を初め、多くの女囚に嘲笑され打擲される。それを掃除囚人になつてゐる久兵衛が助け、結局親子と分り、因果な薄倖な身の上に泣く。——目覺めて感慨無量のお辰、不圖繪馬堂の短册の額に氣付く。それは家出した時殘した短册であり、願主は堺の漁師奈須八藏とある。訪問して様子を尋ね、改心せねばならぬと決心する。〔大詰〕八藏宅に厄介になつてゐるお蝶・安二郎を、探偵巡査はお辰・金太と誤信し追跡して來るが、人違ひと分り歸る。お辰が空癪を裝つて入り込み休息する。權兵衛の案内でチヤリイはお蝶を妾にと執心するが、八藏は拒絶する。權兵衛は請判を拔かぬうちは自分にも權利があるとて强談づくとなる時、お辰の姿を認めて逃げて了ふ。お蝶は和歌の短册の事、日本橋雪夜の災難等を物語り、安二郎は常磐錦の守袋に六波羅寺の觀音像が入れてあり、それが兄金太郎と再會の時の證據との話をする。お辰と金太が現はれて懺悔し、兄弟姉妹と分明、一同は深い因緣因果の寄合ひと悲歎する。八藏夫婦が兩人を落さうとする時、駈け付けた高橋安兵衛と鷲の金太との最初であつて最後の親子の對面がある。又お辰は名鏡を高橋に渡してチヤリイに屆けるやうに依頼し、父久兵衛の懲役の苦患を救ふため自訴する覺悟を示す。

【解說】能進父子の特色である新聞連載小說を脚色した散切物である。本脚本では、神戸市・支那人商館・楊弓店等の場面に、南京屋敷の洋妾上り、領事館の馬丁、商法家の手代、南京下婢等の人物が活躍し、明治初期の風俗畫が展開してゐる。殊に四幕目の懲役場の女檻内洗濯場は、當時の監獄を寫實的に描出した事に於て、默阿彌の「四千兩小判梅葉」（別項）同様に珍奇とするに足りる。併しながらそれだけの意味で演劇としての價値はない。

【備考】歌舞伎新報（四九七號）には、「神戸楠公神社前」といふ一場面に序幕と明記してあるが、これは脚本集の場割にはない。〔尾澤〕

花折（はなをり）

能狂言【別名】花折新發意（はなをりしんぼち）【格式】内神文濟相傳の部（大藏流）。

【梗概】洛西の或る寺の住持が、新發意に境内の櫻を見物に來る人があつたら禁制ぢやと言へと言ひ殘して外出する。そこで花見の連中は境内に入るのを斷られ、垣の外で花を見ながら花見の酒宴を始め、歌ひつ舞ひつする。新發意は垣越しの面白さに酒を一杯二杯と無心し、果は上々の機嫌になつて見物人を境内に誘ひ入れ、櫻の枝を與へ、結局緣込んでしまふ。住持が歸つて來て見るとこの有様に、新發意を起して横着者めと折檻するを、新發意は許させられい許させられいと逃げ込む。

【解說】「禪鳳雜談」「道目錄」第二にも、「西行櫻の後、をしほの後、花折といふ狂言をする」と見えて居り、筋は尋常ながら古さうな狂言である。但し大藏流で玄惠の作といふ傳說は如何なものであらう。花見を扱つた狂言には、外に「花盜人（ぬすびと）」がある。この方は花好きな者が或る寺の花園に闖入し、祕藏の櫻を見て歌ひ興じてゐる所を新發意や住持に發見されたが、風流の心に免じて許され、皆共々に酒宴をする事となり、肴舞に、あはれ一枝を花の袖に手折りてと言ひながら花を折つて追ひ入りになるものである。尤も正本に據つては、舞終つて暇乞して歸ることになつてゐるものもある。壬生狂言の「花盜人」は「花折」と「花盜人」とを綯ひ交ぜにした狂言らしい。〔瀧田〕

花笠文京（はながさぶんきやう）

戲作者・脚本作者【初代】〔姓名〕東條魯介。脚本作者としては花笠魯介を稱した。〔別號〕鈍亭・魯鈍翁半空・豐島新造（藏）・代作屋大作（朔）・李園春色臺・三芝居士〔生歿〕天明五年生れ、萬延元年（一二五二〇）三月三日歿す。享年七十六〔法名〕鄰峰魯鈍信士〔墓所〕東京市深川靈巖寺〔閱歷〕高田藩の侍醫東條龍淡の長男、儒士東條琴臺の兄。壯年の頃、家を脫して所々を漂泊したが、劇を好み、四代目鶴屋南北（別項）の門に入り、狂言作者となりて花笠魯介と號した。學問もあり、才筆でもあつたが、歌舞伎劇の作意に馴れず、立作者の位置には上らずして終つた。蜀山人の愛妾を妻とし、同人の勸めで十八大通の一人なる文京の名を襲ひ、又李園と

も云つた。草雙紙に於ける俳優の代作、諸店報條の執筆等を主に、傍ら文人墨客と交はつて書畫會等に出席してゐたが、江戸では迎へられぬので、妻と共に大阪へ赴き、角の芝居へ出勤、京阪書肆より發兌する戯作の著述を兼ねた。七代市川團十郎が來阪に際し、その歸東と相前後して江戸へ戻り、三代尾上菊五郎附の作者となり、師の南北に從つて芝居へ出勤してゐたが用ひられず、天保四年、三芝居士の名を以て「役者必讀妙々痴談」を著はしたところから菊五郎の怒りを買ひ、江戸の劇界を追はれて再び上京、天保の末江戸に歸り、二代立川焉馬を介して菊五郎に詫を入れ、弘化元年中村座に再勤、豐島新造と稱した。作者の傍ら自宅に「御誂案文認所」の札を掲げて諸文の代作に從事したが、生來の放縱から親戚友人に交を斷たれ、安政の震災より甚しく貧困に陷り、遂に深川佃の辻番所で窮死した。辭世「山の端に白雲と見し花は根に歸りし後の春の古里」。門人に假名書魯文がある。

【著作】（草雙紙）玉藻前化粧姿見（文政五年）〇結合緣房糸（同六年）〇皿屋敷反古合紙（同七年）〇初便廓言傳（同年）〇仇緣誓紙治（同年）〇流行歌川船合奏（同八年）（以上三代尾上菊五郎の代作）〇繽紛博多小女郎（文政八年）（五代瀨川菊之丞の代作）〇皇國文字娘席書（同九年）〇兒櫻法花房（同年）〇名殘花四谷怪談（同年）〇尾上松綠百物語（同年）（以上三代菊五郎の代作）〇志賀春黃金漣（文政十年）（七代團十郎の代作）〇想合對菅笠（同年）〇誂染楓絹川（同年）〇枝珊瑚京打笄（同年）〇四谷怪談後日譚（同年）〇繪合雙白濤（文政十一年）（以上三代菊五郎の代作）〇釜ケ淵水燈石川（翻水四年）（以上明治十七年）。【以上石川（巖）】

【參考】歌舞伎新報（五四四號）〇私の見た明治文壇 江見水蔭 〇明治以前の寫實小說 石川巖（日本文學講座）

花笠鬘助（はながさ ろすけ）「花笠文京」を見よ。

花笠（はながさ）「狂女物の諸曲」を見よ。

花笠金水 人情本 五編十五册 【作者】四時遊觀と角書がある。「古今集」の「花がたみめならぶ人の數多あれば忘られぬらん數ならぬ身は」に取つた命名。【刊行】天保十二年。第五編はその序に依り、同十三年或は弘化元年頃であらう。【諸本】人情本叢書所收。

松亭金水（まつのていきんすい） 人情本 五編十五册 【作者】四時遊觀と角書がある。「古今集」の「花がたみめならぶ人の數多あれば忘られぬらん數ならぬ身は」に取つた命名。【刊行】天保十二年。第五編はその序に依り、同十三年或は弘化元年頃であらう。【諸本】人情本叢書所收。

花笠鬘助（はながさ ろすけ） 「花笠文京」を見よ。

花筐（はながたみ） 「狂女物の諸曲」を見よ。

花筐（はながたみ） 人情本 五編十五册 【作者】四時遊觀と角書がある。「古今集」の「花がたみめならぶ人の數多あれば忘られぬらん數ならぬ身は」に取つた命名。【刊行】天保十二年。第五編はその序に依り、同十三年或は弘化元年頃であらう。【諸本】人情本叢書所收。

花笠文京（はながさ ぶんきょう） 【一代】【姓名】渡邊義方 【別號】灣白童子・京文舍文京・代作屋文京 【生歿】安政四年に生れ、大正十五年歿す。享年七十。【閲歷】東京の人、魯文から讓られて初代の號をその儘襲名したものださうである。いろは新聞・繪入自由などの記者として續物を書いてゐたが、その後記者生活を廢めて實業界に入り、一時は相當に蓄財したが、或る事業に失敗して落魄を極め、又精神に異狀を來し、大正十五年悶々の間に死んだといふ。

【著作】名廣澤邊萍九册（明治十三年）（廣澤參謀の暗殺事件は附たりで、その前後に於ける勤王佐幕兩黨の軋轢を中心に、志士等の活躍した逸事が大部分を占めてゐる）〇冬兒立閣の鴟九册 〇雛の菊操競九册 〇金花胡蝶幻九册（以上明治十三年）〇明治天一坊二册 〇湖水の口碑三册 〇赤繩奇緣五月雨日記一册 〇開明新說 聖代の球諸二册（以上明治十六年）〇復讐美談樞の錦繡一册 〇新編嘯阿虎一册 〇花王樹草紙一册 〇四季の花籠一册（以上明治十七年）。【以上石川（巖）】

【參考】歌舞伎新報（五四四號）〇私の見た明治文壇 江見水蔭 〇明治以前の寫實小說 石川巖（日本文學講座）

花笠文京（はながさ ぶんきょう） 【一代】【姓名】渡邊義方 【別號】灣白童子・京文舍文京・代作屋文京 【生歿】安政四年に生れ、大正十五年歿す。享年七十。【閲歷】東京の人、魯文から讓られて初代の號をその儘襲名したものださうである。いろは新聞・繪入自由などの記者として續物を書いてゐたが、その後記者生活を廢めて實業界に入り、一時は相當に蓄財したが、或る事業に失敗して落魄を極め、又精神に異狀を來し、大正十五年悶々の間に死んだといふ。

【著作】名廣澤邊萍九册（明治十三年）（廣澤參謀の暗殺事件は附たりで、その前後に於ける勤王佐幕兩黨の軋轢を中心に、志士等の活躍した逸事が大部分を占めてゐる）〇冬兒立閣の鴟九册 〇雛の菊操競九册 〇金花胡蝶幻九册（以上明治十三年）〇明治天一坊二册 〇湖水の口碑三册 〇赤繩奇緣五月雨日記一册 〇開明新說 聖代の球諸二册（以上明治十六年）〇復讐美談樞の錦繡一册 〇新編嘯阿虎一册 〇花王樹草紙一册 〇四季の花籠一册（以上明治十七年）。【以上石川（巖）】

【梗概】鎌倉馬場町の富豪小島屋彌左衞門の獨息子松次郎は、出入の小道具屋合浦や珠吉、幇間三八を連れて散歩する折柄、幼時の乳母お鳥に逢ひ、懷かしさにその家に行く。老婆は娘お芳と二人暮し、奉公人口入業を營んでゐる。やがて酒宴となり、松次郎はお芳の美しさを愛でながら流石に打明けかね、來合せた美人お龜をお鳥の口入で閨者とする事となつた。父彌左衞門は好人物、家業は萬事番頭任せ、家事は針婦上りの後妻お六任せである。お六にはお絹と云ふ娘がある。主人に賴んで引取り、今はこの家の娘同樣に待遇されてゐる。お六は娘を松次郎の嫁にしたく思ひ、お絹も彼を憎からず思つてゐるのを幸に、頻りにお絹を勸めて松次郎に取入るやうにさせるが、彼はお六の專横を不快に思つてゐるので、一向相手にしなかつた。鎌倉雪の下に大きな質兩換店がある。これは彌左衞門の妹の嫁した家で、良人が死んで妙心と呼ぶ尼になつてゐるが、男まさりのしつかり者、支配人忠助を相手に家は繁昌する許りであつた。長男は長五郎、町人に似ず武張つた事が好きで、俠客肌の男である。長女はお鶴と呼び今年十七歳であるが、重き疱瘡のために顏は醜かつたが、心ばへの勝れた娘である。松次郎を深く慕ふ餘り病氣になつてゐるのを深切に慰めに來るのは、幼友達の三味線の傍輩弟子で貧しい古着屋の娘お寅であつた。お寅はお鶴の書き置いた戀歌で、松次郎への戀を悟りて同情し、强ひて勸めて彼への艷書を書かせ、密かに小僧鼈松に持たせてやる。松次郎はお鶴の手跡を知らず、豐松に聞けばお寅からと云ふので、お寅の戀文と誤解し、喜んで返事を書く。お寅はお鶴と共に被いて見れば、角の

【梗概】鎌倉馬場町の富豪小島屋彌左衞門の獨息子松次郎は、出入の小道具屋合浦や珠吉、幇間三八を連れて散歩する折柄、幼時の乳母お鳥に逢ひ、懷かしさにその家に行く。老婆は娘お芳と二人暮し、奉公人口入業を營んでゐる。やがて酒宴となり、松次郎はお芳の美しさを愛でながら流石に打明けかね、來合せた美人お龜をお鳥の口入で閨者とする事となつた。父彌左衞門は好人物、家業は萬事番頭任せ、家事は針婦上りの後妻お六任せである。お六にはお絹と云ふ娘がある。主人に賴んで引取り、今はこの家の娘同樣に待遇されてゐる。お六は娘を松次郎の嫁にしたく思ひ、お絹も彼を憎からず思つてゐるのを幸に、頻りにお絹を勸めて松次郎に取入るやうにさせるが、彼はお六の專横を不快に思つてゐるので、一向相手にしなかつた。鎌倉雪の下に大きな質兩換店がある。これは彌左衞門の妹の嫁した家で、良人が死んで妙心と呼ぶ尼になつてゐるが、男まさりのしつかり者、支配人忠助を相手に家は繁昌する許りであつた。長男は長五郎、町人に似ず武張つた事が好きで、俠客肌の男である。長女はお鶴と呼び今年十七歳であるが、重き疱瘡のために顏は醜かつたが、心ばへの勝れた娘である。松次郎を深く慕ふ餘り病氣になつてゐるのを深切に慰めに來るのは、幼友達の三味線の傍輩弟子で貧しい古着屋の娘お寅であつた。お寅はお鶴の書き置いた戀歌で、松次郎への戀を悟りて同情し、强ひて勸めて彼への艷書を書かせ、密かに小僧鼈松に持たせてやる。松次郎はお鶴の手跡を知らず、豐松に聞けばお寅からと云ふので、お寅の戀文と誤解し、喜んで返事を書く。お寅はお鶴と共に被いて見れば、角の

役者の行跡を批判嘲罵したもの）（妙々痴談參照）〇役者必讀後の正夢（同年）（別項）。【以上湯美】

【二代】【姓名】渡邊義方 【別號】灣白童子・京文舍文京・代作屋文京 【生歿】安政四年に生れ、大正十五年歿す。享年七十。【閲歷】東京の人、魯文から讓られて初代の號をその儘襲名したものださうである。いろは新聞・繪入自由などの記者として續物を書いてゐたが、その後記者生活を廢めて實業界に入り、一時は相當に蓄財したが、或る事業に失敗して落魄を極め、又精神に異狀を來し、大正十五年悶々の間に死んだといふ。

【著作】名廣澤邊萍九册（明治十三年）（廣澤參謀の暗殺事件は附たりで、その前後に於ける勤王佐幕兩黨の軋轢を中心に、志士等の活躍した逸事が大部分を占めてゐる）〇冬兒立閣の鴟九册 〇雛の菊操競九册 〇金花胡蝶幻九册（以上明治十三年）〇明治天一坊二册 〇湖水の口碑三册 〇赤繩奇緣五月雨日記一册 〇開明新說 聖代の球諸二册（以上明治十六年）〇復讐美談樞の錦繡一册 〇新編嘯阿虎一册 〇花王樹草紙一册 〇四季の花籠一册（以上明治十七年）。【以上石川（巖）】

【參考】歌舞伎新報（五四四號）〇私の見た明治文壇 江見水蔭 〇明治以前の寫實小說 石川巖（日本文學講座）

【梗概】鎌倉馬場町の富豪小島屋彌左衞門の獨息子松次郎は、出入の小道具屋合浦や珠吉、幇間三八を連れて散歩する折柄、幼時の乳母お鳥に逢ひ、懷かしさにその家に行く。老婆は娘お芳と二人暮し、奉公人口入業を營んでゐる。やがて酒宴となり、松次郎はお芳の美しさを愛でながら流石に打明けかね、來合せた美人お龜をお鳥の口入で閨者とする事となつた。父彌左衞門は好人物、家業は萬事番頭任せ、家事は針婦上りの後妻お六任せである。お六にはお絹と云ふ娘がある。主人に賴んで引取り、今はこの家の娘同樣に待遇されてゐる。お六は娘を松次郎の嫁にしたく思ひ、お絹も彼を憎からず思つてゐるのを幸に、頻りにお絹を勸めて松次郎に取入るやうにさせるが、彼はお六の專横を不快に思つてゐるので、一向相手にしなかつた。鎌倉雪の下に大きな質兩換店がある。これは彌左衞門の妹の嫁した家で、良人が死んで妙心と呼ぶ尼になつてゐるが、男まさりのしつかり者、支配人忠助を相手に家は繁昌する許りであつた。長男は長五郎、町人に似ず武張つた事が好きで、俠客肌の男である。長女はお鶴と呼び今年十七歳であるが、重き疱瘡のために顏は醜かつたが、心ばへの勝れた娘である。松次郎を深く慕ふ餘り病氣になつてゐるのを深切に慰めに來るのは、幼友達の三味線の傍輩弟子で貧しい古着屋の娘お寅であつた。お寅はお鶴の書き置いた戀歌で、松次郎への戀を悟りて同情し、强ひて勸めて彼への艷書を書かせ、密かに小僧鼈松に持たせてやる。松次郎はお鶴の手跡を知らず、豐松に聞けばお寅からと云ふので、お寅の戀文と誤解し、喜んで返事を書く。お寅はお鶴と共に被いて見れば、角の

老屋の前迄來てくれとある。お鶴の病氣で外出の出來ないのを知りながら來いとは少し變だとは思つたが、善意に解してお寅に來てほしいのであらうと推し、お寅が出かけてその料理屋で出會つた。そこで初めて松次郎の誤解が分つて双方てれた。お寅も憎からず思ふ松次郎のこと故、心嬉しくは思へどお鶴への義理を思ひ、お鶴の切なる思を打明ける。どうして知つたか、圍ひ者のお龜が次の部屋に珠吉・三八を連れて上り、聞えよがしに罵り、亂酒に及んで騒ぐ。松次郎は心中憤つたけれども、お寅の手前もあり、おとなしくその儘歸つた。併しお龜を漸く疎んずるやうになつた。お寅はお鶴に逢ひ、松次郎が彼女の病氣が全快すれば、機を見て緣談を申込むと語つたとうまく言ひ繕ふ。お鶴もこれに勵まされて元氣付くやうになつた。松次郎はお龜への手當は每月變らず送りながらも通はずなり、お芳を圍ひ、お龜に當てつけて立派な家を造つてやり、お鳥の口入業も廢めさせ安樂に暮らさせた。長五郎は名越に別莊を求めて其處で盛大な書畫會を催したので、お寅・お鶴も出かける。お絹も行き、松次郎はお芳を連れて行く。たま〳〵松次郎とお鶴とだけが別室に殘つた。お鶴はお寅に勵まされてゐたので、思ひ切つて、自分の胸を打明ける。松次郎は浮氣心で外に女が出來てもよいかと言ふ。お鶴はそんな事は構はぬと言ふ。そこで松次郎も何れ緣談を申込まうと約束する。その夜皆が泊る事になつた。皆眠つたがお寅は獨り別間で醉ひ臥した松次郎を起しに行き、圖らずも二人は戀仲になつてしまつた。二人はそれから屢々密會するうち、いつかお寅は懷姙した。お寅は勿論なく投身したが、丁度長五郎が夜

鯛打ちに行つてゐたのに救はれた。その殘した遺言がお六の手に入つた。これを種に彌左衞門を脅きつけたので、彼は怒つて松次郎を荏土の出店へやつてしまつた。お龜はその間に珠吉と通じたことがわかり、松次郎はこれを幸に緣を切つてしまつた。荏土に來た松次郎はお鳥の姪でお芳の從妹なる小濱に逢ひ、これと戀仲になつてしまつた。お芳は松次郎からの仕送りも絕えて暮しに困り、母お鳥は又元の如く奉公人口入業を始めた。小島屋の番頭實藏と長五郎といろ〳〵彌左衞門に說いて怒を和らげ、事件を起したお六を十分に懲らし、その娘お絹は長五郎が預る事になり、松次郎は家に呼び歸され、お鶴とめでたく結婚した。

勤めたのは、寬政五年芭蕉百回忌の頃であつた。その祥月の十月を繰り上げて、陽春三月の十二日（忌日）を以て芭蕉堂の法會を營み、俳諧連歌（連句）を興行し、その懷紙を諷吟奉獻する行事を花供養と稱したのである。恐らく釋尊降誕會の花供養から出た名稱であらう。のち南無庵が闌更系を標榜する一種の稱號となつて芭蕉堂を離れたので、この花供養は芭蕉堂代々の庵主によつて行はるゝ事になつたのである。その庵主は闌更・蒼虬・千崖（この時分離す）・朝陽・公成・壺公・南德・楓城・梅雄・楓崖・露翠・藍水（現代）の世代で、年々舊例によつて花供養を行つてゐるのである。その第五代の公成は長門の人河村氏で、木戸孝允等と交があり、勤王志士の間を斡旋し、芭蕉堂をその

は一子相傳である。

【梗概】殿が妻の上臈の目をかすめ、坐禪に事よせ、冠者に身代りさせ、情人花子のところへ通ふ。やがて上臈は、主の坐禪を氣の毒がつて坐禪姿を見に來る。さうして遂に坐禪衣を剝ぐと、これはしたり冠者であるので、且つ驚き且つ怒り、冠者から事の次第を聞いて、冠者に代つて座禪衣を着る。それとは知らぬ殿は、數々の小歌を諳ひ、花子に對面の首尾など語り、上機嫌で、さあ衣を取れ、入りかはるぞと言ふとたんに、冠者ならぬ上臈であるので、殿は驚愕措くところを知らず。上臈、やるまいぞ〳〵で追ひ込む。

【影響】近松の淨瑠璃「凱陣八島」の四段目に殿が判官、冠者が辨慶として扱はれてゐる。

敎。【題材】江戸の町人の艶麗生活、又遊戲生活を書いたもので、茶番の脚色と、その實演の失敗を描出したものである。三田村鳶魚氏はその著、「娛樂の江戸」に於て、井上蝸圍翁等の說を引き、「八笑人」には各々モデルのあつたことを述べてゐる。例へば「八笑人」の卒八は瀧亭鯉丈自身であつて、彼は都八造と稱して一中節の三味線彈きであり、知友の間に都八と言はれてゐた。それを擬して卒八と名附けたなどと說いてゐる。江戸人の生活の一面を寫したものであるから、多少モデルらしいものもあつたらうが、その人物の名前は容貌・性格・趣味等から附けたものらしく、何れも眞面目な意味のものではなからう。卒八は反齒から、安波太郎は菊石から、眼七は片眼から、

綱打ちに行つてゐたのに救はれた。その殘した遺言がお六の手に入つた。これを種に彌左衞門を強きつけたので、彼は怒つて松次郎を荏土の出店へやつてしまつた。お龜はその間に珠吉と通じたことがわかり、松次郎はこれを幸に緣を切つてしまつた。荏土に來た松次郎はお鳥の姪でお芳の從妹なる小濱に逢ひ、これと戀仲になつてしまつた。お芳は松次郎からの仕送りも絶えて暮しに困り、母お鳥は又元の如く奉公人口入業を始めた。小島屋の番頭實藏と長五郎といろ〳〵彌左衞門に說いて怒を和らげ、事件を起したお六を十分に懲らし、その娘お絹は長五郎が預る事になり、松次郎は家に呼び歸され、お鶴とめでたく結婚した。

【解說】本篇は松次郎を主人公とし、彼をめぐる六人の婦人の戀愛を描いたものである。純然たる一夫多妻の思想で、男が性的に放縱であるからとて對抗したお龜は忽ち放逐され、あらゆる男の我儘を許すと最初から宣言してゐるお鶴が、最後の勝利を占めてゐるのである。經濟的の獨立を有たぬ江戶時代の婦人の道德、男性にのみ都合のよい道德が描かれてゐる。描寫足らず、事件の展開の說明のみに墮して、其處に情調を浮び出させるだけの餘裕と詩情とがない。金水が春水より人情本作者として遜色ある事を證するものである。なほ本篇で說き殘されたお寅・お芳・小濱・お絹の身の上については、續編の「花筐湊の月」（別項）で解決する事になつてゐる。　〔山崎〕

花供養（はなくやう）　俳諧　【性質】芭蕉追福の俳諧式　【由來】高桑闌更（別項）が、京の東山雙林寺中に芭蕉堂を建立して芭蕉を祀り、その傍らに南無庵を結んで住み、芭蕉堂の看守を勤めたのは、寬政五年芭蕉百回忌の頃であつた。その祥月の十月を繰り上げて、陽春三月の十二日（忌日）を以て芭蕉堂の法會を營み、俳諧連歌（連句）を興行し、その懷紙を諷吟奉獻する行事を花供養と稱したのである。恐らく釋尊降誕會の花供養から出た名稱であらう。のち南無庵が闌更系を標榜する一種の稱號となつて芭蕉堂を離れたので、この花供養は芭蕉堂代々の庵主によつて行はるゝ事になつたのである。その庵主は闌更・蒼虬・千崖（この時分離す）・朝陽・公成・壺公・南德・楓城・梅雄・楓崖・露翠・藍水（現代）の世代で、年々舊例によつて花供養を行つてゐるのである。その第五代の公成は長門の人河村氏で、木戶孝允等と交があり、勤王志士の間を斡旋し、芭蕉堂をその密談所に充てた事もあつたので、佐幕派浪士のために斬られた。時は慶應四年（明治元年）六月四日で、公成は六十一歲であつた。明治の初め芭蕉堂の敷地が賣られんとする時、木村素石が寬政以來の事蹟の廢絕に歸することを嘆いて、これを買受けて保存し、明治二十六年芭蕉二百回忌の時、第七代の庵主南德が素石から讓り受けて保存方法を講じ、花供養の永く廢絕せざる仕組を立てたのである。

【附說】闌更及び蒼虬の時代に於ては、奉吟の連句發句等を輯錄して「花供養」（半紙本一册）と題する册子を年々刊行したのであつたが、今は謄寫版刷のさゝやかなものを出すに過ぎない。　〔鷲川〕

花子（はなご）　能狂言　【別名】坐禪　【格式】大習と云つて、「釣狐」（吼噦參照）などと共に頗る重い物である。「狂言不審紙」に「此狂言極意習事條々多。委細記難。執心して習を請て知べし」とある。殊に「眞ノ形」といふ小書附は一子相傳である。

【梗概】殿が妻の上臈の目をかすめ、坐禪に事よせ、冠者に身代りさせ、情人花子のところへ通ふ。やがて上臈は、主の坐禪を氣の毒がつて坐禪姿を見に來る。さうして遂に坐禪衣を剝ぐと、これはしたり冠者であるので、且つ驚き且つ怒り、冠者から事の次第を聞いて、冠者に代つて座禪衣を着る。それとは知らぬ殿は、數々の小歌を謠ひ、花子に對面の首尾など語り、上機嫌で、さあ衣を取れ、入りかはるぞと言ふとたんに、冠者ならぬ上臈であるので、殿は驚愕措くところを知らず。上臈、やるまいぞ〳〵で追ひ込む。

【影響】近松の淨瑠璃「凱陣八島」の四段目に殿が判官、冠者が辨慶として扱はれてゐる。岡村柿紅作の長唄物「身替坐禪」（明治四十三年三月市村座初演）は、この狂言を利用したものである。同四十五年二月歌舞伎座上演の際、新古演劇十種の一となる。　〔野村〕

花子物狂（はなごものぐるひ）　「班女物語」を見よ。

花曆八笑人（はなごよみはつせうじん）　滑稽本　初編二册、二編二册、三編二册、同追加二册、四編二册、同追加二册、五編三册　【作者】瀧亭鯉丈。五編上卷は一筆庵主人、中・下卷は與鳳亭枝成　【名稱】略して「八笑人」とも言ふ。陰陽道の八將神（太歲・大將軍・太陰・歲刑・歲破・歲殺・黃幡・豹尾）の遊行に擬して、「花曆八笑人」と言つたものである。【成立】初編文政三年、二編は同四年、三編・同追加は不明であり、四編・同追加は天保五年に成つて未完であつたが、一筆庵等が嘉永二年に五編を出して完結せしめた。【諸本】校訂滑稽名作集上卷（帝國文庫）・滑稽本集（日本名著全集）・落語滑稽本（近代日本文學大系）・滑稽文學全集四・有朋堂文庫等所收。【憩村】江戶の町人の趣味生活、又遊蕩生活を書いたもので、茶番の脚色と、その實演の失敗を描出したものである。三田村鳶魚氏はその著、「娛樂の江戶」に於て、井上雛圃翁等の說を引き、「八笑人」には各々モデルのあつたことを述べてゐる。例へば「八笑人」の卒八は瀧亭鯉丈自身であつて、彼は都八造と稱して一中節の三味線彈きであり、知友の間に都（とう）八と言はれてゐた。それを擬して卒八と名附けたなどと說いてゐる。江戶人の生活の一面を寫したものであるから、多少モデルらしいものもあつたらうが、その人物の名前は容貌・性格・趣味等から附けたものらしく、何れも眞面目な意味のものではなからう。卒八は反齒から、安波太郎は菊石（あばに）から、眼七は片眼（かんめ）から、出目助は文字通の出目から、呑七・頭武六は飮酒家から出で、野呂松は愚鈍（のうま）な性格から附けたものであらう。

【梗概】【初編】所謂能樂（のうがく）連中の卒八・安波太郎・野呂松・出目助・頭武六・呑七・眼七等が佐次郎の寓居に集まり、花見茶番の趣向を凝らす。佐次郎と出目助が順禮姿となり、飛鳥山をそこ〳〵と花を見ながら步く所へ、安波太郎が武士の姿になつて出で、佐次郎の順禮に煙草の火を借る。順禮は武士の笠の中を覗いて親の敵覺悟せよと言ふ。武士は不憫ながら返討だと言つて兩方斬り結ぶ。そこへ頭武六が六部の扮裝で出て兩方を引分け、笈の中から酒肴三味線を取出し、佐次郎が彈き、出目助と頭武六が唄ひ、安波太郎が踊る。他の連中は見物の中に紛れゐて飛び出して踊るといふ趣向を立てた。愈々實演の當日となり、頭武六が六部姿で飛鳥山へ出掛けようとすると、店受の判八といふ贔親仁がこれを見つけ、眞に思ひ切つて、自分の胸を打明ける。松次郎は浮氣心で外に女が出來てもよいかと言ふ。お鶴はそんな事は構はぬと言ふ。そこで松次郎も何れ緣談を申込まうと約束する。その夜皆が泊る事になつた。皆眠つたがお寅は獨り別間で醉ひ臥した松次郎を起しに行き、間もなく二人は戀仲になつてしまつた。二人はそれから屢々密會するうち、いつかお寅は懷姙した。お寅はお鶴と共に扱いて見れば、角の海

花筐（はながたみ）　人情本　五編十五册　【作者】松亭金水　【畫工】歌川國直　【名稱】四時遊覽と角書がある。「古今集」の「花がたみめならぶ人の數多あれば忘られぬらん數ならぬ身は」に取つた命名。【刊行】天保十二年。第五編はその序に依り、同十三年或は弘化元年頃であらう。【諸本】人情本叢書所收。

六部になつたものと勘違ひして、有無を言はさず捕へて放さない。佐次郎・出目助は、飛鳥山へ赴く途中、あまり巫山戯過ぎて夢中になり、過つて通りがかりの西國武士に失禮をしたので、武士は怒つて彼等に眞劍勝負を申し出た。二人は顏色を變へて平謝りに謝つた。その際武士等は佐次郎等の杖にしこんだ刀をちらりと見て親の敵を探す孝子と早合點し、助太刀しようと申込んだ。佐次郎等は體よく斷つて、漸くホッと胸を撫で下して途を急いだ。一方安波太郎は、武士の姿をして、卒八・野呂松等と花間を徘徊するうち、佐次郎・出目助が順禮姿で來たから、安波太郎が飛び出し、煙草の火を借りることから立ち廻りが始まつた。止め役の頭武六は、先述の次第で遲れて來ないので納りがつかず、困つてゐると、そこへ先刻の西國武士が助太刀しようと乘り込んだので、これは大變と一同逃げ出して、折角の茶番もすつかり失敗に終る。〔二編〕

その失敗に懲りもせず、第二回の趣向を立てた。先づ野呂松の案として、隅田川花の柵といふ題の下に、野呂松は汚い衣服を纏ひ、狂人の態で牛の御前から秋葉邊を歩けば、自然と人がついて來よう。その中に仲間を二三人隱し置いて野呂松にからかひ、物を投げる。すると眼七を作風に仕立て置き、野呂松が投げ返す馬の草鞋などを眼七の顏に當てる。眼七の武士は怒つて野呂松を追ふ。追はれた野呂松と共に豫て設けて置いた船に飛び乘る。すると船はその儘押し出される。野呂松は船の屋根に上つて眞中に立ち、引き抜きで上の樓(ろう)をばらりと取れば、保名物狂の姿となる。船の簾が上ると、中には唄・三味線・囃子が並んといふことである。そこで色情狂だと言ひ譯して貰ひ下げて來る。やがて堤の上で豫定の茶番にとりかゝつたが、野呂松が人違ひをして、川にはまるなど、散々の失敗に終る。〔三編・同追加〕佐次郎と眼七とが會主となり、以下六人の連中へ回狀を出して池の端の會所へ招待する。座敷茶番などした後、兩國の涼みを利用して茶番をして、世間を驚かさうといふことになる。その趣向は卒八が女の扮裝をして兩國橋の欄干から身投げをし、他の連中が川の中へ魚盡しの張子を投げ込むといふ龍宮玉とりを演じようといふのである。當日になつた。卒八が扮裝をなしてゐる所へ、母親の邪魔が入つたのをやつと納得させる。愈々かねて趣向の通りに、卒八は

の滑稽に緣を引いてゐたことも首肯される。瀧亭鯉丈は中本作家として獨特の才をあらはした人で、「花曆八笑人」は、よく時代生活の一面を表はした作品である。卽ち江戸人の滑稽趣味も漸次に下落し、機智も穿ちもなく、單なるこぢつけ、くすぐりとなり、景物を出しておもちを着ける茶番趣味の全盛時代となつた時代生活の一面を表はしたものと言つてもよい。その意味に於て、「八笑人」は文學史上、相當の地位を占めてゐる。

【參考】八笑人の卒八三田村鳶魚（娯樂の江戸）〇江戸文學に現れた遊戲の生活　藤村作（上方文學と江戸文學）〇「七偏人」「和合人」及び「八笑人」に現れたる滑稽趣味　高須梅溪（滑稽趣味の研究）　〔小柴〕

花曆封じ文（はなごよみふうじぶみ）　人情本　四編十二册　【作者】朧月亭有人（山々亭有人）【畫工】初編・四編歌川芳虎。第二・三編一鷺齋國周。

【名稱】花曆は、季節々々の花の曆の意。封じ文は「三人吉三廓初買」の戲題のかたりに據つたのである。【刊行】初編・二編慶應二年。第三・四編未詳。明治初年であらう。【題材】萬延元年發表された河竹默阿彌の「三人吉三廓初買」（別項）に據り、それに八百屋お七、小姓吉三郎の事實的情話を採り入れたのである。お坊吉三・土左衞門の傳吉・釜屋武兵衞・八百屋久兵衞等は、「三人吉三」の人物の名をそのまゝ用ひてある。篇中に、畫家落合芳幾・假名垣魯文、その他、柳亭左樂・三遊亭圓朝・伊東潮花・柴田南玉・燕玉・河竹新七・瀨川如皐等、實在の人物を出してあるのも、洒落本・人情本・脚本等慣用の當込みに外ならぬ。

【梗概】鎌倉扇ケ谷に大身の武士中山勘解由と云ふ者があつた。橋三郎と云ふ子があり、妻が早世したので、後妻お牧を娶つた。勘解由は六十近いのにお牧は三十を少し越した許りである。お牧は繼子橋三郎の美しい若衆姿に思を寄せたが、伯母は貧しい上病氣になつたので、見かねて舞鶴屋に身を賣り、七綾と名乘つた。橋三郎も座敷牢に入れられ、危く毒殺される樣子なので、忠義な家臣安森源二兵衞が闇夜に乘じて救ひ出し、一時鎌込の吉祥院へ假りに小姓として寄住せしめた。玆に本鄕二丁目の八百屋久兵衞の娘お七は、去年の櫻時、梅若塚の供養の日、橋場の渡で美しい若衆を見染め、密かに探らせると扇ケ谷の若殿とばかりで名も知れない。他へ嫁入らせるといふ親達の命に背いて尼になると駄々をこねてゐた。親も詮方なく菩提寺吉祥院へ遣はした。丁度その時家が火災に罹つたので、そのまゝ下女のお杉と寺に殘つてゐる内、圖らず見染めた若衆に逢ひ、今度は尼になるのは否と言ひ出し、その若衆に言ひ寄つた。それが小姓橋三郎である。二人は戀仲となつた。寺に辨長と云ふ惡僧がゐた。密かにお七に戀して橋三郎との仲を察し、これを裂かうと企て、或る時橋三郎を誘ひ出し、梅若塚に參詣と稱し、その儘北廓へ連れて行つた。舞鶴屋七綾は引手茶屋俵屋で橋三郎を認め、新造をやつて彼を自分の部屋へ誘ひ、昔の物語などして懷しむうち、遂に彼への戀を告白し、二人は深く契つた。飼馬町の唄女七吉は橋三郎を思つてゐるが、消息全く絶え、而も行方も知れぬので、くよくよしてゐたが、或る日の夢に橋三郎が吉祥院にゐると見たので、箱屋の清助に手紙を持たせてやると、果して橋三郎がゐた。彼は折を見て七吉の家に來たが、運惡く七吉はゐなかつたので、二階で待つてゐる時、彼女は横道嘉藤次と云ふ惡侍の客に連れられ枯野見に出かけてゐた。橋三郎は惡く推量してそのまゝ歸つた。後で聞いた七吉は口惜しがつたけれども詮方がない。辨長はお七に、橋三郎が七綾と深くなつてゐることを中傷して口說くけれども成功しない。そこで惡漢お坊吉三と相談し、離座敷で橋三郎に逢はせると欺いてお七を誘ひ出し、飛鳥山邊に拐すと、それはお七の兄で土左衞門傳吉と稱する俠客の變裝で、手痛く懲らしめられる。繼母のお牧は嘉藤次と通じ、愈々橋三郎を殺さうと企てたが、忠臣安森源二兵衞等に妨げられ、却つて捕縛されてしまつた。釜屋武兵衞も嘉藤次の仲間で、八百屋久兵衞へ貸した金子を口實でお七を妻にせんとして失敗し、その上千葉家の軍用金を盜んだ事が發覺して處刑され、お牧は押込となり、橋三郎は家督を繼ぎ、七綾を本妻とし、お七・七吉を妾とし、源二兵衞は功に依り加祿された。傳吉は勘當を許され、馴染の舞鶴屋大淀を身請けして妻とし、八百屋を渡世とする事になつた。

【構想】橋三郎が三人の婦人を愛して、遂に同棲するに至る筋は、人情本の常套であるが、春水等の人情本が情調を描くのを主としたのに反し、脚色を說明するのが主となつて、合卷本に近いものである。特に婦人の言語も明治

期に近い近代的色彩に富んでゐる。人情本としての價値よりは、篇中に現はるゝ實在の人物、向島邊の描寫等に史的材料として見出される價値の方が多い。　〔山崎〕

花咲爺（はなさかじい）　昔話　【解說】花咲爺の童話化は近世の事業と思ふが、その出來ばえはほぼ理想的である。人のよい白髮の翁が冬木立の梢に登り、灰を撒いて花を咲かせ、下を通る殿樣から褒美を貰ふといふ一條は、小兒の空想に適した美しい繪樣である。しかしこの形式の行はれてゐる區域は、書册を外にすれば思ひの外狹く、奥羽・北陸は一般に「灰まき爺」、又は「雁取り爺」とも稱して、灰を撒いて空を飛ぶ雁の眼に打込み、いとも容易く多くの雁を取つたことになつてゐる。私はその方が最も古いものだらうと思つてゐる。この新舊の共通な點は、先づ第一には隣の爺型、卽ち惡い不正直な第二の憎らしい爺が、正直爺の眞似をしてまんまと失敗すること、次には話の發達が不思議の小犬であつて、それが一方には非常な福分を與へ、これを羨む惡い爺には失敗をさせる。それを怒つて殺して埋めると、そこから大木が生じて、臼となつて又寶を出し、借りて來てこれを搗けば汚ない物を山と出す。怒つて火に燒いたその灰が花を咲かせ、或は雁の眼潰しになつたといふだけが違ふのである。ところが御伽の花咲爺の方では、その犬の子を如何にして得たかに就いて、別に何とも言つてないのが普通であるに反して、民間の昔話ではこれにも由緒がある。つまりは正直爺さんである故に、さういふ不可思議なる犬の子も手に入つたので、この點は龍宮に行つて黒猫や小龜を貰ひ、もしくは微小なる男の兒を授けられたといふ桃太

郎・瓜子姫などと同系の奇瑞であつた。説話の以前の重心は寧ろこの點に存し、曰やその灰などの不思議はその展開であり、一種の後日譚的附加であつたやうに思はれる。從つてこの點ばかりに叙述を集注して、發端を忘れた花咲爺などは、後年の文藝だと見ることが出來るのである。説話は右の如くこれを聽く者の興味にひかれて、次々に中心を移して行くものであつたと共に、元に拠るべき何物をも持たぬやうな、全然自由なる根無し草でもなかつた。これは作者が凡人であり、又多くの準備構想の時を持たなかつたといふことから説明し得られる。殿樣の御褒美、乃至は惡い爺がしくじつて尻を斬られたのを、婆が遠くから赤い衣裳を貰つて來たのかと思つて、今までの着物を皆燒いてしまつたといふ滑稽なども、やはり又「竹伐り爺」といふ一話からの借り物であつた。「竹伐り爺」は一に「屁ひり爺」といひ、貧しい竹取りの翁が山に入り、不思議の小島を丸呑みにして、腹から珍らしい音が出る。そこへ殿樣が通り合せて、それにゐるのは何者ぞ、日本一の屁こき爺でござる。そんなら一つこいて見い。チチンプイプイゴヨノオンタカラなどと、佳い音をさせるので褒美を賜はる。それを隣の惡爺が眞似て又失敗して尻を斬られることになつてゐる。この方が尻は遙かに自然に聞えるのである。この殿樣は土地によつて、地主樣とも謂ひ又は山の神樣とも謂つてゐる。竹伐り爺である故に山の神が本の形であり、それを殿樣と語りかへてから後に、花咲爺の方で採用することになつたものらしい。【柳田(國)】

話の種 はなしのたね (Topic (Germ.)) 【解説】日本の民間にも古くからあつたが、この一語は説話研究者によつて非常に重寶がられてゐる。物語は最初精確なる譜誦であつて、これに携はる者は、精進辛苦してその技を練磨したのであらうが、一句一語の末まで口移しに覺えるといふことは、實は殆ど望み難いことであつた。それで聽く者の素直な印象に任せて置くと、自然に二筋の深い溝の如きものが出來る。その一つは俗に謂ふ口拍子、即ち定まつた音節數と耳に快い語音とを以て、巧みに人の心を捉へようとする方法、これが後々は語りの最も大切な部分を、特に忘れ難くする手段としても用ひられるやうになつた。文藝意識の根源は、主としてこの筋を經て溯り覺められる。第二には語り事の内容の興味、曾て想像もしたことのない事實又はその原因の、新奇と含蓄とを以て人を動かすもの、これは譜記の熱情がやゝ衰へ、又聽衆の個々の批判力が少しづつ芽ざして來ると共に愈々大いなる痕跡を次代へ引繼ぐことになるのである。ハナシといふ一種の技術は、それを時代時代の俗語を以て包裝し、遠く運び永く保存するがために、新たに必要を生ずるに至つたので、種は大抵の場合に於て、話その物よりも更に古いと見て誤りがない。「傳説」(別項)が「民間説話」と往々混同せられるのは、畢竟この「話の種」を共通に保存してゐるがためであるが、主要なる相異は前者に在つてはその事實が信じられて居り、後者はただこれをハナシだと思つてゐることであつた。從つて「傳説」ではそれを「話の種」とは謂はず、又その種は概して裸である。それが民間文藝の衣裳を着れば、いつでも「民譚」(別項)となることが出來たと同時に、「民譚」は又その種ばかりを選擇して、多くの地方の「傳説」を供給してゐる。これが「民譚」と「傳説」との二つの口碑を始終合せ鏡として見比べなければならぬ理由である。但し不幸にしてこの「話の種」は、永い年月の間に非常な混亂をしてゐる。今ある「話の種」には、新しく加はつたのが多い。話術の進歩は特に或る時代に於て、種の缺乏を感じて外部の補給を求めたことがあつた。その中でも説經の法師が譬喩の資料を佛典に求めた場合などは、獨り記錄文藝を復原して「民譚」を不純にしたのみならず、なほ原作の叙述に對しても必ずしも忠實でなかつたものが多い。その上に我々の「話の種」の選擇も、時代につれて決して一樣でなかつた。以前聽く人の最も心を動かし、從つて最も重きを置いて繰り返してゐた部分が飽きられ、又は古臭いと考へられるやうになつて、後にその説明又は敷衍のために、誰かが附加した部分が却つて中心となつたといふ例は多い。「頭白上人」(別項)の話などは、その著しい一つである。大體に「民譚」が童兒ばかりに愛せられ、成人も亦僅かの休息時間の氣晴らしのためのみに昔話を聽かうとするやうになつて、自然に「話の種」は淡泊に且つ卑近に墮ちざるを得なかつた。しかも如何なる發育を見ようとも、話には必ず種があり、種は必ず又、より古い話の實を結んだものであることには變りはない。若し時代がその變化に影響してゐることが明かだとすれば、やがて又、種の分類に由つて、「民譚」の發達史を究めて行くことも出來るわけである。【柳田(國)】

噺の苗 はなしのなへ 隨筆 六卷 【著者】曉晴翁 【角書】近來見聞 【諸本】新燕石十種第一册所收。【解説】大阪の戯作者たる曉鐘成が天明・文化年間に起つた大阪市中の雜事を聞き記したもので、中には江戸并に諸國に關する事もある。卷一に皇帝(光格天皇)御諱之事以下十六條、卷二に洪水見立の事以下十二條、卷三に奉幣使御通行の事以下十八條、卷四に金銀融通御仁政の事以下三條、卷五に佳吉卯の日祓の事以下十五條、卷六に能常舞臺之事以下十四條を收めてゐる。風俗・經濟・流行物に係る記事が多い。文化十一年の自序、同十一年の凡例がある。自序には市角亭丸人と署してゐるが、これは著者の狂歌名である。【和田】

咄の者 はなしのもの 【解説】咄の衆或は御伽の衆などとも謂つた。これが現代のハナシカといふ職分の原の形であつたことは、今ではほぼ疑がないのである。昔の高名の咄の者には曾呂利新左や野間の藤六などのやうに、稀には或る一人の頼うだ御方を取卷いて、生涯をその家中で送つた者もあつたらうが、そのやうにまでする必要は双方共に無かつたのみならず、話の修行にもやはり俳諧や遊藝の如く諸處を巡歴して機會を求め、且つ分に應じた生計を立てなければならなかつた。故に大抵の咄の者は、最初から一人以上の保護者を持ち、それを得意とも御出入先とも謂つたことは、諸道の職人や物賣なども同じであつた。さうして商工が次第に公衆を相手として營業するやうになつたと同樣に、咄の者も亦夙くからこの特定の旦那場を宛てにせず、辻に立つてその滑稽を販がうとした者が多かつた。露の五郎兵衛や鹿野武左衛門(各別項)は、その仲間の特に卓越した名手であり、又文筆の機緣に有りついて世に著はれたが、地方にはなほ隱れたる澤山の同業があつて、その事業だけを永く留めてゐる。不思議な事にはこれ等の無名氏には通り名があつた。互助といふ

どもその一つの例であるが、關西では最も多かつたのは彦八彦七、又は彦市孫八などであつた。東國に於てはこれとよく似た彌次郎などであつた。東國に於てはこれとよく似た彌次郎や與次郎が、この民間の咄職の最も人望多き名前ではなかつたかと思ふ。「膝栗毛」の主人公の出て遊んだよりも、更に三百年も以前から無害の虚誕を以て笑を博した彌次郎が、方々の城下宿驛を訪問してゐたので、勿論その數は一人や二人でなかつた。民間説話の運搬業者として、彼等の働いた仕事は大きかつたが、ただ二つの弱點は必ずしも傳承に忠誠でなかつたことと、餘りにも笑ひ話の流傳成長のみに、その力を傾け過ぎたことであつた。しかもその笑ひの種を眼の前の觀察から採取することは彼等には許されなかつた。異種異教のかあり得ない。而もその古といふ通稱のおどけ者は、現に北邊の奥州にもゐたと稱せられ、又中央部の大和平野にも住んでゐたさうで、共に「醒睡笑」(別項)以來の日本共通の笑ひ話の主人公を以て目せられてゐるのである。落語(別項)を職業とする人々などは、今なほ單純なる話賣りではない。顔や擧動の幾つかを提供して、先づ自分を以て笑ひの公衆に捧げようとするのである。これなどは明瞭に、この技藝が中代の談義僧から出たのではなく、少くとも一たび御伽の衆系統の修養を經來つた證據であらうと思ふ。さうして日本文學の可笑味に、何となく一分の苦味酸味を帶びてゐる如く感ぜられるのも、基くところは、やはりこの隱れたる經濟組織に在つたかも知れ

如き滑落本型或は中本型となり、噺本としても全盛期なれば、これ等の型が代表的な體裁となつたのである。德川末期の噺本の凋落期に至つては、黄表紙風となり、又は合卷本式になり、挿畫にも、書體にも、それ等の影響があらはれ、三册を以て一部をなしてゐるものなどがある。併し半紙本型のものや、洒落本型のものも散見してゐる。【系統】噺本の上期に屬する、例へば「きのふはけふの物語」や「醒睡笑」や「戯言養氣集」(各別項)などの體裁から見ると、假名草子の系統と見られるが、内容から檢討する時は、説話文學から展開したものと見られる。傳説・童話・口碑が面白く物語られ行くうちに、粉飾され潤色され、滑稽味が加へられて、所謂「話」となり、「宇治拾

ねる。「醒睡笑」には、貴人の行蹟や高僧の逸話、或は狂歌・落書に至るまで取扱つてゐる。故に時代的に見ても素材に變遷があり、殊に人間日常生活の矛盾滑稽を主なる題材とするものであるから、嚴密には言ひ得ないが、先づ人物に於ては、教養の低い市井人が代表的であり、階級的に見ては、大名・武士・仲間・浪人・町家の隱居・伜・聟・丁稚・田舍者・僧侶など殆ど全部を網羅してゐる。而してこれ等の人物は、頑固であり、非常識であり、放心であり、無智無學無筆であり、粗忽者であり、或は吝嗇・謙遜・自惚・虚榮・飲酒・猥褻又は種々なる性癖などの一種の性格破綻者が主なる題材となつてをり、際物や廓を題材にしてゐるものもある。

ともその一つの例であるが、關西では最も多かつたのは彦八彦七、又は彦市孫八などであつた。東國に於てはこれとよく似た彌次郎や與次郎が、この民間の咄職の最も人望多き名前ではなかつたかと思ふ。「膝栗毛」の主人公の出て遊んだよりも、更に三百年も以前から無害の虚誕を以て笑を博した彌次郎が、方々の城下宿驛を訪問してゐたので、勿論その數は一人や二人でなかつた。民間説話の運搬業者として、彼等の働いた仕事は大きかつたが、ただ二つの弱點は必ずしも傳承に忠誠でなかつたことと、餘りにも笑ひ話の流傳成長のみに、その力を傾け過ぎたことであつた。しかもその笑ひの種を眼の前の觀察から採取することは彼等には許されなかつた。異種異教の民を隣に持たぬ日本であつた故に、狐や狸より外には嘲るべき敵が少く、又江戸大阪に住む話し家でない以上は、うつかりと田舍者を笑ふわけにも行かなかつた。その結果は彌次郎彦八が、甘んじて自ら笑ふに堪へたる人物となるの外はなかつたのである。風狂自嘲の文學が特に我が國に盛んであつた原因は爰に存する。東北と南九州との咄の者は、主として遊藝の盲人がこれに任じてゐた。それを奥州はボサマと謂ひ、肥後では今もケンギユウと呼んでゐるが、この二つの地方の昔話には盲人がしくじり、又は笑はれる話が非常に多い。それを何人が流行させたかは言はずとも知れてゐる。豐後の吉右衞門、豐前の吉吾は、實在の人物であつたやうに信じてゐる人も多いが、彼は機智を以て屢々他を欺き利を得たと稱せらるゝと同時に、又常に愚鈍を極めたる言行を以て、永く世上の笑を招いてゐるのである。かういふことは到底假想の世界にしかあり得ない。而もその吉といふ通稱のおどけ者は、現に北邊の奥州にもゐたと稱せられ、又中央部の大和平野にも住んでゐたさうで、共に「醒睡笑」（別項）以來の日本共通の笑ひ話の主人公を以て目せられてゐるのである。落語（別項）を職業とする人々などは、今なほ單純なる話賣りではない。顔や擧動の幾つかを提供して、先づ自分を以て笑ひの公衆に捧げようとするのである。これなどは明瞭に、この技藝が中代の談義僧から出たのではなく、少くとも一たび御伽の衆系統の修養を經來つた證據であらうと思ふ。さうして日本文學の可笑味に、何となく一分の苦味酸味を帶びてゐる如く感ぜられるのも、基くところは、やはりこの隱れたる經濟組織に在つたかも知れぬのである。

〔柳田（國）〕

噺本（はなしぼん）【別名】笑話本。小咄（小噺）本【名義】落し噺本の上略であらうが、落し噺は、單に「噺」「咄」「話」などとも書かれたらしく、「私可多咄」「一休ばなし」（各別項）「噺物語」（延寶八年）「はなし大全」（貞享四年）等の題名によつて、噺本は噺の本の意とも見られる。小噺本の上略とも一應は考へられるが、併し小噺（小咄）と云ふ文字は殆ど用ひられてゐなかつたから、さうとは言はれまい。【體裁】標準の型は洒落本の體裁で、一册本であり、枚數は話數によつて一定しない。一二粗畫・漫畫程度のものを入れてゐる。併し時代及び内容上の展開によつて、體裁にも異同があり、比較的上期に屬するものは、美濃紙の大本、或は半紙本型であり、挿畫も相當の密畫であり、菱川師宣或はその畫風のものもあり、册數も五册乃至三册などである。而して德川の中期以後の謂はゆる江戸風の噺本は、前述の如き洒落本型或は中本型となり、噺本としても全盛期なれば、これ等の型が代表的な體裁となつたのである。德川末期の噺本の凋落期に至つては、黄表紙風となり、又は合卷本式になり、挿畫にも、書體にも、それ等の影響があらはれ、三册を以て一部をなしてゐるものなどがある。併し半紙本型のものや、洒落本型のものも散見してゐる。【系統】噺本の上期に屬する、例へば「きのふはけふの物語」や「醒睡笑」や「戯言養氣集」（各別項）などの體裁から見ると、假名草子の系統と見られるが、内容から檢討する時は、説話文學から展開したものと見られる。傳説・童話・口碑が面白く物語られ行くうちに、粉飾され潤色され、滑稽味が加へられて、所謂「話」となり、「宇治拾遺物語」（別項）の如く、笑話的要素を多分に持つて來る。それと共に、地方の珍談奇話の見聞などが材料となり、或は創作を加へなどして、こゝに噺本の全貌が作り上げられた。從つて上期の噺本は江戸風の小咄と違つて一種の説話文學（別項）とも見られる。【題材】噺本は笑話の集成であるが故に、滑稽を對象としてゐることは言ふまでもないが、如何なる滑稽が笑話構成の要素をなすかといへば、滑稽本（別項）に於ても多少論及したが、滑稽本の滑稽と切り離して考へれば、文化四年八月の尾張の人、南華房撰「按古於當世」（寫本）には、落語（別項）を分ちて、「一、理窟篇、二、頓作篇、三、間違篇、四、行過篇、五、下掛篇」をあげてゐる。勿論これは精確なる分類或は題材として取扱はるべきではなくとも、噺本に就いても言ひ得るものであらう。又既に「醒睡笑」（別項）の如きは、「謂へば謂はるゝ物の由來」以下四十二項目に分類して笑話を列ねてゐる。「醒睡笑」には、貴人の行蹟や高僧の逸話、或は狂歌・落書に至るまで取扱つてゐる。故に時代的に見ても素材に變遷があり、殊に人間日常生活の矛盾滑稽を主なる題材とするものであるから、嚴密には言ひ得ないが、先づ人物に於ては、教養の低い市井人が代表的であり、階級的に見ては、大名・武士・仲間・浪人・町家の隱居・伜・聟・丁稚・田舍者・僧侶など殆ど全部を網羅してゐる。而してこれ等の人物は、頑固であり、非常識であり、放心であり、無智無學無筆であり、粗忽者であり、或は吝嗇・謙遜・自惚・虚榮・飲酒・猥褻又は種々なる性癖などの一種の性格破綻者が主なる題材となつてをり、際物や廓を題材にしてゐるものもある。

【構想】噺本の笑話は極く短篇で、殆ど數行に盡きる。故に構想の點に於ても、滑稽本（別項）の如く長篇でもなく、小説の體をなすこともなく、短い中に人生をスケッチしようとするのである。言語的洒落によつて滑稽化しようとする場合は、所謂こぢつけであり、噺本中相當多く見られる現象で、輕口頓作として當意即妙、人に笑を催させる。而して末期の噺本に至ると、不愉快な駄洒落となり、或は落語の「さげ」ともなるのである。併し噺本の内容を一層滑稽化しようとするものは、性格を誇張するところに、一層の效果があらはれて來る。放心・麁相、或は無筆者・田舍者などが噺本に於て缺くべからざる人物で、矛盾・正體の暴露によつて期待の外れることや、有り得べからざる眞理を神妙に考へる無邪氣さも、噺本の滑稽を添へるものである。【叙述形式】口演に移し得るものは、そのまゝ落語ともなり、落語の「まくら」ともなるが、併しさうするやうになつたと同様に、咄の者も亦夙くからこの特定の旦那場を宛てにせず、辻に立つてその滑稽を賣（ひさ）がうとした者が多かつた。露の五郎兵衞や鹿野武左衞門（各別項）は、その仲間の特に卓越した名手であり、又文筆の機緣に有りついて世に著はれたが、地方にはなほ隱れたる澤山の同業があつて、その事業だけを永く留めてゐる。不思議な事にはこれ等の無名氏には通り名があつた。夏藏といふ

又失敗して尻を斬られることになつてゐる。この方が尻は遙かに自然に聞えるのである。この殿樣は土地によつて、地主樣とも謂ひ又は山の神樣とも謂つてゐる。竹伐り爺である故に山の神が本の形であり、それを殿樣と語りかへてから後に、花咲爺の方で採用することになつたものらしい。

〔柳田（國）〕

話の種（はなしのたね）【解説】日本の民間にも古くからあつたが、この一語の「話の種」を共通に保存してゐるがためであるが、主要なる相異は前者に在つてはその事實が信じられて居り、後者はただこれをハナシだと思つてゐることであつた。從つて「傳説」ではそれを「話の種」とは謂はず、又その種は概して裸である。それが民間文藝の衣裳を着れば、いつでも「民譚」（別項）となることが出來たと同時に、「民譚」は又その種ばかりを選拔して、多くの地方の「傳説」を供給してゐる。結んだものであることには變りはない。若し時代がその變化に影響してゐることが明かだとすれば、やがて又、種の分類に由つて、「民譚」の發達史を究めて行くことも出來るわけである。

〔柳田（國）〕

噺の苗（はなしのなへ）【著者】曉晴翁【角書】近來見聞【諸本】新燕石十種第一册所收。【解説】大阪の戯作者たる曉鐘成が天明・文化年間に起つた大阪市中の雜事を略年順

た目的の意識の下に書かず、單に一笑話として書物から讀者の目に訴へるといふ意味で書かれる事によつて自ら叙述の形式が異り、時代によつても變つてゐる。上期の噺本は、落語の臺本とも見られ、「……と云うた」の形式で、説明的である。從つて著者の創作があつても、その笑話が著者以外の者によつて語られ、説明してゐる態度である。故に噺本の讀後感から云へば、殆ど印象も殘らないのである。それと共に、用語も古風で、難澁で、靜的で、多少の上品さを持つたものとも言へよう。然るに噺本の代表的な江戸風の全盛時代のものは、人生の切斷面を端的に、極めて動的に、平俗の言葉で、説明的でなく、如何にも氣の利いた表現を以て叙述してゐる。通俗化したとはいへ、着想の點に、叙述の點に、多くの印象を與へる。併し末期になると、落語家の手に成つた作品には、落語家の臭味もあらはれ、さげ・駄洒落も入り、遙かに下品なものとなつた。

【時代的區分】江戸時代に於ける噺本史二百年間を先づ第四期に分類し得ると思ふ。「戯言養氣集」「きのふはけふの物語」、或は「醒睡笑」の如きは、刊行年代は明確に言明し得ないが、元和・寛永年間に刊行せられたことは明かであり、噺本の權輿として右の時代を基準に置けば、第一期は元和・寛永(二二七五)より萬治・寛文(二三二〇)の約五十年間に當り、第二期は天和・貞享(二三四二)より元祿を經て、寶永・正德(二三七五)の約三十年間、第三期は寶曆(二四一二)より天明(二四四八)に至る三十餘年、而して第四期は寛政・享和(二四五〇)より天保(二五〇〇)の末或はそれ以後に及ぶ年代に當る。【第一期】草創の時代で奇拔珍新の物語や巷談街説の滑稽や、人生の諷刺など、謂はゆる「話」なるものや笑話を以て盛られ、安樂庵策傳や中川喜雲以外には、この期の作者は明かでない。然るに「輕口曲手鞠」(延寶三年刊)に至ると、「輕口」の名を標榜して來ただけ、最早雜多な話の集成でなく、滑稽それ自體の下に整備せられ、漸く體系を具へるに至つた。【第二期】この期の代表作は、「鹿野武左衞門口傳ばなし」「鹿の巻筆」「枝珊瑚珠」「露がはなし」「露新輕口ばなし」「新話笑眉」「正直咄大鑑」(以上各別項)などが擧げられる。代表作家としては、鹿野武左衞門・露五郎兵衞(各別項)・石川流宣等で、これ等は何れも職業落語家として、聽衆の前で口演したのである。殊に武左衞門は江戸、五郎兵衞は京都を背景にして、落語界の代表者として盛名があつた。第二期の噺本はこれ等の人の手に成つたので落語本とも見られ、叙述の形式も口演に準じたものであつた。また上方文化中心の時代の關係上、これ迄の噺本の大部分は上方での出版であり、所謂上方風ともいふべき臭味があつた。ただこゝに注意すべきは、江戸版の「新話笑眉」の存在である。この表現樣式は、説明的なるものを避けて會話體であり、例の「……と云うた」の形式をとつてゐない。文化の東漸と共に、噺本史の第三期は「新話笑眉」に負ふところ甚大なるものがある。【第三期】この期は、江戸に於ける噺本黄金時代である。「鹿の子餅」「聞上手」「樂牽頭」(各別項)を初めとして、「飛談語」「茶の子餅」「謎嚢」「壽々葉羅井」「鯛の味噌津」「富久喜多留」(以上各別項)「一のもり」「鳥の町」「高笑ひ」、或は遊里文學の一新機軸とも見られる「柳巷訛言」や、馬琴の「笑府洛叟米」など、陸續として刊行された。會話の體裁から既に江戸風とも云ふべき小本型を作つて標準型をなし、洗練された旨さを以て人生を素描するなど、最高調に達した時代で、江戸風或は天明調と稱せられる。作者は職業落語家が影を潛め、自鯉館卯雲・小松屋百龜・風來山人・稻穗・唐邊僕・手柄岡持・嶌山人等殆ど戯作者の手になつた。【第四期】凋落時代で、行詰りの結果、一新工夫を出さうとしたが新趣向も出でず、前人の摸倣か、然らずば讀者の趣味の低下につれ、次第に卑猥に流れて行つた。ただ實演家たる櫻川慈悲成・三笑亭可樂・林屋正藏(各別項)等が僅に氣勢をあげ、戯作者としては、さすがに山東京傳(別項)の「太郎花」等は特異な存在を示し、十返舍一九(別項)も「落咄腰巾着」を著はしてゐる。書物の形式も前代の標準型が崩れ、「太郎花」の如きも黄表紙風三册ものとなつて居り、或は半紙型など統制なき狀態となり、噺本そのものの内容も見るべきものがなくなつた。明治・大正・昭和の現代は、噺本として獨立した存在はなく、笑話・一口噺として、雜誌に新聞に一隅を占めてゐるのであるが、純然たる噺本作家とてはなく、讀者の應募か、外國笑話の飜譯などである。併し讀者からは愛好せられてゐるのは事實である。

【作者】第一期は、安樂庵策傳・中川喜雲などの半職業的話術家であり、第二期には純然たる落語家として鹿野武左衞門・露五郎兵衞・米澤彦八・都又平・石川流宣などがある。第三期に至ると、戯作者側の作家によつて殆ど占められ、白鯉館卯雲の匿名たる山風、小松屋百龜・稻穗・武子・宇津山人、朱樂賞江の別名たる唐邊僕、朋誠堂喜三二・嶌山人等が名を列ねてゐる。第四期は戯作者と落語家とがあり、戯作者側からは、山東京傳・曲亭馬琴・十返舍一九・感和亭鬼武などがあり、落語家方面としては、櫻川慈悲成・烏亭焉馬・三笑亭可樂・林屋正藏・立川銀馬などがある。【史的地位】上期のものには、説話文學・假名草子(各別項)からの影響も認められるが、第二期・第三期となると少くとも創作とか飜案とかによつて新作を發表しなければならぬ。單に落語家が高座に於ての上演なれば、先師の讓り藝や得意のものとして數回上演し得るが、噺本として刊行するに當つては、其處に飜案もあり創作もあらはるゝ動作的滑稽、或は言語的滑稽は能狂言や浮世草子の氣質物等より題材を得、同時代のものとしては狂歌・川柳、或は黄表紙・洒落本・滑稽本(各別項)等とは最も密接な關係があつた。江戸風の噺本になると、短詩形の川柳が散文化されたと思はれるくらゐ兩者の關係に密接なものがある。又一方作者側から見ても、狂歌師があり、黄表紙作者・滑稽本作者などゝも多い。「道中膝栗毛」(別項)に於けるが如き笑話の利用や、「新話笑眉」の川越順禮の如き、又「金の草鞋」なども、噺本の影響が多く見受けられる。

【落語との關係】噺本と落語(別項)とは不即不離の關係にあり、噺本を落語本として取扱ふことも出來る。殊に第二期・第四期の作者は落語家が多數を占め、一つの落語集とも見得る。併し落語は相當の時間を聽衆の前にて演ずる關係上、噺本の如く小咄であつたり、脚色しないものであつてはならぬ。殊に落語が「さげ」を以て結尾をなして演者が降壇しなければならぬ關係から、噺本にある笑話では結末のつかぬ場合がある。自然落語は長話となり、話術と動作とが加はり、「さげ」を必要とする所に、噺本の笑話とやゝ趣を異にする。併し「さげ」を必要としない枕の場合に最も多く利用せられた。勿論噺本の話に多少の脚色を施し、一つの落語として上演することも多いので、上演したものが落語であり、讀むための落語本とも稱し得る。【小柴】

【參考】滑稽文學全集(第九・十一卷)○近世文藝叢書(第六卷笑話)○續帝國文庫落語全集○日本名著全集(第十四卷滑稽本集)○小咄選集宮川曼魚○滑稽類纂巖谷小波・京の藪兵衞○近代日本文學大系(第二十二卷落語滑稽本集)○江戸の落語關根默庵○講談落語今昔譚同上

噺物語(はなしものがたり) 噺本 三册 【作者】幸佐【書工】吉田半兵衞 【名稱】巻下の内題として「身代りの咄」は、念者の卒都婆が若衆の高野僧十人許りに暴行された折、身代りになる話で、「好色小柴垣」(別項)巻一に「觀音妙智力」と題し、女性に飜案して出てゐるし、「あなをかし」にも出てゐる。下巻「盗人のはなし」は、「初音草噺大鑑」巻三に「三百文は定た果報」と題して採つてある。「りんきばなし」は、「輕口浮瓢箪」(寶曆元年)巻二に「妾の知行」と題して出てゐる。【山崎】

花づくし(はなづくし) 「胡蝶物語」を見よ。

花園院天皇宸記(はなぞのいんてんわうしんき) 日記一巻 【著者】花園院天皇 【諸本】列聖全集(宸記集下)所收。【由來】「宸筆御記」は、伏見宮家御寶庫に祕藏せられてあるが、明治六年

花田比露志(はなだひろし) 歌人 【本名】大五郎【閲歴】明治十五年三月十一日福岡縣朝倉郡安川村に生れた。京都帝國大學卒業後新聞記者となり、後、京都帝國大學學生監を經て大阪商科大學教授となつた。歌集「さんげ」、論集「歌に就ての考察」等がある。根岸短歌會から出でて萬葉調の發揚に努め、短歌雜誌「あけび」を主宰してゐる。

【歌風】歌は時流を超越して自己の道を往くといふ作風である。必ずしも萬葉調でない。

秋の夜の永夜(ながよ)もすがら庭隈に鳴けりし蟲は死ににけらしな 【土岐】

花簪(はなだんず) 俳諧式目 一册 【撰者】雪堂白牛。大島蓼太補(白牛は武藏川崎の人、明石として流布されてゐる。「身代りの咄」は、念者を詰じ、最後に花の定座のことに言及してゐる。以上を本文とし、これに蓼太の追加があるが、その追加は、花は櫻にあらざる證句となる嵐雪の句の花の句を立句として、白牛・蓼太等數家が巻いた脇起の歌仙一巻と、花及び櫻をそれ〴〵題とした諸家の發句二百十餘句を添へたのである。【各務】

華摘(はなつみ) 俳諧集 上下二册 【撰者】寶井其角【名義】筍深の跋に、「四月佛生日、遇二母公之諱日一、偶詣二石廟一、嘆感頻起、泣血横斜、捻レ香摘レ英、挑二一灯一咏二一唫一、以供二聖善之追福一云々」とある如く、亡母の墓前に花を摘み手向けて一吟したところから起つた集であ

る所に、噺本の笑話とやゝ趣を異にする。併し「さげ」を必要としない枕の場合に最も多く利用せられた。勿論噺本の話に多少の脚色を施し、一つの落語として上演することも多いので、上演したものが落語であり、讀むための落語本を噺本とも稱し得る。【小柴】

【參考】滑稽文學全集（第六卷笑話）○續帝國文庫落語全集○日本名著全集（第十四卷滑稽本集）○小咄選集宮川曼魚○滑稽類纂巖谷小波・京の藪兵衞○近代日本文學大系（第二十二卷落語滑稽本集）○江戸の落語關根默庵○講談落語今昔譚同上

噺物語（はなしものがたり）　噺本　三册　【作者】幸佐【畫工】吉田半兵衞　【名稱】卷下の內題には「咄し物語」とある。「噺物語」の意は、笑話一項毎にこれと類似せる古今和漢の說話を引用してあるためであらう。【刊行】延寶八年【諸本】二幅一對（貞享四年改題再板）。落語全集（續帝國文庫）・近世文藝叢書第六笑話所收。【解說】三十項の笑話と、三十項の類似說話を收めてあるが、中には後の書に依つて作られたと思はるゝものもある。されば題材と思はれる引用書を列記すれば、「史記評林」「無名抄」（別項）「八雲御抄」（別項）「論語首書」「元亨釋書」（別項）「晴明物語」「事文類集」「撰集抄」（別項）等である。これ等の書に暗示を得て作られた笑話だと考へる方が妥當である。【影響】上卷「大風に逢し舟の咄」は、小人國・大人國へ漂流する話で御伽草子めくが、後世の「和莊兵衞」（別項）などの起原の一と見られる。中卷「鰻かばやきの咄」は、下男が鰻のかば燒きを作るを主人が火事と誤り、匂をかいで魚の棚まで燒けて來たと云ふ笑話で、現存の落語では味噌田樂とし、味噌藏の燒ける話として流布されてゐる。「身代りの咄」は、念者の卒都婆が若衆の高野僧十人許りに暴行された折、身代りになる話で、「好色小柴垣」（別項）卷一に「觀音妙智力」と題し、女性に飜案して出てゐるし、「あなをかし」にも出てゐる。下卷「盜人のはなし」は、「初音草噺大鑑」卷三に「三百文は定た果報」と題して採つてある。「りんきばなし」は、「輕口浮瓢箪」（寶曆元年）卷二に「妾の知行」と題して出てゐる。【山崎】

花づくし（はなづくし）「胡蝶物語」を見よ。

花園院天皇宸記（はなぞのいんてんわうしんき）　日記　一卷　【著者】花園院天皇　【諸本】列聖全集（宸記集下）所收。【由來】「宸筆御記」は、伏見宮家御寶庫に祕藏せられてあるが、明治六年同宮家從浦野直輝が令旨を奉じ、全部を複寫したものが十一卷ある。列聖全集（大正六年四月刊）所收の本は、この複寫本を影寫した史料編纂掛藏本に據り、更に「宸筆御記」に就いて訂正したものである。又別に世に傳はるものに、元應二春、元亨四夏・秋・冬、元德元十二の三年間を載せたものがある。これは「御記」の殘缺で、列聖全集本には各々その條下に編入し、元德元年の條のものは、不連續者の中に收めた。【解說】延慶三年から元弘二年に至る二十三年間の御日記で、世に寫傳する宸記が概ね殘闕せる中に、最もその大部分の存してゐるものである。その年次は、延慶三年冬、四年春、應長元年夏、二年春、正和二年、三年夏、六年春、文保元年夏、二年正、三年春四、元應元年夏十・秋・二年、三年春・夏、元亨元年秋・冬、二年、三年三・夏、秋・冬、四年、正中二年、元弘二年十・十一で、その他不連續のもの十五項を載せてある。【參考】皇室御撰解題（列聖全集）和田英松【石村】

花園節（はなぞのぶし）「新內節」を見よ。

花田比露志（はなだひろし）　歌人　【本名】大五郎【閱歷】明治十五年三月十一日福岡縣朝倉郡安川村に生れた。京都帝國大學卒業後新聞記者となり、後、京都帝國大學學生監を經て大阪商科大學教授となつた。歌集「さんげ」、論集「歌に就ての考察」等がある。根岸短歌會から出でて萬葉調の發揚に努め、短歌雜誌「あけび」を主宰してゐる。【歌風】歌は時流を超越して自己の道を往くといふ作風である。必ずしも萬葉調でない。

秋の夜の永夜（ながよ）もすがら庭隈に鳴けりし蟲は死ににけらしな　【土岐】

花簪笥（はなだんす）　俳諧式目　一册　【撰者】雪堂白牛。大島蓼太補（白牛は武藏川崎の人、明石庵と號した。蓼太門）【名稱】「俳諧華（はなだんす）」、略して「花簪笥」といひ、一に「正花論」ともいふ。【成立】寶曆十二年三月【刊年】不詳【諸本】蓼太全集（俳諧文庫）に追加を略して收めてある。【由來】序に依ると、もと撰者の稿にかゝるものを、誰彼が爭つて書寫する間に魯魚の誤りも生ずるので、これを覺束なく思つて蓼太が梓行を勸め、その補正をなし、且つ追加を添へ、又序を書いて上梓の運びに至らしめた。上梓に際して撰者は、花鳥庵後主蟻林の跋を求め、寶曆十二年三月自跋を書いた。【解說】連句に重要な花の句に詠まれるべき花の諸種の稱の內容・性質を考察し、それ等が附句として用ひられる場合のそれ〴〵の式法を述べたものである。最初に一般論としての連句の花の概念を說き、次に附句に詠まれて花の句をなすべき稱で春季に屬するもの、他の季に屬するもの、雜のものを類聚して各種の解說をなし、古來の論の紛らはしいものを解決し、また貞德の「御傘（ごさん）」（別項）を參酌して、去嫌ことも出來る。殊に第二期・第四期の作者は落語家が多數を占め、一つの落語集とも見得る。併し落語は相當の時間を聽衆の前にて演ずる關係上、噺本の如く小咄であつたり、脚色しないものであつてはならぬ。殊に落語が「さげ」を以て結尾をなして演者が降壇しなければならぬ關係から、噺本にある笑話では結末のつかぬ場合がある。自然落語は長話となり、話術と動作とが加はり、「さげ」を必要とす

【作者】第一期は、安樂庵策傳・中川喜雲などの半職業的話術家であり、第二期には純然たる落語家として鹿野武左衞門・露五郎兵衞・米澤彥八・都又平・石川流宣などがある。第三期に至ると、戲作者側の作家によつて殆ど占められ、白鯉館卯雲の匿名たる山風、小松屋百龜・稻穗・武子・宇津山人、朱樂菅江の別名たる唐邊儀、朋誠堂喜三二・猿山人等が名を列ねてゐる。第四期は戲作者と落語家とがあり、戲

漸と共に、噺本史の第三期は「新話笑眉」に負ふところ甚大なるものがある。【第三期】この期は、江戸に於ける噺本黃金時代である。「鹿の子餅」「聞上手」「樂牽頭」（各別項）を初めとして、「飛談語」「茶の子餅」「譚嚢」「壽々葉雜井」「鯛の味噌津」「富久喜多留」（以上各別項）「一のもり」「鳥の町」「高笑ひ」、或は遊里文學の一新機軸とも見られる「柳巷訛言」や、馬琴の「笑府治裂米」など、落語として刊行された。實物の

七月十九日の満百日までの句日記を記し、その内に、其角の句を立句とした表六句もあり、句日記記了の後に、其角の加はつた歌仙六巻、其角の加はらない附合一、三ツ物一が附せられ、最後に山田笏深の漢跋がある。【影響】本集は内容體裁共に感を惹くものがあるので、これに倣ひ或は名を繼ぐものが現れてゐる。同じ年に其角の門人の十四歳の少年であつた龜翁が、一夏花摘の句を試み、その五十一句を路通の勸進に寄せてゐて、路通の「俳諧勸進牒」（別項）に「花摘集追加」として掲げられてゐる。又同じ其角門の湖十は、亡母の七回忌追善集として「續花摘」（享保二十年刊）を編してゐる。やゝ降つて蕪村に「新花摘」（別項）があつて、新と名づけたのは、既に「續花摘」があつたからしい。なほ曉臺門の騏道にも「華摘」（寛政四年自序）があつて、序には「新華摘」と題されてゐる。【志田】

花盜人（はなぬすびと）「花折」（はなをり）を見よ。

花魁荅八總（はなのあにつ　ほみのやつぶさ）　脚本　八幕三十場　お家物　【作者】西澤一鳳【通稱】八犬傳【名稱】「八犬傳」の犬の名より少壯俳優の集まりを暗示した名題。【諸本】小說脚色狂言集（日本戲曲全集）所收。【興行】天保七年正月二十四日初日、大阪中の芝居。この時は芳流閣の場までで、三月十六日から最初の件を少し抜き、全部を揃へて見せた。馬琴の「南總里見八犬傳」（別項）を初めて舞臺に上せたのは、天保五年十月、大阪若太夫芝居の「金花山雪曙」（きんくわさんのあけぼの）で、本篇は二度目であるが、大劇場としては最初の上演である。

【殺劇】犬塚信乃・金碗大助（嵐璃寬）、杉倉氏元・犬田小文吾（潮三十郎）、大塚番作・犬川莊助（初め關三十郎、後に市川鰕十郎）、犬山道節（初め坂東壽太郎、後に市川鰕十郎）、柚木朴平・女房龜笹・馬加常武（大谷友右衞門）、赤岩一角・下人脊助・犬村角太郎（嵐璃珏）、安西景連・妻立戸五郎・犬塚臺六（中村翫十郎）、里見義成・里見義實・蠶崎照文・鮎原胤度（中村歌十郎）、姉曳手・五十子御前・紅梅屋お竹（山下金作）、里見季基、古那屋文吾兵衞（中山文七）、傾城玉梓・番作妻手束・下女おなか・春駒おりき（中山南枝）、山下柵左衞門・網干左母次郎・百姓權助・犬飼現八・山林房八（片岡市藏）、里見伏姫・娘濱路・犬坂毛野（中村富十郎）、山内顯定・横堀在村（片岡仁左衞門）。

【梗概】【序幕】（洲崎社）里見義成は吃りの病、傾城玉梓に溺れて遊興。那古七郎は金鞠大助の許嫁なる娘曳手を連れ來り、姉娘玉梓に面會。義成は娘戸山が柚木朴平に親孝行の樣を見て心變り、屋敷へ歸る。これは大助が朴平に賴んだ計略。義成上洛につき、大助・番作試合の結果、勝ちたる方が供ときまり、兩人互に氣味合ひ。（瀧田城）安西景連は、義成が吃りにつき上洛不可能を季基に詰る。村雨丸の劍、嵐山の名笛紛失。家老山下柵左衞門、玉梓の事にて義成を怒らせ、藥湯を服ませると吃りが癒る。（奥庭試合）大助・番作試合。双方勝を讓り合ひ大助勝つ。番作妻手束、夫を責めたが、寶を尋ねる本心と知つて心解ける。番作は村雨丸を奪つた麻呂小五郎を追ひかけ、赤岩一角は名笛を盜んだ籠山逸藤太と立廻り。（奥殿）柵左衞門の服ましたのは毒藥で、義成の急死。館の騒動。大助それと知つて柵左衞門を追ふ。（落葉曝）朴平、柵左衞門と思ひ誤つて季基を殺す。柵左衞門は朴平を殺す。（辻堂）曳手は義成の一子を抱き、柵左衞門の捕手と立廻り、斬られて死ぬが、一子は山内顯定の手に入る。【二幕】（瀧田城）實紛失につき五十子御前は、發見者へ娘伏姫を與ふると約し、鮎原胤度・妻立戸五郎の爭ひ。上使顯定の前にて、犬殿殺害の疑ひうけた大助の言ひ開き。堀内藏人、大助の詮議。（亭座敷）玉梓、色仕掛けで柵左衞門の企みを見顯はす。（伏姫居間）伏姫・大助、不義と見せて柵左衞門より連判を奪ひ取る。（奥庭）忍びの眼八、妖術にて八房の犬と化し、名笛を景連より奪ひ取る。（奥殿）八房が、名笛を得て顯定に渡したので、伏姫は遂に約を違へず、八房に連れられる。（富山）伏姫、川へ顔を寫せば犬に見える。神童現はれ、懷姙と敎へる。八房、眼八の正體を現はす。大助發砲。伏姫に命中す。伏姫が胤は八ツの玉となつて飛び散る。大助・柵左衞門に杉倉氏元が搦んでだんまり。【三幕】（武州簸川村）前幕より十三年後。番作の一子信乃の飼犬與四郎が莊官蟇六の妻蟲笹の愛する紀二猫を噛み殺したので、蟇六夫婦は百姓權助に命じ、番作に掛合はせる。番作は蟲笹の弟。（番作浪宅）權助の掛合ひに村雨丸を寄越せとの言ひ分は刎ねつけたが、番作思案。（奥座敷）番作は信乃に素性を語つて切腹し、村雨丸を渡して主家再興を言ひ含める。信乃、與四郎犬を斬つて信の名玉を得る。【四幕】（拈華寺）前幕より七年後。信乃は蟇六方に寄宿し、娘濱路に戀慕される。代官簸上宮六、濱路に繼慕し、軍本五倍二を媒介に蟇六を說く。浪人網干左母次郎も濱路を戀し、龜笹を籠絡する。龜笹、左母次郎に村雨丸を奪ふやうに賴む。（神宮川船中）信乃・土太郎、爭ひて川へ落ちし間に、左母次郎は村雨丸と蟇六の刀を入れ替へんとして心變り、我が刀と入れ替へる。【五幕】（蟇六内）信乃には贋の村雨丸を持たせて里見家再興に古河へ出立させ、後にて夫婦は、無理に濱路へ宮六を聟にと賴む。左母次郎忍び込んで濱路を連れ出す。夫婦は狼狽のうちに宮六の聟入り。（奥座敷）宮六・五倍二は、濱路がゐぬと聞いて憤り、言ひ譯に蟇六が出した村雨丸は贋物なのでなほ怒り、遂に夫婦を殺す。下男額藏、主の敵と宮六を斬る。（圓塚山）左母次郎、濱路を口說き、諸かぬので遂に殺す。犬山道節現はれて左母次郎を斬り、村雨丸を奪ひ、濱路と兄妹の名乘り。額藏出でてだんまり。【六幕】（滸我成氏館）執權横堀在村、馬加常武と心を合せ家横領の企み。成氏の娘吾の君と義實の緣邊につき蠶崎照文來り、宇舍の犬飼現八を助ける。信乃、里見家再興の願ひにつき村雨丸獻上に來たが、贋物なので疑はれ、捕手に圍まれる。（芳流閣屋根）信乃戰ふ。現八召捕りに向ひ立廻りの末、取組んで利根川へ落ちる。【七幕】（行德浦）小文吾の妻お縫、夫が夜盲ゆゑ、夜中禁制の網を打ち、黄金の鎧通しを揚げる。古那屋文吾兵衞立ち寄つてお縫を斬り鎧通しを奪ふ。山林房八窺ふ。（古那屋）お縫歸り、小文吾に信乃を匿まひし事を裏問ふ。お縫の兄房八來つて信乃の人相書を種に小文吾へ强請りかける。捕方來る。小文吾は信乃の首を討たんと約束する。（奥の間）お縫は、文吾兵衞の手より鎧通しを小文吾に渡し、亡魂と明かして消える。それと知り、文吾兵衞の嘆き。（入江橋）小文吾・房八立廻り、房八の血汐で犬塚信乃の金瘡癒える。伏姫の神靈、小文吾の一子犬江親平を預かる。現八駈けつけて信乃に加勢。【大詰】（紅梅屋）吾の君、傾城花橋となり、仲居お竹の媒介で里見義實と配言。馬加常武の企み。（下河原）常武伺者にお殺され、藝者關弓勢、

輪廻役人へ言ひわけする。（紅梅屋）小文吾、朝毛野を怪しむ。額藏今は犬川莊助、太鼓持ち里八實は犬村角太郎、岩木素藤訴訟の計書。（離れ座敷）小文吾・莊助の會合。（對牛樓）朝毛野實は鮎原胤則の一子犬坂毛野、男と娘を現はして「淺妻船」の所作のうちに常武の家來と大立廻り。岩木素藤實は山下柵左衞門を、義實・氏元、その外犬士一同取卷き討ち取り、里見家はめでたく再興する。

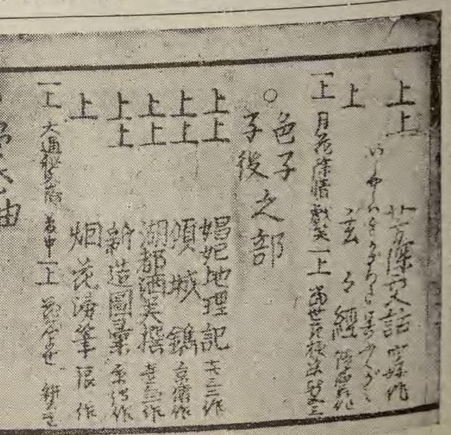
【脚色】信乃に關する件は、原作に忠實であるが、序幕・二幕目及び房八・毛野等を全然歌舞伎式に創作したのは、櫻田治助の脚色に比べて遙に劣る。尤も房八を純敵役にしたのは配役の都合であり、毛野を世話に直したのは富

終、名人上手藝、何の年興行ありしといふ、せりふざれ歌、月旦評のなのりそに至るまで、故人知因の談話を傳に加へ、其證を著したものである。各巻收錄年代は、巻一（寛永元―享保十一）・巻二（享保十二―元文元）・巻三（元文元―延享四）・巻四（延享五―寶曆七）・巻五（寶曆八―明和八）・巻六（明和九―天明六）・巻七（天明七―寛政五）・巻八（寛政六―寛政十）・巻九（寛政十一―文化元）。勝川春章筆の挿繪相當多く、蜀山人の序がある。【價値】「戲場年表」「續名聲戲場談話」「江戸芝居年代記」（各別項）等と互に相對照して、江戸歌舞伎の年表的著述の代表的のものである。もとより多少の誤謬・遺漏はあり、又著者自身から見て、特に市川團十郎諸代に特

巻【作者】不明【成立】刊本の奥に、寛文六年書寫とあり、「近古小說解題」には刊行を去ること遠くあるまいといつてゐる。

【梗概】本おほき氏（本多氏か）某の守の臣に左京と云ふ者があつて才色共に優れてゐた。或る年主君が京都警固の番に當つたので隨つて上洛した。東山に遊んだ折、美しい女を見染めて、以來快々として病となつたが、從者がこれを知つて、彼女の隣家は自分の知人であるからと其處へ移らせる。その家の女房の仲立で遂に彼の娘と契る。さて主君の役も果てたから已むなく左京も隨つて歸つた。その後娘は思ひのあまり病になつたが、乳母は事の由を聞いて父母に告げる。父は江戸に下つて左

山蔭通寫なる二人の通員人に逢ひ、共に酒呑本の評判記を編むと云ふ筋が記してある。中



綸旨役人へ言ひわけする。（紅梅屋）小文吾、朝毛野を怪しむ。額藏今は犬川荘助、太鼓持ち里八實は犬村角太郎、岩木素藤誅罰の計畫。（離れ座敷）小文吾・荘助の會合。（對牛樓）朝毛野實は鮎原胤則の一子犬坂毛野、男と姿を現はして「淺妻船」の所作のうちに常武の家來と大立廻り。岩木素藤實は山下柵左衞門を、義實・氏元、その外犬士一同取巻き討ち取り、里見家はめでたく再興する。

【脚色】信乃に關する件は、原作に忠實であるが、序幕・二幕目及び房八・毛野等を全然歌舞伎式に創作したのは、櫻田治助の脚色に比べて遙に劣る。尤も房八を純敵役にしたのは配役の都合であり、毛野を世話に直したのは富十郎の註文であるが、序幕・二幕目は初代並木五瓶の「紬薄播州廻（そでにつきはしまわり）」をそのまゝ嵌め込んだものなので、甚だ悪い脚色である。脚色は冗漫、性格は不徹底、原作の劇的な點を毫ろ破壞した箇所多く、數少い一鳳の脚本の中でも惡作の方である。（渥美）

花上野譽の石碑（はなのうらへのほまれのいしぶみ）　「幼稚子敵討」を見よ。

花江都歌舞妓年代記（はなのえどかぶきねんだいき）　九卷【編者】立川焉馬（初代）【刊行】天保十二年【傳本】初版は殘存稀れで、明治二十六年東陽堂出版の飜刻本も亦尠いが、大正十五年歌舞伎出版部より一册本として刊行され（これには外題索引を附す）、又日本古典全集第三期中に全三册として刊行された。

【内容】凡例によれば、著者が六十餘年來の見聞と所藏の古番附類等を資料として、「江戸芝居の濫觴寛永元甲子年より、文化七庚午年まで（實は文化元年で終つてゐる）百八十七年（實は百八十一年）が間狂言名題の有增、役者の始め終、名人上手藝、何の年興行ありしといふ、せりふざれ歌、月旦評のなどに至るまで、故人知因の談話を傳に加へ、其證を著し」たものである。各卷收錄年代は、卷一（寛永元―享保十一）・卷二（享保十二―元文元）・卷三（元文元―延享四）・卷四（延享五―寶曆七）・卷五（寶曆八―明和八）・卷六（明和九―天明六）・卷七（天明七―寛政五）・卷八（寛政六―寛政十）・卷九（寛政十一―文化元）。勝川春章筆の挿繪相當多く、蜀山人の序がある。【價値】「戲場年表」「續名聲戲場談話」「江戸芝居年代記」（各別項）等と互に相對照して、江戸歌舞伎の年表的著述の代表的のものである。もとより多少の誤謬・遺漏はあり、又著者自身から見て、特に市川團十郎諸代に特に詳しい遺憾はあるが、演劇史資料として貴重なものである事は言を須ひない。「せりふざれ歌」類の收錄は、かなり豐富な挿繪と共に意義がある。「續歌舞伎年代記」（別項）は本書の後を嗣いだものである。（壜田）

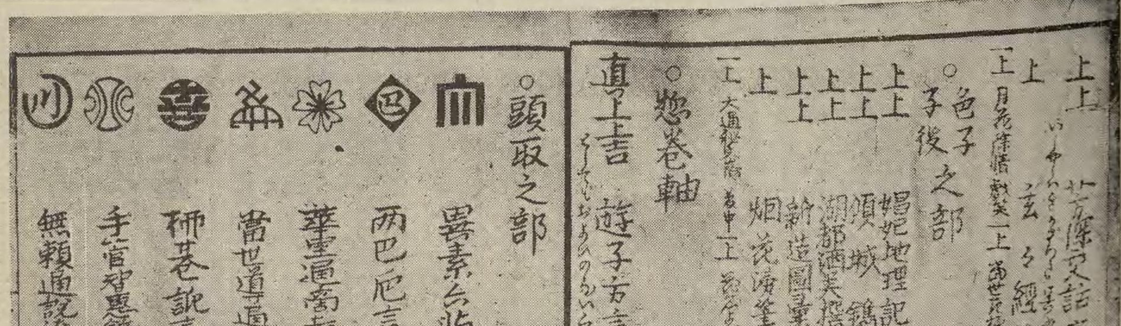
花江戸住（はなのえどずみ）　狂歌師【本名】山口政七【別名】萬龜亭。初號霞谷蔭【生歿】文化二年（一八〇五）六月歿す。享年未詳。【墓所】谷中瑞林寺【閲歷】江戸京橋南一丁目横町に住した四方側の判者であるが、その傳は詳かでない。江戸住が好む所の狂歌の風調は、「强き方古歌を取りたる體。をかしみの交るもよし。但し鄙俗の詞を取らず。一體俳諧歌に依る續けがらを專らにすべし云々」と「狂歌艸」に見える。その著「江戸紫」一册は寛政七年の歳旦狂歌集で、一葉毎に豐國・宗理・榮之・哥麿・京傳・蔥齋・豐春、その他數名の筆に成る挿畫がある。春興の配り本としては頗る凝つたものである。（野崎）

花の緣物語（はなのえんものがたり）　假名草子風　二卷【作者】不明【成立】刊本の奥に、寫文六年書寫とあり、「近古小說解題」には刊行を去ること遠くあるまいといつてゐる。

【梗概】本おぼき氏（本多氏か）某の守の臣に左京と云ふ者があつて才色共に優れてゐた。或る年主君が京都警固の番に當つたので隨つて上洛した。東山に遊んだ折、美しい女を見染めて、以來快々として病となつたが、從者がこれを知つて、彼女の隣家は自分の知人であるからと其處へ移らせる。その家の女房の仲立で遂に彼の娘と契る。さて主君の役も果てたから已むなく左京も隨つて歸つた。その後娘は思ひのあまり病になつたが、乳母は事の由を聞いて父母に告げる。父は江戸に下つて左京を伴ひ、京に上らうとして土山まで來て、明日は京へ入る事と喜んでゐるところへ、使が來て娘が死んだ事を知らせる。二人は大に嘆き、左京は遂に戀人の墓前に到つて自殺し、娘の墓と並んで葬られた。

【影響】「鳥部山物語」（別項）の燒き直しである。彼は男色であるのをこれは女色にしたばかりで、語句も摸倣した所が多い。けれど鳥部山に見るやうな佛教的要素はない。こゝに時代の相違を見るべきである。（小木・大野木）

花折紙（はなのをりがみ）　洒落本　評判記　一册【著者】十文字舍自恐・菊屋藏伎・並木新作。【畫工】豐丸（芝居番附畫風）【名稱】内題には「戲作評判花折紙」とある。【刊行】享和二年【内容】「役者評判記」（別項）に擬して享和元年以前に發表された洒落本百七十一部の評判記である。上卷には勞頭目錄に代へて書名をあげ、紙に見立てた短評を附し、極上々吉から上に至る點を附し、更に或る諸國通修行者、意氣通島の世事が嶽に登り、己惚谷を過ぎ意氣間山籠通寫なる二人の通員人に逢ひ、共に酒呑本の評判記を編むと云ふ筋が記してある。中卷は評判記で總卷頭・立役・實惡、下卷には敵役・親父方・花車形・道外方・若女形・若衆方・色



花折紙（笹野堅氏藏）

子子役・物巻軸・頭取等に分類し、各洒落本をこれに當て各定紋に擬して落款を附け、頭取・鼎肩・惡口・見功者等の人物に依り批評せしめてあること「役者評判記」と同様である。總巻頭に金魚作「契情貿虎之巻」(別項)、立役の頭に京傳作「傾城買四十八手」(別項)、巻軸に京傳作「通言物艱」(別項)、實惡の頭は京傳作「白川夜船」、巻軸は振鷺亭作「自惚鏡」、敵役の頭は京傳作「通氣粋語傳」(別項)、巻軸には中橋作「其あんか」、親父花車形では「聖遊廓」(別項)、道外方の頭は蜀山作「道中粋語錄」、若女形の頭は京傳作「娼妓絹ぶるひ」(別項)、巻軸は京傳作「古契三娼」(別項)、若衆方の頭は穴好作「芳深交話」(別項)、色子子役の頭は喜三二作「娼妃地理記」、物巻軸には田舍老人作「遊子方言」(別項)等。最古は「兩巴扈言」(享保十三年)(別項)から、最新は「廓の櫻」(享和元年)「匂嚢」(同年)迄に及んでゐる。

【解説】この種の評判記には、前に遊里岡場所客を題材とした「客者評判記」(安永九年)及び黄表紙の批評をした「菊壽草」(天明元年)、「岡目八目」(天明三年)(各別項)がある。本書凡例には「菊壽草」を摸した由斷つてある。享和元年迄に刊行された洒落本約三百二十二部の中から百七十一部を選んだのであるが、選擇必ずしも當を得てゐないし、批評の方の部數は更にそれより減少してゐる。例へば「辰巳之園」の如き、「甲驛新話」(各別項)の如き、もつと高く評價さるべきものである。編者等も自信がなかつたと見え、阿彌陀くじに依つて決定したのだから、甲乙の差別は運であると逃げてゐる。この點「菊壽草」の著者大田蜀山だけの識見と自信とがなかつた事が分る。本書には編者の不注意に依り作者書名に誤謬が多いと共に、意識的に當局を忌憚した改題匿名が多い。故にこの點に於て本書は權威を有しない。前者の例をあぐれば、「驛舍三友」(別項)を「驛者三友」、同作者紀南子を記南子、同書の改題「馬糞夜話」を別本として取扱ひ、「中洲之華美」(別項)の作者内新好(別項)を鳶烏堂(序文に依つての誤)、「實花新驛」の作者朱樂菅江(別項)を似山、「南品傀儡」の作者青海舍を青海苔、「浮都洒美選」の作者志水燕十を喜三二(別項)、「廓節要」を「節用」、同作者樂亭馬笑を三馬(別項)と皆誤つてゐる類だ。後者の意識的に改めた例は、「南門鼠」(別項)を「美南土寐住」「錦の裏」(別項)を「廓文章」、「仕懸文庫」(別項)を「定家文庫」、「娼妓絹ぶるひ」を「將基啓蒙」、「通言總艱」を「八算物艱」の類である。これは寛政二年絶版を命ぜられた書を中心として當局に對する遠慮のためだ。特にこれ等の書中京傳作は、皆戯作とあつて彼の署名がない。これも同じ理由であらう。本書中選ばれた作者の部數をあぐれば、京傳十七部、蓬萊山人歸橋八部、振鷺亭及び梅暮里谷峨共に七部、田螺金魚及び大田蜀山(各別項)共に五部等である。以て洒落本界の代表的作家と本書編者の選擇方針とを推知するに足る。特に注意すべきは京傳である。洒落本界の第一人者とは云へ、著作總數約十九部のうち、十七部まで選ばれてゐるのは、當時の人氣にも依るが、特に前述の如く、彼の名を匿名にしてあることと共に、本書の構成に何等か關係あるを想はしめる。【價値】本書に依つて當時の洒落本の評價を推知し得る事である。「廓中奇談」「辰巳之園」「遊子方言」は同時代に出で、今日より見て殆ど同じ價値に見做し得るが、當時に於ては「遊子方言」が嶄然高く置かれた如きである。又本書に依り刊行年を明記せぬ洒落本の時代をほぼ推定し得たこと、當時奈何なる傾向の洒落本が喜ばれたかを評言に依つて窺知し得たこと等が、本書の存在を意味あらしめてゐる。〔山崎〕

鼻下長物語(はなのしたながものがたり) 黄表紙 三冊 十五丁十七圖【作者】芝全交【畫工】北尾重政【名稱】長い言葉物語の義、角書に「形容(けいよう)化景唇動(けしてかがやびをうごかす)」とある。【刊行】寛政四年、鶴屋刊行。【諸本】黄表紙十種(有朋堂文庫)所收。【題材】當時流行の早口早言に據る。【梗概】〔上册〕(1)自序、(2)法性寺の入道前の關白太政大臣、家老の三なめかけたが三かけたひつちくでつちくほうねんぼうの通だ左衞門に京の三十三間堂の佛の數が三萬三千三百三十三體あるか、また山王の猿が三萬三千三百三十三疋あるかを檢べるやうに命ずる。(3)奥方菊桐菊桐三菊桐合せて六桐六菊桐の前が、三十三間堂の佛を數へる時、のら如來のら如來三のら如來六のら如來を數に入れないやうにと通だ左衞門に傳へよと御局河原撫子の石竹に命ずる。(4)御錠口。家來の親も嘉兵衞子も嘉兵衞の二人、女中に、如何な潛戸も潛り憎い潛戸で潛られませぬから上られませぬとの口上を賴む。(5)その女中入道と奥方に口上を申上げる。殿、親も嘉兵衞子も嘉兵衞に、向ふの鶴は白鶴首か黒鶴首かあれこそほんの眞黒々の黒鶴首か白鶴首か見て參れと傳へよと女中に命ずる。(6)河原撫子の石竹奥方の口上を通だ左衞門に傳へる。〔中册〕(7)通だ左衞門奥樣の口上の返答に困つたので、女房代理となつて奥御殿で喋り立てる。(8)殿の玄關前、高野山のおけら小僧參つて長口上を申す。(9)殿の御前、親も嘉兵衞子も嘉兵衞の二人、向ふの鶴の首の詮議を鮮かに申上げる。殿二人の口の廻るのを褒められる。(10)殿の奥所、料理番出入の町人達、おのお言ひ惡い事を言ひ合つてゐる。(11)玄關番の雨合羽の半太夫、厩のまや介を呼び出して濡手で濡藁ちよとも來やれと命ずる。(12)まや介厩で埒あかずにゐる。〔下册〕(13)御錠口。使の者、商人達難しい事をいうて女中達も埒あかずにゐる。(14)通だ左衞門、三十三間堂の佛の數の檢べを終つて歸宅する。(15)殿と奥方の御前に、通だ左衞門の報告。(16)親も嘉兵衞子も嘉兵衞の二人、殿の御使者として、通だ左衞門が法性寺の入道前の關白太政大臣樣と申すべきを法性寺の入道前の關白太政大臣殿と申したことを詫める。互に埒あかず。(17)日を重ねてなほ埒あかず、通だ左衞門の女房も一緒になつて、言ひ爭ふ。(18)毎日の爭ひの果て、大晦日限りにやつと埒あき、通だ左衞門また御前首尾よく、めでたき春を迎へる。

【構想】當時世間に行はれてゐた早言或は早口といふ遊びに用ひられる言葉を取つて一部の趣向立としたものである。首尾一貫を念とするよりは、世人周知の早言を利用する機緣を多くすることに於て、嵌め込みの手腕を示さうとした。讀者の興味もともとよりその點にあつたらう。【史的地位】大に迎へられ、三馬の名作二十三部の中にも加へられてゐる。後編として翌寛政五年に「白髭大明神御渡申」を出した。これも當時子供の間に行はれてゐた白髭大明神御渡申すといひながら、下唇を反らして紙捻を抑へる遊びを利用したもの、即ち前編の子供遊び利用と縦向を同じうしてゐる。併し、これには早口は與つてゐない。早言そのものに就いては、築地善好の「相州小田原相談」(寛政七年刊)の摸倣作がある。また式亭三馬の「日本一癡鑑」(享和元年刊)がある。これには「鼻毛が三尺、智惠は三文」の角書がある。尤もこの作は文化六年に「打諢譚」と改題再版されてゐる。角書は「鼻毛は長し、百銅は短し」とある。〔山口〕

花の名殘(はなのなごり) 假名草子風 五卷【作者】不詳【刊行】貞享元年【諸本】珍説花農名殘五卷(寶曆十年板。新に序文を附け、それに玉江山人の署名がある)。浮世草紙刊行會本・近代日本文學大系第四編所收。

【梗概】武藏國淺草の里に住める藤波何某の一子、内藏介といふ美少年が、十四歳の十一し津を伴ひさまよひ出たが、途中清瀧川の早瀬に身を投げる。もし津もつづいて水に投じたが、兩人とも清水觀世音に救はれ、桂山尼の許にて出家し、諸國行脚の後東國に下り、江戸淺草の邊に亡き人の父母がゐるので、一入懐かしく、江戸の名所神社佛寺殘る所なく詣でつくし、それより鎌倉に下り、しばしの庵を結んだ、といふに終つてゐる。

【批評】筆致優雅にして氣品あり、作者は「恨之介」や「薄雪物語」(各別項)の流を汲むものと見るべく、假名草子時代より浮世草子時代に移らうとする過渡期に生れた作として一顧の價値がある。〔小泉〕

花の情(はなのなさけ) 假名草子 三卷三册【作

孫は初花の行方を尋ねても知れなかつたが、午頭天王のお告げで、その隱家を搜し當てて兩人は再會を悦び、それより初花を我が家へ伴ひ來り、夫婦仲睦まじく、一子をまうけ、竹若丸と名付けて愛でいつくしんだ。竹若十歳の時、近江の緣者から螢狩に招かれ、篠之丞親子三人、大勢の供をつれて赴いた所、途中湖水を渡る舟の中で、竹若が誤つて水に落ちて溺死する。父母は悲歎に暮れ、その夜は石山の觀音堂に通夜をしたが、夢のお告げがあり、一念發起して佛道に志し、大勢の供を置き去りにして、二人は其處より遁れ出で、或る寺に入つて剃髪し、篠之丞は清月、初花は妙海と改め、諸國修行に出で、行方が判らなくは、竹若といふ一人子が、水に溺れて死し、それを悲しんで佛門に入ることに變つてゐるが、而も共に愛兒の死を發心の動機とする事に毫も變りはない。女主人公初花の父を粟津左京といふも、左京の尼に因んだ名で、作者もその點を些か匂はせたのであるかも知れぬ。要するに換骨奪胎である事は疑ひを容れぬ。又篠之丞が、初花の居間に忍び入らうとして、不圖の難に遭ふ時、その場を遁れようとして番人を斬殺するといふ事も、少し大袈裟に過ぎ、古風な物語には餘り見ない所である。最愛の夫婦が佛門に入るはよいとして、二人が同棲し、更に前使つた二女が、共に尼となつて舊主に仕へるといふ事も、餘り都合が好過

言そのものに就いては、築地善好の「相州小田原相談」（寛政七年刊）の摸倣作がある。また式亭三馬の「日本一癡鑑」（享和元年刊）がある。これには「鼻毛が三尺、智惠は三文」の角書がある。尤もこの作は文化六年に「打諢調」と改題再版されてゐる。角書は「鼻毛は長し、百銅は短し」とある。

〔山口〕

花の名殘（はなのなごり）　假名草子風　五巻【作者】不詳【刊行】貞享元年【諸本】珍書花農名殘五巻（寶暦十年板。新に序文を附け、それに玉江山人の署名がある）。浮世草紙刊行會本・近代日本文學大系第四編所收。

【梗概】武藏國淺草の里に住める藤波何某の一子、内藏介といふ美少年が、十四歳の十一月下旬、京都洛外紫野の寺に伯父に當る人が僧となつてゐるのに預けられる。平安な三年を送つた春の或る日、江戸の母公より正月初の消息と共に、吾妻土産として江戸新吉原の傾城を書き集めた草紙を贈られる。その内に小紫といふ傾城の畫がある。内藏介この書美人に心ひかれ、遂に面色憔悴して病の牀につく。無明の迷ひをさまし、憂を慰めんと紫野をよろぼひ出で、鷹峯の吟竹庵の尼桂山の許へ佛道修業に通ふうち、偶々仁和寺の邊に住める貴人の妹おてるの前といふ姫君が、この庵に來て歌を詠み琴を彈ずる狀を垣間見て小紫に生寫しの姿に思を惱ます。遂に老尼に仕へる桂壽といふ尼を頼みて文の贈答をなし、侍女もし津を媒として契を結ぶに至る。然るに内藏介は北國なる叔父の許に送られることになり、初春の空まだ寒い越路の旅の疲れに病を得、到着すると間もなく十七歳を一期としてこの世を去つてしまふ。おてるの前は悲みの餘り鷹峯に赴いて尼とならうとして、もし津を伴ひさまよひ出たが、途中清瀧川の早瀬に身を投げる。もし津もつづいて水に投じたが、兩人とも清水觀世音に救はれ、桂山尼の許にて出家し、諸國行脚の後東國に下り、江戸淺草の邊に亡き人の父母がゐるので、一入懐かしく、江戸の名所神社佛寺殘る所なく詣でつくし、それより鎌倉に下り、しばしの庵を結んだ、といふに終つてゐる。

〔小泉〕

【批評】筆致優雅にして氣品あり、作者は「恨之介」や「薄雪物語」（各別項）の流を汲むものと見るべく、假名草子時代より浮世草子時代に移らうとする過渡期に生れた作として一顧の價値がある。

花の情（はなのなさけ）　假名草子　三巻三册【作者】未詳【別名】四人比丘尼【諸本】流布本は寶永五年版。古版の有無不明。近世文藝叢書第三所收のものは寶永版である。

【梗概】後花園院の御宇、東の京に朝日長者と云はれた猪名野某の一人子に、篠之丞と云ふがあつた。又西の京粟津左京の娘初花とて、十六の美人があつたが、折ふし千本の念佛に參詣した時、篠之丞が見染めて戀の病になつたのを、有馬といふ侍女が知つて、篠之丞に文を書かせ、初花の侍女若菜を知つてゐたから、これを頼んで二人の戀を取持ち、その後二人は、水も洩らさぬ仲となり、逢曳を續けてゐた。この事を初花の父左京が知つて大に怒り、初花を押込め、番人を附して嚴重に監視してゐる。それとも知らずに篠之丞、いつもの通り忍んで來て番人に見附けられ、危かつたが、番人を斬殺してその場を逃れ出る。粟津左京は家來共の斬殺されたのを見て益々憤り、初花を追ひ出す。初花は若菜に助けられて嵯峨なる若菜の知人の家に身を隱す。篠之丞は初花の行方を尋ねても知れなかつたが、午頭天王のお告げで、その隱家を捜し當てて兩人は再會を悦び、それより初花を我が家へ伴ひ來り、夫婦仲睦まじく、一子をまうけ、竹若丸と名付けて愛でいつくしんだ。竹若十歳の時、近江の緣者から螢狩に招かれ、篠之丞親子三人、大勢の供をつれて赴いた所、途中湖水を渡る舟の中で、竹若が誤つて水に落ちて溺死する。父母は悲歎に暮れ、その夜は石山の觀音堂に通夜をしたが、夢のお告げがあり、一念發起して佛道に志し、大勢の供を置き去りにして、二人は其處より遁れ出で、或る寺に入つて剃髪し、篠之丞は清月、初花は妙海と改め、諸國修行に出で、行方が判らなくなつた。朝日長者夫婦は一時に子や孫を失つて落膽の餘り程なく病んで死し、一家は離散して了ふ。有馬・若菜の兩人も尼となつて、行脚に出かけ、數年を經て、偶然清月・妙海の舊主二人に會ひ、爰に四人の僧尼が一緒になつて、或る夜野中の一ツ家に宿つて、不思議にも地獄の不思議を見、ます〳〵道心を堅固にして、嵯峨二尊院の邊に庵室を構へ、四人ひとしく行ひ濟まし、清月は寶德元年、三人の尼に先立つてこの世を去り、殘る尼もそれぞれ往生の素懐を遂げる。

【解説】この物語は、初めに後花園院の御宇と書き出してあり、終りにも寶德元年などその頃の年號が記してある所から、一見、室町時代の作らしく思はれるが、さう古いものでは決してない。その構想の如きも、「七人比丘尼」（別項）の左京の尼の物語に酷似してをる。左京の尼は、夫の鶴を料理する庖丁が飛んで、運わるく愛子の胸に中り、無慙の最期を遂げたのが、佛門に入る緣になつてゐるが、この作では、竹若といふ一人子が、水に溺れて死し、それを悲しんで佛門に入ることに變つてゐるが、而も共に愛兒の死を發心の動機とする事に毫も變りはない。女主人公初花の父を粟津左京といふも、左京の尼に因んだ名で、作者もその點を些か匂はせたのであるかも知れぬ。要するに換骨奪胎である事は疑ひを容れぬ。又篠之丞が、初花の居間に忍び入らうとして、不圖の難に遭ふ時、その場を遁れようとして番人を斬殺するといふ事も、少し大袈裟に過ぎ、古風な物語には餘り見ない所である。最愛の夫婦が佛門に入るはよいとして、二人が同棲し、更に前使つた二女が、共に尼となつて舊主に仕へるといふ事も、餘り都合が好過ぎ、少し眞摯を缺いて懺悔物語などにはない例で、むしろ好色本に屬するもののやうである。その他文詞についても、七五調の叙景に富んでゐるが、謡曲や殊に古淨瑠璃のくどき調などが眼につき、而も新しい詞などが調和を缺いてゐる。かた〴〵元祿前後に行はれた好色本作者の手に成つたものと思はれる。餘り行はれなかつたらしく、流布本も少く、影響など殆ど認むべきものがない。

〔水谷〕

花能萬賀喜（はなのまがき）　連歌書　一巻【著者】高山宗砌【名義】名人の附句の風體のとり〳〵なることを花の籬に譬喩したものらしい。【諸本】續群書類從連歌部に所收【成立】享德元年十月（奥書に據る）【由來】續類從本の奥書に、「享德初の年神無月の比、大和國より或少人連歌の道心得侍るべきやうを書付けて承る程に、草案などにもおよばず、かたはらにみつけ侍る此料紙を取てかやうにしるし、かの所望にしたがひ侍る。いかにぞや。宗砌在判」とあるので、本書の成つた由來が知られさうとした。讀者の興味もともとよりその點にあつたらう。【史的地位】大に迎へられてゐる。三馬の名作二十三部の中にも加へられてゐる。後編として翌寛政五年に「白髭大明神御渡申」を出した。これも當時子供の間に行はれてゐた白髭大明神御渡申すといひながら、下唇を反らして紙捻を抑へる遊びを利用したもの、即ち前編の子供遊び利用と趣向を同じうしてゐる。併し、これには早口は與つてゐない。早

る。或る古寫本の奥書には、「此一卷は、去々年九月比、依㆓自㆓和州㆒一或少人之所望㆒、頓草㆑之置(直か書)之與遣者也。然今刑部公專順(別項)寫來而令㆑見㆑之。仍又加㆓此一筆㆒了。享德三年八月二十三日。宗砌」(「連歌の史的研究」後編)とあると云ふが、これに據ると、大和の少人から云ひ來つたのが九月で、筆を執つたのが十月なのであらうか。或は九月とあるは、宗砌の記憶の違ひか、寫本者の誤寫かであらう。【解說】宗砌當時までの名家。救濟(別項)・良阿(別項)・周阿(別項)・梵灯(別項)及び自己の五人の附句、多きは二十二章少きは二章を選んで、寄合(配合)や取成の模樣と有無、故事古典の取りやう等を注意して、その手法巧拙を說明し、長高體・見樣體等の連歌の十體にも當てて說明するなど、專ら初心者のために實作について附句の作法心得を說いたものである。名人で片よる所のなかつた救濟の作を取ること最も多く、自己の作は「自讃にあらず」と云つて二章を加へたのみである。又救濟と相並んだ名手で、技巧家であつた周阿の特色も評し得てゐて、救濟との對照も窺はれる。要するに本書は、初心者に對する連歌附句の具體的な作法手引であると共に、宗砌の批評の技倆をも窺はしめるものである。【志田】

鼻峯高慢男　はなのみねかうまんをとこ　黃表紙　二册　十丁十三圖【作者】朋誠堂喜三二【畫工】戀川春町【刊行】安永六年麟形屋刊。寬政六年蔦屋再版。【諸本】黃表紙百種(續帝國文庫)・黃表紙集(近代日本文學大系)・黃表紙傑作集(三星社)。

【梗概】【上册】(一)普請倉前に上野屋萬右衞門といふ分限者があり、一子萬吉は生れつき鼻が低い。夫婦は大山不動、大小天狗に鼻が高くなるやうにと祈る。高慢になると鼻が高くなるので、乳母や手代に言ひ附けて、そのやうに仕込む。(二)成長するにつれて高慢になり、釋迦が嶽との角力に、金の力で勝たせて貰ひ、その結果、鼻が少し高くなる。(三)手習や繪の稽古をさせ、無暗に人に褒めて貰つたので、鼻が餘程高くなつた。(四)十四歲から素讀を始め、又近所の文盲な人々を金で納得させて、萬吉が師匠となり、講釋をする。(五)十七歲で、心の欲する所に向つて矩を越えずの氣取で色事を稼ぎ、吉原で一番もてて高慢大盡とよばれ、鼻が少し高過ぎるやうになる。(六)遂には光源氏・業平以上と自慢したので、鼻は天狗のやうになり、天狗に攫はれる。【下册】(七)伜の行方不明に、萬右衞門は大に驚き、てんめん院に卜はせると、天狗が誘ひ出したので三十日の間には歸るといふ。(八)大山の大天狗は萬吉を攫ひ、木の葉天狗の子の五歲の豆天狗と角力をとらせた處、投げつけられて鼻が低くなる。(九)更に書畫の書きくらべでも敗け、鼻の先を爪で彈かれて愈々低くなる。(一〇)神道・儒道・佛教に就いては小天狗に敗け、大天狗の羽團扇で撫でられ、鼻は益々小さくなる。(一一)遊興の自慢をしたところ、遊里で大天狗はもて、(一二)萬吉はふられ、鼻は生れた時のまゝになる。(一三)教育が惡くて伜をこんな者にしてしまつたと、大天狗は萬右衞門を叱つた上、萬吉をかへす。萬吉は高慢をやめ誠の人となつて榮える。

【解說】「高慢齋行脚日記」(別項)は安永五年の刊行で、諸事洒落を好み、高慢の鼻が高くなつた人々が、天狗道に墮ちて天狗になるとし、大人の各種の藝能を諷刺する。この趣向を一個人の成長に當て嵌め、精神的の高慢を肉體方面の鼻の高低に伴はせ、家庭教育の缺陷、虛榮心、形式にとらはれる弊害等に觸れて本書の趣向が出來る。赤本・黑本・青本・黃表紙の展開上に於て、黃表紙以前の作品には、庶民教育の準教材的の色彩が强い。かゝる傳統的の教育意識は、ゆくりなくも、誇張による黃表紙の素朴な手法を得て、喜三二にかゝる作品を創作せしめた事は面白い。本書が永遠に變らぬ親心に諷刺の基礎を置いてゐる事は、その刺戟が大まかで、感觸が粗であるとはいへ、當時の人々の喝采を博し得た所以であらう。結局伜には告がなく、親の育てが惡い故と結ぶところ、無暗にいろんな事を教へ込んで、子供の氣位を高くした當時の風潮を穿つた上作である。黃表紙名作二十三部の一。【小池】

花の本　はなのもと　連歌師・俳諧師稱號【用字】古くは花の下と書いたが、江戶期に入つて花の本と書くことが普通になつた。併し舊に從つて花の下と書いた例も見られる(武鑑に於ける如き)。【沿革】連歌が地下社會や庶民階級にも弄ばれるやうになつた結果、洛外の毘沙門堂や法勝寺や鷲の尾・地主、その他の花の下で、地下の閑人や隱遁者などが人を集めて連歌を興行することが流行し出した。流行し出したことの文獻上に知られるのは、定家の晚年頃である。「新勅撰集」(別項)に歌が見え、「明月記」(別項)の嘉禎元年の條に見える十念坊素俊は、「沙石集」(別項)では花下の十念坊として見えて、毘沙門堂の連歌の座で難句を附けこなした名譽譚が傳へられてゐる。素俊を花の下といふのは、自稱か他稱か解らないが、或はこの名譽の事實などからの他稱かに推せられる。「菟玖波集」(別項)には上述の花の下での興行の連歌が少からず見え、當時これ等の興行の首腦となつた人に、道生・寂忍・無生・十佛その他のあつたことは、「筑波問答」や「菟玖波集」(各別項)などによつて知られ、又「筑波問答」によると、後嵯峨院や二條關白道平などの如き高貴な方々が、花の下の興行へ微行觀覽されるほどであつた。上述の如き人々にやゝ後れて達人であつた善阿でも、その弟子で名人であつた救濟でも、貴顯の師たると共に花の下の群衆をも導いたのである。また花の下の興行は漸く鎌倉などでも摸倣されるに至つたのである。かくて連歌が地下社會、庶民階級の間に愈々一般的な擴大と流行をなして行つた結果、地下の連歌師が、花の下の輩(井蛙抄)、花の下の好士(筑波問答)、花の下の連歌師(太平記)、花の下の衆(落書露顯)などのやうな云ひ方をされ、かゝる云ひ方が一般的になつたのは、大凡そ鎌倉期の末か南北朝期の初め頃あたりからと推せられよう。然るにその頃は、地下社會の向上にも伴つて、地下の連歌及び地下の連歌師の內容地位が高まつて來、從つて花の下の興行が室內の興行へ轉換されるやうになつて來てゐたので、上述の花の下の連歌師などいふ言葉は、漸く事實から離れた稱呼的なものとなりつつあつたのである。かくて南北朝期の末頃には、花の下の興行が殆ど廢滅に歸し(新札往來)、花の下といふ言葉は愈々地下の連歌師を呼ぶ稱呼となるべきものとなつたのである。連歌の中心は固より地下へ移つて行つて居り、南北合一後、連歌が地下中心に益々隆盛を來したのであるが、この時、時の連歌界の棟梁宗砌(別項)が、文安五年に北野聖廟連歌會所の奉行となつて宗匠と號することになり、これより以後、この奉行人となれば宗匠と稱する例となつたのであ

る(北野會所連歌新法・實隆公記)。宗砌以後、能阿・宗伊(名別項)等が會所の奉行人となつたが(竹林抄・親長卿記)、これ等の名家に繼いで斯界の大立物となつた宗祇が、長享二年三月に將軍義尙の命によつて會所の奉行となり、四月五日會所開の初會を催し(實隆公記)、「あらぬ名をかるや天彦時鳥」の謙遜な發句があつた(下草・和語抄)。この時、この句を立句として卷いた百韻が「花の本開百韻」として傳はる由であるが、未見であるので確かなことは云へぬけれども、宗祇がこの時花の下の稱を允されたと云ふやうな事の知られる確實な資料も得られぬから、若し花の本開といふ語が宗祇の附したものであつたとすれば、それは地下連歌及び花の本を允許され、それが貞室・貞恕と繼承されたとの傳へが、元祿・寶永頃から見えて來るが(貞德永代記・雜談集・歷代滑稽傳)、これには確證よりも寧ろ反證が考へられるので、確實な事實としては、時代が遙かに降つて、寬政二年に曉臺が二條家から俳諧の宗匠花の本を允許されたのが最も早いであらう。この後今日に至るまで、花の本の允許は九代に及んでゐて、その歷代を示すと次の如くである。

久村曉臺—高桑闌更—成田蓑虫—田川鳳朗—櫻井梅室—堤梅通—八木芹舍—上田聽秋—澤秋郎(現)

なほこの間に、芭蕉が天保十四年百五十回忌に際し、二條家から花の本大明神を追贈されてゐる(聲の栞・うなゐ髮)。

して出てゐるもので、それに千手觀音云々を追加して二種の去嫌を規定されたので、その意味で本書の追加と云つて見たものらしい。

【解說】俳諧の式法は、和漢聯句とその式法をほぼ等しうするものであるが、その制はよほど寬である。本書は和漢聯句の式法に基づき俳諧の式を定めたものである。即ち指合・去嫌の難に陷り易い詞を集めて、去嫌ふべき句數及び同一又は類似の詞を含む句數を制定し、それ〴〵の語、また事象の解說をも併せ施したのである。その去嫌ふべき詞は、頭音によつていろは順に集めたのである。以上は本書の主要な部分であるが、この後に、四季その他同一主題を有する句を何句續けて附けるべき千閒主人と共に、作者の偲偏である。【名稱】詳しくは「古今奇談英草紙」。「古今奇談」は內容を表はすと共に、支那小說「今古奇觀」を粉本としたことを示す。見返しに「古今奇談前編」とあるは、續編として「繁夜話」「莠句冊」「垣根草」(各別項)の三部の奇談集があるからである。又「英草紙」といふは詞の花なきを自遜せる意味。【刊行】寬延二年【諸本】一般に流布されてゐるのは、寬延二年九月印行の繪入五册本で、有朋堂文庫・日本名著全集等の所收本は、それを底本としたものである。【題材】「英草紙」は多く支那小說を飜案したもので、これが後代に影響する事の多いにつけ、その典據調べは早くからなされてゐた。「拍掌奇談古

る（北野會所連歌新法・貴隆公記）。宗砌以後、能阿・宗伊（名別項）等が會所の奉行人となつたが（竹林抄・親長卿記）、これ等の名家に繼いで斯界の大立物となつた宗祇が、長享二年三月に將軍義尙の命によつて會所の奉行となり、四月五日會所開の初會を催し（實隆公記）、「あらぬ名をかるや天彦時鳥」の謙遜な發句があつた（下草・和語抄）。この時、この句を立句として卷いた百韻が「花の本開百韻」として傳はる由であるが、未見であるので確かなことは云へぬけれども、宗祇がこの時花の下の稱を允されたと云ふやうな事の知られる確實な資料も得られぬから、若し花の本開といふ語が宗祇の附したものであつたとすれば、それは地下連歌師の連歌開といふ謙遜の意のものであつたらう。併しそれと共に、宗祇自身花の下と稱したかどうかは知られないが、假令稱しなかつたとしても、百韻の名に花の本とある點から、他が宗祇が花の下と稱した如く解し、奉行人として稱する宗匠と花の下とを同一不可分のものの如く解するには至り得る筈である。かかる關係から、この後宗匠が私稱として花の下を名乘ることは有り得るし、又宗匠の稱も會所の奉行人でなくても稱するやうになつて行つたのであるが、併しこれ等について云ひ傳へられる勅許といふことには、確實な資料が得られず、また二條攝政康道（千丸。貞德門。寬文六年薨）が花の下の稱號允許の勅許を得たと傳へられることも（野史）、千丸と貞德との關係及び貞德についての所傳との關係から、やゝ早きに過ぎる疑ひがあり、二條家が花の本の稱號を允許したのは、早くは專ら連歌師の方で、俳諧の方で允許したのは曉臺が初めであらうと思はれる。俳諧に於て貞德が宗匠

及び花の本を允許され、それが貞室・貞恕と繼承されたとの傳へが、元祿・寶永頃から見えて來るが（貞德永代記・雜談集・歷代滑稽傳）、これには確證よりも寧ろ反證が考へられるので、確實な事實としては、時代が遙かに降つて、寬政二年に曉臺が二條家から俳諧の宗匠花の本を允許されたのが最も早いであらう。この今日に至るまで、花の本の允許は九代に及んでゐて、その歷代を示すと次の如くである。

久村曉臺―高桑闌更―成田蓼虬―田川鳳朗―櫻井梅室―堤梅通―八木芹舍―上田聽秋―曾澤秋部（現なほこの間に、芭蕉が天保十四年百五十回忌に際し、二條家から花の本大明神を追贈されてゐる（聲の栞・うなゐ髮）。

【參考】文中記載以外○連歌の史的研究前篇　福井久藏　○今是庵漫筆　粟津水棹（獺祭昭和六・三・四）○花の本と貞室及び宮廷　滕峰晉風（黃檗昭和六ノ一〇）○貞德傳の吟味　志田義秀（潮音昭和六・七年）○馬鹿集　藤井紫影（懸葵昭和七ノ七・八）

〔志田〕

噓草（はなびぐさ）　俳諧式目　一册　【撰者】野々口立圃　【名稱】噓草の文字は、「鼻火草」「花火草」とも書く。【名義】自序に、「見る人我をおもふべければなり」とある。【成立】奥書に永十三年二月二十三日親重と自署してある。【由來】指合や打越の難に陷るべき詞の數々を試みに集めた旨自序にある。本書の成立は右の如く寬永十三年二月二十三日であるが、卷末に追加と標記して破蓋子（烏丸光廣）の「地藏頭に蓼すりこぎ、面を嬢古來の制也。これをおもふに、千手觀音とたこの入道と折をへだつべき歟。餘はなぞらへてしるべし」といふおどけた文があつて、この中の地藏頭云々は「誹諧初學抄」（別項）の卷頭に打越を嬢ふとして出てゐるもので、それに千手觀音云々を追加して二種の去嫌を規定されたので、その意味で本書の追加と云つて見たものらしい。【解說】俳諧の式法は、和漢聯句とその式法をほぼ等しうするものであるが、その制はよほど寬である。本書は和漢聯句の式法に基づき俳諧の式を定めたものである。即ち指合・去嫌の難に陷り易い詞を集めて、去嫌ふべき句數及び同一又は類似の詞を含む句數を制定し、それ〴〵の語、また事象の解說をも併せ施したのである。その去嫌ふべき詞は、頭音によつていろは順に集めたのである。以上は本書の主要な部分であるが、この後に、四季その他同一主題を有する句を何句續けて附けるべきかを規定し、二句・三句・五句を隔てずしては附け難い物の名を擧げ、面八句の附方を說き、發句の切字、賦物の事を述べ、體用及び體用外の詞を集め、和漢篇の略則を揭げなどして、最後に四季の詞を十二月に分つて類聚した。この中、賦物の事までには簡略な說明が添へられたが、體用・體用外の詞以下には說明はない。さて本書に說く所は、撰者の師貞德の式法に基づいたもので、即ち貞德が自己の所懷を撰者をして本書に述べさせたのであると傳へられる。又本書梓行後、撰者はこれを增補訂正して寬文四年六月「鼻火大全」の著をなしたが、寬文八年七月小川景三によつて「花火綱目」が梓行された。その後延寶六年に至り、「鼻火大全」に貞德の「御傘」（別項）を參酌して誰人かが「增補はなひ草」を著はした。かくして本書を土臺とした書册は數種あるに至つた。

〔各務〕

英草紙（はなぶさし）　讀本　五卷五册　【作者】近路行者著、千里浪子正。千里浪子は序の十

千閒主人と共に、作者の傳偶である。【名稱】詳しくは「古今奇談英草紙」。「古今奇談」は內容を表はすと共に、支那小說「今古奇觀」を粉本としたことを示す。見返しに「古今奇談前編」とあるは、續編として「繁夜話」「芳句册」「垣根草」（各別項）の三部の奇談集があるからである。又「英草紙」といふは詞の花なきを自遜せる意味。【刊行】寬延二年【諸本】一般に流布されてゐるのは、寬延二年九月印行の繪入五册本で、有朋堂文庫・日本名著全集等の所收本は、それを底本としたものである。【題材】「英草紙」は多く支那小說を飜案したもので、これが後代に影響する事の多いにつけ、その典據調べは早くからなされてゐた。「拍掌奇談古加良志草紙」（寬政三年刊）、「近古談諸越の吉野」（天明三年刊）の序等にそれが見える。即ち「馬場求馬妻を沈めて樋口が聟と成る話」は「古今小說」の「金玉奴棒打薄情郎」を、「豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話」は「警世通言」の「俞伯牙摔琴謝知音」を、「三人の妓女趣を異にして各々名を成す話」は「醒世恒言」の「三孝廉產立高名」を、「高武藏守婢を出して媒をなす話」は「古今小說」の「裴晉公義還原配」を、それ等は又「黑川源太主山に入つて道を得たる話」の取つた「莊子休鼓盆成大道」と共に「今古奇觀」にも收められ、「後醍醐帝三たび藤房の諫を折く話」の「警世通言」の「王荊公三難蘇學士」は、「小說粹言」（寶曆八年刊）にも見えるものを飜案し、また「馬場求馬」の話は「玉帶木」（別項）の「禪僧船中橫死」を、「高師直侍女」の話は「波路の文匣」を聯想せしめ、「三人の妓女」の話は「七人比丘尼」（別項）の趣を加味する等、我が國の古典籍中のものをも取つて構成されたものである。

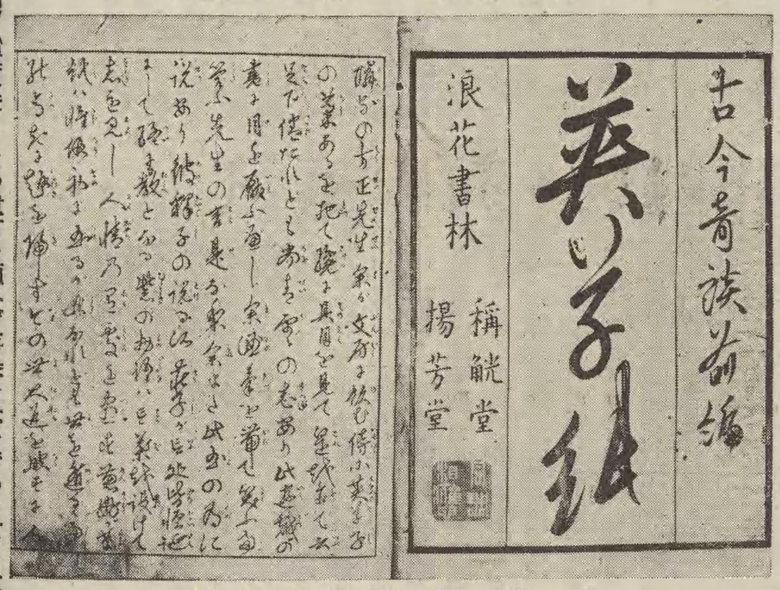
られ、鼻は生れた時のまゝになる。（一三）教育が惡くて伜をこんな者にしてしまつたと、大天狗は萬右衞門を叱つた上、萬吉をかへす。萬吉は高慢をやめ誠の人となつて榮える。

【解說】「高慢齋行脚日記」（別項）は安永五年の刊行で、諸事洒落を好み、高慢の鼻が高くなつた人々が、天狗道に墮ちて天狗になるとし、大人の各種の藝能を諷刺する。この趣向を一個人の成長に當て嵌め、精神的の高慢を肉體

晩年頃である。「新勅撰集」（別項）に歌が見え、「明月記」（別項）の嘉禎元年の條に見える十念坊素俊は、「沙石集」（別項）では花下（はなのもと）の十念坊として見えて、毘沙門堂の連歌の座で難句を附けこなした名譽譚が傳へられてゐる。素俊を花の下（もと）といふのは、自稱か他稱か解らないが、或はこの名譽の事實などからの他稱かに推せられる。「菟玖波集」（別項）には上述の花の下での興行の連歌が少からず見え、當時これ等

行が殆ど湮滅に歸し（新撰菟玖波集の花の下といふ言葉は愈々地下の連歌師を呼ぶ稱呼となるべきものとなつたのである。連歌の中心は固より地下へ移つて行つて居り、南北合一後、連歌が地下中心に益々隆盛を來したのであるが、この時、時の連歌界の棟梁宗砌（別項）が、文安五年に北野聖廟連歌會所の奉行となつて宗匠と號することになり、これより以後、この奉行人となれば宗匠と稱する例となつたのである

【梗概】〔第一篇〕（後醍醐帝三たび藤房の諫を折く話）後醍醐帝に仕へてゐた藤房は、帝が速水某に賜はつた歌の古歌なるを知らず、その意を難じて「東の歌枕見てこよ」と命ぜられ、武藏の田夫に教へられて罪を闕下に謝する。又帝が深く佛教を信じて下々にもよからぬ風俗が多かつたので、色々故事を説いて諫めたが用ひられず、又日頃逸遊に耽けられるを、雲州から天馬が獻上された折をよい序として諫め、沈魚落雁の論爭となるが、すべて帝の博識に壓せられ、官を辭して去る。〔第二篇〕（馬場求馬妻を沈めて樋口が聟と成る話）天文の頃江州に乞食の頭があつた。既に富めるに拘らず、人交らひの叶はぬを歎き、その職を甥に讓り、一人の娘には馬場求馬といふ浪人を婿に取つた。馬場は沒落した軍師の家を興さうと勵み、遂に若狹の武田家に仕へることになつたので、素性の賤しい妻を厭ひ赴任の途に妻を湖に沈めるが、はしなくも武田家の權臣樋口某に救はれる。その後馬場は樋口の女を娶ることになる。その女實は原の妻であつた。馬場は深く恥ぢて罪を謝し、こゝに二人は前緣を全うする。〔第三篇〕（豐原兼秋音を聽きて國の盛衰を知る話）豐原兼秋は家の傳あつて音樂に通曉する。元弘の亂後、鳳管をとり還城樂を吹き、主上の還幸を豫知する。又伊豫國に宣旨の使となつて橫尾時陰といふ音樂の天才と兄弟の契を結び、再び訪れて彼の死に會ひ、琴の殘れる時逸を知るとその遺言を顧みず再緣を急いでゐる女をみて情ないことに思ひ、妻に語り聞かせた。妻はひどくその不貞を罵つたが、やがて源太主が歿し、未だ十日も經たぬうちに弟子の道龍を口說き落し、且つ道龍のために亡夫の腦髓を取らうとして棺を破る。巾で源太主は生き返り、その貞心を試みるために仙家の幻術によつたことを示す。妻は慚愧の末縊死する。〔第五篇〕（紀任重陰司に至り滯獄を斷くる話）弘安年中、紀任重といふ者があつた。才學もあり、亂世に處するほどの人物でもあつたが、用ひられないので天地を怨み、我若し閻羅王の事をなせば公正を期すと獨語して眠ると、身は天上玉帝の怒にふれ、いつか地府に來つて公事を決することになり、文治建久の頃から未だ決しない三通の告狀を選んで裁決し、罪せらるゝも賞せらるゝも皆屈服する。玉帝は深く讃歎し、來世に志を得させるといふかと思ふと忽ち眼が覺めた。不思議な夢だと隣家の翁に語ると、間もなく瞑目して逝つた。〔第六篇〕（三人の妓女趣を異にして各名を成す話）備後の尾の道に容色歌舞に秀でた名高い三人姉妹の遊女があつた。姉の都產は廣瀨十郎といふ者と夫婦の契を結んだが、志を得ずに死んだ。廣瀨は生前の約束により、その人の形見を先壠に埋め、一生娶らなかつた。妹の檜垣は遊女たるを賤しとせず、客を騙し金を奪つては散じ、又奧州の商人に請け出されたが、大病を裝うて歸され、昔の如く客を迎へ、善根の人の大往生の如く終つた。季の鄙路は俠氣があつて人を殺した者を平氣で匿つたこともあつた。小身者の倅平四郎と深く馴染み、その國の名士三上に從はなかつたので、三上は渡守勘平をして二人の仲を割かうとして果さず、遂に平四郎を殺す。或る夜鄙路は三上と勘平とを殺して行方を晦ました。〔第七篇〕（楠彈正左衞門不戰して敵を制する話）出羽の大山城主武藤義氏は武勇に誇り、相傳の家來東禪寺をして隣郡川北の七士を討ち亡さんとした。七士は會合して防戰の計を議し、楠彈正左衞門の謀略に從つた。義氏はその計によつて東禪寺を謀反者と見誤り、自身川北に向つたが、豫て用意の川水が切られて渡れず、本城もその虛を衝かれなどして進退決せずに心迷ひ、尊海といふ修驗者の占に從つて毎日四方二里の外に忍び出た。かくて七士は義氏の微行を襲ひ、楠は彼につめ腹を切らせた。〔第八篇〕（白水翁が賣卜直言奇を示す話）文明の頃、白水翁といふ賣卜者があつた。茅渟官平といふ士を見て今月今夜三更に死すとトふ。意外の事に士は怒つたが、果してその夜投身した。やがてその妻は權藤太といふ者を入れて夫婦となつた。その後國守は異形の亡者が願狀を奉る夢を見て不審に思ひ、その願狀の意の解を求めると、嘗て茅渟の家に使はれた女が、その主家の竈の下に先主人の亡靈を見た事や、その屋上に怨靈が現はれて金子と末期の句を認めた紙片とを與へられた事を告げた。國守は頷いて茅渟の家を檢せしめると、官平の屍を獲たので、遂に權藤太夫婦は白狀した。彼等は人知れず不義をし、官平を殺して井中に隱し、その上に竈を移し、面を隱して走り出で、大石を橋の上から投げて投身の如く見せたのであつた。二人は死罪に處せられた。〔第九篇〕（高武藏守婢を出して媒をなす話）足利尊氏の執事高師直は、知らずして婚約のある女を婢としてゐる。師直は時々微行して下情を視察するが、偶然その夫たるべき士に遇うて怨言を聞いた。士は固より執事たることを知らない。彼は直義に用ひられ、備州の郡吏にされて赴く途に難に遭ひ、身を逃れて都に歸つたところ直義は出奔してゐない。執事に告ぐるたよりなく、又たとひ達するとしても、人の妻女を取り上げる程の無道人では、その甲斐もあるまいと憤慨し、東京獨笑小三・おせつ（風狂丸）、水府豐山公（會川若松）、渡邊飛驒之介・大關和一郎（嵐德丸）、轟興膳・大西三郎右衞門（三桝福丸）、有村治左衞門（尾上卯三郎）等。



英草紙（見返し・初頁）

【梗概】〔序幕〕（洛東祇園社内）齊昭等は家康の遺訓を遵奉して鎖國攘夷論に一決した。水戸藩京都留守役鵜飼幸左衞門の一子幸吉は、水戸藩へ攘夷の勅書を賜はるやう村岡局へ嘆訴する。井伊大老より家臣長野主膳への密書を所持する飛脚が、洋酒を鯨飲して醉ひ倒れるので、幸吉は密書を奪ふ。主膳は開港許可の勅書御下附を運動してゐる。〔二幕〕（山王の境内）幕府の政策を判定する祈願も、今日が滿願。將軍名代の籠中奏の前は、騷然たる參詣、東京獨笑小三・おせつ（風狂丸）、水府豐山公（會川若松）、渡邊飛驒之介・大關和一郎（嵐德丸）、轟興膳・大西三郎右衞門（三桝福丸）、有村治左衞門（尾上卯三郎）等。

【梗概】〔序幕〕（洛東祇園社内）齊昭等は家康の遺訓を遵奉して鎖國攘夷論に一決した。水戸藩京都留守役鵜飼幸左衞門の一子幸吉は、水戸藩へ攘夷の勅書を賜はるやう村岡局へ嘆訴する。井伊大老より家臣長野主膳への密書を所持する飛脚が、洋酒を鯨飲して醉ひ倒れるので、幸吉は密書を奪ふ。主膳は開港許可の勅書御下附を運動してゐる。〔二幕〕（山王の境内）幕府の政策を判定する祈願も、今日が滿願。將軍名代の籠中奏の前は、騷然たる

品である。

【參考】讀本の發生山口剛（文學思想研究第四）（笹野）

英派（はなぶさ）　繪畫【解說】英一蝶から出た畫風で、よく人情の機微を穿ち世態の矛盾を寫し、滑稽味・諷刺味を出し、輕快の筆に世の視聽をあつめた。その畫材は時代の風俗、日常生活、古物語、和漢の故事等甚だ廣く、その筆法は狩野の法格に準據したもので、着色に於ては土佐の法を參酌してゐる。その洒脫で奇智に富んでゐる點が世の風尙に迎へられ、一世に行はれた。

【英一蝶小傳】一蝶は本名多賀治右衞門信香、承應元年大阪に生る。父伯菴は石川侯の侍醫であつた。寬文六年、父に從つて江戸に來住した。翌日師直は彼を自邸に召して事情を告げ、自ら媒して婢を嫁がせ、又官に任じた。

【構想】支那小說の趣向を飜案し、時には逐語に譯し、而も奇構を主としてそれに多少の敎訓の意を持たせてゐる。その飜案の態度は、人物事件を我が國の歷史に採り、現實的情味を持たせてはゐるが、なほ支那思想の二三分を殘してゐるものが多く、夫婦・親子の倫理觀や女性觀等に、支那臭を帶びるものがある。併し史實に拘泥せず、自由に解釋し批判してゐる。【史的地位】上方の浮世草子が衰頽し、支那文學の流行した時代に現はれた作品である。眼前尋常の世相を寫した浮世草子の外に、珍奇異常の世界を見ようとした一般の要求と

した。翌日師直は彼を自邸に召して事情を告げ、自ら媒して婢を嫁がせ、又官に任じた。【構想】支那小說の趣向を飜案し、時には逐語に譯し、而も奇構を主としてそれに多少の敎訓の意を持たせてゐる。その飜案の態度は、人物事件を我が國の歷史に採り、現實的情味を持たせてはゐるが、なほ支那思想の二三分を殘してゐるものが多く、夫婦・親子の倫理觀や女性觀等に、支那臭を帶びるものがある。併し史實に拘泥せず、自由に解釋し批判してゐる。【史的地位】上方の浮世草子が衰頽し、支那文學の流行した時代に現はれた作品である。眼前尋常の世相を寫した浮世草子の外に、珍奇異常の世界を見ようとした一般の要求と長崎の通事や徂徠學派の人々などに鼓吹されて流行した支那の俗文學の影響と、前期の「御伽婢子」「狗張子」(各別項)等の短篇異聞集の形式とが相結んで、この「英草紙」を生み出したのである。なほ新しい要素と色彩とを以て上田秋成の「雨月物語」(別項)や建部綾足の讀本の先驅となり、馬琴等の讀本を生み出す動因ともなつた。これを以て本書は讀本(別項)の祖と稱される。【價値】「古今奇談」の名を冠し、「御伽婢子」以後の怪異小說の流にありながら怪異の分子は少く、全般を通じて現實的情味が認められ、或は當時の思潮の半面を表現して單調平板の弊に陷らず、特殊の興味を起さしめる。その文章は國文の上より見て誤謬は多いが、漢文の遒勁を交へて捨て難い趣があり、後の讀本の文章の大成を誘導したものである。併し本書の價値は寧ろ文學史的に多く認められるもので、浮世草子の衰頽した時代の小說界によく清新の氣を注入し、後の江戸期の讀本を誘發した史的意義の甚深な作品である。

【參考】讀本の發生　山口剛(文學思想研究第四)　(世野)

英派(はなぶさは)　繪畫【解說】英一蝶から出た畫風で、よく人情の機微を穿ち世態の矛盾を寫し、滑稽味・諷刺味を出し、輕快の筆に世の視聽をあつめた。その畫材は時代の風俗、日常生活、古物語、和漢の故事等甚だ廣く、その筆法は狩野の法格に準據したもので、着色に於ては土佐の法を參酌してゐる。その洒脫で奇智に富んでゐる點が世の風尙に迎へられ、一世に行はれた。

【英一蝶小傳】一蝶は本名多賀治右衞門信香、承應元年大阪に生る。父伯菴は石川侯の侍醫であつた。寬文六年、父に從つて江戸に來住し、俳諧を芭蕉に學び、俳號を曉雲と稱した。初め狩野派の畫を學び、後、土佐派をも學んで新風を出した。貞享年中、剃髮して朝湖と稱した。元祿六年八月、罪を得て捕へられ、同十一年十二月、伊豆三宅島に流された。寶永六年九月、赦されて江戸に歸り、前名を改めて一蝶と稱し、母方の花房姓を名乘つて英一蝶と稱した。かくて書名益々上つたが、享保九年正月十三日歿した。享年七十三。子に一蝶信勝・一蜩信祐がある。

櫻田雪盛忠美談(はなふぶきせいちゆうびだん)　脚本　九幕二十四場【作者】勝諺藏。但し父能進加筆(役割番附には作者として父の名が記されてゐる)。【別名題】「櫻田雪誠忠美談」「近世櫻田雪紀聞」【興行】明治六年二月大阪若太夫芝居、三桝舍五郎座初演。

【役割】高橋庄三郎・堀織部の正(實川延次郎)、水府九郎丸・初田市五郎(尾上多見丸)、初田市左衞門、喧嘩嫌ひ正五郎(坂東芝三郎)、島田左近(尾上多見太郎)、山野邊主水の正・料理人金五郎(實川延若)、東京勇者小三・おせつ(嵐珏丸)、水府國山公(實川若松)、渡邊飛驒之介・大關和一郎(嵐德丸)、轟興膳・大西三郎右衞門(三桝福丸)、有村治左衞門(尾上卯三郎)等。

【梗概】【序幕】(洛東祇園社內)齊昭等は家康の遺訓を遵奉して鎖國攘夷論に一決した。水戸藩京都留守役鵜飼幸左衞門の一子幸吉は、水戸藩へ攘夷の勅書を賜はるやう村岡局へ嘆訴する。井伊大老より家臣長野主膳への密書を所持する飛脚が、洋酒を鯨飮して醉ひ倒れるので、幸吉は密書を奪ふ。主膳は開港許可の勅書御下附を運動してゐる。【二幕】(山王の境內)幕府の政策を判定する祈願も、今日が滿願。將軍名代の籠中奏の前は、騷然たる物情を嘆く。(同別當大廣間の爭論)三度迄も引く神鬮は大老の開港說が大吉、齊昭の攘夷說が大凶とある。が大吉は凶へ、大凶は吉へ返ると言ふ齊昭の主張を一蹴して、大老井伊は急進主義の淺慮を攻擊し、隱忍して實力を養ふべきを說く。この時水戸藩の家老安藤帶刀は、齊昭攘夷と稱して反逆の企てあるにより永蟄居に命ぜられ、鵜飼父子は死刑に處せられたことを急報し、怒る齊昭に自重を祈り、後日君の意を承くる志士の出現あらんと慰める。(喰違御門內)月夜。村岡局より齊昭宛ての勅書に關しての密書を圖らずも入手した彥根の家老岡本半助は、大老の披見に入れる。鐵砲の音。併し大老は安泰。薩藩の有村治左衞門が短筒を持つて現はれ、三人三樣の暗試合。【二幕の奧】(小塚原のだんまり)鵜飼幸左衞門の首級が曝されてある。有村と水戸藩の家老、山野邊主水正とが、同時にそれを奪ひ返しに來て互に驚愕する。柳橋の藝者男嬬ひの小三と鳶頭神田與吉とが絡み、だんまり。遂に有村の鐵扇を主水正が、首級を有村が拾得する。【三幕】(常陸長岡村入口)山野邊主水正は、長岡村志津明神の境內に藩士が屯集評議したことを聞き知り、齊昭の信念を繼承する志士であると覺る。續々と義徒は脫走して行く。同志の黑澤忠三郎は、山野邊より祕かに本意を問ひ訊されるので、大老を非難し、井伊の首級を揚げるための脫走だと言ふ。山野邊はその成功を祈る。【四幕】(麻布十番有村の道場前)水戸藩江戸詰の關鐵之助は、森五六郎に出會ひ、近々に義擧のあることを知つて加盟する。そして當日、各人が懷中する趣意書を受取る。竹刀の響。武者窓より隙見をした關は、門人と爭ひ、前の書面を落して立ち去る。有村は文面に依つて水府の義徒と知り、跡を追ふ。(關の妾宅)關に世話になつてゐるおいのは、孝行煙草屋と諱名された娘で、眞心に感動しつつも、關は飮めぬ酒を口にして別離の盃をする。有村は先刻の弟子への侮辱の復讐をするが、大事の前の小事と耐へる。とこの文書のために我慢するのかと落した手紙を示すので、一喝斬り込む關の早業。有村は鵜飼幸左衞門の甥に當る素性を打明け、國賊暗殺の心願を明かし、同心の義徒を得たと喜ぶ。【五幕】(水戸街道松戸宿の棒鼻)揮の重吉が亂暴武士を懲戒する。そして掲示された御時節の布告を、無學の雲助達へ讀んでやる。珍らしい雲助に山野邊主水正は何事か合點し、千住までの荷物を預ける。(千住本陣の門前)水戸領の百姓が、殿樣の永蟄居、若殿樣のお國詰を惡大老の陰謀となし、役向きへ訴訟するために山野邊への面會を强請する。(同本陣の庭先)鄭重な客あしらひを受け、家來の案內で山野邊に會ふ事となる。(同廣間)

案内された重吉を圍繞して近習が十手で打つて掛かる。山野邊も鎗にて立ち向ふ。そして佐分利流の鎗術に鍛錬せる人物は有村ならんと見破り、小塚原にて拾つた鐵扇を示す。二人は肝膽相照らす。〔六幕〕（蓮田市五郎の住居）手跡誹曲指南の表札ある茅屋。病床にある父市左衞門は、妹お君まで世話になり、嫁おせつの氣苦勞を感謝する。おせつは同志黒澤忠三郎の妹で夫も兄も脫走した今日、ただ大事成就を祈る健氣さ。市五郎歸宅し、義擧を思ひ止まつて生糸の輸出で利潤を得るが當世で、大老の先見に敬服したと言ふ。泣き口說くおせつ。父は商法第一と罵つた倅を褒める。豫期に外れた市五郎、七ツに同志集合のため書置を認めて出奔する。（同家の裏手）庵主雲念坊と獵師音藏が、蓮田親子の素性を探る。彦根の家臣長野主膳より賞金を貰ふ積りである。（同元の部屋）出立する市五郎へ、おせつと妹が改心を迫る。父市左衞門は切腹。その着物の袂より息子の本心を見抜いた遺書が顯はれる。おせつも倅市松を殺害して自殺する。別離の盃。〔七幕〕（品川新宿山崎屋の入口）長野主膳の舍弟伴五郎は、藝者小三に執心で、女が料理人金五郎（實は黒澤忠三郎）と譯ありと誤解し、理不盡を言ひ掛ける。金五郎は女嬶ひだと痰呵を切る。喧嘩嬶ひの元締庄五郎の仲裁で落着。（同庭先）酒宴。伴五郎に山崎屋の女房お咲が、女には情人がある故思ひ切る方が得策だと諫め、小三に目顔で知らせつつ金五郎を急拵への色男とする。立ち騒ぐ伴五郎。有村は時節も辨へぬ彦根の家來であらうと叱咤する。（同雛れ座敷）庄五郎は元水戸藩の仲間で黒澤忠左衞門（忠三郎の父）に助命された事があり、後、彦根の焚出し御用の先代庄五郎の養子となつて今の身の上。金五郎の忠三郎へ恩返しのため、明日は彌生の節事について相談するため下阪した時、大谷友右衞門に勸誘されて阪地に留まり、若太夫の芝居に出勤、著作に筆を染めた（尤も父能進も加筆したが）最初の作品である。彼はこの脚本の好評に依り、大阪劇壇に確實なる地位を獲得したと言はれてゐる。脚本としては、當時未だ評判の高い櫻田事件を手早く取り上げ、而も平板ではあるが、變化あり興趣深き目先本位の脚色は、後の諺藏の手腕を暗示し、期待と賞讃とをかち得た記念すべき脚本である。本作の續編として翌年二月同座で諺藏（當時彦輔）作「櫻田雪後日文談」が上演された。

【解說】勝諺藏が、明治四五年頃、父能進へ家句で井伊の登城あれば、その際斬り込めと敎へ、兵糧の準備を引受ける。水戸の浪士全部集合、明日の戰術を勘考する時、圖らずも立ち聽きした小三を馴染がひに忠三郎が介錯しようとした時、小三は元水府の家來小島傳內の息女であり、忠三郎の許嫁と分る。有村は雛段の官女の首級を忠三郎に斬らせ、この場の成敗を濟ます。小三は尼法師となり、義士の忠死を弔ふ心底。〔八幕〕（櫻田門外）饅頭笠に赤合羽の義徒達。刻限五ツ。大老の行列。有村の呼子の響。齋藤監物の短筒の音。亂鬪亂擊、遂に有村が大老の首級を揚げる。（上杉家屋敷前の辻番）岡本半助は、大關和七郎・稻田重藏と戰ふ。（元の櫻田門外）岡本、稻田を刺殺す。彦根の家臣等が主君の首級なきに驚愕するのを、岡本は御一命に恙はないと駕籠の扉を閉める。（辻番前）蓮田市五郎・齋藤監物は、有村が首級を揚げた事を欣喜雀躍する。（汐留橋上）關鐵之助は、自訴しようとして果さず氣絕する。妾おいの取縋つて悲歎の涙。（元の辻番前）敵と斬り結び、大老の首級を抱へながら有村は謠を唄つて悠然。佐野竹之助等に首を渡し、國許へ立ち去らせる。取り圍む捕方を睥睨しつつ、辻番の衝立へ「岩がねも碎けざらめや武士の國のためと思ひ切る太刀」と辭世の歌を殘して切腹する。〔大詰〕（町奉行所白洲）浪士の頭領蓮田市五郎が出頭。池田播磨守と石垣（異本石谷）因幡の兩人が取調べる。池田の優しい訊問に、提出した趣意書を讀み上げ世事を慷慨する。池田は井伊家の斷絕を嘆り、大局に注目すべき事を諭し、大老は未だ生存の體裁とし、義徒には仁慈を以て切腹を命ずる。市五郎感激して服罪する。

【參考】早稻田文學（舊）雜組三〇〇歌舞伎研究（一四）〇近世實錄全書（明治の實錄第二）〇大阪每日新聞（六八四二）〇大阪朝日新聞（一七二六・六六五七）　〔尾澤〕

花見踊（はなみをどり）　所作事　浮世風俗物　【解說】長唄もので、元祿當時の花見の樣を舞踊化したものに新舊の二種がある。「元祿花見踊」（別名題、昔歌舞伎元祿踊）は、明治十一年六月新富座が新築落成の開場式の餘興に出したもの。作詞は竹柴瓢助、作曲は三代杵屋正次郎、振附は花柳壽輔である。內容は元祿風俗の丹前風の侍、女伊達・奴・座頭・番匠・花賣・丁稚・侍女・町娘・田舍娘等いづれも華美な服裝をして、各自の思ひ〳〵の藝盡しから賑やかに打連れて踊りぬく。曲は全部二上りの陽氣な花見らしい氣分の手が附いてゐて、極めて調子の高い唄である。歌舞伎の所作事としては後出の新花見踊が出來て以來、本曲の方は殆ど舞臺に上らないが、作曲が傑れてゐるため曲は今日でも非常に流行してゐる。「小袖模樣」（別名題、元祿花見・元祿小袖幕・元祿花見踊等）は、明治三十八年三月、歌舞伎座初演、複本虎彦の作、作曲は五代杵屋勘五郎、振附は藤間勘右衞門（勘翁）である。內容は御殿山の花盛りに、俳諧師と醫者、奴を連れた丹前風の武士、伊達小袖の紅繪賣、座頭、若衆、町奴、町娘、鮨賣等が出て來て思ひ〳〵の藝盡しのシヌキの振事、若衆の跡をつけて來る薩摩侍など陽氣に浮れ騷ぐ。小袖幕の中から遊女勝山（かつやま）が出て踊を所望され、大江山鬼退治の手を使つて樽人形を面白く舞はす。後は總踊となる。この曲は芝居以外には殆ど演奏されない。　〔秋葉〕

【參考】長唄正本〇長唄全集（日本音曲全集）〇劇音樂と所作（町田博三（演藝畫報合同五ノ五）

花見車（はなみぐるま）　俳諧評判記　四册　【著者】室賀轍士（匿名で書かれたが、北條團水は轍士と推した）。轍士は京都の人、江戸に住み、風翁・佛狸齋・東鮒庵と號した。西山宗因門。寶永四年歿す。【刊年】元祿十五年三月　【諸本】俳諧系譜逸話集（俳書大系）・俳文學大系俳論篇所收。　【由來】著者の由來書によると、田舍の一俳諧師が入京し、壬生念佛を見て茶店に立ち寄つた所を、白狐の化身たる切髮の一美女に誘はれてその家へ赴き、古今點者の比較論、殊に當時の京の點者の墮落を聞かされ、時の俳諧者流を島原の遊女に見立てて品定めをすべきことを勸められて書いたのが本書であるとある。出板元井筒屋庄兵衞は著者の請人に擬して、跋の代りに請狀を書いてゐる。【解說】貞德以下京・大阪・江戸を初め、諸國の點者にして編集に名の見えた者を古今の別なく拉し來り、既記の如くこれ等を島原の遊女その他になぞらへて品騭したものである。卽ち上の點者を太夫、次を天神、その次を關（更に次を見世等になぞらへ、又北むき（江戸のかし、大坂のあわざし・きんちゃく・夜鷹（江戸の惣嫉・なべ・しゃく・うき身（越後）・あんにや（伊勢）・現妻（げんさい）（紀伊）・たいこ女郎・禿（かむろ）・引舟等、その位・格・身上等に隨つて各點者をそれ〴〵嫖客に接する女の身分にたとへなどして品定めをした。

定宗	阿誰	陽川	洞水	万蝶	落水
浮芥	鬼貫	半隱	定明	春之範	杏雖
鵜界	支十	如圓	三雄	笑雀	伊井中
休計	素堂	岩翁	一鉄	卜尺	松風
杉風	宮良	一十竹	尺草	百里	氷花
仙化	鋤立	琴風	秋色	横几	子珊
史邦	祖志	潮哇	知月	水節	乞刈

者を太夫、次を天神、その次を關（更に次を見世等になぞらへ、又北むき（江戸のかし、大坂のあわざし・きんちゃく・夜鷹（江戸の惣嫉・なべ・しゃく・うき身（越後）・あんにや（伊勢）・現妻（げんさい）（紀伊）・たいこ女郎・禿（かむろ）・引舟等、その位・格・身上等に隨つて各點者をそれ〴〵嫖客に接する女の身分にたとへなどして品定めをした。

點者のことに限らず俳諧に關する一般の事象も、大凡そ廓關係の言葉を押し當て、評言の如きも總て廓言葉を以てした。その見立乃至評判が、どの程度まで肯綮に中るか否かは聊か疑ひなきを得ぬものもあるが、これは當時の風習を知る上に興味ある資料である。

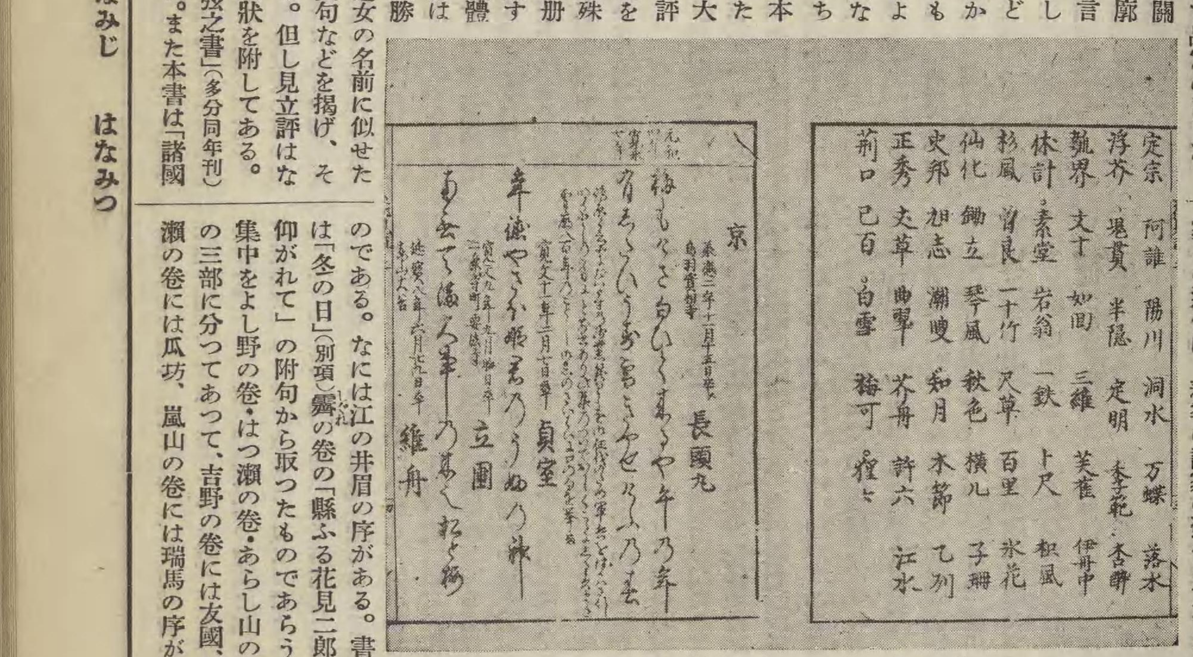
【梗概】足利尊氏が西國より上つて將軍となつた時、最も功のあつたのは赤松律師則祐である。その臣に岡部と云ふ者があり、新參ではあつたが、文武の道に秀で、播磨西八郡を賜はつた。然るに未だ子のないのを悲しんで佛に祈誓し、やがて靈夢によつて一子を儲け、その名を花光と名づけた。靈夢は共に花を賜はると見て青葉の一葉が散る所であつた。岡部は赤松の名代として京の勤番を勤め、その中召使との間に一子を儲けてこれを月光と名づけた。大番も過ぎて岡部は月光母子を具して國へ下り、武家の例を案じて花光を書寫山に

花見二郎（はなみじらう）　俳諧集　半紙本一册　【編者】黒華庵升六　【刊行】寬政十二年　【諸本】近世俳諧名家集（俳書大系）所收。　【內容】吉野・初瀨・嵐山三ケ所の花を見廻つた時の諸家との連句に、春季の諸家の發句を加へたもの。（各務）

花道都良禰（はなみちのつらね）　狂歌師・俳優　【閱歷】四代市川團十郎の實子で、天明二年伊德

者を太夫、次を天神、その次を囃。更に次を見世等になぞらへ、又北むき（江戸のかし、大坂のあわざし）・きんちゃく・夜鷹（江戸の惣嫁）・なべしゃく・うき身（越後）・あんにゃ（伊勢）・現妻（紀伊）・たいこ女郎・禿・引舟等、その位・格・身上等に隨つて各點者をそれ〴〵嬉客に接する女の身分にたとへなどして品定めをした。

點者のことに限らず俳諧に關する一般の事象も、大凡そ廓關係の言葉を押し當て、評言の如きも總て廓言葉を以てした。その見立乃至評判が、どの程度まで肯綮に中るか否かは聊か疑ひなきを得ぬものもあるが、本書の如き形式による點者の品隲は、蓋し特異なものである。本書四册のうち第一册は著者の由來書及び本文中の特殊な語句を註解した目錄に當て、第二册は、京・大阪の點者のそれ〴〵の見立評を記して、各家の發句・著述を紹介し、見立評に用ひた特殊な語句を頭註にした。第三册は江戸及び諸國の點者に關する部分であつて、その組織體裁は前册に同じく、第四册はやゝこれと趣を異にして、「勝名井編集之作者」と題し、遊女の名前に似せた替名を以て全國の點者の發句などを揭げ、それぞれの俳名を註してある。但し見立評はない。その終りに井筒屋の請狀を附してある。なほ團水は「花見車評判鳴弦之書」（多分同年刊）を出板して本書を攻擊した。また本書は「諸國咄」と外題を替へて、寶永三年九月に再刊されてゐる。



花見車（松宇文庫藏）

花見二郎　はなみじらう　俳諧集　半紙本一册　【編者】黃華庵升六　【刊行】寬政十二年　【諸本】近世俳諧名家集（俳書大系）所收。　【内容】吉野・初瀨・嵐山三ケ所の花を見廻つた時の諸家との連句に、春季の諸家の發句を加へたもの丹前風の侍・女伊達・奴・座頭・番匠・花賣・丁稚・侍女・町娘・田舍娘等いづれも華美な服裝をして、各自の思ひ〳〵の藝盡しから賑やかに打連れて踊りぬく。曲は全部二上りの陽氣な花見らしい氣分の手が附いてゐて、極めて調子の高い唄である。歌舞伎の所作事としては後出の新花見踊が出來て以來、本曲の方は殆ど舞臺に上らないが、作曲が傑れてゐるため曲は今日でも非常に流行してゐる。「小袖曾我」の外題を替へて、寶永三年九月に再刊されてゐる。　【各務】

花見二郎　はなみじらう　俳諧集　半紙本一册　【編者】黃華庵升六　【刊行】寬政十二年　【諸本】近世俳諧名家集（俳書大系）所收。　【内容】吉野・初瀨・嵐山三ケ所の花を見廻つた時の諸家との連句に、春季の諸家の發句を加へたもの丹前風の侍・女伊達・奴・座頭・番匠・花賣・丁稚・侍女・町娘・田舍娘等いづれも華美な服裝をして、各自の思ひ〳〵の藝盡しから賑やかに打連れて踊りぬく。曲は全部二上りの陽氣な花見らしい氣分の手が附いてゐて、極めて調子の高い唄である。歌舞伎の所作事としては後出の新花見踊が出來て以來、本曲の方は殆ど舞臺に上らないが、作曲が傑れてゐるため曲は今日でも非常に流行してゐる。「小袖曾我」の外題を替へて、寶永三年九月に再刊されてゐる。　【各務】

いてゐる。なほこの三部に、そこの本物の櫻のおし花が着けてあつて、升六の物數寄を思はせるが、これは配り本であつたからである。

【著者小傳】升六は大阪の人で、不二庵二柳に學び、翁堂三世を嗣いだが、これを夜來に讓り、正風道場などと稱した。無憂庵の別號がある。寬政七年一茶（別項）が讃州から大阪へ來た時、升六を訪うて交を重ねた事は、その「旅拾遺」にも「冬の日註解」の序にも見えてゐる。編著には、本書の外に「冬の日註解」「俳諧新深川」の二種がある。文化十三年九月三日歿した。享年未詳。　【穀川】

花道都良禰　はなみちのつらね　狂歌師・俳優　【閲歷】四代市川團十郎の實子で、天明二年俳德藏初舞臺の時、江戸の狂歌師連より祝ひの狂歌を贈り、寬政年間には烏亭焉馬（別項）が「御江戸鰹鰒」以下七部の書を著はしてその技藝・逸話等を稱してゐる。寬政八年俳優を廢業して向島寺島村に隱栖し、恬澹無慾ただ風流韻事に心をゆだねて一生を送つた。「狂歌知足振」に據ると、都良禰の狂歌社中を堺町連といひ、通小紋息人（市川扇車）・櫻田つくり（櫻田治助）・御最屓つみ綿（瀨川路考）・志月庵素庭・松本燕斜外二十四名がその社中に屬してゐる。その著書に、「白猿友なし猿」一册（寬政九年刊）「今日歌白猿一首」一册（寬政十一年刊）があり、追善集としては「追善珠數の親玉」一册（文化四年刊、烏亭焉馬）がある。（市川團十郎の項の五代目を見よ）　【野崎】

花みつ　はなみつ　御伽草子　一卷　【作者】未詳　【成立】實記としても年代は足利上期の末で、恐らくは中期位の作であらう。　【諸本】寫本は京都帝國大學國文學研究室藏。御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系卷十九所收。　【題材】繼子物語の系統と兒物語の系統を併せ引いてゐる。　【梗概】足利尊氏が西國より上つて將軍となつた時、最も功のあつたのは赤松律師則祐である。その臣に岡部と云ふ者があり、新參ではあつたが、文武の道に秀で、播磨西八郡を賜はつた。然るに未だ子のないのを悲しんで佛に祈誓し、やがて靈夢によつて一子を儲け、その名を花光と名づけた。靈夢は共に花を賜はると見て靑葉の一葉が散る所であつた。岡部は赤松の名代として京の勤番を勤め、その中召使との間に一子を儲けてこれを月光と名づけた。大番も過ぎて岡部は月光母子を具して國へ下り、武家の例を案じて花光を書寫山に遣り、やがて月光をも遣はした。二人とも容顏人に勝れ、心も淸かつたので、一山の人で思を寄せない者はなかつた。その中でも花光は母が本妻で、四季の事に心を配つてくれたから凡ての事に不自由はなかつた。然るにこの母が病となり「我ともかくならば、定めてあたらし殿の世となるべし、只汝は思ひ切つて法師となり、我が後世を弔ふべし」と遺言して果敢なくなる。折節戰亂があつて岡部は京へ上る。隨つて花光への送りも乏しくなつた。岡部は歸つて書寫山を訪ねたが、坊主は岡部の機嫌を見て花光を出さなかつたので、花光は師と父との心を損じたと誤解して遂に死を決した。從者松王丸に、大夫・侍從の二人の僧を呼ばせて月光殺害の事を賴んだ。二人の僧は月光に變裝をした花光を誤まつて殺してしまつた。それで月光・大夫・侍從・松王丸の四人は高野山に上り、岡部は書寫山の別當と共に奥山に籠つた。かくて順緣逆緣皆菩提の道を得たといふことである。　【小木】

花名所懐中暦（はなめいしょくわいちゅうごよみ）　人情本四編十二冊【作者】狂訓亭主人（爲永春水）【畫工】溪齋英泉【名稱】「梅暦」（別項）が當つたので、更に暦と名の付く作品を發表したのであるが、内題には「おさん茂兵衛」と角書がある。即ち近松の「大經師昔暦」（別項）に因んだのである。【刊行】初・二編天保七年。三編天保九年。四編天保十年。【題材】「大經師昔暦」のおさん・茂兵衛を篇中の主人公・女主人公とし、大經師以春をおさんの舅としてある。更にこれに歌舞伎の「浮名の額」（元祿十五年）、「浮名の立額」（文政二年）等の額の小三・金五郎を篇中の人物にとり入れてゐるが、この小三は却つて茂兵衛に戀ひしてゐる。

【梗概】經師屋以春は、表面は經師屋で裏面は高利貸の俄分限、息子の以三郎は、もと立派な商人であつた正右衛門の娘お三を金に飽かして嫁に迎へたが、婚禮の式場から熱病に罹り、一年足らずで死んだ。正右衛門も死去して後は繼母ばかりなので、お三は里にも歸られず若後家でゐるうち、舅以春はお三に不義の戀をしかけ、夜毎に迫るので、お三は耐へきれず、中野なる繼母の許へ逃げ歸つた。以春は戀の叶はぬ遺恨で、僞證文をつくり、離緣狀がほしくば二十兩の貸金を返せと云ふ。何も知らぬ繼母は村役人立合の上、お三の身を賣つて始末をつけようと約束する。然るにお三が熱病に罹つたので、以春も手をつける事が出來ぬ。そのうち繼母も死んだので、お三は衰へた身でわびしい獨り住ひをしてゐる所へ見舞に來たのは、經師屋の隣家に住む富豪の息子茂平で深切に慰めてやる。お三は涙ながらに身の不幸を語り、更に村役人の息子與吾作が横戀慕して時々因らせに來る事をも訴へる。そこで茂平は大に同情し、その夜密かに駕籠を雇ひ、お三を乘せて身を隱させようと企てた。すると途中で與吾作の仲間に襲はれて茂平は川中に投げ込まれ、お三は奪はれてしまつた。茂平は漸く助かつて歸宅したが、不幸なお三の身の上を思ひて戀しさも增し、鬱々としてゐる。義母は心配し、彼の稽古に行く町藝者豐浪に茂平の内情を聽いてくれと依頼する。豐浪は氣鬱の基はお三であらうと推察し、今額田原屋のお職額の小三と云ふのが、或はそのお三ではないかと茂平に教へる。早速出かけて見ると全く別人であるが、容貌態度がよく似てゐるので、茂平は深く馴染み、互に深くなつていつた。或る夕暮茂平が家路に歸らうと船宿に來た時、落ち合つたのは朋友袋物屋金五郎である。舟中での雜談の末、二人共馴染は小三と分り、金五郎が怒つて茂平を打たんとするはずみに、却つて水中に落ちた。船頭は直ぐ飛び込んで探したけれども行方が知れない。茂平は別に手を下して殺したのではないが、これを種に惡船頭角兵衛は折々茂平を强請る。彼は思案に餘り、玉川の畔に住む玉川亭月成と云ふ狂歌師に匿まつて貰ふつもりで訪れると、丁度旅行中で意外にも豐浪が留守してゐる。月成は彼女の實父で今は此處に身を寄せてゐたのである。そこで兩人は戀仲になつてしまふ。額の小三は茂平を慕ふ餘り病死してしまつた。一方、お三は惡漢共に引かつがれ、既に危い折柄、相撲花王島が助け、引取つて女房おとせと共に深切に介抱してくれた。病氣は全快したけれども、主人の留守中おとせが大病に罹つたので、お三は締多川の唄女となつて三吉と名のり、その金をおとせに貢いだ。豐浪は父と茂平に貢ぐため、婦多川親知（しんち）（新地）から唄女となつて現はれ、茂平には近所に小間物商賣をさせ、折々逢ふのを樂しみにしてゐたが、茂平は圖らずも三吉と面會し、昔の苦勞を物語り深い仲となつた。豐浪も今は豐吉と名のつたが、これを知れど嫉妬もせず往來した。彼の金五郎は川中に落ちたが、丁度借財に苦しめられてゐる最中であつたから、これを幸に一時身を隱してゐたのである。再び歸つて來て茂平が自分のために苦勞したのを知り、氣の毒に思ひ、彼の實家に話し込んだので、茂平は歸宅して豐浪を本妻にし、三吉を別に圍つて樂しく暮した。これを探り知つた經師屋以春は、古證文を持つて實めに來たが、居合せた玉川亭月成に舊惡を一喝され、這々の態で逃げた。金五郎も昔の情人お花と夫婦になり、三吉の同輩勘吉も情人巳三郎に圍はれて三吉の隣家に住み、皆睦しく往來したのであつた。

【解說】筋は人情本にお定りの、不自然極まるものであるが、局所々々の情景は、春水の油の乘つた時の作だけあつて、かなり趣がある。玉川の月夜、婦多川の賑はしさ、巳三郎宅に若者が集まつて騷ぐ雪の朝等、町人の實生活を髣髴せしむるだけの魅力をもつてゐる。人物としては額の小三の情熱、お三の無邪氣さなど、かなりに描かれてゐる。【山崎】

花紅葉（はなもみぢ）　詞華集・【著者】鹽井雨江・武島羽衣・大町桂月【刊行】明治二十九年十二月、博文館。【解說】所謂美文韻文集であるが、實質に於て大學擬古派詩人の代表詞華集として注目せられ、同年から翌三十年にかけて廣く行はれた美文の一體に、一種の散文詩的欲求をみたし得るものとして、この書は一時青年晴讀の的であつた。美文十八篇、韻文十六篇、うち韻文は羽衣八篇、雨江四篇、桂月四篇を收め、羽衣の「ぬれ燕」「詩神」、雨江の「磯の笛竹」「秋の蝶」「たゆたふ駒」、桂月の「琵琶瀧」「野末の伏屋」など佳篇の評があつた。桂月は、序に「美文や韻文やひとしくこれ詩なり。而してその字句に拘束あるものを韻文といひ、拘束なきものを美文といふ云々」といつてゐる。彼等三人の青春性の新文學意識とが、自ら在來の雅語古文にならひながら、その間、一種清新の思想聲調に富んでゐたところが、魅力として時代性を標識せられた所以である。【月夏】

花楓劍本地（はなもみぢつるぎのほんぢ）　浮世草子　大本五卷【作者】八文字屋其笑・同瑞笑と序後に署してあるが、「列傳體小說史」は多田南嶺を實際の作者と推定してゐる。【刊行】寬延二年、八文字屋八左衛門板。【解說】序の中に「昔々近松平安劍本地といへる謠曲を著述せしを思ひ出ししより云々」と謂つてゐるのは、近松作の「柏狩劍本地」（別項）を指すものと思はれるが、内容的には兩者の關係は餘り密接ではない。淨瑠璃では平惟茂の寶劍にまつはる物語を筋としてゐるが、この作品の筋は全然異なる。その筋は足利將軍義政の家臣市川物達入道、逆心を懷いて將軍家の重寶紅葉丸・戸隱丸の名劍を奪つたが、忠臣の努力に依つてお家安泰となるといふのであつて、純然たるお家騷動物である。この作品の文章には、所々にやゝ異色ある敍述があるため、南嶺作と推定されるのであるが、それだけの理由では未だ斷定することは出來ない。【吉田】

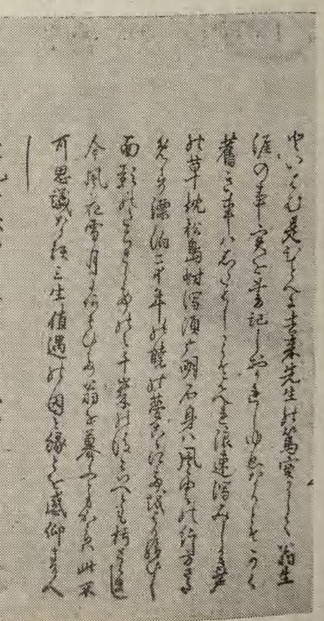
花守（はなもり）　詩集【著者】横瀨夜雨【刊行】明治三十八年十一月、隆文館。【解說】「文庫」の同人であつた小島烏水・瀧澤秋鶚・伊良

子清白・河井酔茗・千葉江東（龜雄）等五人の序は執れも友情の溢れた推薦の辭であるが、就中清白の一文はよく情理を盡して當時夜雨の身邊を知る究竟の文獻でもある。「夕の光」を卷頭に二十九篇の詩を收む。そのうち、「夕の光」「殯宮」「森の家なる」「沼にて」「獨木舟」「天なる光」「人故妻を逐はれて」「なづさふ野火」「やれだいこ」「湖の畔にて」「富士を仰ぐ」等は佳作として數へられる。夜雨自身も特に選んで以上の作を「雪燈籠」（昭和四年梓書房）にも轉載してゐる。これ等の作は明治三十三年より三十八年に亙つて作られ、殆ど皆「文庫」に出てゐる。右の諸作中「人故妻を逐はれて」は殊に優れた情調で感動を與へた。また「やれだいこ」の振附である。初代壽輔は、明治の名優達を敎へたこと、「戻橋」その他の振附をしたこと、花柳流といふ特色ある流儀を初めたこと等が注目せられる。彼は一時劇場附の振附師であつたが、九代目團十郎と隙を生じて劇場を退いた爲め、振附師としての力を十分に發揮する機會に惠まれずに終つたが、現代の家元は、新しい舞踊の方面にも力を盡し、近くは劇場附の振附師ともなり、花柳流發展の道を開いてゐる。【小寺】

花屋日記（はなやにつき）　俳書　二冊【編者】僧文曉。花屋菴奇淵校。【名稱】題簽に「芭蕉翁反古文（ほごぶみ）」とあり、内題に「翁反古（ほごつづ）」とあつて、下註に「終焉日記」とあり、序文に「芭蕉談終焉の事を記し置たる反古文を集めて」とあるによつて、「花屋日記」と名づけたことが定説となつてゐるが、文曉の自序には、去來・土芳・卓袋・昌房等の手記及び物語を收め、下卷には、十月十六日から二十九日までの間の去來・其角・松尾半左衛門・露沾の終焉追悼遺物等に關する書簡を收めてゐる。又所々頭註が附せられてゐる。

【考證】文曉の自序には、去來の記錄し置けるものの如く記してあり、從來芭蕉終焉時の基本的記錄と信ぜられて尊ばれて來たものであるが、實は僞書「俳諧芭蕉談」（別項）の第五篇であり、今日ではその僞書であることが定説となつてゐるから、見やうによつては參考にならないことはない。

【參考】芭蕉談第五篇終焉之卷について・芭蕉翁傳書後（黒田源治（芭蕉翁傳）○花屋日記と續猿蓑（樋口功（芭蕉研究）【志田】



子清白・河井酔茗・千葉江東（龍雄）等五人の序は孰れも友情の溢れた推薦の辭であるが、就中清白の一文はよく情理を盡して當時夜雨の身邊を知る究竟の文獻でもある。「夕の光」を巻頭に二十九篇の詩を收む。そのうち、「夕の光」「殯宮」「森の家なる」「沼にて」「獨木舟」「天なる光」「人故妻を逐はれて」「なづさふ野火」「やれだいこ」「湖の畔にて」「富士を仰ぐ」等は佳作として數へられる。夜雨自身も特に選んで以上の作を「雪燈籠」（昭和四年梓書房）にも轉載してゐる。これ等の作は明治三十三年より三十八年に亙つて作られ、殆ど皆「文庫」に出てゐる。右の諸作中「人故妻を逐はれて」は殊に優れた情調で感動を與へた。また「やれだいこ」も純なる感傷詩であつて諧調の上からも、當時青年士女の間に盛んに愛誦されたものである。形式は「獨木舟」の前半と「やまめとり」といふ詩が五七であるだけで、他は凡て七五の調である。夜雨の詩は七五調で一貫したと云つてもよい。「花守」以前に處女詩集「夕月」（明治三十二年）一册がある。その詩は「花守」には一篇も加へてゐない。「二十八宿」（別項）の方に幾篇か加へてある。「花守」は「二十八宿」と共に夜雨の代表的詩集であつて、兩書いづれを優るとも定め難い。「花守」が他の詩集に見るやうな美しい裝幀でなく、極めて簡單な小册子として世に出たのは、妙な對照であつた。併し一部の間には永く鑑賞された詩集である。

【河井】

花柳流（はなやぎりう）　舞踊【名稱】流祖の姓による。【解説】當流の發生は新しく、初代花柳壽輔（じゆすけ）は西川流（別項）に出で、一派を開き、明治三十六年、八十三歳で歿した。その子芳三郎が二代目壽輔を名乘り、今東京歌舞伎座附の振附である。初代壽輔は、明治の名優達を敎へたこと、「戻橋」その他の振附をしたこと、花柳流といふ特色ある流儀を初めたこと等が注目せられる。彼は一時劇場附の振附師であつたが、九代目團十郎と隙を生じて劇場を退いた爲め、振附師としての力を十分に發揮する機會に惠まれずに終つたが、現代の家元は、新しい舞踊の方面にも力を盡し、近くは劇場附の振附師ともなり、花柳流發展の道を開いてゐる。

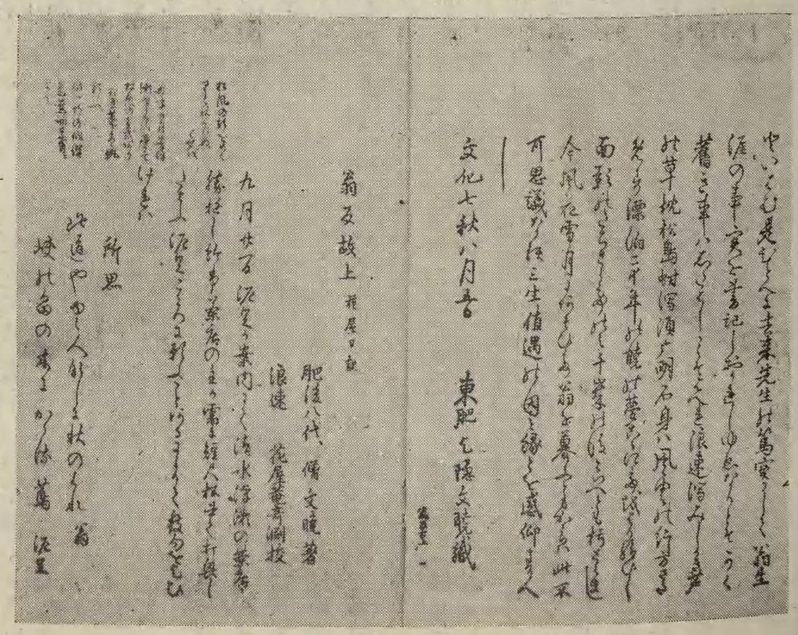
【小寺】

花屋日記（はなやにつき）　俳書　二册【編者】僧文曉。花屋菴奇淵校。【名稱】題簽に「芭蕉翁反古文（ほごぶみ）」とあり、内題に「翁反古（ほごぶみ）」とあつて、下註に「終焉日記」とあり、序文に「芭蕉談終焉實記」とある。然るに稿本には、これ等の題名はなく、題簽に「芭蕉談第五篇」とあり、内題に「芭蕉談五篇」、序文に「芭蕉談五篇終焉之巻」とあるのみである。されば刊本に見る三種の題名は、編者或は校者が刊行にあたつて附したものであらう。然るに天保複刻本には「花屋日記」とあつて、この題名は、芭蕉の病歿した大阪御堂前花屋仁左衞門方に於ての門人等の日記の意味で書肆の與へたものらしく、從來この書名が一般的なものとなり來つてゐた。【刊行】文化八年【諸本】牧野望東・星野麥人校訂の「芭蕉翁花屋日記」、籾山梓月校訂の「花屋日記」、黒田源治編の「芭蕉翁傳」の一部となつてゐる稿本の「芭蕉談五篇終焉之巻」俳書大系の「俳諧系譜逸話集」中の「芭蕉翁反古文」がある。又俳諧一葉集・俳諧袖珍抄・芭蕉全集（沼波瓊音編）等の遺語の部には或る部分が採られてゐる。【内容】上巻には、元祿七年九月二十一日から十月十二日までの芭蕉の旅行・病中・終焉・葬送について、その間近侍した門人從者、即ち惟然・次郎兵衞・支考・去來・土芳・卓袋・昌房等の手記及び物語を收め、下巻には、十月十六日から二十九日までの間の去來・其角・松尾半左衞門・露沾の終焉追悼遺物等に關する書簡を收めてゐる。又所々頭註が附せられてゐる。

【考證】文曉の自序には、去來の記錄し置けるものの如く記してあり、從來芭蕉終焉時の基本的記錄と信ぜられて尊ばれて來たものであるが、實は僞書「俳諧芭蕉談」（別項）の第五篇であり、今日ではその僞書であることが定説となつてゐる。「笈日記」「枯尾花」「芭蕉翁行狀記」（各別項）その他のものによつて僞作されたことは明かなもので、文章も同一人の手に成つたものであることを示してゐる。芭蕉を「翁の凡人ならざるをしるべし」と云つたり、その他凡て事實が誇張されてゐることも、可なり時代の降るものであることを證してゐる。部分的の事實でも、園女を惟中の妻としてゐる如き、「誹諧家譜」（別項）の誤を襲うたものなどがあつて、これ等からも時代が考へられる。又稿本と比べると、本文にも加除が施されて居り、頭註も刊行の時に施されたもので、それに花屋庵や奇淵編の「袖草紙」の事を云へるなど、本刊本には校者奇淵の手入あることが考へられる。かく本書は信を置き難いものであるが、取つた材料には確實なものもあるのであるから、見やうによつては參考にならないことはない。

【參考】芭蕉談第五篇終焉之巻について・芭蕉翁傳書後（黒田源治（芭蕉翁傳）○花屋日記と續猿蓑（樋口功（芭蕉研究）

【志田】



花屋日記（松宇文庫藏）

花四天（はなよてん）「立廻」を見よ。

花よの姫の草子（はなよのひめのさうし）　御伽草子三巻【成立】室町期【諸本】古板本には刊記がない。「近古小説解題」は「京雀」と同時代かと推定してゐる。【題材】童話。「鉢かつぎ」系統の繼子物。申子の出世談。沼津觀音靈驗談。嫁比べと小袋の奇特は「鉢かつぎ」（別項）と同型。「岩屋の草子」（別項）の嫁比べも同趣

知らぬ繼母は村役人立合の上、お三の身を賣つて始末をつけようと約束する。然るにお三が熱病に罹つたので、以春も手をつける事が出來ぬ。そのうち繼母も死んだので、お三は衰へた身でわびしい獨り住ひをしてゐる所へ見舞に來たのは、經師屋の隣家に住む富豪の息子茂平で深切に慰めてやる。お三は涙ながらに身の不幸を語り、更に村役人の息子與吾作が橫戀慕して時々困らせに來る事をも訴へ今は此處に身を寄せてゐたのである。そこで兩人は戀仲になつてしまふ。額の小三は茂平を慕ふ餘り病死してしまつた。一方、お三は惡漢共に引かつがれ、既に危い折柄、相撲花王（さくら）島が助け、引取つて女房おとせと共に深切に介抱してくれた。病氣は全快したけれども、主人の留守中おとせが大病に罹つたので、お三は綿多川の娘女となつて三吉と名のり、その金をおとせに貢いだ。轟浪は父と茂平に貢

など、かなりに描かれてゐる。

【山崎】

花紅葉（はなもみぢ）　詞華集・【著者】鹽井雨江・武島羽衣・大町桂月【刊行】明治二十九年十二月、博文館。【解説】所謂美文韻文集であるが、實質に於て大學擬古派詩人の代表詞華集として注目せられ、同年から翌三十年にかけて廣く行はれた美文の一體に、一種の散文詩的欲求をみたし得るものとして、この書は一時青年晴讀の的であつた。美文十八篇、韻

戸隱丸の名劍を奪つたが、忠臣の努力に依つてお家安泰となるといふのであつて、純然たるお家騒動物である。この作品の文章には、所々にやゝ異色ある敍述があるため、南嶺作と推定されるのであるが、それだけの理由では未だ斷定することは出來ない。

【吉田】

花守（はなもり）　詩集【著者】橫瀨夜雨【刊行】明治三十八年十一月、隆文館。【解説】「文庫」の同人であつた小島烏水・瀧澤秋暁・伊良

向。山姥傳説が混じてゐるのが異色である。

【梗概】駿河國富士の裾野近くの山里に住んでゐた豐後守もりたかといふ長者は、正觀音に申子の祈誓を籠めて一女を得、花よの姫と名づけて育んでゐた。姫は九歳で生母に死別し、繼母に憎まれて十四歳の時うばが峯に捨てられたが、泣く〳〵火影を頼つて岩穴の中に山姥を見出し、道を教へられて里に出で、中納言たゞふさの家に火たきに傭はれてゐるうち、その末子の宰相に見染められて契を結んだ。宰相は姫を乳母の許に隠して置いたが事露はれ、宰相の母は二人の兄の妻及び妹と美人比べをさせた結果、花よの姫は、山姥から貰つた小袋の中から現はれた品々で裝ひを凝らしたので、宰相はその美しさに驚き且つ喜び、館の内に移らせた。やがて新築の御殿が出來上つて、姫は何不自由なかつたが、兎角沈みがちな有樣に、その素性を聞き知つた宰相は、もりたかに便りして事の由を告げたので、父子はめでたく再會した。宰相は婿に迎へられて世を譲られ、丹後守もりいゑと名を改めて繁昌した。繼母は行方知れずになつた。もりたかは皆沼津の觀音の守護であるとて堂宇を建て、二十人の僧を置いて朝夕の勤をさせ、中納言の姫を改めて妻とした。

【參考】近古小説解題○近古小説新纂初輯「ふせやの物語」考説　〔島津〕

花園子貪家物語（はなよりだんごくらべものがたり）　黄表紙　三册　十五丁十九圖　【作者】曲亭馬琴述、山東京傳校。【畫工】未詳【刊行】寛政五年【題材】「精進魚類物語」（別項）（一名、魚鳥平家）に據る。

【梗概】精進物の大將、初春の屠蘇酒の娘衣被姫は、生臭物の大將、千鯛方へ輿入する事に

きまる。屠蘇酒の輿方、菱餅御前が雛棚の内裏へ參内の折、千鯛の執權、初鮭の弟、口鹽の鱈が醉つて亂暴をし、菱餅御前の從者のために懲らされる。鮭は淺慮で鱈の言葉を信じて精進物の無禮を怒り、赤鰯に大將屠蘇の刺殺を命ずる。歳暮の牛蒡を背負つて忍び込んだ赤鰯を素麺が生捕る。屠蘇は赤鰯を調べて陰謀を知り、寒餅に言ひつけて鰹節小刀で胴斬にする。屠蘇は千鯛方へ嫁した娘を鹽打の豆煎に取返させる。鮭鱈は軍勢を集めて屠蘇の館へ攻め寄せんとする。衣被姫の附人の柏餅は諫言し、笠子の干物、干河豚のために殴打され、千鯛の腰元蛤が介抱する。鹽打の豆煎は衣被姫にその由を傳へると、姫はこの事件は千鯛の與り知る所でないから、眞相が分るまでは歸らぬといひ、腰元共も氣色ばむ。柏餅は鮭や鱈の惡事を見限り、姫を館の外にかくまふ。柏餅夫婦が駈落の夢を見てゐる所へ、屠蘇の家臣初春のひら昆布、鮭の執事さし鯖が衣被姫を出せとつめかける。柏餅夫婦は娘の月見の團子の首を身代りとする。鮭は千鯛に勸めて屠蘇の城を攻めたが、素麺の伏兵のために却つて千鯛が捕虜となる。鮭は屠腹し、鱈は鱈昆布で縛られ、精進と生臭が和睦する。鮭は葦簾でまいて故郷に送られる。千鯛は素麺の手引で衣被姫に會ふ。

【解説】「精進魚類物語」の鯛の赤介味吉と、沖の昆布の太夫の娘磯の若布との結婚を引上げて全部に渡る筋とし、鮭の大介鰭長と赤介の位置を交換し、事件の發端、鰯の太郎粒實、同次郎骸吉兄弟を鮭の弟にもぢり、昆布太夫の娘を屠蘇の娘に替へ、更に「菅原傳授手習鑑」や「假名手本忠臣藏」（各別項）の色彩を諸所に附ける。屠蘇と千鯛の如く、正月の食物を對立させ、緣組のおめでたに始まり、覆水盆にかへるおめでたに終る趣向である。同年刊の「御茶漬十二因緣」（曲亭馬琴）のぎごちなさを見た眼で見ると、穩かに手輕に筋を運ばせてゐる。精進の聯想から涅槃の鼻糞餅と誕生會の甘茶を持つて來るのもをかしく、素麺を紐の聯想によつて活躍させるもよい。繪組も面白い。今津屋の蒸籠の上に乘つた柏餅の天川屋張、にせ首の場の源藏を彷彿させる身振、鮭が精進方の雜兵の柿を四人突き刺した樣、赤鰯胴斬の圖などよく出來てゐる。〔小池〕

塙團右衛門（はなはだんえもん）　歷史小説　【作者】宮崎三昧道人【發表】明治二十六年一月より三月に亙り東京朝日新聞に連載。【刊行】同年七月單行【題材】有名な大阪陣の豪傑塙團右衛門直之の生涯を挿話の連續によつて描き出したもの。

【梗概】「塙團右衛門」と「鐵牛遺事」との二篇から成る。關ヶ原役後浪人した團右衛門は、酒を相手に京洛の風景に傲嘯してゐる。一日關ヶ原の三首魁の斬首を見物し、石田三成の男らしさに惚れ、三條磧でその首級を盗む。一二度主取りするが、一度は主家の不幸から、二度目は自分の放埒から、又も浪人となる。放埒とは、柄にもなく左近といふ遊女に迷つて通ひつめたが、この女が夫に操を立てて靡かぬので、嵯峨の花見に大醉態を演じたことである。この時石田の首盗みの時知り合つた老僧龍岳と名のり合ふ。浪人した團右衛門は暫時龍岳の許に厄介になつてゐたが、飄然乞食になつて放浪の旅に出る。その間面白い出來事は、近江の石部で孤兒三四郎を助けて恥辱を雪がしめる話がある。放浪に倦きた團右衛門は又も京都に上り、花園妙心寺の大龍和尚の弟子となり、鐵牛と名のる（以上「塙團右衛門」）。鐵牛は神樂岡に女裝の美少年を助けて常盤母子と知り合ふ。一日舊友から關東大阪が愈々もつれ出した由を耳にする。急に思ふ所ありげに、常盤の家に出入することを止める。そこへ、八年の昔彼を迷はした遊女左近から手紙が來る。この時、左近の夫は既に亡く、左近も病める身ゆゑ一女の身の上を男と見込んで鐵牛に託したいといふ。こゝに左近の素性に纏はる哀話がある。鐵牛は左近の死後この娘を常盤に託す。かくて關東大阪手切れとなり、家康駿府出發の報あるころ、飄然と入城した（以上「鐵牛遺事」）。

【批評】話の筋に多少の不揃ひがあるが（例へば左近の身上の如き）、性格中心の歷史小説としては成功してゐる。情景としては、三條磧の首盗み、市原野で龍岳との對面、夏見の里の寺の緣の下の祝言、神樂岡、いづれも面白く描かれてゐる。三昧の代表作であるばかりでなく、明治歷史小説中の優れた作品の一つである。　〔柳田（泉）〕

埴安振（はにやすぶり）　歌謡　【名稱】埴安曲の意で、埴安の句を持つ本歌の替歌であるから、かく名づけたのであらう。「萬葉集」に埴安の句を持つ長歌があるが、關係不明。【出典】「琴歌譜」（別項）に二首出づ。【種類】短埴安曲と長埴安曲の二種がある。長短は響を長く引くと短く約めて歌ふとの相異で、結局、速度の遲速を意味する名稱であらう。

【歌詞】譜を有する歌詞を分り易く書き改めると次の如くである。

短埴安曲　少女どゝも、少女さゝびすと、唐玉をゆゝ、勝玉を、袂にゝ巻きて、少女さびすも。

長埴安曲　河上の、河楢ゝの木の、疎けゝどエヤ、

疎けども、續ぎし寢もちは、親族とぞ思ふ。

何れも純然たる短歌形式の歌で、二段より成つてゐる。短埴安曲の歌は「年中行事祕抄」に引用せられた「本朝月令」に、天武天皇御製の五節舞の歌として出てゐるものである（政事要略卷二十・河海抄乙女卷・江家次第第十裏書等にも見ゆ）。恐らく古代の五節の歌として實際に歌はれ、大歌として教習せられて來た歌曲であらう。且つ「萬葉集」卷五の山上憶良作の長歌、哀世間難住歌の中に、「少女らが少女さびすと唐玉を袂にまかし」と云ふ句が詠み込まれてあるのは、この五節歌によつたものであら

が表はされてゐる。三代菊之丞が二代菊之丞十三回忌追善として演じた所作事で、「盧生」「白酒賣」「女助六」「相生獅子」と組合せた五變化の一である。

【參考】江戸近世舞踊史　九重左近　〔秋葉〕

馬場孤蝶（ばばこてふ）　飜譯家・隨筆家　【本名】勝彌　【閲歷】明治二年十一月高知市に生る。辰猪の弟。同二十四年、明治學院卒業。學院在學中より島崎藤村・戸川秋骨等と親交あり、その關係で「文學界」（別項）同人となり、詩作にも努めた。併し元來が評論家風の人であつたから詩作は少く、詩の集もない。その詩は「抒情詩」（別項）一派の人達と系統を同じうするがそれよりも憂ることはない。七五調の柔かなギリスに留學、折柄岩倉大使一行とロンドンに會し、改めて政府の留學生として法律を研究することとなつた。その餘暇、「日本語文典」を著はし、これを英國社會學協會會頭ホオトン公に贈つて深く感謝された。明治七年二月頃歸朝、幾くもなく舊藩主の許可を得て、再びイギリスに留學した。その際、英文「日本にある英人」を刊行すると共に、「古事記」を英譯した。十一年五月歸朝、「共存雜誌」を興し、同年十一月、「法律一斑」を著はした。十四年、大石正巳と共に國友會を組織し、雜誌「國友」を刊行して政界に活動し、自由黨の副議長に推されたが議合はずして同黨から脫退した。

翌十五年

【批評】彼は明治初期の雄辯第一と稱せられた人で、外國に在るや、英文の著書で日本の紹介に努めたばかりでなく、その快辯を揮つて日本のために氣を吐けることも少くなかつた。それは單に政治・外交のみならず、古代日本の武器について米國オークランド・オペラハウスや、賓府のフランクリン・インスチチウトで演説したる如き、當時多大の興味を以て見られた。

【參考】馬場辰猪　安永梧郎　〔高須〕

葉二（はふたつ）　樂器　【別名】鬼丸（おにまる）　【解説】横笛の古名器。「續教訓抄」には、「本朝の横笛は葉二をして第一とす。此笛他竹に異なり、其色赤きこと赤銅（銅、恐らくは總の誤）かけたる

長埴安曲　河上の、河楊ムの木の、疎けムど　エヤ、
疎けども、續ぎし寢もちは、親族とぞ思ふ。
何れも純然たる短歌形式の歌で、二段より成つてゐる。短埴安曲の歌は「年中行事祕抄」に引用せられた「本朝月令」に、天武天皇御製の五節舞の歌として出てゐるものである（政事要略卷二十・河海抄乙女卷・江家次第第十裏書等にも見ゆ）。恐らく古代の五節の歌として實際に歌はれ、大歌として敎習せられて來た歌曲であらう。且つ「萬葉集」卷五の山上憶良作の長歌、哀世間難住歌の中に、「少女らが少女さびすと唐玉を袂にまかし」と云ふ句が詠み込まれてあるのは、この五節歌によつたものであらう。また「古事記傳」に、この歌を憶良の長歌の句を取つて作りなしたものとしたのは、「琴歌譜」の發見によつて、誤りであることが明かである。長埴安振は、正月元日の節會に歌はれたものと思はれる。
〔藤田〕

刎字（はねじ）「切字」を見よ。

羽根の禿（はねのかむろ）　所作事　變化物　【本名題】春昔由緣英（はるむかしよかりのはなぶさ）【初演】天明五年二月江戸桐座「重重人重歌曾我」（かさねがさねひとへにうたはがそが）第二番目大切〔作詞〕瀨川如皐〔曲節〕長唄〔立唄〕松永忠五郎〔作曲〕杵屋正次郎〔振附〕二代西川扇藏【傳來】曲・振ともに傳存。【諸本】長唄正本。歌謠音曲集（日本名著全集）・長唄全集（日本音曲集）等所收。【題材】禿を舞踊化したもの。曲中の「文がやりたや」の件は、小舞十六番（歌舞伎歌）の一である「室町」を少しく變へただけである。【解說】禿（三代瀨川菊之丞）が羽子板を持つて羽根突きの振、毬突きの振、次いで禿の身をかこつ振から愛らしい手踊に終る。曲・振とも內容を現はして、禿の初々しい情趣が表はされてゐる。三代菊之丞が二代菊之丞十三回忌追善として演じた所作事で、「盧生」「白酒賣」「女助六」「相生獅子」と組合せた五變化の一である。
【參考】江戸近世舞踊史　九重左近　〔秋葉〕

馬場孤蝶（ばばこてふ）　飜譯家・隨筆家【本名】勝彌【閱歷】明治二年十一月高知市に生る。辰猪の弟。同二十四年、明治學院卒業。學院在學中より島崎藤村・戶川秋骨等と親交あり、その關係で「文學界」（別項）同人となり、詩作にも努めた。併し元來が評論家風の人であつたから詩作は少く、詩の集もない。その詩は「抒情詩」（別項）一派の人達と系統を同じうするがそれよりも優ることはない。七五調の柔かな感觸を與へる詩風で、特に著しい個性は現はれてゐない。詩作よりも西詩の紹介者、又は詩評家として絕えず時代の詩潮を指導した。文學評論家として廣汎なる意味に於ても同樣な功績のあつた人で、幾多の飜譯や紹介が遺されてゐる。なほ孤蝶は明治三十八九年頃に萬朝報の詩の選者であつた。後にそれを集めて「花がたみ」（明治三十八年・佐久良書房）と「春駒」（三十九年・同上）の二詞華集を編んだ。當時の青年がどんな詩を作つたかを知る便りとなるものである。
〔河井〕

馬場辰猪（ばばたつゐ）　政治家・批評家【生歿】嘉永三年五月十五日、土佐國高知中島町に生れ、明治二十一年十一月一日、アメリカ費府大學病院に客死した。享年三十九【閱歷】土佐藩士馬場來八の次男。慶應三年、藩費生として江戸留學を命ぜられ、福澤諭吉の塾に入つた。後、一旦歸國、長崎に遊學し、留まること半年餘、再度上京して慶應義塾に入り、經濟學を專攻した。明治三年、藩費生としてイギリスに留學、折柄岩倉大使一行とロンドンに會し、改めて政府の留學生として法律を研究することとなつた。その餘暇、「日本語文典」を著はし、これを英國社會學協會會頭ホオトン公に贈つて深く感謝された。明治七年二月頃歸朝、幾くもなく薩藩主の許可を得て、再びイギリスに留學した。その際、英文「日本に於ける英人」を刊行すると共に、「古事記」を英譯した。十一年五月歸朝、「共存雜誌」を興し、大石正巳と共に國友會を組織し、雜誌「國友」を刊行して政界に活動し、自由黨の副議長に推されたが議合はずして同黨から脫退した。

馬場辰猪

翌十五年加藤弘之が「人權新說」（別項）を著はして天賦人權の空想である所以を說くや、「天賦人權論」（別項）を書いてこれに反對して痛烈なる論難を加へた。當時彼の言說は頗る峻烈であつたので、當時の警視總監樺山資紀から言論禁止の命を受けた。その禁は間もなく解かれたが、時勢に感ずるところあつて、暫く政界から遠ざかり、文學評論家として廣汎なる意味に於ても同樣な功績のあつた人で、幾多の飜譯や紹介が遺されてゐる。なほ孤蝶は明治三十八九年頃に萬朝報の詩の選者であつた。後にそれを集めて「花がたみ」（明治三十八年・佐久良書房）と「春駒」（三十九年・同上）の二詞華集を編んだ。當時の青年がどんな詩を作つたかを知る便りとなるものである。
〔河井〕

馬場辰猪（ばばたつゐ）　政治家・批評家【生歿】嘉永三年五月十五日、土佐國高知中島町に生れ、明治二十一年十一月一日、アメリカ費府大學病院に客死した。享年三十九【閱歷】土佐藩士馬場來八の次男。慶應三年、藩費生として江戸留學を命ぜられ、福澤諭吉の塾に入つた。後、一旦歸國、長崎に遊學し、留まること半年餘、再度上京して慶應義塾に入り、經濟學を專攻した。明治三年、藩費生としてイギリスに留學、折柄岩倉大使一行とロンドンに會し、改めて政府の留學生として法律を研究することとなつた。その餘暇、「日本語文典」を著はし、これを英國社會學協會會頭ホオトン公に贈つて深く感謝された。明治七年二月頃歸朝、幾くもなく薩藩主の許可を得て、再びイギリスに留學した。その際、英文「日本に於ける英人」を刊行すると共に、「古事記」を英譯した。十一年五月歸朝、「共存雜誌」を興し、大石正巳と共に國友會を組織し、雜誌「國友」を刊行して政界に活動し、自由黨の副議長に推されたが議合はずして同黨から脫退した。

翌十五年加藤弘之が「人權新說」（別項）を著はして天賦人權の空想である所以を說くや、「天賦人權論」（別項）を書いてこれに反對して痛烈なる論難を加へた。當時彼の言說は頗る峻烈であつたので、當時の警視總監樺山資紀から言論禁止の命を受けた。その禁は間もなく解かれたが、時勢に感ずるところあつて、暫く政界から遠ざかり、文學評論家として廣汎なる意味に於ても同樣な功績のあつた人で、幾多の飜譯や紹介が遺されてゐる。なほ孤蝶は明治三十八九年頃に萬朝報の詩の選者であつた。後にそれを集めて「花がたみ」（明治三十八年・佐久良書房）と「春駒」（三十九年・同上）の二詞華集を編んだ。當時の青年がどんな詩を作つたかを知る便りとなるものである。
〔河井〕

馬場辰猪（ばばたつゐ）　政治家・批評家【生歿】嘉永三年五月十五日、土佐國高知中島町に生れ、明治二十一年十一月一日、アメリカ費府大學病院に客死した。享年三十九【閱歷】土佐藩士馬場來八の次男。慶應三年、藩費生として江戸留學を命ぜられ、福澤諭吉の塾に入つた。後、一旦歸國、長崎に遊學し、留まること半年餘、再度上京して慶應義塾に入り、經濟學を專攻した。明治三年、藩費生としてイギリスに留學、折柄岩倉大使一行とロンドンに會し、改めて政府の留學生として法律を研究することとなつた。その餘暇、「日本語文典」を著はし、これを英國社會學協會會頭ホオトン公に贈つて深く感謝された。明治七年二月頃歸朝、幾くもなく薩藩主の許可を得て、再びイギリスに留學した。その際、英文「日本に於ける英人」を刊行すると共に、「古事記」を英譯した。十一年五月歸朝、「共存雜誌」を興し、大石正巳と共に國友會を組織し、雜誌「國友」を刊行して政界に活動し、自由黨の副議長に推されたが議合はずして同黨から脫退した。

翌十五年加藤弘之が「人權新說」（別項）を著はして天賦人權の空想である所以を說くや、「天賦人權論」（別項）を書いてこれに反對して痛烈なる論難を加へた。當時彼の言說は頗る峻烈であつたので、當時の警視總監樺山資紀から言論禁止の命を受けた。その禁は間もなく解かれたが、時勢に感ずるところあつて、暫く政界から遠ざかり、文學評論家として廣汎なる意味に於ても同樣な功績のあつた人で、幾多の飜譯や紹介が遺されてゐる。なほ孤蝶は明治三十八九年頃に萬朝報の詩の選者であつた。後にそれを集めて「花がたみ」（明治三十八年・佐久良書房）と「春駒」（三十九年・同上）の二詞華集を編んだ。當時の青年がどんな詩を作つたかを知る便りとなるものである。
〔河井〕

馬場辰猪（ばばたつゐ）　政治家・批評家【生歿】嘉永三年五月十五日、土佐國高知中島町に生れ、明治二十一年十一月一日、アメリカ費府大學病院に客死した。享年三十九【閱歷】土佐藩士馬場來八の次男。慶應三年、藩費生として江戸留學を命ぜられ、福澤諭吉の塾に入つた。後、一旦歸國、長崎に遊學し、留まること半年餘、再度上京して慶應義塾に入り、經濟學を專攻した。明治三年、藩費生としてイ

【參考】近古小說解題○近古小說新纂初輯「ふせやの物語」考說　〔島津〕

花團子貪家物語（はなよりだんごくひけものがたり）　黃表紙　三册　十五丁十九圖【作者】曲亭馬琴述、山東京傳校。【畫工】未詳【刊行】寬政五年【題材】「精進魚類物語」（別項）（一名、魚鳥平家）に據る。
【梗概】精進物の大將、初春の屠蘇酒の娘衣被姬は、生臭物の大將、千鯛方へ輿入する事に

千鯛は素麵の手引で衣被姬に會ふ。
【解說】「精進魚類物語」の鯛の赤介味吉と、沖の昆布の太夫の娘磯の若布との結婚を引上げて全部に渡る筋とし、鮭の大介鰭長と赤介の位置を交換し、事件の發端、鰯の太郎粒實、同次郎弱吉兄弟を鮭の弟にもぢり、昆布太夫の娘を屠蘇の娘に替へ、更に「菅原傳授手習鑑」や「假名手本忠臣藏」（各別項）の色彩を諸所に附ける。屠蘇と千鯛の如く、正月の食物を對して通ひつめたが、この女が夫に操を立てて靡かぬので、嵯峨の花見に大醉態を演じたことである。この時石田の首盜みの時知り合つた老僧龍岳と名のり合ふ。浪人した園右衞門は暫時龍岳の許に厄介になつてゐたが、飄然乞食になつて放浪の旅に出る。その間面白い出來事は、近江の石部で孤兒三四郎を助けて恥辱を雪がしめる話がある。放浪に倦きた園右衞門は又も京都に上り、花園妙心寺の大龍和

【參考】近古小說解題○近古小說新纂初輯「ふせやの物語」考說　〔島津〕

花團子貪家物語（はなよりだんごくひけものがたり）　黃表紙　三册　十五丁十九圖【作者】曲亭馬琴述、山東京傳校。【畫工】未詳【刊行】寬政五年【題材】「精進魚類物語」（別項）（一名、魚鳥平家）に據る。
【梗概】精進物の大將、初春の屠蘇酒の娘衣被姬は、生臭物の大將、千鯛方へ輿入する事に

千鯛は素麵の手引で衣被姬に會ふ。
【解說】「精進魚類物語」の鯛の赤介味吉と、沖の昆布の太夫の娘磯の若布との結婚を引上げて全部に渡る筋とし、鮭の大介鰭長と赤介の位置を交換し、事件の發端、鰯の太郎粒實、同次郎弱吉兄弟を鮭の弟にもぢり、昆布太夫の娘を屠蘇の娘に替へ、更に「菅原傳授手習鑑」や「假名手本忠臣藏」（各別項）の色彩を諸所に附ける。屠蘇と千鯛の如く、正月の食物を對して通ひつめたが、この女が夫に操を立てて靡かぬので、嵯峨の花見に大醉態を演じたことである。この時石田の首盜みの時知り合つた老僧龍岳と名のり合ふ。浪人した園右衞門は暫時龍岳の許に厄介になつてゐたが、飄然乞食になつて放浪の旅に出る。その間面白い出來事は、近江の石部で孤兒三四郎を助けて恥辱を雪がしめる話がある。放浪に倦きた園右衞門は又も京都に上り、花園妙心寺の大龍和

歌譜」（別項）に二首出づ。【種類】短埴安曲と長埴安曲の二種がある。長短は響を長く引くと短く約めて歌ふとの相異で、結局、速度の遲速を意味する名稱であらう。
【歌詞】譜を有する歌詞を分り易く書き改めると次の如くである。
短埴安曲　少女（をとめ）どムも、少女さムびすと、唐玉（からたま）をエヤ、
勝玉（すぐれたま）を、袂（たもと）にムまきて、少女さびすも。

【批評】彼は明治初期の雄辯第一と稱せられた人で、外國に在るや、英文の著書で日本の紹介に努めたばかりでなく、その快辯を揮つて日本のために氣を吐けることも少くなかつた。それは單に政治・外交のみならず、古代日本の武器について米國オークランド・オペラハウスや、費府のフランクリン・インスチチウトで演說したる如き、當時多大の興味を以て見られた。
【參考】馬場辰猪　安永梧郎　〔高須〕

葉二（はふたつ）　樂器【別名】鬼丸（おにまる）【解說】橫笛の古名器。「續敎訓抄」には、「本朝の橫笛は葉二をして第一とす。此笛他竹に異なり、其色赤きこと赤銅（銅、恐らくは總の誤）かけたる鞦にことならず云々」と忠實の詞を擧げ、また「樂家錄」には、「葉二つあるに因て葉二と名くるなり。葉一つは赤、一つは青くして每朝露を置く」とある。これに依つて葉二の名稱の起りを知ることが出來る。この笛の傳說には種々異なつた說がある。「江談抄」には淨藏上人が深更に笛を吹いてゐたところ、朱雀門の鬼がこれに感じて、この笛を上人に與へたとあるし、「十訓抄」には博雅三位が月明の夜に朱雀門の前で終夜笛を吹いてゐたところ、同形をした人が來て共に合せて笛を吹いた。その音がこの世に類なく善かつた。かくすること每夜續いたが、その人は遂に物を言はなかつた。そこで試みに博雅の笛とこの人の笛とを交換して吹いて見たところ、實に立派な笛であつたので、これを持ち歸つてしまつたが、その人は別に返して呉れとも言はないので、そのまゝ博雅のものとなつてしまつた。それが卽ちこの葉二である（鬼丸は卽ち鬼より得たる意）。その後これが御堂關白藤原道長の手に入

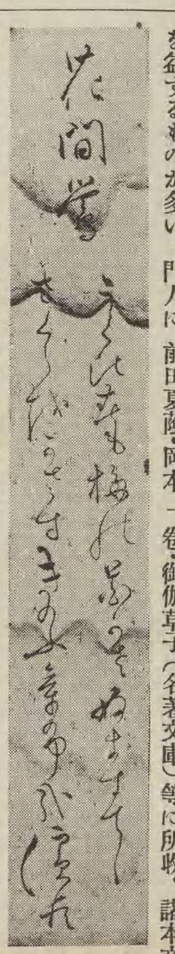
り、宇治平等院建立の時に經藏に納めたが、後に京極殿藤原師實がこれを取り出して見られた時には、その葉は落ちて露を置かないやうになつたと記してある。この說は「續敎訓抄」にも、また「樂家錄」にも記してあるが、「續敎訓抄」には又異說を擧げて、大外記師遠の曰ふには、朱雀門で月明の夜に笛を吹いて樓上の鬼からこの笛をもらつたのは在原業平であるとも言つてゐる。それでこの三說を批評して言ふのに、「業平は天長二年生る。元慶四年五月二十八日卒（五十六）。此人のえたる笛を後に滑藏の吹きたらむは年紀符合せり。博雅はことのほかの相違なり」と。併しこの評も亦推測に過ぎない。要するにこれ等の說は孰れも單に一種の傳說に過ぎない。【田邊】

破墨（はぼく）　繪畫【解說】水墨畫の一描法乃至一樣式。初め淡墨を以て描寫した上に、更に漸次濃墨を加へ以て墨色の濃淡や滲潤の趣を見せる描法で、この描法を以て一樣式をなす一派としては南宗畫（別項）がまづ代表的と見てよからう。併し破墨の語は古く「歷代名畫記」や「唐朝名畫錄」等にも散見してをり、これ等によれば、後世南畫の祖と仰がるゝに至つた王維を初め、當時山水畫家として名を得た張璪など、この法を用ひてゐたらしい。勿論當時から後世の南畫樣式を成してゐたとは見られぬから、破墨法卽南畫樣式といふわけには行かないが、淡墨の上に濃墨を加へて水墨の妙趣を發揮するが如きは、既に唐代から行はれてゐたことと想像されるのであつて、發達史的に破墨の意味を尋ぬれば、水墨畫の描法一般に通ずる概念と云つた方が適當かも知れない。かくの如き破墨以外、更にこれに相對する意味にも用ひらるゝ語に潑墨（別項）がある。因みに、帝室博物館藏雪舟筆水墨山水畫は、圖上の雪舟自贊中に「破墨」の語が見えるので、この畫を以て破墨の好典型とする說もあるが、この自贊は單に設色と破墨とを對立させて說いたのみであるから、雪舟は破墨を水墨といふほどの意味で用ひたと解すべきであらう。【田中（一）】

濱出（はまいで）　幸若舞曲（三十六番の一）一卷【別名】「蓬萊山」。御伽草子としては「濱出草紙」【成立】室町期【諸本】古板本は寬永十二年板（十行本）、三十六番揃の內。新群書類從第八舞曲部所收。內閣文庫藏の古寫本は「賴朝はまいで丸けのかい」と題して、九穴の貝がこれに續けて收められてゐる。この舞曲は、又御伽草子として「濱出草紙」の題名下に所謂二十三篇の內に含まれて居り、これは御伽草子後編（今泉・畠山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷等にも收めてある。【內容】祝儀物。伊吹・夢合・馬揃・九穴の貝（各別項）と共に賴朝に關する曲で、特に九穴の貝は內閣本が示すやうに本曲に附屬したやうな形をなしてゐる。沼地であつたのが今は埋め立てられて、谷七鄕と區劃せられた鎌倉の武將賴朝は、上洛して大佛供養を營み、右大將に任じ、梶原景時も左衞門府の官を賜はつたのを嫡子源太景季に讓つたので、景季は急ぎ下國して、その披露に大小名三日が間さま〴〵雜餉（ざふしやう）を設けて祝宴を張つた。特に第一日には蓬萊山を飾り（別名の由來）、又第三日には江の島詣に託して賴朝の北の方以下の濱出があり（題名の由來）、船上に舞臺を構へ、秩父六郎の笛、長沼五郎の銅拍子、景季の太鼓を初め管絃歌舞の催しに歡樂した由を作つてある。【影響】近古小說の「賴朝の最後」（一名、賴朝最期物語）に、賴家が秩父六郎をおびき寄せて討たうとして、由井ケ濱に蓬萊を飾つて宴を催し、諸大名を集めることのあるのは、本曲からの影響であらう。後に連續する九穴の貝の件と六郎との交涉からも、この推定は可能である。【島津】

濱出草子（はまいでのさうし）「濱出」を見よ。

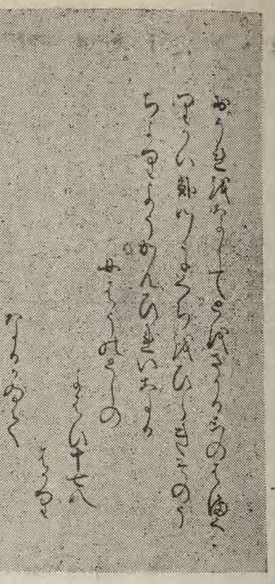
濱臣（はまおみ）　國學者【姓名】清水氏。通稱玄長【號】泊洒舍（さゞなのや）・月齋【生歿】安永五年に生れ、文政七年（一八二四）八月十七日歿す。享年四十九。【墓所】淺草本願寺中善照寺【閱歷】濱臣は江戶の人、不忍池の西に卜居して醫を業とした。國學を村田春海（別項）に受け、歌文共に善くし、松平樂翁その他當時の諸侯の寵遇を得た。狩谷棭齋（別項）と友として善く、國文學の古典を多く校合した。それ等濱臣の手入本は、かなり多く傳へられて、學者を益するものが多い。門人に、前田夏蔭・岡本況齋などがある。【著述】濱臣翁家集四冊（一名泊洒舍集、天保十年刊。續日本歌學全書第八編近世名家家集下卷にも收む）○杉田日記（縣門遺稿の內）○遊京漫錄（百家說林正編下に收む）○泊洒筆話（同上正編上に收む）○月齋雜考（國書刊行會編百家隨筆第二冊に收む）○答問雜錄・歌文珍書保存會刊）○淸石問答（國書刊行會本源注餘滴に附載す。石は石川雅望をいふ）○庚子道の記標注一冊（刊）○唐物語（校）一冊（刊）○近葉菅根集（編）五冊（文化十二年刊。續日本歌學全書第九編近世長歌今樣歌集に收む）○小野古道家集（編）一冊（刊）。【歌風】歌集に、「泊洒舍集」（別項）がある。五十に滿たずして死んだ彼としては、その作歌數は相當の數に上つてゐるが、あまり佳作も見出されない。若し彼に採るところがあるとしたら、古歌をよく記憶してゐて、その用語を自在に取り入れてゐることであらう。その題詠に新味は少しもなく、殆ど形式的に委曲だけをとゝのへてゐるに過ぎないので、「泊洒筆話」（別項）の著者としての見識は、到底窺はれない。江戶派歌人の常識的な取材と表現で、その作品を徒らに低調にしてゐるのみである。【森・蟹田】


濱臣筆蹟

蛤の草子（はまぐりのさうし）　御伽草子（二十三篇の一）二卷【別名】「しじら物語」。一本「蛤姬の草子」、また「蛤機織姬」。【成立】室町季世か。【諸本】古板本は御伽草子本、明曆二年板（林長右衞門板）。御伽草子後編（今泉・畠山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷・御伽草子（名著文庫）等に所收。諸本文詞に異同があり、明曆板は表題「はまぐりひめのさうし」、內題「はまぐりはたおりひめ」となつて居り、主人公の名も「しじら」ではなく、「ちしう」となつてゐるが、內容は殆ど變らない。【題材】童話、孝行物語、釋敎物。卽ち法華經の功德、觀音の利益、佛敎的な色彩が濃厚な印度說話で、「三國傳記」（卷四）の董永の身賣談等と同種のものであるが、また一種の神婚說話で、浦島傳說、特に御伽草子「浦島太郎」（別項）と通ずる點もあり、同時に「廣博物志」「祖庭事苑」等に見えるやうな所謂螺女型の說話である。蛤など貝類の化女の話は、「古今著

聞集」（卷二十、魚蟲禽獸）にも見える。

【梗概】天竺摩迦多國にしじらと云ふ貧者があつた。六十餘の母に仕へて孝心が厚く、饑饉の災厄に死ぬる者が多い中を、母を養ふため沖へ出て釣を垂れてゐたが、或る日魚の一尾も獲れぬ代りに美しい蛤が針にかゝつた。


奈良繪

女は更に孕を求め機屋を作らせ、巾を見る事を禁じて機を織り始めた。又一人の若い女が何處からともなく來て、二人で法華經八卷を誦しながら織り入れ、十二ケ月の後織り上つた布をしじらに持たせて鹿野苑の市で賣らせると、三十三人の供を連れた老人がそれを購はうと言つて、珠玉を飾つた自分の邸に伴ひ、布の代りに三千貫を與へ、七千年の壽を保つ七德ほうしゆの酒を七杯飮ませて孝德

婚せた。この由を傳へ聞いて道俗男女が集まり、この降人を拜みに來、爭つて米を齎した。女は更に孕を求め機屋を作らせ、巾を見る事を禁じて機を織り始めた。又一人の若い女が何處からともなく來て、二人で法華經八卷を誦しながら織り入れ、十二ケ月の後織り上つた布をしじらに持たせて鹿野苑の市で賣らせると、三十三人の供を連れた老人がそれを購はうと言つて、珠玉を飾つた自分の邸に伴ひ、布の代りに三千貫を與へ、七千年の壽を保つ七德ほうしゆの酒を七杯飮ませて孝德

芝居に對する小芝居の總括的賤稱と見てもよい。併しながら大阪に於ける大歌舞伎と濱芝居との關係は、江戶に於ける大芝居と宮地芝居の關係の如く越ゆべからざる障壁が橫たはつてゐたわけでなく、濱芝居の狂言も好評を博すれば屢々大歌舞伎に上演され、濱芝居の役者も、腕次第では大歌舞伎の役者に立身出世をする道が開けてゐた。「劇場一覽顯微鏡」に、「京攝にては大芝居の外に濱芝居あり、子供芝居ありて、子供の時より段々舞臺數を踏て上達に從ひ、其の器量に應じ、濱芝居或は大芝居へ出る。大芝居にて出世遲き役者は、一旦濱芝居へ出で、濱芝居にて評判宜しき役

あるのみである。承和十三年に百十三歲であるとすれば、濱主は聖武天皇より、孝謙・淳仁・稱德・光仁・桓武・平城・嵯峨・淳和・仁明の十代の朝に仕へて居り、なほこの外に孝謙天皇の時に「蘭陵王」の入綾を勅に依つて改修したといふ說があるから、兎に角一生涯のうち約百年間、我が國舞樂の第一人者であつたといふのは驚くべきことである。又信ずべき樂家の記錄によると、仁明天皇御卽位式の時（天長十年十一月十六日）の大嘗會に際し、有名なる「拾翠樂」「河南浦」「應天樂」の三曲の舞を作つたといふ。又「續敎訓抄」の唐樂舞の傳來の條には、濱主が承和三年から六年まで唐に留學し

奈良繪本蛤の草子（笹野堅氏藏）

開集」（卷二十、魚蟲獸類）にも見える。

【梗概】天竺摩迦多國にしじらと云ふ貧者があつた。六十餘の母に仕へて孝心が厚く、饑饉の災厄に死ぬる者が多い中を、母を養ふため沖へ出て釣を垂れてゐたが、或る日魚の一尾も獲れぬ代りに美しい蛤が針にかゝつた。不要と捨てて他所で釣ると又同じ蛤がかゝるので、三度目には舟の上にあげてみると、俄に大蛤となり、金色の光を放ち、二つに破れて十七八ばかりの美女が現はれた。而もしじらに乞うてその妻とならうと言ふ。困つたしじらは歸つて母に謀ると、老母は喜んで迎へて婚せた。この由を傳へ聞いて道俗男女が集まり、この降人を拜みに來、爭つて米を齎した。女は更に孝を求め機屋を作らせ、中を見る事を禁じて機を織り始めた。又一人の若い女が何處からともなく來て、二人で法華經八卷を誦しながら織り入れ、十二ケ月の後織り上つた布をしじらに持たせて鹿野苑の市で賣らせると、三十三人の供を連れた老人がそれを購はうと言つて、珠玉を飾つた自分の邸に伴ひ、布の代りに三千貫を與へ、七千年の壽を保つ七德ほうしゆの酒を七杯飲ませて孝德を稱へた。しじらは喜んで歸宅すると、女房は「南方普陀落世界の觀音の淨土から御使として來た童男童女身と云ふ者だ」と告げて、白雲に乘つて昇天した。母子は永く富貴となり、しじらは得道の緣を受けて佛の位となり、七千年の後昇天した。皆親孝行の善報である。（島津）

蛤機織姫　はまぐりはたおりひめ　「蛤の草子」を見よ。

濱芝居　はましばゐ　演劇【名義】もと濱側の芝居の意と傳へる。【意義】大阪に於ける中芝居、或は小芝居をも含めての稱呼。

【解說】道頓堀の中の芝居・角の芝居を古來大歌舞伎或は大芝居と稱し、大西芝居・角丸芝居を中芝居又は濱芝居と稱し、また若太夫芝居・竹田芝居等を小芝居と呼び、なほ御靈・座摩・稻荷・高津等の社頭の芝居を宮芝居と云ふと、「守貞漫稿」の著者は記してゐるが、後には大芝居に對する小芝居の總括的賤稱と見てもよい。併しながら大阪に於ける大歌舞伎と濱芝居との關係は、江戸に於ける大芝居と宮地芝居の關係の如く越ゆべからざる障壁が横たはつてゐたわけでなく、濱芝居の狂言も好評を博すれば屢々大歌舞伎に上演され、濱芝居の役者も、晩次第では大歌舞伎の役者に立身出世をする道が開けてゐた。「劇場一覽顯微鏡」に、「京攝にては大芝居の外に濱芝居あり、子供芝居ありて、子供の時より段々舞臺數を踏て上達に從ひ、其の器量に應じ、濱芝居或は大芝居へ出る。大芝居にて出世遲き役者は、一旦濱芝居へ出で、濱芝居にて評判宜しき役者は大芝居へ升る也」とあるのは、その關係を說明してゐる。佐々木巖流と、宮本武三四の「復讐二島英勇記」や、研辰の「敵討高砂松」などの如く、目先の變化に走つて實なき狂言を、作者道では濱芝居狂言と賤しんだが、大評判となれば、やはり大歌舞伎に上演された。【飯塚】

【參考】守貞漫稿（第三十一編）

濱成式　はまなりしき　「歌經標式」を見よ。

濱主　はまぬし　舞樂・管絃の名家【姓】尾張連【生歿】天平五年（？）（一三九三）生れ、歿年未詳。恐らく仁明天皇朝の末年らしい。享年百十四歲以上。【閱歷】舞樂の祖及び打物の祖と稱せられる。「續日本後紀」に據れば、（一）承和六年五月庚申に外從五位を授けられた事。（二）承和十三年正月乙卯（八日）に、大極殿に於て初めて最勝會を修したが、この日、龍尾道上に於て百十三歲の老齡を以て「和風長壽」を舞ひ、人々を感ぜしめた事。（三）同年正月戊辰（二十六日）再び召されて淸涼殿前で舞を御覽に入れ、その高齡なるを矜み給ひ、從五位上を授けられたといふ事、以上の三つの記事があるのみである。承和十三年に百十三歲であるとすれば、濱主は聖武天皇より、孝謙・淳仁・稱德・光仁・桓武・平城・嵯峨・淳和・仁明の十代の朝に仕へて居り、なほこの外に孝謙天皇の時に「蘭陵王」の入綾を勅に依つて改修したといふ說があるから、兎に角一生涯のうち約百年間、我が國舞樂の第一人者であつたといふのは驚くべきことである。又信ずべき樂家の記錄によると、仁明天皇御卽位式の時（天長十年十一月十六日）の大嘗會に際し、有名なる「拾翠樂」「河南浦」「應天樂」の三曲の舞を作つたといふ。又「續敎訓抄」の唐樂舞の傳來の條には、濱主が承和三年から六年まで唐に留學してゐたやうに記してあるが、承和三年は彼の百二歲の時であるから、留學したものとすれば、それは年號記載の誤りであつて、彼の靑年時代であらう。なほ又同書に、打物鼓類の事を記して「大方打物ハ何モ〳〵尾張濱主・太田麿が流レナリ云々」とあるが、これ等に依つて彼は舞樂のみならず、舞の基礎を定めるのに極めて大切なる笛と打物との兩方に於ても非常に研究を重ね、仁明天皇の朝、我が國樂制改革以後に於ては、舞と打物とは實に濱主を以て祖とするに至つたものと考へられる。【作品】「和風長壽樂」（一名「莽春樂」）（双調）の作曲及び作舞。「拾翠樂」（一名「拾藻樂」）の作舞。「河南浦」の作舞。「應天樂」の作舞。その他多數の唐樂舞の改作。

【參考】續日本後紀○敎訓抄○續敎訓抄○體源抄○樂家錄○日本音樂史考　東儀季治○日本音樂史　田邊尙雄（日本風俗史講座）【田邊】

濱邊黑人　はまべのくろひと　狂歌師【本名】斯波孟雅。字は子頌。通稱三河屋半兵衞【生歿】享保二年生れ、寬政二年（一七九〇）五月十八日

昔二枚綴草紙（文政二年刊、「心中二枚續草紙」別
項による。畫家は扇圓から蘆國等。その他、脚
本や浄瑠璃に原據を求めたもので、飜案作と
見られ、讀本としても文學的價値はとぼしい
ものである。

【參考】京摺戯作者考 木村默庵 ○濱松歌國小傳
水谷不倒（新群書類從二 ○濱松歌國傳（浪速叢
書二・二 ○浪速叢書第十六 ○歌舞伎圓說解
說 笹隨・秋葉 【守國】

濱松風（はままつかぜ）「松風」を見よ。

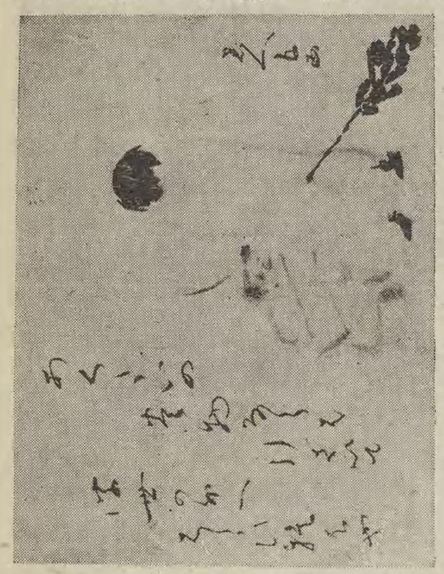
濱松中納言物語（はままつちゅうなごんものがたり） 物
語 五卷（但しまだ續卷が適してゐるといはれる）

【作者】未詳。但し「更級日記」（別項）の奥書及び「拾遺百番歌合」の記すところ、また「更級日記」とこの物語の内容との比較等よりして、大體、菅原孝標の女と推されてゐる。【名稱】寫本によつては、「濱松中納言」「濱松中納言殿物語」（以上内題及び外題）、或は「濱松の中納言」「濱松物語」（以上外題）と書かれてゐるものがある。又古くは「みつの濱松」と呼ばれてゐたらしい。この物語名は、卷の一にある「日の本のみつの濱松こよひこそ我を戀ふらし夢に見えつれ」とある歌に基いてゐる。【成立】年代未詳。作者を孝標の女とすれば、大抵天喜前後であらう。【諸本】流布の本は餘り多くなく、寫本として傳はるものも、第五卷を有するもの殆どない。卽ち、宮内省圖書寮・松井簡治氏（參考本）・京都帝國大學國文學研究室（同本。但しこの二本は卷二・三・四のみ）・尾上八郎氏（卷二・三・四のみ）・内閣文庫（二本。但しこの二本は卷二・三・四のみ）・刈谷町立圖書館・神戸第一高女圖書館・大阪府立圖書館・蓬堂文庫・東北帝國大學藤井乙男氏（卷二・三・四のみ）等の藏本が、それである。德川期の刊本としては、丹緘叢書本がある。日本文學全書・國文叢書・日本文學大系・國文大觀等所收。

【梗概】この物語は前に缺卷があるが、現存本中の記事や「無名草子」「風葉集」「拾遺百番歌合」に引用された本物語の記事、又は歌等から想像して見るに、その首卷は大體次の如くであらう。（首卷）某の宮に男子が一人あつたが、幼い中、母に頂けるものがあるから、乳母を筑紫へ下させ給へとの手紙を遣つた。世の人は夢に、この若君は日本の國の前々日、中納言は高陽縣で后に會つた。

（帖取判人山蜀）　蹟　筆　人　黒　邊　濱

栗燒を油揚にしたるが如しと云へりとある。黒人は無好不琢と題し、刊行して知人に配布した。後年狂歌師が春興の狂歌を出版して年玉代りに配るることの流行したのは、この黒人より始まつたのである。【雜記】「黒人が黄色な人になつたといふの始なり。時の諺に、「木綿の木綿落ちぶれても元の木綿」といふ。今の狂歌の點料を入花取るを入花といへり。



（帖取判人山蜀）　蹟　筆　人　黒　邊　濱

くとは、此の寺が藏前古川の畔邊に在るからで、らんとして濱邊を指てゝ川岸へゆくと川岸へ

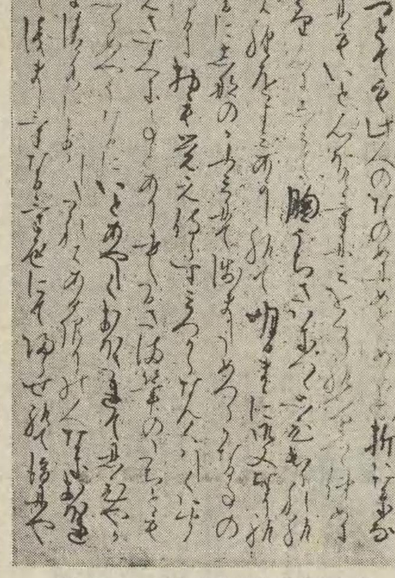
あらう。【著作】初笑不琢玉 ○狂歌栗の下風 二冊（天明三年刊） ○狂歌猿の腰掛 一冊（同年刊） 【野崎】

濱松歌國（はままつうたくに） 隨筆家・脚本作者・戯作者 【通稱】布屋清兵衛。又民助（大阪市史に市兵衛とあるは如何か。【別號】嫗々亭南水。作者名として初めは民助と稱へた。濱松の松は待宇を、歌國の歌は哥宇や謌宇をも用ひた。また八重垣（或は歌國とも稱した。「御津の濱つつ歌國」（筆拍子）が歌國の由來か。【生歿】安永五年（正月八日かミの說がある）生れ、文政十年（一八二七）十一月十九日歿す。享年五十二。【法名】花鳥歌國信士 【墓所】大阪下寺町口繩坂天鷲寺 【閱歷】生家は元來、泉州の木綿業であつたといふ。それが寶永年中には既に大阪に移つたらしく、彼の生れた頃は島の内油町に木綿問屋として盛大な店を營んでゐた。後布袋町に移つたが、青年時代を戯作と歌舞伎好きで過し、やがて二十二歳臺で、歌舞伎芝居に關係して、寛政十二年（二十五歳）の頃から番附面に濱松氏助を以て名を現はした。作者としては先輩の笠河晴助（別項）の知遇を得て作道に進んだらしい。三代中村歌右衛門との交渉も晴助によつて始められたらしいが、脚本作者としては終に立作者とならず、二枚目又は三枚目の位置にゐた。尤も歌右衛門が金澤龍玉（別項）の作者名で脚本を書く時、彼等の加筆があつた事は想像される。歌右衛門との交渉については「許多脚色帖」（別項）の内容に見てもも、相當深いものがあつた筈である。歌國の名は早く小說作者として用ひてゐたのであつたが、文政三年から歌舞伎方面に流用したのであつた。この爲め劇年に病にかゝり、一度歿えたと傳へる。商家の主人たる傍ら、戯作家又は考證家乃至隨筆家としての生涯を送り、商才に就いては傳はつてゐない。創作的天分は惠まれなかつたが、考證家としては精緻綿密な點に於て西澤一鳳（別項）と並び稱され、而も一鳳に一段勝ると思はれる。考證の範圍は大體大阪を中心とし、特に演劇關係を重んじた。【著作】隨筆を主とし、その他編纂書などがある。主なものは、「大阪に關するもの」 撫陽落穗集十卷並に附錄（文化五年序）（古來の地理風俗を羅錄する）○見聞雜錄 筆拍子十卷（別名「撫陽落穗集」）（文化九年頃成立）（前書の續編として編まれたが、巷談街說を專らとしたもの）。以上新燕石十種第五所收。 【演劇に關するもの」 撫陽觀六十卷（別項）○撫今古南水漫遊十卷（別項）○五十一卷以後は、彼の歿後何人かの補筆による。雀前の後の著作稱讃實料の集成ともいはしく、大阪の地理風俗より演劇歌謠等に及んで、編年體に記述した上、直接資料たる劇物番附類まで插入したので、非常に價値高い勞作である。九卷までゝその後さは體裁を異にしてゐるので、卷之一二大阪地名、卷之三難波の霄有、卷之四雜之部、卷之五より卷之九までは南水雜志。卷之十以下は「見聞雜錄」と記して全部年代記的形式を採つた。【遺著】遺著は殆ど殘らず、「大歌舞伎外題帖」とその副產物とも見られる「大歌舞伎年鑑」（各別項）とに彼の助力が少からずある事が推測される。これ等の外に歌右衛門に關する似顏を主とした傳記的な著作として、「芝翫似顏獨稽古帖」「芝翫栗毛」の如き、或は「役者似顏獨稽古帖」の類もある。歌舞伎脚本には彼の立作はないやうである。【讀本】忠孝貞德傳（文化十年刊）

（前項參考文獻）○（全キノ二段河舞（同十一年刊）○化粧水千貫燈（同年刊）○今

一本は巻三・四のみ)・刈谷町立圖書館・神戸第一高女圖書館・大阪府立圖書館・靜嘉堂文庫・東北帝國大學舊狩野文庫・前田侯爵家・尾上八郎氏・佐佐木信綱氏・藤井乙男氏(各一本)・無窮會神習文庫(一本。但し巻一・二・三のみ)等の藏本がそれである。德川期の刊本としては、丹鶴叢書本がある。日本文學全書・國文叢書・日本文學大系・國文大觀等所收。

【梗概】(この物語は前に缺巻があるが、現存本中の記事や「無名草子」「風葉集」「拾遺百番歌合」に引用された本物語の記事、又は歌等から想像して見るに、その首巻は大體次の如くである)。〔首巻〕某の宮に男子が一人あつたが、幼い頃宮は亡くなられたので、北の方はその子を連れて大將に嫁した。その大將に數人の姫君があり、殊にその大君は成長するに從つて容貌が輝くばかりであつた。連れ子の男子も中納言になつた。これも光るばかりの美しさである。二人は祕かに相思つてゐた。玆に式部卿宮といふ色好みの若宮が居られて早くから大君を得んと望んで居り、大將はこれに許さうと考へてゐたが、北の方は自分が生んだ中納言に與へたいと思つてゐた。そのうち中納言と大君とは遂に契を結ぶ。大將は怒つたが、大君の代りに妹姫を式部卿宮に與へた。中納言は居づらくなつて亡き父君を戀しがつてゐると、父宮は今唐の帝の第三の皇子に生れ變つてゐるといふ話を聞き、又夢にも見て戀しさ限りなく、大君に後髪を引かれる思ひを貽しながら、三年の



濱松中納言物語末巻(尾上八郎氏藏)

暇を請うて筑紫から唐に船出した。大君は賴む所を失つて悲歎の極、尼となつたが、中納言の種の姫君を生んだ(次の五巻は現存本に據る)。〔巻一〕中納言は七月十日恙なく唐に着いた。庶民の感歎は勿論、朝廷に伺候しても、かの國の公卿で、この中納言に並ぶ者は一人もなく、帝も驚かれる許りであつた。母后と共に内裏の邊り近く高陽縣に住む第三の皇子からの御消息で、中納言は喜んで參上した。皇子は御年七八歳、この上ないお喜びであつた。十月中納言は皇子を訪ねて、高陽縣に行つた際、圖らずも二十に餘らせ給ふその母后の琴を彈く麗しい姿を見て、恍惚として故郷の大君の事も忘れるほどになつた。この后の素性はと言へば、昔この后の父が遣使として筑紫に渡つた頃、上野宮といふ皇子が筑紫の配所で亡くなられたが、乳母に侍かれて其處に留まつて居られた姫君と契を結んで一人の女子を儲け、その五歳の時伴つて唐に歸つた。これが今の后である。帝は生ひ立つにつれ愈々美しいこの少女を思ふ御心抑へ難くて、遂に后としてお迎へになつたが、一の大臣の女の一の后を初め多くの女御達の呪が恐ろしいので、高陽縣に捐ゑて置かれたのであつた。その年も暮れた。一の大臣の五の君は、去る秋にほのかに見た中納言の俤が忘れられず、思ひ惱んで臥してゐた。父大臣は娘の愛に溺れて、その女を中納言に進めようとして招待したが、中納言はただその女と話を交へたのみで歸つた。併し五の君はそれだけでも心慰みて全快した。中納言は后を今一度見たいと、それのみを念じて菩提寺に參籠しては不思議な佛のお告げを夢に聞いたりした。そのうち或る夜、さんいうの邊を逍遙し、折しも夢のお告げによつてその地に物忌に籠つてゐた后を垣間見、后とはつゆ知らず似た人を見た嬉しさに、忍び入つて一夜の契を結んだ。后はこれも前世の因緣と諦めるが、せめて后とは知られまいとした。その後、中納言はその夜の女に會はうとするが、會ふ事が出來なかつた。后は姙娠したのを知つて、帝の眼を避けるために、父の住む嶺山に籠つた。七月、中納言はその夜の女に似た后を見ようとて嶺山に行つた。その冬、后はやす〳〵と若君を生んだが、中納言そつくりの容貌であつた。年はかへつて早くも三年の期限は來た。中納言は八月十五夜に帝の別の宴に臨み、帝が卑しい女に仕立てた后の琴を聞き、かの夜の女を再び見た喜びに胸を轟かした。后と中納言との琴の合奏に、帝はそぞろに涙も止まらなかつた。中納言は、その後、さんいうに行つて、后の親戚の女王の君から事の仔細を聞き、始めてその夜の女が后であつたことを知つた。若君も中納言によくなついた。中納言は女王の君を通じて、今一度の后との對面を願つたが、后は聞き入れなかつた。九月愈々歸る時、中納言は若君を伴つて行くことになつた。后は夢に、「この若君は日本の堅めなり」と見たが、流石に我が子と別れる辛さに泣いた。歸國の前々日、中納言は高陽縣で后に會つた。后は、「母が日本で尼になつてゐられるのに消息を傳へてくれ、曩に日本の聖が來た際にも賴んだのだが、その後何の返事もないから案じてゐる」とて、中納言に文箱を渡した。翌日又高陽縣に行つたが、昨夜ほどの后の御聲を聞くことも出來なかつた。一の大臣の五の君から惜別の文が來たので忍んで立ち寄つた。五の君は姉君等と琵琶を彈いて中納言との別を悲しんだ。〔巻二〕中納言は筑紫に渡る途中、母に「預けるものがあるから、乳母を筑紫に下させ給へ」との手紙を遣つた。世の人は中納言の歸朝の噂を聞いて大に喜んだ。尼姫君(即ち大君)はこの噂を聞いて、今は中納言と共に住むのを憚つて他に移りたいと言つたが、母は聽かない。大將も兒姫さへある今の仲ゆゑ、唯々おだやかに人のするまゝにまかせよと言つた。愈々中納言は筑紫に着くと、大貳を初め國々の司の盛んな歡迎に會つた。中納言は下つて來た乳母に后の腹とは祕して若君を託した。その折、乳母から大君の身の上を聞き、驚き且つ嘆いて、世の聞えも憚りあれば、當分大將にも若君を祕してくれと賴んだ。この地の大貳は一人の女を持つてゐたが、昔から中納言に奉りたく思つてゐた折柄、一夜盛んに中納言を饗應して、その女を、御足をさするためにとて寢所に押し出した。中納言はただ懷かしく話をしたのみで、あたりが流石に見捨て難く思ひ、大貳を呼んで、今は契れない次第を告げ、後には必ず預かる事を約した。中納言は唐から送つて來た人々も歸り、今はとて京に上らうとする曉、大貳の女

は三枚目の位置になつた。尤も歌右衛門が金澤龍玉(別項)の作者名で脚本を書く時、彼等の加筆があつた事は想像される。歌右衛門との交渉については「許多脚色帖」(別項)の内容に見ても、相當深いものがあつた筈である。歌國の名は早く小説作者として用ひてゐたのであつたが、文政三年から歌舞伎方面に流用したのである。文政九年に病にかゝり、一度癒えたが、このため翌年歿したと傳へる。商家の

年鑑」(各別項)とに彼の助力が少からずある事が推測される。これ等の外に歌右衛門に關する似顔を主とした傳記的な著作として、「芝翫梁毛」の如き、或は「役者似顔獨稽古」の類もある。歌舞伎脚本には彼の立作はないやうである。【讀本】忠孝貞婦傳(文化十年刊「神盟矢口渡」(別項)による。〇全キノ一)駿河舞(同十一年刊「傾城天羽衣」(別項)による)〇化粧水千貫樽(別項)による)〇今

く、寫本として傳はるものも、第五巻を有する尾上八郎氏本以外は、首尾兩巻を缺いた四巻本又はその端本である。而してこれ等現存の寫本は、何れも德川初期を溯るものはなく、又僅かの出入はあるにしても、皆同一系統のものである。即ち、宮內省圖書寮・松井簡治氏(各三本)・京都帝國大學國文學研究室(四本。但し內一本は巻二・三・四、一本は巻一・二、一本は巻四のみ)・影考館文庫(二本)・內閣文庫(二本。但し內

龍玉(別項)の作者名で脚本を書く時、彼等の加筆があつた事は想像される。歌右衛門との交渉については「許多脚色帖」(別項)の内容に見ても、相當深いものがあつた筈である。歌國の名は早く小説作者として用ひてゐたのであつたが、文政三年から歌舞伎方面に流用したのである。文政九年に病にかゝり、一度癒えたが、このため翌年歿したと傳へる。商家の

のいとほしく美しかつた様子を思ひ出し、今一度見まほしくて立ち寄つた。翌朝中納言は京に立つた。乳母は若君を具して他船で上つて自分の里に落着いた。京に歸つた中納言は母上が抱いて見せる姫君を見るにつけて、大君の尼になつたのをつくづくと歎いた。又若君を儲けた事を母上に申上げると母上は非常に喜ばれた。やがて尼姫と對面して互に涙せき佗びつつ冬の一夜を語り明かした。大將は今は憤りも全く解けて、この對面の結果を危ぶんで露まどまろず、思し明かしてゐたが、二人の睦じいのを聞き非常に喜んだ。晝間また中納言は尼姫を訪ねた。美しさ高陽縣の后にも劣らぬを見て又涙ぐんだ。召によつて中納言は參內すると、帝は中納言の美しさに涙をこぼして喜ばれた。中納言はかくて尼姫の方に一緒にゐたが、大將は中納言の尼姫に對する御心が、式部卿の宮のそれに比べて遙に厚いのに今は滿足した。尼姫も佛に仕へる友として中納言を隔てる事もしなかつた。若君に仕へてゐる乳母の里が近いので、中納言は時々訪ねたが、兒姫と露違はぬ若君の容貌を限りないものと思つた。中納言はこの世の事も唐の事も總て尼姫に打明けたが、高陽縣の后の事だけは默つてゐた。歸國後、とやかくと忙がしい儘に取紛れてゐたが、やがて落着くと后の事が堪へ難く思ひ出される儘に、託された文箱を明けて見ると、后の母君に對する戀しさが、長々と書いてあり、終りに、「此の中納言を自分の身を變へて渡つたものと思ひ頼み思し召せ」と書いてあつた。中納言は胸せきあげて堪へ難く、鳥になつて高陽縣に飛んで行きたいと思つた。やがて人を召して唐に渡つた聖が三吉野にゐるのを聞き、乳母の里に着くと、中納言は先づ若君を連れて來て姫に見せ、若君には「これぞ母よ」と言ふと、若君は直ぐになついて、夜もただ姫の懐に眠つた。乳母は姫の美しさに驚いた。中納言は聖の戒が恐ろしく、痛く念じて思ひ過ごし、夜はやはり尼姫の所に住まつてゐた。年改つて朔日、ます〳〵美しく成長された兒姫君を中納言が抱き、大將が戴餅をした。中納言は又若君にも戴餅をしに吉野姫のゐる乳母の里へ行き、初春の清楚な吉野姫を見て、「心安き私物よ。それにしてもよく式部卿宮に見つけられなかつたものだ」と喜んだ。併しやはり、思ひ出すものは唐では后、日本では尼姫であつた。今日も亦不斷の涙を流した。中納言は

には若君の世話を託し、母上にも暇申して三吉野に向つて出で立つた。三月二十日の頃であつた。〔巻三〕三吉野に行つて見ると、聖は年六十許りで穢げな様で住んでゐた。聖は過ぐる年の后の消息は確かに傳へたが、返事を申上げる便がなく、中納言が渡唐の際も機を逸して殘念に思つてゐた所だと喜んだ。聖は后の母君の素性を話した。母君は唐の使に別れて後、筑紫から京に上つたが、帥宮が忍んで通つて來た。併し今更世の常の人に會ふのも心憂いとて、尼になつてこの山に籠られたのであつたが、もとの契の種を宿して女君一人を生んだのであつた。中納言は、聖の案內で、この尼君を訪ねて文箱を渡した。尼君も中納言を頼もしく思つた。又中納言は、聖から、尼が帥宮と契つて生んだ姫君は、今尼君と一緒に住んで居られる由を聞いた。この姫君は餘りに美しいので、尼君も往生の妨げとは思ひながらも、思ひ切ることが出來ずにゐたのであつた。中納言は暫し此處に止まつてゐたが、やがて京に歸つた。尼君は姫君の事のみが如何にも心懸りであつたが、丁度この中納言が最初訪ねて來た日の曉、姫のたよりはこの人だといふ尊い僧のお告げの夢を見たので、中納言に託さうと決心した。四月姫君の衣更への折、中納言は綺物語を差上げた。この頃、例の大貳の北の方が女を先に立てて京に上つて來たが、「中納言は尼姫君に定まつた」との噂を聞いて、輕率にも中納言の叔父に當る大將の大殿の衞門督で、さだすぎた妻をかこつ男に女を與へてしまつた。中納言はこれを聞いて大に嘆き、祕かに女に文を遣はした。女も哀れな返事をした。中納言は一夜衞門督の不在を窺つて、女の所に忍んで行つた

が人々は衞門督と思ひ違へ、やす〳〵と入れて呉れた。女は淺ましいと思ひながら、流石に嬉しく、中納言が「具して率て隱さう」と言ふのにも打うなづいた。翌早朝、中納言は尼姫のもとへ歸つて、その行をせられる姿をみて、やはり大貳の女とは比べものにならぬ美しさに涙を落した。六月、中納言が尼姫のために作つてゐた釣殿の御堂が落成して盛んな八講が行はれた。大將も母も、あるじの中納言の尼姫への志を喜んだ。中納言は人々の滿足してゐるのを見て嬉しく、もう思ふ事もなく、唯々唐の后を今一度見せ給へと念ぜられる事より外はなかつた。三吉野には四五日毎に消息を送つてゐた。七月七日の夕、內裏に參つて「唐の珍らしい話をせよ」との帝の所望に答へて、今まで隱してゐた唐の一の大臣の五の君、高陽縣の后等の美しさを申上げた。帝は承香殿の女御腹の女宮を中納言に與へようとほのめかされた。中納言は大將殿や尼姫への憚りもあり、悶えて尼姫に帝の仰せを打開けたが尼姫は「私に憚るな」と言つた。中納言は尼姫の心中を思ひやつて色々と盡きせず話をした。乳母の預る若君の事などもそれとなく洩し聞えさせたが、后の事だけはやはり一言も言はなかつた。八月の半、中納言は再び吉野を訪ねた。尼君はこの度は全く心の隔てもなく、昔よりの事どもを語り盡し「將來我が亡き後、姫をこの住居ながら後見て呉れ」と中納言に頼んだ。中納言もこれを承諾した。尼君は後夜の行に御堂に入つて、姫に「中納言を頼め」と言つた。月愈々澄みゆく儘に、中納言は姫の琴を聞き、去年の今宵、高陽縣の后の彈いた琴を思ひ出して涙止むる術もなかつた。〔巻四〕帝は、姫宮の御降嫁の準備を急いで居られるので、大將は胸つぶれ、尼姫は大將の嘆きを思つて憂鬱になつた。中納言は愈々心苦しく遂に中將の內侍といふ人を介して帝に御辭退申上げた。大將は中納言の珍らかな心に涙を落した。中納言はこの頃吉野の尼君を夢に見る事が頻りなので、十月一日吉野を訪ねてみると、尼君は病氣であつた。中納言は早速山科寺の僧などを呼んで祈をさせた。尼君は先に中納言に姫を頼んで置いたので、今は偏に佛を念ずる事が出來ると喜んでゐた。十五日尼君は紫雲棚引き芳香薫る中に遂に大往生を遂げた。中納言は暫し庭に下りて、これを見て羨しくも悲しくも思つた。姫は悲しさのあまり絶え入つたので、中納言は種々介抱した。盡きせぬ后の形見は今はただこの姫のみと思ふと、中納言は立ち離れ難く思ひ、一方又高陽縣の后がこの母君の死をも知らずに、琴でも彈いて居られはすまいかと知らせたく思つた。忌も明け、雪もます〳〵繁くなつたので、中納言は京に歸らうとするが、姫君を見捨てる事は出來ない。さりとて急に一緒に連れて出る事も出來ないので、乳母の弟とその娘を呼んで預け、後で迎へに來る事を約して京に歸つた。歸京後、尼姫に尼君の臨終の折の有樣を語ると、尼姫も羨しく思はれた。尼姫は、吉野の姫をこちらに迎へ給へと言ふが、人の噂が煩はしいので、中納言は若君のゐる乳母の里に迎へる事に決めて準備を急いだ。中納言は吉野に行つて、聖に姫を迎へる由を語ると、聖は「三年經て姫が二十になるまで契つては宿世がおそろしい」と戒しめた。愈々中納言は姫を連れ出す。中宿の夜、中納言は姫に、今まで誰にも祕してゐた高陽縣の后との契のこと、若君のことを語つた。乳母

とかくして日は經過するが、姫はます〳〵前くなるばかりなので、宮はこの人を死なせてはと心配のあまり、遂に故郷に知らせたい人があるかと尋ね、その乞ひによつて中納言を呼びにやつた。中納言は來て大に驚き、早速乳母の里につれ戻つて介抱する。その後は、姫も段々よくなつてゆくので、中納言も宮も大喜びであつた。中納言はある日姫に、姫が盜まれて後、今までの自分の苦しみを語つて、かゝる思ひの外のさまになつてしまつた事を恨んだりする。式部卿宮はその後も頻りに姫の病床を訪ねて居られたが、愈々東宮に立たれる頃になつても一向嬉しい顏もなさらず、一途に姫の事を心にかけて居られ、ある時は思ひ切れない。一方、式部卿宮は、どうかして中納言の隱してゐる姫を見たいと焦つてゐるが、なか〳〵その機がない。そのうち、五月頃から吉野姫は瘧を病んで中納言の心盡しによる祈禱などにも拘らず、一向利目がないので、中納言は心配のあまり、七月遂に清水に忍んで籠め奉つた。式部卿宮はこの折こそと清水に赴いてほのかに見、その美しさに驚いて今は盜み隱さうと思つてゐる。姫の病は一向怠らないが、中納言は方違のため、やがて心ならずも吾が家に戻つた。式部卿宮は愈々今宵こそ率て隱さうと思つた。〔巻五〕中納言は翌朝清水からのあわたゞしい使に、急いで行つてみると、姫は何人かに盜み出されてしまなつたので、中納言は御所りなど始めさせ、東宮も喜んで御修法さま〴〵に行はせて、日に千度も使が往復する有樣であつた。翌年、かつて中納言を迎りに來た唐の宰相の許から消息があり、「去る年の三月十六日に高陽縣の后が亡くなり、帝は剃髮し、春宮位に卽き、第三皇子が春宮になつた。一の大臣の五の君は后にと望まれたが、中納言を戀ふ歌を詠んで尼になつて山に入つた」とあつた。中納言は見た夢を思ひ合せて、いとどかきくらし、魂消える心地して涙に沈まれるのであつた。

【解說】平安朝の物語が、種々の點に於て、「源氏」の影響をうけてゐる如く、この物語も構想や人物の生育描寫等に於て、相當に著しく「源

の里に着くと、中納言は先づ若君を連れて來て姫に見せ、若君には「これぞ母よ」と言ふと、若君は直ぐになついて、夜もただ姫の懐に眠つた。乳母は姫の美しさに驚いた。中納言は聖の戒が恐ろしく、痛く念じて思ひ過ごし、夜はやはり尼姫の所に住まつてゐた。年改つて朔日、ます〳〵美しく成長された兒姫君を中納言が抱き、大將が戯餅をした。中納言は又若君にも戯餅をしに吉野姫のゐる乳母の里へ行き、初春の清楚な吉野姫を見て、「心安き私物よ。それにしてもよく式部卿宮に見つけられなかつたものだ」と喜んだ。併しやはり、思ひ出すものは唐では后、日本では尼姫であつた。今日も亦不覺の涙を流した。中納言は三日を過ごして歸ると、夕方式部卿宮が來ていろ〳〵物語の折、理想の女のないのを歎いた。中納言は、「山里に美しい人はゐるものだが、あなたが都合悪く聞きつけないのだらう」と言つた。夜更くるまゝに、中納言は強ひて退いて祕かに吉野姫の所へ行き、姫に式部卿の宮を警戒せよと告げた。翌朝吉野姫のもとで、中納言は式部卿宮からの文を受取つた。宮は早くも見顯はしたのであつた。中納言は驚いて、一層姫や侍女に警戒を言ひ含めて歸つた。中納言は又、高陽縣の后を思ふ心が切であるが、正月半ばから后の夢ばかり續いて見るので、どうしたことかと思ひ亂れてゐるうち、三月十六日の夜、吉野姫と月を見てゐると、中納言の耳に、空に聲がして「高陽縣の后の今ぞこの世の緣盡きて天に生まれ給ひぬる」と、三度さだかに聞えた。中納言は吉野姫にその由を語ると、姫も大に悲しんで泣いた。中納言は精進をしようと、吉野姫の所に籠つた。出家したいと思ふが、吉野姫故にさうも思ひ切れない。一方、式部卿宮は、どうかして中納言の隱してゐる姫を見たいと焦つてゐるが、なか〳〵その機がない。そのうち、五月頃から吉野姫は瘧を病んで中納言の心盡しによる祈禱などにも拘らず、一向利目がないので、中納言は心配のあまり、七月遂に清水に忍んで籠め奉つた。式部卿宮はこの折こそと清水に赴いてほのかに見、その美しさに驚いて今は盜み隱さうと思つてゐる。姫の病は一向怠らないが、中納言は方違のため、やがて心ならずも吾が家に戻つた。式部卿宮は愈々今宵こそ率て隱さうと思つた。〔卷五〕中納言は翌朝清水からのあわたゞしい使に、急いで行つてみると、姫は何人かに盜み出されてしまつてゐたので悲嘆にくれる。かくて後は中納言はただ怏々としてゐたが、ある夜の夢に、高陽縣の后が現はれて、「身を變へても一つ世にあらんと祈るあなたの心に惹かれて吉野の姫の腹に宿つた」と云つたと見る。この頃、大貳の女は中納言の子を孕んで男子を生んだ。何も知らない衞門督は大喜びであるが、中納言と女とは心苦しく思ひ、祕かに歌の贈答をしたりする。さてその頃、東宮が亡くなられたので、式部卿宮はその後を襲ふことになり、從つて心に任せた里住から離れて、內裏の御宿直所に來なければならなくなつた。宮はやむなく吉野姫を御宿直所に隱し据ゑやうと思つた。一方、姫は式部卿宮に盜まれて後は、ます〳〵弱げに絕え入るばかりである。式部卿宮は姫のまだ世なれぬのを知つて、かつて清水で、若君が「母よ」と呼んでゐたのを祕かに聞いたことを考へ合せて、誤つて吉野姫の妹でも連れ出してしまつたのだらうと考へるが、その美しさに替劣りの心もしなかつた。とかくして日は經過するが、姫はます〳〵弱くなるばかりなので、宮はこの人を死なせてはと心配のあまり、遂に故郷に知らせたい人があるかと尋ね、その乞ひによつて中納言を呼びにやつた。中納言は來て大に驚き、早速乳母の里につれ戻つて介抱する。その後は、姫も段々よくなつてゆくので、中納言も宮も大喜びであつた。中納言はある日姫に、姫が盜まれて後、今までの自分の苦しみを語つて、かゝる思ひの外のさまになつてしまつた事を恨んだりする。式部卿宮はその後も頻りに姫の病床を訪ねて居られたが、愈々東宮に立たれる頃になつても一向嬉しい顏もなさらず、一途に姫の事を心にかけて居られ、ある時は中納言に、姫を「いと忍びたるさまにて參らせ給へ」とせめたりする。姫は今は勿論、再び宮に見えやうとは思つてゐないので、奉る宮の御文などにも目もくれない。そのうち、姫は姙娠した模樣が著しくなつた。中納言はこれを聞いて、誠の契の遠かつた口惜しさに堪へかねたが、嘗ての夢を思ひ合せて、さすがに嬉しくもあり悲しくもあつた。中納言は姫を大將殿の家に移す。大將殿の上・尼姫と吉野姫とは初めて對面する。かくてこの頃は、隱し据ゑる心配もなく、萬皆一つに思すやうになつたので、中納言も心安くうれしく思つてゐる。併しながら中納言は、なほ燃えさかる情熱を抑へることが出來ず、世の外聞などはかなぐりすてて、人のゐない折には姫に苦しい心の內を打明けるが、姫も今更どうにもできず、佗びしさに淚を流す。中納言も道理と反省はするものの、唐の事を思つては、哀れにもつらい一つ由緣の契りを嘆く。かゝる中に姫は愈々御出產も近く、御心地なやましげになつたので、中納言は御祈りなど始めさせ、東宮も喜んで御修法さま〴〵に行はせて、日に千度も使が往復する有樣であつた。翌年、かつて中納言を送りに來た唐の宰相の許から消息があり、「去る年の三月十六日に高陽縣の后が亡くなり、帝は剃髮し、春宮位に卽き、第三皇子が春宮になつた。一の大臣の五の君は后にと望まれたが、中納言を戀ふ歌を詠んで尼になつて山に入つた」とあつた。中納言は見た夢を思ひ合せて、いとどかきくらし、魂消える心地して淚に沈まれるのであつた。

【解說】平安朝の物語が、種々の點に於て、「源氏」の影響をうけてゐる如く、この物語も構想や人物の性格描寫等に於て、相當に著しい「源氏」の影響を見出すことができる。ただ、この物語に於て注目すべきは、「源氏」より遙かにロマンティックな色彩が深まつてゐることである。それは、まだ見ぬあこがれの國唐土を舞臺としてゐること、また夥しく夢の話が說かれてゐること、ことにその夢が、その意味する內容から云つて、甚だ宗敎的であり、而も必ず現實世界に必然性を持つてゐること等から察することが出來ると思ふ。平安朝に於けるロマンティシズムが、「竹取」「宇津保」(各別項)に於けるやうな童話的なものから、「源氏」に於ける戀愛憧憬的なものを通して、最後にこの物語に於けるやうな宗敎的色彩を帶びたものに展開してゆくのは、當然の發達と云つてよいであらう。かくの如く平安朝ロマンティシズム文學の展開史上から見れば、この物語の文學史的地位は相當に重大なるものと考へてよいであらう。この物語の後に、「とりかへばや物語」(別項)が現はれるが、これに於ては、「竹取」「源氏」を經て「濱松」に至るまで

と忙がしい儘に取紛れてゐたが、やがて落着くと后の事が堪へ難く思ひ出される儘に、託された文箱を明けて見ると、后の母君に對する戀しさが、長々と書いてあり、終りに、「此の中納言を自分の身を變へて渡つたものと思ひ賴み思し召せ」と書いてあつた。中納言は胸せきあげて堪へ難く、鳥になつて高陽縣に飛んで行きたいと思つた。やがて人を召して唐に渡つた聖が三吉野にゐるのを聞き、乳母の衣更への折、中納言は綺物語を差上げた。この頃、例の大貳の北の方が女を先に立てて京に上つて來たが、「中納言は尼姫君に定まつた」との噂を聞いて、輕率にも中納言の叔父に當る大將の大殿の衞門督で、さだすぎた妻をかこつ男に女を與へてしまつた。中納言はこれを聞いて大に嘆き、祕かに女に文を遣はした。女も哀れな返事をした。中納言は一夜衞門督の不在を窺つて、女の所に忍んで行つた【卷四】帝は、姫宮の御降嫁の準備を急いで居

野を訪ねた。尼君はこの度は全く心の隔てもなく、昔よりの事どもを語り盡し「將來我が亡き後、姫をこの住居ながら後見て呉れ」と中納言に賴んだ。中納言もこれを承諾した。尼君は後夜の行に御堂に入つて、姫に「中納言を賴め」と言つた。月愈々澄みゆく儘に、中納言は姫の琴を聞き、去年の今宵、高陽縣の后の彈いた琴を思ひ出して淚止むる術もなかつた。

尼姫は、吉野の姫をこちらに迎へ給へと言ふが、人の噂が煩はしいので、中納言は若君のゐる乳母の里に迎へる事に決めて準備を急いだ。中納言は吉野に行つて、聖に姫を迎へる由を語ると、聖は「三年經て姫が二十になるまで契つては宿世がおそろしい」と戒しめた。愈々中納言は姫を連れ出す。中宿の夜、中納言は姫に、今まで誰にも祕してゐた高陽縣の后との契のこと、若君のことを語つた。乳母

【参考】C. Meinhof : *Die Sprache der Hamiten.* Hamburg 1912. ‖ E. Renan : *Histoire Générale et système comparé des langues semitiques.* 3me éd. Paris 1863 ‖ C. Brockelmann : *Grundriss der vergleichenden Grammatik der semitischen Sprachen.* Berlin. 1908—1913. ‖ W. Wright : *Lectures on the Comparative Grammar of the Semitic Languages.* Cambridge 1890. (別項「語族」の参考書を見よ。)　〔神保〕

ハム語族　「ハミト・セミティク語族」を見よ。

葉室中納言物語　「花鳥風月」を見よ。

はもう中将　御伽草子　二巻

【作者】未詳　【成立】室町末か德川はじめ　【諸本】刊本と寫本とがあつて少異がある。刊本は「うろこかたや新板」と卷末にあるものが東北帝國大學附屬圖書館（富谷野文庫本）に在る。下卷の内題だけが「はもちの中將」となつてゐるけれども、篇中そのやうな人物は居ないし（中將とはもちとは別人である）、多分何時頃からか表題が誤讀せられて「の」の字が攙入して來たものと思はれる。本書は「近古小說新纂」（初輯）に收めてある。寫本は京都帝國大學國文學研究室藏の三卷本で、普通の御伽草子風の袋綴横本であるが、これは表題が「はもち中納言」となつてゐる。題簽の新しい點からして、もと「はもち中□」と「中」の字の下が剝脫或は磨滅でもしてゐたところから、いつか右のやうな題號になつてしまつたのではないかと推測される。無論本文中、中納言などは出て來ない。刊本とは敍述の後が特に異なつてゐる。【内容】敍述物である。上卷は

常に伸びゆく健全なる歩みをつゞけてきたロマンティシズムが、もはや更に歩みをつゞけるべき餘地がなくなつてしまつて、男と女とを取り巻へることによつて起される事件を描くやうな無理に歪曲された頽廃的・未練的・病的な歩みへと追ひやられるやうになつて、近世文學への轉回を思はせるものがある。

【參考】濱松中納言物語　目崎小山田與清〇濱松中納言物語系譜　岡本保孝〇國文學全史平安朝篇　藤岡作太郎〇校註日本文學大系第二卷　尾上八郎〇濱松中納言と更級日記　鴛淵清〇濱松中納言物語末卷略考　松尾聰（國語と國文學八ノ四）　〔池田〕

ハミティク語族　「ハミト・セミティク語族」を見よ。

ハミト・セミティク語族　世界の語族の一。【名稱】ハム・セム語族ともいふ。〔英〕The Hamito-Semitic Family of languages　〔獨〕die hamitosemitische Sprachfamilie　〔佛〕les langues chamito-sémitique.

【解說】左の諸國語の總稱。但しこれを二分して、ハミティク〔英〕Hamitic　〔獨〕hamitische　〔佛〕chamitique）語族又はハム語族及びセミティク〔英〕Semitic　〔獨〕semitische　〔佛〕sémitique）語族又はセム語族とする事がある。（ハミティク系又はハム系）（一）エジプト語。西紀元前四千年の頃より傳はる。古期・中期（紀元前三二〇〇年頃より以後）及び末期（紀元前一五〇〇年頃より以後）の三大期に分つ。謂はゆる象形文字（Hieroglyphic）にて石材等に彫り、後にはパピルス紙にも記した言語及び中期以後パピルス紙に書かれたヒエラティク（Hieratic）と稱する略體文字を用ひてゐる言語を含む。紀元後パピルス紙の末頃よりデモティク（demotic）と稱する一層略體の文字を用ひて記したる言語がある。有名なロセッタ石の第二段に記してあるものは即ちこれである。（二）コプト語（Coptic）。紀元後三世紀の頃よりエジプト各地に行はれた諸方言をギリシャ文字を以て記したものがある。これをコプト語といふ。コプトはエジプトの訛である。以上エジプト地方の諸言語は今日殆ど廢れ、アラビア語がこれに代つて用ひられてゐる。（三）ベルベル語（Berber）。アフリカの北岸より西岸にかけて今日もなほ行はれる。（四）クシト語（Cushite）。アフリカの東北部、今日のアビシニア地方及びその近邊（エチオピア語を除くに行はれる。（セミティク系又はセム系）（一）東部系、バビロニア語。アッシリア語。（二）西部系、（甲）北派、（I）カナーン語（Canaanitic）。最も古い斷片は、パレスタイン地方、バビロニア地方等とエジプトとの間に行はれた通信を記してある。テル・エル・アマルナ（Tel-el-Amarna）泥板の言語及びモアブ地方に發見されたモアブ石（Moabite stone）に記載された言語である。これと同類でやゝ新しいものはヘブライ語（Hebrew）である。これが舊約全書の原語となつた。ヘブライ語は今日でもユデヤ人の間に交語として用ひられてゐる。（II）フェニキア語及びその一分派でカルタゴに用ひられたプニク語 Punic）もこの類に屬する。（2）アラメア語（Aramaic）主としてパレスタインの北方に行はれ、更に東西二部に分れる。西部の最古のものは舊約全書の一部（例へばダニエル書）に插まつて殘つてゐるそ。やゝ新しくは後にパレスタイン地方のユデヤ人の間に行はれ、舊約全書の演義を記したタルグム（Targum）に用ひられたものである。

あるる。イエス・キリストの使つた言語もこの一種であるといふ。東部アラメア語はエデッサ（Edessa）地方からメソポタミア地方に及び、古くよりアッシリア、バビロニア語に代り、廣く各民族間の共用語として用ひられた。シリア語（Syriac）と呼ばれるものもこの中に屬する。（3）南派、（I）アラビア語。セミチック系の中、アラビア語のみは今日多大の勢力を以てアフリカ北岸地に弘く擴まつてゐる。（2）エチオピア語。今日のアビシニア地方及び紅海沿岸地方になほ行はれてゐる。

【特徴】この語族に屬する諸國語は、インドヨーロッパ語族の國語と同じく、大體に於て屈折語である。その單語は、多くは一定の順序に並んだ三つの子音を語根として有する。而してその一々の子音の次に何等かの母音が附け加へられることによつて若しくは何等の母音も附け加へられないことによつて、種々なる派生語が造られ、又種々なる文法上の範疇（例へば畢數・雙數・複數の區別）が示される。例へばアラビア語に於てk, t, bの三子音がこの順序に並んだものは、「書く」といふ意味を表はす語根をなし、これより kátab（彼が書く）、kátib（書き手）、kitáb（書物・本）等の派生語が造られる。又 himar（驢馬）畢數）、hamir（驢馬）複數）、gild（皮）畢數）、gulud（皮）複數）に於ては、母音によつて數の區別が示されてゐる。なほこの外に、接頭辭・接尾辭があり、これによつても亦文法上の範疇が示される。例へばアラビア語の kasár-t-(e)（私が壞した）、kasár-na（私達が壞した）、yi-kasr-u（彼等は壞すだらう）に於ける接頭辭・接尾辭がそれである。

婦が癇癪を起して棒立になつてゐる丁稚の裾をまくると、股の下に西瓜の切身を入れた皿が潜んでゐた。これも張附けの繪で裾をまくれるやうにしてある。そして裾の文句を讀んだ後に、再び元の儘にすると、上手が番頭の姿となり、振場に十貫目を持つて立つてゐる。口繪として、早慶野球全國同盟作戰會議の三項を掲げ、次いで本文としては、第一、小説の三變にして主客となるの項は、主人も番頭も不在なので、丁稚ひとりゐる。そこへ主婦の呼ぶ聲が聞える。丁稚は忌々しさうに返事もしない。主婦はこつそり側まで來て吸鳴りつけ、芝まで旦那を迎に行けと命ずる。それでも丁稚はぐうくしてゐる。主

事がある。〔ハミティク系又はハム系〕(一)エジプト語。西紀元前四千年の頃より傳はる。古期・中期(紀元前二二〇〇年頃より以後)及び末期(紀元前一五〇〇年頃より以後)の三大期に分つ。謂はゆる象形文字(Hieroglyphic)にて石材等に彫り、後にはパピルス紙にも記した言語及び中期以後パピルス紙に書かれたヒエラティク(Hieratic)と稱する略體文字を用ひてある言語を含む。紀元後六世紀の末頃よりデ

れてゐる。又フェニキア語(及びその一分派でカルタゴに用ひられたプニク語 Punic)も、この類に屬する。(2)アラメア語(Aramaic)主としてパレスタインの北方に行はれ、更に東西二部に分れる。西部の最古のものは舊約全書の一部(例へばダニエル書)に挿まつて殘つてゐる。やゝ新しくは後にパレスタイン地方のユデヤ人の間に行はれ、舊約全書の演義を記したタルグム(Targum)に用ひられたもので

れる。又 limar(驢馬、單數)、hamir(驢馬、複數)、gild(皮、單數)、gulud(皮、複數)に於ては、母音によつて數の區別が示されてゐる。なほこの外に、接頭辭・接尾辭があり、これによつても亦文法上の範疇が示される。例へばアラビア語の kasar-tu(a)(私が壞した)、kasar-na(私達が壞した)、yi-kasr-u(彼等は壞すだらう)に於ける接頭辭・接尾辭がそれである。

國大學國文學研究室藏の三卷本で、普通の御伽草子風の袋綴横本であるが、これは表題が「はもち中納言」となつてゐる。題簽の新しい點からして、もと「はもち中□」と「中」の字の下が剝脫或は磨滅でもしてゐたところから、いつか右のやうな題號になつてしまつたのではないかと推測される。無論本文中、中納言などは出て來ない。刊本とは敵討の條が特に異なつてゐる。【題材】敵討物である。上卷

はやうた　はやがわ

では羽持が上洛の留守中に、その北方を見染めた臼杵が、これを獲んがために廻らす奸策のいろ〳〵、下卷では前段がするざねの忠死、中段が北方母子の流離、夫婦の邂逅、後段が敵討と一家の再會、昌榮が逃べられてゐる。「世の中に持つべきものは子なり」といふのが本小説の主題で、且つ曾我傳説乃至「曾我物語」(別項)の影響が著しい。舞曲の「信田」(別項)などにも交渉があらうし、安壽・尉王の傳説とも關係があらう。

【梗概】嵯峨天皇の御代二條大納言もちとをは、忍んで皇女に通つた科で、筑紫日向國へ流罪となつた。遺子平のもりなかは利根第一の才貌無雙、羽持の里に在つて羽持殿と呼ばれ、同國吉田の里の長者吉田某の乙姫の令名を聞いて懇望の文を贈ると、父は富貴榮耀より氏系圖が大事と喜び、受諾して姫を與へた。やがて龜鶴・若鶴・いや鶴の三子を儲け、夫婦はこの上は都へ歸參の叶ふ日をのみ待受けてゐた處、或る時帝は羽持の事を思ひ出され、赦免の上三年の大番勤させよとの宣旨が下り、もりなかは飛び立つばかりの喜びの一方に妻子との別れに躊躇するのを、北方に諭し勵まされて上洛した。北方は夫の安穩祈誓のため宇佐八幡に參籠すると、詣り合せた豐後國の住人臼杵左衞門がその美貌に迷ひ、俄に己が妻を離別して歸國した羽持の北方へ艷書を送つて突返され、更に豐前國ひしだの里に住む新太夫を威してその妻あんなふが、彼の北方と親交あるを利用しようとして失敗し、遂に羽持を歸國の途次に討取つて望を遂げようと備後國まで立ち出でたが、西下は來春の由なるを聞いたので、その儘都へ上り、羽持は平新皇たらんとの異圖ある趣を讒奏した爲め、羽持に親しい出羽判官とをみつの陳辯も甲斐なく、もりなかは陸奥國和田郡へ配流の身となつた。後を託された傅せいわうするざねの齋した夫の文を見て仰天し、北方は自害しようとして諫め止められたが、程なく宣旨と佯つて押寄せた臼杵が、一旦はするざねに追拂はれたものの再び攻め來らぬうちにと、自らはいや鶴を乳母に抱かせて夫の跡を追ひ、同じくするざねの計らひによつて、龜鶴・若鶴は豐前國彦山の阿闍梨の坊へ預けられた。果して臼杵が來襲し、するざね奮戰したが城落ちて捕へられ、左衞門の面前で北方の行方を白狀せよと拷問されたが、飽くまで敵を罵つて射殺された。北方はみくにの港に到つて船頭まきへの太夫に事を打明けて便船を賴み、その女房の深切さに小袖を脫いで與へ、女房が更に路銀まで惠んだ心を嬉し泣きに泣きながら、追手を船底に免れて都へ到着したが、大津の宿の亭主はその哀願を容れず、三人を別々に賣り飛ばして了つた。賣られ買はれて轉々として北方は陸奥國和田庄五郎太夫の許に來たが、太夫夫婦は美しい北方が父母の菩提のための身賣と云ふに同情し、客人として册き、座敷の掃除なりと勤めたいとの切なる請に、さらば賓客ある時の茶の給仕をと望まれ、或る時鷹狩の歸途を主人に乞はれて立ち寄つた客の前に出ると、それがわが夫のもりなかであつたので、奇遇に泣くより外はなかつた。一方橋本の長者に買取られたいや鶴は、恰も武藏の國司となつて赴任の途中この家に宿した都二條の中將に懇望され、伴はれて參內し、帝の御感に與つて少將を頂き、二條御所に册かれる事となり、中將はやがて任國へ下つた。彼の臼杵は或る時彦山詣をして院主の坊に泊ると、驅走の給仕に出た美しい若を羽持の子とも知らず、一人を養子にと乞うたが、院主は預り人だからとて斷つた。その夜宇佐八幡の夢想で始終を知つた二人は、師の坊に書置して互に名殘の顏を見合せ、探り入つて左衞門の枕を蹴り、名告りを上げて首尾よく仇を討取つた。人々は驚き騷いだが、山鳩二つ飛び來つて灯を消した爲め闇で同士討をする中を二人は都へ落ち延び、途上八幡宮と聞いて詣でた社の前で、いや鶴一行も參り合せ、互の素性判明、奏聞して父の赦免の宣旨を頂いた。兄弟三人の文を得た父母は、世に持つべきものは子であるとて今更感激した。大津の宿の亭主は斬られ、二條御所で一家再び歡會を遂げた。羽持は豐前守に任じ、本國日向を賜はり、嫡子は肥前、二男は豐後、三男少將は筑前に封ぜられ、和田庄の五郎太夫、みくに港のまきへ太夫夫婦も、それ〴〵恩賞に與つた。

【影響】古淨瑠璃「よしうじ」(大阪毎日新聞社發行「珍書大觀」の内「金平本全集」に收めてある。又草子としても行はれたらしいが、傳本があるか詳かでない)の構想は、恐らく本書から出たものではないかと考へられる。

【參考】近古小説新纂初輯(考說)〔島津〕

早歌(はやうた)「神樂歌」「雜藝」を見よ。

早替胸機關(はやがはりむねのからくり)　滑稽本　一册

【作者】式亭三馬【角書】切抜繪本浮世七役(きりぬきえほんうきよしちやく)とある。【成立】文化七年。改題「教訓むねのからくり」は嘉永六年。【諸本】三馬傑作集(帝國文庫)・滑稽本集(日本名著全集)所收。【解說】早替り繪によつて人間の扮裝が變る如くに人間も亦轉變する。人生は大きな仕掛機關とも見られる。この原理を極めて卑近なる日常の茶飯事に材を取つてあらはしたものである。口繪として、早變歸繪全圖、同裂作變態圖、美人變爲調讓の三項を揭げ、次いで本文として、第一、小二變して主管(ぴとう)となるの項は、主人も番頭も不在なので、丁稚ひとりゐる。そこへ主婦の呼ぶ聲が聞える。丁稚は忌々しさうに返事もしない。主婦はこつそり側まで來て吸鳴りつけ、芝まで旦那を迎に行けと命ずる。それでも丁稚はぐづ〳〵してゐる。主婦が癇癪を起して棒立になつてゐる丁稚の裾をまくると、股の下に西瓜の切身を入れた皿が潛んでゐた。これも張附けの繪で裾をまくれるやうにしてゐる。そして裾の文句を讀んだ後に、再び元の儘にすると、上半が番頭の姿となり、帳場に十呂盤を持つて立つてゐる圖となる。第二は麒麟變じて駑馬となるである。若者が老人の惡口を言ひ、自分は老い込まないつもりだと言つてゐる口から老い込むものであると記してある。そして下半の張附けの紙を擴げると老人の圖に變る。おやぢが重い詞で、若者の中に交つて若者の着物を評したり、或は昔の劇壇の話をしたりしてゐる。張附繪の下に、障子の外に小僧が老人の歸る呪として、草履に灸を据ゑ、箒に手拭を冠せてゐる。第三は田婢(でんぴ)變じて令室(れいしつ)となるの項で、江戸なれた下女が山だしの小あまに向つて、自分が先年仕へてゐた主家の噂をし、辛抱が肝心だなどと注意をする。そこへ、げぢ〳〵が一匹出る。江戸なれた下女は驚くが、山出しの女は、平氣でそれをひねり殺す。次いでかみさまの圖を出してゐる。これは第四の佛變じて鬼となるに關聯してゐる。主婦は機嫌よく夫の外出を送り出すが、夫の紙入の中から女の手紙が出ると、嚴しく夫に詰め寄る。第五は、新婦(よめ)變じて姑婆となるである。嫁が

お兼といふ女を對手にして、自分達は嫁を貰ふことがあつても、嫁いびりはしないだらうと語る。其處へ姑が猫撫聲で、嫁の髪結ひの長いことから、自分の經驗談をし、細い點にまで嫁に注意をし、大聲をあげて嫁をいびる。第六は虚弱變じて剛強となるである。宿醉で氣持が惡く面目ないと悄氣てゐるが、迎酒に段々元氣づいて再び生醉となり、人の惡態を繪によつて表現しようとする趣向によるものである。

〔小柴〕

囃子（はやし）「歌舞伎音樂」「能囃子」を見よ。

林崎文庫（はやしざきぶんこ）【解說】今を距る凡そ六百年以前、内宮祠官荒木田經延が宇治岡田村（現今の今在家町）に、文庫を經營したのが濫觴で、はじめはこれを岡田文庫と稱した。然るに、この文庫は貞和三年に燒失して、後三百四十餘年を經て、貞享三年宇治會合所の大年寄等が相謀り、丸山に地をトして文庫を造り、これを内宮文庫と稱した。所がこの丸山の地は卑濕で圖書の保存に適せぬため、更に元祿三年、丸山の北隣の林崎といふ地に移したのである。こゝに於て、これを林崎文庫と稱へ、齋舍をも設けて、講習研鑽の場所とした。當時の山田奉行岡部駿河守は、幕命によつて黄金一百五十兩を寄せて、經營の費に充てしめたといふ。この林崎は、後に鼓岳を負ひ、前は朝熊嶽に對し、五十鈴の清流に臨んで、頗る景勝の地であつて、講學の徒には適當な場所であつた。林信篤・伊藤東涯・三宅尚齋・大鹽中齋・竹内式部等も、この文庫に來つて、學を修めたと傳へらるゝ。【藏書】林崎文庫の名は各國に喧傳せられ、從つて學者はその著述又は藏書を、神宮又はこの文庫に寄進する傾向を生じた。關白一條兼輝の「一代要記」、將軍綱吉の「四書直解」、德川齊昭の「大日本史」を初め、個人の手澤にかゝるものも、多數寄せられた。これ等の中に最もこの文庫の内容を豐富ならしめたのは、古義村井敬義が、天明四年にその藏書二千部を奉納したことで、その珍書奇書に屬するものは、實に夥しい數にのぼつてゐる。神宮文庫別項には、この林崎文庫に基礎を置くものである。

〔植松・岩淵〕

林屋正藏（初代）（はやしやしょうざう）落語家・笑話作家【通稱】林屋正藏。通稱をそのまゝ藝名又は作家名に用ひた。【雅號】林泉【藝名】樂賀・笑三・可龍・正三・二世鹿野武左衞門【生歿】天明元年生れ、天保十三年（一七九〇）六月五日歿す。享年六十二【墓所】淺草今戸慶養寺【閲歷】江戸の人、一世三笑亭可樂（別項）の門に入り樂賀と云ふ（又樂我とも云ふ）。可龍・笑三と改め、更に正三、遂に正藏を名乘る。林屋正藏となり、獨立して怪談咄を得意とし、その祖と稱せられた。本所林町から長谷川町に居を移した時、その借家が初代鹿野武左衞門（別項）の舊宅である事を發見し、大屋から同人の店賃通ひを貰ひ受け、二代武左衞門を名乘つた事もある。この奇遇に感じて文化十二年三月二十五日、中橋下槇町木屋忠右衞門樓上で、披露落語會を開催した。報條は式亭三馬の作である。但し鹿野武左衞門舊宅説は彼の宣傳用の揑造とも云ふ。その後八丁堀與力町、下谷三味線堀、淺草田原町二丁目門跡裏門、鐵砲町、橘町二丁目、本所三つ目と數次轉住した。彼は落語家として一流であつたと共に、狂歌に巧みであり、淨瑠璃語としても秀でてゐた。彼の著作は噺本の外、合卷本があり、多く怪談であるが、多分彼が上演したものであらう。天保六年正月剃髪して林泉と號したが、後、還俗して舊名林屋正藏に復した。病氣危篤の時、家人に死後火葬にせよと遺言したので、これに從つて柩に火を點じたところ、柏中俄然爆音を發して星光高く沖天した。會葬者が驚いて調べると、花火を身に帶びてゐた事が判明し、流石は怪談咄の元祖だけあつて、死後までこの怪を演じたと噂し合つた。この話は十返舍一九の事として傳へてゐるが誤である。【著作】【笑話】升おとし（文政九年）〇笑壇誹雙紙（天保二年）〇笑話の林（同年）〇落噺笑富林（天四保年）〇四季の園（天保五年）【合卷】尾尾屋於蝶三世談（文政八年）〇鶉權兵衞物語（文政十二年）〇怪譚桂河浪（天保六年）〇怪談春雛鳥（天保九年）。

【業績】怪異思想がなほ江戸民衆の實生活に生きてゐた時代、殊にエロ・グロの類廢趣味の盛んに起つた江戸末期に於て、劇に於ける鶴屋南北（別項）と相俟つて、講談より寫實的な落語に怪談咄を創めたのは、時代を見る炯眼を稱せねばならぬ。文藝の作品としては、落語家にも亦かゝる作物のあるのを珍とすべきに過ぎない。

【門弟・系統】上藏（後人情亭錦紅）・林藏（富本八十太夫）・林馬（後二代林藏）・正太樓（後東屋清三郎）・花鏡（後二木庵仙鏡）等は門弟であり、二代正藏（後船遊亭扇橋門）・三代正藏（後壺遊亭高橋）・四代正藏（初、司馬龍我）……十一代正藏（現今）等は系統をひく者である。

〔山崎〕

隼人舞（はやひとのまひ）舞踊【名稱】大隅薩摩地方の隼人の行ふ舞。【解說】隼人舞は風俗歌舞（別項）の一つとして行はれたが、この舞の手ぶりに就いては、海幸山幸の神話に説かれてゐる。即ち隼人の祖先の火照命が海水に溺れ苦しんだ時の有樣であるといふ。

〔小寺〕

早道節用守（はやみちせつようのかみもり）黄表紙　三册　十五丁十七圖【作者】京傳【畫工】北尾政演（京傳）【名稱】勞力を省く御守を節用集に揖けた洒落。【刊行】寛政元年【諸本】黄表紙名作集（鱗形屋版）所收。【題材】中村座安

早替胸機關

永六年額見世狂言櫻田左交作「將門冠初雪」の摩利支天の守。「忠義水滸全書」の韋駄天神行の法。

【梗概】おぎやの花荻を中にして、幸次郎・惡二郎の戀の爭に端を發し、惡二郎は俳優大谷德次の委員煎餅の店に忍び込み、摩利支天のお守を盜みて顯はれ、大谷家の僕、損三の首にかけた所、その德で損三は寢たまゝ天竺に飛んで行く。釋迦は損三を見て事情を知り、お守の德を羅漢達に示さうと、象の鼻にかけると、象は駈出して始皇帝の表門に到着する。始皇帝はお守の德を聞き、通辭テレメンテーコに命じて、日本から美女を抱へさせる。テレメンテーコは吉原の花荻を身請して支那に

里一日、千里十日の飛脚屋を開業し、或る隱居に頼まれて、太虚靈山へ長命の藥を取りに行き、唐の鳥指に捕へられて、日本渡獵師鳥の見世物となつたが、後、いんじや天狗に救はれて日本に歸り、隱居から多額の金を得て榮える。

〔小池〕

流行歌（りうかうた）「流行歌」を見よ。

はやり唄（はやりうた）小說【作者】小杉天外【刊行】明治三十四年十二月、春陽堂。

【梗概】宇都宮地方の豪家に生れた圓城寺雪江は非常な美貌で、三年前、洋畫家の常雄を聲に迎へて、睦しい日を送つてゐるうち、夫がひそかに藝妓小福を外に圍つてゐるのを知ると、雪江は怒つて、ある日、夫の外出中その畫力が見られ、そこにこの作物の時代的な意義を見る。作者は雪江が墮落するまでの徑路を相當に描いてはゐるが、概念に肉を着けた爲めに、部分的に作爲のあとが見え、多少冗漫、不統一に傾いてゐる。

〔高須・千葉〕

流行歌古今集（はやりうたこきんしふ）歌諸集　一册【撰者】古今新左衞門【別名】古今小歌集【刊行】元祿十二年【諸本】稀書複製會複製。日本歌諸集成所收。原書は甚だ稀覯書で、舊霞亭文庫本が東京帝國大學附屬圖書館に藏せられる。【解說】新左衞門の自序があり、古今節の小歌三十六首を集めたもので、古今新左衞門直傳とあり、新左

井敬義。字は伯直。通稱喜右衞門【別號】舊堂・春星・小笠山樵・宣松老人。俳號は乙平【生歿】寶曆八年生れ、文政四年（一八二一）七月二十四日歿す。享年六十四【法名】釋敎善定門【墓所】築地西本願寺地中淨見寺【閲歷】江戸本町二丁目に住した葦其昌風の書家で、書道に關する書數部を著はしてゐる。同町に居住する大屋裏住（別項）と親しく交はり、同人より腹唐秋人と命名されて狂歌師の仲間に入

永六年額見世狂言櫓田左交作「將門冠初雪」の摩利支天の守。「忠義水滸全書」の韋駄天神行の法。

【梗概】おぎやの花荻を中にして、幸次郎・惡二郎の戀の爭に端を發し、惡二郎は俳優大谷德次の姿貧煎餅の店に忍び込み、摩利支天のお守を盜みて顯はれ、大谷家の僕、損三の首にかけた所、その德で損三は寢たまゝ天竺に飛んで行く。釋迦は損三を見て事情を知り、お守の德を羅漢達に示さうと、象の鼻にかけると、象は駈出して始皇帝の表門に到着する。始皇帝はお守の德を聞き、通辭テレメンテーコに命じて、日本から美女を抱へさせる。テレメンテーコは吉原の花荻を身請して支那に歸る。始皇帝の寵は花荻に集まる。宴席から花荻の杯のあひを荻屋の鳰照に賴みにテレメンテーコが來るのを、惡二郎は日本堤に待伏して、お守を奪ひ、自ら始皇帝の宮殿に行き、花荻を奪つて逃げ出すところを見つかる。お守が花荻の首に掛つたので、花荻は日本に歸つて幸次郎と結婚し、幸次郎は三千世界早飛脚の見世を出して大金を儲ける。

【解說】「將門冠初雪」の摩利支天のお守を「水滸傳」中の戴宗の韋駄天神行の法に結合し、異國的分子を取り入れてゐる。早道を鶴による空中飛行とし、更に異國的、超現實的分子を多分に盛つたものに「福德果報兵衞」（寬政五年京傳作）がある。この趣向は更に「福德果報兵衞」を經て「雲飛脚二代羽衣」（享和元年竹の塚の翁作）に及び、「水滸傳」から得てゐる韋駄天神行の法は、「忠臣水滸傳」（別項）の寺岡平右衞門に及んでゐる。

【備考】【雲飛脚二代羽衣】漁夫白藏が、いんじや天狗に攫はれた天女の羽衣を拾つて、百里一日、千里十日の飛脚屋を開業し、或る隱居に賴まれて、太虛靈山へ長命の藥を取りに行き、唐の鳥指に捕へられて、日本渡獵師鳥の見世物となつたが、後、いんじや天狗に救はれて日本に歸り、隱居から多額の金を得て榮える。【小池】

流行歌（はやりうた）

「流行歌」（りうかうか）を見よ。

はやり唄（はやりうた）

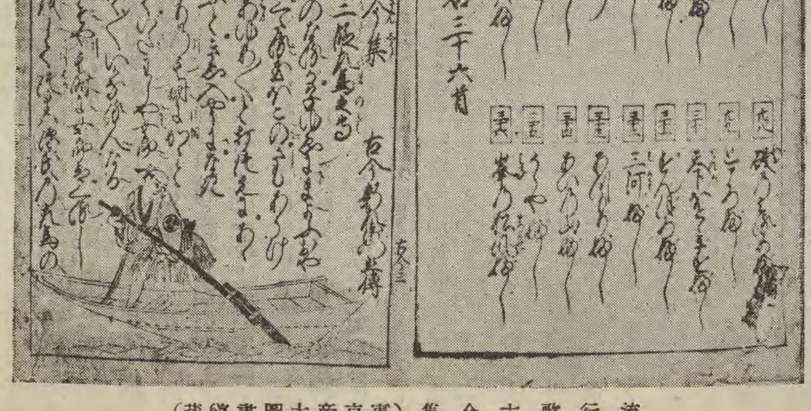
【刊行】明治三十四年十二月、春陽堂。

【梗概】宇都宮地方の豪家に生れた圓城寺雪江は非常な美貌で、三年前、洋畫家の常雄を聘に迎へて、睦しい日を送つてゐるうち、夫がひそかに藝妓小福を外に圍つてゐるのを知ると、雪江は怒つて、ある日、夫の外出中その畫室に入り、小福をモデルにして描いた裸體畫を引き裂いて了つた。それ以來、夫妻の間に一抹の暗雲が漂ひ、果ては雪江が家を飛び出す騷ぎになり、親戚の世話でどうやら事が收つたが、常雄は依然小福と關係を續けたので悶着が絶えなかつた。元來性慾的に病的な遺傳を受けた彼女は、その妹の重病を診察に來る石丸醫學士の瀟洒な姿に心を寄せ、溫室內で石丸に挑まれると、拒みもしなかつた。そして雪江は常雄を離緣し、石丸と一緒に東京へ上つたといふ。その頃、この地方に「溫室で蒸されて下紐切れて、狂ふ仇花親の種」といふ唄が流行して、雪江について厭な噂が次第にひろがつた。

【批評】「初姿」（別項）と共に天外の作中劃期的な力作で、ゾラの遺傳小說の本筋を行かうとしたもの。多淫の遺傳を持つ雪江が、時候・湯上り・酒精等の環境に支配されて、社會的罪惡に陷つて行く。その過程を科學的に、自然主義的な解剖をしようとしたところに作家の努力が見られ、そこにこの作物の時代的な意義を見る。作者は雪江が墮落するまでの徑路を相當に描いてはゐるが、概念に肉を着けた爲めに、部分的に作爲のあとが見え、多少冗漫、不統一に傾いてゐる。

流行歌古今集（はやりうたこきんしふ）

【撰者】古今新左衞門【別名】古今小歌集【刊行】元祿十二年【諸本】稀書複製會複製。日本歌謠集成所收。原書は甚だ稀覯書で、舊霞亭文庫本が東京帝國大學附屬圖書館に藏せられる。【解說】新左衞門の自序があり、古今節の小歌三十六首を集めたもので、古今新左衞門直傳とあり、新左衞門の舞臺姿を描いた挿繪が多く、甚だ參考となる。中本十九丁のうち、挿繪が十三枚ある。歌詞は「落葉集」所載の歌と等しきもの十六首に及ぶ。「落葉集」の古今節を掲げた卷六だけが缺卷となつてゐるのは、この「はやり歌古今集」と牴觸する所あるにより、發行書肆が抗議を申込んだ爲めに、この卷を廢棄するに至つた結果であらうと云ふ說の存在するのも、無理からぬ事である。この重複の中には、新左衞門の歌ひ出した歌の外に、一般の流行歌を新左衞門が取り入れて歌つたと思はれるものも存する。（古今節歌參照）



流行歌古今集（東京帝大圖書館藏）

【藤田】

破來頓等繪詞（はらいとんとうことば）

「やれことんとうことば」を見よ。

腹唐秋人（はらからのあきんど）

狂歌師【本名】中井敬義。字は伯直。通稱喜右衞門【別號】畫堂・春星・小笠山樵・宣松老人。俳號は乙平【生歿】寶曆八年生れ、文政四年（一八二一）七月二十四日歿す。享年六十四【法名】釋敎善定門【墓所】築地西本願寺地中淨見寺【閱歷】江戸本町二丁目に住した董其昌風の書家で、書道に關する書數部を著はしてゐる。同町に居住する大屋裏住（別項）と親しく交はり、同人より腹唐秋人と命名されて狂歌師の仲間に入り、裏住と共に義士討入の扮裝で蜀山人の家に赴き、入門の式を擧げたと云ふ。別に乙平と號して俳諧の道に遊び、又詩を作り狂詩にも巧みで、天明六年には狂詩集「本町文粹」一

冊を著はしてゐる。〔野崎〕

腹鼓（つづみ）　「狸腹鼓」を見よ。

原抱一庵（いはらほういつあん）　鑑譯家・小說家　【本名】余三郎　【生歿】慶應二年壬午郡山に生れ、明治三十七年八月二十三日蒼巢鴨癲狂院（精神病）に死す　木氏。第十三男なので余三郎と名づけられた。【閲歴】本姓、柏原抱一庵の語學力と文章癖とはこの間に養はれた。明治二十年前後卒業して歸鄉し、專ら文學に耽つてゐたものらしい。二十一年、森田思軒（別項）の譯した小說「炭坑祕事」に、鄭使報知新聞に現はるゝや、抱一庵は讀んで大に感じ、細評を作つて思軒に送つたところ、思軒はその文才を奇として「出版月評」（別項）に揭げた。爾後抱一庵は、思軒を師として文學上の指導を受けてゐたが、二十三年、思軒を顧つて上京し、その推擧によつて報知新聞社員となつた。同時に「新小說」「都の花」（各別項）等に飜譯及び小說を寄稿して文名やゝ知られたが、報知新聞に「闇中政治家」（別項）を發表するや、頗る好評あり、抱一庵の名は一時第一流の文人に伍するに至つた。二十四年秋思軒が報知を退くや、抱一庵もこれに殉じた。この前後、彼は「國民之友」（別項）及び國民新聞に小說及び飜譯を寄稿したが、何れも彼の名を讀書社會に廣めるに足るものであつた。二十五、六年の頃、まもなく新聞紙條例に依る保證金の制が廢止されるや、抱一庵は獨立自由の主筆となつたが、間もなく新聞紙條例が改正されて保證金が復活したので、經營難に陷り、年一年と寂しい逆境に陷つた。或は東京日日新聞に、或は萬朝報に關係したが、永くは續かず、故鄉と東京との間を往復して、放蕩滯碍の生活を續け、酒を呷つて鬱を遣つてゐた。三十三年、東京朝日新聞にリットンの「ユージン・アラム」を「犯人か盜賊か」と題して譯載するや、頗に人氣を呼び、その小說が劇に演じられたなど鄉座にて、福井茂兵衞の一派（別項）上彼は朝日新聞客員とまでなつたが、それもほんの最後の火花で、名聲恢復に至らず、平生の大酒と鬱悶とから狂疾を發して、悲慘な最期をとげた。【著作】【小說】闇中政治家（別項）○不遇文人○怨憤○暴夫○明月○新月珠（ウィルキー・コリンス作。未完）○自衣婦人○聖人か盜賊か（ルブラン著）○巴里の祕密（ユージン・シュー）等。

【批評】抱一庵は小說家としては未知數であるが、「闇中政治家」の手並に見て凡手とはいへない。ただ餘り早く容易に名を成したので慢心したのと、放縱な酒癖とのために才分を殺したものであらう。「闇中政治家」の外は短篇で、取立ていふに足る作品はないが、當時は清新・奇警とか、峭刻とかいふ點で喜ばれ、摸做者まで出た程である。彼は東洋のユーゴーと云はれ、又その附記の二字許では樸茂と評せられてゐる。俳號は一年に滿たずして改號し、子規に「破笠子名を改めて把栗といふ。君知るや三味線草は蕎なり」（新派俳家句集・新俳句）の句があり、三十二年結婚の際には、子規から新婚を祝する歌十一首を送られた。その前年、三十一年「ホトヽギス」（別項）が松山から東京に移つてからは、殆ど每號誌上に健筆を揮ひ、作句は三十年の「新派俳句集」の外、子規生前の「新俳句」「春夏秋冬」（各別項）等にも見られるが、三十五年子規歿後は、漸にその趣致を傳へようとする努力は認めてよい。而して飜譯は小說に數倍する程ある。彼を評して、天才と言つた人もあつたが、兎に角明治文學史上の一奇才として記憶すべき一人である。〔孫田（泉）〕

把栗（つばり）　俳人　【姓名】福田帰處（號に用ひた）　【號】初め破笠　【派派】子規派　【閲歴】慶應元年五月二十七日、和歌山縣東牟婁郡新宮町に生れた。俳歴以外の經歴は知るを得ないが、初めは漢詩を專らとし、京都清水の愚庵和尙の愚庵十二勝の唱和には詩人として應じ、別に子規等と俳句をも交つてゐる。俳句には、子規派の興起を望んで明治二十八年加盟し、漢詩の素養が動けて忽ち一家を成し、漢詩的な格調に於て優れ、子規の「明治二十九年の俳句界」に於て、「昨年中著しき進歩を爲したるは把栗なり。把栗昨春始めて俳句を試み、秋冬に至りて既に一家を成す。其趣向多く漢詩より來る。清幽瀟洒誦すべき者多し」と云はれ、又その附記の二字許では樸茂と評せられてゐる。俳號は一年に滿たずして改號し、子規に「破笠子名を改めて把栗といふ。君知るや三味線草は蕎なり」（新派俳家句集・新俳句）の句があり、三十二年結婚の際には、子規から新婚を祝する歌十一首を送られた。その前年、三十一年「ホトヽギス」（別項）が松山から東京に移つてからは、殆ど每號誌上に健筆を揮ひ、作句は三十年の「新派俳句集」の外、子規生前の「新俳句」「春夏秋冬」（各別項）等にも見られるが、三十五年子規歿後は、漸にその趣致を傳へようとする努力は認めてよい。而して飜譯は小說に數倍する程ある。彼を評して、天才と言つた人もあつたが、兎に角明治文學史上の一奇才として記憶すべき一人である。〔孫田（泉）〕

孕句（はらみく）　連歌・俳諧　【解說】連歌・俳諧などにて、懷妊の腹中に案じ置きたる句。腹案又は宿題の義。「新續犬筑波」に、「はらみ句も今ぞひもとく花の下」など見える。〔福井〕

把栗（つばり）　俳人　【姓名】福田帰處（號に用ひた）　【號】初め破笠　【派派】子規派　【閲歴】慶應元年五月二十七日、和歌山縣東牟婁郡新宮町に生れた。俳歴以外の經歴は知るを得ないが、初めは漢詩を專らとし、京都清水の愚庵和尙の愚庵十二勝の唱和には詩人として應じ、別に子規等と俳句をも交つてゐる。俳句には、子規派の興起を望んで明治二十八年加盟し、漢詩の素養が動けて忽ち一家を成し、漢詩的な格調に於て優れ、子規の「明治二十九年の俳句界」に於て、「昨年中著しき進歩を爲したるは把栗なり。把栗昨春始めて俳句を試み、秋冬に至りて既に一家を成す。其趣向多く漢詩より來る。清幽瀟洒誦すべき者多し」と云はれ、又その附記の二字許では樸茂と評せられてゐる。俳號は一年に滿たずして改號し、子規に「破笠子名を改めて把栗といふ。君知るや三味線草は蕎なり」（新派俳家句集・新俳句）の句があり、三十二年結婚の際には、子規から新婚を祝する歌十一首を送られた。その前年、三十一年「ホトヽギス」（別項）が松山から東京に移つてからは、殆ど每號誌上に健筆を揮ひ、作句は三十年の「新派俳句集」の外、子規生前の「新俳句」「春夏秋冬」（各別項）等にも見られるが、三十五年子規歿後は、漸

鍼霊（はりぶくろ）　語學書　二卷　【別名】歌詞三格例　【著者】鹿持雅澄　【成立・刊行】天保九年三月七日の自序がある。明治二十六年宮内省より刊行。この版本は、昭和五年「萬葉集古義」附卷下に收めて複製された。【内容】主として「萬葉集」の中より證例を引いて、上代語に於ける係結及びてにをはについて說いたものである。係結については、これを正格・別格・偏格の三種に分ち、結詞に語尾變化を有するものを正格とし、これを（一）係詞（著者は照ごぼこと云ふ語を用ひてゐる。）をうけて第二位（イ段詞）に云ふ語を用ひてゐるもの、（二）係詞をうけて第三位（ウ段詞）に云ふ語を用ひてゐるもの、（三）係詞をうけて第四位（エ段詞）で結ぶもの、（四）ぞ・や・何と云ふ係詞がなくて連體形で結ぶもの、（五）係詞があつて、これをうける結詞が省かれてゐるもの、（六）歌のさま、詞のしらべに從つて、定格に違つて結ぶものであつて、以上の（二）以下の正格・別格に關しては、卷頭にこれを圖示したものが掲げられてゐる。）偏格は特殊の係結であつて結ぶもの、（二）（三）所謂經書のクヽ形とこれを六種とする。即ち（二）（三）係詞がなくて連體形で結ぶもの、（四）ぞ・や・何と云ふ係詞がなくて連體形で結ぶもの、（五）係詞があつて、これをうける結詞が省かれるが、岸本はその一家の生活が中心となつてはゐる。北村透谷等の文學界派（別項）の人々がモデルとなつてゐる。時代も若く、思想も若いその頃の青年達の、浪漫的な惱みと傾慢とを描いたものである。長篇小說「櫻の實の熟する時」（別項）は、「春」に來る前の時代の岸本は長兄に代つて一家を背負はねばならなくなる。一旦思ひ切つた教師の仕事をあとに、ある東北の學校に赴任してゆく。雨にぬれる汽車の窓に頬をよせて岸本は「あゝ、自分のやうなものでもどうかして生きたい」と深く〳〵溜息を吐くのだつた。

【解說】「春」には筋というものがないと云はれるが、岸本とその一家の生活が中心となつてはゐる。北村透谷等の文學界派（別項）の人々がモデルとなつてゐる。時代も若く、思想も若いその頃の青年達の、浪漫的な惱みと傾慢とを描いたものである。長篇小說「櫻の實の熟する時」（別項）は、「春」に來る前の時代の岸本は長兄に代つて一家を背負はねばならなくなる。一旦思ひ切つた教師の仕事をあとに、ある東北の學校に赴任してゆく。雨にぬれる汽車の窓に頬をよせて岸本は「あゝ、自分のやうなものでもどうかして生きたい」と深く〳〵溜息を吐くのだつた。

春（はる）　小說　【作者】島崎藤村　【發表】明治四十一年一月より東京朝日新聞連載。【刊行】同年十月、緑陰叢書第二編（上巻）。代表的名作選集（新潮社）・藤村全集第四卷等所收。

播磨節（はりまぶし）　松岡靜雄　武田　物語　「井上播磨掾」を見よ。

播磨風土記（はりまふどき）　記錄　出雲（○播磨風土記）○播磨風土記　藤本政治（○播磨風土記）○播磨風土記　【參考】標註播磨風土記　飯田年治○標註古風土記　【傳來】全本は傳はらず抄出本のみ。【内容】和銅六年五月甲子、大倭・和泉・日根の三郡を割いて始めて和泉監を置くと見えて、この時から河内の和泉郡を和泉監につけたのに、この「風土記」は、既に靈龜二年より前に書き記したものなれば、なほ川内國泉郡とあれるべく、又「出雲風土記」に鄉字は靈龜元年の式により里を改めて鄉とすと見えてゐるのを、この書には「和名類聚鈔」に鄉として出てゐるものをも里とのみ記してゐるから、靈龜元年以前に書き進めたことは確實である。（標註古風土記）

換へをして結ぶもの、(三)係詞がなくて連體形で結ぶもの、(四)ぞ・の・や何と云ふ係詞をうけて、は・も・徒に應すべき形で結ぶもの、(五)係詞があつて、これをうける結詞が省かれたもの、(六)歌のさま、詞のしらべに從つて、定格に違つて結ぶものであつて、以上のうち、第二種より第六種までは、これによつて歌の味が出るのであるから、歌の解釋に當つて、これ等を輕視してはならないとしてゐる。次に格外として助詞・助動詞・接辭等及びその接續したものを五十音順に排列してその數々の用法を例證を擧げて示してゐる。以上の外、「本語のまゝにいひて、令する意をもたせたる例」「日月月日といふことの辨」「一ツ詞にていひかけて二所にてうけたる例」「二ツ詞にていひかけて一所にてうけたる例」等、主としてていにをはの用法に關するもの十四條ほどが附載されてゐる。【價値】本居宣長の「詞の玉緒」「てにをは紐鏡」等の影響を受けたものと思はれるが、從來主として平安朝時代の實例によつて論じたのに對して、この書は「萬葉集」を中心として、奈良朝時代に於ける實例に據り、常に平安朝のものと比較して上代語法の特徴を明かにした點を尊重すべきである。

【附記】同じ著者に「結詞例」(明治二十六年刊、昭和五年復製)と云ふものがある。これは主として係詞を標出し、それに應ずる結詞のあらゆる場合を擧げ、且つてにをはの各種の用法について證例を示したもので、「鍼嚢」と同樣に「萬葉集」等奈良朝時代の實例を主とし、これを平安朝時代のものと對比してゐる。「鍼嚢」と相對照して見るべきものである。【岩淵】

播磨國風土記　はりまのくにのふどき　地誌　一卷

【編者】未詳　【成立】和銅六年の詔命によつて出來た風土記(別項)の一と認められる。成立年代に就いては、「續日本紀」の靈龜二年四月甲子、大鳥・和泉・日根の三郡を割いて始めて和泉監を置くと見えて、この時から河内の和泉郡を和泉監につけたのに、この「風土記」揖保郡狹野村の條に、なほ川内國泉郡とあれば、既に靈龜二年より前に書き記したものなるべく、又「出雲風土記」に郷字は靈龜元年の式により里を改めて郷とすと見えてゐるのを、この書には「和名類聚鈔」に郷として出てゐるものをも里とのみ記してゐるから、靈龜元年以前に書き進めたことは確實である。(標註古風土記)　【傳來】全本は傳はらず抄出本のみ存してゐる。この抄出本は、卷首が闕けて賀古・餝磨・揖保・讃容・宍禾・神前・託賀・賀毛の八郡を存してゐる。寛政八年に柳原紀光の寫した本、嘉永五年に谷森種松の寫した本から世に知られたが、その兩本とも凡て三條西家本から出發してゐる。【諸本】三條西家に古鈔本がある。この本は、大正十五年に古典保存會から玻璃版として山田孝雄氏の解說を附して印行せられた。その他刊本としては明治の初年「神敎叢語」に收められたのを初め、標註播磨風土記・標註古風土記・史籍集覽・有朋堂文庫・日本古典全集・日本文學大系・校註日本文學類從(羅文)等所收。

【內容】【體裁】各郡の下に、先づその郡名の由來を記し、以下里毎に、所屬の地名・地味・古老の傳說等を記してゐる。土地の產物は多く省略に從つたものと見えて、稀にその記事があるだけである。【文體】國文脈を多量に交へた漢文體で、例へば「所㆓以號㆒褶墓㆒者、昔大帶日子命、誂㆓印南別嬢㆒之時、御佩刀之八咫劒之上結爾賀布都鏡繫」の如き文體である。【價値】風土記中でも特に民間の傳承を多量に傳へ、且つ國文脈の文章を存してゐるので價値が多い。種々の系統の民族が折衝した次第の眺められるのも有益である。

【參考】標註播磨風土記敷田年治○標註古風土記栗田寬○播磨風土記藤本政治○播磨風土記松岡靜雄　〔武田〕

播磨節　はりまぶし　「井上播磨掾」を見よ。

春　はる　小說　【作者】島崎藤村　【發表】明治四十一年一月より東京朝日新聞連載。　【刊行】同年十月、綠蔭叢書第二編(上田屋)。代表的名作選集(新潮社)・藤村全集第四卷等所收。

【梗概】若くして新しい文藝や思想に志す一群の人々があつた。明治の時代もまだ若い頃だつた。某年の夏、青木・市川・菅の三人は、東海道の或る宿に長い間の放浪の旅から歸る岸本を待ち合せる。岸本は旅にやつれて友達の許に戻つて來た。既に妻をもち子もある青木は、岸本にとつてよき友であり指導者でもある。この岸本は古い大家の末弟に生れて幼い時から自ら恩人と呼ぶ人の家に養はれたが、生涯の志を決すべき時機に立つてゐる。彼は旅に出る前數へてゐた女學校の生徒の一人勝子に浪漫的な而も熱烈な初戀をよせてゐる。旅に出たのもその苦悶のためだつたが、歸つてみてもその戀を思ひ切れない。悩みの末に岸本は死を決して頭を剃り、法衣をきて又都會を去るが、暗い海岸に佇んだ儘引返してくる。遙かに高踏する浪漫的の思想と社會生活との矛盾に鬪ひ疲れた青木は、神經衰弱が昂じて五月の月明の夜自殺する。勝子は岸本に別れを告げて、結婚のために歸國する。市川・菅・岡見兄弟、それ〴〵若者の惱みは深いが、岸本は長兄に代つて一家を背負はねばならなくなる。一旦思ひ切つた敎師の仕事を求めて都會をあとに、ある東北の學校に赴任してゆく。雨にぬれる汽車の窓に頰をよせて岸本は「あゝ、自分のやうなものでもどうかして生きたい」と深い〳〵溜息を吐くのだつた。

【解說】「春」には筋といふものがないと云はれるが、岸本とその一家の生活が中心となつてはゐる。北村透谷等の文學界派(別項)の人々がモデルとなつてゐる。時代も若く、思想も若いその頃の青年達の、浪漫的な惱みと憧憬とを描いたものである。長篇小說「櫻の實の熟する時」(別項)は、「春」に來る前の時代の岸本達の生活を描寫したものである。「春」は「破戒」(別項)に續いて浪漫的から現實主義への過渡の時代の所產である。新しき春を新しき夜明けを待ち望む心、新しき生活に憧憬れる心持は、絶望と悔恨の底をくぐつてきた人にして初めて云はれることだ。藤村の作品がすべて、宛然生活の不幸と艱難のために生れた藝術でありながら、しかも朗らかな救ひと希望を見失はないのは、彼の生得の理想家的氣質によるが、又その育つた時代の浪漫的思想の環境と、基督敎的敎養にも由來するところが深い。「春」が發表當時以來、多くの讀者に愛好されるのも、その浪漫的と若さのためである。だが一方に時代と人の若さのための憂鬱と苦悶を見ないわけにはゆかない。「春」は日本の浪漫的の時代とそれを代表する人々との記念像でもある。　〔武藤〕

春遊機嫌袋　はるあそびきげんぶくろ　噺本　二册

【作者】戀川春町　【畫工】自畫　【名稱】一名「春遊機嫌話」。初春の慰みに著はした意である。　【刊行】安永四年　【諸本】近世文藝叢書

第六笑話所收。【解說】小咄十篇を收めてある。二篇の外正月の景物を主題にしてゐる。これが書名の出た所以であらう。明和安永頃の江戸の通人は、一面狂歌師であつた。その狂歌師仲間に小咄が流行し、狂歌師の手で安永元年に「鹿子餅」「聞上手」（各別項）が作られた。戀川春町も通人であり狂歌師であつて、この流行にもれず本篇を出したのである。用語に當時の通人の流行語が多く用ひてある點は、同年に黃表紙「金々先生榮花夢」（別項）を出して成功したその黃表紙的筆致が、噺本にも影響してゐるのである。例へば、「ずいあんじのずい書き」「先づ祝ひに一ばいのみかけ山」「もう本讀みのずい寢か」「きん〳〵風の息子」の如きこれである。「寶船」「大黑」は七福神說話から、「龍宮」は龍宮說話から、「はつ湯」は「久米仙人」から取材したものである。戀川春町の作は、黃表紙でも一體輕い可笑味に滿ち、嫌味のないあつさりしたものである。この書も黃表紙と同樣、當時の通人の口吻を想はせる輕いもので、言語の洒落に墮してゐない。「鹿子餅」などに續く佳作である。【影響】本書の序に、「それ詩歌に六義あり。所謂風賦比興雅頌これなり云々」と說き、落咄を音々體・化物體・馬鹿聲體等、六種に分類してある。これをそのまゝ襲用したのが、烏亭焉馬作「落噺六義」（別項）で、六種に分類して更に例を擧げてある。

（山崎）

春樹（はるき）　漢學者・國學者　【姓名】宮地氏。通稱喜八郎　【號】爲齋　【生歿】享保十三年生れ、天明五年（一七八五）歿す。享年五十八　【閲歷】春樹は土佐藩の儒者宮地介行（すけゆき）（號靜軒）の子、寶曆中出でて國學を本居宣長・荻原宗固に、儒學を西依成齋に學んだ。父に嗣いで儒員となり、祿百三十石を食んだ。後、二十石を加增され、山奉行に擧げられた。春樹は「萬葉集」を研究し、私考を著はした。【著作】萬葉私考十册（寫）（天明四年頃起稿）　（森）

【參考】土佐偉人傳寺石正路○土佐に於ける萬葉學の源流佐佐木信綱（史學雜誌二八ノ六）

春狂言（はるきやうげん）　「劇場」を見よ。

春駒（はるこま）　所作事　浮世風俗物　【解說】年の始めに駒の頭を作り、これを頭に冠つて歌ひ且つ舞うたのを春駒と名づけたと傳へる（故事要言）。併し近世の萬歲や鳥追（各別項）と同樣に諸國を經めぐつた一種の物乞ひは、駒を頭につけず手に持つて舞つた。卽ちそれを舞踊化したものである。【沿革】所作事としては寶曆六年江戸中村座で、中村富十郎が七變化の一として演じたものが古く「春駒」が最

春駒（繪錦）

も好評であつた。富十郎はその後、江戸では寶曆八年（市村座）・明和八年（森田座）・安永七年（市村座）等數回七變化の一として繰返し、「富十郎の春駒」と呼ばれて、「道成寺」（別項）に次ぐ得意の所作事とされた。實に「春駒」は富十郎によつて大成されたといつてよい。これによつて變化物としても單獨舞踊としても種々作られたが、變化物は一曲も今日に傳はらず、非變化舞踊としては代表的な左の二種が傳存してゐる。

【對面花春駒】長唄　【通稱】對面春駒　【初演】寬政三年正月十五日初日、江戸中村座「春世界花麗曾我」第一番目五立目　【作詞】增山金八　【立唄】富士田音藏　【作曲】杵屋正次郎　【振附】山口後の市山七十郎・三代中村傳次郎　【傳來】曲・振ともに傳存。　【諸本】長唄正本。日本歌謠集成卷九・歌謠音曲集（日本名著全集）所收。　【內容】小磯の鞘者おとり（三代瀨川菊之丞）と手負の鞘者おてふ（四代岩井半四郎）とは、

【陸月繼手取】　富本　【通稱】春駒　【初演】天明二年十一月一日初日、江戸中村座「五代源氏貢振袖」第一番目四立目　【作詞】櫻田治助（太夫）二代富本豐前太夫　【作曲】名見崎德治　【振附】二代藤間勘兵衞　【傳來】曲の一部は傳存、振は廢滅したらしい。　【諸本】富本節正本・日本歌謠集成卷十・舞踊劇集（日本戲曲全集）所收　【內容】八幡太郎義家（三代澤村宗十郎）と鎌倉權五郎景政（二代市川門之助）は、萬歲・才藏の姿にてセリ上がり、萬歲の踊一くさりある所へ、安倍宗任妹善知鳥（四代岩井半四郎）と同じく安方（三代瀨川菊之丞）とは春駒の出立で來り、傾城名寄せの春駒の踊がある。善知鳥は義家と色模樣があり、クドキから手踊に碎け、結局義家・景政は奥へ入つた跡へ、安倍の殘黨詮議のため、大黑舞の形にやつした越後入道鬼門が二人の女を見咎め、二人は放下僧といひ拔け、鞨鼓を附けて京名所づくしの舞があり、終りに鬼門と立廻りになる。

春狂言（はるきやうげん）　「劇場」を見よ。

春駒（はるこま）　所作事　浮世風俗物　【解說】年の始めに駒の頭を作り、これを頭に冠つて歌ひ且つ舞うたのを春駒と名づけたと傳へる（故事要言）。併し近世の萬歲や鳥追（各別項）と同樣に諸國を經めぐつた一種の物乞ひは、駒を頭につけず手に持つて舞つた。卽ちそれを舞踊化したものである。【沿革】所作事としては寶曆六年江戸中村座で、中村富十郎が七變化の一として演じたものが古く「春駒」が最

【參考】劇代集二代櫻田左交○江戸近世舞踊史　九重左近○近世邦樂年表（長唄・富本）　（秋葉）

春駒狂歌集（はるごまきやうかしふ）　狂歌集　二卷一册　【著者】藤本由巳。理庵又松庵と號し、京都宇都宮由的の門人　【刊行】正德三年、江戸泉八郎兵衞開版。　【解說】由巳の狂歌を集めた家集で、歌數凡そ三百首、調格皆穩かで、雅に似て古ならず、俗に似て野ならずとの評は當つてゐる。蜀山人は「南畝莠言」に於て、「藤本由巳の春駒狂歌集二卷に南郭服子遷の序あり」とてその漢文の序を轉載し、末文に巳龍飛癸巳晩夏とあるのを指して、「按ずるに龍飛癸巳とは正德三年なり。この序初年の作にして文集に載る事なし。藤本由巳は理庵と稱す。柳澤家の醫なり。「徂徠集」に「題二藤理庵卷一七絕」あり。「稷下聲名自」古聞、彫龍炙轂日紛々、最憐侍宴歸來晚、懷レ肉還應餽二細君一」と記し、又蜀山が「萬載集」「後萬載集」を編むに當つて、この書より由巳の狂歌數首を採錄してゐる。

（野崎）

春雨物語（はるさめものがたり）　讀本　五卷　【作者】上田秋成　【成立】不明、但し蒼古な作風より、作者晚年の作と推定される。　【諸本】寫本にて傳はり、「江戸作者部類」に、この卷數を十卷とする。また書中「樊噲」の條の卷端に、「什之上」とあるを見れば、恐らくはもと十篇十一卷であつたか。今は自筆五卷を存するのみであ

る。明治以後、富岡謙藏所藏の自筆本により、始めて袖珍名著文庫中に收められた。上田秋成集（有朋堂文庫）・上田秋成全集（國書刊行會）・袖珍名著文庫（富山房）所收。　【題材】史實また古典文學を假りて說話を設けてゐる。「血かたびら」では藤原仲成と藥子を、「天津處女」では僧正遍昭を中心人物とし、「海賊」は「土佐日記」（別項）から着想を得てゐる。

【梗概】　【血かたびら】平城天皇は早く御位を御弟神野親王に讓られたが、藤原藥子その寵を得、兄仲成もその勢を恃みて、平安に遷都し御位に還さんと謀り、事あらはれて仲成は首を刎ねられ、藥子は憤死する。その血が帳かに明かさうとすると、荒れ果てた祠から一目の神が現はれて、妖怪と酒を酌むのに會し、神人から都で物を學ぶべき師のなきを說かれ、學問の道を敎へられ、丁度東國へ行く山伏の腋に挾まれて飛び歸る。　【樊噲】伯耆の大山は恐ろしき神が住んで、申の時過ぎては人も通らぬといふに、或る夜大藏といふ者力自慢に登つて、しるしに幣の箱を持ち歸らうとし、隱岐の國へ投げ飛ばされる。兩親ある身を訴へて漸く故鄕へ歸り、神妙に働いてゐたが、博奕を始め、父と兄とを殺して有金を攫んで九州へ落ち延び、長崎の丸山で亂暴して樊噲と名をつけられ、强盜の群に入つて橫行し、と角書がある。春告鳥は鶯の義。　【刊行】第二編序に酉の春出版とあるから、天保八年丁酉。　【諸本】帝國文庫・近代日本文學大系所收　【題材】篇中梶原家の兄弟が、腰元千鳥に絡む一件は、淨瑠璃「ひらがな盛衰記」（別項）に據つたもの。かゝる手段は合卷本では慣用のものである。又春水の他の人情本にも然るが如く、實在の人物の點出がこの書にも著しく見える。例へば瀧亭鯉丈・人形師泉目吉・櫻川新孝・文亭綾繼・櫻川由次郎等がそれである。特に新孝・由次郎は、篇中の主人公と絕えず談笑してゐる。

【梗概】　德町の福富屋幸左衞門と云ふ富豪に

となつた。さて鳥雅は上方から歸つて來て、本店抱への仕事師甚五郎の許に預けられた。その身の上を同情するのは小僧千松許りである。その千松によつて、お民に似た唄女が相坂町にゐると云ふ事を聞き、漸く逢ふ事が出來た。お花の姉藝者お熊には、梅里と云ふ通人の情人があつたが、久しく來ないので氣を揉んでゐると、ふと梅里は婦多川で八重と云ふ娘と戀に陷ちてゐると聞き、獨り嫉妬と憤りで惱んでゐると、或る夜その八重を連れてお熊を訪れた。餘りの事に愈々憤慨して仔細を聞くと、八重は女裝した男子で、梶原家の老臣番場忠太夫の次男忠之丞であつた。今年

小松曳の賤の女となつて、曾我五郎時致（三代市川八百藏）と共に工藤祐經の館に入り込み、祐經に近づくために、三人とも春駒を持つて踊りながら出で、ツラネがあつて拍子舞になり、競馬の振あつて終る。舞踊としてはこれまでであるが、これから地の狂言に戻つて、吉例曾我の對面になる。

る。明治以後、富岡謙藏所藏の自筆本により、始めて袖珍名著文庫中に收められた。上田秋成集(有朋堂文庫)・上田秋成全集(國書刊行會)・袖珍名著文庫(富山房)所收。【題材】史實また古典文學を假りて說話を設けてゐる。「血かたびら」では藤原仲成と藥子を、「天津處女」では僧正遍昭を中心人物とし、「海賊」は「土佐日記」(別項)から着想を得てゐる。

【梗概】「血かたびら」平城天皇は早く御位を御弟神野(かんの)親王に讓られたが、藤原藥子その寵を得、兄仲成もその勢を恃みて、平安に遷都し御位に還さんと謀り、事あらはれて仲成は首を刎ねられ、藥子は憤死する。その血が帳かたびらに飛んで射れどもなびかず、劍で打つても叉がこぼれるばかりで恐ろしかつたといふ。「天津處女」仁明天皇、良峰の宗貞といふ者を寵愛せられる。宗貞賢く、文武帝の吉野に世を避けられた時、天女五人天降り、舞伎をもつて慰め奉つた例を引いて豐明の舞姫の數を加へる等、御遊びの事にのみ御心を向ける。當時又和歌が盛んになり、彼に次いで文屋康秀・大友黑主・喜撰・伊勢・小町等の上手が出た。やがて帝は崩御される。その夜宗貞は行方知れずになるが、その學才を惜しまれ、再び召出されて僧正の位に進められ、名を遍昭と改めた。「海賊」紀貫之土佐守の任が果てて都へ歸航の途次、海賊出で來りて「古今集」に關して駁す。その後又都に海賊から文が來て歌をやめて書を讀めなど憎げに書いてあつた。この事を友人に問へば文屋秋津であらうといふ。博學であつたが、放蕩亂行で追はれて海賊になつてゐるのであつた。「目一の神」相模の國の男が、歌の道を學ばんとて都に上る。近江まで來た時宿を取惑ひ、一夜を森陰に明かさうとすると、荒れ果てた祠から一日の神が現はれて、妖怪と酒を酌むのに會し、神人から都で物を學ぶべき師のなきを說かれ、學問の道を敎へられ、丁度東國へ行く山伏の腋に挾まれて飛び歸る。「樊噲」伯者の大山は恐ろしき神が住んで、申の時過ぎては人も通らぬといふに、或る夜大藏といふ者力自慢に登つて、しるしに幣の箱を持ち歸らうとし、隱岐の國へ投げ飛ばされる。兩親ある身を訴へて漸く故鄕へ歸り、神妙に働いてゐたが、博奕を始め、父と兄とを殺して有金を攫んで九州へ落ち延び、長崎の丸山で亂暴して樊噲と名をつけられ、强盜の群に入つて橫行し、僞法師となつて放浪する。

【解說】以上五篇一貫してみられるものは、作者の史的興味による作意である。史實を假りて想像を加へ、古典文學を背景として說話を構成する。史實を假りた「血かたびら」「天津處女」は、史實にいくらか想像を加へたといふに過ぎないが、古典文學を背景とした「海賊」では貫之に對し、「目一の神」では堂上歌人に對する作者の觀察批判を織り込み、また「目一の神」に現はれる幽怪は、「雨月物語」(別項)の作者たる彼の面目を躍如たらしめてゐる。なほ「樊噲」に於ける無賴漢の性格を描いて、罪惡の漸層的に進んで行く構想の妙を見逃すわけにはゆかない。併し老巧とはいへ、「雨月物語」に及ばない。ただこの作は、史實の小說化といふ傾向が多く、從つて「英草紙」(別項)の特質に近く、永く後の讀本に流れを引いてゐる。

【笹野】

春太夫節(はるだいふぶし)　「薗八節」を見よ。

春告鳥(はるつげどり)　人情本　五編十五册　【作者】爲永春水。【畫工】歌川國直　【名稱】風月花情と角書がある。春告鳥は鶯の義。【刊行】第二編序に酉の春出版とあるから、天保八年丁酉。【諸本】帝國文庫・近代日本文學大系所收　【題材】篇中梶原家の兄弟が、腰元千鳥に絡む一件は、淨瑠璃「ひらがな盛衰記」(別項)に據つたもの。かゝる手段は合卷本では慣用のものである。又春水の他の人情本にも然るが如く、實在の人物の點出がこの書にも著しく見える。例へば瀧亭鯉丈・人形師泉目吉・櫻川新孝・文亭綾繼・櫻川由次郎等がそれである。特に新孝・由次郎は、篇中の主人公と絶えず談笑してゐる。

【梗概】德町の福富屋幸左衞門と云ふ富豪に二人の男子があつた。兄は先妻の子、弟は後妻の子。兄は幸次郎、弟は俳號を鳥雅と云ふ。兄は先妻の子、弟は後妻の子。而も後妻は本家福富屋萬右衞門の娘なので、鳥雅は本家の血統をひいた孫であり、勢力がある。隨つて兄と睦まじくない。そこで母の取計ひで向島の別莊で若隱居同樣の生活をしてゐた。和歌町の唄女お濱を圍つてゐたが、如何なる仔細かお濱は家出をしてしまつた。或る日彼は櫻川新孝に誘はれて遊里に赴き、玉樓金盛の薄雲に會つた。薄雲はその昔鳥雅に戀してゐた女であつたので、二人の交情は日に濃やかになつた。或る夜も鳥雅は遊里へ行かうとしたが、折柄雨となつたので、腰元お民を相手にして話してゐる內、いつかこれと契るやうになつた。然るに鳥雅の金遣ひの荒い事、お民との關係が兩親の耳へ入つて上方の店に預けられ、お民は安房長狹郡の緣者の許へやられてしまつた。お民はそこで賴みにする伯母に死なれ、その家の主人寅吉に强ひられて、遊女に賣られる所を危く免れ、相坂町の唄女となり、お熊の妹分でお花と名乘る事も好評であつた。富十郎はその後、江戸では寶曆八年(市村座)・明和八年(森田座)・安永七年(市村座)等數回七變化の一として繰返し、「富十郎の春駒」と呼ばれて、「道成寺」(別項)に次ぐ得意の所作事とされた。實に「春駒」は富十郎によつて大成されたといつてよい。これによつて變化物としても單獨舞踊としても種々作られたが、變化物は一曲も今日に傳はらず、非變化舞踊としては代表的な左の二種が傳存

【對面花春駒】(たいめんはなのはるごま)　長唄　【通稱】對面春駒　【初演】寶政三年正月十五日初日、江戸中村座(はやし)。春世界花麗曾我(せかいはなうらがのそが)」第一番目五立目　【作詞】增山金八　【立唄】富士田音藏　【作曲】杵屋正次郎　【振附】山口後の七十郎・三代中村傳次郎　【傳來】曲・振ともに傳存。【諸本】長唄正本。日本歌謠集成卷九・歌謠音曲集(日本名著全集)所收。【內容】小磯の叢者おとり(三代瀨川菊之丞)と手綱の叢者わてふ(四代岩井半四郎)とは、つて、この書より由已の狂歌數首を採錄してゐる。

【野崎】

春雨物語(はるさめものがたり)　讀本　五卷　【作者】上田秋成　【成立】不明、但し蒼古な作風より、作者晚年の作と推定される。【諸本】寫本にて傳はり、「江戶作者部類」に、この卷數を十卷とする。また書中「樊噲」の條の卷端に、「仆之上」とあるを見れば、恐らくはもと十篇十一卷であつたか。今は自筆五卷を存するのみである

店を持たせ、よい嫁でもとつたらばと、母と本家の祖母と相談した。梅里は自ら媒人となり、見合には忠之丞の女裝した娘姿をつれて行き、祖母と母とに見せ、さて婚禮の折にはお民のお花を連れて行き、無事結婚せしめた。鳥雅お花の滿足は言ふまでもない。本篇はこれだけで終つたが、家出したお濱、遊女の薄雲、又梅里とお熊、忠之丞とお玉、春心院の千鳥等の問題は解決してゐない。

【解說】本書の第一編だけは目次があつて、上の卷の部の鶯は薄雲をさし、中の卷の藪の鶯は小間使時代のお民をさし、下の卷の庭の鶯は鳥雅の思ひ者となつた以後のお民をさすのである。かゝる目次は洒落本及び文政度の人情本に行はれたが、天保度の人情本には尠くなつた。本篇の優れた描寫はやはり第一編にある。物淋しい向島の夜を背景として鳥雅が薄雲に心惹かれつつ、ふと手近いお民に心を移す情痴の態度、お民がいそ〳〵と寒竹の筍を煮て鳥雅に茶漬をすゝめる樣など、かなり佳い所がある。思ふに作者はこの場面を腹笥に蓄へて本篇を綴る氣になつたものらしい。鳥雅に對する梅里とお熊の繼愛は、所謂年增と通人、戀には苦勞し盡した果の戀で、鳥雅の未だ若且那氣質の失せぬのと對照して描いてある所に、作者の苦心があるらしい。その他の女性に至つては人情本の類型的のものである。【史的地位】「春色英對暖語」（別項）と同樣、自序に「東都人情本の元祖」「江戸人情本作者の元祖」と名乘つた最初の書である。「英對暖語」の天保九年刊に對し、これは天保八年刊であるから、彼より「人情本の元祖」と稱し始めたのは一年早いことが分る。人情本と云ふ名稱を日本文學史に遺した注目すべき書である。

【參考】本居春庭翁記念號（國學院雜誌一二ノ六）○本居宣長村岡典嗣○本居宣長全集首卷

春鬼駈小栗外傳（はるのこまをぐりぐわいでん）

【作者】勝諺藏【名稱】春鬼駈は、「はるのおにかげ」とも訓む。【別名題】春駒小栗義勇傳【通稱】「碁盤乘り」「小栗十勇士」【初演】明治十四年一月大阪角の芝居。

【役割】小栗判官代助重・鳳間八郎正國（市川右團治）、照天姫（實川正朝）、腰元娥・曉女小櫻（市川關之助）、鍋倉重藏後高（尾上松助）、横山太郎（市川莚藏）、小栗滿重（市川小太夫）、小栗十勇士（市川莚藏・尾上松助・市川關之助・市川右團治・實川正朝・市川小太夫）、横山郎後岡（尾上松助）、藤浪（市川莚藏）

【梗概】第一幕　小栗滿重の館　滿重は、依頼された横山への義理を重んじて詰め寄る小栗の勇士を嘲笑しつつ飛行隱形の術で立ち去る。（筑波山腹）雪降りの體、一色・横山と合體し、あはよくば天下を掌握する決心の八郎、小栗の家臣と面白き立廻り。遂に宙乘りで去る。助重は凱歌を揚げて鎌倉へ歸る事となるが、名武篤光暗殺の報に驚く。【四幕】（小栗滿重館）上使として結城六郎、兇賊平定の功偉大なれど、謀叛の企圖ある者と認め、父滿重に閉門を命じ糺明の上嚴罰との事。又毒藥入りの菓子發見され、父を毒殺せんとする助重の密計だと言ふ藤浪の言葉を信じた滿重は、鎌倉への申開きに新規扶持した栗十勇士となる。又篤光は後て觀音に子寶を授け給へと祈願してゐ、今度本尊を持ち歸りて祕藏するが、その利生により照天姫誕生。助重と許嫁となる。（十六年間經過）【二幕】（鶴ケ岡八幡宮鳥居先）篤光の甥横山太郎は照天姫に戀慕し、父大膳に進言して風間兄弟に依頼し、助重を殺害せんと企畫する。丁度筑波の山寨に立籠つたすつば（强盜）の首領たる風間追討のために、助重が出發したからである。又一色詮秀・左京亮の兄弟は、觀音堂破却以來隆盛になつた名武家を嫉み、篤光を暗殺して跡目へ横山太郎を擁立せんと計畫し、相模川へ鯉釣りに誘ふ。小栗滿重の後添藤浪は前身した八郎は、依頼された横山への義理を重んじて詰め寄る小栗の勇士を嘲笑しつつ飛行隱形の術で立ち去る。（筑波山腹）雪降りの體、一色・横山と合體し、あはよくば天下を掌握する決心の八郎、小栗の家臣と面白き立廻り。遂に宙乘りで去る。助重は凱歌を揚げて鎌倉へ歸る事となるが、名武篤光暗殺の報に驚く。【四幕】（小栗滿重館）上使として結城六郎、兇賊平定の功偉大なれど、謀叛の企圖ある者と認め、父滿重に閉門を命じ糺明の上嚴罰との事。又毒藥入りの菓子發見され、父を毒殺せんとする助重の密計だと言ふ藤浪の言葉を信じた滿重は、鎌倉への申開きに新規扶持した（横山郎後岡）下僧道助に面會し、圖らずも篤光の死因を知つた小栗主從は、敵討の決心をする。道助は勇士片岡兄弟の實父である。（横山居間）助重が鬼駈を見事に乘り熟し、碁盤の曲乘りまで行ふので、一座は驚嘆して了ふ。やがて祝言となり毒酒を勸める。照天姫は舞を舞ひ、唱歌に事寄せて忠告。過ち飲んだ振をする判官、大膳は斬り掛かる照天姫を抑へながら惡事を大膳に物語る。と小栗主從が現はれて亂戰となる。（相州六浦濱邊）奮戰の小栗主從。照天姫と娥は甘言と闇とに欺かれて藤浪の船に乘る。人買ひ常陸と漁師小助がこれを覗ふ。【六幕】（漁師小助住家）小助

ると共に、作者爲永春水が卷頭言に、「今樣の道理にかなふを旨となし、」と寫實に對する自覺の生じた書である。【山崎】

玄利（はるとし）

「素性」を見よ。

春庭（はるには）

國學者【姓名】本居氏。幼名を健藏と云ひ、後健亭と改め更に春庭と稱す。【號】後鈴屋翁【生歿】寶曆十三年二月三日生れ、文政十一年（一八二八）十一月七日歿す。享年六十六。【墓所】松坂樹敬寺【家系】宣長の長子。子に男有鄕、女伊豆がある。【閱歷】伊勢津分部町の母の實家で出生。幼少より虛弱であつたが、二十九歳の頃から眼病を煩ひ、三十二歳頃には失明した。翌年針術習得のため京都に赴き、二年にして歸鄕、以後は針醫を業とした。三十九歳の時（享和元年）父宣長を失つたが、眼疾で紀伊侯への奉公が出來ないため、養子の大平（別項）が家を繼いだ。而して四十七歳の時、大平は和歌山へ移住したが、彼は依然松坂に留まり、後鈴屋社を組織して門弟を指導した。彼は幼より父の側に侍して和漢の學を修め、又父のため圖書を謄寫するのを己が任とした。彼は頗る記憶力すぐれ、失明後も妻伊伎、妹美濃の助けを借りて、添削或は著述に從つた。宣長の歿後、鈴屋門下の人々多く、名簿を彼に送つて門弟となつたが、彼自らの門弟も多く、その中、足代弘訓・石川依平・富樫廣藤等が著はれてゐる。【著作】主なものは本居春庭全集（本居全集の內）に收められてゐる。○詞八衢二卷（別項）○詞通路三卷（別項）○後鈴屋集三卷（別項）○同後編三卷（以上本居春庭全集）○門の落葉四卷○道の佐喜草一卷（別項）。【國語學上の業績】春庭は中年に失明した爲めでもあらうが、著述は僅かに「詞八衢」と「詞通路」（各別項）との二部があるに過ぎない。而してその學說は、父宣長から受けたものであることは云ふまでもないが、又父の門人鈴木朖（別項）からも受けたやうである。而もこの二部の著は、國語研究史上に重大な時期を劃するものである。即ち「詞八衢」は、主として中古言の動詞を研究して活用の種類を、四段・一段（上二段・中二段・上二段）・下二段及び變格と分ち、活用の形を五段に分つてゐる。動詞の活用としては、多少の缺點もあり（詞八衢參照）、又範圍が殆ど動詞に限られ、形容詞・助動詞等は餘り研究してゐないものではあるが、本書に依つて活用研究の基礎が確立せられたのである。次に「詞通路」は、「詞の自他の事」「詞の兼用の事」「詞の延約の事」「詞てにをはのかゝる處の事」及び「詞八衢」の教授法に就いて記してゐる。何れも國語學史上頗る注意すべき研究であるが、就中「詞の自他」は、自動詞と他動詞との別を說いたもので、前人未發の研究である。又「詞八衢」の教授法は、その整然たる組織に於て驚嘆に價するものである（詞通路參照）。要するに春庭は驚くべき組織的頭腦の所有者で、その謹嚴確實な研究は、用言研究の根柢を築いた。その功績は父宣長に優るとも劣らぬものである。【以上鐘田】

本居春庭

【歌風】父宣長の近世風を受けて更に弱い。即ち全く「草庵集」（別項）風のものだと言つてよい。家集を「後鈴屋集」（別項）といひ、宣長よりも上手だとさへ稱せられた由、甥の建正の序文に言つてある。殆ど全部が、如何にも題詠らしい題詠の歌で滿たされてゐる。從つて全體が常識的で、調べの高い歌もない代りに屑も比較的少い。これが宣長より上手だと言はれた理由であらう。しかし題詠であるだけに生きた歌は殆どなく、單に言葉のあやで、理窟をいつたといふ風な歌が多い。それも心持の餘裕から出たものでなく、一首が典據のある種々の言葉で、理智的に構成されてゐるに過ぎないかの觀がある。

きのふこそ花は散りしか庭ざくらにはかにふかくしげりぬるかな

入日かげ殘るなごりの秋の色も夕暮うすき山の端の雲

など、その歌風の一端を語るものである。題詠が多いといふことは、當時の風に從つた爲めでもあるが、又春庭が盲目であつたといふことが、大きな原因をなしてゐる。但しかくの如き境遇が歌の內容情調の上に影響する所尠いのは、當時の風として歌は單なる風流と考へてゐた爲めであらう。しかし、その失明以前の歌には題詠でないものもある。

立ち出でし去年の月日とおもふにも故郷ぞほくしのぶ今日かな

はしけやし玉の八十玉ぬきつどへ持たるわが背はむかしくもあるか

歌論には、「道の佐喜草」（別項）及び「詞通路」の中に少々見えるが、父翁の說を一步も出て

るない。但し歌を特に近體と古體に詠み分けることはしなかつたやうである。長歌もあるが面白くない。

【以上穎田】

【參考】本居春庭翁記念號（國學院雜誌一二ノ六）○本居宣長村岡典嗣○本居宣長全集首卷

春鬼驅小栗外傳 はるのこまをぐりぐわいでん 脚本

八幕二十五場　時代物　【作者】勝諺藏　【名稱】春鬼驅は、「はるのおにかげ」とも訓む。

【別名題】春駒小栗義勇傳　【通稱】「碁盤乘り」「小栗十勇士」　【初演】明治十四年一月大阪角の芝居。

【役割】小栗判官代助重・鳳間八郎正國（市川右團治）、照天姫（實川正朝）、腰元娥・賤女小櫻（市川關之助）、滿重室藤浪・鳳間次郎正貞（實川八百藏）、名武常陸介篤光・一色式部少輔詮秀（市川助壽郎）、横山大膳・田鍋平太（市川鰕十郎）、小栗孫五郎滿重・下僕清助（中村嘉七）等。

【諸本】大阪府立圖書館寫本。勝諺藏作演劇脚本集第一册目。また當大入劇場珍報（勝諺藏編、新狂言筋書集）にも簡單なる梗概が收錄されてゐる。【題材】小栗判官照天姫の傳説に、江戸時代の初頭、關東地方に出沒したすつぱ、盜賊）の首領鳳間八郎を關係させ、お家騷動物とした。

【梗概】〔序幕〕（管領足利持氏館）鎌倉管領足利持氏公の治世、佐々女谷の觀音堂は新田義興主從十一人を祭祀せる所であるが、佞臣一色詮秀の勸めに從ひ破却することとなつた。結城六郎持朝が諫言するが聞き入れられぬ。（觀音堂破却）下知に依り小栗滿重（判官の父）と名武篤光（照天姫の父）とが出張する。破壞と同時に堂下より十一の光星が飛散する。即ち義興の靈魂は小栗家に再生して判官代小次郎助重となり、家來十人は所々に生れて、後、小栗十勇士となる。又篤光は後て觀音に子寶を授け給へと祈願してゐ、今度本尊を持ち歸りて祕藏するが、その利生により照天姫誕生。

（十六年間經過）〔二幕〕（鶴ケ岡八幡宮鳥居先）篤光の甥横山太郎は照天姫に戀慕し、父大膳に進言して鳳間兄弟に依頼し、助重を殺害せんと企畫する。丁度筑波の山寨に立籠つたすつぱ（强盜）の首領たる風間追討のために、助重が出發したからである。又一色詮秀・左京亮の兄弟は、觀音堂破却以來隆盛になつた名武家を嫉み、篤光を暗殺し跡目へ横山太郎を擁立せんと計畫し、相模川へ鯉釣りに誘ふ。小栗滿重の後添藤浪は前身乳母で、奥方歿後萬千代丸（當年十歳）が出來正室に直つたのであるが、家督を萬千代丸に讓らんと毒藥を菓子へ混入した。そして漁師の女房時代の娘娥を、無情にも人買ひに賣渡す。後藤小助は腕力を揮つて取り戻し、照天姫は不便に思ひ腰元となす。（相模川漁船内）遂に篤光殺される。（同川岸草土手）詮秀・大膳は野望半ば成就を喜ぶ。下僕道助と名武の家臣後藤小助と小栗の家臣美登小四郎がこれを窺ふ。暗闘模様。〔三幕〕（筑波山旅籠屋）助重は風間討伐のため宿泊。宿屋の主は風間の子分で、計略の酒を飲ませ小栗を捕縛し、軍備品を分捕らうとする。がそれと推察した助重が反對に忍び込む風間一味を縛し、仁義を以て味方にして了ふ。（風間の山寨）弟八郎は飛來した雁の足に付いてゐた卷物で、妖術を會得する。（道具幕ある川邊）兄次郎は小栗の攻勢より逃れて山寨へ歸る途中、拔群の器量を惜しむ助重の言葉に改心して臣下となる。そして弟八郎をも飜心させようと誓ふ。（元の山寨）習得した妖術で、兄の降伏を前知した八郎は、依頼された横山への義理を重んじて詰め寄る小栗の勇士を嘲笑しつつ飛行隱形の術で立ち去る。（筑波山腹）雪降りの體、一色・横山と合體し、あはよくば天下を掌握する決心の八郎、小栗の家臣と面白き立廻り。遂に宙乘りで去る。助重は凱歌を揚げて鎌倉へ歸る事となるが、名武篤光暗殺の報に驚く。〔四幕〕（小栗滿重館）上使として結城六郎、兇賊平定の功偉大なれど、謀叛の企圖ある者と認め、父滿重に閉門を命じ糺明の上嚴罰との事。又毒藥入りの菓子發見され、父を毒殺せんとする助重の密計だと言ふ藤浪の言葉を信じた滿重は、鎌倉への申開きに新規扶持した者を斬首せよと命令する。（助重の居間）家老平太の忠言に從ひ、近侍を引具して家出。父は始めて本心を明かし、時節を待てと諭し、別離の涙に咽ぶ。平太は滿重への言譯に切腹してゐるが、結城六郎は滿重も鎌倉への言譯に切腹してゐる事を推察し、小栗家再興の斡旋を誓ふ。喜ぶ藤浪は、滿重・平太を嘲弄して斬殺。この時軍馬の響。（同塀外）一色勢と爭鬪する池の庄司や美登小四郎。（同水門）藤浪は萬千代丸を背負ひ、腰元桐壺・繪合と共に、水門口より逃れ去る。〔五幕〕（相模國權現堂村）家來を引連れた助重へ、横山兄弟は理不盡にも口論を仕掛ける。腰元娥が今宵の宿舍として主人姫君樣の居館を提供、案内することとなる。（照天姫の居間）横山三人兄弟は、相互に姫を口説いてゐる。案内された助重は奇遇に驚きながらも協力して家名再興を圖らんと約す。この家に食客の大膳（照天の母の弟）は懇懃に助重を招待し、婚禮の儀式を卽刻取行ふ事を言明。その引出物として勝閧といふ轡を渡し、愛馬鬼鹿毛（鬼驅）の試乘を所望する。（横山邸後園）下僕道助に面會し、圖らずも篤光の死因を知つた小栗主從は、敵討の決心をする。道助は十勇士片岡兄弟の實父である。（横山居間）助重が鬼驅を見事に乘り熟し、碁盤の曲乘りまで行ふので、一座は驚嘆して了ふ。やがて祝言となり毒酒を勸める。照天姫は舞を舞ひ、唱歌に事寄せて忠告。過ち飲んだ振をする判官、大膳は斬り掛かる照天姫を抑へながら惡事を大膳に物語る。と小栗主從が現はれて亂戰となる。（相州六浦濱邊）奮戰の小栗主從。照天姫と娥は甘言と闇とに欺かれて藤浪の船に乘る。人買ひ常陸と漁師小助がこれを覩ふ。〔六幕〕（漁師小助住家）小助の女房お藤は藤浪のなれの果、僞つて懺悔をし、夫小助は惡人故、内密で隱匿してやると言ふ。其處へ小助歸宅して照天姫の行方を訊問するが、小助が後藤小助の後身と知つてゐながら信用せぬ娥は、藤浪との約束を確信して明答しない。藤浪は姫と誤つて我が子萬千代丸を殺す。萬千代丸は苦しい息の下で姫を落した事を語る。子の敵と追跡する藤浪。其處へ繪合等が姫と娥を捕縛して連れ歸り拷問するが、觀音像が身代りとなり救助される。人買ひの常陸がこれを連れ去る。小助が跡を追ふ。（相合川長堤）常陸は小栗十勇士の一人、美登小四郎の假名である。人買ひとなり照天姫を搜索してゐたのだ。併し姫が觀音像を所持してゐないので人違ひと思ひ、人買ひに賣渡さうとするので、姫は川へ飛び込んで了ふ。ふと觀音像が常陸の手に入り、只今の女性が照天姫と判明する。（瀨戸橋附近）小助が主人照天姫との姑嫁關係を楯に取つて威張り、姫の在所を教へぬ藤浪を斬り殺す。そして兄小四郎に面會、姫君横死と報告するので、落膽苦

ある所に、作者の苦心があるらしい。その他の女性に至つては人情本の類型的のものである。【史的地位】「春色英對暖語」（別項）と同樣、自序に「東都人情本の元祖」「江戸人情本作者の元祖」と名乘つた最初の書である。「英對暖語」の天保九年刊に對し、これは天保八年刊であるから、彼より「人情本の元祖」と稱し始めたのは一年早いことが分る。人情本と云ふ名稱を日本文學史に遺した注目すべき書である。彼自らの門弟も多く、その中、足代弘訓・石川依平・富樫廣蔭等が著はれてゐる。

【著作】主なものは本居春庭全集（本居全集の內）に收められてゐる。○詞八衢二卷（別項）○詞通路三卷（別項）○後鈴屋集三卷（別項）○同後編三卷（以上本居春庭全集）○門の落葉四卷○道の佐喜草一卷（別項）。

【國語學上の業績】春庭は中年に失明した爲めでもあらうが、著述は僅かに「詞八衢」と「詞の兼用の事」「詞の延約の事」「詞てにをはのかゝる處の事」及び「詞八衢」の教授法に就いて記してゐる。何れも國語學史上頗る注意すべき研究であるが、就中「詞の自他」は、自動詞と他動詞との別を說いたもので、前人未發の研究である。又「詞八衢」の教授法は、その整然たる組織に於て驚嘆に價するものである（詞通路參照）。要するに春庭は驚くべき組織的頭腦の所有者で、その隱れたる研究は、用勘いのは、當時の風として歌は單なる風流と考へてゐた爲めであらう。しかし、その失明以前の歌には題詠でないものもある。

立ち出でし去年の月日こおもふにも故郷ほくしのぶ今日かな

はしけやし玉の八十玉ぬきつゞへ持たるわが背はむかしくもあるか

歌論には、「道の佐喜草」（別項）及び「詞通路」の中に少々見えるが、父翁の說を一步も出て

れによつて名づけたのであらう。草の字を附したのは、宗祇に「當草」及び「下草」を別項があるのに倣つたのであらう。【成立】諸井本の奥書に「永正十二年三月中旬記之　當庵老人（花押）」とある。【刊行】昭和二年池田叢書第五編として、海棠の「夢の名殘」に本集に關係ある俳叢集。實永二年成）を附して刊行された。但し同叢書のものは、寛文六年版の「連歌大發句帳」から肖柏の發句を抄出したものを底本とし、それを諸井本・勝峰本を以て補足校合したので、「春夢草」自體の姿は解體されたものになつてゐる。【傳本】神戸諸井國吉氏所藏の肖柏の手稿本と傳へる本、外に東京勝峰晋風氏所藏の古寫本がある。兩本は發句の出入、語句の少異、前書の有無少異等が可なりある。【内容・價値】自作の連歌の發句を、四季の部立によりその中を季題によつて類聚したも

大膳自殺し、名武・小栗の兩家再興。

【解說】明治初期に於ける東京の歌舞伎劇脚本は、物質文明の示唆に依り、感情的な浪漫的な部分の解消を餘儀なくしたが、京阪の脚本には、觀客の要求よりして傳說・口碑・講談・俗說を活用させた理窟拔きの平易な、色彩の華麗な、變化の豐富な歌舞伎劇が屢々書き卸されてゐる。これもその例證である。而も市川右團治の二役早替り、けれん師としての本

勝峰本は諸井本に比べて少異多く、句數も多いやうで、一異本と見られるものであるが、脊柏自身か後人かが後に增補したものの傳寫本かと思はれる。なほ問題となるのは、脊柏の歌集の「春夢草」(自編かと思はれる)との關係で、歌集と發句集とが同名であるのは、如何なる關係なのかが問題となるのである。歌集の「春夢草」には永正十三年春とあるものも見えるから、諸井本よりも後の編かと思はれる。されば初め發句集に「春夢草」の名を附し、後、歌集を編してそれを發句集の續集の如く見做して同名としたものか、或は歌集の「春夢草」が續群書類從連歌部に收められてゐる點から考へて、連歌部に入れるべく豫定されてゐた「春夢草」は、發句集であつたのを、編入の際發句集が得られず、誤つて歌集の方が入れられたものとしたら、歌集の方は、元來特殊な集名なしに傳へられてゐたか、或は「春夢草」以外の名であつたのが知られなかつたかであり得ることにもならう。

〔志田〕

春ノ夜障子梅(はるのよるしやうじのうめ) 「夕霧」を見よ。

春富士正傳(はるふじしやうでん) 「蘭八節」「春富士都錦」を見よ。

春富士都錦(はるふじみやこのにしき) 正傳節寄せ本半紙本一册【刊行】寶曆十三年刊【諸本】日本歌謠集成卷十所收。【解說】宮古路豐後掾の門人春富士正傳の語物の寄せ本で、道行景事の類を四十二種集めてある。詞章の上では宮薗節と殆ど同樣で、如何なる點にこの流の特色があつたかは不明である。「宮薗都大全」と同年同所の發行で、序文も同じく松壽軒といふ人が同一の文句を列ねてゐる。正傳は「聲曲類纂」に「寬延寶曆の頃京都より江戸へ下り吉原に住す……京都にて醬油を商ひし傳兵衞といふ者なり、世人傳傳と呼びしかば、文字を改めて正傳と號す」とあるは甚だ疑はしい。「宮薗花扇子」の系譜によれば、春富士正傳は初代宮古路薗八の弟子で、中頃出雲といふとある。卽ち鸞鳳軒とは相弟子になる。寶曆十二年十二月二十二日角座の「泰平いろは行列」の番附に、太夫春富士出雲直傳と見え、本書中にも、春富士出雲直傳と記した曲もあるから「花扇子」の說は信ずるに足る。

はるのよ　はるみ

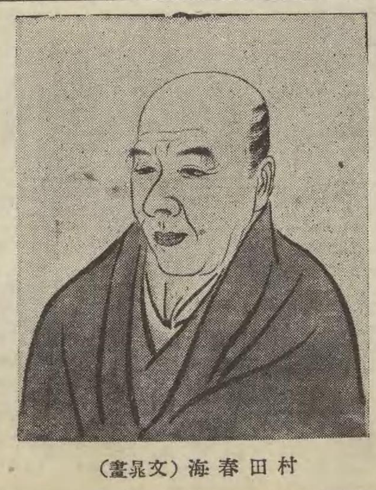
目錄

一、柳馬場帶屋の段　曾根崎模樣
二、桂川戀の柵　道行うき名の入物
三、嚊森血汐机　小いな半兵衞六拾四五匁慾の段
四、嚊森血汐机　心中稻葉の露
五、太平記忠臣講釋　道行人目のしけぬひ
六、京羽二重娘氣質　道行戀のさよ風
七、道具屋の段　お中清七夏祭浪花鑑
八、哥祭文袂の白絞　お染戀のひながた　お松ふさゆめの段
九、霜夜の千鳥　德兵衞かしく今やう文
一〇、新屋錦慾段　八重霞かしくの段
一一、新屋錦の段　與五郎かごの段　あづま
一二、恩愛廓日記　おなつ清十郎道行
一三、頓彩色娘扇　源十郎おかね道行
一四、高麗橋睦月春雨　與五郎あづま橋本の段
一五、廓日記相合籠　藤彌太三紋の段
一六、恩愛沖の石　道行しのゝめがらす
一七、曾根崎鑒女夫星　忠七おかめ道行
一八、東風の松枝　吉三おひな淸色江戸紫
一九、衣紋坂相合傘　腕久松山けい事
二〇、軒端の比翼　幸助ぼんと町の段
二一、警の仁王門　なみだの清水
二二、小萩ものがたり　ねずみ道行
二三、對の時書筆　相の山の段
二四、傾城遠山櫻　おぬいみち行
二五、恩川經白浪　道行明日のうはさ
二六、增補三度笠　おまきくどきの段
二七、曾中居三枕　さくら木最事
二八、花嵐廓空蟬　くどきのだん
二九、冬籠閨空蟬　浪花みやげ
三〇、沖中川道行　道行連理の諸羽がひ
三一、傾城由來記　七兵衞小とみ道行
三二、不心底闇鮑　藤屋あづま在所かご
三三、壽の門松　山崎與次兵衞道行
三四、壽のかど松　半七おはな道行
三五、雙紋刀銘月　半兵衞おちよ道行
三六、紅の染小袖　八百屋お七道行
三七、夜のおひ鶴　道行かたみ送り
三八、曾我駒の涙　中の卷丸一段
三九、大經師昔曆　まゝ子のだん
四〇、石川物語　丸一段
四一、天川末世鑑　魚類合戰
四二、祝言和睦盃

春海(はるみ) 神道家・天文學者【姓名】澁川氏。通稱六藏【號】都翁・新蘆【生歿】寬永十六年に生れ、正德五年(一三七五)歿す。享年七十七。【閱歷】夙に閒齋の門に入り、神道を學ぶ。閒齋その才を愛し、その蘊奧を傳授した。春海は土御門流の神道を學び、又これを大成した。幕府は祿百五十石と宅を駿河臺に與へ、諸侯の來り學ぶものが多かつた。殊に會津侯の寵遇甚だ厚く、常に「余、會津侯の知遇を辱うして此の宿志を成す。皆是れ閒齋先生の賜也。先生は余が千載の知己なり」と謂つてゐた。著書に「瓊矛拾遺」三卷。その他天文・曆に關するものが多い。

〔田中(義)〕

春海(はるみ) 國學者・歌人【姓名】村田氏。本姓は平氏。通稱平四郎。字は士觀(さつかん)【號】琴(こと)後翁(じのおきな)・錦織齋(にしきおりのやかたし)【生歿】延享三年に生れ、文化八年(一八一一)二月十三日歿す。享年六十六。【法名】錦織齋淨春海居士【墓所】江戸深川本誓寺塔中勝德院(後廢院、本誓寺に合併



村田春海(文晁畫)

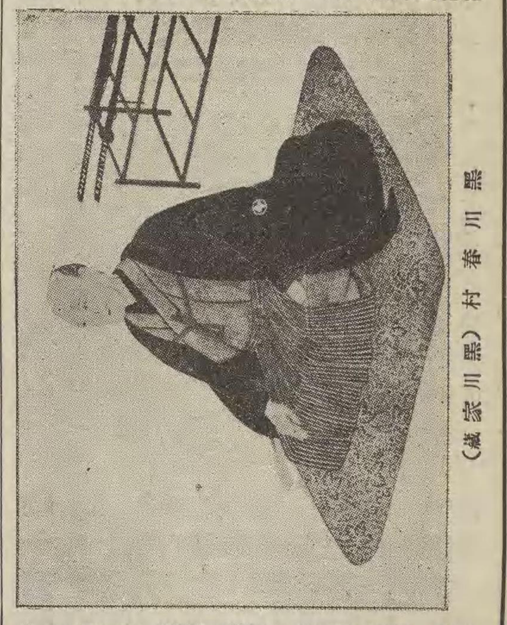
初め服部仲英・鵜殿士寧・皆川淇園等の漢學者に學び、佐々木學儒・安達文仲等と交つたが、縣門に入つてから特に和歌・雅文を能くし、千蔭と相並んで所謂江戸派の巨擘として世に知られるに至つた。文化二年妙法院宮(後桃園天皇の皇弟眞仁法親王)が江戸に下られた時、千蔭と共に御旅館なる芝天德寺に召され、寵遇を得た。當時十八大通の一人として漁長の名で淨瑠璃(碁太平記白石噺)にまで諸はれた寬濶振りであつたが、遂に家産を破り、一時は淺草寺中姥が池のほとりの僅かな方丈の古家に鰥居して和學を敎へた。又南八丁堀中の橋向に移

忠之―忠亨―春道―春郷
漢會堂　怡神堂主人

春海―春郷(養子)
　　―多勢子(青柳尼)

【閱歷】春海は江戸小舟町の千鰯問屋、家徒百人に及ぶ富商の家に生れ、曾祖父・祖父共に歌文に長じてゐた。父春道は初名忠興、號は尙古堂、古學に熱心で、眞淵が江戸に出た際これを私邸に迎へ、二子春鄕・春海と共に入門したが明和六年に歿した。兄春鄕は歌文に優れ、人と爲り溫雅、家業を弟春海に讓つて古學・詠歌に專心したが、三十歲で永眠した。春海は

春村（はるむら）　國學者【姓名】黒川氏。幼名勘吉。通稱次郎左衞門・主水【號】本蔭・蓼園・薄齋・芳蘭・三世淺草庵（以上皆）【生歿】寛政十年江戸淺草田原町に生れ、慶應二年二月二十六日、本所に歿す。享年六十九。【法名】東風院道芳芳蘭禪士【墓所】淺草新堀端永見寺【閥閲】春村初め二世淺草庵次澤



（滋賀縣川原）村春川原

守令について狂歌に遊び、雷閧の棟梁となつたが、すでにして和歌に志し、進んで國學を修めた。定まる師はなかつたが、狩谷棭齋に疑を正し、清水濱臣・岸本由豆流・村田了阿・北つひに一家を成した。その學、考證を重んじ、すべての點に正確を期したなど、やはり棭齋等の學風を多分に受けてゐる。その性篤實にして高於菟三（國學院雜誌三〇ノ一）○村田春海の歌文　武島又次郎（國學院雜誌明治四三ノ四・五）○江戸の文人村田春海　關根正直（からすかご）

春村（はるむら）　國學者【姓名】黒川氏。幼名勘吉。通稱次郎左衞門・主水【號】本蔭・蓼園・薄齋・芳蘭・三世淺草庵（以上皆）【生歿】寛政十年江戸淺草田原町に生れ、慶應二年二月二十六日、本所に歿す。享年六十九。【法名】東風院道芳芳蘭禪士【墓所】淺草新堀端永見寺【閥閲】春村初め二世淺草庵次澤

（滋賀縣川原）村春川原

守令について狂歌に遊び、雷閧の棟梁となつたが、すでにして和歌に志し、進んで國學を修めた。定まる師はなかつたが、狩谷棭齋に疑を正し、清水濱臣・岸本由豆流・村田了阿・北つひに一家を成した。その學、考證を重んじ、すべての點に正確を期したなど、やはり棭齋等の學風を多分に受けてゐる。その性篤實にして高於菟三（國學院雜誌三〇ノ一）○村田春海の歌文　武島又次郎（國學院雜誌明治四三ノ四・五）○江戸の文人村田春海　關根正直（からすかご）

勘吉。通稱次郎左衞門・主水【號】本蔭・蓼園・薄齋・芳蘭・三世淺草庵（以上皆）【生歿】寛政十年江戸淺草田原町に生れ、慶應二年二月二十六日、本所に歿す。享年六十九。【法名】東風院道芳芳蘭禪士【墓所】淺草新堀端永見寺【閥閲】春村初め二世淺草庵次澤

春村（はるむら）　國學者【姓名】黒川氏。幼名勘吉。通稱次郎左衞門・主水【號】本蔭・蓼園・薄齋・芳蘭・三世淺草庵（以上皆）【生歿】寛政十年江戸淺草田原町に生れ、慶應二年二月二十六日、本所に歿す。享年六十九。【法名】東風院道芳芳蘭禪士【墓所】淺草新堀端永見寺【閥閲】春村初め二世淺草庵次澤

（滋賀縣川原）村春川原

守令について狂歌に遊び、雷閧の棟梁となつたが、すでにして和歌に志し、進んで國學を修めた。定まる師はなかつたが、狩谷棭齋に疑を正し、清水濱臣・岸本由豆流・村田了阿・北つひに一家を成した。その學、考證を重んじ、すべての點に正確を期したなど、やはり棭齋等の學風を多分に受けてゐる。その性篤實にして高於菟三（國學院雜誌三〇ノ一）○村田春海の歌文　武島又次郎（國學院雜誌明治四三ノ四・五）○江戸の文人村田春海　關根正直（からすかご）

原書を見ずに索引によつて物を書く折など、その引用者の名も必ず擧げ、些細のことも、人の說には必ずその由を明記した。隱逸を愛し、名聞を好まず、諸侯などへ出入りすることを嫌つたが、ただ須坂侯堀直格と奈須家とのみは、尊卑の差別を忘れて折々に訪うた。堀侯のためには、その花廼屋文庫所藏の屋代弘賢の遺書を整理し、「池底叢書要目」二卷を著はしてゐる。門人の金子氏を養つて子と成した。卽ち後の文學博士黑川眞頼である。淺草庵の號は笠亭仙果（別項）がついで、その第四世となつた。

【著述】曇水遺稿一册 ○碩鼠漫筆一册（各別項）○壺すみれ一卷（續燕石十種第四輯の內、狂歌の傳統を記す）○歌諧俗三册（刊。狂歌作法）○怜野狂歌集一册 ○地頭名義考二卷（史籍雜纂第三册に收む）○陸奥國田歌解一卷（近世文藝叢書第十一册に收む） ○池底叢書要目二册（續史籍集覽に收む）。【國語學】（音韻關係）音韻考證（別項）○五十音三內所發圖解一卷（安政五年成る。刊。「悉曇三密抄」に依つて五十音の開合直拗を圖示したもの）。（活用・手爾波關係）活語四等辨一卷（一名「里水抄」。天保十五年成る。「詞通路」（別項）に說かれた詞の自他に就いて論じたもの）○詞格一覽一鋪（刊。詞の活用、手爾波の呼應を圖示したもの）○詞格對照一鋪（刊。「詞格一覽」に添へて見るべきもので、萬葉・古今等の歌を解剖して、活用及び手爾波の呼應を示したもの）○詞格用例一卷（寫。「詞格對照」を說明したものであるが、未定稿のやうである）○用字活用考一卷（寫。岩崎美隆の「もちふといふ詞の用格」を增訂したもので、「用」は和行一段の活と云つてゐる）○天言圖考一卷（嘉永三年十一月成る。海野幸典の「天言活用圖」を批評したもの）○節用集考一卷（「古本節用集の研究」の卷末に附載して大正五年に刊。慶長以前の節用集について研究したもので注意すべき著）○名乘指南一卷（文久二年刊。名乘に用ひる漢字の音訓を記した一種の字書）○詞八衢附考二卷○古文音例五卷等。

【業績】春村は晩學であつたが、篤學で頗る博識の人である。國語學方面では最も音韻學に長じ、かねて活用手爾波にも造詣深く數種の著があるが、或は未完成、或は部分的な研究で、春村の學殖を傾け盡した名著が殘らなかつた事は遺憾である。

【參考】古學小傳（清宮秀堅○近世三十六家略傳（河喜多眞彥○國學者傳記集成○和歌史の研究（佐佐木信綱○國學全史下卷（野村八良○村田春海翁略傳（佐佐木信綱（文海一ノ七）○村田春海稻掛太平贈答（岡田正美（帝國文學一ノ一ー六・九）○村田春海大人の機錦詩稿に就いても「道を人に教へたる人にはあらず」といひ、時に古道をいつてもそれは「歌の學びと古言を解釋する學」とを意味し、宣長のいふ道ではなかつたとしてゐる。春海の文は雅致があり、條理が通つて明晰である。この點に於ては、確かに唐宋八家の影響も認められるけれども、更に重要な點は、その詠歌に際してと同じく、刻苦推敲を惜しまなかつたことである。歌人としてはその趣向を自然に求め、作歷史的假名遣流布の上に少からぬ效果のあつた事と思はれる。【西尾・龜田】

【參考】古學小傳卷二（清宮秀堅○近世三十六家略傳（河喜多眞彥○國學者傳記集成○和歌史の研究（佐佐木信綱○國學全史下卷（野村八良○村田春海翁略傳（佐佐木信綱（文海一ノ七）○村田春海稻掛太平贈答（岡田正美（帝國文學一ノ一ー六・九）○村田春海大人の機錦詩稿に就

守舍について狂歌に遊び、壺側の棟梁となつたが、すでにして和歌に志し、進んで國學を修めた。定まる師はなかつたが、狩谷棭齋に疑を正し、清水濱臣・岸本由豆流・村田了阿・北靜廬・伴信友・塙忠寶その他の人々と交つて、つひに一家を成した。その學、考證を重んじ、すべての點に正確を期したなど、やはり棭齋等の學風を多分に受けてゐる。その性篤實、

（繪畫的・線條的參照）

【參考】Schmarsow : *Barock u. Rokoko* ‖ Wölfflin : *Renaissance u. Barock.* ‖ Worringer : *Formproblem d. Gotik.*【村田】

判（はん）「印章」を見よ。

蠻繪裝束（はんえさうぞく）「舞樂」を見よ。

反歌（はんか）　和歌　【名稱】「かへしうた」ともいふが、「はんか」と音讀すべきである。反歌の名稱は、木村正辭博士の說の如く、支那の「荀子」の反辭から出た語である。「荀子」卷十八の「反辭」を楊倞の註に「反辭反覆叙說之辭、猶ニ楚詞亂曰一」と解說し、「楚辭」の離騷の亂曰を、王逸の註には「亂理也。所下以發ニ理詞指一總撮ニ其要一也上」と說明してゐる。これを併せ考へると、「反辭」は「賦」（日本の長歌にあたる）の意をも一度くりかへすもので、楚辭の「亂」（賦に添つて賦の意のある所をあらはし、賦の要領を總理するもの）と同一である。我が國の「反歌」もこの「反辭」の意味から推して、長歌の意の在るところをも一度くりかへし、その要領を短い形であらはすためのものと考へて良い。

【成立・性質】反歌の成立は、記・紀歌謠時代の長形式の終りの部分が獨立して生じたものである。長形式も本來抒情詩的な性質であるために、最後に抒情詩的統一をつける必要が起り、そこに自ら短歌形式が作られたものが獨立して反歌となつたのであらう。もとよりかくの如き反歌が作られるためには、諸はれた歌が諸はれなくなつたことが原因であらう。諸はれる場合には民衆的であるものが、諸はれなくなると、個性的になり、文學意識も生じて來、從つて反歌といふものが生じてくるのである。（和歌・短歌・萬葉集參照）

【參考】萬葉代匠記（契沖）○萬葉集美夫君志（木村正辭）○國歌の胎生及發達 五十嵐力 ○日本歌謠史 高野辰之【久松・森本】

挽歌（ばんか）　和歌　【名義】葬に際して柩を挽く時の歌の意であるが、後には廣く死を悼む歌となつた。その點で「古今集」以下の哀傷歌（別項）と相通ずる。ただ哀傷歌が哀傷といふことが主であるに對して、挽歌には死の際の葬といふ儀式的な方面が加はつてゐる場合が多い。記・紀の歌謠に於ける「なづきの田の稻がらに稻幹にはひもとほろふところづら」等四首を「御葬に歌ふ歌」とあるのは挽歌の性質の先驅をなすものであり、「萬葉集」卷二の「鳥翔（つばさ）なす在り通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ」の歌の左註に、「右件歌等、雖不挽柩之時所作、唯擬歌意、故以載于挽歌類焉」とあるのを見ると、萬葉時代では「挽柩」といふことが意識せられて居つたのであらう。

【解說】「萬葉集」では雜歌・相聞・挽歌（各別項）といふ三大部立の一で、死が人生の一大事であるだけに歌材としても重要視されるのは當然であり、又抒情詩として感動の切實であるのは言ふまでもない。「萬葉集」で挽歌の部立のある卷は卷二・三・七・九・十三・十四であるが、これ等の部立としてある卷以外にも挽歌が含まれてゐる。「萬葉集」の挽歌は長歌・短歌にわたつてゐるが、卷二の挽歌には人麿の雄渾な長歌の挽歌を多く含み、最も異彩があるが、短歌の挽歌にも極めてすぐれたものが多い。（哀傷歌參照）

【參考】萬葉集卷二挽歌最初の左注について 山田孝雄（奈良文化一六）○挽歌論 竹內金治郎（萬葉集講座）【久松】

板額門破（はんがくもんやぶり）　淨瑠璃　「和田合戰女舞鶴」を見よ。

半可山人（はんかさんじん）　狂詩作家【姓名】植木晃、本姓禰原。字は居晦、通稱八三郎【別號】玉厓・桂里・巒峯【生歿】天保十年（一二四九）十一月四日江戸に歿す。享年未詳。【墓所】牛込原町瑞光寺（但し今墓石を存しないといふ）。【閲歷】詳かでないが、家は幕臣で大御番與力を勤め、大窪袋町に住んだ。若くして昌平黌に學び、詩を善くした。彼の狂詩に於ける力量も、また漢詩から獲來つてゐるのである。彼は大田南畝を識つてゐた。多分さうしたことから狂詩に手を染めたのであらう。すでに昌平黌在學中に、宋之問の下山歌を狂詩に改作して同黌を放逐されたともいはれてゐる。彼の交友には、南畝の外に、野村篁園・友野霞舟・鈴木白藤・勝田半齋・小島蕉園等の諸家があつた。その父を福原濶水といふ。この人も詩人として當時知られてゐた。半可山人の狂詩は、用語が精錬されて格調高く、南畝・銅脈の諸人を凌駕すと稱せられる。【著作】日本一阿方鏡（刊。忠臣藏十一段を狂詩の七律に詠じたもの。山人の代表作）○半可山人詩鈔（刊。狂詩集阿方鏡もまた附刻されてゐる）○西驛竹枝（寫本。新宿の遊里を詩にす。七絕三十首。外に山人の詩の集のあることを知らない）等。

【參考】小島蕉園とその交友（一）（二）森銑三（歷史地理五四ノ三）　【森】

晩花集（ばんくわしふ）　歌文集　二卷【作者】下河邊長流【編者】契沖【名稱】「晩花和歌集」ともいふ。【成立】貞享三年【諸本】從來寫本として傳はつたのを、長流全集下卷に收めた。又長流が延寶九年に湖海狂士の請によつて自撰した「長龍和歌延寶集」一卷があり、「三家和歌集」の中に入つてゐる。その書は「自撰晩花集」と題せられて、「自撰漫吟集」と共に清水濱臣の校訂で、文化十年に刊行せられた。賀茂眞淵翁全集上卷（續日本歌學全書）・國歌大系第一卷所收。又長流全集下卷には稿本によつて收めた。【解說】契沖の序文があり、四季・戀・雜・物名歌・長歌に分ち、終りに文集を附してゐる。舊風を甚しく脫したものではないが、爲兼・正徹・心敬等の反二條家一派の新奇な歌風をも有し、殊に「爲兼大納言の體にならふ」と云ふ詞書の歌も集中に散見され、爲兼には私淑してゐた。又木下長嘯子の歌にも私淑して明かに一特色を備へてゐる。「古今」「新古今」の中間をねらつた歌風である。本歌取の歌の多くは舊風を脫しないが、中には「萬葉集」によつた歌もあり、叙景に優れた歌が見出される。詞書に世を慨く心が見え、「老子」「莊子」の句の心を詠んだ歌などもある。長歌の作は古今風の七五調であるが、詞藻豐富な長篇の作があり、舊派歌人の顧みなかつた境を新たに開いたものである。而して輕妙なるところが少くない。（長流參照）

小山田に冬の夕日のさしやなぎ枯れて短きかげぞ殘れる
富士のねに登りて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり

【參考】下河邊長流全集解說　【佐佐木】

萬家人名錄（ばんかじんめいろく）　俳諧畫像　五册【編者】柿壺長齋【成立】文化九年【刊行】文化十年三月【由來】序によると、風雅に交はる者の互に親しみ直に相見る如き思ひあらしめ且つ後の世にも傳へようとて編輯したもので、白雀園長谷米彦の校合を經、自費を以て上木したのである。上木に際し、第一册に文化九年水無月の如泥（當小路刑部卿貞直）、同霜月の金令舍道彥の序、第二册に同伸冬の夏目成美の序、第三册に同七月の建部巢兆の序、第四册に同夏のはじめのうつくし松志宇女の序、第五册に日附なしの山口瑞馬の漢文序、同夏の栗田樗堂の跋を附し、同日本書大尾の書後を記してゐる。【解說】本書成立當時、世に名のあつた俳人の畫像を揭げ、その發句一章づつを記し、略傳を添へたものである。それ等の畫像・發句等は、大凡本人等から編者にあてて送つて來たものであるが、中には編者が畫家と謀つて適宜に圖したものもある。又畫像のない場合には、本人の自畫又はその國所の畫家に書かしめた圖畫を載せて畫像に代へた。略傳は姓名・字・號・國所・歿年月等を審かに記したものや、姓或は號のみを記したものもあつて、必ずしも一樣ではない。のみならず、畫像も發句も略傳もなく、僅かに文音文章のみを揭げたものもある。なほ名ある俳家を逸したものもあるが、これは本書編輯後に吟詠文章等が到來した爲め載せ得なかつたのである。かくて本書に名を連ねた人々は、千種峨眉・富小路如泥・穗波伍友の如き貴顯を初めとして、松窓乙二・曙庵秋擧・夏目成美・岡井眉・雪中菴完來・田喜庵護物・鶴田卓池・成田蒼虬・井上士朗その他六百數十人に及んでゐる。なほ旭江の筆に係る皇都二條假橋その他計十個の風景畫が挿まれ、これ等にはそれ〴〵古今俳家の發句並にその各家の略傳が附記してある。　【各務】

藩翰譜（はんかんふ）　國史・家傳【著者】新井白石【卷册數】原本十三卷二十册（正篇十卷、附錄二卷、凡例目錄一卷）【成立・由來】元祿十四年、甲府侯綱豐（後に將軍家宣）の命を受け、同年七月十一日起草、一百餘日を經て十月に脫稿、翌十五年二月十九日に上進した。書名は綱豐の附するところである。後、享保元年九月、白石の親友室鳩巢は、これが序を撰したが、その中には、白石が致仕後に修正を加へたことを述べてゐる。【諸本】（一）木活字本。見開きに「七本校合、本書草字平假名二十卷、今換眞字片假名、分爲三十卷」「五十部限不許賣買、活字堂」とある。五册を一編とし、初編より三編まで刊行されてゐるが、以下も出でたかどうかは分らない。刊年・刊行者、共に不明であるが、蓋し幕末に近い頃であらう。帝大史料編纂所に一本を藏する。刊行五十部を限つたといふは素より遁辭であるが、この版は傳本に乏しいらしい。（二）白石社校刻本。和裝六册。題簽に「校刻」の二字を冠してゐる。大槪修二校訂、頭註を附す。明治二十七年刊。以後數版を重ねてゐる。（三）國書刊行會本。新井白石全集第一（一册）をこれに宛ててゐる。前者白石社本を以て底本とし、萩野由之氏藏本その他を以て校合した。今三種の外、公私の圖書館その他に、寫本を以て傳へらるゝもの極めて多い。【內容】慶長五年より延寶八年に至る凡そ八十年間の諸侯の家傳である。事實に徵すれば、時に誤謬を免れないが、叙述簡明にして生彩あり、この種の著述の白眉を以て稱される。

【末書】「藩翰譜續篇」。「藩翰譜」の後をうけ、近藤吉左衞門孟卿等が幕命を奉じてこれを撰述した。文化三年脫稿。新井白石全集第二として校刊されてゐる。　【森】

磐溪（ばんけい）　儒者【姓名】大槪清崇。字は士廣【生歿】享和元年五月十五日生れ、明治十一年六月十三日歿す。享年七十八【閲歷】仙臺藩醫大槪盤水の次子。昌平黌に學び、天保三年藩の儒員に擢でられ、文久二年仙臺に移つて養賢堂學頭となり、晩年文墨を以て娛みとした。大正十三年二月從五位を贈られた。【著作】孟子約解三卷○古經文視二卷○近古史談四卷○寧靜閣詩文集十五卷。【批評】詩文兼ね長じた。嘗て自ら謂ふ「文章は葛西因是・松崎慊堂に得る所あり、詩は梁川星巖に得る所あり」と。　【佐久】

半月集（はんげつしふ）　詩集　【著者】湯淺半月【刊行】明治三十五年八月、金尾文淵堂。【內容】詩二十一篇。卷尾の「古英雄」は著者の處女作「十二の石塚」（別項）である。この書の卷尾の廣告には、「新體詩鈔」（別項）に先だつ數年の創作云々と「十二の石塚」を誌してゐるが、

る。aeio等がそれ〴〵アエイオの音を表はし、ktpdbszrlmn等が普通のローマ字の示す音に用ふる外、やゝ形の異なるものの中の主なるものを擧げれば左の如くである。

ɛ　口を廣く開くe。
æ　英語 man の母音。
ɔ　口を廣く開くo。
ʌ　英語 but の母音。
ə　屢々「曖昧母音」と名づけられる。舌を自然靜止の位置に置いて出すもの。
ʃ　通例shで表はす音。sの字の變形である。

いふ。父を新五右衞門と云ひ、三十六歳で歿した。盤齋はその長子で、次子次郎九郎は出家して孝雄といひ、上醍醐山報恩院前大僧正密灌に就いて法學を究め、八幡鳥藏坊に住し、三男小三郎も出家して澄西堂と號し、相國寺に棲んだといふ。【學統】幽齋門から出た松永貞德に師事し、望月長好・北村季吟・釋元政・和田以悅等と同門の好を持つてゐた。盤齋の學に就いては、門弟としての後繼者はない。【閲歷】確實な傳記に乏しい。摺津（一說播磨）の人、早く父を喪ひ、專ら祖父忠兵衞に撫養された。天性怜悧、若くして叡山に登り、台教を勸學院僧正に學んだのを初めとして次々に諸方の碩

言によれば、一明暦四年の刊本たる所謂舊說とは異にして寫本のまゝ黒川家に傳はれるものなりとある。併しながら、延寶二甲寅年八月吉日書堂荒川宗長開板とある刊本には「小野山優婆塞盤齋記」の記載はない。これは、開板に際して上記の九字を削つたものであるか、又は黒川家に傳はつた系統の寫本にのみ、上記の記載があつたかの何れかであらう）のによつて考ふれば、或は盤齋は、その晩年を小野山の近傍に過ごし、出家せずして何れかの佛弟子となつてゐたものではないかとも思はれる。

【著書】盤齋の著述には、本名を記さざるもの多く、果してその著なりや否やを詳かにしな

つて業慶応に歿し、晩年次第を以て煤みとした。大正十三年二月従五位を贈られた。

半月集（はんげつしふ）詩集　【著者】湯浅半月　【刊行】明治三十五年八月、金尾文淵堂。【内容】詩二十一篇。巻尾の「古英雄」は著者の処女作「十二の石塚」（別項）である。この書の巻尾の廣告には、「新體詩鈔」（別項）に先だつ数年これは謬りである。宗教思想と諷刺諧謔との二特色があるが、前者に成功し、後者には失敗してゐる。（日夏）

萬國音聲文字（ばんこくおんせいもじ）文学　【名稱】萬國音標文字とも、國際音聲文字ともいふ。International phonetic alphabet.　【解説】言語の音聲を示す記號の一種で、ローマ字を基礎として定めたもの（音聲符號參照）。一八八六年、明治十九年）に設立された萬國音聲學協會（L'Association Phonétique Internationale）が、一八八八年（明治二十一年）に制定したもので、現今音聲學者の間に廣く用ひられてゐる。各國語の音聲を表はすに、出來るだけ同一式によること、一音は一符號で表はすこと、成るべく文字の上下に、區別符標（diacritical marks, p_e ロ等）を用ひざること、從來のローマ字を成るべく利用すること（例へば、不用なる文字（例 x）を別の音符號とする、字を逆にすることと（ə ʌ ɔ 等）、古字ギリシヤ字（æ ɜ θ 等）を利用すること等を主義とし、已むを得ざるものに限り新字を造る（ɔ ɲ 等）が特徴である。

ʃ　ə ʌ ɔ æ ɛ　口を廣く開く。
a　英語 but の母音。
ɔ　口を廣く開く。
æ　英語 man の母音。
ɛ　口を廣く開く。
ə　自然靜止の位置に置いて出すもの。
ɜ　屢々「曖昧母音」と名づけられる。舌を
ʃ　通例 sh で表はす音。s の字の變形である。
z　sh の有聲音。z 字の變形である。
θ　英語 think のように th で表はす無聲摩擦音。
ð　英語 they のように th で表はす有聲摩擦音。
ç　ドイツ語ライプチッヒ（Leipzig）等の「ヒ」の音。
x　ドイツ語バッハ（Bach）等の「ハ」の音。
ŋ　英語 king のように ng で表はす音。
j　英語 yes のように y で表はす音。

【參考】萬國音聲文字に關する書＝*The Principles of the International Phonetic Association.* 1912. ＝*Le maître phonétique.*　【神保】

萬國音標文字（ばんこくおんぴょうもじ）「萬國音聲文字」を見よ。

盤齋（ばんさい）國學者　【姓名】加藤等空。字は新太郎　【別號】蹈雪軒・冬木齋・灘淵（俳號）・影法師（筆手作者名）　【生歿】元和七年生れ、延寶二年（一六七四）八月十一日歿す（一説長良以來國學家略傳によれば延寶二年三月三日歿）。享年五十四。　【家系】特に舊家の出ではない。祖父は忠兵衛と呼んで、家康配下の武勇の士であつたと

河邊長流（かはべながる）　【編者】契沖　【名稱】「晩花和歌集」とも。【成立】貞享三年　【諸本】從來寫本として傳はつたのを、長流全集下卷に收めた。又長流が延寶九年に湖海狂士の請によつて自撰した「長流和歌延寶集」一卷があり、「三家和歌集」の中に入つてゐる。その書は「自撰晩花集」と題せられて、「自撰漫吟集」と共に清

晩花集（ばんくわしふ）歌文集　二卷　【作者】下

理五四ノ三）　〔森〕

月下露深所作抄以慰望令書寫畢」によつて、ほぼ推定がつく。延寶二年八月刊。異本を用ひて比較的精密に本文を校合せる點及びこの記の體制に歷史保胤の「池亭記」の影響がある點は、注目に價する。

併しやゝもすれば佛說に偏してゐる。）　○徒然草抄　十二卷（別項）　○貞德の歌書を覽して、その聞書を記し、卷首に大意七箇條を掲げ、末に、作者部類を附してゐる。）　○伊勢物語抄十卷（寛文八年卯月刊。寒皐隱春の說が多い。）　○三部抄增注十三卷（寛文九年版。說歌大概・秀歌大略・百人一首・未來記・雨中吟、卽ち定

言によれば、一兩年の刊本にも所謂初稿ではなく、又、上記の記載があつたかの何れかであらうのにみ、よつて考ふれば、或は盤齋は、その晩年を小野山の近傍に過し、出家せずして何れかの佛弟子となつてゐたものではないかとも思はれる。

著書　盤齋の著述には、本名を記さざるもの多く、果してその著なりや否やを詳かにしないが、ほぼその著と信ずべきものを次に掲げる。○新古今增抄二十卷（自跋はあれど年代を記さず。寬文三年八月刊。「新古今集」の古抄に增抄したもの。毎首古抄の說を襲ひ、また自說を加へたものである）　○伊勢物語初冠五卷（寬應元年成る。寬應五年丙申の自序。慶長三年刊。幽齋の「伊勢物語闕抄」に頭書を加へたもの。原書の閒卷に初冠の頭書した故に初冠と名づけたのニ說がある）　○長明方丈記抄（寫本。黑川家に傳はりしもの）一卷。月下露深所作抄以慰望令書寫畢」によつて、ほぼ推定刊本三卷（撰述の年紀は、寫本の奥書「寬治三年子歲

盤溪（ばんけい）儒者　【姓名】大槻清崇。字は士廣　【生歿】享和元年五月十五日生れ、明治十一年六月十三日歿す。享年七十八　【閲歷】仙臺藩大槻盤水の次子。昌平黌に學び、天保三年藩の儒員に擢でられ、文久二年仙臺に歸

石二卷、凡例目錄一卷）　【成立・由來】元祿十四年、甲府侯綱豐入後に將軍家（綱吉）の命を受け、同年七月十一日起草、一百餘日を經て十月に脫稿、翌十五年二月十九日に上進した。書名は編纂

藩翰譜（はんかんぷ）國史・家傳　【著者】新井白

河邊長流（かはべながる）　【編者】契沖　【名稱】「晩花和歌集」とも。【成立】貞享三年　【諸本】從來寫本として傳はつたのを、長流全集下卷に收めた。又長流が延寶九年に湖海狂士の請によつて自撰した「長流和歌延寶集」一卷があり、「三家和歌集」の中に入つてゐる。その書は「自撰晩花集」と題せられて、「自撰漫吟集」と共に清

晩花集（ばんくわしふ）歌文集　二卷　【作者】下

理五四ノ三）　〔森〕

月下露深所作抄以慰望令書寫畢」によつて、ほぼ推定刊本三卷（撰述の年紀は、寫本の奥書「寬治三年子歲

盤溪（ばんけい）儒者　【姓名】大槻清崇。字は士廣　【生歿】享和元年五月十五日生れ、明治十一年六月十三日歿す。享年七十八　【閲歷】仙臺藩大槻盤水の次子。昌平黌に學び、天保三年藩の儒員に擢でられ、文久二年仙臺に歸

萬家人名錄（ばんかじんめいろく）俳諧畫像　五冊　【編者】柿衞文庫　【成立】文化九年　【刊行】文化十年三月　【由來】序によると、風雅に交はる者の五に親しみ直に相見る如き思ひあらのしめ且つ後の世にも傳へようとて編輯したもので、白雀閣長谷來彥の校合を經、自費を以て上木したのである。上木に際し、第一冊に文化九年水無月の如泥（當小路利郎）自序、第二冊に同仲冬の夏目成美の序、第三冊に文化十年三月の盆會當麻の序がある。

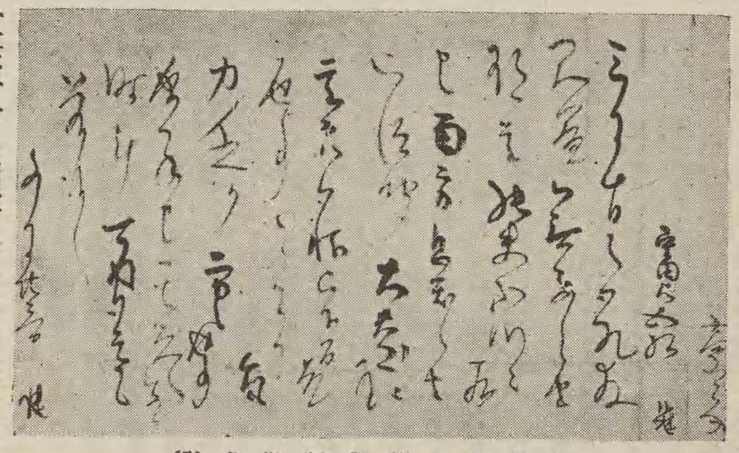
藩翰譜（はんかんぷ）國史・家傳　【著者】新井白石　【卷冊數】原本十三卷二十冊（正篇十卷・附錄二卷、凡例目錄一卷）　【成立・由來】元祿十四年、甲府侯綱豐入後に將軍家（綱吉）の命を受け、同年七月十一日起草、一百餘日を經て十月に脫稿、翌十五年二月十九日に上進した。書名は編纂

家の三部抄の註釋。初めに幽齋の抄を引き、次に貞德の說及び自家の案を加へたもので、特に貞德の說を多く擧げてゐる。)○諷增抄十二卷(寬文元年の自序。十五番の謠曲を註し、その首卷に、大意、諷の起り、謠の字諷の字の註、催馬樂のこと、申樂の事、申樂を能といふ事、能作者目錄の事等を記してある)○淸少納言枕草子抄十五卷(別項)○謠增抄十三卷(刊期不詳。○方丈記泗說二卷(延寶三年刊。方丈記を註して頭書したもの。まゝ書をも挿入してある。卷首には題號の由來及び作意等について述べてある。併しこれに就いては、國文註釋全書の編者は、田邊熙哉氏所藏の刊本によるに著者の署名なし、按ずるに山岡元隣著方丈記頭書と同一のものにあらざるかと疑つてゐる)。

【齋藤(淸)・池田】

【參考】諸家人物誌續編下○國學者傳記集成○古學小傳○(慶長以來)諸家著述目錄(和學家之部)○(慶長以來)國學家略傳○俳林小傳○鑒定便覽

蕃山(ばんざん)　儒者【姓名】熊澤伯繼。字は了介、通稱は次郎八、後、助右衞門(蕃山の號は、後姓にも用ひた)。【別號】息遊軒【生歿】元和五年京都五條の寄舍に生れ、元祿四年(一三五一)八月十七日歿。享年七十三【家系】父は野尻一利、母は熊澤龜女。外祖熊澤守久の養ふ所となつた。【閱歷】寬永十一年、板倉重正・京極高通等の薦めに依り、備前岡山の藩主池田光政に仕へ、居ること五年、致仕して江州桐原に寓した。中江藤樹(別項)を敬慕して陽明學を受け、正保二年再び岡山侯に仕へて祿三千石を受けた。貧民を救ひ、敎育を起し、佛寺を減じ、淫祠を毀ち、治績大に擧がつたが、晩年致仕して京都に移り、播州明石に隱居した。城主松下信之は殊に厚く待遇した。延寶七年、信之が封を大和の郡山に移された時、蕃山も從つて郡山に移つた。貞享二年、信之は又封を下總の古河に移されたので、蕃山も亦從つて古河に移つた。時事の得失を論じて將軍綱吉の旨に忤ひ、古賀に禁錮せられた。明治四



熊澤蕃山筆蹟(先哲書影)

十三年十一月正四位を贈られた。【著作】集義外書三卷○集義和書五卷○大學或問二卷○(佐久)孝經外傳或問四卷。

判者(はんじや)「歌合」を見よ。

播州皿屋敷(ばんしうさらやしき)　淨瑠璃　上中下三卷　時代物　【作者】爲永太郎兵衞・淺田一鳥【興行】寬保元年七月十五日初日、豐竹座。【諸本】七行八十本　【題材】所謂皿屋敷の巷說を細川家のお家騷動に搦ませたもの。皿屋敷傳說に關しては夥しい異說が傳はつてゐるが、その根據を明かにし得ないが、要するに一下婢が器物を破損した爲めに詰責されて自殺する、若しくは慘殺されるといふのが核心で、それに結果として怪談が附隨し、動機として更に戀の意趣が加はつてゐるものもある。これ等の事件は、近世社會の武家の家庭には往々生じ得べき性質のものであつたらうから一つの著名な事件が諸方の類似の事實と呼應し混交し傳播して行つた爲めに、江戶說・播州說・雲州松江說などを生じ(諸國里人談等)、更に類似說話が混入し(積翠閑話等の上野說や、新著聞集等に發する說)、また江戶說に於ても番町說(雲錦隨筆・積翠閑話)や、牛込說(久夢日記・諸國里人談)を生んで、甚だしく多岐に亙るに至つたのである。江戶番町說に據れば、正保もしくは延寶・天和の頃の出來事であり、「久夢日記」は最も詳細にこれを傳へてゐる(天和元年三月の條)。なほ本曲下の卷には、江戶番町說と播州姬路說との外に、當時紀州說の存したらしい事を窺ひ得る章句が見える。

【梗概】(「上の卷」)(冷光院殿下馬先)足利將軍義政の母冷光院の召により、細川巴之介の室で山名宗全の息女柾の前が、良人と島原の遊女玉の井との間に生れた喜代若を伴うて來かゝる。もと宗全の臣で切諫して勘氣を受けてゐる高岡才藏、今の名園右衞門が柾の前に逢うて、流浪中の巴之介を己が侘住居に匿まつてゐたが、今度冷光院の召出しによつて伴うて來た由を語る。樂燒屋の彌太七が山名宗全の賴みで細川の家寶唐繪の皿を持參するので、宗全は大望成就と喜ぶ。皿は將軍家が翫でより所望であるが、それを差上げぬため巴之介は勘氣を蒙つてゐる。宗全は更に腹心竹原藤內に巴之介の一子喜代若の剿殺を命ずる。父の惡謀を立ち聞いた柾の前は、若君を園右衞門に託し去らせる。(冷光院館)冷光院の御前で宗全は巴之介を出し拔いて唐繪の皿を披露するが贋物と知れる。ついで細川の臣舟瀨三平が預りの皿の箱を開くと、これ亦皿はなくて先代勝元の遺言狀と髑髏が現はれる。皿は二十年前出石平馬に奪はれ、三平の父で寶藏の鍵を預る舟瀨三太夫が切腹した事が遺書によつて始めて判明。宗全や青山忠太は細川主從を辱しめるが、冷光院の情によつて、巴之介と三平とは院の腰元で三平の戀人お菊を伴うて皿の行方と犯人の詮議に出發する事になる。(八坂・三平住家)巴之介は三平とお菊に匿まはれてゐるが、島原の輕岸兵衞に金の催促を受けて當惑の所へ、國家老青山鐵山が訪れて金子を用

播州皿屋敷(初演繪本番附)

立て窮地を救ふ。〔壬生村・樂燒屋彌五兵衞住家〕娘お菊は五つの時から冷光院に奉公に上つてをり、先妻の子彌太七は無頼の徒で傾城玉の井に入れ揚げて家を外にしてゐる。今日も倅が山名宗全に贋皿を賣つた廉で父の彌五兵衞は呼び出されるが、眞の皿を差出す事を約し、以前の武士に取立てられて歸つて來る。お菊と共に初めて舅を訪れた三平は、親の仇の皿盜人が彌五兵衞である事を察知し、お菊を離縁した上敵を討たうとするので、母親は密かに身代りに立たうと決意し、兩人に弓矢を與へて手筈を敎へる。總てを知つた彌五兵衞は妻を出し拔いて自ら射られ、三平の父を討つて皿を奪つた事情を告白し、倅彌太七が皿を隱し持つてゐる事を明かして潔く首を討たれる。折から彌太七が來るので捕へようとするが逸する。〔中の卷〕（松風屋）彌太七に身請されると決つた玉の井は、病氣と僞つて出養生に來てゐる。唐繪の皿をも入質して通ひつめる彌太七は、玉の井の靡かぬのを憤つて狼藉するが、來合せてゐた園右衞門實は高岡才藏に懲らされ、皿は才藏と三平夫婦の苦心で請け戻され、彌太七は坊主にされる。（嵯峨野）喜代若君を匿まつてゐる園右衞門の妻お花は姉おやくと共に泥醉した姉聟の醫者安宅を駕籠にのせて來る。坊主姿の彌太七は竹原藤内を手引して若君を奪ひ取らうと徘徊してゐるが、欺いてお花を連れ去らうとして果さない。（園右衞門住家）彌太七が忍び込み、この家の倅紅松を若君と誤つて奪ひ去らうとするが、園右衞門のために刺され、お花は爭ふ機に紅松を斬る。お花夫婦は姉おやくの子紅松を養子としてゐるのであつた。おやくは首捕を携へて驅けつけ、殺された紅松を見て一旦の怒りに驅られてお花を責めるが、實は若君の身代りに立てる覺悟で來たのであつた事を明かして共に嘆く。竹原藤内を贋首で欺き一同は巧みに落ちのびる。〔下の卷〕（道行三がいがさ）巴之介と玉の井にお菊が附添うて播州へ。（姫ケ城々下）宗全の追手に迫はれた三人は、心太賣りに變した才藏・三平に出逢ひ、青山鐵山の下屋敷（鐵山下屋敷）忠勤を裝つてゐる鐵山は、蟻助をして密かに拔穴を潛つて冷光院の動靜を探らせた上、大事の洩れる事を慮つてこれを毒殺し、なほも巴之介を殺さうと弟忠太と密議する。立ち聞きしたお菊は忠太を諫めるので、鐵山はお菊の預る唐繪の皿の一枚を隱した上、紛失の罪を言ひ立て斬殺して井戸に投ずる。皿の數讀む聲が井中から頻りに起り、お菊の靈が現はれて鐵山を惱ませる。三平が駈けつけて皿を奪ひ返し忠太を射殺する。（播州青山要害）お菊の亡靈に妨げられて、逐電し得ない鐵山は、京を脫走した山名宗全と共に此處に立て籠つてゐる。冷光院の命で巴之介・才藏・三平及び柾の前・玉の井・お花等はこれを攻める。（鐵山隱所）鐵の網のなかに隱れてゐた鐵山は自刄し、宗全は生捕られる。

【構想】全體の構想と各々の趣向とが緊密な繋りを持たぬ極めて散漫な、創作力の乏しさを語る作である。上の卷の樂燒屋、中の卷の園右衞門住家、下の卷の鐵山館が、五段物の二ノ切・三ノ切・四ノ切に當る全曲の焦點であるが、鐵山館に於ける亡靈の活躍や皿の怪や、その他操獨特の舞臺技巧が驅使された爲めに好評を博したに過ぎない。

【傳統】江戸歌舞伎では、既に天和の頃に皿屋敷を取扱つた狂言のあつた事は「久夢日記」天和元年の條に、「その比大久保彦六の異變の風聞、江戸中もつぱらなり、四座の芝居にて名代をかへ、狂言にしくみいだし候、その中に本挽町森田勘彌が座にて、皿井筒の内に呼子玉、市野屋くわん活風呂といふ名目なり、大あたりにて云々」とあるので知られ、大阪では享保五年金子吉左衞門座で、市村玉柏がお菊を演じてゐるが（上演月、名題共に未考。「京坂歌舞伎年代記」による）、その後二十年を經、本曲が出づるに及びて皿屋敷狂言の筋立が完成し、同名の增補ものをも生じたが、操・歌舞伎ともに「鐵山館」が重視されるに至つて今日に及んでゐる。一は前述の如き操獨自の視覺的效果が强く發揮され得た故であり、一は歌舞伎に於ける責め場・殺し場及び所謂ケレンの發達に迎合したが故である。歌舞伎では多くの書き替へや絢ひ交ぜを生んだが（傳奇作書・近世戲曲研究）、結局、默阿彌增補にかゝる「皿屋敷化粧姿見」（文久三年六月、市村座）に至つて筋立は固定し、今日も多くこの名題によつて「鐵山館」が繰り返され、尾上梅幸が家の藝としてお菊の型を傳へてゐる。なほ書替で、今日行はれるものに「新皿鋪月雨暈」（明治十六年五月市村座、默阿彌作）があり、新解釋に依るものに岡本綺堂の「番町皿屋敷」がある。

【參考】傳奇作書續編中の卷（播州皿屋敷の實說）○近世戲曲研究守隨憲治○歌舞伎（舊二七、榮三郎のお菊の型。昭和四ノ七、皿屋敷の話）○芝居の型林翠浪○續々歌舞伎年代記（明治二五ノ一〇、歌舞伎座の條）

【近藤】

班女　謠「狂女物の謠曲」を見よ。

萬水一露　註釋書　二十八卷六十二冊【著者】能登永閑。宗碩の門人。傳不詳。【卷册數】卷末の貞德の跋に、「法華經の二十八品にかたどり、廿八册となし、萬水一露と號せらる」とある。原本は二十八册なりしと思はる。刊本は六十二册。筆者藏の古寫本、靜嘉堂文庫藏の寫本及び彰考館藏の古寫本は共に五十四册。「一時隨筆」には五十四策とあり、「國朝書目」には六十卷とある。【成立・刊行】成立事情及び年月不詳。もと寫本で傳はつてゐたが、承德元年の松永貞德の跋文を附し、寬文三年刊行した。【諸本】異本は少い。筆者所藏本は、寬永頃の書寫とおぼしく、外題に「萬水一露抄」とあり、刊本の如く源氏の本文全部かゝぐる事をせず、註に關係ある部分のみを抄出してゐるが、誤脫少く、刊本に比して頗る善本である。これと全く同一の系統に屬するものは、靜嘉堂文庫の藏本である。寫本は一般に傳本少く、その中、彰考館所藏の本は注意すべきものである。

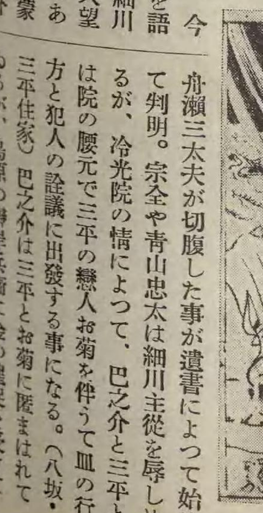
【內容】本書は、「河海抄」「花鳥餘情」「弄花抄」「細流抄」（各別項）等の肝要のところを集めて引用し、それ〴〵「河海」「弄」「細」等の肩付を附し、稀れに「和祕抄」等を引いてゐる。師說は「碩」とし、自說は「閑」とし、兩者同じき時は「宗碩・永閑」又は「碩・閑」と標記してゐる。刊本は、「源氏」の全文を任意に切つて示し、これに註釋を加へてゐる。寫本のうち、「萬水一露抄」と外題あるものは、全文を示さない。本文は青表紙系統の本と思はれるが、「湖月抄」の如き系統の本ではない。また所々「河內本」のことを說明してゐるが、必ずしもその古寫本を吟味したのではあるまい。卷頭には源氏物語開書と題し、源氏物語作者の事、此物語を作れる由來の事、時代の事、大意の事、古來稱美の事、紫式部の事、此物語を書きはじむる年號の事、此物語を源氏と號する事、源氏

制者「歌合」を見よ。

播州皿屋敷　淨瑠璃　上中下三卷　時代物【作者】爲永太郎兵衞・淺田一鳥【興行】寬保元年七月十五日初日、豐竹座。【諸本】七行八十丁本【題材】所謂皿屋敷の巷說を細川家のお家騷動に搦ませたもの。皿屋敷傳說に關しては夥しい異說が傳はつてをり、その原據を明かにし得ないが、要するに一下婢が器物を破損した爲めに詰責されて自

の名園右衞門が柾の前に逢うて、流浪中の巴之介を己が侘住居に匿まつてゐたが、今度冷光院の召出しによつて伴うて來た由を語る。樂燒屋の彌太七が山名宗全の頼みで細川の家寶唐繪の皿を持參するので、宗全は大望成就と喜ぶ。皿は將軍家が豫てより所望であるが、それを差上げぬため巴之介は勘氣を蒙つてゐる。宗全は更に腹心竹原藤內に巴之介の一子喜代若の刺殺を命ずる。父の陰謀を立

舟瀨三太夫が切腹した事が遺書によつて始めて判明。宗全や青山忠太は細川主從を辱しめるが、冷光院の情によつて、巴之介と三平とは院の腰元で三平の戀人お菊を伴うて皿の行方と犯人の詮議に出發する事になる。（八坂・三平住家）巴之介は三平とお菊に匿まはれてゐるが、島原の轉岸兵衞に金の催促を受けて當惑の所へ、國家老青山鐵山が訪れて金子を用



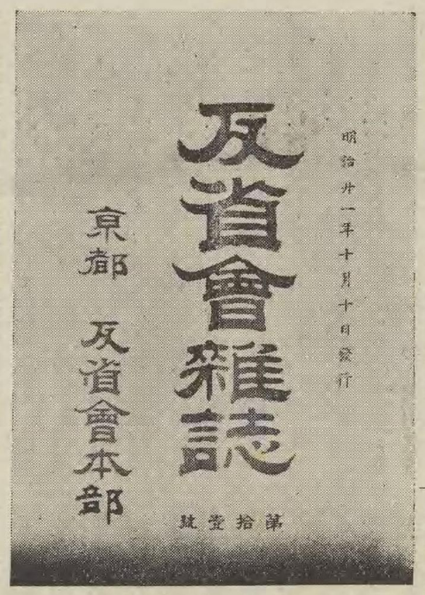
の姓を賜はる事、五十四帖巻の名の事、四諦法門の事、四門得道の事、空假中の三諦の事等の條々に亙つて舊註諸説をあげ、敷衍して説明してゐる。【價値】本書は註釋として、さして重要なものではない。永閑の説そのものも、舊説を改むるほど卓抜の説は少い。ただ本書は「細流抄」につぐ大著として、歴史的價値あるのみならず、その據れる「源氏」の本文が、青表紙本の正本に近き系統のものと思はるゝ點、及び宗碩の説が詳細に示されたる點において、特殊の價値を有する。「宗碩抄」六巻といふものは未だ世に知られないが、本書によつてその面目の一端を推察することが出來よう。本書は、松永貞德によつて價値を認められ(本書跋文・戴恩記)、宣長も、この書のことを「玉の小櫛」に紹介したが、岡西惟中は「萬水一露」は五十四策、宗碩法師の門人に能登の永閑といふ人の作也。この抄あまねく世に行はるれども、公家の御家にはもちひさせ給はずと、この春、烏丸光雄卿も仰せられし。有がたく耳にとまり侍る」(「一時隨筆」)と云つてゐるから、本書の性質價値を推して知ることが出來る。

【池田】

晩翠吟社（ばんすいぎんしゃ）　漢詩人の結社【解説】明治十一年九月、向山黄村（別項）の創立したもので、毎月一回不忍池畔の湖心亭に詩會を開き、その詩を集めて大沼枕山・小野湖山・鱸松塘等の評正を請うた。明治三十九年七月解散した。

【佐久】

反省雜誌（はんせいざっし）　雜誌【創刊】明治二十年八月【解説】「中央公論」（別項）の前身で、初めは「反省會雜誌」と稱し、京都本願寺の普通教校の學生有志が中心となり、禁酒進德を標榜した修養團體「反省會」（十九年四月創立）の機關雜誌であつた。「反省雜誌」と改題したのは二十四五年頃である。その後數次の擴張を經て半獨立雜誌となり、三十年東京に移り、三十二年一月から「中央公論」と改題した。現在の「中央公論」の號數はこの「反省會雜誌」時代から續いてゐる。編輯者は前後數人交代したが、最も永くこれを主宰して有力な評論雜誌に育て上げた功勞者は櫻井義肇である。最初の數箇年は純然たる禁酒雜誌であつて内容的には見るに足るものがない。二十七年に及んで隨筆・紀行・史傳などが加へられて來たが、



反省會雜誌

詞藻と文界時評とに分つて奔放な筆を揮ひ、更に小説を掲載し、文藝附録を設ける等、宛然「國民之友」（別項）の別働隊なるかの觀を呈した。この傾向は三十一年に入つて益々強くなり、遂に三十二年、「中央公論」の出現を見た。寄稿家には、島地默雷・赤松連城・德永滿之・前田慧雲・古河老川・龍海寛・藤井宣正・菊池謙讓・小柳司氣太・姉崎正治・大内青巒・丹生瀨川・杉村縱横・小林雨峯・澤柳政太郎・三谷涙骨・鈴木醇庵・高楠順次郎・岡倉覺三・上田敏・桑木嚴翼等が數へられる。本誌は由來の古いものであるが、明治文學史上意義を有し始めたのは、その最後の二年乃至三年間だけで、それも今日から見れば「中央公論」の前身として、その存在價値をもつのみ。併しその最後の二三年間に於て、時の文壇に若干の貢獻をしたことは相當認めらるべきである。樗牛の「わが袖の記」（別項）、桂月の「かた袖」、柳浪の「青大將」、鏡花の「玄武朱雀」、虚子の「初夢」などの小説、獨歩の「古き火」「かくや姫」、鐵幹の「小百合」「落花帚」、晩翠の「光りの歌」「哀歌・海棠」、羽衣の「硯北漫吟」、建樹の「夜半」「淡路少女」等の詩篇、岡倉覺三の「美術教育の施設」、上田敏の「英詩管見」、塚原政次の「詩人の心理的研究」、桑木嚴翼の「ショペンハウエルの美論」等の注目すべき論文など、皆本誌に發表されたものである。

【柳田（泉）】

萬世百物語（ばんせいひゃくものがたり）　浮世草子　五巻【作者】烏有庵の署名がある。【刊行】寶暦元年、江戸和泉屋吉兵衛板。【諸本】德川文藝類聚第四篇怪談小説所收。【解説】五巻二十話。動植物説話がその大半を占めてゐる。一ノ一、丹州に變化の玉章（森の主の精）。一ノ二、都に不思議の懐胎（水の精）。三ノ十、武州に暗夜武勇（狸）。三ノ十一、豫州に野島が婚禮（狸）。三ノ十二、洛陽に繪師の妙術（龍）。四ノ十五、江州に疫神便船（蛇）。五ノ二十、勢州に寢屋の化物（狸）等を數へる事が出來る。動物の中では狸に關するもの三もありながら狐に關するものは一つもない。幽靈説話には二ノ五、叡山に一眼一足化生（人の魂）。二ノ七、泉州に惡緣契（女の精靈）。二ノ八、丹波に男色密契（物の怪）。四ノ十六、藝州に海中捨船（殺された商人の魂）等がある。五ノ十七、周防に下界の天人は天人を描いた處に、この種怪談物として特殊な構想をもつてゐると言へよう。次に實話風の取材の多い事は本書の特質をなしてゐる。一ノ三、出羽に獨身羽黒詣は宮本武藏が羽黒山中に於て盗賊に誘拐された女を助ける物語であつて純然たる實話型をとつてゐる。一ノ四、陸奥に山中怪（子供を盗まれた鵜が蛇に仇を討つこと）。二ノ六、和州に樂の隱家（高潔なる隱士の話）。三ノ九、長州に寵愛一子（猫の嫉妬が主人の赤子を喰ひ殺した話）。四ノ十三、信州に山賊美童（美少年の盗賊が江戸まで人をつけた物語）。四ノ十四、備中に穗井田が仙術（仙人の話）。五ノ十八、武州に美少年劍術（美少年が無理を迫る年嵩の武士を斬殺した話）。五ノ十九、大内に高位の膿病（膿病者が妖怪と間違へて下郎を打つ話）等、いづれも實話風な敍述であるが、特に四ノ十三、五ノ十八などは、前述の一ノ三と共に怪談を離れた實錄の型をなしてゐる。文章は漢文脈が減つて國文と融和した一新體をなしてゐる。

【小泉】

反切（はんせつ）　漢語學・國語學【異稱】翻切・反語・反音又は單に反とも切とも、又日本では「かへし」とも。【解説】支那で漢字の音を示すために用ひた方法の一つで、他の二字の音に基いて、その字の音を知らしめるもの。例へば「東」の音(tong)を「德」(tok)「紅」(hong)の二字を用ひて、「德紅ノ反」又は「德紅ノ切」として示す類であつて、上の「德」の字からはその初頭の子音（これを韻學では「聲」又は「紐」といふ）を採り、下の「紅」の字からは、その韻ongを採り、これを合せてtongの音を得、これによつて、「東」字の音を示すもの。かやうに反切には必ず二字を要する。上の字は、求むる字と同紐（初頭の子音が同じもの）の字であり、下なほ佛教中心の社會評論雜誌であつた。二十九年に入つては、内容に一段の改良が試みられ、宗教や信仰・學術・哲學・社會問題等についてやゝ自由な批評的歴史的討究が許され、同時に從來の禁酒の宣傳機關たる役目を幾分脱するに至り、海外文學の紹介も始められ、鐵幹の新體詩が毎號掲載されたりした。東京へ移轉してからは純然たる評論雜誌となり、以前の禁酒主義と絶緣したのみか、佛教中心の色彩さへ漸く薄らいで來た。その評論の範圍は政治・社會問題、宗教・教育・經濟・文學に及んだが、文學については特に一欄を設け、

する助紐を附けて連呼し、その子音を遊離せしめて下字の韻と結合するに便じたものである。例へば「德紅ノ反」の場合には、上字「德」に助紐「丁顚」を附けて「德丁顚」(tok-ting-tien)と連呼して、子音tが下字「紅」の韻と結合してtongの音を得るやうにしたのである。かやうにして音を得るのを「三折一律」といふ。助紐に用ひる字は、多少の異説はあるが、大體定まつてゐた。この方法は、支那ではずつと後までも用ひられたのであつて、我が國ではこれを唐人反（たうじんがへし）と呼んだ。

【韻鏡による法】支那の音圖である韻鏡（別項）に基づくものであつて、まづ韻鏡四十三圖（こゝに「五十音圖による法」我が國では、漢字音を假め得た位置にある文字の音が正當なる音でない事がある。その場合には、更に他の位置にもとめなければならない。かやうにして反切によつて音を求むる方法にいろ〳〵の種類が生ずる。これを反切門法（はんせつもんぽう）といふ。この門法には諸説があつて、その數も、その内容も必ずしも一致しない。少いものは二門乃至四門から、多いものは二十門に及び、音和、類隔、互用、往還（又往來とも）、雙聲、疊韻、憑切、憑韻、廣通、偏狹、寄聲、寄韻などが普通認められてゐるものである（詳しくは曆光韻鏡の翻切門法及び切韻指南等を見よ）。

【五十音圖による法】我が國では、漢字音を假し、ズをジュとする類。これを拗音反切といふ）。かやうにして、假名反にもいろ〳〵の場合を區別するに至り、横本の反又は對座反（にはかはし）、竪末又は雙聲反（そうせいかへし）また上下反、紕聲反（ひせいかへし）又は角行反、二重反（にぢうかへし）、中略反（ちうりやくかへし）、卽座反、各種の相通、拗音反切などいろ〳〵の名目が出來た。

【ローマ字を用ひるもの】近くは漢字音をローマ字に寫して、上字の初めの子音の部分と、下字の韻の部分とを合して反切を行ふ法が出來た。「德紅反」をtok hongと書いて、上字のtに下字のongを附けてtongの音を得る類である。

【支那に於ける反切】【反切の起原】訓詁の學

反語・反音又は單に反とも切とも、又日本では「かへし」とも。【解說】支那で漢字の音を示すために用ひた方法の一つで、他の二字の音に基いて、その字の音を知らしめるもの。例へば「東」の音(tong)を「德」(tok)「紅」(hong)の二字を用ひて、「德紅ノ反」又は「德紅ノ切」として示す類であつて、上の「德」の字からはその初頭の子音(これを韻學では「聲」又は「紐」といふ)を採り、下の「紅」の字からは、その韻・ong を採り、これを合せて tong の音を得、これによつて、「東」字の音を示すもの。かやうに反切には必ず二字を要する。上の字は、求むる字と同紐(初頭の子音が同じもの)の字であり、下の字は求むる字と同韻の字である。この上字を父字又は切と云ひ、下字を母字又は韻といふ。この兩字から得た結果を歸納字(歸納音とも)又は歸字といふ。反切は、單音を示すべき文字なき支那に於て、漢字の音を示す便利な方法として註釋書・辭書等に一般に用ひられ、漢字音の研究には、缺くべからざるものである。我が國にも、古く反切を傳へ、その方法を學んだが、後には五十音圖による所謂假名反の法が出來、更にこれを國語の語釋や語源の說明に適用して、國語研究上の一原則となすに至つた。

【反切法】〔助紐を用ひる法〕反切によつて字音をもとめるには、上字(父字)から、その初めの子音の部分(紐)を遊離せしめて、これを下字(母字)の韻に結合させなければならない。そのために支那では古く「助紐」を用ひた。助紐は漢字の音の初めにあらはれるあらゆる子音の種類(即ち三十六字母)について、各々その子音を有する漢字二字づつを選んで定めたもので、反切の上字の下に、これと同じ子音を有する助紐を附けて連呼し、その子音を遊離せしめて下字の韻と結合するに便じたものである。例へば「德紅ノ反」の場合には、上字「德」に助紐「丁顚」を附けて「德丁顚」(tok-ting-tien)と連呼して、子音 t が下字「紅」の韻と結合して tong の音を得るやうにしたのである。かやうにして音を得るのを「三折一律」といふ。助紐に用ひる字は、多少の異說はあるが、大體定まつてゐた。この方法は、支那ではずつと後までも用ひられたのであつて、我が國ではこれを唐人反(たうじんがへし)と呼んだ。

〔韻鏡による法〕支那の音圖である韻鏡(別項)に基づくものであつて、まづ韻鏡四十三圖(これを四十三轉といふ)の中に、反切の上字及び下字がある圖をもとめ(その字が圖中にない場合には、韻書によつて、その字と同音の字で、圖中にあるものをもとめて、これをその字と同樣に取扱ふ)、圖中に於けるその字の位置をたしかめ、上字の圖中に於ける位置と全く同一の位置を、下字のある圖中に求めて、その位置の屬する行と下字の存する段との出會ふ位置にある文字をもとめる。この字の音が即ちもとむる所の音である。例へば、「德」は韻鏡第四十二轉舌音第一行、入聲第一段にあり、「紅」は「洪」と同音で「洪」は韻鏡第一轉喉音第三行、平聲第一段にある故、「德」の第四十二轉に於けると同じ位置を第一轉に求むれば、その舌音第一行入聲第一段に「斛」の字がある。この字のある行(舌音第一行)と「洪」のある段との交るところ(即ち第一轉舌音第一行平聲第一段)に「東」の字がある。この「東」の音が求むる字の音である。然るに古書に存する反切に基づいて音を求めるに、最後に求め得た位置に文字が無いことがある。また韻鏡の體製上、求め得た位置にある文字の音が正當なる音でない事がある。その場合には、更に他の位置にもとめなければならない。かやうにして反切によつて音を求むる方法にいろ〳〵の種類が生ずる。これを反切門法(はんせつもんぽふ)といふ。この門法には諸說があつて、その數も、その內容も必ずしも一致しない。少いものは二門乃至四門から、多いものは二十門に及び、音和、類隔、互用、往還(又往來とも)、雙聲、疊韻、憑切、憑韻、廣通、偏狹、寄聲、寄韻などが普通認められてゐるものである(詳しくは歷光韻鏡の翻切門法及び切韻指南等を見よ)。

〔五十音圖による法〕我が國では、漢字音を假名で表はす故に、假名に基づき、五十音圖を用ひて反切を行ふ法が、古くから用ひられた。これを假名反(かなへし)といふ。即ち五十音圖の中で、上字の最初の假名と同じ行に屬する假名のうち、下字の最初の假名と同じ段にあるものを求めて、これを下字の假名の最初の一字の代りに置けば、求むる音を得るのである。例へば「德紅ノ反」は「德(トク)」の初めの假名トの屬する行なるタチツテトの中、「紅(コウ)」の初めの假名コの屬するオ段の假名、即ちトをとり、「紅」の音コウのコの代りに入れてトウの音を得るの類である。但しこの場合にも、その得た音が日本の漢字音にない音となり、又は正しい音とならないことがある。その場合には、得た字音の假名に修正を加へて、或は上の二つの假名を再び反切して一字となし(ツワンをタンとする類。これを二重反といふ)、或は、第二の假名を略し(リュンをリンとする類。これを中略反といふ)、或は、同行又は同段の假名にかへ(モンをムンとするなど。これを相通といふ)、或は直音を拗音にかへる(シをスヰとし、ズをジュとする類。これを拗音反切といふ)。かやうにして、假名反にもいろ〳〵の場合を區別するに至り、橫本の反又は對座反(たいざへし)、竪末又は雙聲反(さうせいかへし)また上下反、紐聲反又は角行反、二重反(にぢうへし)、中略反(ちうりやくへし)、即座反、各種の相通、拗音反切などいろ〳〵の名目が出來た。

〔ローマ字を用ひるもの〕近くは漢字音をローマ字に寫して、上字の初めの子音の部分と、下字の韻の部分とを合して反切を行ふ法が出來た。「德紅反」を tok, hong と書いて、上字の t に下字の ong を附けて tong の音を得る類である。

【支那に於ける反切】〔反切の起原〕訓詁の學が初めて盛んに起つた漢代に於て、難讀の字の音を示すには、これと同じ音又は類似した音の文字を以て、「讀與一同」又は「讀若一」と註したが、後漢に至つて反切を用ひる事がはじまつたらしい。反切の起原については、顏之推の「家訓」に「孫叔然創二爾雅音義一、是漢末人獨知二反語一、至二於魏世一此事大行、」とあるによつて、魏の孫炎の「爾雅音義」に初まるとの說が永く行はれたが、近く章炳麟は、孫炎と同時の人で、その論敵であつた王肅の「周易音」や、「漢書」(地理志)の應劭(漢末の人)の註に反切があることを指摘して、反切が漢末に初まる事を說き(章炳麟の「音理論」)、我が國の大矢透博士は、唐初の武玄之の「韻詮」に、「反音例云、服虔始作二反音一、亦不二詰定一、臣謹以二口聲一爲レ證」(安然の「悉曇藏」所引)とあるを見出し、又「經典釋文」に後漢の鄭衆・許愼・服虔・鄭玄・李巡・樊光などの反切を載せたのを證として、反切が既に後漢に行はれたことを論じた(「韻鏡考」)。その起因については、支那語に於ては、古くから雙聲・疊韻の語が多く用ひられ、又二

字の語を合呼して生じた語があつたのであつて、反切の上字が歸字と雙聲をなし、下字が歸字と疊韻をなし、上下の二字を合呼して一字の音とするのは、これと趣を同じくする故に、その根元は支那に在つたと考へ得るが、漢代に佛教が渡來して梵語の經典を漢文に譯することが起り、儒士にして佛法を談ずるものが多く、梵音に通ずるものも少くなかつた故、その影響を受けて、反切が次第に世に行はれるに至つたものであらうとする說が有力である。

〔反切の流布〕 かやうにして漢末に起つた反切は、魏に至つて漸く廣く行はれたが、六朝時代に及んでは、詩文の上に音聲韻律の事が重んぜられて、韻書の類が續々あらはれたが、その音を示すには反切が用ひられたらしく、隋の陸法言の「切韻」にも、專ら反切によつて發音を示して居り、梁の顧野王の「玉篇」の如き辭書にも唐初の陸德明の「經典釋文」の如き註釋書にも亦反切を以て字音を註してゐる。又梵字の發音を示すにも反切を用ひる事が多かつた。かやうにして反切は字音を示す最も普通な方法となつて、後世までも沿用せられた。

〔韻學と反切〕 唐代に出來た韻學の書である神珙の「五音四聲九弄反紐圖」や、「元和新聲韻譜」なども反切の事を載せて居り、宋代以後盛んになつた等韻學に於ても等韻學の立場から反切法を說いてゐる。また反切のための助紐(前出)もこの頃から定まつたやうである(韻鏡序例に見えてゐる)。宋以後になると、唐代以來の支那語の音聲變化の結果として、もと同音であつた文字の異音となつたものが生じた爲め、古書にある反切の文字をその時代の音で讀んで反切を行つても、正しい音が得られず、更に種々の手續で修正を施さなければならない場合が出來、こゝに反切によつて正しい音を得るまでの手續の相違を區別する必要が生じて、所謂反切門法(前出)が說かれるやうになつた。その門法も初めは音和・類隔の二つ、又はこれに互用・往還を加へた四つなどで、種類が少かつたが、後にはその數が多くなつて甚だ煩瑣になつた。

〔反切の缺點とその改良案〕 かやうに、反切は字音を示す便法として永く用ひられ來つたのであるが、これに用ひる文字が不統一で、同一の音が種々の違つた文字で書かれること、反切の二字を連續して、上字から韻を捨て、下字から紐(初めの子音)を捨てて、上下の音を結合させるのに困難があることなどの缺點があるために、これに改良を施さうとの試みがあらはれた。清の潘耒の「類音」及び李光地等の「音韻闡微」に於ては、上字に支・微・魚・虞・麻・歌の如き母音で終る字を用ひ、下字には影母及び喩母の字(卽ち母音、又は母音に近い子音ではじまる字)を用ひて、上下兩字の連續を容易にし、近く黃侃は「音略」に於て、同紐・同韻の文字は、各一字を定めて反切の上字下字に用ふべきことを主張した。しかしながら、これ等の改良を以てしても、なほ不便を全く除くことは出來ず、殊に反切に用ひられた字の發音が土地により時代によつて一定せず、從つて正しい音が得られない故に、現時は字音を示す實用的方法としては反切を用ひず、ローマ字及び假名に倣つて、漢字に基づく一種の音字を作つて注音字母と名づけ、これを綴り合せて字音を標示する事とした。

【我が國に於ける反切】〔反切の輸入と流布〕 太古のことは知り難いが、我が國が隋・唐と交通してその文物を輸入してからは、漢文の經籍を學び、漢譯の佛典を讀み、詩賦をさへ作つたのであるから、當時支那に行はれた反切を知り、これによつて字音をもとめる方法を學んだ事は勿論であつて、遂には萬葉假名を以て文字の讀み方を示す場合にまで「反」といふ語を用ひるに至つた(萬葉卷十六に田庐者多夫世反」、空海の祕藏寶鑰に「蟇婆句反」とある類)。平安朝の初め、天台・眞言の名僧が入唐して、盛んに梵字・梵語を傳へたが、その發音は、主として漢字により反切を用ひて說明したので、儒家ばかりでなく、佛家に於ても反切の知識が普及した。當時反切法として「輕重清濁依二上字一平上去入依二下字一」といふ文が行はれた。

〔五十音と日本式反切〕 支那との國交が斷えてからは、漢字音も、漸く日本化した發音が行はるゝやうになつたと思はれるが、この時に當つて、日本式發音による字音の反切に便ずるがために、五十音圖(別項)が生れたものと推察せられる。さうして堀河天皇の時、悉曇學者明覺が、「反音作法」を作り、五十音圖を利用して日本式の反切法を說いてから、五十音圖は反切に缺くべからざるものとなり、反切に便ずるために、五十音圖の各字の下又は傍らに、拗音を加へるに至つた(「カキャキュキョ クキャキュキョ クワキィクィ クキュケキェコキョ ククゥクエコクヲ」のやうに)。かやうにして日本に於ける反切は謂はゆる假名反(前出)による事となつたのである。その假名反の方法としては、「上父字行レ竪、下母字行レ横、其隅生二子字一」「橫行歸二父字一、竪行歸二母字一、其歸生二子字一」といふ口訣まで出來て世に行はれた(新雲明魏の「倭片假字反切義解」に見えてゐる)。

〔日本の韻學と反切〕 鎌倉時代に韻鏡が輸入されて、その研究の結果、悉曇學者間に於ても反切の研究が開かれてから以後、江戸時代に至るまで、韻鏡は我が國に於ける韻學の中心となつたが、その結果、「韻鏡序例」に見える音圖による反切法を學び、また韻鏡以後支那にあらはれたこれと同系統の韻書類も續々渡來して、種々の反切門法等も講究せられるやうになり、江戸時代には人名等を反切して吉凶を判ずる事までも行はれて、反切が韻學の上では最も大切な事となり、韻鏡も反切のために存するもののやうにさへ考へらるゝに至つた。しかしかやうに韻鏡による反切を學んだとはいふものの、古來の假名反は反切の入門又は基礎としてこれと共に行はれて、その反切法の上にも反切門法と同樣に、種々の種類が認められるやうになつた。

〔ローマ字と反切〕 明治以後、我が國にローマ字の知識が廣まつたと共に、西洋人が支那語をローマ字で書いたものに接して、ローマ字を以て反切を行ふ事がはじまつた。大島正健氏の「翻切要略」の如きは、主としてこの方法によつてゐる。

〔反切と國語學〕 反切の國語學に及ぼした影響として注目すべきは、五十音圖による反切法が、國語の語義又は語源の解釋に應用せられたことである。仙覺の「萬葉集註釋」に「みことにされば」を「みことにしあれば」の「し」「あ」を引合せたものと說いてゐる如きも、多分反切から得來つた考と思はれるが、江戸時代に至つて、貝原益軒の「日本釋名」には、明かに反語卽ち假名反を以て和語を釋く八訣の一つとしてゐる。賀茂眞淵及びその末流の學者は、これを約言と名づけて、盛んに語釋の上に應用し、往々濫用の域にまで達した。かやうにして、漢字音を示さんがための人爲的

方法であつた反切法が、國語の語義語源の解釋上の一原則として用ひられるに至つたのである。(韻學・韻鏡參照)

【參考】中國聲韻學概要 張世祿 ○韻鏡考 大矢透 ○磨光韻鏡 文雄 ○翻切要略 大島正健 ○韻鏡開奩自箋 庵宥朝 ○韻鏡諸鈔大成 馬場信武 ○韻鏡祕事大全 小鷹益英 ○切韻考 清陳澧 ○切韻指掌圖 宋司馬光 ○經史正音切韻指南 元劉鑑 ○切字肆考 清張畊

半錢 はんせん 能狂言 【解說】 觸人が出て、靈夢によつて閻魔堂で地獄極樂の有樣をまのあたりに見物させると觸れる。やがて十王や鬼が登場する。十王は鬼に命じて六道の辻へ出にのみあつて本來の日本語にはなかつたものと考へたが、明治以後、ハヒフヘホの音は、甚だ古い時代には pa pi pu pe po であつた事が明かになつた。但し遲くも平安朝に於ては、ハ行音は既にパ行音でなくなつてゐたものと考へられるから、それ以後のパ行音は、古い時代の發音が特殊の場合に殘つたものか、さもなければ外國語から輸入せられたものである。

【參考】國語音聲學 神保格 ○漢字三音考 本居宣長 ○P音考 上田萬年(國語のため所收「語學創見」の中) 〔橋本〕

半太夫 はんだいふ 「江戸節」を見よ。

半太夫節 はんだいぶし 「江戸節」を見よ。

半中節 はんちゅうぶし 「豐後節」を見よ。

災怪異等、後世の新傳の三面記事に相當するやうな事がらを見聞に任せて記し集めた書である。序跋はない。 【和田】

班女物語 はんにょものがたり 【別名】花子物狂 【成立】文中に、織部盃の事あれば、德川初世萬治頃か(近古小說解題)。「ふくろふ」「玉蟲の草子」(各別項)以後の作なる事明かである。 【諸本】古板本は「花子物狂」と題する寬文年間板。「班女物語」の題名では寫本として傳存。「近古小說解題」には、「代陲漫抄」を引き、兩書同本かと推定してあるが當つてゐる。 【題材】戀愛狂女物。謠曲「班女」に據つて作つたもの。梅若傳說とも關係がある。

伊上凡骨、獨逸人フリッツ・ルムプ・萩原守衛等も加はつた。後に永井荷風の歸朝と共に、「三田文學」同人もこれに結び、小山內薰・市川左團次等の「自由劇場」運動、武者小路實篤・有島生馬・里見弴・志賀直哉・萱野二十一等の「白樺」發刊と相應じ、こゝに當時の全青年藝術家の一大交歡の會合となり、先輩としては上田敏等も列席し、遂に文壇畫壇の中心勢力となり、所謂新日本文藝運動の狂飇時代を現出した。消滅の原因も亦或は各自の青春の喪失と會員の制限なき範圍の擴大にあつたとも云へる。 【解說】明治末期の日本詩壇に於ける佛蘭西象徵派の頽唐氣分の移入、同じく繪畫と

方法であつた反切法が、國語の語義語源の解釋上の一原則として用ひられるに至つたのである。（音學・韻鏡參照）

【參考】中國聲韻學概要 張世祿○韻鏡考 大矢透○磨光韻鏡 文雄○翻切要略 大島正健○韻鏡開奩自箋 龐宥朝○韻鏡諸鈔大成 馬場信武○韻鏡祕事大全 小鹽益英○切韻考 清陳澧○切韻指掌圖 宋司馬光○經史正音切韻指南 元劉鑑○切字肆考 清張畊

半錢（はんせん）　能狂言【解說】觸人が出て、靈夢によつて閻魔堂で地獄極樂の有樣をまのあたりに見物させると觸れる。やがて十王や鬼が登場する。十王は鬼に命じて六道の辻へ出て僧と博勞とを引立てる。十王は閻魔帳を出し、娑婆で馬を酷使した博勞に罪を宣告するが、僧は帳付がないので十王も致し方なく、然らば娑婆で受けた施物を返上せよと言ふ。僧は「げに今こそ臨濟の錄や、半錢の古則を思ひ出でたり」と諷つて、寂光淨土に送られるといふ筋。この狂言は鷺流のもので、新作らしい。半錢は「湯藥經」に曰ふ、「以二一紙半錢志一可レ願二德果一」に據つたものに相違なく、やゝ左道の名題に近い。なほ注意すべきは京都千本の閻魔堂で演ずる狂言「閻魔帳付」との關係で、確かに兩者相交通するところがあると思はれる。【瀧田】

半濁音（はんだくおん）　國語學【解說】音の種類の一つで、假名に○符（半濁音符）を添加して書き表はす音節。パピプペポの類で、ハ行以外にはない。その音節の最初の子音はpで無聲音である。この音が特に注意して他と書きわけられるやうになつたのは、江戸時代からしい。江戸時代の國學者は、この種の音は、漢語その他の外來語か、又は後世轉訛した語にのみあつて本來の日本語にはなかつたものと考へたが、明治以後、ハヒフヘホの音は、甚だ古い時代にはpa pi pu pe poであつた事が明かになつた。但し遲くも平安朝に於ては、ハ行音は既にパ行音でなくなつてゐたものと考へられるから、それ以後のパ行音は、古い時代の發音が特殊の場合に殘つたものか、さもなければ外國語から輸入せられたものである。

【參考】國語音聲學 神保格○漢字三音考 本居宣長○P音考 上田萬年（國語のため所收「語學創見」の中）　【橋本】

半太夫（はんだいふ）　「江戸節」を見よ。

半太夫節（はんだいふぶし）　「江戸節」を見よ。

半中節（はんちゅうぶし）　「豐後節」を見よ。

半陶稿（はんとうこう）　「周興」を見よ。

埴破（はにやぶり）　雅樂舞曲【名稱】埴製の玉を破つて舞ふ手があるより、この名があるといふ。【異稱】金玉舞・弄玉舞・弄玉・登玉舞【性質】高麗樂。新樂、中曲。高麗壹越調曲に屬す。舞があり、四人で舞ふ。舞人の裝束は「狛桙」（別項）と同じく特殊の袍に袴をつけ、細纓の冠をかぶり、埴土製の玉五つをふところに持ち、己の額と左右の臂と左右の膝との五ケ所に描いた巴繪に、この玉を當てながら舞ひ、後に玉を吹き破るといふ。今はこの破る手なく、土製の代りに木製の玉を用ひる。番舞には「打毬樂」を用ひる。起原・傳來、共に未詳。高麗には古くから玉を弄ぶ舞が多くあつた。これはその一つの傳來か。　【田邊】

半日閑話（はんにちかんわ）　隨筆　二十五卷　寫【著者】大田覃【諸本】卷數不定、十六卷本も流布してゐる。新百家說林第三所收。【解說】安永頃から寬政年中までに行はれた公式の規式、觸書の類、又市中の行事、奇聞異事、變災怪異等、後世の新聞の三面記事に相當するやうな事がらを見聞に任せて記し集めた書である。序跋はない。　【和田】

班女物語（はんにょものがたり）　御伽草子　三卷【別名】花子物狂【成立】文中に、織部盃の事あれば、德川初世萬治頃か（近古小說解題）。「ふくろふ」「玉蟲の草子」（各別項）以後の作なる事明かである。【諸本】古板本は「花子物狂」と題する寬文年間板。「班女物語」の題名では寫本として傳存。「近古小說解題」には、「代陲漫抄」を引き、兩書同本かと推定してあるが當つてゐる。【題材】戀愛狂女物。謠曲「班女」に據つて作つたもの。梅若傳說とも關係がある。【梗概】堀川院の頃、都北白川吉田少將是さだ勅命によつて東へ下る途次、美濃國野上の里の長者が許の花子と契を結び、互に扇を取交して別れたのち、花子は扇の主を戀ひ慕ひ、漢の班婕妤の故事に因んで班女と綽名にまで呼ばれたが、都商人の妻となることを辭んだ爲めに長者の家を逐はれ、かの扇を笹につけ狂女を裝うて京に上ると、東國よりの歸途野上を訪うて女のあらぬに失望した少將との緣盡きせず、都糺の社內で再會し、やがて梅若・松若の二子を儲けた。　【島津】

パンの會（パンのくわい）　藝術家交友の會【年代】明治四十二年より同じく四十四年頃まで。【名稱】パンは牧羊神のパンである。【經過】會員は出入自在であつて隨時に會合を催した。この會はその初め、「屋上庭園」同人木下杢太郎・長田秀雄・北原白秋、「方寸」同人石井柏亭・山本鼎・森田恒友・倉田白羊・織田一磨等の往來交友の餘に成立したものである。これに「スバル」の同人吉井勇・高村光太郎その他が加はり、從つて谷崎潤一郎、木版彫刻師伊上凡骨、獨逸人フリッツ・ルムプ・萩原守衛等も加はつた。後に永井荷風の歸朝と共に、「三田文學」同人もこれに結び、小山內薰・市川左團次等の「自由劇場」運動、武者小路實篤・有島生馬・里見弴・志賀直哉・萱野二十一等の「白樺」發刊と相應じ、こゝに當時の全青年藝術家の一大交歡の會合となり、先輩としては上田敏等も列席し、遂に文壇畫壇の中心勢力となり、所謂新日本文藝運動の狂瀾時代を現出した。消滅の原因も亦或は各自の青春の喪失と會員の制限なき範圍の擴大にあつたとも云へる。【解說】明治末期の日本詩壇に於ける佛蘭西象徵派の頽唐氣分の移入、同じく繪畫としての印象派の影響、これに南蠻風の異國趣味と江戸の享樂情調等の交錯した產物がこのパンの會であつた。未だカフェ、バア等は探すに由なき當時にあつて兩國・永代・小網町の西洋料理店に於て、恰も巴里人の如く饗宴し、小傳馬町の並倉の間にパンの大提燈を吊し、椅子に歌妓を坐らせ、さながらに和蘭・葡萄牙の紅毛の如くに振舞つたのも、パンの會の同人であつた。彼等の間より詩集「邪宗門」「食後の歌」等が生れたのも、奇異とすべきではなかつた。高村光太郎の所謂青春の爆發なるものがこれであつた。明朗にして無邪氣、激烈にして摯實、藝術論に制作に彼等は青春の熱情をも一齊に傾け盡すかの如き概があつた。會名パンが社會主義者の會合として、誤つて官憲の注視を引いたことも一再でなかつた。彼等の常に歌ふところは、白秋の「空に眞赤な雲のいろ、玻璃に眞赤な酒のいろ、なんでこの世がかなしかろ、空に眞赤な雲のいろ」の小唄であつた。思ふに彼等こそは、大正・昭和に於ける藝苑の、それ〴〵の中心勢力を作つ

た者であり、一面にその餘波として鴻の巣・プランタン等の新様のカフェ時代を促進する機運を作つたものと云へる。　〔北原〕

汎美論（はんびろん）　藝術論　〔英〕Pancalism. 〔獨〕Panästhetizismus　【解説】汎美主義とも云ふ。一種の形而上學的美論であつて、古くは新プラトン學派プロティノスの美學思想に見られ、美の本質、美の本體は普く實在世界にゆき亙つてゐるとする考。十九世紀ローマン派哲學の中、シェリングの美學思想に於ても、世界の一切の形式は美的形式を基礎として構成されるとする考がある。これとは別に、今世紀に入つて、アメリカの倫理學者ボールドウィンは、吾人の實在世界の把握、即ち實在の認識の態度に關して、美的對象を鑑賞する時のやうな態度を以て實在に對する場合が最も妥當であるべきことを主張してゐる。なほ美學者デッソアールも唯美主義的認識の特性に就いて論じてゐる。　〔村田〕

【參考】Dessoir : *Aesthetik u. allg. K. W.* ‖ J. M. Baldwin : *Genetic Theory of Reality.* 1915. ‖ H. Glockner : *Aesthetizismen.* (*Logos. Bd. II. Heft. 2*)

○汎美論とは何ぞや吉田靜致（哲學雜誌三九一）

半母音（はんぼいん）　「母音」を見よ。

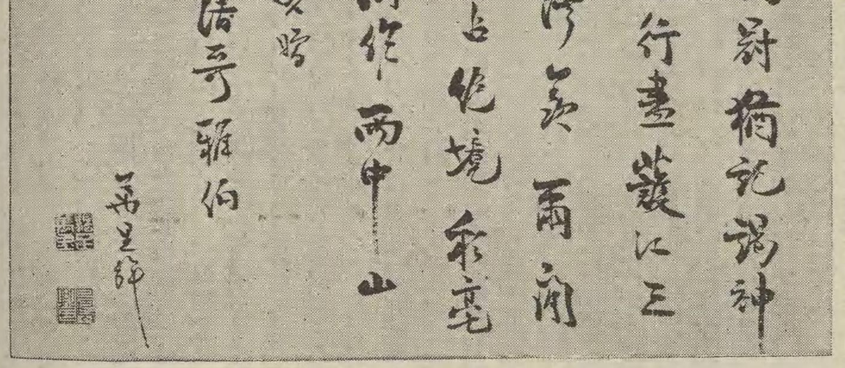
坂正臣（ばんまさおみ）　歌人　【姓】坂と書くのが正しいが、宮内省で阪の字を用ひたので、この方も通用されてゐる。【號】樅之舍・茅田　【生歿】昭和六年八月二十五日歿す。享年七十七　【閲歴】父は正緒、母は側室とも子。父の晩年（六十一歳）の子で、六歳父に別れ、七歳手習を始め、八歳初めて歌を詠む。十六歳歌を富樫廣厚に學び、十九歳上京、平田鐵胤の塾に入り、次いで綾田直勳に學ぶ。鎌倉宮・皇太神宮等に歴任し、又侍從屬・宮内屬、東京女學館・華族女學校教授等に歴任し、明治三十年十二月御歌所寄人、同四十年御歌所主事となり、その間、皇族貴顯に歌及び書を教授すること多年、大正十四年六月勅任官待遇となる。著作に「三拙集」（歌と書と畫）がある。現代短歌全集第二卷坂正臣集に二百數十首が收められた。

「まつはるゝ藤の花のみなびきつゝ松には風の音たえにけり」の如く温雅な歌であるが、平明のうちに智巧的な點が見られる。　〔相原〕

半面（はんめん）　俳誌　【刊行】明治三十四年八月創刊。【成立】岡野知十を盟主とし、その門下雀會一派を中心としたもので、俳諧の史的方面の研究並に人事に就いての作句を研究すべき趣旨の下に生れ、なほ當時の俳句界に新々派の俳調を鼓吹する事を以て自ら標榜したが、永く續かずして廢刊した。　〔伊藤〕

判物（はんもつ）　古文書　【解説】足利氏以後、將軍以下の武將が領知等の證據として下附する書判を据ゑた文書。樣式は御判御教書（別項）或はそれに准ずる武將等の文書と同じものである。江戸時代には十萬石以上の領知には判物、それ以下には朱印狀（別項）を以て出した。所謂領知判物で、これには新知もあれば安堵もあつた。　〔伊木〕

萬里（ばんり）　漢學者　【姓名】帆足氏。諱は萬里。字は鵬卿、通稱里吉（一說に小介）。私諡して文簡先生といふ。【號】愚亭　【生歿】安永七年豐後日出に生れ、嘉永五年（二五二）六月十四日同所に歿す。享年七十五　【墓所】日出城の北、康德山松屋寺【家系】少納言清原正高に出で、父通文（典膳）は日出藩の家臣であつた。【閲歴】少年時代から穎才嶷嶷で、十四の時、寛政三年で、同郡小浦の脇邊山の門に入つて漢籍を學んだ。二十一歳（寛政十年）の時、父に從つて大阪へ行き、中井竹山の門に入つたが間もなく歸國し、享和元年（二十四歳）筑前へ行つて龜井南冥に會ひ、翌年京都へ行き皆川淇園に會つた。文化元年（二十七歳）日出藩に藩の學校が出來、萬里は拔擢せられてその教授になつた。又この頃から家塾を開いて子弟を教育した。爾後專ら學問に從つてゐたが、天保三年（五十五歳）家老に任ぜられたので、門生を謝絶して藩政に力を注いだ。同六年家老を辭し再び家塾を開いた。天保十三年日出城の西、日刈村に簡素な別邸を營み、西峰精舍と號し、こゝに移つて門生を導いてゐた。嘉永四年病に罹つたので、日出の舊宅に歸り、翌五年六月に歿した。



帆足萬里筆蹟（高野辰之氏藏）

【著書】帆足萬里全集上下二卷（大正十五年六月刊）○假字考一卷（嘉永二年刊。假字文字の成立、定家の假名遣、漢字の四聲、悉曇の三聲、支那・印度・和蘭の音韻、漢音・吳音等の事を簡單に記したもの。全集上卷）○大學標註一卷（嘉永五年刊）○論語標註十卷○孟子標註七卷○中庸標註一卷○書經標註六卷○周易標註二十四卷○春秋左氏傳標註十三卷○荀子標註十五卷○莊子解十七卷○呂氏春秋標註二十六卷　○國語標註五卷（以上全集下卷）（この外、詩經・禮記・小學・楚辭・列子の標註、四大家詩選評があるが所在不明）○入學新論三卷附錄一卷（佛教・儒教・神道等の長短を論じたもの）○東潛夫論三卷（王室・覇府・諸侯の政治上の位置及び關係を論ず）○窮理通八卷（天文・地文等所謂窮理の研究）○修辭通一卷○三教大意一卷（儒佛神の大意を記す）○醫學啓蒙一卷○言行錄評一卷（宋名臣言行錄の批評）○日出孝子傳一卷○肆業餘稿○帆足先生文集三卷（弘化四年刊）○西崦先生餘稿二卷（帆足先生文集補遺）（以上全集上卷）○首楞嚴經註○醫斷等。

【業績】漢學を專門としてゐたが、又日本の古典にも通じ、佛學も相當研究してゐた。又四十歳頃から和蘭語を獨學し、洋學にも通じた。又家老になつて藩政に携はつた頃、一般の武士が數學に通ぜず、爲めに財政に暗く、その議論が空疎に流れるのを慨して、自ら算數の事を學んだ。かくの如くその學問は頗る博いが、常に實用を重んじ、單なる學問のための學問は重要視しなかつた。萬里は早くから尊王愛國の志が盛んであつたが、弘化四年に京都へ上り、東福寺内に寓して京都に大學を設け、

大に文教を興し、皇室の基礎を固めようと計つた事がある。又嘉永三年には門人野本白巖をして外交に關する政策を水戸烈公に獻ぜしめようとした。但し兩者共成功しなかつた。

明治四十五年二月從四位を贈られた。　〔藤田〕

【參考】帆足萬里先生年譜○帆足萬里全集卷頭）

萬里集九（ばんりしゅうく）　「集九」を見よ。

ひ

美（び）　美學　〔獨〕Das Schöne　【解説】美

美 び 美學【獨】Das Schöne【解說】美といふ語は、一は「美的」(Das Aesthetische)と同義に用ひられ(美的參照)、一はこの美的の一標德として用ひられる(美的標德參照)。今こゝでは、この兩義に通ずる意味で解すると、我が古語では「うつくし」は「愛らしい」を意味する「いつくし」の轉で、この「いつくし」の「いつく」は「大切にする」といふ意味で、それは「汚穢を去つて神などに仕へる」意味の「潔み付く」から由來してゐるらしい。また味よきを意味する「うまし」とも同義に用ひられてゐるが、支那の「美」といふ字も、「羊」と「大」とが合して出來た字で、「味よき」の意から生じてゐる。フィッシャー(Theodor Vischer)によるとギリシャ語で美しいといふ意味の「カロス」(καλός)は、梵語の「健全な」又は「愉快な」といふ意味の「カルヤス」(Kal-ja-s)といふ語から由來してゐるらしく、併し今日のギリシャでは、「カロス」は美と善の中間の意で、「正しい」といふ意味で使はれてゐる。それで現代のギリシャでは美しいといふ意味の話としては、「ユーモルフォス」(εὐμορφος)といふ語が用ひられてゐるが、それは又「形のよい」とか、「圓滿した」とか、「順調にできた」とかいふ意味をもつてゐる。ラテン語の「美しい」といふ意の「ベルス」(Bellus)といふ話は、「ベヌス」(benus)又は「ボヌス」(bonus)に由來する「ベヌルス」(benulus)といふ話から出たらしい。この「ベヌルス」といふ話は、「清楚な」「整然たる」又は「愛らしい」といふ如き意味をもつてゐる。佛語の「ボー」(beau)、英語の「ビューティフル」(beautiful)はこゝから生ずる。また英語で同じく美しいといふ意味の「フェーア」(fair)は、アングロサクソンの「フェーガー」(fæger, fagar)から出た話で、この原語は「明晰な」「潔白な」「白い」「明るい」「輝ける」等の意味をもつてゐる。濁語の美しいといふ意の「シェーン」(schön)の語源は、「觀る」といふ意の「スカン」(skan)といふ話で、これはゴス族の「スカヴャ」(skavja)、古代純ドイツに「スクーヲーム」(scouwŏm)から來た話で、もと「眼に見える」「明晰な」「明るい」「輝ける」等を意味してゐる。それが「鼠に入つたもの」「整つた形」の意味をもち、また「輝ける」意味から「理想的な」といふ意味を含むに至る。又「晴天」(heller Tage)を「美しい天氣」(schöner Tage)といひ、「清酒」(klarer Wein)を「美しい酒」(schöner Wein)といふ。又道德的に「善き魂」(gute Seele)を「美しい魂」(schöne Seele)といふ。支那でも、「心の善き人」をも「美人」といひ、單に貌だけよき「佳人」と區別する場合に、美といふ話が用ひられてゐる。我が國に於ても同樣である。例へば、「美しい心をもつ人だ」といふ。かくの如く、「美」といふ話は、その語源上、多く今日用ひらるゝ意味よりも、それはただ美といふ話の種々なる意味の通有性を示しただけで、「美」といふ意味で他の意味から轉化したもとの意味、又は「美」から轉化した他の意味との區別は明かにならぬ。即ち「美」といふ言語の意味が、上述の如く、如何に多數に用ひられ、又擴張されなければならぬにしても、この「美」といふ概念又は事實が、他の概念や事實と區別さるゝ所以のものは何か。この「美」とは何ぞやといふ問題を研究する學が即ち美學である。而も美學には種々なる認識方法がある(美學方法論參照)。隨つて又、この美なるものについての學說も極めて多樣である(美的自律性・美的法則性參照)。

【參考】Vischer, Th.: *Das Schöne und die Kunst, heraus. v. R. Vischer 2A. Stuttg. 1898.* 〔渡邊〕

悲哀美 ひあいび 「悲壯美」を見よ。

美意識 びいしき 美學【獨】Aesthetisches Bewusstsein【名義】この語は「意識」の意味によつて二樣に解されてゐる。一は先驗的意識の意味であり、一は經驗的意識の意味である。

前者の意味ではコーェン(Cohen)がこれを用ひてゐる。それは現象的美學の對象たる美的經驗の意味に近い。ただ現象的美學は、これの經驗を記述しようとするが、コーェンのではこれを條理する法則性を見出さうとするのである(美的法則性參照)。併し一般には後者の意味、即ち經驗的意味に於ていはるゝ時、美意識といふ話が用ひられる。それは美を享受する場合、又はこれを創作する場合の心理的意識をいふ。即ちフェヒナー(Fechner)の美的聯想說、ハルトゥマン(Hartmann)の假象說、グロース(Groos)の內的摸倣說、ランゲ(Lange)の幻覺說、リップス(Lipps)、フォルケルト(Volkelt)の感情移入說別項等は、何れもこの美意識論である。

【學說】フェヒナーによれば、吾々が或る對象を美として意識するのは、そこに聯想作用が働くからである。例へばこゝに一つの林檎があるとする。それを吾々が美しいものとしてでなく、その林檎について聯想された印象を意識するのは、その色や形の感官的印象だけでも美と感ずるのである。即ち精神的にはその香味とかその實を結んだ美しい樹木、又は美しい土地、美しい空を聯想するからである。即ち事物の直接印象とそれについての聯想が一致するか否かによつて、美的な好適・不好適が定まる。更に又自然の具體的な對象のみならず、色・形・位置の如き單なる感官的性質にも、その直接印象と聯想とが結合する。例へば黃色は砂漠や刈田を、圓形は丸天井を、水平な位置は眠れる人を聯想させる。又想像といふのもこの聯想が材料となつてゐる。即ち以前に意識したものが何等かの結合によつて再び意識に現れ、聯想要素が新たな結合を得

ひ

萬里集九 ばんりしゅうきゅう 「集九」を見よ。

萬里傳 ばんりでん 帆足文簡先生墓碑銘(帆足萬里全集卷頭)

【參考】帆足萬里先生年譜(帆足萬里先生小傳)

明治四十五年二月從四位を贈られた。〔藤田〕

めようとした。但し兩者共成功しなかつた。

をして外交に關する改策を水戶烈公に獻ぜしつた事がある。又嘉永三年には門人野本白巖

的な意味に於ても一般に多義である。併し概して何等かの意味で「好適する」(gefallen【獨】please【英】plaire【佛】)の意に於て相通じてゐる。また一方、この「好適」の語は「美しい」といふ言葉に見る如く、在來用ひられた「美しい」といふ意味以外の言葉も、藝術品殊に近代の藝術品の批評に用ひられることがあるが、これとてもやはり、何等かの意味で感情上意義をもつことを示す點に於て、在來の「美」といふ話の意味の內容が擴張されて來たものと見ることができる。併しかく言つても、それはただ美といふ話の種々なる意味の通有性を示しただけで、「美」といふ意味で他の意味から轉化したもとの意味、又は「美」から轉化した他の意味との區別は明かにならぬ。即ち「美」といふ言語の意味が、上述の如く、如何に多數に用ひられ、又擴張されなければならぬにしても、この「美」といふ概念又は事實が、他の概念や事實と區別さるゝ所以のものは何か。この「美」とは何ぞやといふ問題を研究する學が即ち美學である。而も美學には種々なる認識方法がある(美學方法論參照)。隨つて又、この美なるものについての學說も極めて多樣である(美的自律性・美的法則性參照)。

【參考】Vischer, Th.: *Das Schöne und die Kunst, heraus. v. R. Vischer 2A. Stuttg. 1898.* 〔渡邊〕

悲哀美 ひあいび 「悲壯美」を見よ。

美意識 びいしき 美學【獨】Aesthetisches Bewusstsein【名義】この語は「意識」の意味によつて二樣に解されてゐる。一は先驗的意識の意味であり、一は經驗的意識の意味である。

前者の意味ではコーェン(Cohen)がこれを用ひてゐる。それは現象的美學の對象たる美的經驗の意味に近い。ただ現象的美學は、これの經驗を記述しようとするが、コーェンのではこれを條理する法則性を見出さうとするのである(美的法則性參照)。併し一般には後者の意味、即ち經驗的意味に於ていはるゝ時、美意識といふ話が用ひられる。それは美を享受する場合、又はこれを創作する場合の心理的意識をいふ。即ちフェヒナー(Fechner)の美的聯想說、ハルトゥマン(Hartmann)の假象說、グロース(Groos)の內的摸倣說、ランゲ(Lange)の幻覺說、リップス(Lipps)、フォルケルト(Volkelt)の感情移入說別項等は、何れもこの美意識論である。

【學說】フェヒナーによれば、吾々が或る對象を美として意識するのは、そこに聯想作用が働くからである。例へばこゝに一つの林檎があるとする。それを吾々が美しいものとしてでなく、その林檎について聯想された印象を意識するのは、その色や形の感官的印象だけでも美と感ずるのである。即ち精神的にはその香味とかその實を結んだ美しい樹木、又は美しい土地、美しい空を聯想するからである。即ち事物の直接印象とそれについての聯想が一致するか否かによつて、美的な好適・不好適が定まる。更に又自然の具體的な對象のみならず、色・形・位置の如き單なる感官的性質にも、その直接印象と聯想とが結合する。例へば黃色は砂漠や刈田を、圓形は丸天井を、水平な位置は眠れる人を聯想させる。又想像といふのもこの聯想が材料となつてゐる。即ち以前に意識したものが何等かの結合によつて再び意識に現れ、聯想要素が新たな結合を得

たものに過ぎぬ。又古城の廢址の美しさもこの聯想によつて成立する。ハルトゥマンによれば、美は客觀的事物自身にあるのでもなく、事物と離れた主觀的心理作用にあるのでもない。美は主觀的現象ではあるが、單なる觀者の産物でもなく、事物の産物でもなく、この兩者の共作用の事實の産物である。隨つて美は事物の表面にあり、見かけにある。卽ち假象(Schein)にある。例へば詩歌の美は想像の假象にあり、音樂の美は耳の假象にあり、造形藝術の美は眼の假象の中にある。理論的態度は事物自身の性質に係るものであり、實際的態度は事物自身の上に働きかけるものであるが、美はかゝる現實的事物を問題としない。併しそれは主觀的現實性であるから、虛妄を意味する幻覺(Illusion)ではなく、現存する意識内容としての觀念的な現實性である。又それは理知的で感情をもたぬ意味の直觀でもない。上述の如く假象はこれを生じた現實の客觀的原因から抽象分離されるが、それと同時に、又これを産む主觀的作用からも分離する。卽ち事物の客觀的現實性からも觀者の主觀的現實性からも分離する時、始めて純粹の美的假象となる。併しこの場合もやはり單なる幻覺ではない。この美的假象の心理作用が美的感情であつて、美的假象が實感と離れてゐる如く、美的假象感情も亦實際感情や現實と分離してゐる。實際感情は急速に變化し得る心理的特質をもつ。隨つて又この假象感情には、現實の自我が關係するのではない。現實から離れた假象自我が客觀のうちに投入されるのである。故にこの客觀も亦現實の客觀でなく、美的假象の客觀である。かゝる假象を味ふ美的享受は、現實的快感情である。隨つてそれは持久的で強い。併しこの美についての快感は、單なる感官的快感とは異なる。この現實的美的快感は、假象感情と共に假象のうちに投入されるので、その快感も假象に伴はれてゐる客觀として享受される。かくの如く現實主觀の快感が現實と離れて假象のうちに投入さるゝことは一の幻覺であるといへる。而して美的假象や美的感情の場合には現實的自我は無くなるが、美的快感には現實的自我が殘る。併しそれは主觀になく、客觀にあるものとして幻覺されるので、實際的自我や理論的自我ではない。隨つて現實的快感が客觀に投入されるといふことは第一の幻覺で、その際同じく客觀に投入された假象自我や假象が、現實的自我や實際的感情と融合されることが第二の幻覺である。併し實際ではこの二つの幻覺は一の幻覺として現れる。グロースによれば、假象とは意識上の事實であり、この假象に集中する意識は一の活動に外ならぬ。この活動とは外的に與へられたるものを内的に摸倣することである。この内的に摸倣するといふことが一切の美的享受の核心である。例へば吾々がファウストの言葉を聽く時、吾々はそれを外からの詩人の語としてでなく、吾々自身の心から出たもののやうに感ずる。卽ち言語によつて傳へられたファウストの精神狀態を、吾々が内的に摸倣するのである。かゝる内的摸倣は動的な形式のみならず、靜的な形式に對しても行はれる。例へば瞼皰な山脈の形が内的に摸倣さるゝ時は、その山脈が大膽な力强い精神に充たされることになる。故に一切の假象もこの内的摸倣の活動のうちに成立する。卽ちその内的摸倣(Innere Nachahmung)の活動が永く持續し、且つ强くして意識の頂點となつて、自我の投射や一切の表象や感情を十分活動させ得る程になると、美的假象が成立する。ランゲによれば、藝術享受が料理などの享受と異なる點は、後者が生理的享受なるに反して前者が心理的享受なる點にある。この藝術の心理的過程の特質は、幻覺(Illusion)にある。この幻覺には、三種ある。第一が直觀幻覺(Anschauungsillusion)であり、これは繪畫に於て現れるもので、例へば繪畫上死んでゐるものを生きてゐるやうに感ずる幻覺がこれである。第二は感情幻覺(Gefühlsillusion)、又は情調幻覺(Stimmungsillusion)であり、これは音樂に於て現れる。卽ち單なる音の結合關係によつて、一定の感情乃至情調が幻覺される。第三は運動及び力の幻覺(Bewegungs und Kraftillusion)で、これ等の現象は觀者の純粹の精神的作用で、表象の純粹遊戲である故に幻覺である。隨つて又美的快感は内容の性質や形式の性質によるのでなく、この幻覺の强さ、激刺さに基く。或はかかる心理的過程を感情移入(Einfühlung)によつて説くものもあるが、感情移入といふことは、觀者の愉快な又は倫理的に價値ある感情を觀察された客觀物のうちに移入し、これと同一視する作用であるが、幻覺説は客觀物の性質を觀者自身の精神に關係させずに無關心的に觀察するので、不愉快なものでも醜いものでも、倫理に無關係の客觀を觀察する場合でも必當するものである。リップスによれば、美的對象では、感官的のものが何等かの精神的内容の象徴となつてゐる。然るに内的狀態を示す人間の一切の運動は、或る意味でその内的狀態の象徴であり、表現運動である。隨つて吾々は他人の運動にも内的狀態を與へて自らこれを體驗する。例へば他人が顔を歪めるのを吾々が見る時、その人の内的狀態の苦痛を認める。かやうに吾々が他人の内的狀態を認めるといふことは、その人の狀態を吾々が内的に摸倣することを意味する。併しかやうに内的に摸倣し得る場合は、それが吾々の性質に適合する時に限られる。かゝる意味の對象の摸倣作用が感情移入の作用である。卽ち外的摸倣の場合には摸倣するものと摸倣さるゝものとが並列するが、この内的摸倣では摸倣するものと摸倣されるものとが一致してその間の區別がない。かやうに吾々が體驗する對象のうちに全く沈潛する時、移入作用が完全に行はれ、玆に美的感情移入が成立する。フォルケルトによれば、一切の美意識には第一に感官的知覺が伴ふ。この知覺に要する主要な感覺は視覺と聽覺とで、その他の下等感覺も感官性を豐かにはするが、それだけでは美意識を作ることができぬ。第二に美意識には感覺の外に對象の意味表象が現れる。例へば繪では事物表象、音樂では情調表象が現れる。この意味表象が感官的知覺と結合して美的に意味をもつことになる。又この意味表象は聯想表象によつて補はれる。例へば繪に於て物語が聯想表象となつて現れる。この聯想表象のうちでも、クリストの十字架の繪を見る場合のやうに豫備知識を要するものと、風俗畫に於けるが如く表現されてゐるものの何等かの補充をなすものと、抒情詩に於けるが如くそこに表示されてゐないそれ以上の情調を想像によつて生ずるものとがある。この最後のものが、美意識に對して最も密接なも

のである。これを遊動的表象(Umspielende Vorstellung)といふ。これ等は何れも現實表象であるが、その他非現實的表象がある。卽ち現實的に意味するものより他の内容をもつ表象で、これは象徴的表象といはれる。この象徴的表象のうちでも比喩の如き場合と、ファウストの如くその表象内容が典型的意味をもつ場合と、音樂に於けるが如くその内容が一定の人間の行爲の形とならずに情調となる場合とがある。この最後の象徴的表象は情調象徴(Stimmungssymbolik)といふ。上述の如き知覺・表象のみならず、又感情が美意識に現れる。この美的感情には、小説の主人公に吾々の感情を投入しながらも、これをその主情移入である。このうち獨自的感情移入は、吾々が人の顔付や高聲によつてその人の内的生活を知る場合の如く、實生活上にも現れる。併し美的の場合には、第一にこの移入が特に高められる。卽ち生活上ではその一部を示して内的生活を暗示させるが、美的の場合には一切の部分によつて表示する。第二に美的の場合の移入は完全である。卽ち人の顔付などで移入する場合には、その人の性格についての知識が必要であるが、美的の場合ではかゝる知識は意識されぬ。又この美的感情には、繪を見る場合の如く主觀的方面が注意されずに移入されたものが、對象の内容として意識に現れる場合と、音樂を聽く場合の如く移入

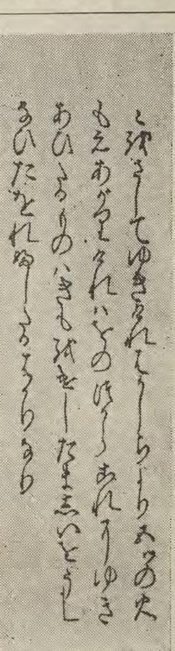
Volkelt, J.: System der Aesthetik. Bd. I. 1905.

〔淺香〕

飛雲(ひうん)「鬼神物の諸曲」を見よ。

火おけのさうし 物語 二卷 【作者】不詳【成立】不詳。江戸初期か。【諸本】刊本二卷あり。奥に、「寛文六丙午年八月吉日松會開板」とある。

【梗概】昔ある片田舍に、柴の庵を結んで翁と姥が住んでゐた。翁は明暮火桶を抱いて歌を



姥を打擲し、故事をひきなどして調戯する。姥が答へて火事が恐しいといふと、火事などは恐るゝに足らぬ、一筋に往生を願むべきである。それにつけても心ある人は歌を詠むものであるとて、樣々の例をひき己の歌も示す。姥は又橋姫の事などひいて辯解し、自分も亦歌を詠むことを示して、こゝに和解する。かくて何事も電光朝露の如きであるから、すべてを棄てて來世を願ふべきであると唱和して終つてゐる。 〔大野木〕

鼻音(びおん)「音聲」を見よ。

檜垣(ひがき)「老女物の謠曲」を見よ。

繪垣巡(ひがきのめぐり) 歌人

のである。これを激動的表象（Umpiellande Vorstellung）といふ。これ等は何れも現實表象であるが、その他非現實的表象がある。即ち現實的に意味するものより他の内容をもつ表象で、これは象徴的表象といはれる。この象徴的表象のうちでも比喩の如き場合と、ファウストの如くその表象内容が典型的意味をもつ場合と、音樂に於けるが如くその内容が一定の人間の行爲の形とならずに情調となる場合とがある。この最後の象徴的表象は情調象徴（Stimmungssymbolik）といふ。上述の如き知覺・表象のみならず、又感情が美意識に現れる。この美的感情には、小説の主人公に吾々の感情を投入しながらも、これをその主人公の感情として感ずる對象的感情（Gegenständliches Gefühl）と、その主人公に同情する讀者の人格的感情（Persönliches Gefühl）と、その小説を讀んだ後でそれによつて解放され高められるゝ狀態感情（Zustandsgefühl）とがある。以上の如き感情と表象と知覺とが交互關係して美意識を作る。即ち對象的感情は吾々のうちに於ける過程ではあるが、それが對象に投入さるゝことによつて、この感情と知覺又は表象された對象とが、内的に統一されて美意識が成立する。この統一の心理作用を美的移入（Aesthetisches Einfühlen）といふ。この美的移入には獨自的なものと象徴的なものとがある。そのうち美的に重要なものは、情調の象徴的感情移入で、これを情調象徴的感情移入（Stimmungssymbolische Einfühlung）といふ。その移入さるゝ情調は何れも人間的である。この人間的情調が人間的對象のうちに投入さるゝのが獨自的感情移入であり、非人間に投入さるゝ場合が象徴的感情移入である。このうち獨自的感情移入は、吾々が人の顔付や高聲によつてその人の内的生活を知る場合の如く、實生活上にも現れる。併し美的の場合には、第一にこの移入が特に高められる。即ち生活上ではその一部を示して内的生活を暗示させるが、美的の場合には一切の部分によつて表示する。第二に美的の場合の移入は完全である。即ち人の顔付などで移入する場合には、その人の性格についての知識が必要であるが、美的の場合ではかゝる知識は意識されぬ。又この美的感情には、繪を見る場合の如く主觀的方面が注意されずに移入されたものが、對象の内容として意識に現れる場合と、音樂を聽く場合の如く移入されたものが自我の體驗として意識される場合とがある。前者が單純の感情移入、後者が主觀強調的の感情移入で、この兩者は相互に關係して現れる。次に象徴的感情移入には、感官的知覺と知覺の固有の意味との融合、並に非固有の意味との融合が見られるが、こゝに問題となるのは、その後者の場合即ち情調象徴的感情移入の場合である。例へば菩提樹が高貴な生命の表現として現れるならば、その感官的知覺が、その知覺された對象には非固有な意味表象と結合してゐる。動物に對する移入は、この象徴移入から獨自的移入に移る過程である。併し又人間自身もその色や形の外相に移入する場合には、象徴的移入の對象ともなる。

【參考】Fechner, Th.: *Vorschule der Aesthetik.* 2 Teil. 1887. ‖ Groos, K.: *Einleitung in die Aesthetik.* 1889. ‖ Lipps, Th.: *Aesthetik.* 1 Teil. 1903. ‖ Volkelt, J.: *System der Aesthetik.* Bd. I. 1905. 〔渡邊〕

飛雲（ひうん）「鬼神物の謠曲」を見よ。

火おけのさうし　物語　二卷【作者】不詳【成立】不詳。江戸初期か。【諸本】刊本二卷あり。奥に、「寛文六丙午年八月吉日松會開板」とある。

【梗概】昔ある片田舍に、柴の庵を結んで翁と姥が住んでゐた。翁は明暮火桶を抱いて歌を

火おけのさうし（小田久太郎氏藏）

よんだりしてゐるので、姥は嫉んで翁の留守の間にその火桶を割つて了ふと、不思議にも赤い血が迸つた。翁は歸つて來て大に怒り、姥を打擲し故事をひきなどして諷諫する。姥が答へて火事が恐しいといふと、火事などは恐るゝに足らぬ、一筋に往生を願むべきであるとて、様々の例をひき己の歌も示す。それにつけても心ある人は歌を詠むものである。姥は又橋姫の事などひいて辯解し、自分も亦歌を詠むことを示して、こゝに和解する。かくて何事も電光朝露の如きであるから、すべてを棄てて來世を願ふべきであると唱和して終つてゐる。〔大野木〕

鼻音（びおん）「音聲」を見よ。

檜垣（ひがき）「老女物の謠曲」を見よ。

檜垣嫗（ひがきのおうな）　歌人【稱呼】檜垣のある家に住んでゐた爲めと、老齡を歎じた歌が世に知られてゐるためであらう。【閲歷】筑紫の白川の邊りに住んでゐたが、大貳藤原興範がその家の前を通つて水を乞うた時、老齡を歎じて歌をよんだ（後撰集卷十七）。興範は延喜十一年參議に任じ、大貳を兼ねてゐる（公卿補任）ので、嫗はその頃既に老齡であつたことがわかる。然るに「大和物語」には、純友の亂（延喜より三十年の後）に住居も家財も燒かれ、討手の使、野大貳（小野好古）に見舞はれたとあり、「檜垣集」には清原元輔が寛和二年（延喜より七十餘年の後）肥後守に任じて下つた時、嫗に逢つたとある。「大和物語」は「後

撰集」から醸案した事が明かであり、元輔と結びつけたのは、嫗の歌が元輔以下の撰した「後撰集」に見え、元輔が偶々肥後守であつた爲めであることも察せられる。但し中島廣足は家集を信じ、「後撰集」は成立の確かなものでないとの理由から認めまいとしてゐるが無理である。清輔の「袋草紙」三には、肥後國の遊君檜垣とし、現存の「檜垣集」と同一のものであらうと思はれるものを引用してゐる。【遺跡】天明三年の春、肥後國飽田郡白川の邊、岩殿山觀音の巖窟から一個の石匣が發見され、中から檜垣女形自作と六字を彫つた小さな像が出てきた(西遊記・一話一言)といはれ、廣足はこの像及び石匣を實見し、その圖をその著「檜垣家集補註」に掲げてゐる。【遺跡】天明三年の春、肥後國飽田郡白川の邊、岩殿山觀音の巖窟から一個の石匣が發見され、中から檜垣女形自作と六字を彫つた小さな像が出てきた(西遊記・一話一言)といはれ、廣足はこの像及び石匣を實見し、その圖をその著「檜垣家集補註」に掲げてゐる。檜垣の墓も同郡九品山蓮臺寺にあり、一時は加藤廣忠によつて城中に移されてゐたが、再びもとの所に收められ、廣足はその圖をその著に掲げてゐる。【作品】家集に「檜垣家集」一卷がある。僅か三十一首を含むのみであるが、何れも長い詞書をもつてゐる。傳本には扶桑拾葉集本・群書類從本・檜垣家集補註本などがある。類從本は拾葉集本を以て校合してをり、補註は蓮臺寺本・井澤長秀の冠註本・類從本・拾葉集本・村井氏本・契沖自筆書入本・自家本の七本を以て本文を考へ、井澤氏の解說並に冠註を補註したものである。解說の奥に文政七年とあり、長崎にて出版したのである。圖書寮所藏の一本には、最後の歌「さゝれ石の」がなく、前記諸本には「ある本この歌あり」との註がある。類從本には元久の奥書があり、清輔も家集を見てゐるから、本集の成立は相當に古いことが分る。【作風】その歌は、拘束されないで自由に歌ふたものが多い。「萬葉集」の餘韻は見出されないが、京から下つてくる役人を相手に、遊女の身をもつて歌つた歌の殘つてゐるのは興味多いことである。「古今集」には遊女自女の歌があるが、家集まである遊女は外に例がない。

【參考】大和物語○西遊記○廣益俗說辨　井澤長秀○玉勝間○本居宣長○檜垣家集補註　中島廣足　【西下】

美學（びがく）　【獨】Aesthetik【英】Aesthetics, Esthetics【佛】Esthétique.【語義】美的なるもの、卽ち美並に藝術を對象とする科學の總稱。この原語の語源は、ギリシヤ語のエイスタネステ(αἰσθάνεσθαι)といふ感覺又は知覺を意味する語に由來するといはれてゐる。然るに理性の求むる眞、意志の求むる善に對して、感覺の目的は美であるといふ考から、一七五〇年、獨のバウムガルテン(Baumgarten)が美についての研究を著はして、その書名を「エステティーカ」(Aesthetica)と稱した。これが今日意味する美學の嚆矢である。それ以後、カントが哲學上感性の先驗的形式論を「先驗的感性論」(Die transscendentale Aesthetik)と稱して、この「エステーティーク」の語を用ひ、それが又これに關する哲學上の研究にこの感性論の意味に用ひらるゝ外は、バウムガルテンの用ひた美學の意味に用ひられて今日に至る。もとよりバウムガルテン以前に於てギリシヤ哲學の初めから、又東洋に於ても美についての理論はあつたが、これが一の科學として主張される意味に於て、特にこの語が用ひられたのはバウムガルテン以後である。この意味からバウムガルテンは美學の創立者であるとされてゐる。我が國では初め審美學と譯されてゐた。隨つて又科學の意味を單に知識一般として解する時は、謝赫の六法でも、貫之の歌論でも、オスカー・ワイルドやトルストイの藝術論でも美學となるが、嚴密な意味に於ては第一に理論的、第二に批判的、第三に系統的知識でない限り、美的なるものについての知識であつても美學といふことはできぬ。卽ち單に美といつても、或る花が美しいといふ時、それはこの花が紅いといふ時と異なつて、その花のあるがまゝの性質について判斷してゐるのでなく、そのあるがまゝの花、卽ち紅い花が醜いのでなく、美しいものとして一種の價値を與へて判斷してゐるやうに考へられる。かくすると或る人物が善い人であるといふ場合の如き、人格的な價値とそれは同一のものか又は異なつてゐるものかなどといふ問題が生ずる。又或る花が美しいといふ時、そこに一種の快感が感ぜられる。併しその快感は、運動をした時の快感とは異なつてゐるやうに見える。こゝに美的な快感とは如何なるものかといふやうな問題が起る。凡てかくの如く、種々なる意味に於て美的なるものとは何かといふ問題を批判的に系統的に明かにする理論が美學で、これが最も一般的な美學の概念である。併しそれだけでは單に種々なる美學の通有性を示すに止まる。美學の通有性といふよりも美學を究めようとする要求の限定に過ぎぬ。同じくかゝる要求に基いても、これを哲學的に考へる事もでき、又心理學的に觀察する事もできる。そして何れが眞の美學であるかといふ問題が生ずる。こゝに美學の方法の問題が生ずる。

【美學の對象】學としての美學は何を對象とすべきかは、美學そのものの認識論的重要問題であり、「美」の概念規定、或は方法論上の諸説を生んだ。哲學者・心理學者、或は社會科學者等の各方面それ〴〵の問題である。(美・藝術學・美學・美學方法論・美學史參照)　【渡邊・村田】

比較言語學（ひかくげんごがく）　言語學【英】Comparative philology【解說】言語學(別項)中の一部分。國語又は方言を二つ以上採つて相互比較する研究をいふ。所謂言語の歷史的研究も、同一國語(又は方言)の二つ以上の時代を採つて相互比較するのであるから、廣い意味では比較研究の中に入るわけであるが、通常比較研究といへば、異なる國語又は方言につき、成るべく同時代のものを比較する意味に使ひ、殊に同一系統に屬する親近語の比較の意に多く使ふ。(言語學參照)　【神保】

美學史（びがくし）　【獨】Geschichte d. Aesthetik.【英】History of Aesthetics.【解說】美學の事實上の發展を明かにする學問一般を云ふが、實際種々の美學史を觀るに、その敍述乃至組織の上に種々なる特色や相違がある。蓋し美學史の對象たる美學の概念の解釋の仕方や、美學史の方法の相違等に因るからである。次に便宜上美學史を三種九樣に分類して觀る。(一)美學の概念の解釋に廣狹があり、その點から更にこれを分類すれば、(イ)藝術作品の形式内容、或は文化一般を對象とし、それから推して、美的思想、一般の藝術思想の發展を求め記述するところの謂はゆる美的思想史ともいふべき美學史。獨逸のカリエール(Carriere)の著作などこれに屬す。(ロ)藝術批評や一般藝術論を主たる對象とする藝術批評史ともいふべきもの。英國のセンツベリー(Spintbury)の著の如きはこれである。(ハ)純粹に學としての美學乃至藝術學だけの發展を求める一の學としての美學史。獨逸のシャスレル(Schasler)の著の如きはこれである。(二)美學史の方法上の相違から分類すれば、(イ)美學の發展を一般文化の發展に關係させて說明する所謂文化史的美學史。ドレスドネル(Dresdner: Geschichte d. Kunstkritik Bd. I.)(ロ)思想發展の過程に對する正反合といふ如き辨證法によつて美學の發展を說明する所謂批判的美學史。前述のシャスラアの如きはこの方法によるものである。(ハ)純粹に學術相互の事實的發展關係を敍述してゆく美學史。ヂュメルマン(Zimmermann)の著はこれである。(三)實際方法上から區別すれば(イ)時代によつて夫々美學の問題を限定して

スレル(Schasler)の著の如きはこれである。(二)美學史の方法上の相違から分類すれば、(イ)美學の發展を一般文化の發展に關係させて說明する所謂文化史的美學史。ドレスドネル(Dresdner: Geschichte d. Kunstkritik Bd. I.)(ロ)思想發展の過程に對する正反合といふ如き辨證法によつて美學の發展を說明する所謂批判的美學史。前述のシャスラアの如きはこの方法によるものである。(ハ)純粹に學術相互の事實的發展關係を敍述してゆく美學史。ヂュメルマン(Zimmermann)の著はこれである。(三)實際方法上から區別すれば(イ)時代によつて夫々美學の問題を限定して

の美學である。しかしプラトーが理想を以て實在とする所謂實在論的理想主義の見地から美・藝術を考察するに對して、アリストテレスは、經驗的現實主義の立場からプラトーの實在論的理想を否定して、美及び藝術を事實的に說明し、その「詩學」に於ては、詩の分類、悲劇の心理作用を說き、藝術の具體的特殊研究の端を開いた。プロティノス(Plotinos 205—270)に至つて事實を以て他の事實を說明するためには、現實主義以上の見地からせねばならぬとして再び美の理想主義的解釋が行はれた。プロティノス以後はクリスト敎文化時代で美の理論的考察の餘裕がなく、思索は常に

るものがカント(1724—1804)の美學である。カントに於て美の無關心の特性によつて美的快感の客觀性を說かうとしたが、この思想を假象(別項)の概念によつて更に發展させたのが、カント學徒の詩人シラア(1759—1805)である。彼は假象としての美は、客觀的認識でもなく主觀的行爲でもない、その中間のものであるとし、遊戲(遊戲說參照)の概念を以て說いた。而して彼の素朴的詩歌と感傷的詩歌の分類に關する論は、一の藝術樣式論であり、この方面の先驅的論述である。

【系統的組織時代】前時代に於て眞・善と區別された美が系統的に考究される時代で、主と

が生じて雜多な美學上の論議が行はれるやうになり、現代に至つてゐるのである。

【方法論的時代】自然科學の隆盛によつて、經驗科學的方法が美學研究上の一方法として强く主張されると同時に、他の別個の方法も亦主張され、種々な美學が展開する時代である。卽ちヘーゲル流の形而上學的美學の發展としてテォドール・フィッシャア(1807—1887)、ツァイジング(1810—1876)、カリエール(1817—1853)、シャスレル、ハルトマン(1842—1906)等の美學がある。ヘルバルト流の經驗科學的美學では、キルヒマン(1802—1884)、ロッツエ(1817—1881)、ケェストリン(1810—1844)

スレル（Schasler）の著の如きはこれである。（ニ）美學史の方法上の相違から分類すれば、（イ）美學の發展を一般文化の發展に關係させて說明する所謂文化史的美學史。ドレスドネル（Dresdner：Geschichte d. Kunstkritik Bd. I.）（ロ）思想發展の過程に對する正反合といふ如き辨證法によつて美學の發展を說明する所謂批判的美學史。前述のシャスラアのそれである。（ハ）純粹に學術相互の事實的發展關係を敘述してゆくきはこれに屬す。（ロ）國別に從つて問題を限定し說述するもの。ハルトマン（Hartmann：Aes. Bd. I.）の著はこれである。（ハ）美學上の一定の問題だけの發展を眼目とするもの、卽ち美學の問題史の如きもの、例へばクライス（Kreis）の著がある。

【美學發展の概觀】美學の發展は四つの時期に分けて見ることが出來る。（一）美に對する理論的研究時代で、プラトー（B. C. 427—347）以後アリストテレス、プロティノス等を代表とするギリシヤ時代。（二）美の批判的時代でバウムガルテン（1714—1762）以後の十八世紀ドイツを中心とする時代。（三）美學の理論の系統的組織の時代で、ヘーゲル（1770—1831）を中心とする十九世紀前半の時代。（四）美學研究の方法が問題とされて來た方法論的時代で、フェヒネル（1801—1887）以後であつて、十九世紀後半から現代に至る時代。

（美の理論的研究時代）この時代の主潮は、美は眞理の一種であるとして說く理知的傾向が生じて雄多な美學上の論議が行はれるやうになり、現代に至つてゐるのである。

（方法論的時代）自然科學の隆盛によつて、經驗科學的方法が美學研究上の一方法として強く主張されると同時に、他の別個の方法も亦主張され、種々な美學が展開する時代である。

卽ちヘーゲル流の形而上學的美學の發展としてテオドール・フィッシャア（1807—1887）ツァイジング（1810—1876）カリエール（1817—1895）シャスレル、ハルトマン（1842—1906）等の美學がある。ヘルバルト流の經驗科學的美學では、キルヒマン（1802—1884）ロッツェ（1817—1881）ケストリン（1819—1894）等があり、次にフェヒネルが出づるに及んで、經驗科學的方法の主張が强く「上からの美學」に對して「下からの美學」（各別項）が唱へられた。而してフェヒネルの經驗科學とは、卽ち主に心理學を指すのであつて、美又は藝術は一の經驗的事實であるとして心理學的に分析解釋されるのである。かく事實の學として考究される時に、この事實が如何にして發生し發達したかといふ事も問題になるべきで、ここに發生的研究が起り、藝術の起原（別項）が論ぜられて來る。經驗科學的美學はかくして組織的研究と發生的研究との二つに分れる。

組織的研究のうち美は心理的事實であるとして研究するもの最も多く、獨逸では、フェヒネル、コンラッド・ランゲ、リップス、フォルケルト、デッソア等、その主なるもので、英國にマーシャル、アメリカにサンタヤーナがある。また美の心理的事實は生理上の關係に由來するとして、生理學的美學（心理學的美學參照）。また美の心理的事實は生理上の關係に由來するとして、生理學的美學（別項）もスペンサア、ヘルトなどから主張される。更に生理學を基礎とする生理的心理學的美學が生じて雄多な美學上の論議が行はれるやうになり、現代に至つてゐるのである。

（方法論的時代）自然科學の隆盛によつて、經驗科學的方法が美學研究上の一方法として强く主張されると同時に、他の別個の方法も亦主張され、種々な美學が展開する時代である。

卽ちヘーゲル流の形而上學的美學の發展としてテオドール・フィッシャア（1807—1887）ツァイジング（1810—1876）カリエール（1817—1895）シャスレル、ハルトマン（1842—1906）等の美學がある。ヘルバルト流の經驗科學的美學では、キルヒマン（1802—1884）ロッツェ（1817—1881）ケストリン（1819—1894）等があり、次にフェヒネルが出づるに及んで、經驗科學的方法の主張が强く「上からの美學」に對して「下からの美學」（各別項）が唱へられた。而してフェヒネルの經驗科學とは、卽ち主に心理學を指すのであつて、美又は藝術は一の經驗的事實であるとして心理學的に分析解釋されるのである。かく事實の學として考究される時に、この事實が如何にして發生し發達したかといふ事も問題になるべきで、ここに發生的研究が起り、藝術の起原（別項）が論ぜられて來る。經驗科學的美學はかくして組織的研究と發生的研究との二つに分れる。

組織的研究のうち美は心理的事實であるとして研究するもの最も多く、獨逸では、フェヒネル、コンラッド・ランゲ、リップス、フォルケルト、デッソア等、その主なるもので、英國にマーシャル、アメリカにサンタヤーナがある。また美の心理的事實は生理上の關係に由來するとして、生理學的美學（心理學的美學參照）。また美の心理的事實は生理上の關係に由來するとして、生理學的美學（別項）もスペンサア、ヘルトなどから主張される。更に生理學を基礎とする生理的心理學的

【作眞】その眞は、期まされないで自由に歌つてゐるからである。本集の成立は相當に古いことが分る。

類從本には元久の奥書があり、浩輔も家集を諸本には「ある本この歌あり」との註がある。本には、最後の歌「きゝれ石の」がなく、前記長崎にて出版したものである。圖書寮所藏の一本文を考へ、井澤氏の解說並に冠註を補註して村井氏本・契沖自筆書入本・自家本の七本を以

の創立者であるとされてゐる。

一於ても美についての理論はあつたが、これが前に於てギリシヤ哲學の初めから、又東洋にれて今日に至る。もとよりバウムガルテン以

この話が用ひられたのはバウムガルテンは美學

研究にこの感性論の意味に用ひら

バウムガルテンの用ひた美學の意味に用ひら

る〻外は、

では單に種々なる美學の通有性を示すに止ま

る。美學の通有性といふよりも美學を究めよ

うとする要求の限定に過ぎぬ。同じくかゝる

要求に基いても、これを哲學的に考へる事もで

きず、又心理學的に觀察する事もできる。そ

して何れが眞の美學であるかといふ問題が生

ずる。こゝに美學の方法の問題が生ずる。

【美學の對象】學としての美學は何を對象と

見てゐるから、

が分る。

の心理を内省して研究するが如き方法による。而して一般に第一の意味の方法を方法的（Methodisch）といい、第二の意味の方法を方法論的（Methodologisch）ということもあるが、この用語法も一定してゐない。第一の意味の方法は對象の問題以前に現はれる問題であり、第二の意味の方法は、對象の問題が定められると共に始まる問題である。第一の意味に於ける美學上の方法として、形而上學的美學・經驗科學的美學・現象學的美學（各別項）・批判哲學的美學の方法がある。第二の意味の方法としては、主觀主義的美學・客觀主義的美學（各別項）の方法がある。（渡邊）

蘿蔔（かかつらの） 語學書 二卷三册 寫【著者】堀秀成【成立】嘉永二年夏草稿、後二同訂正し、安政四年十一月脫稿。【內容】本書は當麻蹊陰の「詞の玉橋」（別項）の末書で、同書に多少增補を加へたものである。その說くところ「言詞啻差別の事」「言に五種の差別ある事」「詞に四種二種の差別ある事」「詞に五段の差別ある事」「二辭に三種の差別ある事」「屬詞に三種ある事」「志支久の活に四種ある事」「志支久の活に變格ある事」等、體言及び用言の活用を說き、又「仰の事」「せし〳〵差別の事」「しか〳〵差別の事」「未然段を受けたるばやと已然段を受けたるばや差別の事」等の係結に關することと併せて七十餘項について記し、最後に「活用格例」と標して「詞八衍」（別項）に擧げた動詞百五十餘を五十音順に排列し、各語の上に「四」「下」「二變」等と註してその活用を知らしめてゐる。【價値】本書は「詞の玉橋」の說を

國の文法的形式の比較研究をなすところに端を發したので、シュレーゲル以來「恰も自然科學に於て比較解剖學が自然界に一層大なる光を與へた如く、比較文法が言語の系統發達研究に全く新しき解決を與へる」ことが出來るといふ考へで、比較文法なる新名稱が行はれたのである。今日比較文法は事實上、比較言語學（別項）と殆ど同じ意味をもつてゐる。（文法參照）（神保）

美學方法論（びがくほうろん） 美學（獨）Methodologie der Ästhetik.【解說】美學の研究方法の理論。この方法（Methode）又はこれを問題とする論、即ち方法論（Methodologie）といふ語は、在來二樣の意味で用ひられてゐる。第一は學問自身の性質を示す意味の方法、即ち學的認識の種類を示す意味の方法である。例へば哲學的に美又は藝術を研究する方法とか、心理學的に美又は藝術を研究する方法とかいふ場合に用ひらるゝ意味である。隨つてそれは直接研究の對象から規定さるゝ方法でなく、寧ろ對象を規定する意味の方法である。例へば心理學的方法といへば、たとへその對象たる美なるものが單に事實的な側面だけでなく、一の價値的な側面をもつことを認めてゐても、心理學の見地から見てその對象を限定する。第二は研究上の實際方法の意味の方法である。例へば同じく心理學的見地に立つて、即ち心理學的方法をとるにしても、主觀的內省法によるとか、又は客觀的觀察法によるとかいふ意味の方法である。隨つてそれは直接研究の對象によつて定まる方法である時は、自ら主として藝術享受の心理を對象とする藝術作品に對する自己

比較的文法（ひかくてきぶんぽう） 「比較文法」を見よ。

比較文法（ひかくぶんぽう） 言語學【名稱】又比較的文法とも。【英】Comparative grammar【獨】die vergleichende Grammatik【佛】la grammaire comparée【解說】ベンフェイ（Benfey）の言ふところに據れば、フリードリヒ・シュレーゲル（Fr. Schlegel）が始めて比較文法（vergleichende Grammatik）といふ名稱を用ひたといふ（Benfey, Geschichte der Sprachwissenschaft, S. 363）。西洋に於ける科學的言語研究の創始者といはれるボップもその著書に「比較文法」の名稱を用ひ、今日ではブルークマン（Brugmann）の大著は、「比較文法」の名で行はれてゐる。古來文法といへば、ラテン文法の如く或る一國語の規則を記述したものに過ぎなかつたが、言語の科學的研究はサンスクリット、ギリシャ、ラテン等各

卷中論文。【古代美學史として】Müller: *Geschichte der Theorie d. Kunst bei den Alten.* 2 Bde. 1836–7. ‖ Walter: *Die Gesch. d. Aes. im Altertum.* 1893.【近世美學史の主なるもの】Lotze: *Gesch. d. Aes. in Deutschland.* 1868. ‖ Stein, H. v.: *Entstehung d. neueren Aes.* 1886. ‖ Hartmann: *Deutsche Aes. seit Kant.* 1886. ‖ Bergmann: *Gesch. d. Aes. u. Kunstphil.* 1914.【現代美學の諸相及びその解說的著作として】Meumann: *Einführung in die Aes. d. Gegenwart.* 2 aufl. 1912.（金田鹿說モイマン「現代の美學」）Moos: *Die deutsche Aes. d. Gegenwart.* 2 Bde. ‖ Odebrecht: *Aes. d. Gegenwart.* 1930. ○美學原論 大西克禮 ○現代美學思潮 渡邊喜治（村田）

研究がレーマン、モイマン、キュルペによつて主唱される。なほ藝術と社會との關係から社會學的美學（別項）が生ずる。他方發生的研究では、藝術の起原は動物一般の本能から見なければならぬとする生物學的美學がグロース、チェ（1866–）の美學があり、美は一種の判斷であるとしてカント美學を發展させる時、新カント派の美學が生ずる。又美的判斷は價値判斷の一形式であると解すれば明かになるべきであるとするものにコーン（1863–1919）、レノル、キューン、クリスチアンセン等がある。又哲學思潮上の現象學の下に、現象學的美學（別項）はハーマン、ガイゲル、ウティッツ、オーデブレヒト、リュッツラア等により主張されてゐるが、未だその大成は現はれて居らない。（美學・藝術學その他記述せる中の各別項參照）

【參考】【一般美學史として】Zimmermann: *Geschichte d. Aes. als. phil. Wiss.* 1858. ‖ Schasler: *Kritische Geschichte d. Aes.* 1872. ‖ Bosanquet: *A History of Aes.* 1892. ‖ Utitz: *Geschichte d. Aes.* 1930. ○西洋美學史（藤井・深田・鹿兒島・金子譯）一

平太を證書る。光氏、父の愛妾藤の方へわざと戀慕。杉生銀ふ。（京都織越形內）藤左衞門・十作が普稅免除の哀訴を、河合左司馬が既に取上げようとした時、岩淵玄蕃が來つて藤左衞門等を領主の命令だといつて縛り上げる。（伏見海道茶店）當吾は途中で、養父が牢舍に曳かれて行つた由を聞き、驚いて引返す。（三幕）（織越家表門）百姓多勢、藤左衞門等を返せと門訴する。（門內）玄蕃・五平太、植村隼人に左司馬出張。（門外）當吾、一同をなだめ、一人門內へ呼ばれる。（門內）玄蕃・五平太は百姓達を一瞥と見なす。當吾の言ひ譯、隼人が押寄せる聲。（織越家門外）百姓大勢、お君等を奪ひ返さうと押しかけるのを當吾が無理に

開幕中、苛稅取立ての報あつて芝居中止。（佛光寺客殿）藤左衞門は當吾女房お峯に扮お君お玉を連れて參詣。中津村久左衞門、難波村作兵衞が來て、運上增加、田地增入れ、上納金の不當取立で、領主織越家より未進左衞門に、領主織越家より未進

取上げようとした時、岩淵玄蕃が來つて藤左衞門等を領主の命令だといつて縛り上げる。（伏見海道茶店）當吾は途中で、養父が牢舍に曳かれて行つた由を聞き、驚いて引返す。（三幕）（織越家表門）百姓多勢、藤左衞門等を返せと門訴する。（門內）玄蕃・五平太、植村隼人に左司馬出張。（門外）當吾、一同をなだめ、一人門內へ呼ばれる。（門內）玄蕃・五平太は百姓達を一瞥と見なす。當吾の言ひ譯、隼人が押寄せる聲。（織越家門外）百姓大勢、お君等を奪ひ返さうと押しかけるのを當吾が無理に制の鎖を鉈で斷ち船を出す。（當吾內）當吾は久し振りに我が家へ戻り、女房や三人の子に對面、村の疲弊した樣子を聞く。當吾の舊主栄安之助、桂木と共に匿まはれたが、長吉・八右衞門の諮議に栄安は手疵を負ひ、桂木を伴ひ逃げる。當吾は女房に直訴の心を明かし、再び都へ出立。悲しい子別れ。（櫻堤）八右衞門と手下、當吾を捕へんとする。（芦兵衞の助

當吾は妻子へ名殘を告げに雪を冒して故鄕へ歸り、渡し守芦兵衞に船を賴まうとしたが、夕方で船は法度、都へ行つた百姓達は關所で第縛するといふ布令に驚く。芦兵衞は當吾が命

が、これは「詞八衍」に擧げた語を若干增補して、五十音順に列べたに過ぎないもので、「活用格例」は「詞の玉橋」にはないものである。（飯田）

ブレヒト、リュッツェラア等により主張されてゐるが、未だその大成は現はれて居らない。（美學・藝術學その他記述せる中の各別項參照）

【參考】〔一般美學史として〕Zimmermann: *Geschichte d. Aes. als. phil. Wiss.* 1858. ‖ Schasler: *Kritische Geschichte d. Aes.* 1872. ‖ Bosanquet: *A History of Aes.* 1892. ‖ Utz: *Geschichte d. Aes.* 1930. ○西洋美學史 藏常良（深田康算全集第一

稱を用ひたといふ(Benfey, Geschichte der Sprachwissenschaft, S. 363)。西洋に於ける科學的言語研究の創始者といはれるボップもその著書に「比較文法」の名稱を用ひ、今日でもブルークマン(Brugmann)の大著は「比較文法」の名で行はれてゐる。古來、文法といへば、ラテン文法の如く或る一國語の規則を記述したものに過ぎなかつたが、言語の科學的研究はサンスクリット、ギリシヤ、ラテン等各

問題にならぬ側面を除外してしまふ意味でその對象を限定する。第二は研究上の實際方法の意味の方法である。例へば同じく心理學的見地に立つて、卽ち心理學的方法をとるにしても、主觀的内省法によるとか、又は客觀的觀察法によるとかいふ意味の方法である。隨つてそれは直接研究の對象によつて定まる方法である。例へば藝術享受の心理を對象とする時は、自ら主として藝術作品に對する自己

ひがしや

少しく変化したに過ぎないもので、(最後の「活用格例」は「詞の玉橋」にはないものであるが、これは「詞八衢」に擧げた語を若干增補して、五十音順に列べたに過ぎない)、研究としては廣蔭より上に殆ど出てゐない。稀にこれと異る説を出してゐるが、その中には却つて誤つたものがある。例せば久活、志久活の外に「遙けく」「めでたく」の類をそれと一類として介久活、多久活と呼び「志支久の變格」として「すこし」の語を出した如きである。又動詞の活用に於ては、「詞の玉橋」は命令形を逸して五段にしてゐるが、本書も亦これに隨つてゐる。〔龜田〕

東山櫻莊子（ひがしやまさくらのさうし） 脚本 七幕二十八場 時代世話物 【作者】三代瀬川如皐

【名稱】櫻に佐倉を利かせ、東山に田舍源氏を暗示した巧みな名題 【通稱】佐倉宗吾 【別名題】「東山殿花王彩幕」（ひがしやまどのはなのおうのいろまく）「返咲櫻草子」（かへりざくらさくらのさうし） 【興行】嘉永四年八月四日初日、江戸中村座初演。

〔役割〕淺倉當吾・下部須磨平・無指南東雲（市川小團次）、白拍子桂木・足利次郎冠者光氏（岩井粂三郎）、細川修理之助勝元（澤村源之助）、淺倉藤左衞門・植村隼人・高岡主計（森田勘彌）、藤左衞門娘お君・中老杉生（吾妻市之丞）、山名宗全持豐・難波村八右衞門・織越典膳・岩淵玄蕃（中山市藏）、愛妾藤の方・當吾女房お峯（尾上菊次郎）、足利義政・織越大領政知・幻長吉・仁木喜代之助・渡し守甚兵衞（坂東彦三郎）。

【諸本】近世實錄全書第三卷所收。【題材】寫本「地藏堂通夜物語」より講釋に入つた佐倉宗吾傳を中心に、柳亭種彦の「田舍源氏」の一部を搦めたもの。

【梗概】〔序幕〕（攝州高津八幡）代官船橋八兵衞、藤左衞門の娘お君へ戀慕。（社内村芝居）百姓一同豐年の祝ひに芝居興行。曾我の對面

開幕中、苛稅取立ての報あつて芝居中止。（佛光寺客殿）藤左衞門は當吾女房お峯に娘お君お玉を連れて參詣。中津村久左衞門、難波村作兵衞が來て、左衞門に、領主織越家より未進取立て、運上增加、田地棹入れ、上納金の不當命令等につき相談。當吾は十作と共に歸つて役所への哀訴が叶はぬ事を話す。〔門外〕八兵衞の手下、お君・お玉を奪ふ。百姓達の憤慨。（岩淵玄蕃屋敷）當吾は、苛稅免除の願ひに來たが、八兵衞が妨げて諾かれない。百姓達の押寄せる聲。（織越家門外）百姓大勢、お君等を奪ひ返さうと押しかけるのを當吾が無理に

東山櫻莊子 （初演繪本番附）

平太を强請る。光氏、父の愛妾藤の方へわざと戀慕。杉生窺ふ。（京都織越邸内）藤左衞門・十作が苛稅免除の哀訴を、河合左司馬が既に取上げようとした時、岩淵玄蕃が來つて藤左衞門等を領主の命令だといつて縛り上げる。（伏見海道茶店）當吾は途中で、養父が牢舍に曳かれて行つた由を聞き、驚いて引返す。〔三幕〕（織越家表門）百姓多勢、藤左衞門等を返せと門訴する。（門内）玄蕃・五平太、植村隼人に左司馬出張。（門外）當吾、一同をなだめ、一人門内へ呼ばれる。（門内）玄蕃・五平太は百姓達を一撰と見なす。當吾の言ひ譯、隼人が情ある計らひ。（足利家寶藏）長吉が金を盜みに入るを支へる仁木喜代之助。小烏丸を盜んで出る東雲を引き留める奴須磨平。早替り同士のだんまり。（藤の方寢所）寢所へ忍ぶ光氏、宗全は不義者と叫ぶ。兩人自害せんとするを義政が止め、家督爭ひに起る騷擾を慮つた兩人の本心を知る。光氏は小烏丸詮議に出立。（織越屋敷使者の間）隼人が出仕するのを玄蕃妨げる。（玄關）政知が出仕の袂を控へて隼人の諫言。政知は飽くまで百姓達を誤解して願ひを容れない。〔四幕〕（博勞町宿屋）久左衞門・作兵衞初め百姓一同、國へ歸つて一撰と騷ぐのを當吾が制し、手段を盡しても效ない今日、殘る一つは將軍家へ直訴と衷心を打明け、一同と名殘の盃。（淺倉村當吾内）難波村の八右衞門お峯を口説く。（櫻堤渡し場）

宥める。（伏見海道）盜賊長吉捕へられ、軍鷄籠の差立て。（呉竹塚）猫實五平太、長吉に惡事を依頼。大雷にて軍鷄籠が破れ、長吉出る。長吉は岩木主水を殺して驪龍の笛を奪ふ。當吾窺ふ。〔二幕〕（足利家御殿）義政、隱居の意につき、光氏を立てんとする細川勝元に不破伴作・中老杉生、分家の織越政知を立てんとする山名宗全に名和無理之助・局白糸、双方の爭ひ。石堂采女之助と腰元桂木の不義が顯はれ、采女之助の預かる茶入れ紛失に、兩人は館を追はれる。（庭内人麿堂）長吉、笛を枷に五

當吾は妻子へ名殘を告げに雪を目して故鄕へ歸り、渡し守甚兵衞に船を賴まうとしたが、夕方で船は法度、都へ行つた百姓達は歸國次第縛るといふ布令に驚く。甚兵衞は當吾が命を捨てて直訴との決心を聞き、心を察して禁制の鎖を鉈で斷ち船を出す。（當吾内）當吾は久し振りに我が家へ戻り、女房や三人の子に對面、村の疲弊した樣子を聞く。當吾の舊主采女之助、桂木と共に匿まはれたが、長吉・八右衞門の詮議に采女は手疵を負ひ、桂木を伴ひ逃げる。當吾は女房に直訴の心を明かし、再び都へ出立。悲しい子別れ。（櫻堤）八右衞門と手下、當吾を捕へんとする。甚兵衞の助けで再び船へ乘れたが、この時、長吉から八右衞門へ渡した驪龍の笛が當吾の手に入る。〔五幕〕（河内海道）お玉は當吾から渡された名笛を采女へ持參する。惡者が取卷くのを十作が支へる。（洛陽錦繡閣）足利義尙に光氏・藤の方、三人が紅葉の賀に胡蝶の舞。富本淨瑠璃「花桂照楓奏」（はなかつらてりはのかなでし）。（東福寺通天橋）義政多勢を從へて參詣、當吾忍んで直訴、直ちに捕へられる。〔六幕〕（織越家白洲）長吉は召捕られたが、どこまでも白狀せず、罪を當吾に塗りつける。高岡主計は寬仁の調べをしたが、殿に呼ばれて出仕の留守、織越典膳は當吾夫婦を非道の拷問、笛と用金の盜賊、主水殺害の罪まで被せ、遂に子供三人まで夫婦の面前で殺す。夫婦の恨み。〔大詰〕（織越御殿）政知はお君を捕へ、意に從はせんとする。お君は逃げる。當吾の亡靈、茶道となり腰元と化し、政知の非道を恨み、散々に苦しめる。

【脚色】如皐は通し狂言となると非常に長く、その一幕も丹念に書く癖があつた。本篇などもその好例で、當時としても冗漫に過ぎた。

なんにもない。新聞に元日から始まつて彼岸過ぎまで續く豫定だといふ夢ろ分量を思はせるやうな名前に過ぎない。内容は「風呂の後」「雨の降る日」七章、「須永の話」三十五章、「松本の話」十二章、以上の六篇及び「結末」から成る。各篇の主人公は皆別人であるが、田川敬太郎と呼ぶ青年がいつも出て各篇をつないでゐる。その中で「須永の話」は、須永市蔵がおしも三四郎の後身であるとは云へないかも知れない。須永のあたまだけが異常に鋭敏に働く點は、三四郎ではなくて、寧ろ「それから」の代助の型である。須永と千代子は本來夫婦として造られたものか、友人として存在すべきものか、それとも仇同士として睨み合ふべきものか、それは「松本の話」で説明されてある。要するにこの作は世間修業者としての一青年敬太郎の冒険好きの開書である。

最初は頗る薄く、彼は興味を感じてゐたのが、だん〳〵に濃く深く動かされて行くやうになつた。其處が彼に特長ならない所にはひたふつた。其處が彼に特長ならない所

【附記】大正三年十月、眞山青果・川村花菱の脚色で、河合・藤澤・井上・高田等によつて、東京本郷座に上演された。（高須）

氷川清話（ひかわせいわ）

【編著】吉本襄【刊行】明治三十年十一月、鐵華書院。續篇三十一年五月。續々篇同年十二月。【解説】維新の際、崩壊の幕府方にあつてよく機宜の處置を取り、王政復古の鴻業を平和裡に成就させた勝海舟の語錄である。苦勞人である上に、禪をも收めた海舟が謂はゆる「瀟然止水の如く、瑩然明鏡の如き心境で、主として西郷南洲・大久保甲東・横井小楠・佐久間象山・藤田東湖・木戸松菊・島津齋彬・小栗上野介・江川太郎左衞門・高野長英・山内容堂・岩倉具視・山岡鐵舟・高島秋帆・向山黄村・岡本黄石等維新前後の人物の思出を話すと共に、政治・經濟・外交等の時事談、或は芭蕉や幸田露伴等に關する文學談を試みたもので、隣に衣をきせぬ率直さと、すね者一流の皮肉と諷刺とがが特有の味ひを添へ、愉讀に値する。殊に「修紫田舍源氏」が大奥に取材した物語であることを語つた一章は有名で、文學史書にもよく引用せられてゐる。但し本書の價値の大部分は、勿論維新の裏面史たる點に存し、特に西郷南洲との交渉は最も劇的である。（未村）

彼岸過迄（ひがんすぎまで）

小説【作者】夏目漱石【寫眞】明治四十五年一月二日から同年四月二十九日まで朝日新聞に連載。【刊行】同年九月、春陽堂。漱石全集第五卷・同普及版第七卷所收。【解説】作者は序文に於て、「ふねから自分は個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだらと云ふ意見を持してゐたらしいが、新聞小説として存外面白く讀まれはしなかつたらうといふ意見を持してゐる。個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに、讀者を引き付けてゐる作である。

【刊行】大正三年八月。脚本になつた分は同六年十一月刊行。

【梗概】小説家高野周三に、二人の妹がある。一人は類子といひ、一人は異腹で葉子と云つた。類子は私生兒の清一を表面葉子の子にして預け、富豪大杉榮吉の許に嫁した。生來、氣弱で遠慮深い葉子は、自分を犧牲にして清一を育てるため、日本座の女優となつて生活してゐるうち、同座の音樂部員淺沼龍一と相思の仲となつた。淺沼には或る代議士の娘で光子といふ許嫁があるが、葉子に心を傾けて光子と結婚しない。葉子の兄周三は、葉子が自分の兒でもない清一を育ててゐるのを見兼ねて、大杉のもとへやらうとする。ところが、清一は葉子になついて側から離れぬ。葉子の苦勞も知らず顏に、類子は艦蕩な田代といふ男と密會したりして我儘が過ぎたところから、大杉の怒りを買ひ、ピストルで擊たれようとした。そこへ葉子が飛び込んで、類子は救はれる。葉子は淺沼から婚約のしるしに贈られた指輪を田代に盜まれたことから、淺沼の誤解を受けて關係を絶たれ、類子は大杉から離縁される。そして清一は類子が飲ませた酒のために死ぬ。この悲痛な有樣を見て周三が、「我々三人の兄妹が、すべての祕密を告白して人間らしい心になることが出來たのは清一の死のお蔭である。清一の死は、お前を幸福にしたと葉子に述懐した。

【批評】通俗小説であるが、觀察が鋭く、人情の表裏を穿つてゐるところに、相應に藝術味がある。總じて戯曲的要素を多分に持つてゐる中心が作られてゐるところに、相應に藝術味

東山文庫（ひがしやまぶんこ）

【編著】京都御所内に現存。明治初年近衞家獻上の書庫を、御所内に營造せしめられ、御歴代宸翰類を初め、古今の和漢圖書を收藏せしもの。【解説】文庫は、ここに收藏された。近年宮内省はその整理に從事、最近二段の整理を終了して、その結果を公表した。【參考】歌舞伎新報（二八五號以下）（溫美）

光の巻（ひかりのまき）

【編著】大正三年四月より九月まで國民新聞に連載。

引目鉤鼻（ひきめかぎはな）

【繪畫】【解説】日本畫の描寫樣式上の一種。主として大和繪の風となるものである。（野上）

簸屑（ひくず）

【和歌】【俳諧狂言】【格言】【生歿】明治五年三月二十五日、東京市麹町區山下町に生れ、同二十九年十一月二十三日本鄉區丸山福山町の自宅に病歿。享年二十五。【墓所】東京築地本願寺【閲歴】山梨縣人樋口則義の次女、士族氣質の教育を受けたが、家運の傾くに及び、明治二十年頃より小説家半井桃水（源）に師事して文學を志し、召使ふ太郎を通じて、「文學界」の同人たる平田禿木・戸川秋骨・馬場孤蝶・星野天知・北村透谷・島崎藤村等と相知るに至つて、同誌に數作を寄せ、二十八年五月、「ゆく雲」を「太陽」誌上に發表した頃から文名漸く揚り、次いで佳作連出。二十九年春新進の雄としてたけくらべ」を「文藝倶樂部」に載せるや、「紅葉・露伴の大家をも凌ぐほどの名聲を博した。作家としての活動は處女作「闇櫻」を書いた二十五年以後の僅か四年間に過ぎないが、その間に華々しい進展を遂げ、主として前記の「文學界」「太陽」「文藝倶樂部」等の諸雜誌に寄稿し、明治女流作家の隨一たるの文業を殘した。その功績を

追悼はせようとする。太郎は次郎にも朋輩も應も朋輩と云ふからと取成しを頼むがつき放される。その時両が取れるので、次郎の仕業と解り、憎い奴と次郎を追ひ入るといふ筋。

樋口一葉（ひぐちいちよう）

小説家【本名】夏子【生歿】明治五年三月二十五日、東京市麹町區下一番町に生れ、同二十九年十一月二十三日本鄉區丸山福山町の自宅に病歿。享年二十五。【墓所】東京築地本願寺【閲歴】山梨縣人樋口則義の次女、士族氣質の教育を受けたが、家運の傾くに及び、明治二十年頃より小説家半井桃水（源）に師事して文學を志し、召使ふ太郎を通じて、「文學界」の同人たる平田禿木・戸川秋骨・馬場孤蝶・星野天知・北村透谷・島崎藤村等と相知るに至つて、同誌に數作を寄せ、二十八年五月、「ゆく雲」を「太陽」誌上に發表した頃から文名漸く揚り、次いで佳作連出。二十九年春新進の雄としてたけくらべ」を「文藝倶樂部」に載せるや、「紅葉・露伴の大家をも凌ぐほどの名聲を博した。作家としての活動は處女作「闇櫻」を書いた二十五年以後の僅か四年間に過ぎないが、その間に華々しい進展を遂げ、主として前記の「文學界」「太陽」「文藝倶樂部」等の諸雜誌に寄稿し、明治女流作家の隨一たるの文業を殘した。その功績を

樋口一葉（ひぐちいちよう）

論客を貰でこした殘り屑である。（濱田）

簸屑句（ひくずく）

「和歌」を見よ。

尾鰭（ひれ）

「下學集」にも「簸屑ヒクヅ也」と見えてある。勿茶の流行を物語る狂言の一つである。簸屑は

で、同時に彼の仕合せな所であると作者は附記してゐる。各篇を通じて、須永といひ、松本といひ、主人公は作者を思はせるのが一つの特徴である。　【野上】

引目鈎鼻　繪畫　【解説】日本畫の描寫樣式上の一種。主として大和繪の風俗畫に於て人物の顏を畫くに、目は細く一直線を引き、鼻も細き一直線を鈎形に屈折せしむるのみの簡單な描法であつて、藤原時代の創始と推察される。遺作としては後三條天皇の延久元年、秦致貞の畫いた法隆寺繪殿聖德太子繪傳(御物)に、割合にその始原的な描法が見出される。その後源氏物語繪卷、扇面寫經下繪等の大和繪風俗畫に盛んに愛用されて以後長く大和繪の傳統をなした。この描法は蓋しその初め小さい顏を畫く際の省略法に過ぎないが、やがて引目には直線の中程に微かに眸子の黑みを見せるやうに發達するのであつて、これが卽ち物靜かにして優美な藤原趣味の中に樣式化せられて、男女の如何を問はず、

引目鈎鼻式（和泉流）。【解説】小督の里に住む者が、宇治橋の供養も近づき、今年は先祖の年忌にも當るから攝源氏物語繪卷よ）

すべて大和繪の顏面描法の一定型となつた。一見眠るが如きその表情の裡に、飽くまで上品な貴族生活の雰圍氣が、さながらに表徵されてゐる。蓋し支那には見られぬ日本の創始であつて、これが大和繪描寫の主要な一特質となるものである。　【田中(一)】

尾句　「和歌」を見よ。

簸屑　能狂言　【格】

待をしようと、召使ふ太郎冠者に簸屑を挽かせる。太郎は一人で簸屑を挽きながら、茶を挽くのと馬に乘るのとは、ゆられるやうにつて眠いと言ひながら、挽きかけては居眠を始める。そこへ次郎冠者も使から戻つてきて、一言二言話しをしかけるが、太郎は兎もすれば居眠を始めるので、目の覺めるやうに話をしてやらうと言つて、月の夜河原に相撲があつた事を話すが、太郎は又眠る。そこで今度は次郎が舞を舞つて見せてやると言つて小舞を始める。けれども太郎はやはり眠り始める。次郎は腹を立て、そつと鬼の面を被せて置く。やがて主が見に來たといふので太郎も驚くが、次郎の水鏡で自分が鬼になつたのを知ると、泣いて唯今までの好みに門の番でも臺所の釜の火でも焚かせて下されと言ふが、主は鬼に用があらうかと言つて取合はない。賢者に見せてくれと願ふが、鬼の療治をする者は聞いた事もないと言つて次郎に

樋口一葉（下山爲筆）

追拂はせようとする。太郎は次郎に犬も朋輩も朋輩と云ふからと取成しを賴むがつき放される。その時面が取れるので、次郎の仕業と解り、憎い奴と次郎を追ひ入るといふ筋。茶の流行を物語る狂言の一つである。簸屑は「下學集」にも「簸屑(ヒクヅ)惡茶也」と見えてゐる。勿論茶を箕でこした殘り屑である。　【濱田】

樋口一葉　小說家　【本名】夏子　【生歿】明治五年三月二十五日、東京市麴町區山下町に生れ、同二十九年十一月二十三日本鄕區丸山福山町の自宅に病歿。享年二十五。　【墓所】東京築地本願寺　【閱歷】山梨縣人樋口則義の次女、士族氣質の教育を受けたが、幼少の頃から小說の類を嗜讀し、家事の傍ら歌文に親しみ、遂に明治十九年中島歌子の歌塾に入つた。爾來和文學風の教養を受け、當時の閨秀作家田邊花圃(別項)と並んで、中島門下の才媛と稱せられた。やがて父の死に逢ひ家計困難になつたので、文學で生活を立てようと思ひ立ち、明治二十四年作家半井桃水(別項)に就いて小說の添削を乞うたりして、作家生活に一歩を入れた。その前後から失戀や生

一葉筆蹟

活難で種々の辛酸を嘗め、一時は生計を苦慮して筆を斷たうとまでしたが、文學界派(別項)の人達と相知るに至つて、同誌に數作を寄せた。二十八年五月、「ゆく雲」を「太陽」誌上に發表した頃から文名漸く揚り、次いで佳作連出。二十九年春新進の雄として「たけくらべ」を「文藝倶樂部」に載せるや、紅葉・露伴の大家をも凌ぐほどの名聲を博した。作家としての活動は處女作「闇櫻」を書いた二十五年以後の僅か四年間に過ぎないが、その間に華々しい進展を遂げ、主として前記の「文學界」「太陽」「文藝倶樂部」等の諸雜誌に寄稿し、明治女流作家の隨一たるの文業を殘した。その功績を傳へるべく、大正十一年故人の二十七回忌に當り、父母の鄕里山梨縣大藤村に記念碑が建てられた。　【著作】短篇小說二十五篇、主なものは、「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」「われから」「わかれ道」(以上別項)、「ゆく雲」「大つごもり」「やみ夜」「花ぐもり」「うもれ木」、この外隨筆六篇、日記(自明治二十七年四月一至二十九年四月)、和歌(約三千八百首)、「通俗書簡文」一册等がある。又全集として「一葉全集」二卷(馬場孤蝶校訂)がある。　【作風】前期は概して空想的類型的で、技巧の跡が露骨であつた。且つ古雅趣味に捉はれ、又文致筆意に西鶴乃至露伴の影響を受けて氣を負うた强い調子もあるが、後、次第にそれ等から脫し、晩年に至つて獨自の世界を開き、圓熟の境地に達し、短篇を得意とした。「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」等は代表作である。

【參考】歌舞伎新報(一二八五號以下)　【渥美】

東山文庫　文庫　【解説】京都御所内に現存。明治初年近衞家獻上の書庫を御所内に築造せしめられ、御歷代宸翰類を初め、こゝに收藏された。近年宮内省はその整理に從事、最近一段の整理を終了して、その結果「御宸翰集」を公表した。　【植松】

光の巻　小說　【作者】佐藤紅綠　【發表】大正三年四月より朝日新聞に連載。

人間らしい心になることが出來たのは清一の死のお蔭である。清一の死は、お前を幸福にしたと」と葉子に述懷した。

【批評】通俗小說であるが、觀察が鋭く、人情の表裏を穿つてゐるところに、相應に藝術味がある。總じて戲曲的要素を多分に持つてゐて犧牲心に富んだ葉子と、自由放縱、享樂的な類子とを對照したところに、讀者を引き付ける中心が作られてゐる作である。

彼岸過迄　小說　【作者】夏目漱石　【發表】明治四十五年一月二日から同年四月二十九日まで朝日新聞に連載。　【刊行】同年九月、春陽堂。漱石全集第五卷。同普及版第七卷所收。　【解説】作者は序文に於て、「かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、その個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小說として存外面白く讀まれはしないだらうかといふ意見を持してゐ

一葉は自己に忠實な作家で、自身の經驗を土臺として寫實的に描いた。從つてその取扱つた人生は狹い。薄倖な若い女の哀愁の世界、無自覺な儘に舊習に捲き込まれてゆく明治型の女性の暗涙を含んだ成行に限られてゐる。又その思想も舊養的なあきらめの境地を出てゐない。併しその範圍内に於ては深く見、細かく描いてゐる。可憐な女性の姿を同情のある如何にも女らしい行屆いた筆で、心理的に描き、その儚ない成行を巧みに暗示してゐる邊、女性描寫に優れてゐたと共に、作中の女性は作者自身の化身で、何れも心の何處かに意氣地が感じられる。それだけ作柄に變化は乏しいが、一面に於ては、古典的にきび〳〵した個性を強く發揮した。それは文章の上にも現はれ、一種の雅俗折衷體を以て終始し、彼女獨特の名調子を成してゐる。彼女は世故に通じ、且つ稀有な才筆であつた。而も極めて眞面目な態度で作に臨んだから、人を動かすに足る眞實味が籠り、作の上に漂つてゐる哀感的な陰翳と融合して、暗愁に充ちた餘韻を釀し出してゐる。一葉の小說の眞價は此處にある。【史的地位】明治中期の小說壇に、心理的人生派の傾向が現はれようとする風潮に乘つて出た作家であるが、彗星的な存在であつたので、その盛名に比して直接他に及ぼした影響は殆どない。むしろ可なりに主觀的浪漫的ではあつたが、無自覺ながら內面的人生的個性的であつた點で、後年の自然主義的な文學と傾向を同じくするものである。そして大きいとか、强いとかいふ類ではないが、小さいながらに可憐な味を祕めてゐる文學として、又雅俗折衷體の終を飾つた作家であつて、而も作調に於て後來文學の先驅的な色彩を帶びてゐた作家として、殊に天才的に完成された作品をもつ特異の女流として、明治文學史上に別格的の地位を占めてゐる。〔湯地〕

【參考】眞筆版「たけくらべ」樋口邦子編〇一葉全集後篇跋文馬場孤蝶〇樋口一葉論湯地孝〇樋口一葉研究久保田万太郎(日本文學講座)

樋口龍峽（ひぐちりゅうけふ）　評論家【本名】秀雄【生歿】明治八年五月、信州飯田町に生れ、昭和四年六月六日心臟麻痺にて歿す。享年五十五【閱歷】第一高等學校を經て東京帝大文科哲學科にて社會學を專攻した。文藝方面では「帝國文學」「哲學雜誌」等に關係し、雜誌「新日本」編輯主任となつた。また後藤宙外・笹川臨風・登張竹風等と共に文藝革新會を組織して、自然主義一派に對立した事がある。敎壇の人としては明治大學・國學院・法政大學・眞宗大學・大谷大學等に敎鞭を執つた。大正四年、大隈內閣時代に代議士となり、晚年漸く政界に頭角を現はし、民政黨總務になつた。その他敎育評議會委員・文政審議會委員などにもなつた。【著書】近代思想の解剖〇時代と文藝〇碧潮〇社會論叢〇社會學小史〇社會學十回講義。

〔高須〕

日暮八太夫（ひぐらしはちだいふ）「說經淨瑠璃」を見よ。

美景蒔繪松（びけいまきえのまつ）　浮世草子　五卷【作者】市中軒(傳未詳)【刊行】寶永五年【諸本】近代日本文學大系第四編・近世文藝叢書第五編所收。【解說】伊勢古市の色茶屋を寫したもので、寶永二年以後、京大阪地方では伊勢詣りが流行したので、そこに着眼したものと思はれる。五卷十五話、いづれも艷女生活を中心とした說話である。一の一葛籠石一時千金の條は、古市艷女の因緣を書いたもので、鴨の長明といふ粹自慢の法師が古市の柏屋といふ茶屋に立ち寄り、亭主の鶯二九の噂から安女（あにょ）のいはれ話をきくといふ趣向、伊勢といふ目先の變つた場所を扱つてゐるところに興味がある。以下全篇殆ど會話體であつて間々敘述說明の文が挿んである。すべて艷女の噂や色茶屋の模樣、客の遊びぶり等々の品定めである。遠目鏡で艷女とお客との遊ぶ有樣を遠見する思ひつきは、「一代男」より暗示を得たものであらうか。卷末に附錄として古市色茶屋名よせ、寒風色茶屋名よせ、中之地藏色茶屋名よせ、合六十軒の名よせとして艷女の名が列擧してある。艷女の名義に就いて「若き女をあんにやと呼ぶことは、宮川より五十鈴川までの內にて申すことなり。近き頃までは神代よりの、古風を學び、女はすべて髮をからわにわげ、繻子金襴の切にて、からわを包み、まつたく唐繪の下官などを見るやうに御ざんしたげな。さればそれを惡口な御衆が、冠着たる女ぢやと云ふいはくにて、安女と名付けそめたるよし、神代の風儀今に殘りまして」とある。

【備考】作者市中軒を市井軒とし、並木宗輔の別號市井庵から、淨瑠璃作者並木宗輔の作ではあるまいかとする說もあるが、「江戶時代戲曲小說通志」によると、並木宗輔の生れたのは元祿十年とあり、寶永四年は十一歲にあたるわけで俄に信じ難い。

〔小泉〕

ひげ男（ひげをとこ）　小說【作者】幸田露伴【發表】明治二十三年七月、紅葉の「伽羅枕」(別項)と共に讀賣新聞に揭げられ、好評であつたが、四五回で中絕、後に完成された。【刊行】明治二十九年十二月、春陽堂。露伴全集第二卷所收。

【梗概】時は天正三年の夏、武田信玄歿後のこと、勝頼は武勇すぐれてゐたが、思慮淺くして、とかく血氣に逸りがちであつた。當時、彼は家康・信長等の强敵を向うに廻して、早く長篠城を攻め落さうと焦慮し、遮二無二、進擊しようとした。內藤修理を初め、山縣・馬場等の宿將は、敵の侮り難きを察して、切に自重を勸め、輕擧を諫めたが、用ひられないので深くこれを嘆き、決死の覺悟で最後の奉公をすることを申合せ、無限の感慨に打沈んでゐると、突然、傍らの小笹の中から烈しい泣き聲が起つた。誰かと見れば、老將笠井肥後の甥同苗大六郎高英である。彼は宿將たちが死を急ぐことに反對し、飽くまで生きて勝頼のために盡してほしいと痛切に述べた。一同は彼の熱意を諒としたが、その決心を飜へさうとはしなかつた。かくて戰ひが始まると、果して甲州勢に不利だつた。この時、笠井大六郎は戰場で敵の柳小太郎宗春といふ若武者に逢ひ、一騎討をしたが、その美少年姿の優しさと健氣さとを見るにつけて殺すに忍びず、幾度か助けようとしつつも、數人の敵と戰ふ中に誤つて小太郎を斬つた。そして亂軍の中を敵陣深く忍び入り、信長を斬らうとして捕へられ、家康の監督のもとに寺に預けられた。それと知つて小太郎の姉玉枝は、弟の仇を討たうと彼を尋ねて來ると、彼は當時の光景を話し、快く首さしのべて討たれようとする。玉枝は、その潔さに動かされて討つことは出來なかつた。この由早くも酒井忠次（宗春の亡父の友）の知るところとなり、忠次は笠井大六郎の天晴れな勇士振に感心して、玉枝を宥めて和解させた。その後、笠井はなほ寺に起臥してゐたが、家康は彼の一命を取らうとはしな

かつた。

【批評】本篇は甲州の勝頼と信長・家康との爭ひ、勝頼の悲しい敗北等を背景として、笠井大六郎高英を主要人物としてゐる。一癖ある髯男、剛勇・大膽、而も情に脆い彼、高英の面目を躍動させてゐるが、同時に彼の叔父も亦力强く生動してゐる。殊に高英が宗春の姉玉枝及び富永孫太夫等を相手に、酒間、宗春との一騎討や當時の感慨を物語るあたりは、涙なしには讀むことが出來ぬ。ただ全體の構圖が少しく混雜に流れ、統一を缺いてゐるのは惜しい。

〔高須〕

悲劇（ひげき）　「演劇」を見よ。

悲劇美（ひげきび）　「悲壯美」を見よ。

同四十四年六月、籾山書店。現代日本文學全集(正宗白鳥集)所收。

【梗概】お國といふ妾の生活を中心に、嘗て旦那であつた河津や、現在の旦那朝川を配したものである。お國は危篤だといふ鄕里の母を見舞ふにあたり、以前世話になつて暫く會はずにゐた河津と上野の停車場で待合せ、せめて暫くの間なりと心を浮々させようとした。鄕里へ着いてもその夜は宿屋で男と過ごし、その翌日ほんの言譯に母を見舞つただけで、歸京の途につき、途中、一生のお別れだからといふので、大宮で二三日を過ごした。歸京した翌日、現在の旦那から「會社の用事が忙はしく、五六日行くことが出來ぬ」といふ手紙を受

瑠璃　時代物　十一段【作者】梅野下風・近松保藏【角書】御陣は九州地理は八道【名稱】毛谷村の六助が吉岡の遺族を助けて一味齋の敵を討つのであるが、彦山の權現に祈誓すると云ふ場は作中に見えない。【初演】天明六年閏十月十八日。道頓堀東の芝居。座本竹本千太郎。後見竹本政太夫。【諸本】七行百七丁本。淨瑠璃名作集上(有朋堂文庫)所收。【題材】「鎭西御軍記」と呼ぶ寫本に、實說と云ふのが傳へられてゐるが、又一說に宮本武藏の物語から作意を得たもので、事實無根との說もある。それほど本曲は「嚴流島」と構想を同じくしてゐる所が多い。

【梗概】【初段】(住吉社前)　天下の領眞榮

以て仕へる京極內匠は、お菊を懇望して容れられず、御前試合にも一味齋に負け、暗殺を決心する。木曾官は明智の殘黨と見現はされて切腹したが、末期に內匠に向つて汝は光秀の遺兒であると敎へ、死後もその魂魄は、光秀の守刀蛙丸を奪つて逃れる內匠に附添つて守護する。【四段】(石清水八幡)　一味齋は周防の國へ來てこの社の普請奉行を勤めてゐる。京極內匠は、種ケ島を持つて海岸に歸途を覗ふ。【五段】(一味齋屋敷)　一子三之丞は眼病に惱んでゐるが、大兵で武藝に達する。娘のお園は泣く〳〵父の死骸に附添つて歸つて來る。折柄入來した上使が餘りに無禮なので、お園

かつた。

【批評】本篇は甲州の勝頼と信長・家康との爭ひ、勝頼の悲しい敗北等を背景として、笠井大六郎高英を主要人物としてゐる。一癖ある髯男、剛勇・大膽、而も情に脆い彼、高英の面目を躍動させてゐるが、同時に彼の叔父も亦力強く生動してゐる。殊に高英が宗春の姉玉枝及び富永孫太夫等を相手に、酒間、宗春との一騎討や當時の感慨を物語るあたりは、涙なしには讀むことが出來ぬ。ただ全體の構圖が少しく混雜に流れ、統一を缺いてゐるのは惜しい。〔高須〕

悲劇（ひげき）「演劇」を見よ。

悲劇美（ひげきび）「悲壯美」を見よ。

髭櫓（ひげやぐら）能狂言【別名】髭垣立（ひげかきたて）【格式】内神文濟相傳の部（大藏流）。【解說】下京邊に住む大髭の者が、大嘗會の犉の鉾の役に選ばれ、大に喜んで女房を呼び出し、髭の掃除をさせようとする。女房は、平生から見苦しい〳〵と思つてゐた所であるから、一思ひに剃つてしまへと言ふ。色々言ひ合つた結果、夫婦喧嘩となり、女房を打擲する。そこで女房は近所の女房共を語らつて、長道具や毛抜を揃へて押寄せる。大髭の者は髭に要害をしてせり合ふが、遂に「多勢に無勢叶はずして垣立櫓を引落され」、大髭を大毛抜で挾み取られるといふ筋。寛正五年京都「糺河原勸進能」番組にも「ヒゲカイタテ」（異本には「髯やぐら」）と見えてゐる古い狂言である。大藏流では玄惠法印作と傳へられてゐる。古くから有名だつたものの如く、立圃が「空礫」にも「白髭を圍ふは櫓つばきかな」の句が載せてある。〔瀧田〕

微光（びくわう）小說【作者】正宗白鳥【發表】明治四十三年九月、「中央公論」。【刊行】同四十四年六月、春山書店。現代日本文學全集（正宗白鳥集）所收。

【梗概】お國といふ妾の生活を中心に、嘗て旦那であつた河津や、現在の旦那朝川を配したものである。お國は危篤だといふ郷里の母を見舞ふにあたり、以前世話になつて暫く會はずにゐた河津と上野の停車場で待合せ、せめて暫くの間なりと心を浮々させようとした。郷里へ着いてもその夜は宿屋で男と過ごし、その翌日ほんの言譯に母を見舞つただけで、歸京の途につき、途中、一生のお別れだからといふので、大宮で二三日を過ごした。歸京した翌日、現在の旦那から「會社の用事が忙はしく、五六日行くことが出來ぬ」といふ手紙を受取つて、お國は現在の生活を益々不安に感じて來た。朝川は折を見ては訪ねて來たが、併し商賣人が品物を買取りに來るやうな態度、それにお國が滿足することの出來ないのは當り前であつた。一人の男を旦那にしてゐる間にも、過去のいろ〳〵な男との關係から生じてゐるいろ〳〵な事件に惱まされた。ロマンチックな夢から全然抜けきれないお國は、かうした生活が淺ましくも思はれたが、どうすることも出來ず、やがて又新しい旦那を見出すために、現在の旦那を暫く待たして他所へ出掛けて行くのであつた。

【批評】戀だの愛だのといふやうな精神的なロマンチックな要素は微塵もなく、ただ面倒を見てやる、世話をしてやるといふ次から次にあらはれる男を賴りにして行く女の生活の眞相を、これほど克明に描き出した作品は珍らしい。確かに彼の傑作に加へらるべきものである。〔宮島〕

彦山權現誓助劍（ひこさんごんげんちかひのすげだち）淨瑠璃　時代物　十一段【作者】梅野下風・近松保藏【角書】御陣は九州地理は八道【名稱】毛谷村の六助が吉岡の遺族を助けて一味齋の敵を討つのであるが、彦山の權現に祈誓すると云ふ場は作中に見えない。【初演】天明六年閏十月十八日。道頓堀東の芝居。座本竹本千太郎。後見竹本政太夫。【諸本】七行百七丁本。淨瑠璃名作集上（有朋堂文庫）所收。【題材】「鎭西御軍記」と呼ぶ寫本に、實說と云ふのが傳へられてゐるが、又一說に宮本武藏の物語から作意を得たもので、事實無根との說もある。それほど本曲は「嚴流島」と構想を同じくしてゐる所が多い。

【梗概】〔初段〕（住吉社前）天下の頭領眞柴久吉の御臺眞弓の方が參詣の折柄、三韓の臣木曾官が日本を罵倒するので、互に勝負を爭ふ事になる。木曾官が動かせなかつた馬を、腰元のお菊は易々と引き、木曾官が幻術を以て海水を干せば、御臺は明神に祈つて漫々たる水を湛へて應ずる。〔二段〕（彦山）九州彦山の麓に住む百姓六助は、武藝に優れ、老母にも孝行なので評判高いが、高良明神のお告げを守つて、自分に勝つ者でなくては仕へないと、諸家の招きを退けてゐる。八重垣流の達人吉岡一味齋は、彦山權現の社前で、神體を裝つて極意を六助に授ける。〔三段〕（音成館）久吉の重臣郡音成の家の無禮講。眞弓に仕へる師範吉岡一味齋の娘お菊は今日の祝ひに舞ふ。お菊は衣川彌三郎との間に彌三松と云ふ隱し子まで儲けてゐる。無禮講を幸に奴の友平は彌三松を小猿に仕立てて會ひに來る。この日木曾官は僞地圖を持つて來て日本軍を欺かうとしたが、飛脚となつて入り込んでゐた久吉のために見破られる。又郡家に微塵流を以て仕へる京極内匠は、お菊を懇望して容れられず、御前試合にも一味齋に負け、暗殺を決心する。木曾官は明智の殘黨と見現はされて切腹したが、末期に内匠に向つて汝は光秀の遺兒であると欵へ、死後もその魂魄は、光秀の守刀蛙丸を奪つて逃れる内匠に附添つて守護する。〔四段〕（石清水八幡）一味齋は周防の國へ來てこの社の普請奉行を勤めてゐる。京極内匠は、種ケ島を持つて海岸に歸途を覗ふ。〔五段〕（一味齋屋敷）一子三之丞は眼病に惱んでゐるが、大兵で武藝に達する。娘のお園は泣く〳〵父の死骸に附添つて歸つて來る。折柄入來した上使が餘りに無禮なので、お園は大勢を相手に斬り合ふ。併しそれは主君晉成公がお園の手並を見るためで、母娘の者に敵討を許し、刀劍を餞けとする。盲の悲しさに三之丞は自害して門出を祝ふ。〔六段〕（須磨浦）お菊は彌三松を抱いて敵を搜しながら夜に入つて此處へ差掛り、奴の友平が駕籠を求めに行つた留守に、圖らずも京極に出逢つて返討に會ふ。〔七段〕（栗栖野）内匠も今は獨樂廻しとなつて世を忍んでゐる。それとも知らずお園は同じ所に辻君となつて往來の人に目をつけてゐる。その夜奴の友平はお園を訪ねてお菊の横死を傳へ、自分は責めを負うて自害する。と、友平の忠死に依つて池中から亡靈現はれ、再び内匠に彼は光秀の遺兒である事を知らせ、本當に蛙丸の名劍を讓ると言ひ聞かす。お園はこの怪しい樣子を見て太刀を奪ひ取らうと爭ふ。〔八段〕（杉坂）六助は亡き母の墓前に在すが如く仕へてゐる。この頃城下に、六助に勝つた者は五百石に召抱へると云ふ高札が立てられた。これを知つた京極内匠は微塵彈正と變名して、六助の孝行

あつたので、その盛名に比して直接他に及ぼした影響は殆どない。むしろ可なりに主觀的浪漫的ではあつたが、無自覺ながら内面的人生的個性的であつた點で、後年の自然主義的な文學と傾向を同じくするものである。そして大きいとか、强いとかいふ類ではないが、小さいながらに可憐な味を秘めてゐる文學として、又雅俗折衷體の終を飾つた作家であつて、而も作調に於て後來文學の先驅的な色彩

【作者】市中軒（傳未詳）【刊行】寶永五年【諸本】近代日本文學大系第四編・近世文藝叢書第五編所收。【解說】伊勢古市の色茶屋を寫したもので、艷女（あでやめ）風俗を描いて地方的色彩を出してゐる。寶永二年以後、京大阪地方では伊勢詣りが流行したので、そこに着眼したものと思はれる。五卷十五話、いづれも艷女生活を中心とした說話である。一の一「高麗石」一時千金の歳は、古市艷女の因緣を書いたもの

ひげ男（ひげをとこ）小說【作者】幸田露伴【發表】明治二十三年七月、紅葉の「伽羅枕」（別項）と共に讀賣新聞に揭げられ、好評であつたが、四五回で中絶、後に完成された。【刊行】明治二十九年十二月、春陽堂。露伴全集第二卷所收。

曲小說通志」によると、並木宗輔の生れたのは元祿十年とあり、寶永四年は十一歲にあたるわけで俄に信じ難い。〔小泉〕

れと知つて小太郎の姉玉枝は、弟の仇を討たうと彼を尋ねて來ると、彼は當時の光景を話し、快く首さしのべて討たれようとする。玉枝は、その潔さに動かされて討つことは出來なかつた。この由早くも酒井忠次（宗春の亡父の友）の知るところとなり、忠次は笠井大六郎の天晴れな勇士振に感心して、玉枝を宥めて和解させた。その後、笠井はなほ寺に起臥してゐたが、家康は彼の一命を取らうとはしな

を幸ひ、僞母を背負つて來て窮狀を訴へ、試合に勝を讓つてくれと承諾させる。その日の歸途、六助はお菊の遺兒彌三松を伴ふ佐五平が京極一味の者に返討に逢ふ所へ來掛り、誰の子とも知らず彌三松を助け歸る。〔九段〕（六助住家）敵を搜し歩いてゐた一味齋の妻お幸は、彌三松の着物が干してあるのに目をつけ、入つて來て母にならうと云ふ。お園も虚無僧となつて徘徊してゐたが、同じく彌三松の着物を見て、正しく山賊と早合點し、斬り合ひとなる。併し互に本名が分ると、お園は許嫁の良人の六助なので、今更のやうに喜ぶ。時に柚人が見覺えのある老母の死骸を運んで來て六助に敵討を賴む。此處に初めて六助は計られた事を知つて怒る。而も紛れもない敵京極であるので、一家は急に勇みたつ。六助は舅の敵を討つ前に、試合の恨みを晴すべく小倉城へと急ぐ。〔十段〕（立浪館）城主立浪家に着いた六助は、酒宴の席に押して出て首尾よく京極を打据ゑる。觀念した內匠は、己の惡事を自白して六助に斬つて掛る。不思議や蛙丸の名劍のために、六助の刀は折られてしまふ。これがため、內匠は明智の殘黨と見現はされ、亂鬪となる。（角力）久吉の御前での角力。六助は主人定めの積りで出場する。非凡の力量を見せた六助も、三十八番目に加藤正淸の威に恐れてその家來に負け、正淸の家來となる。かくて六助は貴田孫兵衞と改名し、愈々敵討をする事になる。〔十一段〕（敵討）檢使として加藤正淸が臨席し、晉成公よりは名代として衣川彌三郎が下向する。群集環視の中に一味齋の遺族、妻お幸・娘お園・孫彌三松は六助に助けられて目出度く敵を討つ。

【解說】「鉄香山」（別項）以來の大當りであつたと云ふ本曲は、寶曆期の時代物の定型なる光秀殘黨の謀叛事に敵討を配したものである。敵討は殊に「敵討嚴流島」（別項）の影響を受けること多く、人物・構想等殆ど一致する。ただ著しい相違は、お園と云ふ女丈夫の活躍であるが、これも歌舞伎劇の女伊達の移入であらう。なほ七段栗栖野の場は「けいせい睦玉川」（別項）の四幕目藤棚の場の飜案である。全曲中、五段一味齋屋敷、六段須磨浦、七段栗栖野（通稱を瓢箪棚の場と呼ぶ。お園と內匠が棚の上で蛙丸の太刀を奪ひ合つたりする）、九段六助住家等が名高い。殊に九段は歌舞伎に入つて、今なほ屢々上演されてゐる。本曲は爾後繰り返し上演されてゐる外に、黃表紙・合卷・讀本等に影響作を算へる事が出來る。（敵討嚴流島參照）

【參考】近世邦樂年表（義太夫節之部）〔鶴見〕

比古婆衣（ひこばえ）　隨筆　十一卷　【著者】伴信友　【刊行。諸本】もと二十卷あるうち、卷一・二は弘化四年の刻、卷三・四は文久元年の刻、卷五―十一は明治に入つて活印せられ、近藤瓶城の存採叢書中に收められた。卷十二―二十は未刊であつたが、後に合して伴信友全集・百家說林續編に所收。【解說】本書は國史・國文・國語に就いて著者が年來考證した事どもを輯錄したもので、國學者の隨筆中、最も出色の一と稱せられる。卷一には日本書紀考外二條、卷二には腹赤外一條、卷三には天石屋外十三條、卷四には唱更國外十條、卷五には喚子鳥外四條、卷六には撰續日本紀次第考外八條、卷七には譯考外六條、卷八には新國史考外五條、卷九には荷前外五條、卷十には誄詞外二條、卷十一には右近の馬場のひをりの日とよみきたれることの論外七條、卷十二には踏歌考外二條、卷十三には風土記考外四條、卷十四には多米宿禰本系帳考外五條、卷十五には崇神紀なる小兒の神託の詞外五條、卷十六には皇胤紹運錄本名由來考外四條、卷十七には本草和名傳抄の論外五條、卷十八には鶴鴿考外十二條、卷十九にはあまのさかて外九條、卷二十には美多萬乃布由外十四條を收め、往々圖書を挿んである。卷二の末に弘化四年十一月著者の男信近の跋がある。〔和田〕

比古婆衣續篇（ひこばえぞくへん）　隨筆　九卷　【著者】伴信友　【諸本】日本隨筆全集・伴信友全集第四・百家說林續編所收。【解說】卷十二以下二十に至る九卷の初卷卽ち全篇の卷十二に踏歌考以下二條、卷十三に風土記考以下三條、卷十四に多米宿禰本系帳考以下五條、卷十五に崇神紀なる小兒の神託の詞以下六條、卷十六に皇胤紹運錄本名由來考以下五條、卷十七に本草和名傳抄の論以下三條、卷十八に鶴鴿考以下十三條、卷十九にあまのさかて以下十條、卷二十に美多萬乃布由、また美多萬布利といふ事の考以下十五條を收めてゐる。一條數千言に及ぶ考證論篇も多く、國史・國語・國文學者の參考資料として有數のもので、尋常一樣の隨筆ではない。〔和田〕

彦八（ひこはち）　落語家　【姓名】米澤彦八とも呼ばれてゐたが、米澤が本姓であるか否か不明。【生歿】「嬉遊笑覽」には「また元祿末より寶永の頃に彦八といふ者あり」とあり、正德元年刊の「八子枕」にも見えてゐるから、元祿から正德年間まで生存してゐたことは事實である。【閱歷】詳かでないが、彼は落語界の初期に於て、大阪の生玉を定場とし、仕形ばなしの辻咄をしてゐたのである。京都の露五郎兵衞や江戸の鹿野武左衞門（各別項）に對し、大阪に於ける一名物であつた。從つて大阪落語の祖と仰がれ、當時の盛り場生玉に於て名聲を博してゐた。寶永七年版の「伽羅女」にも、「當世しかた物まね米澤彦八輕口咄太夫萬歲らくすけ」ともあり、「八子枕」に「當世はやり物正法寺の日親上人もよい所に居られて生玉の戻り足萬歲彦八に費したる錢を十二銅につゝみ」とそれ〴〵引用してゐる。彦八が萬歲彦八と稱したものか、又萬歲と彦八とが別人であるかに就いて「嬉遊笑覽」は別人とし、關根默庵は同人としてゐる。【門葉】安永三年、大阪刊の「自慢顏」にも彦八の名が見えてゐたから、系統は明かでなくても、大阪落語界に引續いて重きを置かれた點は首肯出來る。又一般に大阪にては、辻咄をする者をば彦八と稱したと關根翁は說いてゐるほど、落語界に影響するところ甚大であつた。〔小柴〕

孫姬式（ひこひめしき）　歌學書　一卷　【著者】「和歌現在書目錄」には菅賊といつてゐるが、何に據つたものか明かでない。【諸本】「和歌現在書目錄」及び「八雲御抄」に、「孫姬式有序」と云つてゐるが、現行本は序文はない。而して終りに、「長祿四年庚辰正月十六日以顯昭本令書寫畢、東山隱士圓雅」といふ奥書を載せてゐるが、顯昭の「古今集注」「古今集序注」「袖中抄」「萬葉時代難事」に引用する文を見ない。恐らく元來序文のあつたものが中世以後に於て脫落し、而して前記諸書に見える引用文はその一節ではないかと想像される。兎に角現存傳本は完本とは言ひ難い。【內容】現行本の本文は、和歌八病・長歌式の二部より成る。和歌八病とは同心（和楽聯）・亂思（和形迹）・擱蝶（和平頭）・渚鴻（和上尾）・花橘（和翻語）・老楓（和雷語）・中飽（和結腰）・後悔（和解體―體一本作鑑）の八つ（括弧內はそれ〴〵の聖名）を云ふ。同心とは一篇の中に再び同語を用ひた場合、亂思とは義優ならざる場合、擱蝶とは句首を勞はらうとして末の義が疎かになつた場合と云ふ如き類である。各例歌を二三首づつ擧げて說明してゐる。次に長歌式の部では、柿本人麿呈高市親王歌と題する歌を例として長歌の歌體を說き、而桑門製長歌云々として喜撰式に出てゐる五七五反復體長歌を批評してゐる。【價値】和歌四式（別項）の一で、他の三式と同じく卷首に歌病論（歌の病參照）があるが、彼の病が專ら音韻に關し、同音重複を問題にしてゐるに對して、これは詞或は內容にまで立ち入り、殊に第四の渚鴻病の如き、韻に拘泥してその首を勞はらざる場合を云ふので、

ふ。同心とは一篇の中に再び同語を用ひた場合、亂思とは義優ならざる場合、糊蝶とは句首を勞はらうとして末の義が疎かになつた場合と云ふ如き類である。各例歌を二三首づつ擧げて說明してゐる。次に長歌式の部では、柿本人麿呈高市親王歌と題する歌を例として長歌の歌體を說き、而桑門製長歌云々とて喜撰式に出てゐる五七五反復體長歌を批評してゐる。【價値】和歌四式（別項）の一で、他の三式と同じく卷首に歌病論（歌の病參照）があるが、彼の病が專ら音韻に關し、同音重複を問題にしてゐるに對して、これは詞或は內容にまで立ち入り、殊に第四の渚鴻病の如き、韻に拘泥してその首を勞はらざる場合を云ふので、そこに、七病論・四病論に對する反省が見られる。又同心病は、平安朝中期以後の歌論界に於て可なり重んぜられた說である。長歌式の部で「喜撰式」の說を批評してゐるのも興味が多い。作者は明かでないが、內容より推して平安朝中期以前の作とすべく、當時の歌論を見る上に參考すべき資料である。ただ脫落の度多く、文義不通の所がある。

【參考】上代國文學の研究（武田祐吉（第三編五「歌經標式」）○文學論として見た初期の歌論（大井廣（國語國文の研究二五）○四家歌式に就て（吉澤義則（藝文明治四五ノ一一）　〔中島〕

彦火火出見尊　ひこはほでみのみこと　神話　【名稱】「古事記」には天津日高日子穗々手見命とあり、「日本書紀」には火折彦火火出見尊とある。又單に火折尊とも云ふ（記・紀）。「天津日高」は天孫の義である。「ほほでみ」の「ほほ」は稻の大穗、「で」は根に通じ、「み」は耳と同じく、皆美稱であり、從つて名の全體は、天津日嗣に由ある稻穗を以て稱へたものとなす說、「天津日高」は、天に輝く日に譬へた尊稱、「ほほでみ」は「穗々出實」の義で、稻穗が盛んに實る意となす說、「ひこほ」は、彥に更に秀を添へたもので、「ひこ」の秀なるものの意、「ほでみ」は、秀出身の意となす說等、解釋が區々である。神武天皇の名も彥火火出見尊と呼ばれた事實から推すと、この稱呼は或は漠然たる尊號であつたかも知れぬ。「ほをり」につきても、火弱の意とする說、「火が鎭まる」意とする說等があるが、要するに豐玉姬が產屋を燒いた火の變化に因んだ名であることは疑ひなからう。【系統】瓊々杵尊の子、生母は木花開耶姬。末子であることに注意しなくてはならぬ。

【神話梗概】火照命（「古事記」による。「日本書紀」には火闌降命とある）、海幸彥（海佐知毘古）として海に漁し、弟の彥火火出見尊は山幸彥（山佐知毘古）として山に獵してゐたが、或る時二人は幸を換へることにした。ところが彥火火出見尊は一魚も獲ないばかりか、兄の鉤を失つてしまつた。で、新しく鉤を作つて返さうとしたが、火照命はこれを肯んぜず、元の鉤を返せと言ひ募つた。尊は困つて海邊で泣いてゐると鹽椎神（鹽土老翁）が無間勝間之小船（目無籠）を造つて海宮に行かしめた。尊は海宮に到ると、敎に從つて井邊の桂の樹に登つてゐた。と、海神の女豐玉姬の侍婢が玉器を持つて水を酌みに來たので、尊は頸の玉を解いて器の中に吐き入れた。姬は怪しんで館を出で、尊を見てこれと婚した。居ること三年、海神は尊の樂しまざるを見てその故を尋ねる。尊が鉤を失つたことを語ると、海神は直ちにすべての魚を集めて樣子を探る。と、赤海鯽魚が喉を痛めてゐたので、これを探ると鉤が出てきた。海神は尊に敎へて、「この鉤は、おぼち、すすち、まぢち、うるぢと云ひて、後手に賜へ」と云ひ、また鹽滿珠・鹽乾珠を與へて火照命を溺れ苦しめ、また活し助くる術を話した後、わにの背に尊を乘せて送り還した。尊が敎はつた通りにして鉤を返すと、火照命は次第に貧しくなつたので、怒つて尊を攻める。尊は鹽滿珠で潮を出して、これを苦しめたので、火照命は罪に伏して、今後尊の晝夜の守護をなし、また俳優の民となることを誓つた。

【解說】歷史的解釋に從へば、海幸彥・山幸彥爭鬪の物語は、太古九州に於ける二大勢力の文化的葛藤の表現である。海幸彥は九州南部卽ち隼人族の國土を代表し、山幸彥は九州北部を代表してゐる。そして鹽滿珠・鹽乾珠の物語は、九州西海岸の潮の干滿の差が著しいといふ自然現象に基いてゐるとなす。成る程この物語に史的要素が含まれてゐることは拒まれまい。海幸彥を隼人の祖とする說話的趣向が、隼人を領民とした隼人君の祖先阿多氏の家系を貴くする意圖の反映であるらしい事、海幸彥の後裔が宮廷と優人の技とを以て代々朝廷に仕へるやうになつたといふ筋が、隼人が實際に宮廷に奉仕するに至つた文化事實の潛入であることなどがこれである。併しこの物語の全部を目して、這般の二大勢力の爭鬪の史實から生れたとする考へ方には贊同し難い。そこで、海幸彥と山幸彥との爭鬪及び後者の前者に對する復讐の物語と、海宮の物語とを分離して、發生的にはこれ等の二つは別個の說話であつたのが、後に混融して一つとなつたとなす解釋が生れてゐる。更に第三の解釋として、自分はこの物語全體を目して、インドネシアの末子成功型の一神話の變容であらうとなす假說を提出して置きたい。インドネシアの神話に於ても、（イ）相爭ふものは兄弟であり、（ロ）弟が兄の鉤を失つて責めたてられ、（ハ）これを探しに出かけて一魚の喉から獲、（ニ）歸來兄を苦しめて克服する。木に登る話根はこれに缺けてゐるが、同じくインドネシアの他の一神話で、投槍を失つてこれを探しに行く一漢子には、山幸彥そのまゝに木登りの事件が絡はつてゐる。自分は、物語の細部に於ける這般の類同を偶然の一致としたら、說明が困難ではなからうかと思ふ。又この說話だけが、著しく海洋的色調を帶びて、神代に於ける全神話群と甚だ異つた特殊性を示すことや、隼人族が或はインドネシア土族と血緣を有してゐはしないかといふ蓋然率が可なりあることも、考の中に入れなくてはなるまい。更にまたこの說話は、本來彥火火出見尊を主人公とするものではなくて、隼人族の傳承であり、且つ隼人舞の筋をなしてゐたのが、隼人が宮廷で舞を演ずるやうになつたのを機緣に、尊の物語に混融したのであるかも知れぬ。鉤を詛うて持主に返す筋は、鉤が「さち」として一種の神祕的勢能を內存させると信ぜられたから、呪言によつてその勢能を損ひ、それを通して持主に災を與ふるといふ觀念から出たものであらう。山幸彥海宮入りの說話は、浦島（別項）と相通ずる面目を備へてゐるため、或る學徒は浦島式傳說の源流であるとなしてゐるが、さう簡單な斷定を下すことは困難である。浦島型の說話と他の型との結合と見るべきであらう。

【參考】○古事記傳　本居宣長　○古事記新講　次田潤　○日本古語大辭典　松岡靜雄　○倭女王卑彌呼考　白鳥庫吉　○神代史の研究　津田左右吉

○比較神話學より見たる日本神話　松村武雄（國學院雜誌二八ノ二）○神話學論考　松村武雄○比較神話學　高木敏雄 ‖ Bezemer, T. J.: *Volksdichtung aus Indonesien.* 1904. ‖ Dixon, R. B.: *Oceanic Mythology.* (*The Mythology of All Races.* vol. IX.) 1916.

彦火々出見尊繪詞

ひこほほでみのみことゑことば

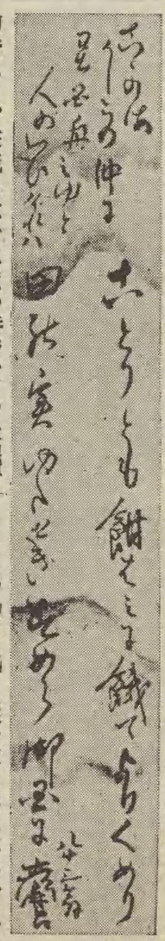
繪卷物【解說】「日本書紀」等に見ゆる山幸海幸の物語を畫いた作品である。即ち話の筋は彦火々出見尊が、その兄より釣鉤を借りて海に失ひ、龍宮に到つてその鉤を得、更に龍王から贈られた鹽滿玉鹽干玉を以て遂に兄を屈伏させたが、尊はまた龍宮に於て豐玉姫の婿となり、姫が出產の時その產所をのぞいた爲め、姫は御子の鵜草葺不合尊を置いたまゝ永久に海中に去つたといふのである。この繪卷は「看聞御記」によると、嘉吉の頃若狹國松永庄の或る八幡宮に「伴大納言繪詞」や「吉備大臣入唐繪」（各別項）と共に在つたものであるが、今原本の在否明かならず、世に三卷の摸本が流布されてゐる。詞は飛鳥井雅經筆、繪は春日光長筆と傳へられてゐるが、摸本によればその繪は描寫濶達にして表現に富み、畫中に詞を挿入して話の筋を運ぶ形式なども、その描法と併せて高山寺の「華嚴緣起」（別項）等と相近い趣のものである。併し又人物の活趣や運筆の特性等には、「伴大納言繪詞」や「吉備大臣入唐繪」等とも類似の點が多く、これを光長筆と傳ふるが如きも、蓋し如上の特性を看取しての鑑定であらう。もと若州の八幡宮にこれ等と一緒に收藏されてゐた事などを思ひ合すれば、この描寫上の類似も偶然ならぬ事と思はれる。蓋し原本は光長系統の筆として鎌倉初葉を下らぬ頃の作かも知れない。（田中（一））

彦火々出見命繪詞（摸本）

彦麻呂

ひこまろ

國學者【姓名】齋藤氏、本姓荻野氏。一名智明。幼名庄九郎。通稱小太郎。後、彦六郎。字は可怜【號】宮川舍・葦假庵（あしかりほ）【生歿】明和五年正月五日、三河矢作に生れ、安政元年（一八五四）三月十二日江戸に歿す。享年八十七【法名】義岳了忠信士【墓所】麻布區今井町法音寺【閱歷】荻野彦兵衞信邦の子。後、齋藤家を嗣ぎ、石見國濱田の松平周防守康任に仕へ、江戸に住した。賀茂季鷹・伊勢貞丈・本居宣長等に學んだ。【著作】勢語圖說抄（國文註釋全書に收む）○傍廂後集共六冊（刊本百家說林・日本隨筆全集等所收）○神代餘波一册（燕石十種第二册所收）○詠歌大概之評（續日本歌學全書第三編所收）○百人一首嵯峨の山ぶみ三册（刊本）○圖書考（日本書畫苑第二所收）。歌集としては、文政十二年の「蓬廬集」二卷が最初である。彦麻呂六十二歲の時で、その後「續蓬廬集」二卷、「後蓬廬集」二卷、「老の繰言」二卷、「正木の葛」二卷等が出てゐる。これを總括したものが「葦假庵集」で、再三拔書をつくり、選擇に非常に骨折つたあとが見えてゐる。この外彦麻呂には「枕草子」に傍註を加へたもの（隨筆文學集所收）、萬葉集版本に書入を加へたもの等がある。【以上森】



彦麻呂筆蹟

【歌風】少年時代、賀茂季鷹の門に入つて歌を學んだ。宣長に師事したのはその二十五歲の時で、彼は學問的にも研究を續け、若干の著書・書入本は殘してゐるが、その成果を完成するには至らなかつた。歌人としては、一生の間に詠んだ歌數は決して少くない。思ふに彦麻呂にとつては、作歌はかなり重大事であつたらしく、念に念を入れて銳意完成を志したのであらう。歌風は一般的で、當時の風から出てゐないが、特に眼につくのは、緣語・懸詞・本歌取り等の多いことである。姿體は整つてゐるが、實感味は甚だ薄い。

つりあぐる魚の尾ひれの露にしもしほしはやどる月のかげかな（月の夜に魚つるといふ事を）

見ることいつもりて老となるものをしらでや月のおもがはりせぬ（月前述懷）

これ等の作が、彼の作としては比較的佳いものであつて、平明の中にその特色を表はしてゐる。【以上羅田】

彦六座

ひころくざ

【名義】「彦」とは「貧乏」の通語で、貧乏人が六人同氣相求めて組織した五代簑助門下の素人義太夫「彦六社」による。【成立】人形芝居は、二本の對立小屋がなくては興隆しないといふ見地から、當時松島の文樂座（別項）に對して、人形芝居の興行が企てられた。素人義太夫の十八といふ者が、この彦六座の金主であり、創立者であつた。十八とは素人義太夫曲名で、本業は大阪の酒屋、屋號を灘屋といつた。本名が寺井安四郎、故に「灘安」で通つてゐた。後、本業の太夫となつて二代竹本柳適太夫を繼いだ。瀨踏みとして大阪日本橋北詰澤の席で、明治十六年十月、紋下五代豐竹駒太夫。庵、竹本重太夫。その他、初代春子太夫後の三代大隅太夫・組太夫・初代柳適太夫等。三味線の紋下格が初代豐澤新左衞門、筆頭が野澤吉彌。人形は吉田辰五郎・豐松東十郎・吉田駒十郎。「筆海四國開書」（弘法大師一代記）、「近江源氏」の八ツ目、「鰻谷」で旗揚げをした。續いて翌月「忠臣藏」「戀娘」で、庵の重太夫が紋下に坐り、駒太夫が拔け、三味線に豐澤廣作（六代廣助）が加入した。翌十七年一月一日初日で、博勞町北門彦六席で本興行に入つた。第一回が「菅原」の通し、これが彦六座の初めで、稻荷の北門に新築した。この時までは、席は穢ない土間に蓆を敷き詰めてゐたのが、彦六の新席は、板を張り疊を敷き、夏は簾席を敷き詰め、客席の中央に噴水を造るなど接客法に意を用ひた。同二月の興行から「いなり彦六座」と座名を名乘つた。紋下に竹本重太夫の外に、三味線豐澤廣助と並べ書した。これは文樂座の紋下に三味線豐澤團平が始めて三味線の紋下として明治十六年四月に坐つた例に擬したのである。この第三回目の同年三月興行に、人形の紋下として吉田才治が坐つた。第一回の初興行は思はしくなかつたが、漸次人氣を得て、文樂座のためには一敵國をなした。且つ船場博勞町といふ地の利を得て、西の松島に於ける文樂座は、新興の彦六座に一籌を輸する氣配が見えたので、文樂座は明治十七年九月、船場（せんば）卸靈（おろしだま）へと移轉した。この文樂座の移轉を柳適太夫の死、座の燒失などのため、小屋は漸く再築したが、衰勢は盛り返へすことが出來ず、この明樂座も同三十六年一月再び瓦解。同三十八年九月二十日明樂座の殘黨若手の團結を見、今度は北堀江市の側堀江座で、座主木津谷吉兵衞で「彌陀本願三信記」「壽式三番叟」「本朝二十四孝」を以て最後の繼城となつた。そして同四十四年五月まで引續いたのが、翌年正月、大阪の淨瑠璃愛好の紳士連中によつて、四ツ橋々畔に「近松座」が創立され、曩きに文樂座へ去つた大隅太夫を引戻し、堀江座の上置として花々しく開演した。近松の座名に因み、「國姓爺合戰」が初興行の出し物であつたが、大正二年大隅太夫の臺灣に於ける客死、伊達太夫（後の土佐太夫）の文樂入りで、春子・長子

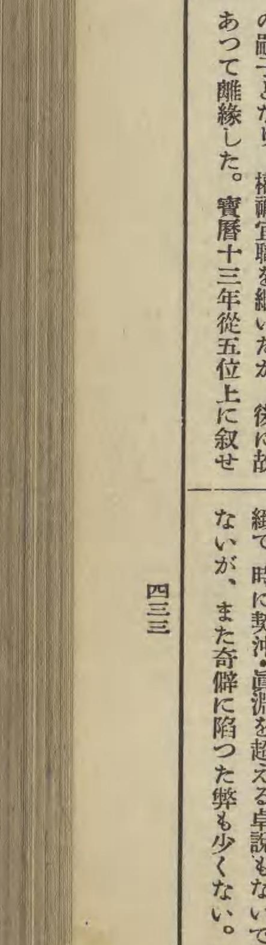
席の中央に噴水を造るなど接客法に意を用ひた。同二月の興行から「いなり彦六座」と座名を名乘つた。紋下に竹本重太夫の外に、三味線豐澤廣助と並べ書した。これは文樂座の紋下に三味線豐澤團平が始めて三味線の紋下として明治十六年四月に坐つた例に擬したのである。この第三回目の同年三月興行に、人形の紋下として吉田才治が坐つた。第一回の初興行は思はしくなかつたが、漸次人氣を得て、文樂座のためには一敵國をなした。且つ船場博勞町といふ地の利を得て、西の松島に於ける文樂座は、新興の彦六座に一籌を輸する氣配が見えたので、文樂座は明治十七年九月、船場御靈へと移轉した。この文樂座の移轉を機會に、名人豐澤團平（別項）が文樂座を八月脫退し、十月から彦六座へ加入した。これ迄は彦六座は新興の意氣を持して文樂座と戰つたのみで、實は藝道の中心がなかつた。團平の加入と共に文樂座で重きをなした美音の竹本住太夫も新たに加入した。そして團平が三味線に於ける造詣とその不世出の才分とが融合して、彦六座の太夫養成のために渾身の力が盡され、爾來彦六座には嚴然たる藝の中心が出來た。同年十一月興行から、遂に團平は春子太夫をして三代大隅太夫を襲名せしめて、大隅を大成すべく努力した。「國姓爺」の獅子城が大隅のために選ばれて眞に血の出るやうな猛練習を續け、遂に大隅を以て明治淨曲界の大立者たらしむると共に、彦六座は不幸短命に終つたが、永く淨曲界に彦六系統を生み、後の人形淨瑠璃に文樂座派に對して一大傍流をなし、松竹の文樂座に春太夫系・法善寺系があると共に、彦六系の一流を殘すに至つた。かくて彦六座の盛時十年にして、住太夫・初代柳適太夫の死、座の燒失などのため、小屋は漸く再築したが、衰勢は盛り返へすことが出來ず、明治二十六年九月の興行は極めて不成績のため、金主の二代柳適太夫が姿を隱したので、開場七日にして休場となり、「彦六座」は潰滅した。次にこの一座へ、久しく文樂座を休場してゐた五代竹本彌太夫が入座し、金主に華里幸治郎が坐り、紋下は彌太夫・團平・華里（座主）と責任者三名の連名で、翌二十七年五月二十六日初日で「彦六座」を「稻荷座」と改稱して、稻荷の北門の元の芝居で復活した。が、恰も日清戰爭に遭遇し、座主華里が經濟上の失敗を重ねたので、彌太夫・大隅太夫・團平等の主なる者は、無報酬で勤め、「大阪文藝株式會社」として稻荷座の苦境を救はんとし、その旗揚興行に「忠臣藏」「壽式三番叟」「桂川」を以て望み、團平以下大童の苦闘を續けたのは、明治二十九年十一月二日初日であつたが、これ亦三十一年六月を以て瓦解した。これより先、同年四月一日盟主の豐澤團平が舞臺で大隅太夫の「志渡寺」を彈きながら、腦溢血で頓死し、彌太夫また引退したので、彦六座旗揚げの稻荷の北門の芝居は、遂に維持する事が出來なくなつた。かくて彦六系の殘黨は、同年十一月稻荷の牙城を捨て、堀江遊廓の明樂座（北堀江上通二丁目）に「堀江明樂座」として起つた。一座は大隅・住・組・春子・新靱・此・長子・生島の諸太夫に、三味線の筆頭は廣助・龍助・源吉・小團二・友松（後の道八）・新左衞門（二代）、人形は清十郎・門造・玉來・蓑助（後の文五郎）・兵三などであつて、團平に死別した大隅は、鶴澤叶の三味線で、「伊賀越」を通しで「岡崎」を出し、春子の「揚屋」で新興の意氣を示した。そして紋下太夫を缺き「淨瑠璃人形入稻荷一座」と据るたが、大勢は再び回らすことが出來ず、この明樂座も同三十六年一月再び瓦解。同三十八年九月二十日明樂座の殘黨若手の團結を見、今度は北堀江市の側堀江座で、座主木津谷吉兵衞で「彌陀本願三信記」「壽式三番叟」「本朝二十四孝」を以て最後の籠城となつた。そして同四十四年五月まで引續いたのが、翌年正月、大阪の淨瑠璃愛好の紳士連中によつて、四ツ橋々畔に「近松座」が創立され、曇きに文樂座へ去つた大隅太夫を引戻し、堀江座の上置として花々しく開演した。近松の座名に因み、「國姓爺合戰」が初興行の出し物であつたが、大正二年大隅太夫の臺灣に於ける客死、伊達太夫（後の土佐太夫）の文樂入りで、春子・長子（後の六代彌太夫）の惡戰苦闘も力及ばず、大正三年五月、近松座は遂に閉鎖した。即ち、

澤の席—彦六座—稻荷座—明樂座—堀江座—近松座。

と聯鎖的に繼續した彦六系が、こゝに全く潰滅し、人形淨瑠璃は全く文樂座の獨占、或は文樂傘下に全く合流する事となつた。（文樂座參照）

【石割】

久老 ひさおい　國學者　【姓名】姓は橘村・宇治・荒木田。初名正恭、後に正直。通稱彌三郎後に主稅【號】五十槻園【生歿】延享三年生れ、文化元年（一八〇四）八月十四日歿す。享年五十九【閱歷】伊勢外宮祠官度會正身の第四子として生れ、寶曆三年、八歲で外祖父秀世の嗣子となり、權禰宜職を繼いだが、後に故あつて離緣した。寶曆十三年從五位上に叙せられ、明和二年（二十歲）江戶に下り、縣洞の門に入つて約三箇年、直接その教を受けた。明和四年正五位下、同八年從四位下、安永二年位記を返上し、職を辭して荒木田求馬久世の嗣となり、久老と名告り、內宮權禰宜に補せられた。安永八年從五位上、同九年正五位下、寬政元年從四位下に敍せられてゐる。



久老筆蹟

【著作】日本紀歌之解槻落葉三卷（別項）○續日本紀歌之解槻落葉三卷（天明八年六月の自序。寬政十年三月刊。萬葉集卷三の解釋。萬葉叢書第四輯）○竹取翁歌解一卷（寬政十年成。同十一年刊）○槻落葉續日本後紀歌考一卷（天明八年八月成。寬政六年刊）○校正肥前風土記一卷（寬政十一年三月校了）○校正豐後風土記一卷（寬政十二年五月校了）○信濃漫錄一卷（槻落葉信濃漫錄參照）○校正出雲風土記一卷○校正和名類聚抄十二卷○祝詞考追考一卷○古言清濁辨論一卷○難波舊地考一卷○酒之古名區志之考一卷○古事記歌解二卷○播磨下向日記一卷○播磨漫錄一卷○五十槻園集○槻の落葉（別項）○雜文雅文（文苑玉露所載）。

【學風】宣長と同じく眞淵門下として伊勢に在り、江戶に於ける縣居門下が或は文人的であり、或は學者的であつたのと異つて、思想家的傾向が著しかつた。併しその所說に於ては反宣長派として注目される一人である。その業績中注目すべきものは「日本書紀」の歌謠研究である。その語義考究の態度は熱心且つ精緻で、時に契沖・眞淵を超える卓說もないではないが、また奇僻に陷つた弊も少くない。大

幸の物語を畫いた作品である。卽ち話の筋は彦火々出見尊が、その兄より釣鉤を借りて海に失ひ、龍宮に到つてその鉤を得、更に龍王か

（本

郎。後、彦六郎。字は可怜【號】宮川舍・幸庵【生歿】明和五年正月五日、三河矢作に生れ、安政元年（一八五四）三月十二日江戶に歿す。享年八十七【法名】義岳了忠信士【墓所】麻布區今井町法音寺【閱歷】荻野彦兵衞信邦の子。後、齋藤家を嗣ぎ、石見國濱田の松平周防守康任に仕へ、江戶に住した。賀茂季鷹・伊勢貞丈・本居宣長等に學んだ。【著作】勢語闕說抄（國文註釋全書に收む）○傍廂後集共六册

のであらう。歌風は一般的で、當時の風から出てゐないが、特に眼につくのは、緣語・懸詞・本歌取り等の多いことである。姿體は整つてゐるが、實感味は甚だ薄い。

つりあぐる魚の尾ひれの露にしもしほしはやとる月のかげかな（月の夜に魚つるといふ事を）

見ることのいつもりて老となるものをしらでや月のおもがはりせぬ（月前述懷）

これ等の作が、彼の作としては比較的佳いも

ツ目、「鰻谷」で旗揚げをした。續いて翌月「忠臣藏」「戀娘」で、庵の重太夫が紋下に坐り、駒太夫が拔け、三味線に豐澤廣作（六代廣助）が加入した。翌十七年一月一日初日で、博勞町北門彦六席で本興行に入つた。第一回が「菅原」の通し、これが彦六座の初めで、稻荷の北門に新築した。この時までは、席は穢ない土間に席を敷き詰めてゐたのが、彦六の新席は、板を張り疊を敷き、夏は簾張を敷き詰め、客

本】「俳諧七部集」（別項）の一であるから、七部集の諸本中のものがあり、芭蕉全集類中のものがある。「古板俳諧七部集四冊揃ひさご定本」には、所謂元祿版の寫眞版も見られる。【内容】巻頭に元祿三年六月の越人の序があつて、「花見」と題する芭蕉の句を發句とする芭蕉・珍碩・曲水の三吟歌仙、珍碩・芭蕉・路通・荷兮・越人の五吟歌仙（第三から路通・珍碩の兩吟となり、後の一折は荷兮・越人の兩吟）、「城下」と題する野徑の句を發句とする野徑・里東・泥土・乙州・怒誰・珍碩の六吟歌仙、雜と題する乙州の句を發句とする乙州・珍碩・里東・探志・昌房・正秀・及肩・野徑・二嘯の九吟歌仙、「田野」と題する正秀の句を發句とする正秀・珍碩の兩吟歌仙の五巻を收めてゐる。即ち獨立の發句を收めない五歌仙のみの集で、そのうち、芭蕉は第二歌仙の脇句を附け、第二歌仙に終りまで加はつてゐるのは、路通・荷兮・越人のみで、近江でも膳所以外の人では大津の乙州が加はつてゐるのみで、その他はすべて膳所の人である。即ち近江五歌仙とも云ひ得ると共に、擧つて珍碩を中心とする膳所五歌仙とも云ひ得るものである。かゝる集の出來てゐるのは、芭蕉が元祿三年の春夏の頃、伊賀・伊勢と膳所との間を往來してゐて、恐らくその間に膳所で成つたものを集めたからであらう。また名古屋の荷兮・越人が加はつてゐるのは、その卷を名古屋へ送つて纏いで貰ひ、且つ越人に序を乞うたものと思はれる。【史的地位・價値】去來は芭蕉の奥羽行脚の後當門の俳諧が一變したその變風を示すものが「ひさご」「猿蓑」であるとし（贈言氏其角に書き）、風國・許六・支考たどもほゞ同樣の見解であるが、さう見らるべきものである。ただ「ひさご」「猿蓑」でも「冬の日」に似ず、伊勢に於ける縣門として對立の形勢を成したのでないことは、「鈴屋集」卷六の五十槻園に宛てた書翰に於ても契沖及び父正身を傳承し、而も久老獨自の語學的見解から、深く古歌の生命と稱せられるものが見ちれる。歌論に於ては特に歌の風致を重んじ、調べを主とし、理に陷ることを排してゐる。當時の歌が風致なく、餘情なく、緣語・言葉のいひくさりのみを求めてゐるのを非とし、又詞は前後の調線に依つて近古の差別はなくなるから、古言を後世風の歌に交へても惡くはないと言つて、宣長の古體近纖體說に反對してゐる。かくの如き反宣長氣分は宣長の名望の高まるに從つて愈々濃く、從つて鈴屋の學說を肯かぬ者は多くこれに從ひ、伊勢に於ける縣門として對立の形勢を成すに至つた。併し宣長との私的交情が惡かつたのでないことは、「鈴屋集」卷六の五十槻園の詞にも窺はれ、又寛政七年四月十六日には久老が宣長を招待したこともあつたほどである。人と爲り豪放不羈、家柄によつて氣位が高く、世事には淡泊で詩人的風格を持してゐた。詠歌は長短歌共に萬葉風の氣概に富み、雅文にもまた氣品があつた。「槻の落葉」（別項）に眞淵の敎言として、萬葉研究は古道闡明を目的とすべきである由を記してゐるのは注目に値する。

【參考】古學小傳卷一 ○近世三十六家集略傳下卷 ○國學者傳記集成 ○和歌史の研究 ○國文學二ノ三 ○荒木田・慶會二氏の文學松平樂翁 ○國文學二ノ三 ○荒木田久老の歌權松平樂翁の國語 ○國文學二ノ三 ○荒木田久老の歌權松平樂翁の國語 ○國文學二ノ三 ○荒木田・慶會二氏の文學松平樂翁

に値する。

【參考】古學小傳卷一　○近世三十六家集略傳下卷○國學者傳記集成○和歌史の研究○國學全史下卷　○荒木田久老の歌植松安（國語と國文學二ノ三）○荒木田・度會二氏の文學松木疎絃（わか竹一三ノ一二・一四ノ一―五）　〔西尾〕

膝栗毛（ひざくりげ）　「道中膝栗毛」を見よ。

ひさご　連句集　半紙本一册　【撰者】濱田珍碩。越人とする説があるが、これは序文が「猿蓑」に對してやゝ異なる點は、發句の加はらない連句集である事に於て「冬の日」に似た地位を取る事と、「猿蓑」の連句はその出來榮えがして揃つてゐる上、圓熟した蕉風として渾然としたものになつてゐるに對して、ひさごの連句は出來不出來のある上、特に不出來のものには、なほやゝ圓熟味を缺き、曲節奇拔を脫せぬ所のある事とである。されば概言すれば「ひさご」は「猿蓑」と一具すべきものとは云へるが、仔細に云へば「猿蓑」の序曲たる性質を免れない。

【參考】誹諧問題森川許六　○泊船集序風國○歷代滑稽傳森川許六○二十五箇條　各務支考（？）○俳諧古今抄同上○俳諧七部搜櫻井吏登○俳諧十三條同上○雪おろし大島蓼太○俳諧本來道加與　○誹諧諸集訂誤內藤布嶺　○小夜話吉川五明　○七部婆心錄原田曲齋　○芭蕉研究樋口功　○詩人芭蕉萩原羅月　○七部集解說志田義秀（俳句講座俳書解說篇）○ひさご後記宇田久（古版俳諧七部集定本）　〔志田〕

悲慘小說（ひさんしょうせつ）　「廣津柳浪」を見よ。

鼻山人（びさんじん）　洒落本・人情本・合卷・讀本作者　【本名】細川浪次郎　【別號】東里山人・九陽亭　【生歿】寬政二年に生れ、安政五年（二五一八）三月二十五日歿す。享年六十九。　【閱歷】德川幕府の與力で麻布三軒家に住んだ。文筆の才あり、山東京傳の門に入り、鼻山人と號した。所謂京傳鼻を落欵に用ひたのはこの故である。後、流浪落魄して芝切通に傳授屋と稱し、手品の種本を賣つた。後、江戶橋四日市の小店に住んだ。

【著作】〔洒落本〕雛の花（文化十四年）（別項）○花街鑑（文政五年）○傾城肝粒志（文政八年）○青樓曙草（同年）。〔人情本〕蘭蝶記（文政七年）○風俗粹好傳（文政八年）（別項）○腐雜談（文政九年）（別項）○珍說豹之卷（文政十年）○腐の意氣地（文政十一年）（別項）○由佳里の梅（天保元年）（別項）○合せ鏡（天保五年）（別項）。　【合卷】醜た新形（文化四年）○菊童子配盃（同上）○元結濫觴（文化七年）○念猫物語（文化八年）○玉喜久全傳（文化十年）○葉櫻姬卯月物語（文化十一年）○返す返す壽草紙（文化十二年）○安部淸明汁筮帖（文化十三年）。　〔噺本〕工風智惠輪（文政四年）。

【讀本】源平外記染分草（文政五年）（別項）○白璧草紙（文政六年）（別項）○孌女全傳千代物語十卷（溪齋英泉畫、文政十年）○足利持氏鎌倉小雙紙十卷（文政十年）○敵討天下茶屋十卷（文政十年）○都鄙物語十卷（溪齋英泉畫、文政十二年）。

【業績】彼はかなり健筆家で、文化の末年から合卷・讀本等を發表してゐるが、特色あるものを見ない。功績と見るべきは、洒落本から人情本の過渡時代に於て、兩者に跨つて橋渡しをしたことである。殊に人情本に於て爲永春水（別項）の如く形式化せず、自由な態度で、變つた題材を取扱つたことである。「腐雜談」「合せ鏡」等に就いて、これを知ることが出來る。この點で注目すべき作家である。　〔山崎〕

美辭學（びじがく）　修辭學書　二册　【著者】高田早苗　【刊行】明治二十二年五月　【解說】菊池大麓の「修辭及華文」（別項）以後、文章論・小說論など、斷片的なものは現はれたが、修辭學一般に關するもののないのを遺憾として、三上參次の助力を得て著はされたものである。本書はベイン、ホエートレー、カッケンボス等の美辭學により、なほヘブン、ケームス、アンガス、バアヂーン、コックス等の著書をも參酌して編述されたものである。「修辭及華文」は、餘りに簡單に過ぎて抽象的に失し、譯語にも妥當を缺いた點が少くなかつたが、本書はその缺點を補ひ得たと共に、全體の組織もほぼ整ひ、また具體的に和漢文の事例を引用してゐる。多少の生硬さは免れないが、修辭學としては最初の纏まつた書であり、從つて影響するところも甚だ大きかつた。本書を大成したとも見るべきものに、島村抱月の「新美辭學」（別項）がある。　〔高須〕

美而上的（びしじょうてき）　美學　〔獨〕Das Metaaesthetische　【解說】批判哲學的美學の立場から形而上學的美學を批評する場合に、形而上的（Das Metaphysische）といふ語に對應して用ひた言葉であつて、美的なるものの根元を成すものでありながら、而も美的領域以外のものを指して謂ふ。蓋し形而上學的美學は、かくの如き終局の實在、卽ち美的實在（別項）の如きものを根元とするところに成り立つと考へるのである。

【參考】「美學の根本問題」中のクライスの論文　渡邊吉治譯　〔村田〕

鎭火祭（ひしずめのまつり）　神道　【名義】火災豫防のために火神を祭る神事。　【解說】「神道名目類聚抄」に曰く、「六月晦日（つごもり）。是火災を防く祭なり。公事根源に云、卜部氏の人、火を打て宮城の四隅にて祭事あり。火災を禦（ふせ）んためとかや。此祭の間祕術（あんぴじゅつ）多く侍るよし承る」と。この祭は、上代に火を神聖視したと同時に、火の災をひどく恐れたので、その火の神を祭つて、その災を免れんとしたのである。その祝詞は他の古き神事の祝詞と同樣に「延喜式」にある。　〔田中（義）〕

【參考】令義解　○日本書紀纂疏　○延喜式　○祝詞講義　○古事類苑　○祝詞新講　○神祇辭典

毘沙門の本地（びしゃもんのほんぢ）　御伽草子三卷　【作者】不詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は承應三年板。新編御伽草子上卷・日本文學大系第十九卷所收。　【題材】本地物。戀愛遍歷說話を含む神婚神話的物語。エロスとサイキー型の異形の複雜化したもの。「新編御伽草子」開題には、「祖庭事苑」所引の、賛寧の僧史に見える唐の天寶元年毘沙門天王の第二子獨健が現形し、五百の神人を率ゐて叢寇を攘つた記事を本據かと指摘してあるが、シャクンタラの物語を本源に擬するのは津田博士である。金色太子の遍歷は天界索行型で、「おもかげ物語」「天稚彦物語」（各別項）と同型。筒井の件は、玉の井の神話から出て朝鮮の羽衣傳說とも酷似し、天界を遊行する神馬も、この朝鮮說話と共通してゐる。敵國に自ら請うて赴く途上の彈琴は王昭君の故事。

【梗概】昔天竺の罽婁國（くる）のせんさい王は、嗣が無いので公卿は僉議の末梵王に財寶を盡して申子すると、一度は前世の宿業で叶はない由のお告があつたのをなほ祈られたので、やがて后は輝くばかりの姬君を擧げられた。天帝玉姬と名付け關白の北政所を乳母に定めて册かせたが、この姬宮御誕生後、大王は二十ばかり后は十七八に見えられ、且つ姬を拜む者の若いは愛嬌付き、年寄は若返るので、これを聞いた隣國の摩耶國王は、使を立てて姬を請うた。罽婁國王の拒絕に激怒した摩耶國王は、罽婁國を打滅して望を遂げようとしたので、十三に成られる姬は、見兼ねて自ら出で立つた。途上流石に初秋の月を眺めて琴を掻き鳴らされると、雲が下りて維曼（ゆいまん）國の金色太子が現はれ、事の次第を聞かれて契を結び、姬を本國へ引返させ、己れは金麗駒に打騎つて摩耶國征伐に立ち向つた。摩耶國王は太子の持

る。【成立】江戸初期か。「ふせやの物語」の別項以後なる事は明白である。兩書を對比して著しく近世的色彩の濃くなつてゐるのを、本書に於て認め得ることも旁證となる。【諸本】古板本は萬治二年板（石津八良右衞門開板）。御伽草紙（有朋堂文庫・日本文學大系第十九卷所收）【題材】本書は「ふせやの物語」の改作である。鎭端の清水寺美人くらべ、結末の繼母自害（伏屋の物語での入牢に比べて、近世的改變の主なる一例證と見ることが出來る）及び關白夫妻に關する本地的說明のない事などが、主要な相違點である。

【梗概】丹後の少將と云ふ才貌の勝れた人が妻を求めてゐたが、五條の宰相に二女あり、姉は先妻腹の野もせの姬、妹は後妻腹の紫關の姬とて、共に美人の聞え高き由を聞き、一目見たき由をそれ〳〵の乳母ゆげるの局と紫竹の局とに賴んでやると、繼母は喜んで兩女を伴ひ、淸水詣によそへて少將に垣間見させた。美人くらべの結果は姉姬が少將に擇ばれ、二人は相愛の仲となつたが、貴子に婿取りしようとの北方の目鏡が外れた嫉ましさに、二人の侍に云ひつけて、花園に月を眺める野もせの姬を奪ひ去つて殺さしめようと圖つたが、侍は瀨田の橋から水中に落さうとして俄に同情の念を起し、湖に沈めたと偽り復命した。姬は折よく熊野詣の歸途なる尼君に救はれて、その鄕國信濃の佐屋に伴はれた。少將は悲歎に暮れ、北方から婢人を以て紫關との婚を强ひられたのを斥け、住吉に參籠して示現を得、山伏姿になつて東國へ尋ね下ると、大津の濱から老翁が同行し、少將を導いて佐屋に赴き、その住吉明神の化身なる由を告げて姿を消した。少將は姬に再會し、國守以下を從へ、尼を

陶淵明が菊に打ち込んでるのと、噺話は盡きない。孔子と老子は床に入つたが、釋迦とかりの世の姿が見えぬ。梵語の書置が出る。目連・文殊・阿難等驚き驚いで行方を探す。これより遣行文となり、釋迦はかりの世と共に、三途の川を渡り彼岸へと到着したのである。

【構想】初期の洒落本らしい滑稽に滿ちた作品である。その滑稽の要素に二つある。一は聖に關する故事・成語等を、卑俗の意に用ひた可笑味である。背景としては浪花流儀は想像されるがその情調は出てゐない。作者の目的がこの可笑味にあつたからである。【史的地位】作者は不明であるが、學者期の洒落本の典型的な作品である。江戸洒落本の祖と稱せらるゝ「異遊六帖」（別項）と同年に本書が大阪に出たことは注目すべきことである。【影響】直接の影響は考へられないが、「聖遊廓」編輯の「三教色」（別項）のあることは注意せらるべきである。

（山崎）

（板再）聖遊廓

ひぢりめん卯月紅葉 ぢりめんうづきのもみぢ

「卯月の紅葉」を見よ。

美人くらべ びじんくらべ

【名稱】鎭端の淸水寺で、繼子と貴子の二女を少將によそへながら見せて選擇させることから來てゐる。同樣の本文に、「今日の美人くらべにはいかゞ優り劣りたるならん」ともあるところから名づけたものである。【異名】美人競べ。【別稱】淸水寺美人くらべ。【種類】假名草子。【作者】未詳。【刊行】寶曆七年。後、雪月花と改題して再版。【諸本】德川文藝類聚第五・洒落本大成所收。【題材】釋迦・老子・孔子の三聖が集等所收。【題材】釋迦・老子・孔子の三聖が流離に遊べるに擬したもの。揚屋の亭主は李白、客には陶淵明・費長房・周茂叔・蘇東坡・韓退之・文殊・目連・寶頭盧・阿難、たいこ持は樂天・鐵拐仙人等、道敎・儒敎・佛敎に關する人々が現はれ、對話にも皆自己の敎に關する語を用ひ、特に釋迦の書き遺した書體の梵語も正しい發音になつてをり、最後の廊詞も唐音を正しく用ひてある。

【梗概】孔子大盡、揚屋に入れば、亭主李白迎へ、仲居のおなつ世辭をいふ。談笑の最中裏口から老子が來て老子らしい事をいふ。かゝる所へ釋迦は、かりの世といふ遊女と相合傘で、籠で、遊所まで舁き込まれる。李白はコレハ〳〵と迎へると、釋迦は又釋迦らしいことをいふ。さて三大盡一座していろいろの話がある。周茂叔が蓮を身請したの、

天刀といふ劍の功德に感いて降參し、太子を儘君に直して逃いて居られたが、瞬く間に約束の三年の時が過ぎたので、待ちに待つた翌婆國の姬は遂に敢へなくなられた。轉だ疑はれの夢に須彌山の盤で行き迷ふ姬と逢はれた太子は、磨耶王が御供を催される暇も待たず、金麗駒に鞭つて翌婆國へ馳せ付けたが、姬逝いて既に七日、骸のなほ美しくして居られる側に歎き伏してまどろまれると、在りしまゝの姬が現はれて娑婆世界へまで尋ね來られよと敎へたので、金麗駒に事の由を語り聞かせて出發した。霞の中を西に向つて飛けること十三年、長庚星・彥星・七曜星等に出會つては道を尋ねく〳〵して、炎の山・錐の林・劍の山、夜の闇は念佛して通り過ぎ、なほ矢々に月光菩薩・日光菩薩・地藏菩薩に敎へられて鬼にも捕はれず、尼女房にも迷はされず、憍慢地獄にも落ちず、八萬地獄にも踏み入らず、遂に有漏の身ながら兜率の內院へ辿り着き、目指す黃金の筒井を見出した。示されてゐた通りその側の梅檀の木に登つて待つてゐると、永い年月戀ひ尋ねた姬が水を汲みに來て見付けられ、二人は嬉し涙に暮れるより外はなかつた。太子が身を潔め衣を更へて大悲王に謁すると、王は普賢菩薩、翌翌婆國の大王は惡魔降伏、母后は楊柳觀音、摩耶國の大王は勢至菩薩とそれぞれ現はれられたといふ。

【影響】本作に據つたものに古淨瑠璃六段本「星沙門本地」（通稱「沙門ふち」）がある。

【參考】新編御伽草子（岡田）○近古小說新纂（ふせやの物語考說）

肥人書 ひにんしょ

「神代文字」を見よ。

祕籍大觀 ひせきたいかん

【編者】大阪毎日新聞社【刊行】大正十五年【內容】日本書紀の古鈔本七卷八帖、倭語正義宣長疏本一七冊、梵語千字文の古鈔本一卷、類聚名義鈔

は、太子は毘沙門天王、姬は吉祥天女と現はれ、一切衆生の願を滿たしつゝ絕えぬ契を結ばれる事となつた。太子の父大王は普賢菩薩、翌翌婆國の大王は惡魔降伏、母后は楊柳觀音、摩耶國の大王は勢至菩薩とそれぞれ現はれられたといふ。

【影響】本作に據つたものに古淨瑠璃六段本「星沙門本地」（通稱「沙門ふち」）がある。

【參考】新編御伽草子（岡田）○近古小說新纂（ふせやの物語考說）

肥人書 ひにんしょ

「神代文字」を見よ。

祕籍大觀 ひせきたいかん

【編者】大阪毎日新聞社【刊行】大正十五年【內容】日本書紀の古鈔本七卷八帖、倭語正義宣長疏本一七冊、梵語千字文の古鈔本一卷、類聚名義鈔

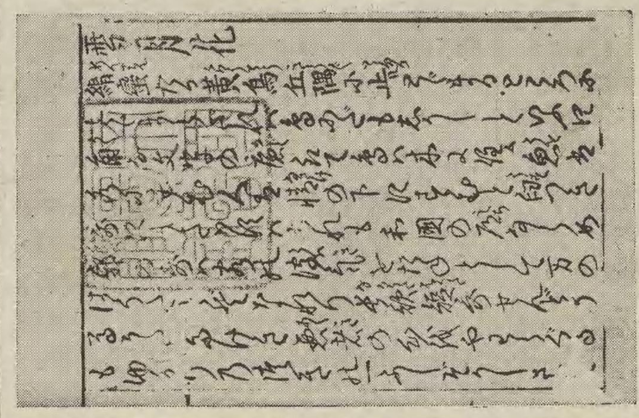
文學に現れたる我が國民思想の研究 ぶんがくにあらわれたるわがこくみんしそうのけんきゅう

文學の時代心理 津田左右吉【著】

聖遊廓 ひじりのくるわ

【名稱】聖人達が廓に遊ぶ意であらう。未詳【刊行】寶曆七年。後、雪月花と改題して再版。【諸本】德川文藝類聚第五・洒落本大成所收。【題材】釋迦・老子・孔子の三聖が集等所收。【題材】釋迦・老子・孔子の三聖が流離に遊べるに擬したもの。揚屋の亭主は李白、客には陶淵明・費長房・周茂叔・蘇東坡・韓退之・文殊・目連・寶頭盧・阿難、たいこ持は樂天・鐵拐仙人等、道敎・儒敎・佛敎に關する人々が現はれ、對話にも皆自己の敎に關する語を用ひ、特に釋迦の書き遺した書體の梵語も正しい發音になつてをり、最後の廊詞も唐音を正しく用ひてある。

【梗概】孔子大盡、揚屋に入れば、亭主李白迎へ、仲居のおなつ世辭をいふ。談笑の最中裏口から老子が來て老子らしい事をいふ。かゝる所へ釋迦は、かりの世といふ遊女と相合傘で、籠で、遊所まで舁き込まれる。李白はコレハ〳〵と迎へると、釋迦は又釋迦らしいことをいふ。さて三大盡一座していろいろの話がある。周茂叔が蓮を身請したの、



（板再）聖遊廓

陶淵明が菊に打ち込んでるのと、噺話は盡きない。孔子と老子は床に入つたが、釋迦とかりの世の姿が見えぬ。梵語の書置が出る。目連・文殊・阿難等驚き驚いで行方を探す。これより遣行文となり、釋迦はかりの世と共に、三途の川を渡り彼岸へと到着したのである。

【構想】初期の洒落本らしい滑稽に滿ちた作品である。その滑稽の要素に二つある。一は聖に關する故事・成語等を、卑俗の意に用ひた可笑味である。背景としては浪花流儀は想像されるがその情調は出てゐない。作者の目的がこの可笑味にあつたからである。【史的地位】作者は不明であるが、學者期の洒落本の典型的な作品である。江戸洒落本の祖と稱せらるゝ「異遊六帖」（別項）と同年に本書が大阪に出たことは注目すべきことである。【影響】直接の影響は考へられないが、「聖遊廓」編輯の「三教色」（別項）のあることは注意せらるべきである。

（山崎）

ひぢりめん卯月紅葉 ぢりめんうづきのもみぢ

「卯月の紅葉」を見よ。

美人くらべ びじんくらべ

【名稱】鎭端の淸水寺で、繼子と貴子の二女を少將によそへながら見せて選擇させることから來てゐる。同樣の本文に、「今日の美人くらべにはいかゞ優り劣りたるならん」ともあるところから名づけたものである。【異名】美人競べ。【別稱】淸水寺美人くらべ。【種類】假名草子。【作者】未詳。【刊行】寶曆七年。後、雪月花と改題して再版。【諸本】德川文藝類聚第五・洒落本大成所收。【題材】釋迦・老子・孔子の三聖が集等所收。【題材】釋迦・老子・孔子の三聖が流離に遊べるに擬したもの。揚屋の亭主は李白、客には陶淵明・費長房・周茂叔・蘇東坡・韓退之・文殊・目連・寶頭盧・阿難、たいこ持は樂天・鐵拐仙人等、道敎・儒敎・佛敎に關する人々が現はれ、對話にも皆自己の敎に關する語を用ひ、特に釋迦の書き遺した書體の梵語も正しい發音になつてをり、最後の廊詞も唐音を正しく用ひてある。

【梗概】孔子大盡、揚屋に入れば、亭主李白迎へ、仲居のおなつ世辭をいふ。談笑の最中裏口から老子が來て老子らしい事をいふ。かゝる所へ釋迦は、かりの世といふ遊女と相合傘で、籠で、遊所まで舁き込まれる。李白はコレハ〳〵と迎へると、釋迦は又釋迦らしいことをいふ。さて三大盡一座していろいろの話がある。周茂叔が蓮を身請したの、

悲壯美 ひそうび

【名義】道德的規範意識が美的對象の內容をなす美的樣態。悲壯なる感を與へる美的內包は、葛藤を超越的に解決することによつて生ずる美的內包が悲壯美である。卽ちそれは個人的な現象界を超越して他界に光を見るもの

である。すべて悲壯は苦しむことにより悲觀的になるが、又これに高められることによつて樂觀的となる。隨つてそこには壓迫の不快感と高揚の快感との二つの感情が共作用する。

【學說】ハルトマン（Hartmann）によれば、藝術は生命のうちに形相を有機化しなければならぬとし、本當の寫實主義は、現實を卑俗から切りはなすことであつて、藝術美現の上において、卑俗を斥ける方法は、（一）事物や事件を時間的にまづ吾々から遠ざけること。（二）空間的に遠ざけること。（三）主觀的に遠ざけることの三つがある。併し單に苦みだけでは、それは悲哀美（Das Traurige）に過ぎないで悲壯とはならぬ。それが悲壯となるには、その苦しむ人物が人間的に偉大であること、卽ち崇高なることを要する。併しその人間的偉大といふことは、意志の力に限らず感情の深さにもよる。例へばグリルパルツェルの作品がそれである。

【參考】ハルトマン Eduard von Hartmann: Die Philosophie des Schönen. 1887. ○ Aesthetik des Tragischen. 1890. ○ die Tragödie. 1906. ○ ミュンスターベルヒ Hugo Münsterberg: Grundzüge der Psychologie. 1900. ○ 美學（金田鼎譯）（遠藤）

卑俗主義 ひぞくしゅぎ

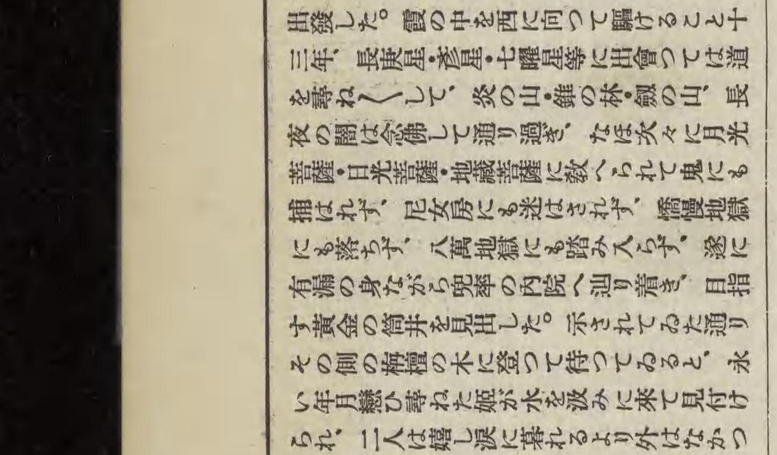
【解說】美學者ギョーの用語で誤つた寫實主義、卽ち生命の統一的實質を見すして形相の表面や量のみを見、これを藝術的表現に

要なる位置を占める。歌謠は本書には一首に過ぎない。別に「萬葉集註釋」に引用せる本書の逸文に一首を傳へてある。

【參考】標註古風土記（栗田寬）○肥前風土記考（山貞幹）○肥前風土記纂注（大八洲學會雜誌二ノ一〇）（武田）

悲壯美 ひそうび

【名義】道德的規範意識が美的對象の內容をなす美的樣態。悲壯なる感を與へる美的內包は、葛藤を超越的に解決することによつて生ずる美的內包が悲壯美である。卽ちそれは個人的な現象界を超越して他界に光を見るもの



die Tragödie. ぱり. ニ ベルヒ. ン.
Aesthetik des Tragischen. ぱり. ○悲

劇美の美學（金田鼎譯）（遠藤）

卑俗主義 ひぞくしゅぎ

【解說】美學者ギョーの用語で誤つた寫實主義、卽ち生命の統一的實質を見すして形相の表面や量のみを見、これを藝術的表現に

東の方福德山に、太子は毘沙門天王、姫は吉祥天女と現はれ、一切衆生の願を滿たしつつ絕えぬ契を結ばれる事となつた。太子の父大王は普賢菩薩、瞿婁國の大王は惡魔降伏、母后は楊柳觀音、摩耶國の大王は勢至菩薩とそれぞれ現はれられたといふ。

【影響】本作に據つたものに古淨瑠璃六段本「毘沙門本地」(通油町ふちた新板)がある。

【參考】新編御伽草子(岡雄)○近古小說解題○

正しく用ひてある。

【梗概】孔子大盡、揚屋に入れば、亭主李白迎へ、仲居のおなつ世辭をいふ。談笑の最中裏口から老子が來て老子らしい事をいふ。かゝる所へ釋迦は、かりの世といふ遊女と相合駕籠で、臺所まで舁き込まれる。李白は「コレハ釋迦大盡の御來迎」と迎へると、釋迦は又釋迦らしいことをいふ。さて三大盡一座していろいろの話がある。周茂叔が蓮を身請したの、

も同行して都に還つて來たので、宰相も喜び、少將は丹波の三郡を本領に副へて賜はり、尼にも信濃の內で所領を與へられ、代りに繼母は殺さるべきを野もせの姫の詫びで宥され、且つ姫の扶持を受けたが後自害して了つた。少將夫婦の仲には二男一女が擧げられ、家門目出度く榮えた。(ふせやの物語參照)【鳥津】

【參考】近古小說新纂初輯(ふせやの物語考說)

肥人書(ひじんのしよ)「神代文字」を見よ。

祕籍大觀(ひせきたいかん)　叢書　【編者】大阪每日新聞社【刊行】大正十五年【內容】日本書紀(古鈔本)七卷八帖、尙書正義(宋槧單疏本)一七册、梵語千字文(古鈔本)一卷、類聚名義鈔(古鈔本)二帖、古今集(飛鳥井雅經自筆本)二帖、以上五種の覆刻本を稱する。同種の刊行物として同社から珍書大觀(別項)がある。【土井】

肥前國風土記(ひぜんのくにのふどき)　地誌　一卷【著者】未詳【名稱】又「ひのみちのくちのくにのふどき」【成立・由來】和銅六年の詔によつて撰進した風土記(別項)の一と考へられる。年代に就いては、大體「出雲國風土記」(別項)と同じ頃かと云はれてゐるが、未だ明かにすることを得ない。【傳來】完本は傳はらない。寬政十一年に長崎人大家惟年の將來した本を以て、荒木田久老が校正訓點を加へて刊行した抄出本が世に廣まつてゐる。【諸本】寫本は猪熊信男氏が古鈔本を藏してゐる。續群書類從・有朋堂文庫・日本古典全集・日本文學大系・日本文學類從釋文等所收。【內容】卷首に國號の由來を記し、次に基肄・養父・三根・神埼・佐嘉・小城・松浦・杵島・藤津・彼杵・高乎の諸郡に分つて、郡名の由來、各地の傳說等を記してゐる。文體は漢文。歌謠は一字一音で記してゐる。【價値】上代說話文學として重要なる位置を占める。歌謠は本書には一首に過ぎない。別に「萬葉集註釋」に引用せる本書の逸文に一首を傳へてゐる。

【參考】標註古風土記栗田寬○肥前風土記纂注(寫)糸山貞幹○肥前風土記考　糸山貞幹(大八洲學會雜誌二〇)　【武田】

悲壯美(ひさうび)　藝術論【獨】Das Tragische【名義】道德的規範意識が美的對象の內容をなす美的樣態。悲壯なる感を與へる美的內包。【學說】ハルトゥマン(Hartmann)によれば、葛藤を超越的に解決することによつて生ずる美的內包が悲壯美である。卽ちそれは個人的な現象界を超越して他界に光を見るものである。リップス(Lipps)によれば、價値あるものが一の缺點をもつか他から侵害をうけるかして否定さるゝことによつて、反つて積極的印象が增す場合、卽ち苦痛が人格的「深さ」の感情を增す場合に、それが對象に移入されると悲壯美となる。そしてこの苦痛が善き意志のために生ずる時は、その苦痛の責任が運命にあるので運命悲劇となり、この苦痛の善き意志のために生ずる時は、その苦痛の責任が性格にあるので性格悲劇となる。前者の場合では善が苦痛によつて高められ、後者の場合では惡人が惡のために苦しむことによつて善を示す場合である。フォルケルト(Volkelt)によれば、美的印象によつて生命感情が抑壓されると悲壯美が生ずる。この抑壓された苦痛が肉體の死によるよりも、精神の破壞によつて生ずる場合の方が一層效果がある。この苦痛はシルレルの「ワッレンシュタイン」の場合の如く、身體が精神を苦しめずに死と共にその苦痛を終る場合と、第二にダンヌンチオの「廢都」の如く、精神のみが內的に苦痛を生ずる場合の如く、身體と精神との兩者が亡びる場合とがある。併し單に苦みだけでは、それは悲哀美(Das Traurige)に過ぎないで悲壯とはならぬ。それが悲壯となるには、その苦しむ人物が人間的に偉大であること、卽ち崇高なることを要する。併しその人間的偉大といふことは、意志の力に限らず感情の深さにもよる。例へばグリルパルツェルの作品がそれである。すべて悲壯は苦しむことにより悲觀的になるが、又これに高められゝことによつて樂觀的となる。隨つてそこには壓迫の不快感と高揚の快感との二つの感情が共作用する。かゝる對照感情の作用のない限り、その苦痛は前述の悲哀となる。そしてこの苦痛が極めて不幸なことによつて生ずると、悲觀美(Das Kläigliche)・懊惱美(Das Jämmerliche)となる。又それが心配や驚きの印象による時は驚愕美(Das Entsetzliche)・恐怖美(Das Fürchterliche)となる。これ等のものは、ドストエフスキー、トルストイ、ロップス、ビアーズレーの作品に現れる。次に悲壯美の種類を擧げると、第一に外的の葛藤によるものと、內的の葛藤によるものとがある。卽ち自然の事件によるものと人間の關係によるものとである。又その人間の關係の性質でも、理性的な自我によるものと危險な自我によるものとがある。又外的と內的とが相互に作用して生ずる場合もある。第二にその苦痛が道德上の罪によるか否かによつて有罪のものと無罪のものとに分れる。第三に高揚感情から分つて比較的高揚的のものと比較的壓迫的のものとがある。(美的樣態參照)

【參考】Lipps, Th.: *Der Streit über die Tragödie.* 1897. = Volkelt, J.: *Aesthetik des Tragischen.* 1897. ○悲劇美の美學　金田廉譯　【淵邊】

卑俗主義(ひぞくしゆぎ)　藝術論【佛】Trivialisme【解說】美學者ギュヨーの用語で誤つた寫實主義、卽ち生命の統一的質を見ずして形相の表面や量のみを見、これを藝術的表現にもたらすものを卑俗主義と稱した。彼によれば、藝術は生命のうちに形相を有機化しなければならぬとし、本當の寫實主義は、現實を卑俗から切りはなすことであつて、藝術表現の上において、卑俗を斥ける方法は、(一)事物や事件を時間的にまづ吾々から遠ざけること。(二)空間上想像の轉置を行ふことであるとした。　【村田】

日高川入相花王(ひだかがはいりあひざくら)　淨瑠璃　五段　時代物【作者】竹田小出雲・近松半二・北窓後一・竹本三郎兵衞・二步堂【初演】寶曆九年二月一日初日、竹本座。【諸本】七行九十四丁本【題材】將門の遺志を繼ぐ伊豫掾純友の反逆と道成寺傳說とを脚色する。

【梗概】【初段】(嵐山櫻狩)朱雀天皇は御多病の故に御位を弟君櫻木親王に御讓りにならうとする。左大臣藤原忠文は親王を罪に落し、王位を窺つてゐるので、先づこれを留め、御后を迎へられん事を勸める。そして櫻木親王が天皇の御平癒を祈るべく、紀州道成寺の鐘供養を仰せ出されると、忠文はこれに對抗して叡山の僧剛寂に三井寺の鐘供養を命ずる。(加茂川原)略。(實頼館)大臣實頼の死後小野の家は、一人の娘お だ卷姫を守る女所帶である。約束通り櫻木親王は、豫て戀仲の姫の許へ忍ばれる。取持役の雜掌宇治之助・姬夕霜は勿論、物堅いゆらの戶までが喜んでゐる念を起し、湖に沈めたと伴り復命した。姫は折よく熊野詣の歸途なる尼君に救はれて、その鄕國信濃の伏屋に伴はれた。少將は悲歎に暮れ、北方から媒人を以て紫蘭との婚を强ひられたのを斥け、住吉に參籠して示現を得、山伏姿になつて東國へ尋ね下ると、大津の濱から老翁が同行し、少將を導いて伏屋に赴き、その住吉明神の化身なる由を告げて姿を消した。少將は姫に再會し、國守以下を懲べ、尼を

【常陸國風土記】ひたちのくにふどきのき　地誌　一巻　国司村也

嘉祥天明元年二月二十五日成○土肥氏直垂考藤原朝安

【著者】藤原宣長　老年間の常陸の國守は藤原宇

【参考】標註古風土記　栗田寛○常陸風土記は風土記の作品には風土記の記事と

あるが、御祖の尊である。【価値】古代の説話文學として多大の價値を有してゐる。【刊行】文化五年　【珍本】那珂【作者】六樹園飯盛【書工】蔀関北騎名【稀】詳しく書く。【飛騨匠物語】ひだのたくみものがたり　物語、また斐陀匠物　六巻　和田

【飛騨匠物語】ひだのたくみものがたり　物語、また斐陀匠物　六巻　和田

【参考】標註古風土記　栗田寛○常陸風土記

【常陸國風土記】ひたちのくにふどきのき　地誌　一巻　国司村也

嘉祥天明元年二月二十五日成○土肥氏直垂考藤原朝安

【著者】藤原宣長　老年間の常陸の國守は藤原宇

【参考】標註古風土記　栗田寛○常陸風土記

【飛騨匠物語】ひだのたくみものがたり　物語、また斐陀匠物　六巻　和田

【直垂考】ひたたれこう　紙　川高日　一巻　壺井

【参考】近世邦樂年表（義太夫節之部）　鶴見

【高川日草紙】はじょうにちくさぞうし　遺成寺縁起を見よ。

【直垂考】ひたたれこう　紙　川高日　一巻　壺井

【参考】近世邦樂年表（義太夫節之部）　鶴見

【高川日草紙】はじょうにちくさぞうし　遺成寺縁起を見よ。

附錄に、「說之古書一違ヶ所ヽ考、其說精詳矣」と評してある。

【類書】直垂考附錄 一冊 伊勢貞丈（明和九年正月二十八日成）○直垂考一冊 土肥經平（安永九年春成）○土肥氏直垂考評一冊 伊勢貞丈（安永九年五月十六日成）○土肥氏直垂考資言一冊 大塚嘉樹（安永九年四月二十九日成）○直垂勘物大意一冊 大塚嘉樹（天明元年五月二十五日成）【石村】

常陸國風土記（ひたちのくにのふどき）

【著者】未詳。養老年間の常陸の國守は藤原宇合であつたから、或は彼の撰に係るかと疑はれてゐる。また高橋蟲麻呂は、その下僚であつたやうであり、その作品は風土記の記事と關係のあるものがあるから、參與してゐるかも知れない。【名稱】「常陸風土記」ともいふが、國の字を入れてある方が正しいであらう。【成立・由來】和銅六年の詔に依つて成つた風土記（別項）の一と認められる。この書の發端、和銅六年の詔を受けて記せるさまなること、鄉名を何の里と稱せることにより、和銅以後間もなき頃の成立に係ると云はれてゐる。但し喜田貞吉氏は、鄉と里との名稱を論じて、養老五年以後の撰なるべき由を述べてゐる。【傳來】完本は傳はらない。加賀の前田家にあつた抄本を、延寶五年に水戸家で借覽して寫した本が流布してゐる。【諸本】前田家の本は今傳はらぬさうであるから、彰考館文庫の本が寫本としては古本であらう。刊本としては、天保十年に西野宣明が校註を加へて印行し、又群書類從に收められた。有朋堂文庫・日本古典全集・日本文學大系・校註日本文學類從（釋文）等所收。【內容】卷首に國名の由來を敘し、國土の大體を說き、次に各郡に分つて郡名の由來及び各地の古老の傳說を主として記してゐる。土地の產物等に關する記事は、概ね省略に從つたと思しく、已下略之の文字が、各項の下に記してある。文體は歌謠を除いては純粹なる漢文體で、いはゆる四六文の絢爛たる文章である。歌謠は一字一音に寫してあるが、御祖の尊の歌の如きは、四言の詩に譯してある。【價值】古代の說話文學として多大の價值を有してゐる。ただ漢文に譯して國語を存すること僅少であるのは惜しむべきである。歌謠の部分は、殊に誤傳・脫落等があるやうであつて、善本の出現を望ましきものである。

【參考】標註古風土記栗田寬○常陸風土記鈔本 菅政友（菅政友全集）○石城、石背兩國建置沿革追考附常陸風土記年代考 喜田貞吉（歷史地理二ノ一）○常陸風土記年代追考鄉と里との名稱に就いて 同上（同上）○常陸風土記物語 松岡靜雄【武田】

引板音（ひたのおと）

隨筆 二卷一冊 寫【著者】永井精古（きよひさ）【諸本】見本は小中村清矩博士の舊藏本で、その自筆識語に、明治廿二年三月とある。【解說】國學者の隨筆で、神道・祭祀・有職故實、その他考古學に關する事柄を主とする。上卷に眉山以下十五條、下卷に社務以下十七條を考證してある。卷尾に、「右引板の音は、此國（阿波を指す）にある事の叶はぬ限り取出て論ひ辨へたり。腹立ん人は予に問て其非を知べし。此卷はさ月廿日まり三日の日より筆取初て、世のなりはひの暇に物して、辛くも今日をへぬる也。文化十二とせに當る年のみな月朔日 中山精齋斯いふ」とある。【著者小傳】永井精古は、阿波國板野郡板原村大麻比古神社の祠官で、荒木田久老に師事し、文化・文政の交、神典の學を唱へた人である。殘年不詳。【和田】

飛驒匠物語（ひだのたくみものがたり）

讀本 六卷六冊【作者】六樹園飯盛【書工】葛飾北齋【名稱】詳しくは「新板飛驒匠物語」、また「斐陀匠物語」とも書く。【刊行】文化五年【諸本】珍本全集（帝國文庫）・繪本稗史小說（博文館）・石川雅望集（有朋堂文庫）・讀本集（日本名著全集）所收。【題材】左甚五郎の俗傳に據り「今昔物語」の「百濟川成飛驒工挑語」、「更級日記」の竹芝寺の傳說を取り入れ、「李笠翁十種曲」中の「蜃中樓傳奇」に基いて構成したものである。【梗概】昔飛驒國に、猪名部の墨繩と呼ぶ名工があつた。郡司某は飛國の名工檜前松光とその技を競はせたが、松光は墨繩の神技に服してその弟子となつた。一日墨繩は松光と共に山中に良材を求めんとして小童に遇ひ、導かれて蓬萊山に到り、神仙魯班に謁して種々なる技を會得した。折しも罪によつて人界に墮さるゝ男女の仙人に會ひ、再び仙界に昇らん時の瓢を預けられ、歸鄉すれば早くも十五年を經てゐた。墨繩は松光を伴うて武藏に下つたが、瓢を失つたので松光と別れてその瓢の行方を探るうち、圖らず竹芝山人なる美少年に會ひ、その家に瓢のあるを見て、かの仙人なるを覺つた。松光は竹芝山人に思ひを懸けて辱しめられた廣岡長者の家に宿り、山人の母の監禁されてゐるのを憐れんで逃がした。やがて二人は石濱なる蘆屋船主方に到り、その娘紫が山人に思ひを寄せて、而も兩家の確執に惱むのを見、松光は紫のために計るところがあつたが成らず、遂に紫は自殺し、こゝに兩家の不和が解けて船主は出家した。かくて墨繩等は山人の許に歸り、山人の官の賦役に伴はれて上洛した。時に都に繪をよくする百濟人があつた。墨繩の名聲を妬んでこれと技を爭つて敗れ、怨んで邪法の者なりと誣告したので、墨繩は獄に下されたが、偶々物怪（もののけ）に御惱ませ給ふ帝が、その製

飛驒匠物語（挿畫）

【三段】（經基館）純友は播磨の鑄物師四ツ塚大作を裝うて、武將經基の館へ將門の遺兒を奪ひに入つて捕へられた。經基は忠文の讒言で今宵のうちに、お預りしてゐた朱雀帝の落胤の首を討たねばならぬ。一子經若を御身代りに立てよとの夫の命に、妻の眞弓は一方ならず悲しむ。ところへ遙々播磨から大作の命乞ひに來た舅四十次は、かくと知つて孫の力松を上げて將を助も初めて自分が將門の死後、その誓約を守つて天下を覗ふ藤原純友である事を明かす。さて皇子を斬らうとすると、不死身なので斬れない。純友はこれこそ將門の遺兒であると知つて喜ぶ。時に修業者となつて入り込んだ俵藤太秀鄉が名乘り出る。秀鄉の笈を破つて見ると、內には意外にも力松が采配を持つて控

す。と、不思議や雷電振動して自づと鐘が釣り上る。中には意外にも剛寂が破れ衣で神器を捧持してゐる。剛寂實は道成寺の僧で忠文の裏をかいたのであつた。庄司が預り持つてゐた十握劍の德に依つて、夕霜・おむつの二人は蘇生する。淸姬だけは生かさずに、忠文の氣を緩めるため、親王夫婦は淸姬に祈り殺されたと風聞させ、又鐘を湯にしたと噂させて、軍勢の寄せ

【參考】近世邦樂年表（義太夫節之部）【鶴見】

日高川草紙（ひたかがはさうし）

「道成寺緣起」を見よ。

直垂考（ひたれかう）

故實 一卷【著者】壺井義知【成立】享保八年。奧書に、「右被ニ尋問一條條、依ニ所望一、愚存之答書記了。蓋元始不分明之儀、偏臆談之樣候歟。願他見憚入了」とある。【解說】直垂の起原・名稱・地合・文樣及び鎧直垂に就いて論じたもので、終りに鎧直垂例文、赤地錦之例が擧げてある。伊勢貞丈の

作にかゝる佛像の功德で平癒されたので出獄した。當時火たきの衞士となつてゐた山人は帝の女一の宮に慕はれ、曇纈によつて結ばれた。法師となつた船主は、夢に紫が現はれて一の宮は仙界を追はれた女人である事及び山人も亦常人にあらざることを知り、宮を盜み、山人・松光と共に武藏に落し奉つた。然るに、義に厚い山人の母は、容易に二人を許さなかつたが、曇纈によつて勅許され、山人は東の國守に任ぜられ、曇纈は都にあつて重く用ひられた。その後三人は共に仙界に昇つた。

【解說】飛驒匠の神技に、竹芝山人・女一の宮の悲戀を配して奇異の物語をなしたもので、讀本流行の時勢に、國學の造詣を以て巧みに古語を使用し、優雅な趣を添へたものではあるが、人物の照應が不自然で、作爲の跡が見える憾みはある。文化六年正月、大阪に於て「遠藥山帽飄竹芝坂酒飄飛驒匠物語」といふ外題で、操にかけられた。

【參考】讀本集解說(日本名著文庫)　〇珍本全集解說(帝國文庫)　【笹野】

左甚五郎（ひだりじんごらう）

【別名】京人形　【諸本】舞踊劇集(日本戲曲全集)所收。【題材】原據は、操淨瑠璃の紀海音作「富仁親王嵯峨錦」(別項)の第三段目切、左甚五郎内の場である。【沿革】これが舞踊化されたのでは、藤川平九郎が寶曆元年九月大阪角の芝居で、江戸下り名殘狂言に勤めたのと、翌二年正月江戸中村座「花街曲輪商曾我」第一番目に豐竹須磨太夫の地で、二代吾妻藏役の大磯の虎を人形にして、左甚五郎本名宇佐美十內役で勤めたのが古い。その後、京阪では淺尾爲十郎・二代嵐吉三郎等、江戸では九代市村羽左衞門など演じたが、近くでは天保七年八月江戸市村座で、寶田壽助作の「盟約廓彫物」(長唄―おやま人形)に、市川九藏(後の六代團藏)の左利甚五郎と、十二代市村羽左衞門のおやま人形の精とで演じたのが、今日に數種傳存される主因ともなり、又一粉本ともなつ

艷　菖蒲木　偶　(天保十三年五月河原崎座)

たのである。

【艷菖蒲木偶】常磐津節　【初演】天保十三年五月十三日初日、江戸河原崎座「左甚五郎細工鑑」【作詞】五代鶴屋南北　【作曲】五代岸澤式佐　【振附】四代西川扇藏　【傳來】曲・振ともに添削されて傳存。【內容】飛田杢三政廣(嵐猪三郎)が、島原の傾城三吉野(市川九藏)を戀し、彫物師左甚五郎(二役九藏)の家に匿まはれてゐるのを知り、組子どもを差向けて奪ひ取らせたが、持つて來たのは甚五郎作のお山人形であつた。人形は飛田の相手になつて散々に困らすので、政廣は怒つて再び組子を差向けると、甚五郎作の獅子に魂が入つて組子どもを惱ます。前記「盟約廓彫物」の增補である。【備考】明治二十三年五月、東京歌舞伎座で、福地櫻痴が本曲を添削し、新歌舞伎十八番の內「左小刀」(常磐津・竹本)と題して、九代市川團十郎が甚五郎とお山人形とを早替りで演じた。

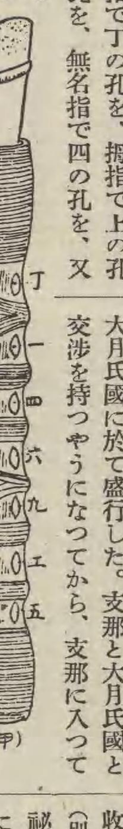
【箱入あやめ木偶】常磐津節・長唄　【初演】天保十四年五月四日初日、江戸市村座「源平勝武太」第二番目大切【作詞】三代櫻田治助【作曲】常磐津は五代岸澤式佐、長唄は二代杵屋勝五郎【振附】西川巳之助(後の五代扇藏)【傳來】曲・振ともに傳存。【內容】彫物師甚五郎(四代中村歌右衞門)は、吉原の小軍太夫を見染めてから、悶えに堪へかね、遂に一心こめて太夫の京人形を彫りあげた。女房おつた(小佐川常世)が運んで來た酒を呑みながら、人形を飽かず眺め入つてゐると、京人形(十二代市村羽左衞門)は動き出し、甚五郎と同じ動作をする。最初は男の體であつたが、懷へ鏡を入れてやると、女のこなしになつてさま〴〵な傾城の振があり、後、主君の娘折鶴姬の身替りに人形の首を斬つて渡す。奴照平は不忠の臣と誤解して右の手へ斬りつける。甚五郎は委細を語つて姬を落し、踏み込む捕手と大工道具を使つて左の手で立ち廻る。【備考】原作では前に八人掛の長々しい濟錄狂言あり、後に甚五郎作の三番叟や仕丁の人形が踊る件が附いてゐた。萬延元年三月江戸市村座で、河竹新七(默阿彌)が治助の作を補訂したのが「拙腕左彫物」である。四代市川小團次の左甚五郎と河原崎權十郎(九代團十郎)のお山人形の精とで演じたもので、今日普通に行はれてゐるのがこれである。　【秋葉】

【參考】近世邦樂年表(長唄・常磐津・富本)

篳篥（ひちりき）

【名義】篳篥の字は支那音ピリの當字で、これは悲しい音を出すから、悲篥と書いてピリと呼んだ。【異稱】觱篥　悲篥・笳篥・笳管・頭管・風管等。【解說】雅樂々器の一。縱に吹く管樂器の一である。支那の古くには大篳篥・小篳篥・双篳篥・銀字篳篥・桃皮篳篥・漆篳篥などの種類があり、今日用ひられてゐるものも、支那と朝鮮と我が內地とでその形を大に異にしてゐる。古く我が國には大篳篥と小篳篥との二種が傳へられたが、我が國で行はれてゐるものは、小篳篥だけである。これを普通に篳篥と呼んでゐる。以下說明するものは、この小篳篥である。

【構造】我が國の篳篥は、長さ六寸の竹管の上部に、長さ二寸餘の蘆舌を挿入したもので、管の前面には七個の指孔を開き、その裏面には二個の指孔を開く(指孔總數九個ある)。表孔の名を上部より順に、丁・一・四・六・凡・工・五と呼び、裏孔の名を上より順に、上・無と呼ぶ。但し上は丁と一との中間にあり、無は六と凡との中間にある。管の表面は、これ等の指孔のある部分を除き、他は樺皮でこれを卷く。舌は蘆の管を用ひ(古來、攝津國鵜殿の蘆を以て最上品とする)、その長さ二寸餘に切り、その上部を薄く削つてこれを兩方から押しつぶし、その中邊に責(せめ)と稱するものをはめて舌端の形を保つ。責は藤の莖を以て作り、その端を紅糸を以て結ぶ。舌の下端には紙を卷き(これを圖紙といふ)、丁度管の上端に挿入してしつくりと密合するやうにする。舌の上端を保護するために、平素は函又は蘆舌縮と稱するものを以て舌の上端を蔽ふ。これは檜で作つた帽である。吹奏する時はこの函を取除いて用ひる。【用法】篳篥は本邦古樂・高麗樂・唐樂・林邑樂・神樂・催馬樂・朗詠など、凡ての雅樂に於て最も廣く用ひられる。その奏法は管を縱にし、左手の食指で丁の孔を、拇指で上の孔を、中指で一の孔を、無名指で四の孔を、又右手の食指で六の



するために唱歌といふものを用ひる。これはアイウエヲ、タチテト、ハヒフヘホ、ヤヨ、ラリルロの話を組合はせて、その旋律を歌として唱へるのであつて、篳篥譜には、この唱歌を中央に記し、その左に孔名を記し、右に拍子の圈點を記す。(樂譜參照)

【沿革】この種の樂器は、既に數千年の昔に埃及に存在してゐた。その管は太い葦管を用ひた。これが西南亞細亞に入り、アレキサンダー大帝の頃には中央亞細亞に移り、その後、大月氏國に於て盛行した。支那と大月氏國と交涉を持つやうになつてから、支那に入つて小篳篥のみ行はれることになつてしまつた。大篳篥が全く滅びたのは、平安朝の中頃であるらしい。篳篥は他の樂器よりも賤しめられ、高位高官の人は、餘りこれを手にしなかつた。併し稀に源博雅(博雅三位)の如き名人も輩出した。　【田邊】

悲痛の哲理（ひつうのてつり）

論文　【著者】岩野泡鳴　【發表】明治四十三年一月の「文章世界」に揭載。後、論文集「新自然主義」の後を承けて增補改訂して刊行。泡鳴全集第十五卷所收。【內容】最初の論文集「神祕的半獸主義」(別項)は、まだ何と云つても論理の不確かさ神祕の朦朧性があつたが、「新自然主義」の時代になると一種の整正的論說ではあつたが、從こゝに於て自然主義の分化を來した。一方は「人生の從軍記者」として冷めたる自己を揭げれば、彼は「人生の一兵卒」として自ら嵐の中に投じた。彼は結論に於て表象主義を强調し、現實は思想だと云ひ、更に思想は空理を追はず、神經の敏活を以て把持する情調態度實行であるとする。其處に生存の危機を自覺し、刹那の燃燒が生活すると斷じた。そして田中氏の論を覆面の論ときめつけた。

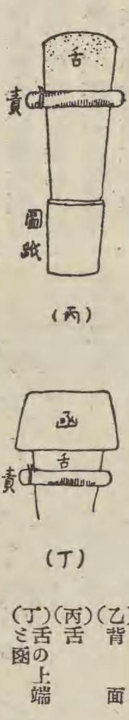
【批評】數多い彼の論說中でも、これは最も注目すべき立派な論文であらう。花袋もこれを携へて歸つてきた落魄飄零の彼を、勇ましいドン・キホーテと云ひ、この一文を得難き收穫

五郎内の場である。【沿革】これが舞踊化されたのでは、藤川平九郎が寶暦元年九月大阪角の芝居で、江戸下り名殘狂言に勤めたのと、翌二年正月江戸中村座「花街曲輪商會我」第一番目に豐竹須磨太夫の地で、二代吾妻藤藏役の大磯の虎を人形にして、左甚五郎本名宇佐美十內役で勤めたのが古い。その後、京阪では淺尾爲十郎・二代嵐吉三郎等、江戸では九代市村羽左衛門など演じたが、近くでは天保七

たのである。

【艷】菖蒲木偶（あやめにんぎやう）　常磐津節　【初演】天保十三年五月十三日初日、江戸河原崎座「左甚五郎細工鑑」（作詞）五代鶴屋南北（作曲）五代岸澤式佐（振附）四代西川扇藏（傳來）曲・振

（衛門）は動き出し、甚五郎と同じ動作をする。最初は男の體であつたが、讓へ鏡を入れてやると、女のこなしになつてさま〴〵な傾城の振があり、後、主君の娘折鶴姫の身替りに人形の首を斬つて渡す。奴照平は不忠の臣と誤解して右の手へ斬りつける。甚五郎は委細を語つて姫を落し、踏み込む捕手と大工道具を使つて左の手で立ち廻る。（備考）原作では前に八人舞の長々しい濡體狂言あり、後に甚五



篳篥

の形を保つ。簀は篠の茎を以て作り、その端を紅糸を以て結ぶ。舌の下端には紙を巻き（これを圖紙といふ）、丁度管の上端に挿入してしつくりと密合するやうにする。舌の上端を保護するために、平素は函又は蘆舌縮と稱するものを以て舌の上端を蔽ふ。これは檜で作つた帽である。吹奏する時はこの函を取除いて用ひる。【用法】篳篥は本邦古樂・高麗樂・唐樂・林邑樂・神樂・催馬樂・朗詠など、凡ての雅樂に於て最も廣く用ひられる。その奏法は管を縦にし、左手の食指で丁の孔を、拇指で上の孔を、中指で一の孔を、無名指で四の孔を、又右手の食指で六の孔を、拇指で無の孔を、中指で几の孔を、無名指で工の孔を、小指で五の孔を按じ、舌を口に銜へてこれを吹き鳴らす。その各孔の開閉によつて十二律を出すことが出來る。かやうに十二律を悉く出し得る許りでなく、指の用ひ方及び口の使ひやうによつて、如何なる音でも出すことが出來るから、最も滑かに旋律を奏することが出來る。この理由によつて、この樂器がすべての雅樂に用ひられるのである。篳篥の音色は、悲哀の調を帶びてゐるから、人を感動せしめることが極めて深い。昔から篳篥を吹いて、盜賊の惡心が改まつたとか、人の命を助けたとかいふ話は非常に多い（「かいぞくまる」參照）。【篳篥の唱歌及び樂譜】篳篥を學習する場合に、その旋律を覺え易くするために唱歌といふものを用ひる。これはアイウエヲ、タチテト、ハヒフヘホ、ヤヨ、ラリルロの語を組合はせて、その旋律を歌として唱へるのであつて、篳篥譜には、この唱歌を中央に記し、その左に孔名を記し、右に拍子の圏點を記す。（樂譜參照）

【沿革】この種の樂器は、既に數千年の昔に埃及に存在してゐた。その管は太い葦管を用ひた。これが西南亞細亞に入り、アレキサンダー大帝の頃には中央亞細亞に移り、その後、大月氏國に於て盛行した。支那と大月氏國と交渉を持つやうになつてから、支那に入つて來たものらしい。その構造より見てこれを胡笳とも呼び、又その音色より見て悲篥とも呼んだ。古代埃及に於ても、既にこれを「悲しい笛」と呼んでゐた。管が葦から竹に代へられたのは、恐らく大月氏國か又は西域に於てであるらしい。我が國に傳へられたのは何時頃か不明であるが、天武天皇頃には既に輸入されたものらしい。文武天皇より奈良朝時代には多く行はれ、大篳篥と小篳篥と共に用ひられたやうである。然るに平安朝に入つて大篳篥は極めて稀に用ひられるやうになり、主として小篳篥のみ行はれることになつてしまつた。大篳篥が全く滅びたのは、平安朝の中頃であるらしい。篳篥は他の樂器よりも賤しめられ、高位高官の人は、餘りこれを手にしなかつた。併し稀に源博雅（博雅三位）の如き名人も輩出した。

【田邊】

悲痛の哲理（ひつうのてつり）

論文　【著者】岩野泡鳴　【發表】明治四十三年一月の「文章世界」に掲載。後、論文集「新自然主義」の後を承けて增補改訂して刊行。泡鳴全集第十五卷所收。【內容】最初の論文集「神祕的半獸主義」（別項）は、まだ何と云つても論理の不確かさ神祕の朦朧性があつたが、「新自然主義」の時代になると一種の修正的論說ではあつたが、縱横の論を放つて自然主義の內部鬪爭も外部抗爭も一手に引受けた觀があつた。三十九年から四十三年まで、それは自然主義文學が青春的エキスタシーのその絶頂にゐた時である。本書はその新潮をよそに樺太に於て鑛詰事業といふ突飛な企てに失敗し、遊女と妾に苦しめられて血みどろに傷いた彼の記錄である。この旅から歸つた彼の笈底にあつたただ一つのものは、この論文であつた。但しこの論文は、前二論集の反對論を田中王堂が發表したのに對して、更に論駁として書いた形式になつてゐる。その最も言はんとするところは、人生＝（哲學十文藝十政治十科學十その他）ではなくて、人生＝文藝とする主張である。この主張は當時の自然主義派たる抱月・天渓・花袋・藤村・王堂等諸氏の區別的藝術觀と完全に訣別した。彼はこの實行文藝論を提げて硯友社文學を葬ると共に、味方の陣營にも砲火をひらいた。——併し果して四面楚歌の狀態であつた。抱月等と泡鳴、この兩者の對立は、こゝに於て自然主義の分化を來した。一方は「人生の從軍記者」として冷めたる自己を掲げれば、彼は「人生の一兵卒」として自ら嵐の中に投じた。彼は結論に於て表象主義を强調し、現實は思想だと云ひ、更に思想は空理を追はず、神經の敏活を以て把持する情調態度實行であるとする。其處に生存の危機を自覺し、刹那の燃燒が生活すると斷じた。そして田中氏の論を覆面の論ときめつけた。

【批評】數多い彼の論說中でも、これは最も注目すべき立派な論文であらう。花袋もこれを携へて歸つてきた落魄飄零の彼を、勇ましいドン・キホーテと云ひ、この一文を得難き收穫として擧げてゐる。泡鳴は、最初の論集「半獸主義」の頃から、既に藝術卽人生の傾向を示してゐたが、「悲痛の哲理」でこれを明白に唱へたのであつて、その意味からでもこの論集は、等閑に附し難き價値を持つものであつた。

【參考】近代の小說田山花袋○岩野泡鳴氏の人生觀並に藝術觀田中王堂（中央公論明治四十二年）○小說「憑き物」等。

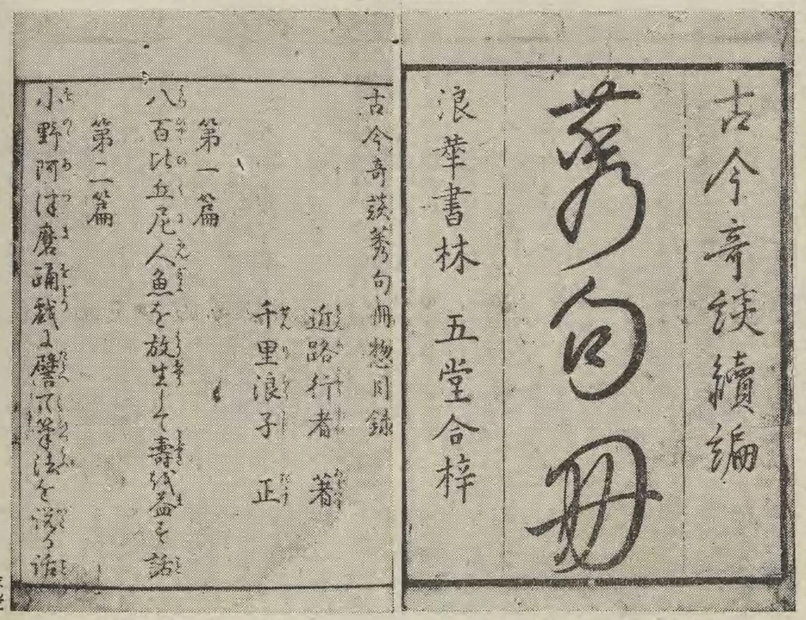
【舟橋】

莠句冊（ひつじくさ）

讀本　五卷五冊　【作者】近路行者　【名稱】詳しくは「古今奇談莠句冊」。その角書及び見返しの古今奇談續編といふは前著の「古今奇談英草紙」「古今奇談後編繁野話」の餘稿の意。又「莠句冊」といふは、序に「費を楮にまで移して、空に食ましむる謂れもて、羊草とも標す」とある。【刊行】天明六年【諸本】一般に流布してゐる刊本は、天明六年正月印行の繪入五冊本。怪談名作集（日本名著全集）所收。【題材】「英草紙」「繁野話」（各別項）と同樣、材料を奇異の物語に取るに支那小說を飜案し、これに我が古典籍中の史實傳說を結合したもの。「玉林道人雜談して回頭を屈する話」「猥瑣

道人水品を辨じ五官の音を知る話」の如き、支那小説「警世通言」や「小說粹言」の「王荊公三難蘇學士」を飜案したものであるが、「求冢俗說の異同、冢の神靈問答の話」の如く、支那の傳奇にのみ據つたものではない。要するに支那小說を飜案するに、我が古傳說・古典籍を參酌したものである。

【梗概】〔一編〕(八百比丘尼人魚を放生して壽を益す話) 若狹の小濱に嘗て人魚を喰つて長生し、後醍醐帝の延長三年には既に四百歲に達して老を見せず、白比丘と呼ばれてゐる女があつた。偶々高濱の漁人が人魚を獲て高く賣らうと眞僞を問うた時、比丘尼は憐れんで眞の人魚にあらずといひ、放生してこの浦の漁利を多からしめた。又土地の惡少年を懲したり、小濱の水流に橋がなく、行人の不便を聞いて平盤の石を見つけて架せしめたこともあつた。併しその終を知らない。〔二編〕(小野の阿津磨踊戲に譬へて筆法を語る話) 昔道風の筆道を傳へた小野篁眞の弟子に丘下阿津磨といふ能書があつた。その敎授法は、字勢を踊の緩急に譬へて、精氣を張りて弛べず、自然に序・破・急の體を得させた。久しく時めき行はれたが、寄る年波に故郷で餘生を送るため、門弟に別れ婢僕を從へて發足したが、途中奇怪な姿を現はし、何處ともなく姿を晦ました。〔三編〕(求冢俗說の異同冢の神靈問答の話) 攝津の國菟原の鄕に三つの求冢といふものがあつた。嘗て或る人が友と連れ立つてこの中の陵を拜したが、忽ちその友人が獨言し、冢の神靈がその應答をしたといふことが傳へられてゐる。又この冢の俗說に三つの異說がある。昔二人の男が一人の女を戀し、生田川に浮ぶ鳥を射た者に與へようと約され、二人とも同じ鳥を射あてたので、女は思ひ煩つて川に身を投げたので、二人も亦その後を追つた。その冢だといふ話。又一說に、郡の庄官の女を戀して遂に堺になることになつた男は、又切に娶らうと申込む男のために、射藝を競べて射損じたので、女を奪ひ迎へんとして又陳努の臣は后をして君の寵幸を挽回する策を講じた。かくて海伯の死後、后はその冢の東西に、內に外に功績のあつた陳努・篠田の冢を營ましめたといふのである。〔四編〕(玉林道人雜談して回頭を屈する話) 細川持春は玉林道人とて文筆兼ねて記憶よく、後參禪して大悟した人であるが、回頭和尙とて常々人に「あとみよ」と說く僧のその師さへ容れぬ放言を笑ひ、「和尙も回頭み給へ已もうしろみなん」と說得し、或はその博識を以て驚歎せしめる。又とかく素性粗暴な僧で、常に才ある人を見れば聖人と呼ぶので、道人說き示してこれを屈した。〔五編〕(絕間池の演義强頸の勇衣子の智ありし話) 攝津の絕間の池は、一に衣子の絕間ともいふ。この邊り氾濫多く度々治水の工事が行はれ、穴居してゐた陰獸も巢を替へ、人家に出沒して民を惱ますことが多いので、厭禁の法を以て物の怪を祓ひ、神呪を用ひて病を癒す術師等が集つて來て、却つて妖怪よりも怪しいことをする。女は男の輕薄なることを知り、代りに婢をやるが、男達は斬り合つて共に斃れ、婢もその戀に拘はつたことを悔んで死んだ。この三人の冢だともいふ。又大昔海伯の主は美しい后の寵に溺れて、冥政却つて民を逸樂に耽らしめたので、篠田の臣は菟管處女をすゝめて后を疎んぜしめ、その改を改める。そこで又陳努の臣は后をして君の寵幸を挽回する策を講じた。かくて海伯の死後、后はその冢の東西に、內に外に功績のあつた陳努・篠田の冢を營ましめたといふのである。〔四編〕(玉林道人雜談して回頭を屈する話) 細川持春は玉林道人とて文筆兼ねて記憶よく、後參禪して大悟した人であるが、回頭和尙とて常々人に「あとみよ」と說く僧のその師さへ容れぬ放言を笑ひ、「和尙も回頭み給へ已もうしろみなん」と說得し、或はその博識を以て驚歎せしめる。又とかく素性粗暴な僧で、常に才ある人を見れば聖人と呼ぶので、道人說き示してこれを屈した。〔五編〕(絕間池の演義强頸の勇衣子の智ありし話) 攝津の絕間の池は、一に衣子の絕間ともいふ。この邊り氾濫多く度々治水の工事が行はれ、穴居してゐた陰獸も巢を替へ、人家に出沒して民を惱ますことが多いので、厭禁の法を以て物の怪を祓ひ、神呪を用ひて病を癒す術師等が集つて來て、却つて妖怪よりも怪しいことをした。茨田の連衣子といふ智者に見現はされた千穗の岐夫は、夜泣の祓除に事よせて重器を盜み、卑奈の麻人は奇病に罹つて發狂した女に術を授けんとてこれを犯さんとし、强頸の村主といふ勇者に打殺される。然るに强頸は脫間の堤を築く時に、帝の命によつて人柱となり、衣子も沈められんとするが、古宮に隱れ住む弓月の秦女の所持する「山海經」を觀て水利の功用を知り、工夫を凝らして脫間を築き上げ、又そこに引留められてゐた三野の二女をも家に返した。〔六編〕(吉野猩々人間に遊びて歌舞を傳ふる話) 後村上帝の御時、吉野の宮中に慶の局とて歌舞に秀でた美女があつた。時に足利直義は高師直と和せず南朝に降を請うたが、時節柄とて蜀の許慈と胡潛の故事に倣ひ、慶の局等をして俳伎を催され、直義も亦その脇の役を當てられて舞うたが、左馬頭正行はその身代りであることを知り、直にその邸に赴いて眞の直義に對面して共に忠を誓ふ。その後威權赫々たる高階の執事の家來は、慶の局を盜み出したが、局は今はこれ迄と猩々の態を現はし、高く飛び去つた。〔七編〕(大高何某義を厲まし影の石に賊を射る話) 南北一統後、南方の餘黨が皇胤を奉じて蜂起し、興復を計つた時、間島中村といふ者が降つて來た。楠正勝はこれを怪しいと睨んでゐたが、果して正勝の留守の間に神器を奪ひ帝を弑し奉つた。南朝の士が後日を恐れて遠く追はなかつた時、大高某といふ者、それを知つて中村を射殺した。〔八編〕(猥瑣道人水品を辨じ五管の音を知る話) 猥瑣道人とて聲を聽いて人相を觀る隱者があつた。堺の富商の妻を觀て「貞正室家の相あり」といひ、或る商人を相して、「素性武人なり今商となれど名利を得べし」と說く。或る時は劍を指で彈き、その音に依つて鑒定し、又宇治川の中流・上流の水の鍋中に滴る音を聞いて何れの水であるかを分つた。その頃畠山政光といふ者、堺の商家の妻女に賴んで主君を忍ばせんとしたが、家婢誤つて水澤といふ商人を導く。政光はその木履の音に依つてこれを知り、水澤の醜を待つて主君を忍ばせた。後水澤はその家から持ち歸つた主の寶とする笛を以て、かの妻女の親里から費用を請ひ受け、主君を奉じて城を築いて據つた。商家の妻女・水澤も、共に嘗て道人が相した人々である。〔九編〕(白介の翁運に乘じて大に發跡する話) 信州更科の郡に長谷邊白介といふ者があつた。日頃貧を憂へて泊瀨の觀音在に祈つてゐたが、何をしても商利がなく、遂に月每の參詣をすること二ケ年、或る日參詣の歸りに修驗者と逢つて語り、その言葉に從つて妻を娶り、雲藏といふ僕をも使つて店を開き、漸く金も出來たので、信州に歸り、土地を買はうとした。これが



茅句冊見返し　　同上（目錄）

美的

【解說】「美的なるもの」の略。美一般並に藝術の領域に亙るもの、卽ち美學の對象となるもの。この語は、美的判斷の對象たり得ぬもの、例へば一といふ概念の如く美でも醜でもない以外のもの、換言すれば、美的判斷の對象たり得るもの一切を意味する。隨つてその中には、美的判斷の規範としての美並に美的

美的印象

【解說】美的對象から受

る事の出來ない怪異小說が流行してゐた。而も繁・英の二書と撰を一にする「莠句冊」は、その間にあつて單調平板の弊に陷つてゐない。又その文章は國文脈に漢文の遒勁を交へ、讀本の文章の一新體に近づいてゐる。〔笹野〕

美的

【解說】「美的なるもの」の略。美一般並に藝術の領域に亙るもの、卽ち美學の對象となるもの。この語は、美的判斷の對象たり得ぬもの、例へば一といふ概念の如く美でも醜でもない以外のもの、換言すれば、美的判斷の對象たり得るもの一切を意味する。隨つてその中には、美的判斷の規範としての美並に美的判斷の對象たり得るもの一切を意味する。隨つてその中には、美的判斷の規範としての美並に美的

美的印象

【解說】美的對象から受

因襲的な趣があるものは、常に藝術家(制作)の天才否定から來る樣式であるとして消極的に見られる。因襲的藝術の特色としては非寫實的形式と通俗的卑俗の趣味內容である。しかし實際上、一般社會人の考へ方、感じ方、或は行動には、獨創的な飛躍が許され難い點から、藝術制作、或は翫賞に於ても、因襲的藝術は常に獨創的藝術の傍に見られる現象である。この點に於て他方科學的進步、一般知的進步と藝術との交涉が考察に入つてくるのである。〔村田〕

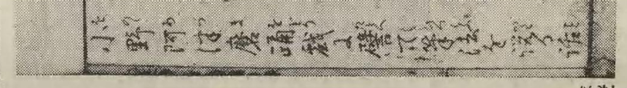
美的印象

美學 〔獨〕 Aesthetischer Eindruck.【解說】美的對象から受

形式と合一するのである。こゝに於て美的印象は、それ自身に於て統一的であるのみならず、又その對象との內的連結に於ても統一的であるといふ。〔渡邊〕

美的快感

美學 〔獨〕 Aesthetische Lust.【解說】美的態度に伴ふ快の情調を云ふ。併し近時の心理學的美學では、美的感情の本質は一種の混合感情であるとし、快不快の同時的存在を認めることが多い。蓋し一般に美感を快感であるとするのは、快感が多くの場合價値の感情として理解されることを根據としてゐるのであるが、價値の感じにはその消極的側面が許されるから、從つて不快を


小野川

は慶應の

式よ

壇にて

なはだ

もその戀に拘はつたことを悔んで死んだ。と

する。女は男の輕薄なることを知り、代りに

婢をやるが、男達は斬り合つて共に斃れ、婢

しの三人の家だともいふ。又大昔海嘯で死んだ

い后の龍に觸れて、實說却つて民を過樂に

恥らしめたので、雄田の臣は悲憤の餘り女をすゝ

めて后を殺んぜしめ、その敵を滅ぼした。そこ

傳へられてゐる。又この家の俗說に三つの異

說がある。昔一人の男が一人の女を戀し、生

川川に浮ぶ屍を船に乘せようと約され、

し、この中の陵を拜したが、忽ちその友人が獨言

のものがあつた。嘗て或る人が友と連れ立つて

の話)撰津の國菟原の鄕に三つの求家といふ

中奇怪な姿を現はし、何處ともなく姿を晦ま

した。〔三編〕(求家俗說の異同)家の神靈問答

郡に長谷邊白介といふ者があつた。日頃貧を

憂へて洛瀨の觀自在に祈つてゐたが、何をし

ても商利がなく、遂に月每の參詣をすること

二ケ年、或る日參詣の歸りに修驗者と逢つて

語り、その言葉に從つて妻を娶り、雲藏といふ

僕をも使つて店を開き、漸く金も出來たので

で、信州に歸り、土地を買はうとした。これが

評判になり、財と色とに耽ける領主は、その

妻を角力に賭けて我が物にしようとするが、

雲藏は金剛の加護によつて角力に勝ち、これ

より白介は長者と呼ばれ、又家業も益々盛ん

になつたといふ。

【構想】「英草紙」「繁野話」と同樣、奇構を主と

し、或は史論を中心として構想した。又作者

は序に我が古傳說・古典籍に據つて、支那小說

の反對で、殊に「繁野話」以來多くなつた史論

を醱案參酌したやうに言つてゐるが、寧ろそれ

をなすものにあつては、全くその反對の脚色

が認められる。元來奇異の物語を作るといふ

以上、怪異の情調を出さうとしてゐるのであ

るが、「繩間池」の外は、超自然の要素は割合

に少く、情味を現實的に取扱ふといふ風があ

り、史論をなすものは多く南北朝の事蹟によ

つて、現實的に取扱はれてゐる。【史的地位】

「莠句冊」は「繁野話」が出版されてから十九年

にして出た。この間「本朝水滸傳」「雨月物語」

(各別項)等が出て、讀本の向ふところを示した

が、なほ在來の百物語の範圍から全く脫却す

る事の出來ない怪異小說が流行してゐた。而

も繁茨の二書と狹を一にする「莠句冊」は、そ

の間にあつて單調平板の弊に陷つてゐない。

又その文章は國文脈に漢文の遣勁を交へ、讀

本の文章の一新體に近づいてゐる。〔笹野〕

美的 びてき 美學 〔獨〕 das Aesthetische.

【解說】「美的なるもの」の略。美一般並に藝

術の領域に屬するもの、即ち美學の對象となる

もの。この語は、美的判斷の對象たり得ぬも

の、例へば一といふ概念の如く美でも醜でも

ない以外のもの、換言すれば、美的判斷の對

象たり得るもの一切を意味する。隨つてその

中には、美的判斷の規範としての美並に美的

樣態としての優美(die Anmuth)の外に悲壯

美・崇高美のみならず、醜(das Hässliche)をも

含む。假に醜に對立するものの一として優

美が擧げられても、醜は美的に對立するもの

ではない。美的に對立するものは非美的(das

Ausseraesthetische)で、美的領域以外のもの

である。更に藝術學乃至藝術哲學(各別項)が

主張せらるゝに至つて、藝術的(das Künst-

lerische)なる概念が現はれるに隨ひ、「美的」

の概念から「藝術的」の概念を除外して「美的」

の概念が用ひられることも多い。〔渡邊〕

美的異態 びてきいたい 「美的樣態」を見よ。

美的因襲 びてきいんしふ 美學 〔獨〕 Es.

Konvention. 【術說】普通用語としては藝術

的因襲或は慣習といふ。藝術上因襲の意義は

藝術の獨創的個性的特性に對して一般に消極

的にしか認められない。即ち自發的に自己の

觀察や獨創的見解によつて制作の技術や主題

の選擇をなさずして、すべて典型や傳統的觀

念や技法によつて制作が行はれることを因襲

的といふ。故に藝術樣式の上で、かくの如き

因襲的なものは、常に藝術家の頭腦の

天才右定から來る樣式であるとして消極的に

見られる。因襲的藝術の特色としては非寫實

的形式と通俗的卑俗の趣味內容である。しか

し實際上一般社會人の考へ方、感じ方、或

は行動には、獨創的な飛躍が許され難い點か

ら、藝術制作、或は鑑賞に於ても、因襲的藝

術は常に獨創的藝術の傍に見られる現象であ

る。この點に於て他方科學的進步、一般知的

進步と藝術との交涉が考察に入つてくるので

ある。〔村田〕

美的印象 びてきいんしやう 美學 〔獨〕 Ästhe-

tischer Eindruck. 【解說】美的對象から受

ける印象。それは第一に視聽の二覺を主とし

てゐること、第二にそれが統一的であること

の點に於て他の印象と區別される。デッソア

(Dessoir)によれば、美的對象の客觀的一般特

質はその全體性にあるが、この客觀的特質の

必然的結果たる主觀的印象は、一般感覺によ

つて成立する。そのうち殊に視聽の二覺は、

より大なる延長の統一的形式を構成し得るの

で、他の感覺よりも美的印象を構成するに一

層重要である。その他の低級感覺たる嗅覺・味

覺・溫覺等は、自然美に於てのみ美的印象を構

成する。併し同じく低級感覺でも、筋肉感覺

の如きは動作の模倣運動をなすに缺くべからざる構成要素である。故に美的印象の基本的要素は、これ等の感覺によつて生ずる感覺感情である。而してこの感覺感情は調和・比例・律奏等の如き美的對象の形式によつて制約される。かく形式によつて制約された形式感情が、そのうちに內容又は意味をもつ時にのみ美的效果が成立する。而もその內容がその形式によつて聯想されるといふのでなく、その形式と合一するのである。こゝにおいて美的印象は、それ自身に於て統一的であるのみならず、又その對象との內的連結に於ても統一的であるといふ。〔淺邊〕

美的快感 びてきくわいかん 美學 〔獨〕 Ästhetische Lust. 【解說】美的感度に伴ふ快の情調を云ふ。併し近時の心理學的美學では、美的感情の本質は一種の混合感情であるとし、快不快の同時的存在を認めることが多い。蓋し一般に美感を快感であるとするのは、快感が多くの場合價値の感情として理解されることを根據としてゐるのであるが、價値の感じにはその消極的側面が許されるから、從つて不快を美的價値の感情即ち美的快感の中に含めることになる。故にこの立場から云へば、美的快感には多くの種類が分けられる。例へばフォルケルトは、規範的美的快感四つを擧げてゐる。(一)移入の快感。(二)人間的有意義の快感。(三)解脫の快感。(四)分化統一の快感。かくしてカント以來の美の無關心性(別項)に反對する多くの美的感情說が現はれる。併し美的快感と快感の心理作用一般との關係を明にし、特殊な快感であるとしてこれを美の原理とすれば所謂美學上の快感說(サンタヤーナ、マーシャル等)が生れる。マーシャルは快感一般と異なり、美的快感は永續性がありとし、比較的永續的な快感即ち美的快感の領域を作るため、動的。成的。方法として、(一)禁止的苦痛を利用すること。即ち心的機能の休止は苦痛を起すが、この休止を利用することによつて後に快感が生ずると云ふ。(二)過剩的機能の苦痛を除くこと、即ち前と反對に、活動能力が過剩すると苦痛が生ずるが、これに陷らないことを條件の中に數へる。次に永續的快感の

といひ藝術家といふ時も、これは既に價値の點から規定してゐることになる。この意味に於て、美的なるものはこれを一種の價値形式として見ることなくして考へられぬ。かゝる價値の一形式たる美的價値が價値體系中に於て、如何なる地位を保つことによつてその獨自なる價値形式を得るかは、美的自律性の問題であり、その價値が如何なる法則によつて構成さるゝかは美的法則性の問題である。(美的自律性・美的法則性參照)

【參考】Windelband, W.: *Normen und Naturgesetze.* (Preludien. Bd. II. 7 u. 8 A. 1921.) = Cohn, J.: *Allgemeine Aesthetik.* 1901. 〔渡邊〕

美的感覺 かんかく 美學 〔獨〕 Aesthetische Empfindung. 〔英〕 Aesthetical Sensation. 【解說】感覺は吾々の日常の現實意識には、純粹に現はれ難いと主張する心理學說(ジェムス等)もあるが、一般的には心理上の一要素と考へられてゐる。從つて美意識に於ても、夫々の感覺に美的意義を認めるのが普通である。而して感覺を生起せしめる諸種の感官は、各々その機能を異にする關係上、官能に附與する美的意義に差異があるとし、この點に關して議論が起るのである。高級官能は視覺及び聽覺、これ等にのみ美的意義を與ふるものは、ヘーゲル以後ハルトマンに至る觀念論的美學、コンラード・ランゲ、リップス等の心理學的美學(別項)である。低級官能としては觸覺、嗅覺、味覺、運動感覺等、これ等にも美的意義を認むるものに、グロースがあり、嗅覺、味覺にも認むるものに、ギュヨー、ピロ、エフ・フィシャー等がある。又空間藝術をなす人々の間では、觸覺や運動感覺は、美術

領域を積極的に産出する條件として、(一)快感自身の産出。即ち(イ)緊張と休止との交互作用によつて生ずる快の産出。例へば急激な曲に次いで靜かな曲を以てするが如き、(ロ)活動機能の十分な運動による快の産出。即ち種々な心的活動機能を變化させること。(二)快感領域の永續性を得るための方法。(イ)多くの快感的刺戟の手段をとること、(ロ)この刺戟に疲れないために、刺戟の焦點を常に移動させること。かくして永續的な美的快感が得られるといふ。ボサンケは、美的經驗は先づ快感を得ることであるとし、美的快感の特質を三つ擧げてゐる。(一)安定的(stable)であること。(二)關係的(relative)であること、即ち對象の性質に、常に關聯してゐる感情であるといふ。(三)共通的(common)であること。(美的感情參照) 〔村田〕

美的環境 びてきかんきょう 「美的識閾」を見よ。

美的隔在性 びてきかくざいせい 美學 〔獨〕 Dieaes. Isoliertheit. 【解說】リップスの美學上の用語である。美意識の特性を心理的內容的に考察すれば、(一)美的理念性(別項)、(二)美的隔在性、(三)美的客觀性(別項)、(四)美的現實性(別項)、(五)美的深さ(別項)の五つの特異な性質が擧げられるとした(美意識參照)。こゝに謂ふ美的隔在性といふのは、吾々の美的觀賞の際には、對象をありのまゝに感ずることによつて、觀念的に自己のうちのものとして感ずるのであるけれども、吾々主觀のうちに普通に觀念的に存するものとは全く別個獨立のものであるかのやうな感がある。美的態度において、對象が吾々の主觀から全く切り離されて、特殊な存在を保つてゐるかの如き感じを與へるのである。リップスはこの美的隔在性を美的觀念性と呼んでゐるが、これはこの美的假象的性質を規定してゐるのである。(美的觀察・假象感情參照) 〔村田〕

【參考】Hartmann: *Aesthetik.* ○深田康算全集第三卷 〔村田〕

美的假象感情 びてきかしょうかんじょう 「假象感情」を見よ。

美的價値 びてきかち 美學 〔獨〕 Aesthetischer Wert. 【語義】この語はこの價値の概念の解しやうによつて二樣に解される。即ち(一)この價値を經驗的價値として解すれば、藝術批評などに標準となる意味の美的價値となる。この意味の美的價値は、美學上の問題としての美的價値ではない。(二)これを先驗的價値として解する時は、批判哲學的美學上に問題とされる價値形式としての美的形式となる。即ち第一の意味に於て美的といふ時も、既にそこに美的といふ一の價値を意味する。價値意識なくして美といふ時に、それは單なる事實ではない。美とはいかなる經驗的事實に假定された先驗的形式としての美的價値が、第二の意味の美的價値である。

【學說】コーン(Cohn)に依れば、吾々が美を考へることはできぬ。吾々が美的事實といふ時、既にそこに美的なるものが假定されてゐなければならぬ。多くの美の本質を求むるものは、あらゆる美の裡に吾々の價値評價と全く獨立に、一の普遍的實在なるものが潛在してゐると考へてゐる。かゝる形而上學者と雖も、先づ美なるものを特殊の價値が與へられたるものとして認めずには居られぬ。又心理學的美學者が藝術

の感性的形體的側面に於て實在と合致しながら、美それ自身は實在から遊離した觀念的事實であることを指す概念である。【解說】この概念は三つの契機を含んでゐる。即ち(一)美は全く實物の摸寫であるとする考。かくして素朴的な藝術摸寫說は背多少この假象の考を藏してゐる。(二)美は實物の寫しであるが實物ではない觀念的事實であるといふ考。これは觀念論的美學に於ては重要な意味が與へられ、カント以後、ハルトマンに於て大成した美學の中心的概念となつた。(三)美は寫しであつても實物よりも優越してゐる。美の所在を積極的に假象におく考。ハルトマンによれば、主觀的現象としての美は事物そのものの生產でもなく、又觀照する主觀の生產でもない。兩者の共同作用の事實の生產であるといふ意味に於て、美は現實のものの「見せかけ」即ち假象の中にあるる。即ち美は現實の中に在るのでなく、純粹觀念的なところにあり、假象の特質によつて規定される〔美の具象段階〕を見よ。かくして美的假象は、これを生んだ現實事物の客觀的現實性からも分離し、又主觀的現實性からも分離する時、全く純粹な美的假象となるのであつて美を支持するといふ。併し假象が獨立な美の所在であることの積極的證明は困難である。この點に於ては、單に美意識の事實を說明するためのみの概念となり、或は幻想の近似概念として理解されてゐる。吾々の美的觀察に於ける眞理としては、主觀的に別個獨立の觀念として美の內容となつてゐるのである。 〔村田〕

美的假象 びてきかしょう 美學 〔獨〕 Aesthetischer Schein. 【語義】美的鑑賞に於て美的對象はそれ自身は實在でなく、單に觀照の主觀に現はれる假象であるといふ意味。 〔村田〕

美的感官 びてきかんかん 美學 〔獨〕 Aesthetisches Sinnesorgan. 【解說】美的感覺を與へる感官。即ち視覺及び聽覺。これ等にのみ美的意義を與ふるものは、ヘーゲル以後ハルトマンに至る觀念論的美學、コンラード・ランゲ、リップス等の心理學的美學(別項)である。低級官能としては觸覺、嗅覺、味覺、運動感覺等、これ等にも美的意義を認むるものに、グロースがあり、嗅覺、味覺にも認むるものに、ギュヨー、ピロ、エフ・フィシャー等がある。又空間藝術をなす人々の間では、觸覺や運動感覺は、美術

の本質を理解するのに重要な要素であるとして觸感されてゐる。 〔村田〕

【論據】高級官能に於ては、(一)外物に對する順應作用が細かく分化してゐるため、外的刺戟と吾々の內體性との交涉關係は、殆ど意識に上つて來ない。(二)從つて官能に附隨する快不快の感情の生起の程度が量的に微弱であるがため、却つて情趣(美的情趣參照)の成立を容易ならしめ、(三)そのために知覺聯合をも容易に形成されることになる。(四)かくして美意識に於ける直觀的側面と感情的方面との統一的融合は、感覺と感情との情趣的融合をもつて可能になつて來る。(美意識參照)。以上に新しくそれ等を超えて加へるものを天才とし、天才を出現せしめ得る條件の一としてゐる。 〔村田〕

美的觀察 びてきかんさつ 美學 〔獨〕 Aesthetische Betrachtung. 【解說】美的態度によつて對象を觀察すること。リップス(Lipps)の用語。リップスによれば、美的觀察とは思想や想像等の如き現實內容から離れた孤立性をもつて觀察であり、美的客觀性と言ふも美的現實性と言ふも、かゝる限界內に於てのみ用ひらるべきものであると言ふ。又自然に對する美、英國のマーシャル等の美學となる。なは美感(美的感情)の性質規定は近世美學に於ても主要な部分をなすものであるが、一般に快感的性質を認め、美的快感(別項)の特殊性を美意識全般の原理とすれば、即ち米國のサンタヤーナ、

分類

- 對象感情
- 人格感情
  - 樹與の感情(同情)
  - 快感情

(以上假象感情參照。(四)フェルケルトの假象感情、(ロ)同情的假象感情、(ハ)實際感情。(三)ハルトマンの分類。(イ)反應的感情の形式感情、(ロ)內容感情、(ハ)假象感情、(ニ)實際感情。(以上假象感情參照。(四)フェルケルトの分類。(イ)反應的感情、(ロ)形式感情、(ハ)內容感情、(ニ)假象感情、(ホ

美的環境（びてきくわんきやう） 美學 〔獨〕 Aes. Milieu.【解說】藝術生産に關與する自然的社會的一般の條件をいふ。藝術作品を客觀的に精密に研究する人々、例へばハンス・コルネリウス、ルドウィヒ・ラォルクマン或はジェッオルトン等に於ては、作品が如何にその制作の時と場所とに支配されたかといふ點を精密に觀察してゐる。概していへば、客觀主義美學（別項）の立場にあるものは、環境の藝術への影響、即ち民族・氣候・風習・種族・經濟的狀態等の影響を常に考察してゐる傾きがあり、人種・氣候・習俗（ミリュウ）から作品の特性を説明したイポリット・テーヌの如き、その代表的なものである。しかしギョーは、環境が天才を生み、藝術を支配するといふことは單に一面の眞理に過ぎぬと考へ、環境から受ける感情や形相の上に新しくそれ等を超えて加へるものを天才とし、天才を出現せしめ得る條件の一として社會環境を認めた。（美的因襲參照）（村田）

美的觀察（びてきくわんさつ） 美學 〔獨〕 Aesthetische Betrachtung.【解說】美的態度によつて對象を觀察すること。リップス（Lipps）の用語。リップスによれば、美的觀察とは思想や想像等の如き現實內容から離れた孤立性をもつ觀察であり、美的客觀性と言ふも美的現實性と言ふも、かゝる限界內に於てのみ用ひらるべきものであると言ふ。又自然に對する美的觀察の場合にも、同じくこれが現實性を除外して觀察しなければならぬといふ。（渡邊）

美的觀照（びてきくわんせう） 美學 【解說】この美的觀照の話は、一は美的直觀（別項）と同義に用ひられ、一は美的觀察（別項）と同義に用ひられてゐる。（渡邊）

美的感情（びてきかんじやう） 美學 〔獨〕 Aes. Gefühl. 〔英〕 Aes. Feeling.【解說】吾々の美意識活動に伴ふ感情一般を云ふが、特に鑑賞意識中に生ずる感情を指すことが多い。美感とも略稱する。又美的感情の分類及び性質規定はそれ〴〵の美學によつて異なる。その二三を擧げる。（一）ジントに據れば、感情の構成內容の簡單なると複雜なるとに準じて、次のやうに分類する。（美的範疇・美的情操參照）

美的感情
- 要素的（簡單）美的感情……主として視覺及び諧和・旋律・和聲等に伴ふ圓形・色彩等を感ずる狀態。
- 高等美的感情……優美・壯美・悲壯美・滑稽美等の感情。

（二）テッツァールに據る分類。（イ）感官感情（快感參照）（ロ）同情的假象感情（ハ）實際感情。（ニ）ルトマンの分類。（イ）反應的假象感情（以上假象感情參照。）（四）フォルケルトの分類。

- 感情
  - 對象感情
  - 人格感情
    - 關與の感情（同情）
    - 狀態感情

美的感情の性質規定は近世美學に於ても主要な部分をなすものであるが、一般に快感的性質を認め、美的快感の別項の特殊性を美意識全般の原理とすれば、即ち米國のサンタヤーナ、英國のマーシャル等の美學となる。なほ美感は快感であるとして、美感に於ける快の性質を規定する仕方によつて多くの快感說を生ずる。その主なるものを擧ぐ。（a）生活力條列ペンサー、シラア等（適應本能參照。）（b）內的摸倣に因する快感を說くグロース（內的摸倣參照。）（c）感情移入說に於ける美的快感規定（感情移入參照。）（d）知力・意志・感情の三活動の刺戟による快感であると說くものゝ。ギュヨーふ快感であるとするコンラッド・ラング（幻覺）（e）美的共感（美的共感參照。）（f）假象感情說（別項參照。）（以上美的快感參照。）（村田）

美的鑑賞（びてきかんしやう） 「美的享樂」を見よ。

美的關心（びてきくわんしん） 美學 〔獨〕 Aes. Interesse.【解說】關心又は興味とは一般に何か價値ある對象に對して主觀が關與的態度をとることを意味する。故に美的關心といふ場合にも、美的對象（別項參照）（眞體的に云へば藝術品）と主觀との關係によつて、いろ〳〵な關心が成立する。フィドレルによれば各人の審美的關心（文學に於ける傾向的なる內容に對する關心）（二）美的對象に就いての實際的關心（藝術品に對する立場の相違から次の如き分類が出來るといふ。（一）素朴的人間の美的關心。彼等は自己の感覺の美的受用能力を以て藝術品に對する。（二）自己の關心を特に表現の思想內容に向けるもの。（三）所謂美術通・好事家・蒐集家・學者等に見られる如く、藝術品に關する凡ゆる知識を集めることに興味を有するもの。（四）これ等の知識の集積を材料として、或は補助手段として美術品の歷史的整理を行ふことに關心するもの。（五）美術の歷史的研究を條件とし、樣式發達の法則理解を藝術理解の結果であるとする人の有する興味。（六）藝術品を人間の文化生活全體の結果、又はその要素であると考へる人々の關心。（七）文化史の理解は世界の藝術的理解に基づいてのみ可能であることを說いてゐる。今、大西克禮氏の分類に從へば次の如くである。（一）美的對象に對する知的興味の中を別ければ、（イ）美的對象に對する美的興味。（ロ）美的對象に對する非美的興味（學者・美術史家が作品に對する場合の如き。）（ハ）非美的對象に對する非美的興味（科學者が自己の研究對象に對する場合。）（ニ）對象に就いての情意的興味を分ければ、（イ）非美的對象に對する美的關心（文學に於ける傾向的なる內容に對する關心。）（ロ）美的對象に就いての實際的關心（藝術品の蒐集保存等に關する興味。）（ハ）非美的對象に就いての實際的關心（作品は物として實際的關心が成立する。フィドレルによれば各人の審美的關心は、美術

する者の動作を注視する際に吾々は想像の上で、或は實際に肉體的に對者の動作を摸倣し再現することがある（内的模倣參照）。かくの如き過程によつて、感情移入は完全に行はれるといふ。而して對象に移入される感情（對象感情）は、吾々の身體的有機的過程を通して追感された現實の感情であるとする點で、美的對象感情は、現實感情であるとするリップスの考に近い（對象感情參照）。併し追感又は共感の概念は、對象を先つ知覺し、知覺された對象の内容が豫想され、限定されてゐる。リップスの感情移入では、對象の感情即ち内容となるべき方面は、凡て自我の側から移入されるのである。從つてグロースの云ふ美的共感に於ては、對象について我が感ずる個人的同情（人格的感情參照）の如き主觀感情の移入は、全く除外されなければならない。かくてグロースが運動感覺等を美的感情移入の根柢とした ことは、一面的であると云ふべきである。（内的模倣參照）

【參考】Groos：*Das aes. Genuss*（村田）

美的享受（びてきじゅじゅ）「美的享樂」を見よ。

美的享樂（びてききょうらく）美學（獨）Aes. Genuss.【語義】美的態度が心理的にその情意の側面から理解されるとき、快感的であることと、過程の上から受動的に考へられるところから享樂といひ、又受用・享受ともいふ。美的創作（別項）と共に現代美學の中樞的研究の方面である。【解說】美的鑑賞の態度は觀念論的美學では、靜觀的（靜觀性參照）であると說かれたが、心理學的美學でもこの美的態度を分析し、他の態度との區別を本質的に明かにすることを任務とし、從つて美意識（別項）の構成要素及び構成の過程を問題とする。而して

は、全く吾々自身の價値の反映であつて、道德的の場合にリップルト（Rickert）によれば、美的判斷と一般にいはるゝものは、美的價値についての理論的判斷である。判斷は常に理論的である。かゝる理論的判斷に於ては、形式・内容が現はれる。けれどもかゝる場合は、美的省察の領域を離れた場合である。故に理論的に見れば美的價値も規範の形をとるが、美的狀態自身は規範の當爲を知らぬ。即ち美的價値には規範は必當するが、それは沈默せる無當爲の規範である。

【參考】Windelband, W.：*Normen und Naturgesetze.*（*Präludien.* Bd. II. 7 u. 8 A. 1921.）‖ Tumarkin, A.：*Aesthetische Ideal und ethische Norm.*（*Zeitsch. f. Aes. u. allg. Kunstwiss. Bd. II. 1908.*）‖ Rickert, H.：*Vom System der Werte.*（*Logos. Bd. I. 1912*）（渡邊）

美的客體（びてききゃくたい）「美的客觀」を見よ。

美的客觀（びてききゃっかん）美學（獨）Aesthetisches Objekt.【異稱】美的客體【解說】種々なる意味に解されてゐるが、何れにしても、美的對象なる語が種々なる意味に解されてゐるものと同義。美的主觀の對語。（美的對象參照）（渡邊）

美的教育（びてききょういく）「藝術教育」を見よ。

美的共感（びてききょうかん）美學（獨）Aes. Mitgefühl.【解說】リップスの感情移入（別項）過程を指すところのグロースの用語である。或る對象に感情移入が行はれる時に、生理的心理的過程として實際に或は再現的に運動感覺や身體的作用が作用する。例へば舞臺

心の對象になる場合）。（無關心性參照）

【參考】フィドレル藝術論（金田廉譯）（村田）

美的官能（びてきかんのう）美學（獨）Aesthetische Sinn.（英）Aesthetical Sense.【解說】美的な感覺を起させる感官のはたらきをいふ。（美的感覺參照）（村田）

美的規範（びてききはん）美學（獨）Aesthetische Norm.【語義】美又は藝術上の價值標準。この價值概念の解しやうによつて美的規範なる語も種々なる意味に解釋されてゐる。第一は、この價值が時代・民族によつて異なる經驗的事實上の理想を意味する場合の美的規範である。これは藝術の實際批評に於ける美的理想の標準となるもので、この意味の美的規範は、美學上の問題としての美的規範ではない。第二は、かゝる經驗的事實を通して見出さるゝ因果法則が、この法則に規らつと事實が成立繼續するといふ意味で、事實に對する價值を意味する場合の美的規範である。これは美や藝術に對する經驗科學的研究によつて見出さるゝ美意識や、藝術現象に於ける自然法則を意味する。隨つてこの意味の規範は、事實を構成する上に一種の規範たり得るといふに過ぎないので、法則自身の性質は、かく在るには、かくなければならぬことを示す事實法則であつて、如何に在るべきかを示す意味に於ける規範法則ではない。リップス（Lipps）やデッソア（Dessoir）などは、美的規範なる語をこの第二の意味に解釋してゐる。第三は、この事實即ち美的事實として區別する場合に、この特定の事實に先驗的に假定されてゐる

ことと、過程の上から受動的に考へられるところから享楽といひ、又受用・享受ともいふ。美的創作（別項）と共に現代美學の中樞的研究の方面である。【解説】美的鑑賞の態度は觀念論的美學では、靜觀的（別項參照）であると說かれたが、心理學的美學でもこの美的態度を分析し、他の態度との區別を本質的に明かにすることを任務とし、從つて美意識（別項）の構成要素及び構成の過程を問題とする。而して

美的共感（びてききょうかん）　美學（獨）Aes. Mitgefühl.【解説】リップスの感情移入（別項）或る對象に感情移入が行はれる時に、生理的心理的過程として實際に或は再現的に運動感覺や身體的作用を伴ふ場合に、この過程を指すところのグロースの用語である。

美的教育（びてききょういく）　「藝術教育」を見よ。

（渡邊）

象參照）

形相たり得ない。この話は又時としては美的形態（別項）とも同義に用ひられる。（渡邊）

美的形態（びてきけいたい）　美學（獨）Aes. thetische Gestalt.【語義】一の全體として統一的に觀察された美的心理意識。主として心理學上の形態論（Gestalttheorie）の用語。形態論といふのは、心理學上ディルタイ（Dilthey）が、世界觀の究極の根柢は生命であるといつたやうな考へ方の影響に基くもので、在來の心理學が感覺・知覺等の部分から出發し、意識を部分々々に分析してその部分相互の關係を見逃した結果、分析された各部分が實際吾々が體驗する生命の部分たり得なくなつたことに對して、先づ意識の全體性（Ganzheit）を明かにし、感覺とか知覺とかいふ各部分を、この全體意識を構成する部分として說明しようとする。即ち意識を一の構成された形態として觀察して、かゝる方法によつて始めて生きた心理意識の姿が明かになるとするのである。この考へ方に基く研究は、エーレンフェルス（Ehrenfels）を經て、ゲルトウィマー（Wertheimar）に至つて明かになるが、美學上でも美的なるものがかゝる意味で全體性をもつて美的形態として、又藝術が藝術形態（Künstgestalt）として觀察されるやうになる。

【參考】Schmied-Kowarzik, W.: *Intuition.* 1910. ‖ Feldkeller, P.: *Die Einstellungsmetapher.* (*Zeitsch. f. Aes. u. allg. Kunstwiss. Bd. XXII.* 1928.)　（渡邊）

美的現實性（びてきげんじつせい）　美學（獨）Aes. Wirklichkeit.【解説】リップスの感情移入美學に於ける用語で、美的客觀性（別項）と同義としてよい。即ち感情移入（別項）の場合に、對象に移入される感情は、即ち美的内容は現實的性質のものであるといふことを指すのである。リップスによれば、例へばファウストの不安や失望に感じ入るところの人は、現實に十分その不安失望の情を自己の中に體驗するのである。即ち美的事物中に存在する感情、又は情緒が特に藝術品中に描出されてあり、それが吾々の體驗中に浸み透り、隨つて又共同的に體驗されるべき傾向があるといふことを意味する。この點に關して美的に體驗された情緒、例へばファウストの失望不安の情は、單に外觀上の或は想像上の失望不安の情に過ぎない。即ち表象化された感情、再生感情に外ならないと反對するウィタゼークの說があり、フォルケルトの折衷說がある。（感情移入

それが統一された藝術品の形態であり、素材と形態とが異なる對象であることは、音の上では同一であり、旋律の上では全く同一であることによつても知られる。かくの如き美的形態は、理論的に判斷によつて摑まれるのでなく、直觀によつて把持される對象である。

【參考】Schmied-Kowarzik, W.: *Intuition.* 1910. ‖ Feldkeller, P.: *Die Einstellungsmetapher.* (*Zeitsch. f. Aes. u. allg. Kunstwiss. Bd. XXII.* 1928.)　（渡邊）

美的現實性（びてきげんじつせい）　美學（獨）Aes. Wirklichkeit.【解説】リップスの感情移入美學に於ける用語で、美的客觀性（別項）と同義としてよい。即ち感情移入（別項）の場合に、對象に移入される感情は、即ち美的内容は現實的性質のものであるといふことを指すのである。リップスによれば、例へばファウストの不安や失望に感じ入るところの人は、現實に十分その不安失望の情を自己の中に體驗するのである。即ち美的事物中に存在する感情、又は情緒が特に藝術品中に描出されてあり、それが吾々の體驗中に浸み透り、隨つて又共同的に體驗されるべき傾向があるといふことを意味する。この點に關して美的に體驗された情緒、例へばファウストの失望不安の情は、單に外觀上の或は想像上の失望不安の情に過ぎない。即ち表象化された感情、再生感情に外ならないと反對するウィタゼークの說があり、フォルケルトの折衷說がある。（感情移入

形態（別項）とも同義に用ひられる。（渡邊）

美的形態（びてきけいたい）　美學（獨）Aes. thetische Gestalt.【語義】一の全體として統一的に觀察された美的心理意識。主として心理學上の形態論（Gestalttheorie）の用語。形態論といふのは、心理學上ディルタイ（Dilthey）が、世界觀の究極の根柢は生命であるといつたやうな考へ方の影響に基くもので、在來の心理學が感覺・知覺等の部分から出發し、意識を部分々々に分析してその部分相互の關係を見逃した結果、分析された各部分が實際吾々が體驗する生命の部分たり得なくなつたことに對して、先づ意識の全體性（Ganzheit）を明かにし、感覺とか知覺とかいふ各部分を、この全體意識を構成する部分として說明しようとする。即ち意識を一の構成された形態として觀察して、かゝる方法によつて始めて生きた心理意識の姿が明かになるとするのである。この考へ方に基く研究は、エーレンフェルス（Ehrenfels）を經て、ゲルトウィマー（Wertheimar）に至つて明かになるが、美學上でも美的なるものがかゝる意味で全體性をもつて美的形態として、又藝術が藝術形態（Künstgestalt）として觀察されるやうになる。

【參考】シュミート・コワルチーク（Schmied-Kowarzik）によれば、一切の藝術に於ける美は、その材料にあるのでなく、その材料の統一たる形態の上に成立する。例へば音樂に於て個々の音は材料であり、旋律・和聲・律奏は形態の如く、美的直觀性（別項）と同義に用ひられることもあるが、今は多く、色・線・形等の視覺對象の性質をいふ。隨つて形であつても暗中の觸覺のみの對象となるものは美的形相たり得ない。この話は又時としては美的

産するに必要な、精神の緊張。前者の場合の例としては、無關心の關心（別項）の如き緊張がある。後者の例としては、多樣なる對象を統一し、これが表現構成を貫徹せしむるに至るまでの精神の緊張がある。（渡邊）

美的空想（びてきくうそう）　「美的想像」を見よ。

美的具象性（びてきぐしょうせい）　美學【解説】美的直觀性（別項）或は美的形相性（別項）と同義に用ひられる概念で、美は先づ直觀的でなければならぬことを謂ふのである。造形美術に於ける形相性に對して、詩文學の如き美的對象の具象性形相性に關してはレッシングの論文「ラオコーン」以來多くの論議が行はれ、所謂「詩語の觀照性」の問題としてデッソア、ヴァン・リー夫人、その他の人々によつても重要な實驗的研究が行はれた。

【參考】美學原論　大西克禮　○深田康算全集第三卷　（村田）

美的形式（びてきけいしき）　美學（獨）Aes. thetische Form.【解説】この形式なる語を先驗的形式の意味に解するか、經驗的形式の意味に解するかによつて二樣に解される。前者に於ては單なる經驗的事實を美的事實としてこれに美的といふ意味を與へる意味形式で、美的範疇の形式といふ話と同義となる（美的範疇・形式主義的美學參照）。後者に於ては、經驗的意味の美的對象の形式といふ意味で、多樣の統一、調和的對照・均衡・比例・律奏・旋律・諧調等の諸形式の總稱である。（渡邊）

美的形象性（びてきけいしょうせい）　「美的形相性」を見よ。

美的形相性（びてきけいそうせい）　美學（獨）Aesthetische Bildlichkeit.【解説】視覺に基く美や造形藝術に於ける對象の感官性。この語は往時キルヒマン（Kirchmann）に於ける特に性意の側面現象が重要であるとするところから、美的受用の研究は美的好適（別項）の研究となる。而して他方直觀的知的方面と主觀的性意の側面とを規定することから、美意識（二）美的統覺（別項參照）を說くヴント、ジーベック等。（二）美的統覺が一種の人格的統覺であるとするところから出發するリップス、フォルケルト等の感情移入說（別項參照）。（三）美的快感の規定から美の本質的原理を導く快感說（美的快感參照）。（四）美的鑑賞は純粹直觀即ち靜觀であるとしたカントの考を積極的に主張するキュルペ等の美的靜觀說。（五）美的鑑賞の本質は内的摸倣（別項參照）にありとし、美的快感を遊戲から導いて說くグロースの内的摸倣說。（六）美的鑑賞の本質は意識的（自覺的）自己欺瞞にあるとするランゲの幻覺說（別項）。（七）直觀的認識は表現であるとし、美的受用と表現とは、根柢において一つであるといふ特殊な立場を出張するクローチェの美學說。その他多くの說があるが、美の意識の事實的内容を問題とするか、その作用の特殊性を說明するかに依るものが多いが、美を單なる意識上の事實とせず、また美的體驗から形式のみを抽象して美を說くことの先驗哲學的美學（參照）にも反對して、美的體驗そのものを對象とする現象學的美學、ガイガー、ウェティッ、オーデブレヒト等の說などがある。（美學參照）　（村田）

美的緊張（びてききんちょう）　美學（獨）Aesthetische Spannung.【解説】美的態度を持するに必要なる精神の緊張、又は美的對象を生

はるゝ限りに於て、美的合理性を得るのである。この種の美は自然美・工藝美、特に工業化せる現代の建築美・機械美等の實用的對象に現はれる美に於て重要な要素をなす。又最近のドイツ文學上に於ても、客觀的・科學的・報告的記述を主とする樣式が現はれて、この實質美を強調しようとする。〔渡邊〕

美的根本形態（びてきこんぽんけいたい）美學〔獨〕Aes. Stoffe.〔英〕Aes. Materials.【語義】藝術家の創作の原料となる一切のものを云ふ。自然・人物・事件・傳說・觀念・思想・感情等。【解說】藝術的想像によつて美的形象に綜合さるべき原料を分ければ、(一)文學に於ける題材・主題と云はれるもの、即ち一定の人及び人に關する事件等。(二)造形美術上の石・木材等の物質的材料。普通この場合を指すことが多い。藝術家が材料に對する興味は、それ自身美的意義を有しないが、材料は(殊に第二の意味の)それ自身の法則(或は性格)を有し、創作に或る制約を與へる事が多いから、材料の性質を深く理解する事は創作の一つの條件となる。又文學などに於て作家の現實的經驗は、そのまゝで美的表現價値を獲得するものでないから、數量的な經驗事實の豐かさは必要でない。但し表現の外部的條件として創作の狀態を誘導する。(美的創作參照)〔村田〕

美的識閾（びてきしきいき）美學〔獨〕Aes. Schwelle.【解說】心理學上、閾閾とは一般に吾々の感覺が起り得る最下限度の刺戟價を云ふ。美的識閾とは美的の快不快、好適不好適を意識しない最下限度の刺戟價を指す。即ち快感的刺戟でもそれが强度のものであるか、又は作用の長い場合には美意識の範圍に入らなければ美的領域に現はれるが、鼻の上ではそれが一致しないために現はれ得ないからである。勿論美的合理性自身が美であるのではなく、それが美的領域に現はれるに過ぎない。美的合理性を得るのである。この種の美は自然美・工藝美、特に工業化せる現代の建築美・機械美等の實用的對象に於て、美的合理性を得るのである。〔渡邊〕

美的材料（びてきざいれう）美學〔獨〕Aes. Stoffe.〔英〕Aes. Materials.【語義】藝術家の創作の原料となる一切のものを云ふ。自然・人物・事件・傳說・觀念・思想・感情等。【解說】藝術的想像によつて美的形象に綜合さるべき原料を分ければ、(一)文學に於ける題材・主題と云はれるもの、即ち一定の人及び人に關する事件等。(二)造形美術上の石・木材等の物質的材料。普通この場合を指すことが多い。藝術家が材料に對する興味は、それ自身美的意義を有しないが、材料は(殊に第二の意味の)それ自身の法則(或は性格)を有し、創作に或る制約を與へる事が多いから、材料の性質を深く理解する事は創作の一つの條件となる。又文學などに於て作家の現實的經驗は、そのまゝで美的表現價値を獲得するものでないから、數量的な經驗事實の豐かさは必要でない。但し表現の外部的條件として創作の狀態を誘導する。(美的創作參照)〔村田〕

美的根本形態（びてきこんぽんけいたい）「美的樣態」を見よ。

美的合理性（びてきがふりせい）美學〔獨〕Aesthetische Rationalität.【解說】實生活上の合理的なる性質が美的領域に現はれる場合の性質。かゝる性質は時として美的價質性、又は美的合目的性（この場合の目的は經驗的目的であつて、カントの意味する合目的性とは全くその意味を異にする）などとも言はれる。又かゝる性質に基づく美は、價質美・合理美・實用美などとも言はれる。例へばフェヒナー（Fechner）が言つたやうに、紅い色は頰の上では美しく見えるが、鼻の上では醜くなるのは、その色が頰の上では頰の合理性に一致して、頰の合理性がこの色によつて美的領域に現はれるが、鼻の上ではそれが一致しないために現はれ得ないからである。勿論美的合理性自身が美であるのではなく、それが美的領域に現はれるに過ぎない。美的合理性を得るのである。この種の美は自然美・工藝美、特に工業化せる現代の建築美・機械美等の實用的對象に於て、美的合理性を得るのである。〔渡邊〕

美的構想力（びてきこうさうりよく）美學〔獨〕Aesthetische Einbildungskraft.【解說】構想力といふ語は美學上に於ては二樣に用ひられてゐる。一は創造的意味をもつものとして、一は複製的意味をもつものとして解される。即ち前者は美的統覺（別項）の意味であり、後者は美的想像（別項）の意味である。〔渡邊〕

美的好適（びてきかうてき）美學〔獨〕Aes. Angenehm.【解說】一切の知覺的對象は、「それは花である」といふが如く、一の客觀的判斷の形式に於て、即ち客觀的存在として意識される。然るに花の美的印象は、「それは美しい」といふが如く、主觀的な感情の中に現はれる。即ち後者の場合には、花は吾々にとつて好適されたものである。かくの如く事物を直觀する場合に、主觀客觀の關係に於て種々な意味の好適が成立するが、一般的に好適の概念を規定するところのものは、吾々の內的狀態の對象的美象の快感である。而して特に美的感情は、特殊な直觀に於ける感情であるといふ假定のもとに、美を研究する者の間に可なり早くから、美的觀察に於ける多くの好適（美か崇高か滑稽かを心理學的に分析綜合し、獨自の美の感情として一つの系統に還元することを目標とする研究が行はれた。即ち美的好適の心理學はかくして美學の一方の分野となつたのである。故に心理學的美學の大部分は美的好適の理論といつてよい。而して近代心理學的美學の主張は、次の點に要約されるであらう。（一）美的好適は單純な狀態でなく複雜してゐるから、單なる判斷よりも多くの獨自的要素を有する。從つて深い心理學的に究明されねばならない。（二）美的判斷はかくしてよりも多くの獨自的要素を有する。從つて深い解剖の必要がある。（三）美的判斷はかくして

美的好適の種類　客觀に對する一種の直觀としては、好適といふことを理解するならば、そこには次の如くである。（一）我に與へられた感覺知覺表象等一切の中に生ずる好適。これを特に快適（感覺的）と稱する。（二）感覺知覺表象等が、一定の內的關係を保つところの全體として理解された形式の中に生ずる好適。これを道德的好適といふ。（三）快適の對象と道德的好適の對象との關係が直觀されるとき生ずる好適。これを分けて、（イ）合目的々（有機的）好適、即ち實用的好適である。これは與へられた感覺知覺等と客觀全體の形式とが、有機的不可分の關係にあることの表象の中に生ずる好適である。（ロ）美的觀察の好適。客觀全體の形式とその知覺的感覺的要素とが表面的に結合し、而も全體的に觀察されるときの好適である。（快適參照）〔村田〕

美的現象（びてきげんしやう）美學〔獨〕Aesthetische Phaenomen.【解說】現象といふ語は三つの意味に理解される。（一）ヘーゲル流の形而上學に用ひられた意味、即ち實在の發展の過程（werden）を意味する。（二）心理學的意味、即ち心理作用そのものをいふ。（三）現象學的意味。即ち吾々の種々な體驗のうち、何等かの立場で意味ある直接體驗を指していふ場合。近來現象學興隆以後、美的現象の問題は新しく論議された。それ等によれば、美的現象とは、（イ）美の心理的作用とか、生理的作用とかいふが如き、吾々の經驗的事實方面だけを抽象したり、或は又（ロ）美的價値とかいふ如き、先驗的形式方面を抽象したりする以前の、もつと具體的な直接な美的體驗をいふのである。而してこのやうな槪念的抽象化を經ないところの直接な美的體驗が、どうして科學としての美學の對象となり得るのであるかといふ現象學的美學（別項）の方法論の問題が生じて來る。而して次に、このやうな美的現象が、どんな性質をもつものであるかといふことが、また現象學的美學の內容上の問題となつて來る。現象學的意味の美的現象の分析は、フッサールから始められ、コンラッド、ガイゲル、ハーマン、オーデブレヒト等によつて企てられて現今に至つてゐる。

【參考】R. Hamann: *Aesthetik.* 1919. — M. Geiger: *Beiträge zur Phänomenologie des Aesthetischen Genuss.* 1913. — R. Odebrecht: *Grundlegung einer aesthetischen Werttheorie. Bd. I.* 1927.（深田康算全集第一卷中ハーマンの論文解說）〔村田〕

美的實在（びてきじつざい）美學〔獨〕Aesthetisches Dasein.【解說】形而上學では理念を經驗的形式方面を抽象したりする以前の、もつと具體的な直接な美的體驗をいふのである。而してこのやうな槪念的抽象化を經ないところの直接な美的體驗が、どうして科學としての美學の對象となり得るのであるかといふ現象學的美學（別項）の方法論の問題が生じて來る。而して次に、このやうな美的現象が、どんな性質をもつものであるかといふことが、また現象學的美學の內容上の問題となつて來る。現象學的意味の美的現象の分析は、フッサールから始められ、コンラッド、ガイゲル、ハーマン、オーデブレヒト等によつて企てられて現今に至つてゐる。

【參考】R. Hamann: *Aesthetik.* 1919. — M. Geiger: *Beiträge zur Phänomenologie des Aesthetischen Genuss.* 1913. — R. Odebrecht: *Grundlegung einer aesthetischen Werttheorie. Bd. I.* 1927.（深田康算全集第一卷中ハーマンの論文解說）〔村田〕

美的現實（びてきげんじつ）美學〔獨〕Aesthetischer Subjekt.【異名】美的主體【解說】美的主體は種々なる意味に於て解されるが、何れにしても現實の意味に於て解されたる美意識（別項）と同義。美的客觀（別項）の對語。〔渡邊〕

美的主體（びてきしゆたい）「美的主觀」を見よ。

美的受用（びてきじゆよう）「美的享樂」を見よ。

美的情趣（びてきじやうしゆ）美學〔獨〕Aes. Stimmung.【解說】凡ての感情は普通特定の感覺を原因とし、その性質によつて規定されるか、或は對象の意味によつて規定される。然るに感情の對象的關係が明瞭でない場合でも、漠然とした一種の主觀的感情狀態が導かれる。これを情趣といふ。而してかくの如き情趣の性質として用ひられる場合。例へば、或る花を美しと感ずる時、他の人が美しと感ずるか否かに關せずに、自己の主觀だけで美しと感ずる意味に於て、美は自律性を持つといふ場合の如きである。クリスチアンゼンの如き

美的自律性（びてきじりつせい）美學〔獨〕Aesthetische autouomie.【解說】美學で云ふ自律性といふ言葉は二通りに用ひられる。（一）吾々の經驗的な美的觀察の心理的條件の一つ

ものがある。かくて美的識閾は、美意識上一種の原理的意義を有することになる。快不快と美的識閾との關係について、（一）快不快の條件が美的識閾に近づくほど美的快の成立を困難ならしめるから、快不快の强度の生長を防がなければならない。（二）識閾以下の快不快の條件も、識閾下の他の快不快の條件と結合する場合には、識閾內に現はれて快又は不快を起すことがある。かくして識閾以下の要素も結合することによつて美的快として意識されることになる。〔村田〕

美的自律性（びてきじりつせい）美學〔獨〕Aesthetische autouomie.【解說】美學で云ふ自律性といふ言葉は二通りに用ひられる。（一）吾々の經驗的な美的觀察の心理的條件の一つの性質として用ひられる場合。例へば、或る花を美しと感ずる時、他の人が美しと感ずるか否かに關せずに、自己の主觀だけで美しと感ずる意味に於て、美は自律性を持つといふ場合の如きである。クリスチアンゼンの如き

美的情調（びてきじやうてう）「美的情趣」を見よ。

美的世界（びてきせかい）美學〔獨〕Aesthetische Welt.【解說】美的世界はかくの如き法則性に規定された獨自の領域を展開し得る力を有しないと考へた。即ち自律性をもつのでなくして、自己立法性（Heautonomie）をもつに過ぎない他律性（Heteronomie）を持つものと考へた。即ち自律性と他律性とは對立する槪念で、自己立法性とは、自律性をもたずして他律性をもつ原理の、主觀的態度に對する法則性をいふのである。

ーマン、オーデンレヒト等によつて企てられて現今に至つてゐる。

【參考】R. Hamann : *Aesthetik.* 1919. = M. Geiger : *Beiträge zur Phänomenologie des Aesthetischen Genuss.* 1913. = R. Odebrecht : *Grundlegung einer aesthetischen Werttheorie. Bd. I.* 1927. ○深田康算全集第一卷中ハーマンの論文解說 〔村田〕

美的識閾 びてきしきいき 美學 〔獨〕 Aesthetische Schwelle. 【解說】心理學上、閾とは一般に吾々の感覺が起り得る最下限度の刺戟價を云ふ。美的識閾とは美的快不快、好適不好適を意識しない最下限度の刺戟價を指す。即ち快感的刺戟でもそれが限度のものであるか、又は持續の短い場合には美意識の範圍に入らない數量的な經驗事實の豐かさは必要でない。但し美現の外部的條件として創作の狀態を誘導する。（美的創作參照） 〔村田〕

美的自律性 びてきじりつせい 美學 〔獨〕 Aesthetische autonomie. 【解說】美學で云ふ自律性といふ言葉は二通りに用ひられる。（一）吾々の經驗的な美的觀察の心理的條件の一つの性質として用ひられる場合。例へば、或る花を美しと感ずる時、他の人が美しと感ずるか否かに關せずに、自己の主觀だけで美しと感ずる意味に於て、美は自律性を持つといふ場合の如きである。クリスチアンゼンの如きは、このやうな用ひ方をしてゐる。（二）以上のの如き心理的條件を以て美的條件たらしめるところの美的原理の獨自な性質として理解する場合。例へば、美の領域は理論的領域や宗教的領域に於ける原理とは異なつた原理を持つものであるといふ意味で美は自律性を持つといふ場合の如き。キューンの如きではこの意味の用語である。舊來の美學では多くは前者の意味で用ひたのであつて、カント美學でも時としてこの用例がある。しかし美學上の概念として論議されるのは、特に後者の意味に就いてである。カントによれば、認識の世界は、必然の原理によつて自律性を得るに反し、道德の世界は自由の原理によつて自律性を得る。即ちかゝるそれ〴〵の自律性が與へられて、初めて認識の領域（gebiet）道德の領域が成り立つと考へられる。然るに美的な世界に對しては、その獨自の領域を規定しようとして合目的性（Zweckmaessigkeit）の世界であるとした。即ち美の世界では、必然の世界がそのまゝ自由の世界として感ぜられるといふ意味を明かにしたのである。而してこのやうな世界の原理は、自らの領域の原理とは異なるべきであり、他の原理の複合したものでなければならない。主觀の態度の上に法則を與へるに過ぎない。認識や道德の世界の原理のやうに、獨自の領域を展開し得る力を有しないと考へた。即ち自律性をもつのでなくして、自己立法性（Heautonomie）をもつに過ぎない他律性（Heteronomie）を持つものと考へた。即ち自律性と他律性とは對立する概念で、自己立法性とは、自律性をもたずして他律性をもつ原理の、主觀的態度に對する法則性をいふのである。美的世界はかくの如き法則性に規定されるとした。かくして現代哲學美學では、カント哲學でいふ自律性を美的な世界にも與へ獨自の美的領域を建設しようとする。こゝに美的自律性の問題は、多くの人によつて論議されることになつた。フィードラ、アヒルデブラント、レノーレ、キューン、リップス、ゲルト、グロックナア等の說を見るべきである。（美的範疇參照）

【參考】F. Kreis : *Die Autonomie d. Aesthetischen in d. neveren Philosophie.* 1922. = L. Kühn : *Die Autonomie d. Werte Bd. I.* 1926. ○美學の根本問題 渡邊吉治 〔村田〕

美的眞 びてきしん 美學 〔獨〕 Aesthetische Wahrheit. 【解說】美的なる語を「美學上の」といふ意味に解する時は、美學上の眞理の意、又美的なる語を「美に關する」といふ意味に解する時は、美的規範（別項）の意。美的規範を美的眞と稱するは、一種の譬喩的言ひ表はしで、通俗的美學に多く用ひられてゐる。又同樣に、藝術的規範の意を示すに藝術的眞

といふ場合の如き。キューンの如きではこの意味の用語である。舊來の美學では多くは前者の意味で用ひたのであつて、カント美學でも時としてこの用例がある。しかし美學上の概念として論議されるのは、特に後者の意味に就いてである。カントによれば、認識の世界は、必然の原理によつて自律性を得るに反し、道德の世界は自由の原理によつて自律性を得る。即ちかゝるそれ〴〵の自律性が與へられて、初めて認識の領域（gebiet）道德の領域が成り立つと考へられる。然るに美的な世界に對しては、その獨自の領域を規定しようとして合目的性（Zweckmaessigkeit）の世界であるとした。即ち美の世界では、必然の世界がそのまゝ自由の世界として感ぜられるといふ意味を明かにしたのである。而してこのやうな世界の原理は、自らの領域の原理とは異なるべきであり、他の原理の複合したものでなければならない。主觀の態度の上に法則を與へるに過ぎない。認識や道德の世界の原理のやうに、獨自の領域を展開し得る力を有しないと考へた。即ち自律性をもつのでなくして、自己立法性（Heautonomie）をもつに過ぎない他律性（Heteronomie）を持つものと考へた。即ち自律性と他律性とは對立する概念で、自己立法性とは、自律性をもたずして他律性をもつ原理の、主觀的態度に對する法則性をいふのである。美的世界はかくの如き法則性に規定されるとした。かくして現代哲學美學では、カント哲學でいふ自律性を美的な世界にも與へ獨自の美的領域を建設しようとする。こゝに美的自律性の問題は、多くの人によつて論議されることになつた。フィードラ、アヒルデブラント、レノーレ、キューン、リップス、ゲルト、グロックナア等の說を見るべきである。（美的範疇參照）

【參考】F. Kreis : *Die Autonomie d. Aesthetischen in d. neveren Philosophie.* 1922. = L. Kühn : *Die Autonomie d. Werte Bd. I.* 1926. ○美學の根本問題 渡邊吉治 〔村田〕

美的眞 びてきしん 美學 〔獨〕 Aesthetische Wahrheit. 【解說】美的なる語を「美學上の」といふ意味に解する時は、美學上の眞理の意、又美的なる語を「美に關する」といふ意味に解する時は、美的規範（別項）の意。美的規範を美的眞と稱するは、一種の譬喩的言ひ表はしで、通俗的美學に多く用ひられてゐる。又同樣に、藝術的規範の意を示すに藝術的眞

美的自律性 びてきじりつせい 美學 〔獨〕 Aesthetische autonomie. 【解說】美學で云ふ自律性といふ言葉は二通りに用ひられる。（一）吾々の經驗的な美的觀察の心理的條件の一つの性質として用ひられる場合。例へば、或る花を美しと感ずる時、他の人が美しと感ずるか否かに關せずに、自己の主觀だけで美しと感ずる意味に於て、美は自律性を持つといふ場合の如きである。クリスチアンゼンの如きは、このやうな用ひ方をしてゐる。（二）以上のの如き心理的條件を以て美的條件たらしめるところの美的原理の獨自な性質として理解する場合。例へば、美の領域は理論的領域や宗教的領域に於ける原理とは異なつた原理を持つものであるといふ意味で美は自律性を持つといふ場合の如き。キューンの如きではこの意味の用語である。舊來の美學では多くは前者の意味で用ひたのであつて、カント美學でも時としてこの用例がある。しかし美學上の概念として論議されるのは、特に後者の意味に就いてである。カントによれば、認識の世界は、必然の原理によつて自律性を得るに反し、道德の世界は自由の原理によつて自律性を得る。即ちかゝるそれ〴〵の自律性が與へられて、初めて認識の領域（gebiet）道德の領域が成り立つと考へられる。然るに美的な世界に對しては、その獨自の領域を規定しようとして合目的性（Zweckmaessigkeit）の世界であるとした。即ち美の世界では、必然の世界がそのまゝ自由の世界として感ぜられるといふ意味を明かにしたのである。而してこのやうな世界の原理は、自らの領域の原理とは異なるべきであり、他の原理の複合したものでなければならない。主觀の態度の上に法則を與へるに過ぎない。認識や道德の世界の原理のやうに、獨自の領域を展開し得る力を有しないと考へた。即ち自律性をもつのでなくして、自己立法性（Heautonomie）をもつに過ぎない他律性（Heteronomie）を持つものと考へた。即ち自律性と他律性とは對立する概念で、自己立法性とは、自律性をもたずして他律性をもつ原理の、主觀的態度に對する法則性をいふのである。美的世界はかくの如き法則性に規定されるとした。かくして現代哲學美學では、カント哲學でいふ自律性を美的な世界にも與へ獨自の美的領域を建設しようとする。こゝに美的自律性の問題は、多くの人によつて論議されることになつた。フィードラ、アヒルデブラント、レノーレ、キューン、リップス、ゲルト、グロックナア等の說を見るべきである。（美的範疇參照）

【參考】F. Kreis : *Die Autonomie d. Aesthetischen in d. neveren Philosophie.* 1922. = L. Kühn : *Die Autonomie d. Werte Bd. I.* 1926. ○美學の根本問題 渡邊吉治 〔村田〕

美的情調 びてきじょうちょう 「美的情趣」を見よ。

美的自律性 びてきじりつせい 美學 〔獨〕 Aesthetische autonomie. 【解說】美學で云ふ自律性といふ言葉は二通りに用ひられる。（一）吾々の經驗的な美的觀察の心理的條件の一つの性質として用ひられる場合。例へば、或る花を美しと感ずる時、他の人が美しと感ずるか否かに關せずに、自己の主觀だけで美しと感ずる意味に於て、美は自律性を持つといふ場合の如きである。クリスチアンゼンの如きは、このやうな用ひ方をしてゐる。（二）以上のの如き心理的條件を以て美的條件たらしめるところの美的原理の獨自な性質として理解する場合。例へば、美の領域は理論的領域や宗教的領域に於ける原理とは異なつた原理を持つものであるといふ意味で美は自律性を持つといふ場合の如き。キューンの如きではこの意味の用語である。舊來の美學では多くは前者の意味で用ひたのであつて、カント美學でも時としてこの用例がある。しかし美學上の概念として論議されるのは、特に後者の意味に就いてである。カントによれば、認識の世界は、必然の原理によつて自律性を得るに反し、道德の世界は自由の原理によつて自律性を得る。即ちかゝるそれ〴〵の自律性が與へられて、初めて認識の領域（gebiet）道德の領域が成り立つと考へられる。然るに美的な世界に對しては、その獨自の領域を規定しようとして合目的性（Zweckmaessigkeit）の世界であるとした。即ち美の世界では、必然の世界がそのまゝ自由の世界として感ぜられるといふ意味を明かにしたのである。而してこのやうな世界の原理は、自らの領域の原理とは異なるべきであり、他の原理の複合したものでなければならない。主觀の態度の上に法則を與へるに過ぎない。認識や道德の世界の原理のやうに、獨自の領域を展開し得る力を有しないと考へた。即ち自律性をもつのでなくして、自己立法性（Heautonomie）をもつに過ぎない他律性（Heteronomie）を持つものと考へた。即ち自律性と他律性とは對立する概念で、自己立法性とは、自律性をもたずして他律性をもつ原理の、主觀的態度に對する法則性をいふのである。美的世界はかくの如き法則性に規定されるとした。かくして現代哲學美學では、カント哲學でいふ自律性を美的な世界にも與へ獨自の美的領域を建設しようとする。こゝに美的自律性の問題は、多くの人によつて論議されることになつた。フィードラ、アヒルデブラント、レノーレ、キューン、リップス、ゲルト、グロックナア等の說を見るべきである。（美的範疇參照）

【參考】F. Kreis : *Die Autonomie d. Aesthetischen in d. neveren Philosophie.* 1922. = L. Kühn : *Die Autonomie d. Werte Bd. I.* 1926. ○美學の根本問題 渡邊吉治 〔村田〕

美的眞 びてきしん 美學 〔獨〕 Aesthetische Wahrheit. 【解說】美的なる語を「美學上の」といふ意味に解する時は、美學上の眞理の意、又美的なる語を「美に關する」といふ意味に解する時は、美的規範（別項）の意。美的規範を美的眞と稱するは、一種の譬喩的言ひ表はしで、通俗的美學に多く用ひられてゐる。又同樣に、藝術的規範の意を示すに藝術的眞

(Künstlerische Wahrheit)という言葉も用ひられることがある。フィードレル(Fiedler)はかゝる語を用ひてゐる。〔渡邊〕

【參考】Fiedler, C.: *Moderne Naturalismus und künstlerische Wahrheit.* (*Fiedlers Schriften über Kunst* 1896.)

美的趨向(びてきすうこう) 美學〔獨〕Aesthetische Einstellung.【解說】美的主觀の態度。美的態度と同義(各項參照)。主として現象學的美學上に用ひらるゝ用語である。〔渡邊〕

美的生活論(びてきせいかつろん) 論文【著者】高山樗牛【發表】明治三十四年八月、「太陽」。【由來】明治三十年以來、日本主義を唱へて國家本位の考察を人文の上に加へた樗牛が、反動的に個人主義に轉じ、「美的生活」を高潮した時、「豹變傷士」と嘲られた。が、それは必ずしも豹變ではなく、斷矢內的沈思に傾いて、人生問題の解決に熱中しはじめた彼が、特にイチェに刺戟された西歐の個人主義・自我主義に共鳴し、且つ淺慮にして窮屈な在來の倫理說に滿足せず、煩悶懊惱の末、遂に人生本然の要求を滿足せしむるといふ個人享樂本位の美的生活を力說するに至つたのである。【內容】樗牛は、先づ美的生活を定義して「燿ども衣よりも優りたる生命と身體とに事ふるもの是れ也」と云ひ、「人性本然の要求を滿足せしむるもの、玆にこれを美的生活と云ふ」と斷じ、これと共に彼は、在來善惡の標準に囚はれ、相對的な道德は眞の道德でない。絕對の價値ある道德こそ眞の道德的にあらずして美的也」、古の忠孝孝子の是れ也」と云ひ、「人性本然の要求を滿足せしむるもの、玆にこれを美的生活と云ふ」と斷じ、物質的な目的或は手段を超絕した美的至上主義によつて行動せよと說くところに、こつた明治三十四年前後のわが國の思潮に憤慨し、理道德說及び窮屈な國家主義の流行に墮し切唱は、煩瑣な實證主義哲學と形式に墮した倫の論文の時代的意義を認める。ただ時代精神に反抗するに急であつて、本能と美とを同一視するやうな認識不足と論理の飛躍がこの論文の缺陷である。〔千葉・高須〕

美的靜觀性(びてきせいかんせい) 「靜觀性」を見よ。

美的創作(びてきそうさく) 美學〔獨〕Aesthetische Schaffen.【語義】美的享樂(各項參照)に對立する生活の範圍に入つたものだ」といふ。然らば、美的生活とは何ぞや、人生の目的は幸福にあり、その幸福感を滿足せしむるものは美的生活だとし、人間個々の本能を抑へ付けることなく、その自由な滿足を求むる上にこそ眞の幸福があると推斷し、飜つて道德の無力なるを笑ひ、本能こそ道德・倫理よりも、もろもろの知識よりも尙ぶべく、そこに絕對價値があるとした。かうして彼は美的生活の事例を擧げ、更に進んで「今の世にありて、人生本來の幸福を求めんには、吾人の道德と知識とは僅りに煩瑣にして又徐りに迂遠なるに過ぐ」と云ひ、且つ「人性本然の要求の滿足せられたるところ、其處には乞食の生活も帝王の羨むべき樂地あり」と述べて、美的生活による個人の享樂は萬人の王國だと確言した。【批評】善も眞も、その極致にあつては、美に一致するといふ見方は昔からある。「美的生活論」は決して清新な創說でない。又それ自體、論理の粗笨が目につく。ただ樗牛が「時弊に憤る者の言は、おのづから是の如くならざるを得ざるの也」と、この結論で語つてゐるやうに、この提唱は、煩瑣な實證主義哲學と形式に墮した倫理道德說及び窮屈な國家主義の流行に墮し切つた明治三十四年前後のわが國の思潮に憤慨し、物質的な目的或は手段を超絕した美的至上主義によつて行動せよと說くところに、この論文の缺陷である。〔千葉・高須〕

美的創作(びてきそうさく) 美學〔獨〕Aesthetische Schaffen.【語義】美的享樂(各項參照)に對立する概念(美的享樂參照)。【解說】藝術を對象として美意識が問題とされる時、翫賞の意識と創作の意識とが區別される。そして美學上兩者の本質規定は重要であるが、歷史的に見れば觀念論的美學に於ては、前者が主に研究の對象とされた傾きがあつたが、美の情意的側面の特質が强調される近時の美學に於ては、後者の研究は特に重要視される傾きがあり、從つて又積極的に創作の美學の主張も生ずる。而して創作意識を主にすべしとする近時美學の主張する根據は種々ある。(一)意識活動の消極的受用の活動は必然論理的關係から積極的能動的活動を豫想する。美意識の如き複雜な意識の本質は、寧ろこの方面から規定を受くべきであるとする。フィトラア、モイマン等の主張である。(二)美意識の受動的方面の反復であるに過ぎぬと主張するもの。(三)能動的美意識は必ず受動的意識或はその過程を伴ひ、その限りに於て、能動的美意識の發露が生ずると主張するもの、即ち藝術家の創作の心理的必然の條件として受動的心理過程を包攝的に認める。オスカア・ピーの「內からの美學」(別項)の主張はこれで、彼は「純な美的能力を有する藝術家の心理に於て、創造性と感受性とが互に交流しつつ同時に發展し、美意識の本質が統一であることが發見されるであらうと云ふ。デッソアールも創作活動の一般的性質を觀察すれば、一つの全的觀照の漸進的な發展であるとする。(四)なほクローチェの美學に於ては、美的直觀は受動的認識の形式であるが、美意識の根柢である表現は直觀と本質的に同一で、直觀即ち表現であるといふ特殊な美學の立場を有するが、この點からやはり能動的創作の意識の研究を主張してゐる。以上の如く、創作心理を美學の主要な研究對象とする主張があるに拘はらず、創作の心理(別項)の表現の過程に於ては、藝術自身の翫賞過程が常に行はれることを認むべく、神秘(別項)の解釋に於て、それが電光的であるとはいへ、神秘は時として徐々に判斷を伴うて現はれる場合もある點から見て、積極的に創作を主要なりとするよりも、受動的過程の本質を研究することが先づ必要である。而も創作の心理の一般的特徵は、事實上藝術家の生理的心理的素質(藝術家の類型・素質參照)、或は生活形式・表現形式、或は世界觀等によつて規定せられるがため一樣でない。これ等についての研究は、むしろ特殊な美學的努力といふべく、藝術家自身の告白、或はより多く心理學・生理學等の助力を必要とする方面であらう。(創作の一般的心理は「創作の心理」參照)〔村田〕

美的想像(びてきそうぞう) 美學〔獨〕Aesthetische Phantasie.【語義】美意識を構成する作用を以て美意識の特質と考へる。ヴントによれば、在來想像(Phantasie)の心理的特質として直觀性・創造性・自發性の三つの條件が擧げられてゐた。しかし如何なる意識內容でも直觀性をもたものはなく、又創造性と言つても過去の經驗を全然離れて創造すると言ふことはあり得ず、又自發性と言つても想像が積極的に作用する時は意志の作用が入るので、純粹に自發性をもつと言ふことはできない。隨つてこれ等の特質をもつて想像の特質とすることはできぬ。想像の心理的特質は學理(參照)

美的想像力(びてきそうぞうりょく) 美學〔獨〕Aesthetische Phantasie.【語義】美意識を構成する作用を以て美意識の特質と考へる。ヴントによれば、在來想像(Phantasie)の心理的特質として直觀性・創造性・自發性の三つの條件が擧げられてゐた。しかし如何なる意識內容でも直觀性をもたものはなく、又創造性と言つても過去の經驗を全然離れて創造すると言ふことはあり得ず、又自發性と言つても想像が積極的に作用する時は意志の作用が入るので、純粹に自發性をもつと言ふことはできない。隨つてこれ等の特質をもつて想像の特質とすることはできぬ。想像の心理的特質は學理(參照)

美的體驗(びてきたいけん) 美學〔獨〕Aesthetischer Erlebnis.【解說】一般には二つの方面に分けられる。(一)客觀と主觀とが未だ一つに融合せざる前の原經驗だけを意味する場合には、特に美的現象(別項)と呼ばれ、現象學的美學者の用ふるところである。而してこの美的體驗そのものが、美學の研究の素材としてでなく、直ちに學としての美學の研究對象として主張されるやうになつたのは、現象學的美學が唱道されて以來のことである。(美學方法論參照)〔村田〕

美的對象(びてきたいしょう) 美學〔獨〕Aesthetischer Gegenstand.【解說】美的といふ語が、「美學の」といふ意味をもつ場合の美的對象については、「美學」の項で述べてある。美的といふ語が「美的なるもの」といふ意に用ひられる場合の美的對象は、一般に美的價値を有する對象である。美的價値は、事實として普遍性をもつと否とに拘はらず、要求としての普遍性をもつてゐる。クリスティアンゼン(Christiansen)に依れば、吾々が藝術品の美を感ずる時、吾々はこれを直接に美として感ずるので、それが他の人にとつて美であると否とに關せず、條件なしで美として安當する。隨つて快適は吾々がこれを要求する場合に、自分にとつて快適なものは、他人にとつても快適でなければならぬとは要求しない。これに反して吾々が美しいと感じたものは、何人にとつても美しく感ずるものとしての要求をもつて感ずる。隨つて美的價値は、事實として普遍性をもつと否とに拘はらず、要求としての普遍性をもつてゐる。クリスティアンゼン(Christiansen)に依れば、吾々が藝術品の美を感ずる時、吾々はこれを直接に美として感ずるので、それが他の人にとつて美であると否とに關せず、條件なしで美として安當する

觀者自身が客觀と共に一つに感ずるやうに、彼自身を客觀に投入する作用である。第二にそれはこの同化(Assimilation)の感情昂揚の力である。即ち直接の對象の與へた感情が再生されて、過去の經驗から得た感情と結合するために昂揚さるゝ作用である。第三にそれは意識の自己活動的作用である。即ちそれは知覺した對象を種々に變形する作用である。この想像の自己活動の作用が、殊に藝術心理の重要な特質であつて、この作用によつて藝術が生産されると言ふ。【渡邊】

美的體驗(びてきたいけん)　美學　【獨】Aes. Erlebnis.【解說】一般には二つの方面に分けて說明されてゐる。(一)吾々が何かの對象を美的に意味があるものとして意識する經驗即ち翫賞享樂意識の經驗と(美的享樂參照)、(二)この享樂の經驗を何かの形式の下に表現し、具象化する創作の經驗と(創作の心理參照)。併し美的享樂の經驗に對して、創作の經驗が論理的に或は時間的に先行するとか、或は區別して說くことが既に誤りであるなど種々議論がある。併しこゝにいふところの經驗といふことは、個人にだけ妥當する個人的經驗をいふのでなく、普遍的に妥當すべき普遍的經驗をも亦意味すると考へるのが、美學上正當な考へ方であらう。從つて(イ)それは經驗科學的美學の素材となるところのものを含むと共に、(ロ)先驗哲學的美學の素材となるところのものをも含む。なほそれのみでなく、(ハ)「以上兩見地の素材」として、例へば美的價値とか美意識とかといふ如く、抽象分離以前の原經驗をも凡て總稱するのである。故に嚴格に云へば、(一)それが個人的經驗だけを意味する場合には、美的經驗といふ語で多く言ひ現はされ、(二)抽象分離以前の原經驗だけを意味する場合には、特に美的現象(別項)と呼ばれ、現象學的美學者の用ふるところである。而してこの美的體驗そのものが、美學の研究の素材としてでなく、直ちに學としての美學の研究對象として主張されるやうになつたのは、現象學的美學が唱道されて以來のことである。(美學方法論參照)　【村田】

美的對象(びてきたいしやう)　美學　【獨】Aesthetischer Gegenstand.【解說】美的といふ語が、「美學の」といふ意味をもつ場合の美的對象については、「美學」の項で述べてある。美的といふ語が「美的なるものの」といふ意に用ひらるゝ場合の美的對象は、また二樣に解されてゐる。一は主として現象學的美學上に於て用ひらるゝ意味であり、他は主として經驗科學的美學上に於て用ひらるゝ意味である。前者は美的の先驗的形式に對立する直接の美的體驗(別項)自身を意味する。後者は美的の心理的意識即ち心理學的意味に於ける美意識に對立し、これを成立せしむるに適合せる經驗的な對象をいふ。併し又この意味の美的對象は形式的方面と內包的方面とに分けて觀察される。前者は美的形式(別項)と呼ばれ、後者は美的樣態(別項)と呼ばれる。　【渡邊】

美的態度(びてきたいど)　「美意識」「美的狀態」を見よ

美的妥當性(びてきだたうせい)　美學　【獨】Aesthetische Gültigkeit, Aesthetisches Gelten.【語義】美的價値の妥當性、即ち美的價値が事實に對してもつ意義。學說によつては、或はかゝる美的妥當は普遍的のものとし、或は個人的のものに過ぎぬと考へる。【學說】カントは、既に美を以て普遍的に好適する對象とし、而もこれを主觀的普遍妥當性をもつ判斷としたが、コーン(Cohn)によれば、一般に快適は吾々がこれを感ずる場合に、自分にとつて快適なものは、他人にとつても快適でなければならぬとは要求しない。これに反して吾々が美しいと感じたものは、何人にとつても美しく感ずるものとしての要求をもつて感ずる。隨つて美的價値は、事實として普遍性をもつと否とに拘はらず、要求としての普遍性をもつてゐる。クリスティアンゼン(Christiansen)に依れば、吾々が藝術品の美を感ずる時、吾々はこれを直接に美として感ずるので、それが他の人にとつて美であると否とに關せず、條件なしで美として妥當する。隨つて美的價値は個々の主觀に妥當するものであつて、多くの主觀に妥當することはできぬ。それは個人的妥當であつて普遍的妥當ではない。故に美的價値に對しては、如何なる超主觀的共通性の尺度もあり得ない。(その他の學說については「美的普遍性」參照)

【參考】Coh, J.: *Allgemeine Aesthetik.* 1901. ‖ Christiansen, B.: *Philosophie der Kunst.* 1909.　【渡邊】

美的段階(びてきだんかい)　美學　【獨】Aes. Stufe. od. Aes. Rangordnung.【語義】(一)形而上學的美學で用ひられる場合は、藝術或は美的實在(別項)の發展段階といふ意味である。(二)批判哲學的美學の場合では、價値の全體系の中に於て、美的價値が占めるところの段階といふ意味である。【學說】(一)ヘーゲル美學では、藝術の歷史的發展段階を三つに分けた。(イ)自然が精神に克つてゐる象徵主義の段階、(ロ)自然の中に精神を求めた古典主義の段階、(ハ)精神が自然を支配した浪漫主義の段階。(二)モーリツ・カリエール(M. Carriere)は、人間の本質は自然・感情・精神の三要素から成り、人間は(イ)はじめ自然の子として生れ、(ロ)自分自ら自然を感じ、(ハ)遂に世界認識並びに自己を認識するに至ると主張し、藝術の發展段階も以上の見地から、(a)東洋の自然の影響下にある文化初期からギリシヤ、ローマの自然理想の藝術の時代、(b)クリストの道德的理想を基礎として古い世界を乘り越えた感情理想發現の時代、(c)歐洲中世、ルネッサンスを經、十八世紀になつて、はじめて精神が實現される藝術時代を說いた。(三)ハルトマンの美學では、美的假象(別項)が具體的にあらはれる段階は七つに分たれる。(イ)無意識的形式美の段階。これは單なる感官的快適に過ぎないものであるが、秩序ある關係を保つ限りにおいて美であるもの。(ロ)第一形式美の段階。數學的好適の段階で、時間空間を通して現はれ、多樣とそして統一とを形式條件とするものであるが、內容たる理念を形式化する限りに於て美である。即ち規律・均衡・比例などの美はこれである。(ハ)第二形式美の段階。時間空間が結合する具體的形式の美、即ち靜的形式と動的形式とを通してあらはれる美である。瀧の美などこれである。以上は內容上合目的性を有しないが、形式上合目的的の美とされる。(ニ)第三形式美の段階。これは內容の上に於て合目的的である。工藝品の如きものの美は無生物を材料とするが、生命的なもの、實用的なことを目的としてゐる。(ホ)第四形式美の段階。積極的に合目的性を內容としてゐる形式美である。生物美の段階である。(ヘ)第五形式美の段階。動物や人物や、或は老幼といふ如く、各種屬によつて各々目的が異なつてゐるところ

に美を生ずる段階である。ここに至れば、精神的活動を示す感情があらはれるために同情をいふ。かくの如くして形式が具體的段階に進むほど、美は著しく現はれるとするのである。（美的自律性・美的眞象性參照）

【參考】Carriere：*Die Kunst im Zuzammenhang d. Culturentwick lung u. d. Ideale d. menschheit.* 1863. ＝Hartmann：*Aes. Bd. II.* 1887. 〔村田〕

美的調和（びてきちょうわ）美學（獨）Aesthetische Harmonie【解說】美的主觀と美的對象（各別項）との統一關係を指していふ場合には、美的融合（別項）或は美的同化といふのと同じである。しかし具體的な藝術に對して、單に調和があるとかないとかいふ場合には、美的對象の一の形式を指していふのであつて、色彩や形等の感覺的要素間の諧調統一の關係をいひ、調和は一の形式原理（別項）と考へられる。〔村田〕

美的直覺（びてきちょっかく）美學（獨）Aesthetische Intuition【解說】對象を概念によらずに直接に統覺する美意識の心理的特質。主として現象學的美學、並に形態心理學的美學に用ひらるゝ語。（前者については「現象學的美學」、後者については「美的形態」の項中のヴォルチーク（Kowarzik）の學說參照）〔渡邊〕

美的直觀（びてきちょっかん）美學（獨）Aesthetische Anschauung.【解說】視・聽の二感の感覺を中心とする感覺・知覺又はそれ等の表象等の感官性を通して對象を統覺すること。この語はキューン（A. Kühn）に於けるが如く、美的統覺の限定となるべき美的態度たる先關の形式として用ひられる（「美的自律性」中のキュールの學說參照）。一はジーベック（Siebeck）にとされる。この場合には、それは美的直觀性と同義に用ひられる。隨つてこの場合には、それは美的對象の方面に於ける美意識の一特質となり、これに對して美的主觀の方面の特質として感情が擧げられ、やがて理知主義的美學對感情美學の對立ともなる。更に又この語は、時として美的直覺（別項）と同義に用ひられることもある。〔渡邊〕

美的直觀性（びてきちょっかんせい）美學（獨）Aesthetische Anschanlichkeit.【解說】視・聽の二感を中心とする感覺・知覺、又はそれ等の表象等の感官性を通して意識せらるゝ美意識の一特質。時としては美的直觀（別項）と同義に用ひられ、又狹義に於ては、時として美的形相性（別項）と同義に用ひられてゐる。〔渡邊〕

美的當爲（びてきとうい）美學（獨）Aesthetisches Sollen.【語義】美には藝術上の價値が、美的態度乃至藝術的態度に對して判斷乃至行爲を逼る要求。學說によつては、この語は美的規範（別項）と同義に用ひられる。又學說によつては、美的價値はかゝる要求をもたぬところに美的の特質を認める。

【學說】ギンデルバント（Windelband）によれば、吾々の心のうちには、丁度石が重力の法則に從ふやうに、必然な一種の强制（Zwang）があつて、吾々の表象とか、感情とか、意志とかを支配する。而もそれと同時に、吾々は又一つの命令（Gebot）を意識する。そしてこの命令によつて吾々は考へたり、感じたり、意識したりしなければならぬ。即ちこの命令も亦一種の法則であつて、これは吾々が當に感ずべき法則であるから當爲（Sollen）の法則である。これに反して、自然の法則の知きは、自然が必ず然る法則であるから、必然（Müssen）の法則と呼ばれ、心理學も亦、吾々の心の法則を說明するが、その法則は必然の法則を明かにするに過ぎぬ。即ちそれは、吾々が事實として如何に考へ、感じ、欲し、行爲するかを說明する事實上の必然の法則である。これに反して當爲の法則とは、この事實が眞となり、又美となり、又は善となるには、その事實が如何に作られてあらねばならぬかの法則である。即ち吾々の感情の領域に於ては、吾々の當爲は美的當爲である。リッケルト（Rickert）は美的なるものはかゝる當爲をもたぬといふ（美的規範中の學說を見よ。ナトルプ（Natorp）によれば、吾々の意識の世界は、あるところの世界即ち經驗の世界と、あるべきところの世界即ち當爲の世界とに分たれるが、かゝる兩世界の一致せるものが藝術の世界と宗教の世界とである。即ち藝術の客觀となるものは、一般的の性質をもたず、個人的のものである以上は、その個人的なものゝうちに超個人的のものを含んでゐなければならぬ。論理的價値や倫理的價値では、個人的のものが一般的のものゝ爲の手段として用ひられ、且つそのものゝ一般的のものは吾々の要求として現はれてゐるのである。これに反して美的價値では、その個人的なものゝうちに一般的なものが實現されてゐるのであつて、それがあるところのものゝうちに、あるべきところのものを示してゐる。即ち存在が作正と一致するところに、美的當爲の特質があるのである。〔渡邊〕

【參考】Windelband, W.：*Normen und Naturgesetz.*（*Preludien.* Bd. II. 7 u. 8 A. 1921.）＝Rickert, H.：*Vom System der Werte.*（*Logos.* Bd. I. 1912）. ＝Natorp, P.：*Philosophie.* 3 A. 1921.

美的動因（びてきどういん）美學（獨）Aesthetisches Motiv.【解說】最も廣義に解釋すれば、創作活動が生れる基礎、作家の行爲の原因となり機會となるもの一切を云ふ。原因を衝動にあるとする說が多くある（藝術本能說參照）。モイマンは創作の心理分析の結果、創作活動に共働する二つの性質を異にする動因を說明してゐるが、その大要を示せば、（一）人格的動因。（a）一般的藝術的動因。（a）藝術家を感動せしめ、感情生活を搖り動かすところの彼の藝術的體驗。（b）この體驗を藝術的形式に表現しようとする衝迫力、表現の動因と名づける。（c）この表現に一定の手法の下に固定した感覺的作品の形式を附與しようとする要求。形成動因又は形式動因と名づける。以上は藝術家自身に幾分明かに意識される動因である。（二）純粹個人的動因。藝術家の素質、即ち個性的天分（個性參照）、作家の現實、生活に對する態度から自ら由來する動因である。（三）非人格的動因（非美的動因）藝術家は彼が知る知らぬの別なく、彼の時代と民族、その趣味に支持されてゐる。即ち個人的性質以外に、國家・時代に制約されてゐるとすれば、文化即ち民族が創り出した生活形式とその民族の精神内容とは、創作の動因となると考へることが出來る。藝術はその本質に於て一の社會的活動であると解釋すれば、作家の實踐的社會、生活態度、政治・經濟・宗教に對する美的關

係、美的當爲の特質が作品と一致するやうに、美的當爲の特質が作品と一致するやうに、美的當爲の特質が作品と一致するやうに

美的直観（びてきちょっかん）美學（獨）Aesthetische Anschauung.【解說】視・聽の二感の感覺性を通して對象を統覺することを中心とする感覺・知覺又はそれ等の表象等の感覺を指す。この語は一はキューン（A. Kühn）に於けるが如く、美的統覺の段階たるべき美的能動たる先立傾向（Vorgerichtetheit）の意味に用ひらるゝ語。（前者については「現象學的美學」、後者については、「美的形態」の項中のコヴァルチーク（Kowarzik）の學說參照）（渡邊）

美的統覺（びてきとうかく）美學（獨）Aesthetische Apperzeption.【解說】對象相互の多樣を統一的關係に於て直覺すること。一般統覺と異なる點は、それが對象を統一的に意識するために、概念や目的等の仲介によらずに直接に對象の統一關係を意識する點にある。

【參考】Wundt：*Die Kunst.*（*Physiologische Psychologie.*）（渡邊）

美的同感（びてきどうかん）美學（獨）Die Aesthetische Mitfühlung.【解說】リップスの感情移入說（別項）或はギュヨーの美學に於ては、美の成立を美的主觀及び美的客體との共鳴、或は同情同感の深さ、廣さの點から說明する。リップスの所謂一般感情移入の場合は、とりもなほさず吾々普通の同情同感の場合であり、美的價値はこの同感の深さに關係する點から、特にリップスの美學では「美的深さ」（別項）の概念は重要になつてくるのである。（舟田）

美的動機（びてきどうき）「美的動因」を見よ。

美的同情（びてきどうじょう）「藝術論」を見よ。

美的陶醉（びてきとうすい）美學（獨）Aesthetische Ransch.【解說】創作の時の心的過程において、異常な狂熱的狀態が現はれる事實を指していふ。古來、神祕又は靈感（インスピレーション）といふ語で說かれ、天才の創作の契機として、心理學的說明も種々現はれてゐる。（神祕參照）（舟田）

美的内包（びてきないほう）「美的内容」を見よ。

美的内容（びてきないよう）美學（獨）Aesthetischer Gehalt（Inhalt）.【解說】美的形式（別項）に對立する概念。形式の概念と同じく多くの用法がある。（一）對象的内容。藝術表現の美的材料（別項）即ち人・自然・事件・思想等の題材を云ふ。この内容は多く美的外の内容で美的形式化を受け、創作の動因となる。（二）心理的内容。（イ）美象的内容・美的聯想（別項）・内容象徴（内容參照）（ロ）感情的内容に分ける。主に感情内容が對象の形式と融合する狀態を說くのが感情移入說（別項）。總じてこの意味の内容の美的規定から美を明かにする美學は内容美學（別項）と云はれる。かくして美的内容は直接に或は間接に常に人間であり、美は本質的に人格的で、靈化であると共に、又精神の自然化形式化であると主張される。（三）價値内容の意味。即ち藝術形象の價値的内容を指す。これは一定の形式にまで把握されたものである。從つてこゝでは形式とはこの内容の存り方である。（美的形式參照）（舟田）

美的反射（びてきはんしゃ）美學【語義】美的印象に於ける好適不好適の受用過程に關する美學者デッソアの用語。【解說】心理學的美學は美的印象を解剖するため二重の研究が必要であるとする。（一）美的印象中に含まれてある成要の說明。（二）複雜な印象は時間の經過と共に開展する事實を證明すること。この目的のために實驗的方法を以て美的觀照の時間的解剖を試みたのは心理學者キュルペで、デッソアールが詳かにした。多くの人に十秒か二十秒の間隔を見せた後、その印象を語らせるといふ方法をとり、印象は次の如き段階に分けられることを觀察した。（一）客觀の全體印象は瞬間的に直ちに現はれ、好適又は不好適の性質を伴ふ。彼はこれを「第一印象の性質」と名づけて、美的印象の直接性を認め、對象を精密に知覺した後の印象と異なるとする。第一印象の段階では（イ）對象の感覺的性質が先つ好適し、（ロ）觀照者の有機感覺が關與する。即ちこの段階に於ける美的反射は、好適不好適が直接的で確實であることを特徴とする。（二）次の段階で對象の事物的なもの、即ち内容を知るに伴ひ、觀念の表現が現はれ、それぞれの個人的經驗による聯想が結合して行く。（三）更に内容を特徴とする。（二）次の段階で對象の事物的なもの、即ち内容に移つて行く。（三）更に内容を知るに伴ひ、觀念の表現が現はれ、それぞれの個人的經驗による聯想が結合して行く。

以上の實驗的研究の結論として、（一）美的受用は、種々な段階を通じて行はれる過程であり、（二）種々な完成をとつて現はれる過程である。かくして一般に美的受用の過程は、個人的に相異して完成する。或るものは第一印象的感官的に、或るものは感情印象を主にするといふやうに。かくの如き美的反射の實驗的研究の結果、（イ）複雜な詩歌の如き美的印象に於ては、第一段階即ち内容、理解と共に生じ、（ロ）從つてこれを理解する努力があつて始めて好適が生ずるといふ點は、極めて重要であつて感情移入說（別項）に對する一つの批評的立場となる。モイマンも大體この（イ）（ロ）の見解に賛し、感情移入が全體的印象を規定するといふことに關しては異議を唱へ、吾々は受動的反射的に受用し、或は美的批評的に、又は判斷しつつ受用し、或は能動的に内面的同感を以て受用する事實を認めて、感情移入說の偏狹を指摘してゐる。（共濟者型・美的好適參照）

【參考】美學原論　大西克禮（舟田）

美的判斷（びてきはんだん）美學（獨）Aesthetisches Urteil.【語義】對象を美なる對象とする感情に基く判斷。カントの用語。【解說】判斷とは特殊なものを一般の下に含まれたものとして考へる心的作用であるが、例へば一片の花の表象によつて、直接快感を感ずる如く、對象の概念を作る前に對象の表象が全體の合目的性を主觀的に表象することを美的判斷といふ。この美的判斷に於ては直觀的表象が快不快の對象として判斷される。そしてこの快不快は吾々の主觀に基く故に、美的判斷は綜合的である。而もこの快不快は他の主觀のうちにも豫想される故に、普遍的であつて經驗的ではない。隨つて美的判斷は先驗的綜合判斷であるといふ。又この語はモイマン（Meumann）に於けるが如く、經驗的美學上での理論的判斷としての意味で用ひてゐる學者もある。又それは通俗的には藝術批評などとも同義に用ひられることもある。（渡邊）

美的判斷力（びてきはんだんりょく）美學（獨）Aesthetische Urteilskraft.【語義】合目的性を原理とする感情の判斷力。【解說】カントによれば特殊なものを一般の下に含まれたものとして考へる能力は判斷力といはれ、一般の下に包攝する場合の判斷力は規定的判斷力といはれ、一般を見出すために特殊をその下に包攝する場合の判斷力は、反省的判斷力といはれ、前者が美的判斷力で、後者が目的論的判斷力である。前者は形式的合目的性を快不快の感情によつて判斷する能力であり、後者は自然の現實的合目的性を悟性と理性とによつて判斷する能力である。更に心理的に兩者を區別すれば、自然の合目的性が主觀的に表象せらるゝ場合が美的判斷力で、